

千葉県文化財センター

# 研究紀要

18

平成 9 年 9 月

財団法人 千葉県文化財センター

## 発刊の辞

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年11月の創立以来、埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究、普及活動を実施してまいりました。その成果は、発掘調査報告書をはじめとする多数の刊行物等に見られるとおりです。

研究活動につきましては、研究紀要の刊行をはじめ、埋蔵文化財調査に関連する独自の研究事業を行ってまいりました。昭和62年度から進めてきた「房総における生産遺跡の研究」を統一主題とする活動は平成5年度をもって終了し、その成果は4冊の研究紀要(12号～15号)として報告いたしました。また、「創立20周年記念論集」として研究紀要16号を、県内出土の青銅製品の生産と流通の実態を明らかにした「県内の青銅製品の集成と分析」を17号として、それぞれ刊行いたしました。

当センターでは、昭和56年度以来、千葉県教育委員会の委託を受け、古代寺院跡・中近世城館跡・貝塚等を対象とする国庫補助事業重要遺跡確認調査を継続して実施してまいりました。そこで、その成果の検討を、研究紀要の第4期の共通テーマとすることとし、「重要遺跡確認調査の成果と課題」と題して、平成5年度から共同研究を開始いたしました。

このたび、その成果報告の第1冊目として研究紀要18号「古代仏教遺跡の諸問題」を刊行いたします。本書が、考古学研究はもとより、埋蔵文化財調査の技術向上のための資料として、広く活用されることを期待してやみません。

平成9年9月

財団法人 千葉県文化財センター  
理事長 中村好成

# 目 次

## 古代仏教遺跡の諸問題

### — 重要遺跡確認調査の成果と課題 1 —

はじめに	3
I 序章	7
1 研究史	7
2 文献目録	12
II 主要遺跡概要	27
III 各論	129
1 仏器・瓦塔・墨書土器	129
2 寺院と仏堂・付属施設	165
IV 房総における古代寺院の成立過程 — 印幡郡・埴生郡を例として —	183
V まとめ	195
遺跡一覧表	199
遺跡分布地図	251
図 版	

## 挿図目次

第1図 房総における寺院跡・仏教関連遺物出土遺跡分布図	26
第2図 上総国分寺B期遺構配置図・出土瓦	28
第3図 上総国分尼寺跡B期遺構配置図・出土瓦	29
第4図 奉免上原台遺跡E地区遺構配置図・出土瓦	30
第5図 武士遺跡遺構配置図・出土瓦	31
第6図 千草山遺跡遺構配置図・出土遺物	32
第7図 南大広遺跡B地区遺構配置図・出土遺物	33
第8図 二日市場廃寺跡遺構配置図	34
第9図 二日市場廃寺跡B地区遺構配置図・出土遺物	35
第10図 萩ノ原遺跡遺構配置図	36

第11図	萩ノ原遺跡出土遺物	37
第12図	東郷台遺跡遺構配置図	38
第13図	東郷台遺跡出土遺物	39
第14図	愛宕前遺跡遺構配置図・出土遺物	40
第15図	上総大寺廃寺跡出土瓦	41
第16図	小谷遺跡出土遺物	42
第17図	永吉台遺跡群遠寺原地区遺構配置図	43
第18図	永吉台遺跡群遠寺原地区出土遺物	44
第19図	上大城遺跡遺構配置図・出土遺物	45
第20図	永吉台遺跡群西寺原地区遺構配置図	46
第21図	永吉台遺跡群西寺原地区出土遺物	47
第22図	九十九坊廃寺跡遺構配置図	48
第23図	九十九坊廃寺跡塔平面図・出土瓦	49
第24図	針ヶ谷遺跡遺構配置図・出土遺物	50
第25図	小食土廃寺跡遺構配置図	51
第26図	小食土廃寺跡出土遺物	52
第27図	内野台遺跡遺構配置図	53
第28図	大椎第2遺跡遺構配置図・出土遺物	54
第29図	山田台廃寺跡遺構配置図・出土遺物	55
第30図	南河原坂第2遺跡遺構配置図・出土遺物	56
第31図	大野第7遺跡遺構配置図・出土遺物	57
第32図	砂田中台遺跡出土遺物	58
第33図	砂田中台遺跡遺構配置図	59
第34図	中林遺跡遺構配置図・出土遺物	60
第35図	内野第II遺跡遺構配置図・出土遺物	61
第36図	真行寺廃寺跡遺構配置図・出土瓦	62
第37図	真行寺廃寺跡出土遺物	63
第38図	庄作遺跡遺構配置図	64
第39図	庄作遺跡出土遺物	65
第40図	作畑遺跡遺構配置図・出土遺物	66
第41図	法興寺跡遺構配置図・出土瓦	67
第42図	安房国分寺遺構配置図・出土遺物	68
第43図	下総国分寺・尼寺跡出土遺物	69
第44図	下総国分寺遺構配置図	70
第45図	下総国分尼寺跡遺構配置図	71
第46図	下総国分寺・尼寺跡出土瓦	72
第47図	谷津遺跡遺構配置図	73

第48図	谷津遺跡001号掘立柱建物跡・出土遺物	74
第49図	六通遺跡遺構配置図・出土遺物	75
第50図	長熊廃寺跡遺構配置図	76
第51図	長熊廃寺跡出土遺物	77
第52図	木下別所廃寺跡遺構配置図・出土遺物	78
第53図	白幡前遺跡出土遺物 1	79
第54図	白幡前遺跡遺構配置図 1	89
第55図	白幡前遺跡遺構配置図 2・出土遺物 2	81
第56図	大塚前遺跡遺構配置図・出土瓦	82
第57図	六拾部遺跡出土遺物 1	83
第58図	六拾部遺跡遺構配置図	84
第59図	六拾部遺跡出土遺物 2	85
第60図	村上込の内遺跡遺構配置図・出土遺物	86
第61図	江原台遺跡遺構配置図	87
第62図	江原台遺跡周溝状遺構・出土遺物	88
第63図	井戸向遺跡遺構配置図	89
第64図	井戸向遺跡出土遺物	90
第65図	高岡大山遺跡出土遺物	91
第66図	高岡大山遺跡遺構配置図	92
第67図	栗野 I 遺跡遺構配置図・出土遺物	93
第68図	太田宿遺跡遺構配置図・出土遺物	94
第69図	北大堀遺跡遺構配置図・出土遺物	95
第70図	馬橋鷺尾余遺跡遺構配置図・出土遺物	96
第71図	伊篠白幡遺跡遺構配置図・出土遺物	97
第72図	長勝寺脇館跡遺構配置図・出土遺物	98
第73図	飯仲金堀遺跡遺構配置図・出土遺物	99
第74図	八日市場大寺廃寺跡遺構配置図・出土瓦	100
第75図	巢根遺跡遺構配置図・出土遺物	101
第76図	土持台遺跡遺構配置図・出土遺物	102
第77図	柳台遺跡遺構配置図・出土遺物	103
第78図	大井東山遺跡遺構配置図	104
第79図	大井東山遺跡出土遺物	105
第80図	結城廃寺跡遺構配置図	106
第81図	結城廃寺跡出土瓦	107
第82図	峯崎遺跡遺構配置図・出土遺物	108
第83図	木内廃寺跡遺構配置図・出土瓦	109
第84図	織幡妙見堂遺跡遺構配置図	110

第85図	織幡妙見堂遺跡出土遺物	111
第86図	名木廃寺跡遺構配置図・出土遺物	112
第87図	多田日向遺跡遺構配置図	113
第88図	東野遺跡遺構配置図・出土遺物	114
第89図	伊地山藤之台遺跡遺構配置図・出土遺物	115
第90図	龍角寺遺構配置図・出土瓦	116
第91図	郷部・加良部遺跡、堀尾遺跡出土遺物	117
第92図	郷部・加良部遺跡、堀尾遺跡遺構配置図	118
第93図	山口遺跡遺構配置図	119
第94図	山口遺跡出土遺物	120
第95図	久能高野遺跡遺構配置図・出土遺物	121
第96図	野毛平植出遺跡遺構配置図・出土遺物	122
第97図	取香和田戸遺跡遺構配置図・出土遺物	123
第98図	永田・不入遺跡窯跡群・出土遺物	124
第99図	南河原坂窯跡群全体図	125
第100図	南河原坂窯跡群10号窯跡	126
第101図	南河原坂窯跡群軒丸瓦・軒平瓦	126
第102図	南河原坂窯跡出土土器	127
第103図	宇津志野窯跡遺構配置図	128
第104図	浄瓶・水瓶 1	130
第105図	浄瓶・水瓶 2	131
第106図	香炉 1	132
第107図	香炉 2	133
第108図	正倉院宝物塔鏡形合子	134
第109図	鳩山窯跡群柳原遺跡A地区出土遺物	134
第110図	鉄鉢形土器 1	136
第111図	鉄鉢形土器 2	137
第112図	鉄鉢形土器 3	138
第113図	鉄鉢形土器 4	139
第114図	鉄鉢形土器 5・托	140
第115図	正倉院宝物磁鉢	141
第116図	墨書土器 1	144
第117図	墨書土器 2	145
第118図	墨書土器 3	146
第119図	墨書土器 4	147
第120図	墨書土器 5	148
第121図	墨書土器 6	149

第122図	墨書土器 7	150
第123図	瓦塔 1	152
第124図	瓦塔 2	153
第125図	瓦塔 3	154
第126図	瓦塔 4	155
第127図	瓦塔 5	156
第128図	瓦塔 6	157
第129図	瓦塔 7	158
第130図	瓦塔 8	159
第131図	正倉院宝物金銅鎮鐸第 1 号	160
第132図	その他の仏教関連遺物	161
第133図	仏堂・付属施設模式図 1	166
第134図	仏堂・付属施設模式図 2	167
第135図	仏堂・付属施設模式図 3	170
第136図	仏堂・付属施設模式図 4	171
第137図	五斗葺瓦窯跡1G-17グリッド一括資料	185
第138図	向台遺跡SI-3遺物出土状況図・出土遺物	185
第139図	県内丸瓦先端部片柄形加工資料	186
第140図	大和丸瓦先端部片柄形加工資料	186
第141図	印幡郡・埴生郡の寺院跡・仏教関連遺物出土遺跡分布図	189

## 図版目次

図版 1	遺構	図版 6	軒丸瓦 4
図版 2	五斗葺瓦窯跡出土瓦	図版 7	軒丸瓦 5 軒平瓦 1
図版 3	軒丸瓦 1	図版 8	軒平瓦 2
図版 4	軒丸瓦 2	図版 9	仏教遺物
図版 5	軒丸瓦 3	図版10	寺名墨書土器

# 古代仏教遺跡の諸問題

— 重要遺跡確認調査の成果と課題 1 —



# はじめに

資料部長 沼澤 豊

財団法人千葉県文化財センターは、創立以来、埋蔵文化財の発掘調査並びにこれに関わる研究及び普及事業を主要な業務として実施している。このうち研究活動については、発掘調査の現場で、また報告書の作成過程でと、日常業務の中で日々行われているとも言えるが、一方で、センターとして一定の主題を設定した共同研究も継続して実施し、その成果は『千葉県文化財センター研究紀要』として逐次刊行してきたところである。

『研究紀要』は、文字どおり職員の研究成果を世に問うものであり、昭和51年に第1号を刊行して以来号を重ね、本書で18号を数える。この間、昭和61年3月に創立10周年記念論集（第10号）を、平成7年1月に創立20周年記念論集（第16号）を、それぞれ記念論文集として刊行したのを除いて、特定の主題によるシリーズとして刊行している。

第1期（第1号～第5号）は、昭和50年度から55年度にかけて「考古学から見た房総文化の解明」という主題のもとに原始古代の房総文化の解明を試み、あるいはそのための資料の集成を行った。第2期（第6号～第11号）は、「自然科学の手法による遺跡・遺物の研究」を主題として自然科学的分析の考古学分野への応用に関する問題について研究し、その成果を昭和56年度から昭和61年度にかけて刊行した。第3期（第12号～第15号）は、「生産遺跡の研究」を主題として、生産・流通・消費に関する諸問題を、考古学ばかりでなく様々な視点から検討し、昭和62年度から平成6年度までに4冊の成果として刊行した。また、シリーズではないが、平成2年度から平成7年度にかけて「県内の青銅製品の集成と分析」を主題として設定し、その成果を平成8年度に第17号として刊行した。

今号（第18号）から第4期として「重要遺跡確認調査の成果と課題」という新しい主題による研究成果の刊行を開始する。センターは昭和56年度以来、千葉県教育委員会からの委託を受け、古代寺院跡、中近世城館跡、貝塚、古墳等を対象とする国庫補助事業「重要遺跡確認調査」を継続して実施してきた。各年度の調査成果は個別の報告書として刊行してきたが、それぞれの対象ごとの調査結果の取りまとめと成果の確認作業は、これまでセンターとして実施する機会がなかった。そこで、重要遺跡確認調査の成果を基礎として県内の同種の遺跡をも検討する共同研究を、平成5年度から開始した。今回はその成果報告の1冊目として、「古代寺院跡確認調査事業」の成果に基づく「古代仏教遺跡の諸問題」を刊行する。

古代寺院跡確認調査事業は、昭和55年度の小見川町木内廃寺確認調査を端緒とする。翌昭和56年度の成東町真行寺廃寺確認調査からセンターへ事業が委託され、以後、平成2年度の八日市場市大寺廃寺確認調査まで、9年間で9か所の古代寺院跡の調査を実施した。県内の古代寺院跡の調査例は国分寺関係を除くと極めて少なく、この事業で実施した10か所の調査例は極めて貴重な資料を提供している。真行寺廃寺では上総国分尼寺跡に次いで2例目の瓦積み基壇を検出し、新たに紀寺式の軒先瓦の類例を加えた。下総町名木廃寺では基壇建物を1棟確認した。市原市二日市場廃寺では、基壇建物は確認できなかったものの、大量の瓦と掘立柱建物を多く検出した。君津市九十九坊廃寺では、県内では初めて塔跡の調査を実施した。

はじめに

千葉市小食土廃寺では木造基壇外装をもつ基壇を確認した。佐倉市長熊廃寺では従来の伽藍配置を訂正し、墨書土器から寺名を確定することができた。

一方、千葉県内においては上総・下総の国分二寺の全体像がほぼ明らかになったことを初めとして、各種の開発事業に伴う発掘調査の結果として、仏教関連遺構・遺物に関する新たな知見が多数蓄積されてきている。大規模調査によって古代集落が全面的に発掘される例も増加しており、そのような中でこれまで認識されていなかった「村落内寺院」の存在が指摘され、その概念が明らかになりつつある。村落内寺院は両総地方において顕著なものであり、全国的にも特異な様相を示している。このほか、千葉県の古代遺跡では仏教関係の墨書土器の出土量が群を抜いて多いことも注意されている。

センターでは、こうした近年の調査成果をまとめて『房総考古学ライブラリー7－歴史時代(1)－』を平成5年に刊行したが、対象を一般向けとしたため、個別的な集成作業に至らなかった。そこで本紀要ではまず、千葉県及び茨城県のうち古代下総国に含まれた範囲における寺院跡、仏教遺物を出土した遺跡、仏教関係の墨書土器を出土した遺跡、瓦を出土した遺跡、瓦窯跡、また、仏教関係の痕跡のある古墳を集成した。平成9年3月31日までに判明している遺跡を一覧表として掲載したが、遺漏はほとんどないものと考えている。印刷の関係上紙面には割愛してある部分も多いが、データベースとして構築してあるので、今後その利用方法について検討していきたい。仏教関係遺物についても、発表されているものはほとんど網羅できたと考えている。個々の遺跡の内容については、紙面の関係上すべて記述することはできなかったが、主要遺跡の概観で全体像は把握できるものと思われる。また、資料集成の結果をもとに、地域を設定して、仏教から見た地域史の構築を試みている。

今までややもすれば個別的に論じられてきた寺院、瓦、墨書土器等仏教遺跡の諸要素を総合的に集成、検討できたことはこれまで例を見ない試みであり、今後の研究のための基本資料としての価値をもつものと考えている。また、今後、建築史、美術史、宗教史等からの広汎な研究を推進する必要性も痛感しているが、本書が県内外を問わず今後の仏教遺跡の研究にいささかなりとも役立つことがあれば幸いである。

本書に掲載した共同研究は、平成6年度から8年度まで、石田広美を主任として小林信一、糸原清の3名が実施したものであり、執筆分担は以下に記すとおりである。なお、本書の編集作業は、資料部資料課渡邊智信が担当した。

最後に、本書が成るまでに多くの御指導、御協力をいただいた以下の機関、各位に、録して謝意を表する次第である。

#### <協力機関>

市川市立考古博物館、市原市教育委員会、佐原市教育委員会、(財)市原市文化財センター、(財)印旛郡市文化財センター、(財)君津郡市文化財センター、(財)香取郡市文化財センター、(財)山武郡市文化財センター、(財)千葉市文化財調査協会、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県立房総風土記の丘、龍角寺、関市教育委員会、玉川考古学研究所、奈良国立文化財研究所、日本窯業史研究所、古川町教育委員会、結城市教育委員会、関東古瓦研究会

#### <協力者>

青沼道文、網 伸也、石戸啓夫、稲葉昭智、今泉 潔、上原真人、大脇 潔、大川 清、岡本東三、甲斐

博幸、河野一也、倉田義広、小牧美枝子、郷堀英司、斉藤伸明、佐川正敏、篠原英政、須田 勉、辻 史郎、田所 真、花谷 浩、菱田哲郎、松本太郎、松村恵司、宮内勝巳、森 郁夫、山口直人、山路直充、吉田恵二

<執筆分担>

石田広美 I - 1, V

小林信一 II, III - 1,

糸原 清 II, III - 2, IV

<重要遺跡確認調査「古代寺院跡確認調査」実施経過>

年 度	対象遺跡	調査主体
昭和55年度	香取郡小見川町木内廃寺	木内廃寺跡発掘調査団
昭和56年度	山武郡成東町真行寺廃寺	(財)千葉県文化財センター
昭和57年度	香取郡下総町名木廃寺	(財)千葉県文化財センター
昭和58年度	市原市二日市場廃寺	(財)千葉県文化財センター
昭和59年度	君津市九十九坊廃寺	(財)千葉県文化財センター
昭和60年度	千葉市小食土廃寺	(財)千葉県文化財センター
昭和61年度	佐倉市長熊廃寺	(財)千葉県文化財センター
昭和62年度	安房郡三芳村宝珠院	(財)千葉県文化財センター
昭和63年度	印旛郡栄町龍角寺	(財)千葉県文化財センター
平成元年度	八日市場市大寺廃寺	(財)千葉県文化財センター



# I 序 章

## 1 研究史

千葉県内における古代寺院の研究は大別すると戦前と戦後になる。戦後を研究状況により3期に分け、全体を4期で構成し、以下、概略を記す。

### 第1期（大正年間～昭和10年代）

この時期は古瓦、寺院跡の紹介が大半を占めるが、昭和10年代には研究の基礎を形成する。まさに黎明期である。

#### 大正年間に上総・下総国分寺の瓦の紹介が始まる

千葉県における寺院及び瓦の紹介は大正6年に住田正一による「下総国分寺古瓦について」（考古学雑誌第8巻2号）を嚆矢とする。しばらくは下総、上総の国分寺関係の表採古瓦の紹介に終始する。

#### 昭和7年に龍角寺の仏像の再発見、上総大寺の登場

印旛郡栄町龍角寺の銅造薬師如来座像が昭和7年初めに氏家重次郎により発見され、同時に古瓦、塔心礎も確認され、関根貞による本格的な調査により同年に国宝に、塔心礎は史跡として指定される。その後、関東で例を見ない東国産の白鳳仏として世間の注目を集める。

木更津市上総大寺廃寺は昭和7、8年ころ道路工事による熊野神社境内の土運びに端を発し、地元の郷土史家宮本寿吉による布目瓦の採集により廃寺跡の存在が確定する。また、境内に残る巨大な加工痕のある石を石製路盤と認定し、塔跡の存在、及び地名の考証等により中世まで相当な規模をもつ寺院が存在していたことを明らかにする。

#### 大場磐雄による九十九坊廃寺跡の調査

昭和8年に大場磐雄等による君津市九十九坊廃寺跡の発掘調査が行われる。塔跡を中心とした小規模な調査であったが、房総においては初めての寺院の本格的な発掘調査で記念すべきものである。調査により、法隆寺式伽藍配置であり、塔は三重塔であり、時代は奈良時代であると結論づけた。以後の調査の指針になるものである。

#### 篠原四郎による寺院の集成、滝口宏・平野元三郎による寺院の集成と考察

昭和9年に初めて篠崎四郎により、房総の古代寺院の地名表が作成される。23か所。ただしこの中には伝説地が3か所含まれている。遺構と遺物を合体した歴史考古学として房総の古代寺院を初めて面的に捉える。昭和12年になると、平野元三郎・滝口宏による分布図、各遺跡の概要を加えたより完成度の高いものが出来上がり、房総の古代寺院研究の一つの到達点を見る。ここでは伝説地を除き、遺構・遺物から抽出した22か所が報告されている。

#### 国分寺研究の集大成

昭和13年に刊行された角田文衛編「国分寺の研究」は文献、建築史、美術史、考古学を総合して考察し

## I 序 説

た優れた論考である。全国の国分寺が網羅され、均質な内容をもった希有な論文集でもある。房総関係では安房、上総、下総の3国が取り上げられており国分寺研究の一つの到達点である。特に安房については特殊な国の成り立ちをしていることに着目し、国分寺に対する新たな見解を提示しており、下総については初めて僧寺、尼寺跡を確定している等の特筆すべき内容を含んでいる。

### 第2期（昭和20～40年代）

戦前の研究が裾野を拡げ、より詳細になる。そして今まで経験したことのない大規模調査の時代に突入して行く。

#### 戦後の小規模な調査

滝口宏・平野元三郎が上総国分僧寺・尼寺跡、下総国分僧寺・尼寺跡、菊間廃寺跡、千草山廃寺跡等を、大場磐雄、武田宗久が千葉寺を、小出義治が流山廃寺跡を、久保常春等が長熊廃寺跡をそれぞれ小規模な調査を実施している。まだ実態を把握できるまでには至っていない。長熊廃寺跡は法隆寺式伽藍配置の寺院跡と報告されているが、当時から疑問視されていた部分があり、後日に解決された。

#### 国分寺の調査

昭和41～43年にかけて早稲田大学考古学研究室が上総国分寺を調査して、金堂、塔、講堂、回廊、中門の伽藍中心部を明らかにした。昭和41・42年に市川市史編さん事業の一環として下総国分寺の調査が実施され、金堂、塔、講堂の伽藍中心部が明らかになった。

#### 大規模調査の開始

成田ニュータウン遺跡群、千葉ニュータウン遺跡(大塚前遺跡)、村上込の内遺跡等の重要な大規模調査が昭和40年代後半に集中して開始される。寺院関係では上総国分寺台の調査の開始が特筆される。この調査は昭和48年から59年まで継続され、上総国分僧寺、尼寺の全体像が明らかになり、全国に先駆けて国分寺の全貌を解明した、画期的な調査である。ただ未だに正式報告書が刊行されないのは残念である。

### 第3期（昭和50年代～平成5年）

調査例が飛躍的に増大し、寺院跡から仏教関連遺跡として捉えざるを得ない状況になる。その中から、多様な論考が提出され、活発な展開を繰り返す。ほぼ論考は出尽くす。

#### 龍角寺、木下別所廃寺跡の調査

龍角寺の調査は早稲田大学考古学研究室により、昭和22、23、46、51年に実施されておりほぼ伽藍中心部については解明されている。また同時に瓦窯も調査されている。木下別所廃寺跡は昭和52、53年に早稲田大学考古学研究室が調査して基壇建物3基を確認し、本格的寺院跡であることを確認した。同時に瓦窯も調査されている。

#### 房総の古瓦展

昭和53年に千葉県立房総風土記の丘で開催された「房総の古瓦」展は県内で最初の古瓦を集成した画期的な企画展であり、その図録は現在でも有用な価値をもっている。

#### 墨書土器と新たな展開

昭和54年に高木博彦が「墨書土器よりみたる房総古代仏教の一側面」を発表し、県内の墨書土器の仏教関係を集成、遺構との関連について初めて論究した。集落における規模の大きな掘立柱建物跡（四面廂）について、寺名墨書を手掛かりにして寺院の可能性が高いことを指摘する。

昭和58年に雨宮龍太郎が「古代村落と仏教—磁鉢をめぐる人々—」を発表し、一つの遺跡の仏教遺物のあり方から古代民衆の仏教受容の姿を素描し、新たな見解を提出した。

#### 須田による村落内寺院の提唱

昭和60年に須田勉が「平安初期における村落内寺院の存在形態」を発表し、高木、雨宮の説を敷衍して、更に県内で増えてきた同種の遺跡を集成して、「村落内寺院」との仮の名称を提唱した。以後この名称が定着する。須田はこの中で村落内寺院の概念を設定し、さらに設立者、運営方法にまで言及している。

#### 古代寺院確認調査の実施

昭和55年度から千葉県教育委員会が実施した重要遺跡確認調査はこれまで、国分寺と少数の寺院跡に限られていた発掘調査が初めて計画的に実施され、多くの成果をあげた。

昭和55年度に実施された香取郡小見川町木内廃寺跡では基壇1基が確認された。昭和56年度の山武郡成東町真行寺廃寺跡調査から（財）千葉県文化財センターに委託された。真行寺廃寺跡からは基壇2基が検出され、そのうち北基壇は上総国分尼寺について県内では2例目の瓦積基壇であった。また、新たに紀寺式の軒先瓦が確認され、特殊な文様の叩目を持つ平瓦が多く確認された。なお、真行寺廃寺跡は成東町教育委員会と（財）千葉県文化財センターにより昭和58年度まで周辺の確認調査が実施され、ほぼ全貌が明らかになった。特に町が実施した昭和58年度の調査では鍛冶遺構から「武射寺」の墨書土器が出土し、郡名を冠する寺院名が判明したことは画期的である。

昭和57年度に実施した香取郡下総町名木廃寺跡では基壇1基を検出し、「度寺」と書かれた墨書土器が出土し、寺名の有力な手がかりを得る。昭和58年度の市原市二日市場廃寺跡では基壇建物は確認されなかったが、大量の瓦と多くの掘立柱建物跡が検出された。軒先瓦にも紀寺式と山田寺式の2系統があることが確認された。昭和59年度の君津市九十九坊廃寺跡では県内で最初の本格的な塔の調査を実施し、その構造を明らかにした。また、昭和60年度には（財）千葉県文化財センターが独自に確認調査を継続し、金堂、講堂、塔を備えた本格的な寺院であったことを確認する。また、独特な文様である軒先瓦も独自な変化をしていることも判明した。

昭和60年度の千葉市小食土廃寺跡では初めて木造基壇外装をもつ基壇建物が1基検出された。上総国分寺と同範である単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦の確認も、国分寺と造営者の関係を考える上で貴重なものである。昭和61年度の佐倉市長熊廃寺跡では基壇1基だけの検出にとどまったが、従来言われていた法隆寺式の伽藍配置の誤謬を訂正することができた。なお、「高罌寺」の寺名墨書土器が出土し、郡名でない地名を冠する寺名に寺院の性格を表しているという新しい成果を得た。昭和62年度の安房郡三芳村宝珠院の調査は寺院関係に迫れず、昭和63年度の印旛郡栄町龍角寺の調査は周辺部の確認にとどまった。平成元年度の八日市場市大寺廃寺跡の調査では伝説上の龍腹寺の位置を確定できるようになった。

#### 結城廃寺跡の調査

昭和63年度から平成6年度にかけて結城市教育委員会が調査を実施する。下総国内において初期寺院の全貌が初めて明らかになる。伽藍中心部のほかに寺域まで確認された。遺構、遺物にも目をみはる物が多い。特に塔心礎における舍利容器及び蓋の彩色蓮華文、塑像の大量出土は地方寺院のあり方を根本から再

## I 序 説

考させるものである。

### 今泉による構造の提唱

平成2年に今泉潔が『瓦と建物の相剋』試論において、瓦を伴う掘立柱建物跡について新しい見解を提出した。つまり、瓦が少量出土する掘立柱建物跡の構造を葺棟とした。また、須田の説に対立する仏教受容論を提出した。

### 瓦窯の調査

龍角寺所用瓦の生産地である龍角寺瓦窯、五斗蒔瓦窯、龍正院の所用瓦の生産地である龍正院瓦跡、木下別所廃寺跡所用瓦の生産地である曾谷窪瓦窯の調査もなされ、供給関係も明らかになった。上総国分寺関係では南河原坂瓦窯、川焼瓦窯、南田瓦窯が調査され複雑な供給関係も明らかになりつつある。

### 瓦制作技法の研究

佐々木和博が下総国分寺関係の瓦を中心に進め、やがて山路直充が県内の瓦に目を向け、成果をあげる。

### 大規模調査の増加と類例の増加

昭和40年代後半から続いた大規模調査もピークを迎え、仏教関連遺跡の類例が増加した。

## 第4期（平成6年以降）

まとめの時期に入り、今までの成果を総括する論考が出現し始めた。稔りの多い時期であり、今後の発展が期待できる。

### 笹生による村落内寺院の深化

平成6年に笹生衛が「古代仏教信仰の一側面」を発表し、須田、今泉、雨宮の説を踏まえより広範囲に仏教関連遺跡を集成し、造営基盤の類型化を行い、仏教信仰の階層性を明確にした。所謂「村落内寺院」の考え方を発展集大成した。

### 山路による下総国分寺の総括

平成6年に山路直充が「下総国分寺跡 平成元年～5年度発掘調査報告書」を中心になりまとめ、下総国分寺の現状での到達点を示した。

### 宮本による上総国分寺の総括

平成6年に宮本敬一が「上総国分寺の成立－尼寺の造営過程を中心に」を発表した。文献をよく咀嚼し、国分寺の成立過程を丹念に遺構で確認しながら精緻な素描を試みている。国分寺研究の白眉であると思われる。惜しむらくは研究者が等しく検証できる環境の整備を望みたい。

### 岡本による初期寺院の年代決定

平成8年に岡本東三が刊行した「東国の古代寺院と瓦」は氏が平成5年「下総龍角寺の山田寺式軒瓦について」、平成6年「東国の川原寺式軒瓦の波及年代をめぐって」、平成6年「紀寺式軒瓦の編年的位置について」として発表したものを骨子として新たに書き下ろしたものを加えた内容になっている。精力的に追求した県内の初期寺院の瓦と畿内の標準資料との精緻な検討をもとにして技法の問題を据えて独自の年代観を提示した。揺れ動く東国初期寺院の年代観に明確な基準を与えた。

### 関東古瓦研究会によるシンポジウム

関東古瓦研究会は昭和50年代から活動を開始し、関東地方の古瓦を精力的に県単位で集成しほぼ完璧な



資料集を完成させた。千葉県関係も須田勉がほぼ独力で昭和58年に完成させた。ただ非公開の研究会であったため集積した資料の公開を目指し、平成6年にシンポジウム「関東の国分寺」を開催し、関東の国分寺を総括する。平成9年に「関東の初期寺院」を開催し、関東の初期寺院を総括する。両シンポジウムにおいて千葉県の状況もよくまとめられ、現状では最良の資料になっている。

## 2 文 献 目 録

- 1 1917 大正6年 住田正一 「下総国分寺古瓦について」『考古学雑誌』8-2
- 2 1918 大正7年 住田正一 「上総国分寺古瓦考」『考古学雑誌』9-4
- 3 1922 大正11年 春永 政 「上総国分寺の文字瓦」『考古学雑誌』13-4
- 4 1923 大正12年 出井高義 「下総国分寺の文字瓦」『考古学雑誌』13-9
- 5 1926 大正15年 「下総国分寺址」『千葉県史蹟名勝天然記念物調査第2輯』
- 6 " " 「上総国分寺址」『千葉県史蹟名勝天然記念物調査2輯』
- 7 1929 昭和4年 三輪善之助 「下総の国分寺」『武蔵野』14-7
- 8 " " 三輪善之助 「上総の国分寺」『房総研究』1-4
- 9 " " 谷木光之助 「上総国分寺の遺跡と遺物」『房総研究』1-4
- 10 1930 昭和5年 古谷 清 「上総国分寺塔址」『文部省史蹟報告』5
- 11 1932 昭和7年 関根 貞 「竜角寺銅造薬師如来像及古瓦片」『歴史教育』7-4
- 12 " " 丸尾彰三郎 「竜角寺薬師如来像」『宝雲』3
- 13 " " 服部勝吉 「竜角寺塔心礎と古瓦」『宝雲』4
- 14 " " 「上総国分寺境内地積図及塔址礎石配置図(図)」『郷土愛』2-1 房総文庫刊行会
- 15 " " 「上総国分寺発見瓦(図)」『郷土愛』2-1 房総文庫刊行会
- 16 " " 古谷 清 「上総国分寺塔址」『郷土愛』2-1 房総文庫刊行会
- 17 1933 昭和8年 滝口 宏・平野元三郎 「下総国分寺址考」『千葉県史蹟名勝天然記念物調査』10
- 18 " " 多田寅松 「竜角寺の薬師如来について」『千葉教育』491
- 19 " " 広岡城泉 「下総国竜角寺」『成田山新更』4-1
- 20 1934 昭和9年 篠崎四郎 「房総の寺址」『房総郷土研究』1-7
- 21 " " 氏家重次郎 「史蹟から見た竜角寺」『史蹟名勝天然記念物』9-10
- 22 " " 高橋直一 「竜角寺寺名考」『史蹟名勝天然記念物』9-6
- 23 " " 大場磐雄・内藤政恒・篠崎四郎 「上総国九十九坊廃寺址調査報告書」『史蹟名勝天然記念物』9-9
- 24 " " 「古瓦と石仏の発見」『房総郷土研究』1-10
- 25 1935 昭和10年 香取秀真 「竜角寺の薬師銅像」『美術研究』37
- 26 " " 服部清五郎 「金石史上よりみた中世以前の千葉市の開化史概観(上)」『房総郷土研究』2-3
- 27 " " 服部清五郎 「金石史上よりみた中世以前の千葉市の開化史概観(中)」『房総郷土研究』2-4
- 28 " " 服部清五郎 「金石史上よりみた中世以前の千葉市の開化史概観(下)」『房総郷土研究』2-5
- 29 " " 平野元三郎 「安房国分寺考」『千葉県史蹟名勝天然記念物調査』10
- 30 1936 昭和11年 大川逞一 「竜角寺薬師像」『美術』11-12
- 31 " " 平野元三郎 「竜角寺縁起から」『千葉県史蹟調査』1
- 32 " " 柴田常恵 「千葉寺の研究」『房総郷土研究』3-1
- 33 1937 昭和12年 篠崎四郎 「上総国真里谷廃寺址」『考古学雑誌』27-10
- 34 " " 滝口 宏・平野元三郎 「上代仏教遺跡調査予報」『千葉県史蹟名勝天然記念物調査』14
- 35 " " 服部清道 「上総大椎の古瓦遺跡調査概報」『房総郷土研究』4-2
- 36 1938 昭和13年 角田文衛編 『国分寺の研究』考古学研究会
- 37 " " 滝口 宏・平野元三郎 「下総国分寺」『国分寺の研究』
- 38 " " 滝口 宏・平野元三郎 「安房国分寺」『国分寺の研究』
- 39 " " 角田文次 「上総国分寺」『国分寺の研究』
- 40 1939 昭和14年 太田静六 「国分寺塔姿の一考察」『考古学雑誌』29-9・10

- 41 1940 昭和15年 篠崎四郎 「竜角寺文字攷」『考古学雑誌』30-4
- 42 // // 君塚好一 「「下総国分尼寺址」寺投入推定説を駁す」『武蔵野』27-11
- 43 // // 稲葉隣作 「竜角寺について」『千葉文化』2-4
- 44 1941 昭和16年 稲葉隣作 「国宝竜角寺薬師如来」『千葉文化』3-6
- 45 1942 昭和17年 上田三平 「下総竜角寺の新研究」
- 46 1943 昭和18年 塚本文次 「下総国分寺本堂の礎石について」『建築史』5-2
- 47 1947 昭和22年 石田茂作 「市原市市原郡市西村寺院址」『日本考古学年報』1
- 48 1949 昭和24年 滝口 宏 「終戦後早稲田大学に於ける考古学的調査について—下総龍角寺址調査—」『史観32』
- 49 // // 平野元三郎 「房総古寺」『房総展望』3-8
- 50 // // 滝口 宏・平野元三郎 「千葉県郷土史読本(上)」
- 51 // // 大場磐雄 「千葉寺を掘る」京成文化1
- 52 // // 滝口 宏 「上総国分寺」『千葉県史蹟名勝天然記念物調査報告書(1)』
- 53 // // 渡辺保忠 「上総国分尼寺」『千葉県史蹟名勝天然記念物調査報告書(1)』
- 54 1950 昭和25年 荻野三七彦 「竜角寺の縁起について」『史観』33
- 55 // // 「銅造薬師如来像」『千葉県史蹟名勝天然記念物調査』2-3
- 56 1951 昭和26年 大野政治 「印旛風土記 竜角寺建立の基盤をなすもの」『房総展望』5-7
- 57 // // 滝口 宏・平野元三郎 「千葉県上総国分尼寺址」『日本考古学年報』1
- 58 1952 昭和27年 滝口 宏 「房総の史跡」『房総展望』6-9
- 59 // // 久保常春 「千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘調査報告」『銅鐸』9
- 60 // // 篠崎四郎 「竜角寺管見」房総探古会
- 61 1953 昭和28年 丸子 亘 「千葉県印旛郡和田村熊野神社前の土師住居址発掘報告」『立正大学文学部論叢』1
- 62 // // 武田宗久 「千葉寺」『千葉市誌』
- 63 // // 宮原 実 「上総国分寺を中心とする史跡」市原村教育委員会
- 64 1954 昭和29年 滝口 宏 「下総国府国分二寺」『早稲田大学学術研究』2
- 65 // // 小出義治 「千葉県東葛飾郡流山廃寺址」『日本考古学年報』2
- 66 // // 金原省吾 「竜角寺の白鳳仏」『西郊文化』15・16
- 67 // // 滝口 宏 「千葉県上総国分寺址」『日本考古学年報』2
- 68 // // 大場磐雄・小出義治 「千葉県千葉市千葉寺址」『日本考古学年報』2
- 69 1955 昭和30年 久保常春 「千葉県印旛郡長熊廃寺址」『日本考古学年報』4
- 70 // // 滝口 宏 「市川市須和田奈良時代遺跡」『古代』14・15合併号
- 71 // // 滝口 宏・平野元三郎 「千葉県市原市菊間廃寺」『日本考古学年報』3
- 72 1956 昭和31年 滝口 宏・平野元三郎 「千葉県の歴史」『昭和30年版千葉県の文化財』
- 73 // // 久野 健 「関東古寺巡礼7-竜角寺-」『三彩』82
- 74 // // 山野辺薫 「下総竜角寺の研究」郷土誌資料5
- 75 // // 平野元三郎 「上総国分寺付近の条里制遺跡について」『國學院雑誌』56-5
- 76 1957 昭和32年 久保常春 「千葉県印旛郡長熊廃寺址講堂塔址」『日本考古学年報』5
- 77 // // 武田宗久 「千葉市千葉寺址」『日本考古学年報』5
- 78 // // 大川 清 「上総光善寺廃寺」『古代』24
- 79 1958 昭和33年 「考古学資料解説目録」成田山靈光館
- 80 // // 丸子 亘 「長熊廃寺周辺古瓦出土住居址2例」『銅鐸』14
- 81 1959 昭和34年 大川 清他 「千葉市大金沢町左作瓦窯跡址」『古代』33
- 82 // // 石田茂作 「東大寺と国分寺」日本歴史新書 至文堂
- 83 1960 昭和35年 坂詰秀一 「千葉県横宿古瓦出土遺跡の調査」『古代文化』5-1

I 序 説

- 84 1961 昭和36年 滝口 宏 「寺院址及び瓦塔」「附章及び結語」「印旛手賀」千葉県教育委員会
- 85 1961 昭和36年 「日本 4 歴史時代」世界考古学大系 平凡社
- 86 // // 松村 侑 「木下廃寺・竜腹寺・泉倉寺について」「成田史談」7
- 87 // // 「史蹟上総国分寺」五井町文化財研究会
- 88 1962 昭和37年 堀井三友 「上総国分寺」「国分寺址の研究」
- 89 1963 昭和38年 「千葉県史料原始古代編 -安房国-」千葉県
- 90 // // 久保常春 「千葉県印旛郡長熊廃寺一回廊・中門・南大門」「日本考古学年報」6
- 91 1964 昭和39年 高井悌三郎 「常陸台渡廃寺跡・下総結城八幡瓦窯跡」綜芸社
- 92 // // 「国指定史跡 上総国分寺塔址について(併)」『国分寺を中心とした史蹟』市原市教育委員会
- 93 // // 平野元三郎 「市原市上総国府関係遺跡」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会
- 94 1965 昭和40年 「ふるさと竜角寺」柴町教育委員会
- 95 1966 昭和41年 大川 清 「かわらの美」教養文庫 社会思想社
- 96 // // 「国分寺の造営」『市川』市川市教育委員会
- 97 1967 昭和42年 「千葉県史料原始古代編 -上総国-」千葉県
- 98 // // 熊野正也 「下総国分僧寺跡の発掘調査」『大和文化研究』12-1 (105号)
- 99 // // 大野政治 「下総国竜角寺・竜腹寺・竜尾寺三山縁起について」
- 100 // // 須田 勉 「上総国分寺址」『新鐘』早稲田大学
- 101 // // 滝口 宏 「昭和42年度上総国分寺址調査報告」千葉県教育委員会
- 102 // // 大川 清 「木更津矢那瓦窯址」『古代』49・50合併号
- 103 1968 昭和43年 滝口 宏 「発掘調査から見た総武-国分寺を中心として-」『早稲田大学大学院紀要』13
- 104 // // 坂井利明・市毛 勲 「南大広遺跡 海保古墳群」市原市教育委員会
- 105 // // 須田 勉 「千葉県上代寺院址一覧」『金鈴』20
- 106 // // 安藤鴻基・須田 勉 「上総大寺廃寺の古瓦」『金鈴』20
- 107 // // 杉原荘介・熊野正也 「下総国分寺址」市川市教育委員会
- 108 // // 丸子 亘 「千葉県八街町滝台遺跡緊急発掘調査報告」『日本考古学協会昭和43年度大会研究発表要旨』
- 109 // // 滝口 宏 「昭和43年度上総国分寺址調査報告」千葉県教育委員会
- 110 1969 昭和44年 鶴岡静夫 「関東古代寺院の研究」弘文堂
- 111 // // 江川良一 「下総国分寺」『房総史学』9
- 112 // // 倉田芳郎 「船戸遺跡」『我孫子古墳群』東京大学文学部考古学研究室
- 113 // // 滝口 宏 「昭和44年度上総国分寺址調査報告」千葉県教育委員会
- 114 1970 昭和45年 「飛鳥・白鳳の古瓦」奈良国立博物館
- 115 // // 滝口 宏 「氏寺の建立/国分寺造営」『古代の日本 7 関東』角川書店
- 116 // // 滝口 宏 「上総国分尼寺址の調査」『考古学ジャーナル』49
- 117 // // 「(下総国分寺) 鎧瓦」『かみしき(下総史料館だより)』3
- 118 // // 多字邦雄 「上総国分寺の研究」『早稲田実業高校研究紀要』5
- 119 1971 昭和46年 坂詰秀一 「シンポジウム歴史時代の考古学」学生社
- 120 // // 坂詰秀一 「仏教考古学序説」考古学選書 雄山閣
- 121 // // 稲垣晋也 「古代の瓦」日本の美術 至文堂
- 122 // // 熊野正也 「下総国分寺址及び同瓦窯址」『日本考古学年報』19
- 123 // // 「(下総国分寺) 字瓦」『かみしき(下総史料館だより)』4
- 124 // // 「(下総国分寺) 鎧瓦」『かみしき(下総史料館だより)』5

- 125 1971 昭和46年 川瀬 浩 「竜角寺の伽藍配置」『成田史談』17
- 126 " " 中村恵次他 『千葉県山武郡成東町湯坂遺跡発掘調査概報』湯坂遺跡発掘調査団
- 127 " " 滝口 宏 「市原市上総国分寺址」『日本考古学年報』19
- 128 1972 昭和47年 平野元三郎 「千葉県上代仏教文化史資料録」『千葉県の歴史』4
- 129 " " 「(下総国分寺) 鏡瓦」『かみしき』(下総史料館だより) 7
- 130 " " 「(下総国分寺) 宇瓦」『かみしき』(下総史料館だより) 8
- 131 " " 滝口 宏他 「下総竜角寺調査報告」千葉県教育委員会
- 132 " " 大川 清 『日本の古代瓦窯』雄山閣
- 133 " " 滝口 宏 「上総国分寺址」『日本考古学年報』20
- 134 1973 昭和48年 『房総 - その風土と歴史 -』千葉県博物館協会
- 135 " " 関口広次 「上総下総国分寺址出土古瓦の系譜と伝播」『史館』創刊号
- 136 " " 熊野正也 「国分寺の建立」『市川風土記』
- 137 " " 川戸 彰 「古代・中世の竜角寺1」『千葉県の歴史』5
- 138 " " 川戸 彰 「古代・中世の竜角寺2」『千葉県の歴史』6
- 139 " " 日下武重 『小見川町の歴史散歩』
- 140 " " 神山 崇 「山武郡芝山町金光寺について」『MUSEUMちば』2
- 141 " " 『市原のあゆみ』市原市
- 142 " " 滝口 宏 『上総国分寺』千葉県教育委員会
- 143 " " 大川 清 「東国国分寺造営時における造瓦組織の研究」『国士館大学人文学会紀要』5
- 144 " " 森 郁夫 「奈良時代の文字瓦」『日本史研究』136
- 145 1974 昭和49年 「埋もれた宮殿と寺」古代史発掘 講談社
- 146 " " 『奈良国立文化財研究所基準資料1 瓦編1』奈良国立文化財研究所
- 147 " " 『全国遺跡地図』12 千葉県文化庁
- 148 " " 滝口 宏 「国分寺建立の発詔」『市川市史』2
- 149 " " 石井則孝 「下総国分寺僧寺・尼寺の伽藍と下総国府の位置関係について」『史館』3
- 150 " " 寺村光晴他 『下総国分の遺跡』和洋女子大学
- 151 " " 佐藤克己・高木博彦 「木下庵寺の古瓦」『ふさ』5・6 合併号
- 152 " " 佐藤克己・沼澤 豊 「大塚前遺跡(CN405)」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』II
- 153 " " 『原始古代中世編 千葉市史』市史編纂委員会
- 154 " " 天野 努他 「村上込の内遺跡」『八千代市村上遺跡群』(勸)千葉県都市公社
- 155 1975 昭和50年 『奈良国立文化財研究所基準資料2 瓦編2』奈良国立文化財研究所
- 156 " " 石田茂作他 『第2巻 寺院』新版仏教考古学講座 雄山閣
- 157 " " 森 郁夫 「奈良時代における東国の寺院造営」『考古学雑誌』61-4
- 158 " " 「(下総国分寺) 鏡瓦」『かみしき』(下総史料館だより) 14
- 159 " " 滝口 宏・熊野正也 「下総国分僧寺址寺域北限確認調査(速報)」『昭和49年市川博物館年報』
- 160 " " 熊野正也 「下総国分寺のはなし」市川市川博物館遺跡シリーズ2
- 161 " " 『公津原-成田ニュータウン内遺跡の考古学的調査-』千葉県企業庁
- 162 " " 種田齊吾・阪田正一 「千葉東南部ニュータウン3-有吉遺跡(第一次)」(勸)千葉県文化財センター
- 163 " " 平岡和夫他 「湯坂古墳群」山武考古学研究会
- 164 " " 平岡和夫他 『成東町埋蔵文化財分布調査報告板附古墳群』
- 165 " " 「市原市考古学関係文献目録稿本市原市歴史年表」市原市
- 166 " " 須田 勉他 「南向原」上総国分寺台遺跡調査団
- 167 " " 玉口時雄 「堀ノ内遺跡」『健田遺跡発掘調査報告書』千葉県教育委員会 千倉町教育委員会

I 序 説

- 168 1975 昭和50年 内田儀久他 『将門鹿島台遺跡』佐倉市教育委員会  
 169 // // 熊野正也・伊礼正雄 『白井南』佐倉市教育委員会  
 170 // // 佐々木和博 「下総国分僧寺址出土の墨書土器」『MUSEUMちば—千葉県博物館協会研究紀要—』6  
 171 // // 鈴木仲秋 「房総における墨書土器の一考察」『史館』5  
 172 1976 昭和51年 // // 『奈良国立文化財研究所基準資料3瓦編3』奈良国立文化財研究所  
 173 // // 新羅愛子 『新訂房総研究文献総覧』多田屋  
 174 // // 須田 勉 「初期地方寺院の成立事情」『房総の郷土史』4  
 175 // // // 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 昭和49・50年』千葉県教育庁文化課  
 176 // // 佐々木和博 「下総国分僧寺の寺域および寺域内地割について」『史館』6  
 177 // // 滝口 宏・熊野正也他 「下総国分僧寺址西限確認調査」『昭和50年度市立市川博物館年報』  
 178 // // // 『史料編1 原始古代中世編千葉市史』市史編纂委員会  
 179 // // 矢吹俊男他 『多古台遺跡群調査概報』日本文化財研究所  
 180 1977 昭和52年 // // 『奈良国立文化財研究所基準資料4瓦編4』奈良国立文化財研究所  
 181 // // // 『奈良国立文化財研究所基準資料5瓦編5』奈良国立文化財研究所  
 182 // // // 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 昭和47・48年』千葉県教育庁文化課  
 183 // // 佐々木和博 「下総国分僧寺址北方における新発見の遺物」『昭和51年度市立市川博物館年報』  
 184 // // 石井則孝・熊野正也 「国府と国分寺」『いちかわ再発見—考古学からみた市川—』市川ジャーナル社  
 185 // // 中山吉秀・高橋良助 「手賀廃寺の古瓦」『史館』9  
 186 // // // 『特別展 茨城の古瓦』茨城県歴史館  
 187 // // 篠崎四郎 「史跡散歩76 佐倉の長熊廃寺」『京成ライン』京成電鉄株式会社  
 188 // // // 「古代建築史上重要な遺構を発見」『ちばの博物館・千葉県博物館協会報』5・6合併号  
 189 // // 寺門義範・田口 崇 『千葉県萩ノ原遺跡発掘調査報告』日本文化財研究所文化財調査報告5  
 190 // // 石田広美・松村恵司他 『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会  
 191 // // 平野元三郎他 『上総法興寺跡—第一次発掘調査概要—』千葉県教育委員会  
 192 // // 高田 博他 『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書I』(勸千葉県文化財センター  
 193 // // 石井則孝 『古代房総文化の謎』人物往来社  
 194 1978 昭和53年 折原 繁・須田 勉 『千葉市築地台貝塚・平山古墳』(勸千葉県文化財センター  
 195 // // 須田 勉 「上総国分寺の造瓦組織と同範瓦の展開」『史館』10  
 196 // // 石井則孝 「房総国分寺跡調査と古代寺院について」『千葉県の歴史』15  
 197 // // 鈴木仲秋 「房総における墨書土器」『千葉県の歴史』15  
 198 // // // 『房総の古瓦』千葉県立房総風土記の丘  
 199 // // 奥田正彦 『佐原市神田台遺跡』(勸千葉県文化財センター  
 200 // // 工藤英行 「山谷遺跡発掘調査概要」『成田史談』23  
 201 // // // 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報—昭和50(その2)・51年度—』千葉県教育庁文化課  
 202 // // 大川 清 『永田・不入須恵窯跡』千葉県教育委員会  
 203 // // 滝口 宏 『木下別所廃寺跡第1次発掘調査概報』千葉県教育委員会・木下別所廃寺跡調査会  
 204 // // 平野元三郎 「岩室廃寺跡を中心に」『千葉文華』13  
 205 // // 平岡和夫他 『岩部遺跡』  
 206 1979 昭和54年 滝口 宏 『木下別所廃寺跡第2次発掘調査概報』千葉県教育委員会・木下別所廃寺跡調査会  
 207 // // 田坂 浩 『ムコアラク遺跡・小金沢古墳群 千葉東南部ニュータウン8』(勸千葉県文化財センター  
 208 // // 田中清美 『千草山遺跡』千草山遺跡発掘調査団

- 209 1979 昭和54年 伊藤公子他 「高野台遺跡発掘調査報告書」 柏市教育委員会
- 210 // // 高橋健一 「江原台」 江原台第1遺跡発掘調査団
- 211 // // 高木博彦 「墨書土器よりみたる房総古代仏教の一側面」 『MUSEUMちばー千葉県博物館協会研究紀要ー第10号』 千葉県博物館協会
- 212 // // 須田 勉 「房総古瓦に関する覚書(2)ー川原井廃寺ー」 『古代』 65
- 213 // // 米田耕之助・鷹野光行 「上総国分寺台調査概報IV 祇園原貝塚調査概報」 市原市教育委員会
- 214 1980 昭和55年 郷田良一・雨宮龍太郎 「六通遺跡」 『千葉東南部ニュータウン9ー六通遺跡・御塚台遺跡』 (勸千葉県文化財センター)
- 215 // // 熊野正也 「若宮八幡遺跡」 『昭和54年度市川東部遺跡群発掘調査報告』 市川市教育委員会
- 216 // // 渋谷興平・渋谷 貢 「馬橋鷲尾余遺跡」 馬橋鷲尾余遺跡調査会
- 217 // // 松本 茂他 「尾井戸遺跡」 尾井戸遺跡調査会
- 218 // // 上野純司他 「千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書」 千葉県教育委員会
- 219 // // 多宇邦雄・西川修一他 「曾谷窪瓦窯跡発掘調査概報」 早稲田大学考古学研究室・千葉県教育委員会
- 220 // // 高田 博他 「佐倉市江原台発掘調査報告書II」 (勸千葉県文化財センター)
- 221 // // 滝口 宏 「安房国分寺」 館山市教育委員会
- 222 // // 中山吉秀他 「西深井一の割遺跡」 『西深井一の割遺跡・西初石桜窪遺跡』 流山市教育委員会
- 223 // // 「日秀遺跡遺構確認調査概報」 (勸千葉県文化財センター)
- 224 // // 佐々木和博 「下総国分尼寺跡付近発見の古瓦ー新形式軒平瓦を中心にー」 『昭和54年度市立市川博物館年報』
- 225 // // 佐々木和博 「瓦当背面に布目痕を有する軒丸瓦ー関東の国分寺を中心としてー」 『史館』 12
- 226 // // 安藤鴻基 「房総七世紀史の一姿相」 『古代探叢』
- 227 // // 須田 勉 「古代地方豪族と造寺活動ー上総国を中心としてー」 『古代探叢』
- 228 // // 多宇邦雄 「下総龍角寺について」 『古代探叢』
- 229 1981 昭和56年 宮本敬一 「最近の調査から見た上総国分尼寺の伽藍と付属諸院1〜4」 『歴史教育』 第3巻9号〜12号
- 230 // // 天野 努他 「公津原II」 (勸千葉県文化財センター)
- 231 // // 福間 元 「木内廃寺跡発掘調査概報」 千葉県教育委員会
- 232 1982 昭和57年 宮内勝巳 「下総国分遺跡第1地点」 『昭和56年度埋蔵文化財発掘調査報告』 市川市教育委員会
- 233 // // 福間 元 「今富地区遺跡発掘調査報告書」 市原市今富地区遺跡調査会
- 234 // // 沼澤 豊 「成東町真行寺廃寺跡確認調査報告」 千葉県教育委員会
- 235 1983 昭和58年 須田 勉 「関東地方の瓦窯」 『佛教芸術』 148
- 236 // // 雨宮龍太郎 「古代村落と仏教ー磁鉢をめぐる人々ー」 『研究連絡誌』 2 (勸千葉県文化財センター)
- 237 // // 安藤鴻基 「上総法興寺跡古瓦拾遺」 『古代房総史研究』 2
- 238 // // 滝口 宏他 「成東町真行寺廃寺跡発掘調査概報」 成東町教育委員会
- 239 // // 関東古瓦研究会 「関東古瓦研究会資料 上総・安房編」
- 240 // // 関東古瓦研究会 「関東古瓦研究会資料 下総編」
- 241 // // 栗田則久 「バクナ穴遺跡」 『千葉東南部ニュータウン14』 (勸千葉県文化財センター)
- 242 // // 沼澤 豊 「下総町名木廃寺跡確認調査報告」 千葉県教育委員会
- 243 // // 本吉正宏 「法興寺の瓦窯」 『総南博物館館報』 特集号
- 244 // // 有沢 要・高橋 誠 「太田宿遺跡」 『岩富漆谷津・太田宿』 佐倉市教育委員会
- 245 // // 小宮 孟 「小座ふちき遺跡」 『東総用水』 (勸千葉県文化財センター)
- 246 // // 五代吉彦 「房総の古代寺院跡について」 『房総風土記の丘年報』 6
- 247 1984 昭和59年 今泉 潔他 「成東町真行寺廃寺跡研究調査報告」 (勸千葉県文化財センター)

I 序 説

- 248 1984 昭和59年 岡崎文喜他 『磯花遺跡』佐原市発掘調査会 磯花遺跡調査団
- 249 // // 郷堀英司他 『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告書』千葉県教育委員会
- 250 // // 秋山利光他 『高津新山遺跡Ⅲ－昭和58年度確認調査の概要－』
- 251 // // 『小建築の世界』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
- 252 // // 青沼道文他 『千葉市芳賀輪遺跡－第2・7次発掘調査概報』千葉市教育委員会
- 253 // // 三芳村史編纂委員会 『三芳村史』三芳村
- 254 // // 村田六郎太他 『谷津遺跡』千葉市教育委員会
- 255 // // 野村幸希他 『下総・龍正院瓦窯跡群』立正大学考古学研究室
- 256 // // 佐々木和博 『下総国分二寺軒瓦小考』『史館』16
- 257 // // 山路直充 『下総国分寺出土の文字瓦(1)』『昭和54年度市立市川博物館年報』
- 258 1985 昭和60年 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－昭和58年度－』千葉県教育庁文化課
- 259 // // 小沢 洋 『境遺跡』(勸君津郡市文化財センター)
- 260 // // 柿沼修平 『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
- 261 // // 阪田正一・藤岡孝司 『八千代市北海道遺跡』(勸千葉県文化財センター)
- 262 // // 勝又貫行 『林遺跡』多古町林遺跡発掘調査会
- 263 // // 小林清隆 『大畑Ⅰ－2遺跡－県単道路成田安食線埋蔵文化財調査報告書』(勸千葉県文化財センター)
- 264 // // 石田広美 『向台遺跡』『大畑Ⅰ遺跡』『主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(勸千葉県文化財センター)
- 265 // // 新井和之 『大袋台畑遺跡』『松崎白子・大袋台畑・塔之下遺跡発掘調査報告書』成田市松崎・大袋遺跡調査会
- 266 // // 須田 勉 『平安初期における村落内寺院の存在形態』『古代探叢Ⅱ』
- 267 // // 豊巻幸正・小沢 洋他 『永吉台遺跡群』(勸君津郡市文化財センター)
- 268 // // 堀越正行・山路直充 『下総国分尼寺跡Ⅲ』市川市教育委員会
- 269 // // 滝口 宏・谷川章雄他 『成東町真行寺廃寺跡発掘調査報告』成東町教育委員会
- 270 // // 篠原 正 『北大堀遺跡』『北大堀猿楽場遺跡発掘調査報告書』(勸印旛郡市文化財センター)
- 271 // // 『竜角寺古墳群調査の意義』『房総風土記の丘年報』8
- 272 // // 佐々木和博 『下総国分二寺軒瓦の基礎的研究』『論集 日本原史』
- 273 // // 須田 勉 『上総国分僧寺跡調査の意義』『日本歴史』442
- 274 1986 昭和61年 『東郷台遺跡(川原井廃寺)』(勸君津郡市文化財センター)
- 275 // // 相京邦彦・池田大助 『谷津遺跡』『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－大北遺跡・谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群－』(勸千葉県文化財センター)
- 276 // // 大野康男 『栄町植生郡衙跡確認調査報告書』千葉県教育委員会
- 277 // // 堀越正行・山路直充 『下総国分尼寺跡Ⅳ』市川市教育委員会
- 278 // // 桐谷 優・平田貴正 『千葉県東金市作畑遺跡』作畑遺跡調査会
- 279 // // 光江 章 『愛宕前遺跡』『上総鉄塔建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(勸君津郡市文化財センター)
- 280 // // 永沼律朗 『千葉市小食土廃寺跡確認調査報告書』千葉県教育委員会
- 281 // // 三浦和信 『伊篠白幡遺跡B地点』『酒々井町伊篠白幡遺跡』(勸千葉県文化財センター)
- 282 // // 三浦和信 『巢根遺跡』『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書』(勸千葉県文化財センター)
- 283 // // 三浦和信 『土持台遺跡』『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書』(勸千葉県文化財センター)
- 284 // // 渋谷興平・渋谷 貢 『広遺跡』『坂戸遺跡』佐倉市坂戸遺跡調査会
- 285 // // 石田守一・岡村眞文・落合章雄 『根戸城跡』『西原遺跡・根戸城跡』我孫子市教育委員会



- 286 1986 昭和61年 長内美知枝 「油作第2遺跡」『平賀』平賀遺跡群発掘調査会
- 287 // // 武部喜充他 「野出山遺跡」『荒追遺跡群—発掘調査報告書』荒追遺跡群調査会
- 288 // // 福間 元他 「柳台遺跡」『千葉県八日市場市飯塚遺跡群発掘調査報告書』八日市場市教育委員会
- 289 // // 平岡和夫他 「入谷遺跡」『千葉県山武町荒追遺跡群発掘調査報告書』荒追遺跡群調査会
- 290 // // 「六拾部遺跡発掘調査報告書」佐倉市教育委員会
- 291 // // 山路直充 「下総国分寺出土の文字瓦(2)」『昭和60年度市立市川博物館年報』
- 292 // // 森 郁夫 「奈良時代における東国の寺院造営」『考古学雑誌』86—4
- 293 1987 昭和62年 永沼律朗 「佐倉市長熊廃寺跡確認調査報告書」(財)千葉県文化財センター
- 294 // // 田中清美 「千草山遺跡の再検討」『市原市文化財センター研究紀要』I
- 295 // // 「庚塚遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書III(大栄地区2)』(財)千葉県文化財センター
- 296 // // 今泉潔他 「大井東山遺跡・大井大畑遺跡」(財)千葉県文化財センター
- 297 // // 斎木 勝 「瓦当範一例」『考古学雑誌』73—2
- 298 // // 柴田龍司・小高春雄 「八田太田台遺跡」『主要地方道成田松尾線V』(財)千葉県文化財センター
- 299 // // 藤岡孝司 「八千代市井戸向遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告書IV」(財)千葉県文化財センター
- 300 // // 米田耕之助他 「沢遺跡」(財)市原市文化財センター
- 301 // // 林田利之他 「成田市産業廃棄物処理場予定地内埋蔵文化財調査報告書 椎ノ木遺跡」(財)印旛郡市文化財センター
- 302 1986 昭和61年 「千葉県埋蔵文化財分布地図(2)」(財)千葉県文化財センター
- 303 1987 昭和62年 「千葉県埋蔵文化財分布地図(3)」(財)千葉県文化財センター
- 304 1988 昭和63年 「千葉県埋蔵文化財分布地図(4)」(財)千葉県文化財センター
- 305 // // 菊地敏記他 「久能高野遺跡」『久能遺跡群発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター
- 306 // // 栗田則久 「東野遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書IV—佐原地区(1)—』(財)千葉県文化財センター
- 307 // // 原田享二他 「関峯崎横穴群3号横穴」『佐原市内遺跡群発掘調査概報II』佐原市教育委員会
- 308 // // 今泉 潔 「古代寺院跡(宝珠院)確認調査報告」千葉県教育委員会
- 309 // // 勝又貫行 「太良内遺跡—千葉県香取郡多古町太良内遺跡発掘調査報告書—」多古町遺跡調査会
- 310 // // 勝又貫行 「中内原遺跡」多古町教育委員会
- 311 // // 小久貫隆史 「八日市場市平木遺跡」(財)千葉県文化財センター
- 312 // // 道澤 處 「双賀辺田No1遺跡発掘調査報告書」鎌ヶ谷市教育委員会
- 313 // // 木内達彦 「下台遺跡・尾上藤木遺跡A・B地区発掘調査報告書」(財)印旛郡市文化財センター
- 314 // // 有澤 要・斉藤 毅他 「岩戸広台遺跡B地区」『岩戸広台遺跡A地区・B地区発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター
- 315 // // 山路直充 「中島辨智氏旧蔵の瓦(1)」『昭和62年度市立市川博物館年報』
- 316 // // 山路直充・領塚正浩 「市川出土の古瓦1」市立市川考古博物館図録16 市立市川考古博物館
- 317 1989 平成元年 田中清美 「千草山遺跡・東千草山遺跡」(財)市原市文化財センター
- 318 // // 山口直人 「宮台遺跡」(財)山武郡南部地区文化財センター
- 319 // // 中野修秀他 「織幡地区遺跡群発掘調査報告書」小見川町埋蔵文化財調査会
- 320 // // 川根正教 「北谷津第2遺跡」『加地区遺跡群』流山市教育委員会
- 321 // // 斉藤信明 「結城廃寺第1次発掘調査概報」結城市教育委員会
- 322 // // 小林信一 「木更津市上名主ヶ谷窯跡確認調査報告書」千葉県教育委員会
- 323 // // 大原正義 「栄町龍角寺確認調査報告」千葉県教育委員会

I 序 説

- 324 1989 平成元年 上原真人 「東国国分寺の文字瓦再考」『古代文化』41-12
- 325 // // 本吉正宏 「房総における古瓦の様相」『國學院大學考古学資料館紀要』5
- 326 1990 平成2年 // 「千葉県文化財センター年報No15」(勸千葉県文化財センター)
- 327 // // 大木英行・寺内博之 「囲護台遺跡群 成田市計画事業 成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」成田市教育委員会
- 328 // // 喜多圭介 「野毛平植出遺跡」『ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(III)』(勸印旛郡市文化財センター (株)ニュー東京空港カントリー倶楽部)
- 329 // // 栗田則久 「佐原市吉原三王遺跡」(勸千葉県文化財センター)
- 330 // // 原田享二 「多田日向遺跡」『シンポジウム平安前期の村落とその仏教 発表資料』千葉県立房総風土記の丘
- 331 // // 斎藤太郎・鈴木仁子 「海神台西遺跡第1次～第4次調査報告」船橋市教育委員会
- 332 // // 「財団法人山武郡市文化財センター年報No5」(勸山武郡市文化財センター)
- 333 // // 松田政基他 「小原子遺跡群」小原子遺跡群調査会・芝山町教育委員会
- 334 // // 関口達彦他 「千葉東南部ニュータウン17-高沢遺跡-」(勸千葉県文化財センター)
- 335 // // 太田文雄 「伊地山藤之台遺跡 大柴栗源干潟線埋蔵文化財調査報告書」(勸千葉県文化財センター)
- 336 // // 谷 旬 「八日市場市大寺廃寺跡確認調査報告書」千葉県教育委員会
- 337 // // 津田芳男他 「千葉県茂原市桂遺跡群発掘報告書」(勸長生郡市文化財センター)
- 338 // // 木内達彦 「千葉県印旛郡酒々井町長勝寺脇館跡」(勸印旛郡市文化財センター)
- 339 // // 山路直充 「中島辨智氏旧蔵の瓦(2)」『平成元年度市立市川博物館年報』
- 340 // // 山路直充 「下総国分寺跡採集といわれる2点の字瓦」『千葉史学』17
- 341 1991 平成3年 麻生正信他 「多古町南借当遺跡-県単橋梁架挽(借当橋)事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-」(勸千葉県文化財センター)
- 342 // // 「財団法人山武郡市文化財センター年報No6」(勸山武郡市文化財センター)
- 343 // // 「千葉県文化財センター年報No16」(勸千葉県文化財センター)
- 344 // // 山口典子 「佐倉市栗野I・II遺跡」(勸千葉県文化財センター)
- 345 // // 渋谷 貢・荒井世志紀 「仲ノ台遺跡」『大台遺跡群』(勸山武郡市文化財センター)
- 346 // // 石本俊則 「中林遺跡」(勸山武郡市文化財センター)
- 347 // // 大野康男 「八千代市白幡前遺跡」(勸千葉県文化財センター)
- 348 // // 米田幸雄 「天神台遺跡」『天神台・ヤジタ遺跡発掘調査報告書』(勸印旛郡市文化財センター)
- 349 // // 斉藤信明 「結城廃寺第3次発掘調査概報」結城市教育委員会
- 350 // // 山路直充 「中島辨智氏旧蔵の瓦(3)」『平成2年度市立市川博物館年報』
- 351 // // 大脇 潔 「畿内と東国の初期寺院」『東国の初期寺院』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 352 // // 房総歴史考古学研究会 「房総における奈良平安時代の出土文字資料」1
- 353 // // 「平安前期の村落とその仏教」房総風土記の丘年報14
- 354 1992 平成4年 // 「第7回市原市文化財センター遺跡発表会要旨 平成3年度」(勸市原市文化財センター)
- 355 // // 青木 司 「伊地山藤之台遺跡第2地点」『佐原市内遺跡群発掘調査概報VI』佐原市教育委員会
- 356 // // 菊地健一他 「中鹿子第2遺跡」『千葉中央ゴルフ場遺跡群発掘調査報告書』(勸千葉市文化財調査協会)
- 357 // // 寺門義範他 「南河原坂第2遺跡」『土気南遺跡群1』(勸千葉市文化財調査協会)
- 358 // // 寺門義範他 「大椎第2遺跡」『土気南遺跡群1』(勸千葉市文化財調査協会)
- 359 // // 「財団法人山武郡市文化財センター年報No7」(勸山武郡市文化財センター)
- 360 // // 「居寒台遺跡」埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書-平成3年度-」千葉市教育委員会
- 361 // // 「勸印旛郡市文化財センター年報8-平成3年度-」(勸印旛郡市文化財センター)

- 362 1992 平成4年 田中清美 『奉免上原台遺跡』(勸市原市文化財センター)
- 363 // // 山本哲也 『文脇遺跡』(勸君津郡市文化財センター)
- 364 // // 『川島遺跡発掘調査報告書』(勸君津郡市文化財センター)
- 365 // // 谷 旬他 『東金市井戸ヶ谷遺跡』(勸千葉県文化財センター)
- 366 // // 渡辺高弘 『千葉市宇津志野窯跡確認調査報告書』千葉県教育委員会
- 367 1993 平成5年 渡辺修一 『千葉市地藏山遺跡(2)―住宅都市整備公団 千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告2』(勸千葉県文化財センター)
- 368 // // 稲見英輔 「坂志岡・尼ヶ谷遺跡」『平成4年度芝山町内遺跡発掘調査報告書小池麻生遺跡・坂志岡・尼ヶ谷遺跡』芝山町教育委員会
- 369 // // 金丸 誠・森本和男 『佐倉市南広遺跡―佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書X―』(勸千葉県文化財センター)
- 370 // // 原田亨二 『事業報告II―平成2年度・平成3年度―』(勸香取郡市文化財センター)
- 371 // // 宮内勝己他 『高岡遺跡群II～IV』(勸印旛郡市文化財センター)
- 372 // // 寺門義範 「文六第2遺跡」『土気南遺跡群IV』(勸千葉市文化財調査協会)
- 373 // // 小林信一 『千原台ニュータウンV―押沼第1遺跡K地点』(勸千葉県文化財センター)
- 374 // // 田所 真 「孟地遺跡の坏」『市原市文化財センター研究紀要II』(勸市原市文化財センター)
- 375 // // 『平和台遺跡発掘調査概報』流山市教育委員会
- 376 // // 岡本東三 「下総竜角寺の山田寺式軒瓦について」『千葉史学』23
- 377 // // 小出伸夫・西川修一・山路直充 「千葉県印西町木下別所廃寺の鏡瓦」『古代』96
- 378 // // 山路直充 「下総国分寺創建期鏡瓦の制作技法と千葉寺廃寺の事例」『千葉県の歴史』45
- 379 1994 平成6年 平野 功 『織幡妙見堂遺跡II』(勸香取郡市文化財センター)
- 380 // // 『市原市文化財センター年報 昭和63年度』『市原市文化財センター年報 平成元年度』
- 381 // // 山下亮介 「あすみが丘の遺跡群」『平成5年度千葉市遺跡発表会要旨』(勸千葉市文化財調査協会)
- 382 // // 金丸 誠他 『佐倉市六拾部遺跡』(勸千葉県文化財センター)
- 383 // // 「嶋戸東遺跡」『財団法人山武郡市文化財センター年報No.9』(勸山武郡市文化財センター)
- 384 // // 野沢彰哉 「茨城県における古代瓦の研究」茨城県立歴史館
- 385 // // 西口 徹 「大野第7遺跡」『土気緑の森工業団地内発掘調査報告書』(勸千葉県文化財センター)
- 386 // // 西口 徹 「西大野第1遺跡」『土気緑の森工業団地内発掘調査報告書』(勸千葉県文化財センター)
- 387 // // 西口 徹 「大椎第2遺跡」『土気緑の森工業団地内発掘調査報告書』(勸千葉県文化財センター)
- 388 // // 今泉 潔・笹生 衛 「小谷遺跡」『千葉県木更津市大畑台遺跡群遺跡発掘事前総合調査報告書』木更津市教育委員会
- 389 // // 「一之綱II・一之綱III遺跡」『財団法人印旛郡市文化財センター年報10―平成5年度』(勸印旛郡市文化財センター)
- 390 // // 田形孝一 『市原市川焼瓦窯跡発掘調査報告書』千葉県教育委員会
- 391 // // 笹生 衛 『上大城遺跡発掘調査報告書』(勸君津郡市文化財センター)
- 392 // // 山口直人 「郡内出土仏教関係遺構・遺物の基調報告」『記念講演会資料 東上総の古代仏教』(勸山武郡市文化財センター)
- 393 // // 山口直人 『南麦台遺跡』(勸山武郡市文化財センター)
- 394 // // 山路直充他 『下総国分寺跡 平成元年～5年度発掘調査報告書』市川市教育委員会
- 395 // // 『事業報告III』(勸香取郡市文化財センター)
- 396 // // 部 淳一・宮 文子他 「飯仲金堀遺跡」『公津東遺跡群I』(勸印旛郡市文化財センター)
- 397 // // 部 淳一・宮 文子他 「飯田町南向野遺跡」『公津東遺跡群I』(勸印旛郡市文化財センター)

I 序 説

- 398 1994 平成 6 年 小久貫隆史・新田浩三 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VIII取香和田戸遺跡（空港 Na60遺跡）』（勸千葉県文化財センター）
- 399 // // 『本郷台遺跡（第7次調査）』『山武考古学研究所年報No13』山武考古学研究所
- 400 // // 『千葉県文化財センター年報No19』（勸千葉県文化財センター）
- 401 // // 田形孝一 『草刈に寺はあったのか？出土文字資料と地名』『千葉県史研究』2
- 402 // // 半澤幹雄 『栗焼棒遺跡出土の掘立柱建物跡について』『研究連絡誌』42（勸千葉県文化財センター）
- 403 // // 平山誠一他 『砂田中台遺跡』（勸山武郡市文化財センター）
- 404 // // 梁瀬裕一 『生実城跡』『財団法人千葉市文化財調査協会年報』6
- 405 // // 郷堀英司 『鳴神山遺跡群の文字資料』『研究連絡誌』40（勸千葉県文化財センター）
- 406 // // 椎名信也 『滝東台遺跡』『油井古塚原遺跡群』（勸山武郡市文化財センター）
- 407 // // 大野康男 『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書 VII』（勸千葉県文化財センター）
- 408 // // 宮本敬一 『上総国分寺の成立－尼寺の造営過程を中心に』『東海道の国分寺』栃木県教育委員会
- 409 // // 岡本東三 『東国の川原寺式軒瓦の波及年代をめぐって』『千葉史学叢書』
- 410 // // 岡本東三 『紀寺式軒瓦の編年の位置について』『千葉史学』25
- 411 // // 山路直充 『下総国分寺』『東国の国分寺』関東古瓦研究会シンポジウム資料
- 412 // // 高橋康男 『上総国分寺』『東国の国分寺』関東古瓦研究会シンポジウム資料
- 413 1995 平成 7 年 宮 文子 『大袋山王第2遺跡B地区』『公津東遺跡群II』（勸印旛郡市文化財センター）
- 414 // // 『事業報告IV』（勸香取郡市文化財センター）
- 415 // // 『千葉県文化財センター年報No20』（勸千葉県文化財センター）
- 416 // // 小林清隆・石本俊則 『大綱山田台遺跡群II』（勸山武郡市文化財センター）
- 417 // // 椎名信也 『油井古塚原遺跡』『油井古塚原遺跡群』（勸山武郡市文化財センター）
- 418 // // 當眞紀子 『神田遺跡』『神田遺跡・神田古墳群』（勸君津郡市文化財センター）
- 419 // // 萩原恭一他 『下総町新シ山・柳和田台遺跡 青山中峰遺跡 青山宮脇遺跡』（勸千葉県文化財センター）
- 420 // // 加藤正信他 『袖ヶ浦市文協遺跡』（勸千葉県文化財センター）
- 421 // // 『富津市川島遺跡』『千葉県文化財センター年報No20』（勸千葉県文化財センター）
- 422 // // 田中清美 『謎の千草山廃寺跡（予察）』『市原市文化財センター紀要』3
- 423 // // 宮本敬一 『墨書土器から見た国分寺の講師院と読師院』『日本通史』月報22 岩波書店
- 424 // // 高木博彦 『真行寺廃寺跡近傍発見の軒丸瓦』『千葉県立房総風土記の丘年報』18
- 425 // // 田形孝一 『集落から村落へ(1)』『研究連絡誌』第47号（勸千葉県文化財センター）
- 426 // // 稲葉昭智 『南子安全井崎遺跡』（勸君津郡市文化財センター）
- 427 1996 平成 8 年 石坂雅樹 『宮本台遺跡群(4)』『平成7年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』船橋市教育委員会
- 428 // // 糸原 清 『一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告』（勸千葉県文化財センター）
- 429 // // 喜多圭介 『城次郎丸遺跡』（勸印旛郡市文化財センター）
- 430 // // 香取正彦他 『一般国道296号国道改良事業埋蔵文化財調査報告書1』（勸千葉県文化財センター）
- 431 // // 加納 実 『市原市武士遺跡I』（勸千葉県文化財センター）
- 432 // // 『市原市文化財センター年報 平成4年度』（勸市原市文化財センター）
- 433 // // 小高幸男 『郡遺跡郡遺跡』『郡発掘調査報告書II』（勸君津郡市文化財センター）
- 434 // // 松田政基他 『峯崎遺跡』山武考古学研究所
- 435 // // 『上ノ山A・上ノ山B・下根田A・下根田B・御所塚遺跡』（勸君津郡市文化財センター）
- 436 // // 杉山晋作 『駄ノ塚西古墳の調査』『国立歴史民俗博物館研究報告』第65集
- 437 // // 村田六郎太 『鐘つき堂遺跡』『土気南遺跡群VII』（勸千葉市文化財調査協会）

- 438 1996 平成8年 村田六郎太 「南河原坂窯跡群」『土気南遺跡群VII』(勸千葉県市文化財調査協会)
- 439 // // 猪股昭喜・谷 旬 「本埜村角田台遺跡出土の文字資料」『研究連絡誌』46 (勸千葉県文化財センター)
- 440 // // 津田芳男 「針ヶ谷遺跡」『平成7年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会・千葉市教育委員会
- 441 // // 『柏市埋蔵文化財調査報告書』柏市教育委員会・柏市遺跡調査会
- 442 // // 「尾亭遺跡B地区」『(勸山武郡市文化財センター年報No.11)』
- 443 // // 「千葉県文化財センター年報No.21」(勸千葉県文化財センター)
- 444 // // 平野 功 「月輪神社遺跡」(勸香取郡市文化財センター)
- 445 // // 鳴田浩司 「池尻遺跡」『主要地方道多古笹本線埋蔵文化財調査報告2』(勸千葉県文化財センター)
- 446 // // 林田利之 「臼井屋敷跡遺跡」(勸印旛郡文化財センター)
- 447 // // 「事業報告V」(勸香取郡市文化財センター)
- 448 // // 藤岡孝司 「古代東国村落の構造—中核集落と衛星集落」『古代』101
- 449 // // 岡本東三 「東国の古代寺院と瓦」吉川弘文館
- 450 1997 平成9年 渡部 真・青沼道文 「芳賀輪遺跡」『平成8年度 千葉市遺跡発表会要旨』千葉市教育委員会・(勸千葉県市文化財調査協会)
- 451 // // 「市原市文化財センター年報 平成5年度」(勸市原市文化財センター)
- 452 // // 「根切遺跡」我孫子市教育委員会
- 453 // // 山口直人 「山田・宝馬古墳群(1020地点)」(勸山武郡市文化財センター)
- 454 // // 「事業報告VI」(勸香取郡市文化財センター)
- 455 // // 「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)」(勸千葉県文化財センター)
- 456 // // 「東総文化財センター年報」1 (勸東総文化財センター)
- 457 // // 「村神郷の文化人たち—墨書土器—」八千代市歴史民俗資料館
- 458 // // 木川浩司 「鷲山入遺跡」『平成8年度 千葉県遺跡調査研究発表会 発表要旨』
- 459 // // 糸原 清 「上総国の初期寺院」『関東の初期寺院』関東古瓦研究会シンポジウム資料
- 460 // // 辻 史郎 「下総国の初期寺院」『関東の初期寺院』関東古瓦研究会シンポジウム資料
- 461 // // 石戸啓夫・小牧美知枝 「千葉県印旛郡栄町竜角寺五斗葺瓦窯跡」(勸印旛郡文化財センター)
- 〔追加〕
- 462 1985 昭和60年 森本和男 「君津市九十九坊廃寺址調査報告」(勸千葉県文化財センター)
- 463 1994 平成6年 麻生正信 「長柄町横穴群徳増支群発掘調査報告書」(勸千葉県文化財センター)
- 464 1983 昭和58年 阪田正一 「八千代市権現後遺跡」(勸千葉県文化財センター)
- 465 1975 昭和50年 須田 勉・宮本敬一 「上総国分尼寺」『仏教芸術』103
- 466 1980 昭和55年 宮本敬一 「上総国分尼寺跡の調査—寺域北東部における付属雑舎群の調査—」  
『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 467 1981 昭和56年 宮本敬一 「上総国分尼寺跡の調査(1980年度)」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団 市原市教育委員会
- 468 1982 昭和57年 須田 勉 「上総国分僧寺跡—寺域東南部における調査—」『上総国分寺台発掘調査概報X』上総国分寺台発掘調査団 市原市教育委員会
- 469 // // 須田 勉・浅利幸一 「上総国分僧寺跡—寺域北西部における調査—」『上総国分寺台発掘調査概報XI』上総国分寺台発掘調査団・市原市教育委員会
- 470 1976 昭和51年 須田 勉・宮本敬一 「上総国分寺台発掘調査概要II」上総国分寺台遺跡調査団
- 471 1979 昭和54年 須田 勉 「上総国分僧寺北辺部の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
- 472 1980 昭和55年 須田 勉 「上総国分僧寺跡—寺域西辺部の調査—」『上総国分寺台発掘調査概要VII』上総国分寺台遺跡調査団

I 序 説

- 473 1981 昭和56年 須田 勉 「上総国分僧寺—寺域東南部における調査—」『上総国分寺台発掘調査概要VIII』上総国分寺台遺跡調査団
- 474 1973 昭和48年 平野元三郎 「下あらく遺跡」『日本考古学年報』24
- 475 1977 昭和52年 須田 勉 「上総国分寺台発掘調査概要IV 坊作遺跡の調査」上総国分寺台遺跡調査団
- 476 1994 平成6年 田熊信之・天野 茂 『宇野信四郎蒐集 古瓦集成』東京堂出版
- 477 1993 平成5年 笹生 衛・大野康男他 『房総考古学ライブラリー7 歴史時代(1)』(勸千葉県文化財センター)
- 478 1968 昭和43年 住田正一・内藤政恒 『古瓦』学生社
- 479 1985 昭和60年 中井 公 「桶型内巻作り平瓦の事例—千葉縣市原市光善寺廃寺出土の凸面布目平瓦—」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズII
- 480 1987 昭和62年 中井 公 「いわゆる凸面布目平瓦について」『歴史考古学を考える—古代瓦の生産と流通—』帝塚山考古学研究所
- 481 1994 平成6年 鈴木仲秋 『東国地域史文化史序説』暁印書館
- 482 1990 平成2年 「史跡 上総国分尼寺跡」『平成元年度 千葉県遺跡調査研究発表会 要旨』千葉県文化財法人連絡協議会
- 483 1995 平成7年 田所 真 「上総の「造寺司」—坊作遺跡出土の墨書土器を中心に—」『市原市文化財センター研究紀要III』
- 484 1987 昭和62年 田所 真 「市原市坊作遺跡(旧市原郡)」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会
- 485 1978 昭和53年 須田 勉 「房総の古瓦に関する覚書(1)」『古代』64
- 486 1976 昭和57年 須田 勉 「上総国府の諸問題(一)—特にその所在地をめぐって—」『古代』61
- 487 1997 平成9年 小出伸夫 「二日市場遺跡」『平成8年度 市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 489 1989 平成元年 今泉 潔・山口典子 「市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書」(勸千葉県文化財センター)
- 490 1990 平成2年 『(勸千葉市文化財調査協会 年報2—昭和62・63年度—)』(勸千葉市文化財調査協会)
- 491 1983 昭和58年 沼澤 豊他 『成東町真行寺廃寺跡研究調査概報』(勸千葉県文化財センター)
- 492 1995 平成7年 山路直充他 『下総国分寺 いま見つめなおす下総の天平文化』市立市川考古博物館図録17
- 493 1983 昭和58年 堀越正行他 『下総国分尼寺跡I』市立市川考古博物館
- 494 1984 昭和59年 堀越正行他 『下総国分尼寺跡II』市立市川考古博物館
- 495 1995 平成7年 松本太郎他 『平成5年度 市川市内遺跡発掘調査報告書』市川市教育委員会
- 496 // // 松本太郎 『下総国分遺跡 第42地点(その2)』市川市教育委員会
- 497 1994 平成6年 熊野正也編 『東京低地の古代—考古学からみた旧葛飾郡とその周辺』崙書房
- 498 1997 平成9年 熊野正也編 『古代末期の葛飾郡』崙書房
- 499 1990 平成2年 今泉 潔 「瓦と建物の相剋」試論—大塚前出土瓦の分析—『千葉具文化財センター研究紀要』12
- 500 // // 永沼律朗 「上総における瓦生産の一例」『千葉県文化財センター研究紀要』12
- 501 1968 昭和63年 三舟隆之 「下総結城廃寺の成立」『北下総地方史2』
- 502 1987 昭和62年 山路直充 「市川市出土の軒先瓦について」『古代』83
- 503 1985 昭和60年 多宇邦雄 「下総龍角寺文字瓦考」『古代探叢』II
- 504 1978 昭和53年 石井則孝 「竜角寺の選地について」『千葉県房総風土記の丘年報』2
- 505 1989 平成2年 関口達彦 「千葉市中原窯跡確認調査報告書」千葉県教育委員会
- 506 1997 平成9年 林田利之 『新橋高松遺跡』(勸印旛郡市文化財センター)
- 507 1982 昭和57年 『日秀遺跡遺構確認調査・別当地遺跡発掘調査』我孫子市教育委員会
- 508 1984 昭和59年 安藤鴻基 「上総大寺考」『研究員紀要 第3集』千葉県立上総博物館

- 509 1934 昭和9年 小熊吉蔵 「君津郡中郷村大寺廃寺址考」『房総郷土研究』1-10
- 510 1996 平成8年 甲斐博幸他 「常代遺跡群」(勸君津郡市文化財センター)
- 511 1981 昭和56年 田川 良他 「千葉市土気・日向遺跡発掘調査報告書」千葉市遺跡調査会
- 512 1978 昭和53年 三森俊彦他 「木更津市菅生第2遺跡」菅生遺跡調査会
- 513 1974 昭和49年 中村 進 「江戸川右岸河川敷出土遺物雑考」
- 514 1994 平成6年 「埼玉県埋蔵文化財調査年報 平成4年度」埼玉県教育委員会
- 515 1982 昭和57年 越川敏夫他 「龍角寺ニュータウン遺跡群」龍角寺ニュータウン遺跡調査会
- 516 1993 平成5年 永沼律朗 「主要地方道成田安食線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書II」(勸千葉県文化財センター)
- 517 1995 平成7年 今泉 潔 「瓦と建物、そのイメージと原風景に関する覚書」『千葉県史研究』3
- 518 1982 昭和57年 須田 勉 「千葉県古代寺院跡発掘の現状」『歴史手帖』10-10
- 519 1994 平成6年 富永樹之 「「村落内寺院」の展開(上)」『神奈川考古』30
- 520 1995 平成7年 富永樹之 「「村落内寺院」の展開(中)」『神奈川考古』31
- 521 1996 平成8年 富永樹之 「「村落内寺院」の展開(下)」『神奈川考古』32
- 522 " " 阪田正一 「古代房総の民衆と仏教文化」『坂詰秀一先生還暦記念 考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
- 523 1994 平成6年 笹生 衛 「古代仏教信仰の一側面」『古代文化』46-12
- 524 1993 平成5年 笹生 衛 「村落内寺院」における堂宇建物と仏教信仰『野中徹先生還暦記念論集』野中徹先生還暦記念祝賀会
- 525 1994 平成6年 須田 勉 「国分寺造営期にみる中央と在地」『古代』97
- 526 1989 平成元年 三舟隆之 「国分寺造営と地方豪族」『駿台史学』75
- 527 1995 平成7年 須田 勉 「国分寺造営勅の評価」『古代探叢』IV
- 528 " " 須田 勉 「関東の国分寺-改作された国分寺-」『シンポジウム古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所
- 529 1987 昭和62年 上原真人 「官窯の条件」『北陸の古代寺院』北陸古瓦研究会
- 530 1982 昭和57年 坂詰秀一 「東国古代廃寺跡発掘の視角」『歴史手帖』10-10
- 531 " " 林 宏一 「古代東国の小金銅仏」『歴史手帖』10-10
- 532 1994 平成6年 原田憲二郎 「古代の石造相輪についての一考察」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 533 " " 菱田哲郎 「瓦当文様の創出と七世紀の仏教政策」『ヤマト王権と交流の諸相 古代王権と交流5』名著出版
- 534 1976 昭和51年 中山吉秀 「離れ国分考」『古代』61
- 535 1993 平成5年 廣岡孝信 「古代における複線鋸歯文を表現する瓦の検討」『関西大学文学部考古学研究室開設四拾周年記念考古学論集』
- 536 1978 昭和53年 五代吉彦 「重圏文鏡瓦考」『房総風土記の丘年報』2
- 537 1981 昭和56年 稲垣晋也 「新羅の古瓦と飛鳥・白鳳時代古瓦の新羅的要素」『新羅と日本古代文化』
- 538 1982 昭和57年 長坂一雄 「日本の木造塔跡」雄山閣
- 539 1984 昭和59年 坂詰秀一 「関東」『新版仏教考古学講座』第二巻
- 540 1986 昭和61年 上原真人 「仏教」『岩波講座 日本考古学』4 岩波出版
- 541 1996 平成8年 宮田安志 「仏具出土集落の出現とその背景」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行会
- 542 1997 平成9年 糸原 清 「房総の古代寺院と交通路」『人間・遺跡・遺物』3





## II 主要遺跡概要

### 1 上総国分寺

市原市惣社字太子堂812他

東京湾に面した市原台地のほぼ中央に位置している。僧寺と尼寺の創建期瓦を焼成した神門瓦窯跡群が約100m離れた台地南西斜面に、僧寺の補修瓦を焼成した南田瓦窯跡群が寺院地にほぼ接した台地南側斜面に位置している。昭和41年から43年にかけて早稲田大学考古学研究室を中心とした発掘調査で金堂、塔、回廊、中門、講堂の位置と規模が明らかにされた。その後、昭和50年以降、伽藍周辺の発掘調査が実施され、南北約490m、東西約325mの寺域とともに、寺院地内の付属施設の解明が進められた。

僧寺と尼寺の遺構は、方位が北で東へ7度振れるA期のものと、西へ3～4度振れるものと真北に近いB期に大きく分けられている。A期は最初に造営された仮設的性格が強い時期で、寺域区画溝と僧坊と推定される掘立柱建物跡2棟と講堂基壇等が発見されている。一方B期は板塀に区画された伽藍地が設定され、基壇上に建つ瓦葺き建物の仏堂が造営され、寺院地内に政所院や修理院、蘭院などの付属施設が整備される。なお、寺院地の東側に接した荒久遺跡からも多くの仏具や僧寺の機構を示す墨書土器が出土しており、国分寺の機能を支える重要な集落跡と考えられている。

出土軒瓦は軒丸瓦5種と軒平瓦11種がある。主体的な創建期の組合せは僧尼寺同範の単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦(1)と均整唐草文軒平瓦(8)で、それぞれ平城宮6225型式と6691型式の流れを汲むものである。「講院」「東院」「中院」「四院」「綱所」「経所」「油菜所」「備所」「厨」「西館」「門」「客」「井」「大屋」「丁」など組織や施設に関わる墨書土器が多く出土している。このほか、「潤津寺カ田」の存在から僧寺の寺田の一部が潤津郷に存在したことが明らかになっている。

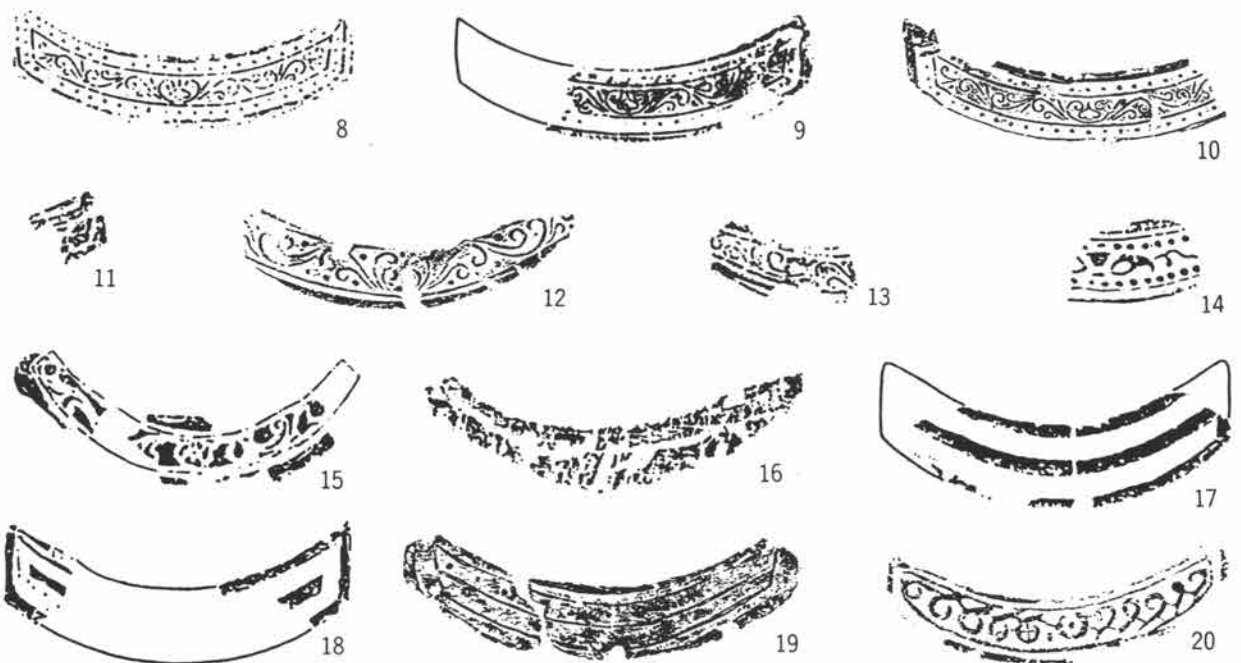
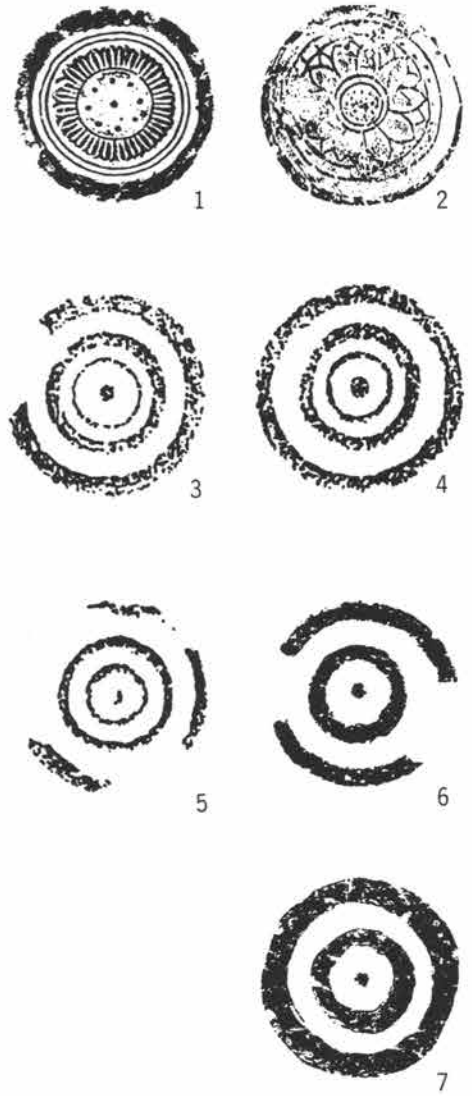
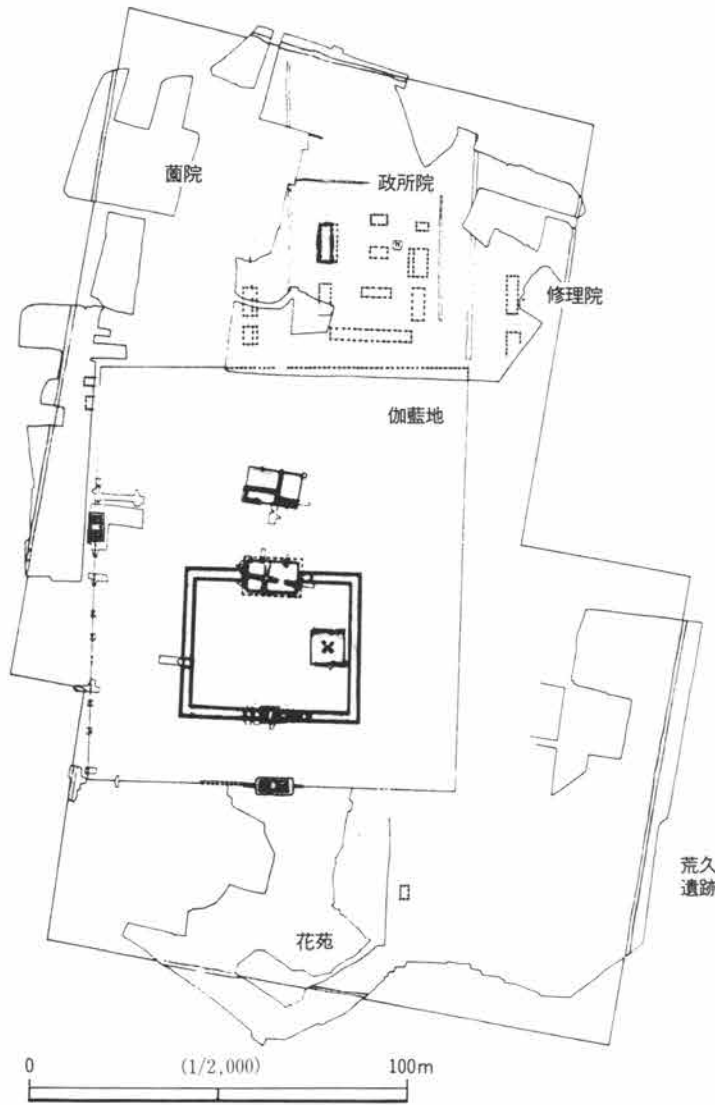
### 2 上総国分尼寺跡

市原市根田字祇園原

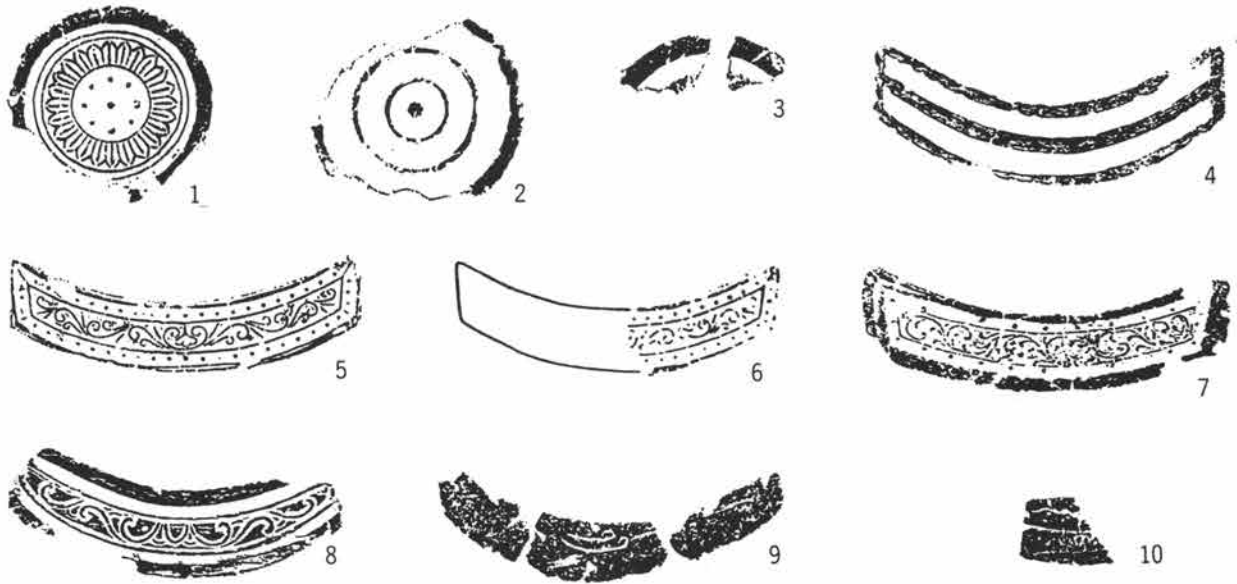
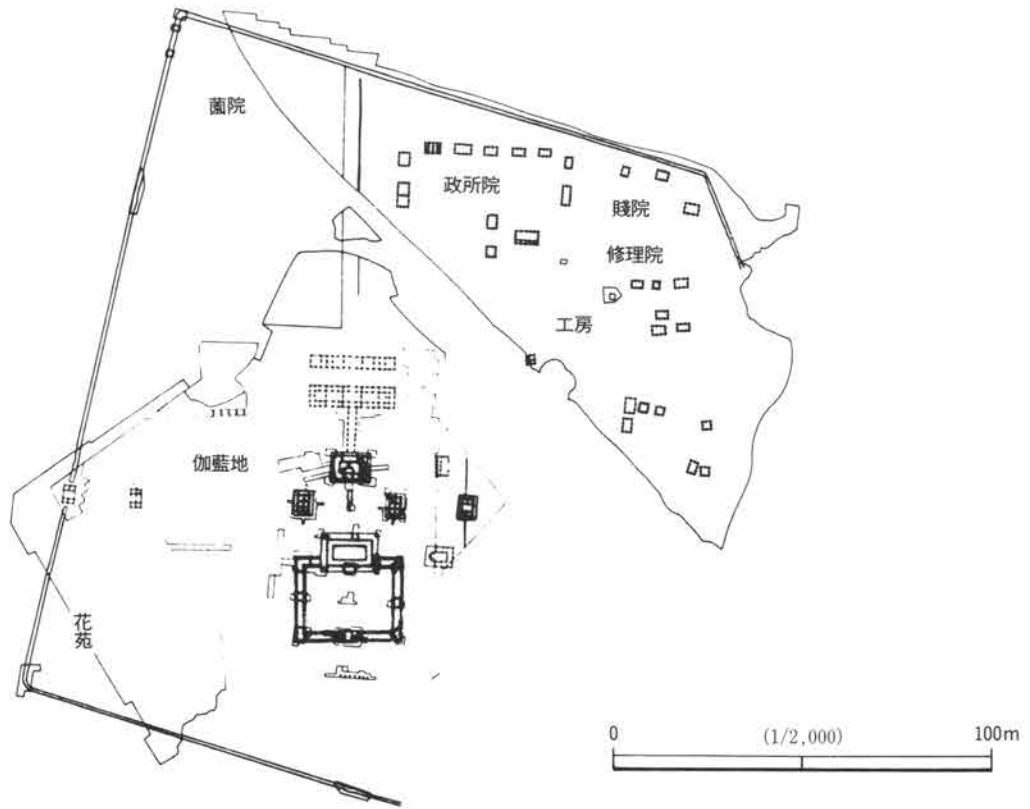
僧寺から谷津を隔てて約700m離れた台地上に位置している。約100m離れた台地南西斜面に尼寺の補修瓦を焼成した祇園原瓦窯跡が位置している。昭和23年と43年に早稲田大学によって金堂を中心とした発掘調査が実施され、その後昭和48年から59年にかけて上総国分寺台遺跡発掘調査団により大規模な発掘調査が実施され、寺域や尼坊などの解明が進められた。国史跡に指定後、(財)市原市文化財センターにより昭和63年から平成元年に主要伽藍の発掘調査が実施され、その成果に基づいて現在、中門・回廊などの復原整備がなされている。

僧寺同様に尼寺も大きくA期とB期の変遷が認められる。A期の遺構としては、寺域区画溝と講堂・尼坊と推定される掘立柱建物跡などが発見されている。南北371m、東西285m～350mで面積123万㎡の規模が明らかになっている。B期の主要伽藍では方位の微妙な変化が確認され、金堂→中門・回廊→講堂・尼坊→鐘楼・経楼→東門→金堂東方仏堂の順で造営されたことが明らかになっている。また、伽藍周辺の寺院地内からは政所院、賤院、修理院等の付属施設が発見されている。尼寺跡からは軒丸瓦3種、軒平瓦6種の軒瓦が出土している。創建時の主体的な軒瓦は僧寺跡と同一で、同範の単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦(1)と均整唐草文軒平瓦(5)の組合せである。

II 主要遺跡概要



第2図 上総国分寺B期遺構配置図・出土瓦 (1/6)



第3図 上総国分尼寺跡B期遺構配置図・出土瓦 (1/6)

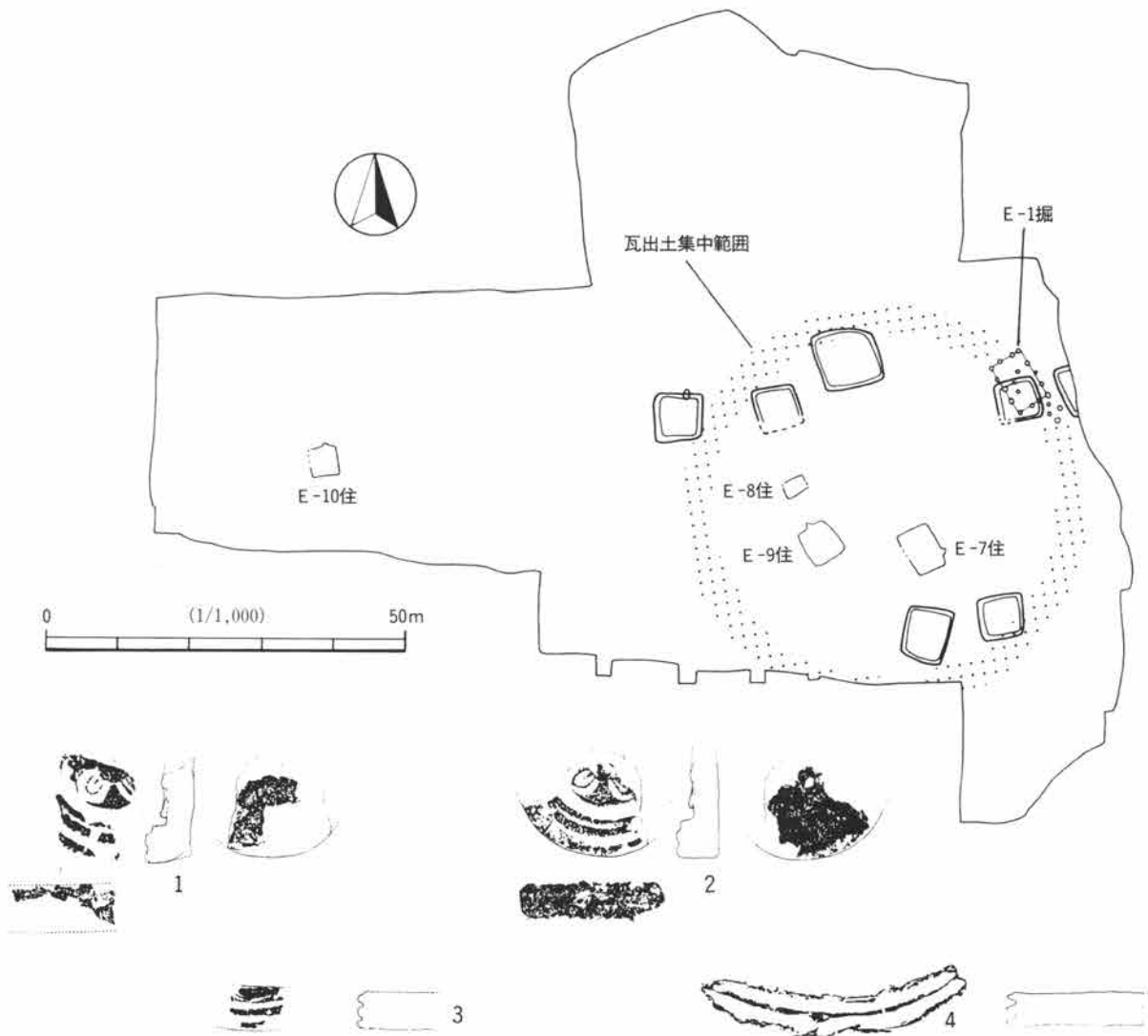
## II 主要遺跡概要

### 4 奉免上原台遺跡

市原市奉免字上原台

養老川の中流域右岸の標高約80mの台地上に位置している。低地との比高差は約40mを測る。縄文時代と古墳時代中期から平安時代までの集落跡、古墳時代終末期から8世紀末葉の古墳・方形周溝状遺構55基と火葬墓10基が発見された。瓦が出土したE地区は調査区東端で、方形周溝状遺構7基、3間×4間の掘立柱建物跡1棟、8世紀第1四半期ころの竪穴住居跡3軒、9世紀中葉前後の竪穴住居跡1軒などが発見された。瓦の年代は竪穴住居跡内の瓦出土状況から8世紀初頭を遡る時期とされている。また、今泉潔氏はE-1号掘立柱建物跡を葺棟葺き建物に想定され、墳墓群と関わる仏教関連施設と位置付けている。

軒丸瓦は三重圏文縁単弁四葉蓮華文軒丸瓦2種がある。単弁は凸線で表現され、その弁端が尖るもの(2)と、丸味を帯びるもの(1)がある。中房蓮子は磨滅しているため不明である。軒平瓦は三重弧文で瓦当面の先端が尖ったもの(4)と、丸味を帯びたもの(3)がある。丸瓦は無段式と有段式の2種がある。平瓦も凸面布目平瓦と凸面の斜格子叩きをヨコ方向にナデ消した平瓦の2種がある。



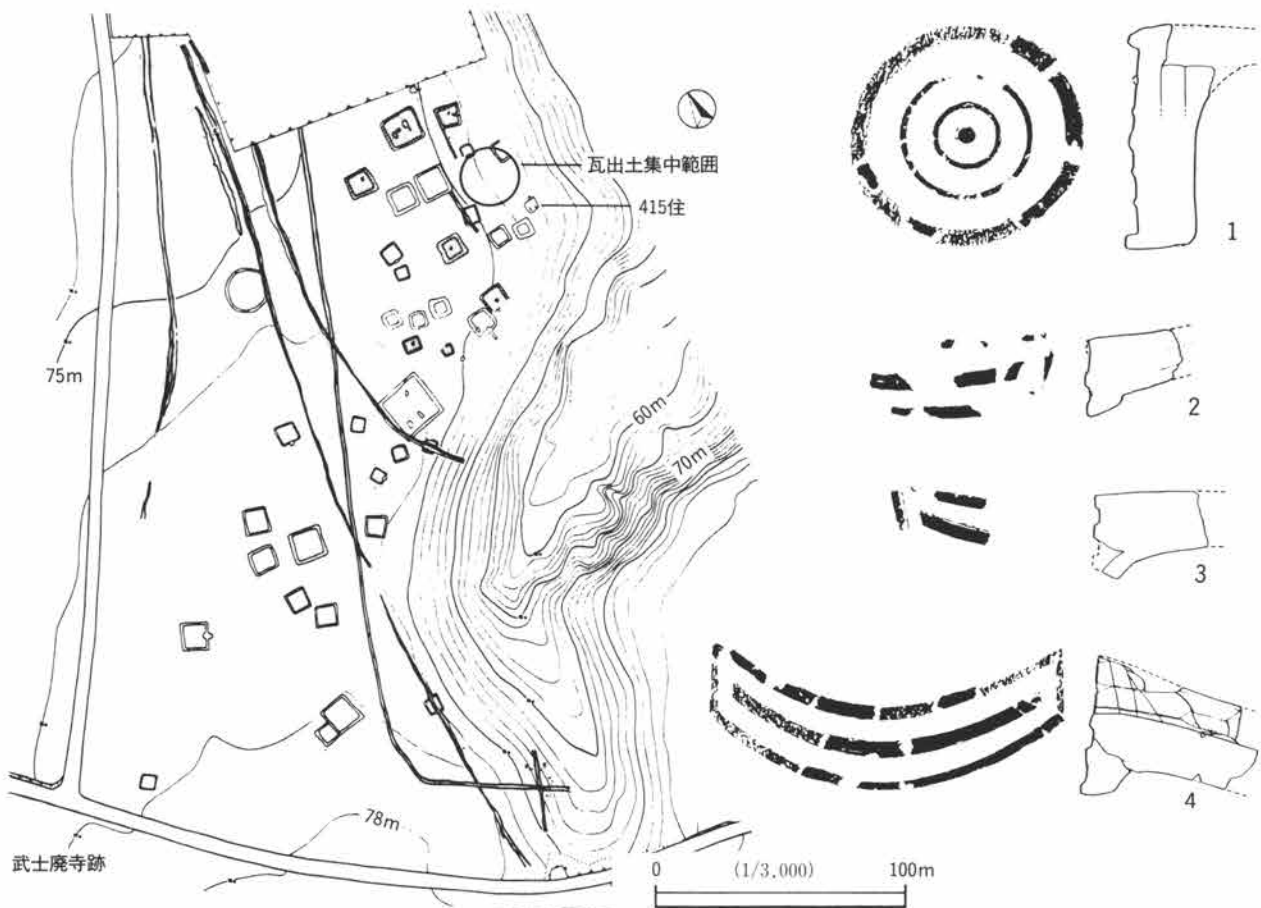
第4図 奉免上原台遺跡E地区遺構配置図・出土瓦 (1/6)

7 武士遺跡

市原市福増字向田・勝問字土器石

養老川中流の右岸で、東から村田川支流の神崎川の谷津が深く入り込んだ標高約75mの台地上に位置している。人見塚古墳・鍋塚古墳などの武士古墳群や、武士廃寺跡、元慶8年(884)に昇叙記事がある「建市神」に比定される建市神社の旧地が南に接している。武士遺跡からは7世紀後半から9世紀前半の円墳1基、方形墳墓38基、単独地下式主体部4基、単独石櫃主体部3基が発見された。墳墓群に接して国分寺系瓦などの出土集中地点があり、瓦葺き建物跡の存在が想定されている。また、その地点に接してカマド材に瓦を転用した415号竪穴住居跡も1軒発見された。この付近は7世紀後半の古い墳墓と8世紀後半の石櫃を主体部とする墳墓群(図中の網掛けの墳墓)が集中している。そして、9世紀前半の地下式坑を主体部とする新しい墳墓がより南に広がる傾向がある。瓦と石櫃墳墓群の年代観がほぼ一致する点から、瓦葺き建物は墳墓と関連性をもった仏堂の可能性が高い。

武士遺跡の南東に接して、武士廃寺跡の瓦散布地がある。一部発掘調査されているが詳細不明で、瓦窯跡の可能性も指摘されている。武士遺跡出土瓦は、この武士廃寺跡付近のものも含まれている。これまで両遺跡から出土した軒丸瓦は三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦、鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦、鋸齒文縁複々弁四葉蓮華文軒丸瓦、有心四重圏文軒丸瓦、有心三重圏文軒丸瓦(1)の計5種である。軒平瓦は三重弧文、唐草文、重郭文3種(2~4)の計5種がある。丸瓦は無段式のみで、平瓦は桶巻作りの縄叩きと、凸面布目平瓦、凸型台一枚作りの縄叩きと斜格子叩きがある。このほかに武士遺跡からは甍も出土している。

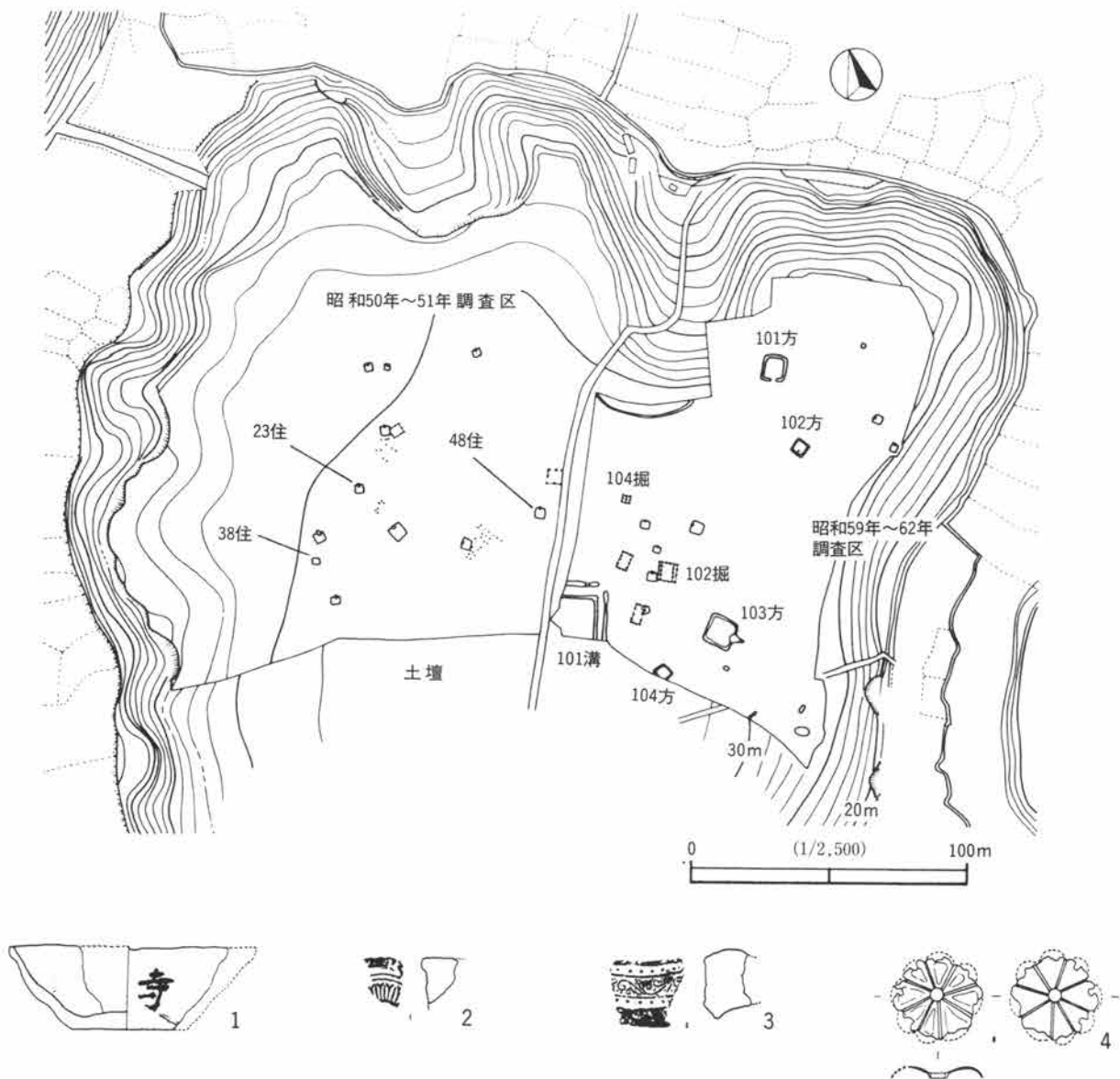


第5図 武士遺跡遺構配置図・出土瓦(1/3)

8 千草山遺跡

市原市能満字西千草山1450他

北と東西に小さい谷が入る標高約32mの台地上に位置している。昭和38年に確認調査が行われ、南北約7m、東西約10m、高さ約90cmの土壇と、凝灰質砂岩の径約30cmの礎石3点、鉄釘9本と多くの丸瓦・平瓦が発見された。その後、昭和50年から51年に土壇北西の隣接地が発掘調査され、奈良・平安時代の竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡などが発見された。48号竪穴住居跡から墨書土器「寺」(1)が、表採で単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦(2)と均整唐草文軒平瓦(3)が発見された。さらに昭和59年から62年にかけて台地北東部も発掘調査され、奈良・平安時代の竪穴住居跡10軒と掘立柱建物跡4棟などが発見された。この調査区の南西隅で直行する二重の溝が検出され、土壇との位置関係から寺院の区画溝の可能性が指摘されている。溝の底からは10世紀前後の土器が出土し、北方の建物跡などは9世紀前半から10世紀初頭にかけて増加すると指摘されている。このほか、8世紀～9世紀の方形墳墓4基と地下式坑2基なども発見された。

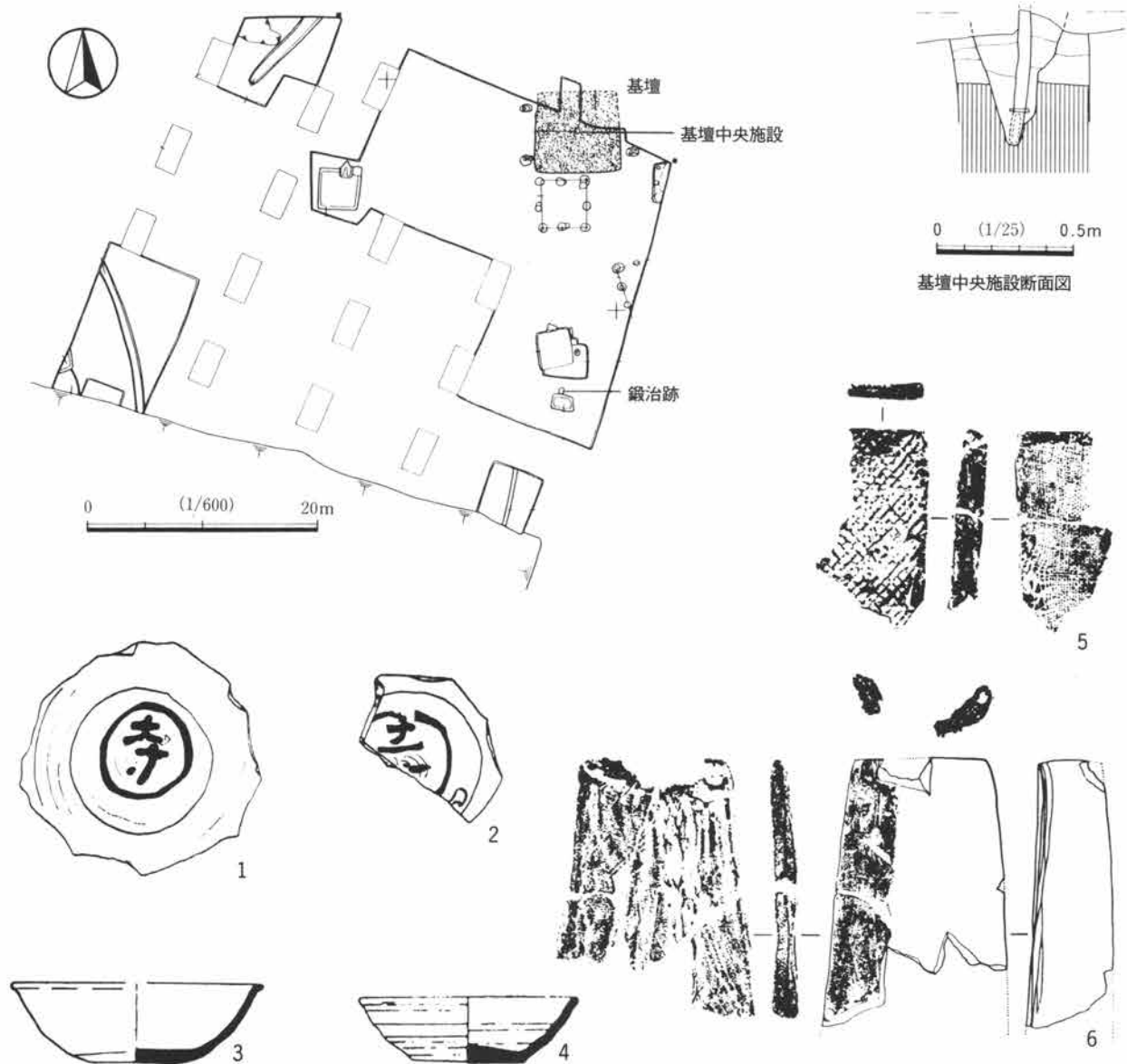


第6図 千草山遺跡遺構配置図・出土遺物 (1・ $\frac{1}{4}$ 、2～3・ $\frac{1}{6}$ 、4・ $\frac{1}{2}$ )

9 南大広遺跡

市原市能満字東四辻、山木字南大広

村田川に注ぐ支谷に面した台地上に位置している。昭和42年の発掘調査で、竪穴住居跡2軒と製鉄遺構1基とともに墨書土器「寺」(1、2)が発見された。また、平成4年の発掘調査では、奈良・平安時代の竪穴住居跡5軒、溝2条、掘立柱建物跡2棟、方形基壇1基、小鍛冶跡1基などが発見された。方形基壇の掘込み地業は北側が調査区外へ伸びており全体は不明であるが、南北8m以上、東西7.4mの規模が確認された。さらに基壇の中央から蕨手太刀を埋納した穴が、南西・南東の両隅からは刀子を埋納した穴が発見された。太刀と刀子はいずれも切先を上方に向けて発見された。こうした遺構は萩ノ原遺跡の基壇からも発見されており、鎮壇遺構と捉えられている。出土瓦は、昭和42年の調査で凸型台一枚造りの斜格子叩きの平瓦(5)と丸瓦(6)が報告されている。ただし、平成4年の調査では出土瓦は少なく、磨滅した小片が多い点から、瓦葺の建物跡が存在した可能性は低いとされている。



第7図 南大広遺跡B地区遺構配置図・出土遺物(1~4・1/4、5~6・1/6)

## 17 二日市場廃寺跡

市原市二日市場機織面572-1他

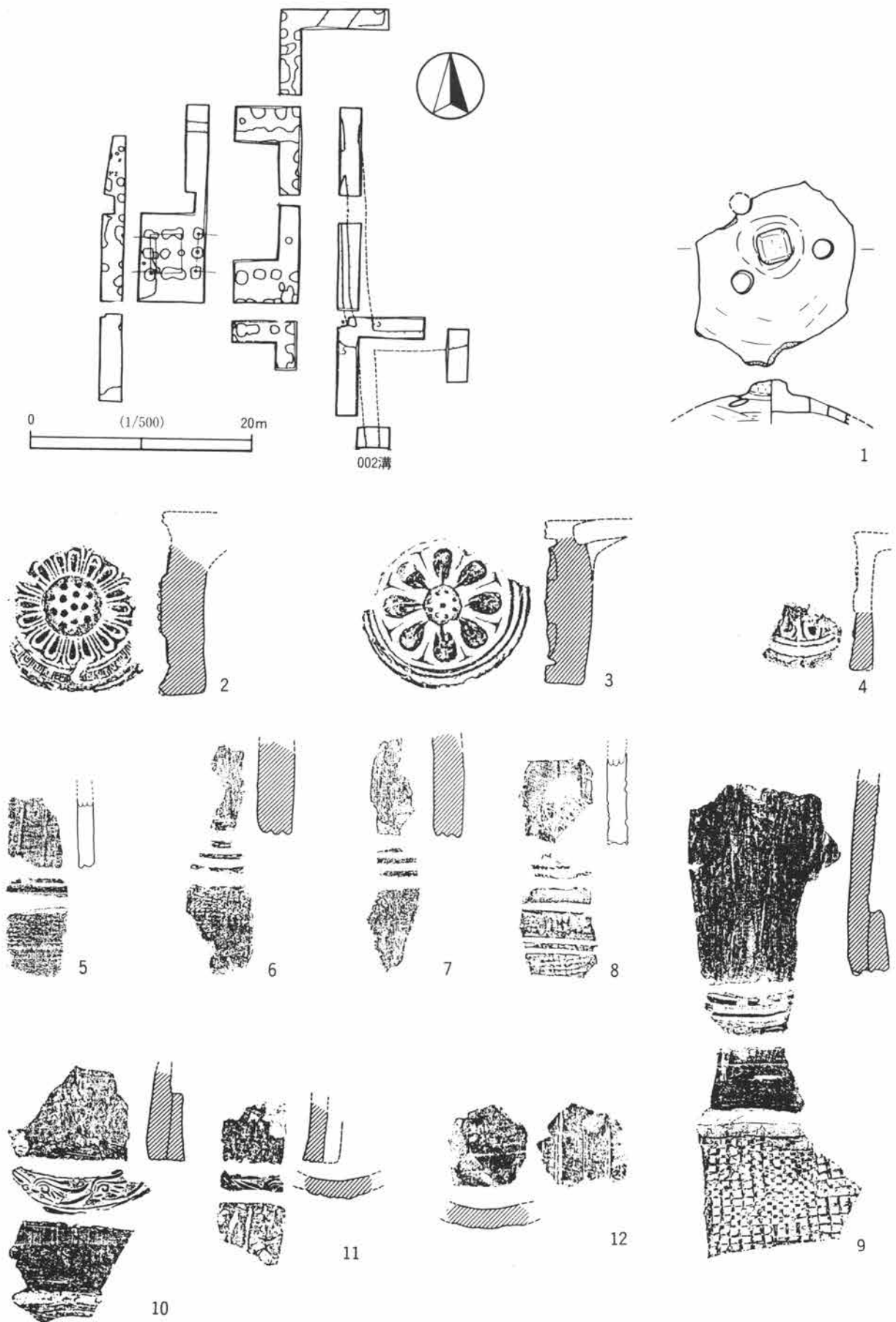
養老川右岸の標高約15mの微高地上に位置している。古代の養老川は現在よりも東側に大きく蛇行し、廃寺跡は島状を呈した微高地の左岸に位置していたと想定されている。

昭和58年と平成8年に発掘調査が実施されたが、想定される伽藍中心部分は未発掘である。瓦散布範囲の東側と西側の端から南北方向の溝が確認された。また、東側の002溝の西側で総柱建物跡を含む掘立柱建物跡が3棟以上発見され、想定中心伽藍の西側からも掘立柱建物跡の一部が発見された。これらは寺域の区画溝と寺院付属施設の可能性がある。このほか、古墳時代後期の土器や方墳の周溝、そして朱が付着した瓦、香炉蓋(1)、小鍛冶遺物、10世紀後半の土器一括資料等が発見された。出土した軒丸瓦は雷文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦(2)、三重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦(3)、素文縁単弁十二葉蓮華文軒丸瓦(4)の3種がある。複弁軒丸瓦の中房には1+5+9の蓮子が配され、瓦当裏面下半に突帯が付加された特異な資料もある。単弁八葉蓮華文軒丸瓦への丸瓦の接続はいわゆる印籠つぎで、丸瓦の端面と端部付近の凹凸面に刻みを入れるものが多い。4は傾斜縁で内区と外区の間には圈線が一本めぐる。軒平瓦は二重弧文1種(5)、三重弧文4種(6~9)、唐草文2種(10、11)がある。8は無顎で、顎面に1条+2条の沈線が施文され、瓦当面際の凹面にヘラによる無造作な刻みが認められる。唐草文は段顎で、顎の接合面に刻みを入れるものがある。丸瓦は無段式と有段式があり、後者は一体の粘土で成形するものと、玉縁部を別に作り接合するものがあり、その接合面に刻みを入れるものもある。平瓦は桶巻作りの格子叩き、凸型台一枚作りの格子叩きと縄叩きがある。少数ながら凸面布目平瓦(12)や面戸瓦等の道具瓦も出土している。なお、3は武士遺跡出土瓦と同範であり、10は武士遺跡と東郷台遺跡出土瓦と同文である。



第8図 二日市場廃寺跡遺構配置図





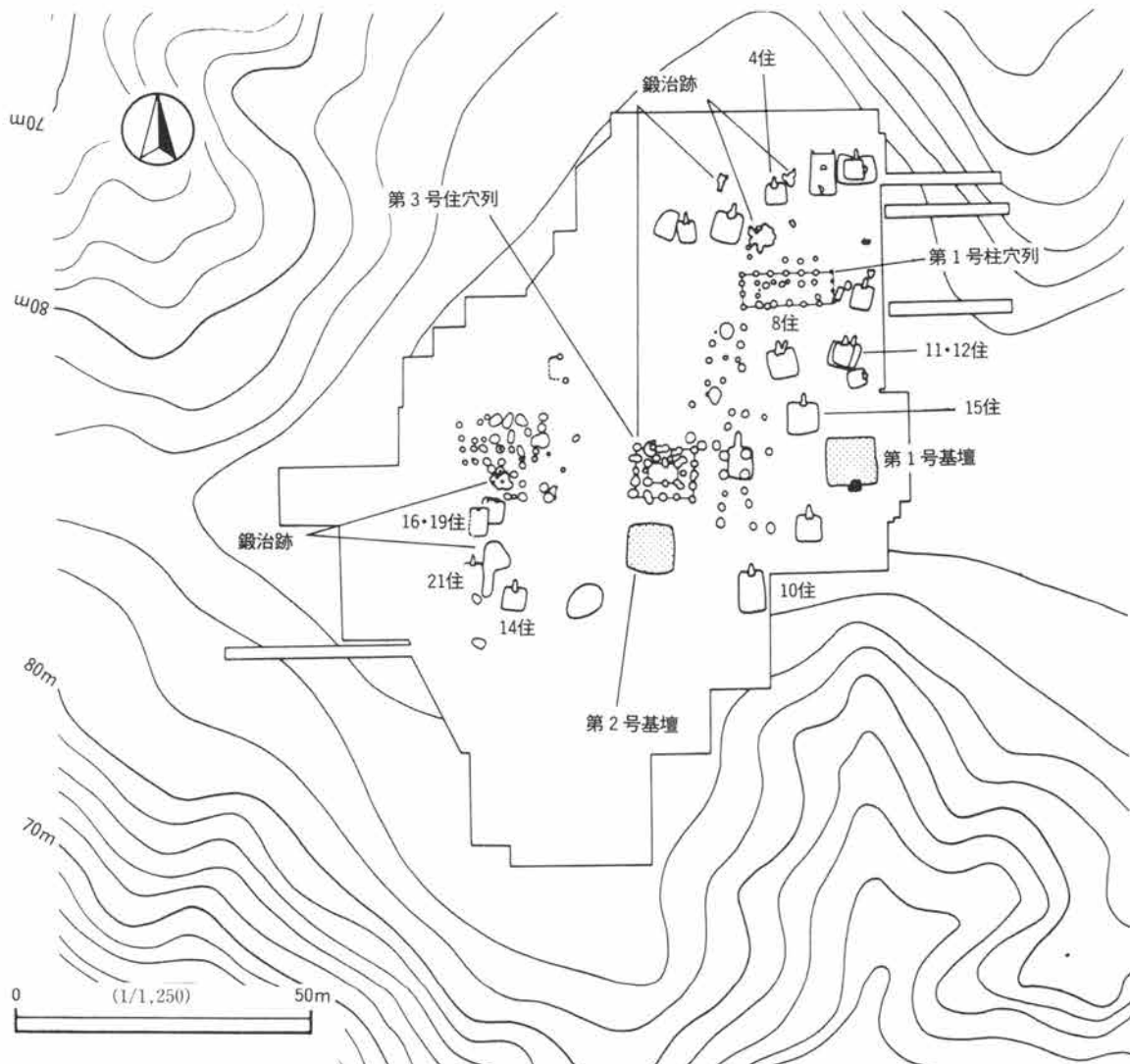
第9図 二日市場廃寺跡B地区遺構配置図・出土遺物 (1・ $\frac{1}{4}$ 、2~12・ $\frac{1}{6}$ )

20 萩ノ原遺跡

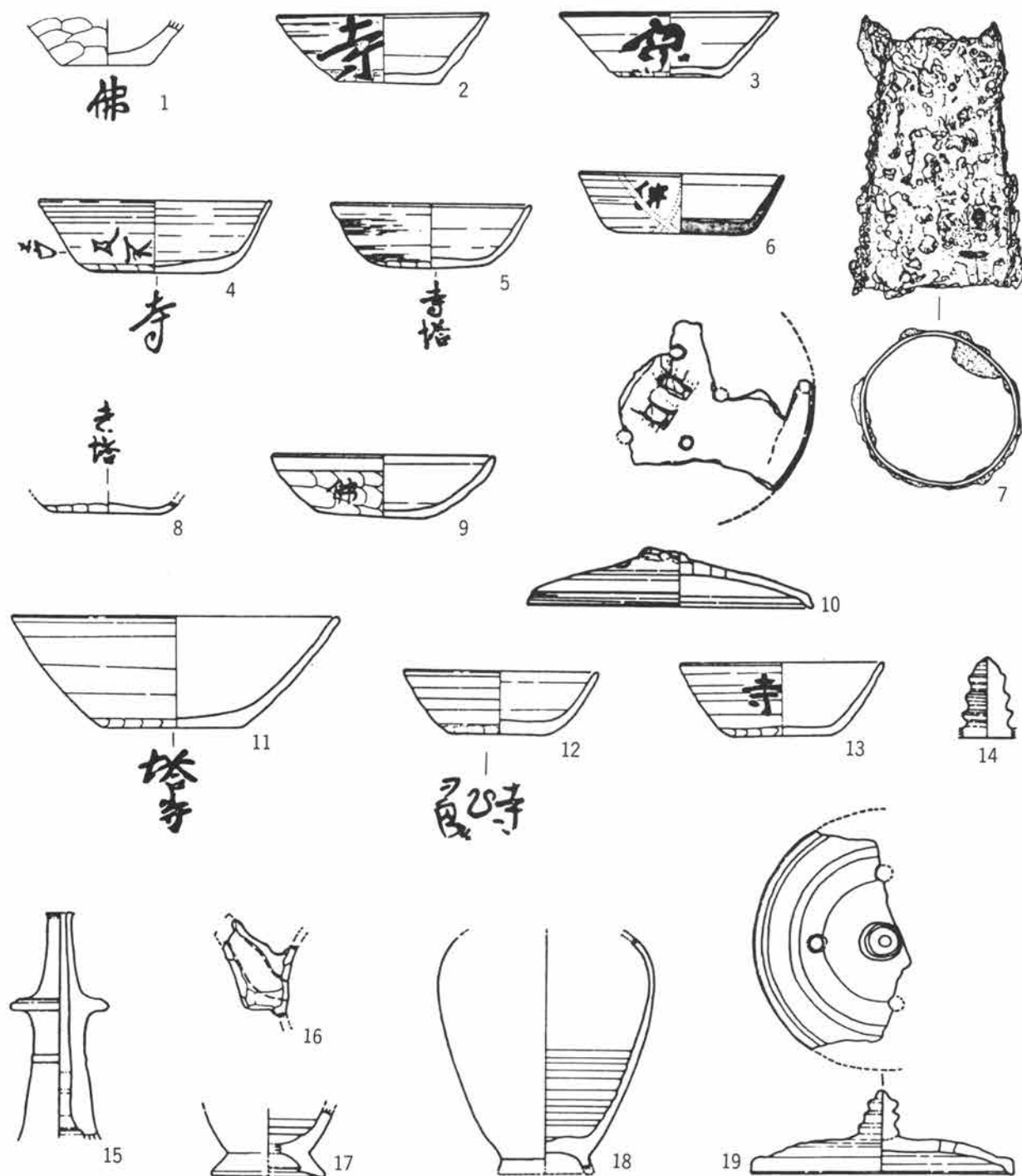
市原市上高根字萩の原

小櫃川支流の松川上流左岸の台地上に位置している。発掘調査により基壇建物跡2基、掘立柱建物跡4棟以上、竪穴住居跡22軒、鍛冶遺構5基以上などが発見された。第1号基壇は一边約8mの方形で旧表土上から地業され、南側に5段の土段状の階段が取り付け、礎石2個が残っていた。なお、中央の心礎孔から鎮壇具として坏2点と角釘10数本が出土し、その周辺から墨書土器「佛」(1)「土」などが出土した。第2号基壇も一边約8mで、旧表土上に地業されている。やはり中央の心礎孔から鎮壇具として鉄刀が切先を上方に向けて発見された。このほか、鉄製の小型風鐸(7)と風招や大量の鉄釘が発見された。この第2号基壇の北から二間四面の建物跡に復原される第3号柱穴列が、第1号基壇の北約25m離れて、桁行六間ほどの建物跡に復原される第1号柱穴列などが発見された。また、第2号基壇の南約40m離れた地点から一边2mの方形の範囲から高さ35cm~40cmほどの地業が確認された。これはこの付近から遺跡西北部にかけて発見された瓦塔の基壇と捉えられている。

これら基壇建物跡や掘立柱建物跡を囲むように発見された竪穴住居跡から多くの仏教関連遺物が出土した。第4号住居跡(2、3)から墨書土器「寺」「原」が、第8号住居跡(4、5)から墨書土器「寺/寺/及不」「寺塔」「寺」が、第10号住居跡から墨書土器「佛」(6)が、第11・12住居跡から墨書土器「寺塔」(8)が、



第10図 萩ノ原遺跡遺構配置図



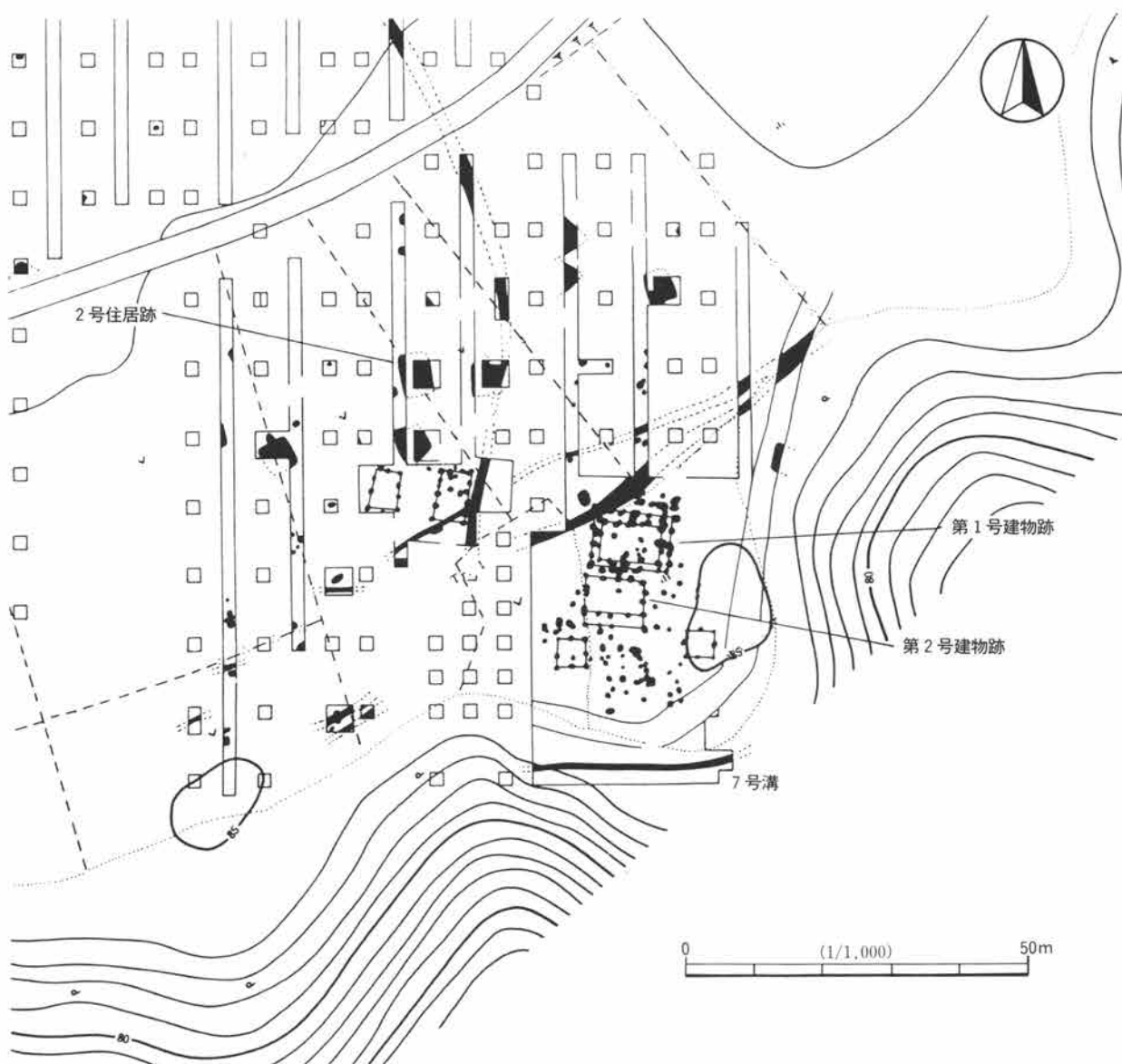
第11図 萩ノ原遺跡出土遺物 (1/4)

第14号住居跡(10)から墨書土器「寺」と香炉蓋が、第15号住居跡から墨書土器「佛」(9)が、第16・19住居跡(11、12)から墨書土器「塔寺」「口寺」「寺塔」「寺」が、第18号住居跡から墨書土器「寺」が、第21号住居跡(13、14)から墨書土器「寺」と香炉蓋の宝珠部分が出土した。このほか、調査区域内から灰釉の浄瓶など(15~18)や、第4号柱穴列付近からは青銅製匙なども発見された。瓦は住居跡で二次的に利用したものほかに、遺跡全体から散漫に丸平瓦のみ少量出土した。丸瓦は無段式のみで、平瓦は縄叩きの凸型台一枚作りと、格子叩きの桶巻作りの平瓦がある。

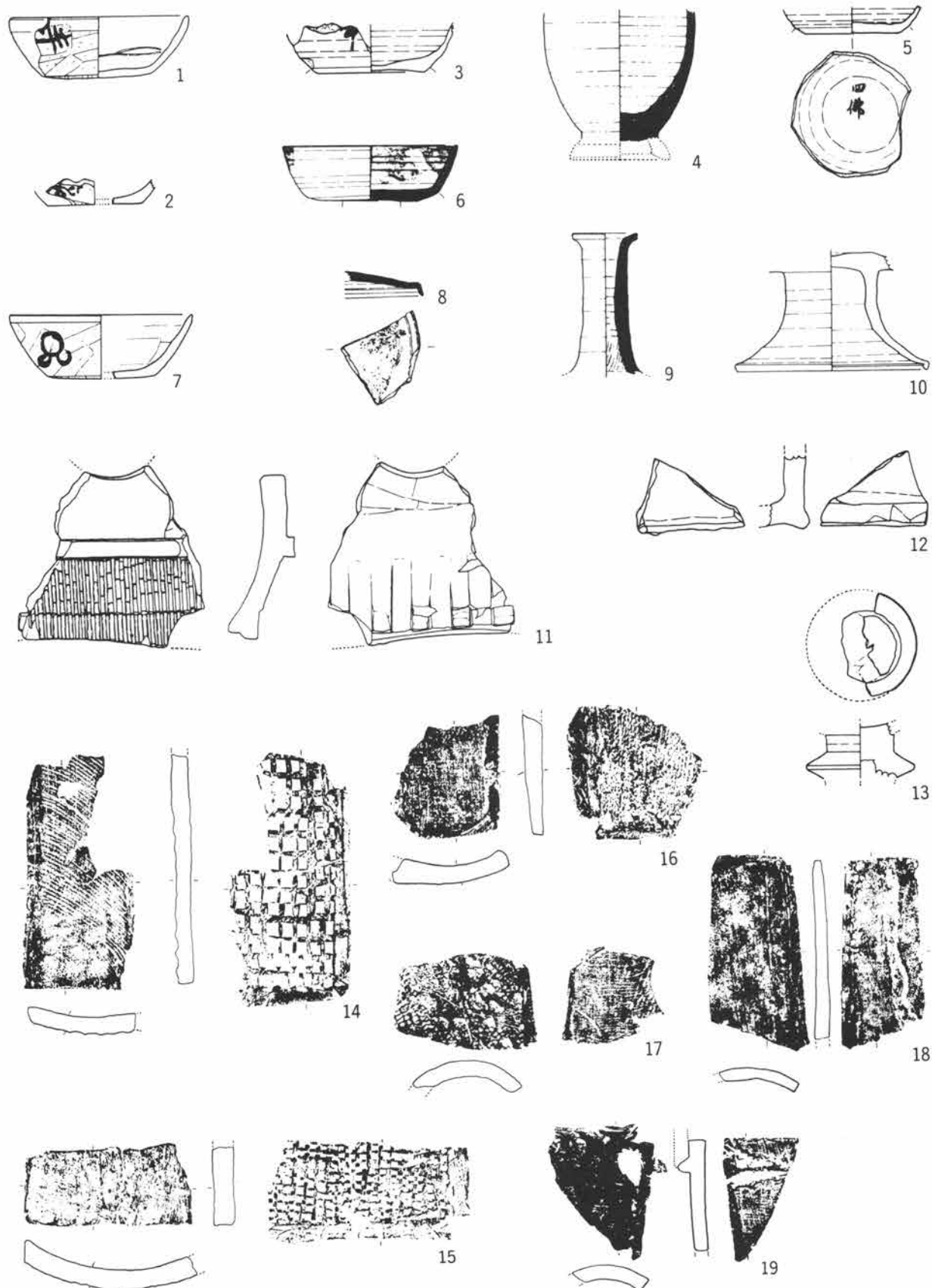
22 東郷台遺跡（川原井廃寺）

袖ヶ浦市川原井字東郷台1403-16他

松川をのぞむ台地南端に位置している。伽藍は4棟の建物跡によって構成されているが、区画施設は発見されていない。伽藍周辺の北から北西にかけて、掘立柱建物跡2棟と竪穴住居跡8棟が発見された。第1号建物跡は四間四面の掘立柱建物から礎石建物に建て替えられている。第2号建物跡も坪地業が見つかり、礎石建物であったことが明らかになっている。これら礎石建物跡周辺の調査区を中心に420点の平瓦と丸瓦、瓦塔（11~13）や水瓶（もしくは浄瓶（4））が発見された。平瓦は桶巻作りの格子叩き（14、15）、凸面無文と、凸型台1枚作りの縄叩き（16）がある。丸瓦は無段式（18）と有段式（19）がある。このほかに、二日市場廃寺跡出土瓦と同文の唐草文軒平瓦が表面採集されている。また、2号竪穴住居跡からは墨書土器「寺」（1）が、7号溝から墨書土器「四佛」（5）などが出土した。



第12図 東郷台遺跡遺構配置図



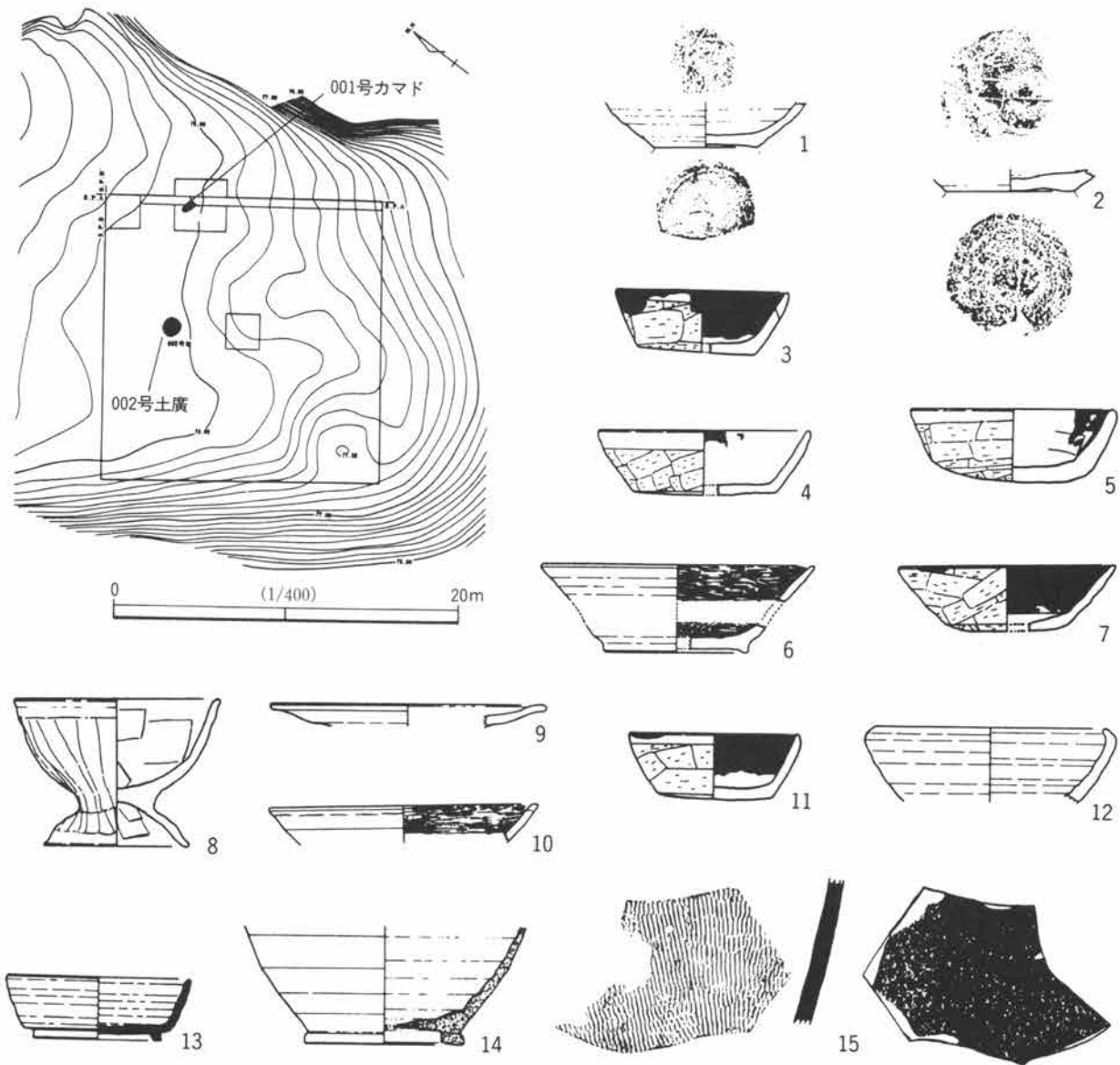
第13図 東郷台遺跡出土遺物 (1~13・ $\frac{1}{4}$ 、14~19・ $\frac{1}{6}$ )

II 主要遺跡概要

23 愛宕前遺跡

君津市向郷字愛宕前1,540-1 他

鹿野山丘陵から小櫃川流域の沖積地に向かって舌状に張り出した小丘陵の先端部分に位置する。遺跡付近の標高は78m前後を測る。発掘面積が狭く、遺構としてはカマド1基と土廣1基が発見されたにすぎない。ただし、遺物については、カマド付近から比較的まとまった土師器・須恵器・灰釉陶器などが出土した。これら土器群は8世紀後半から10世紀と比較的長期間にわたっている。その中で、ヘラ書き土器「寺」「東」(1、2)と土師器鉄鉢形土器(12)が出土した。「寺」「東」はそれぞれロクロ土師器坯の底部内面にヘラ書きされている。このほかに灯明皿と転用硯が多く出土した。なお、底部が故意に打ち欠かれた可能性がある灰釉陶器瓶も出土している。東約1.3kmに位置する向郷遺跡周辺に「寺ノ台」「寺ノ下」の地名が見られ、ヘラ書き土器の「寺」は向郷遺跡周辺に想定されている。

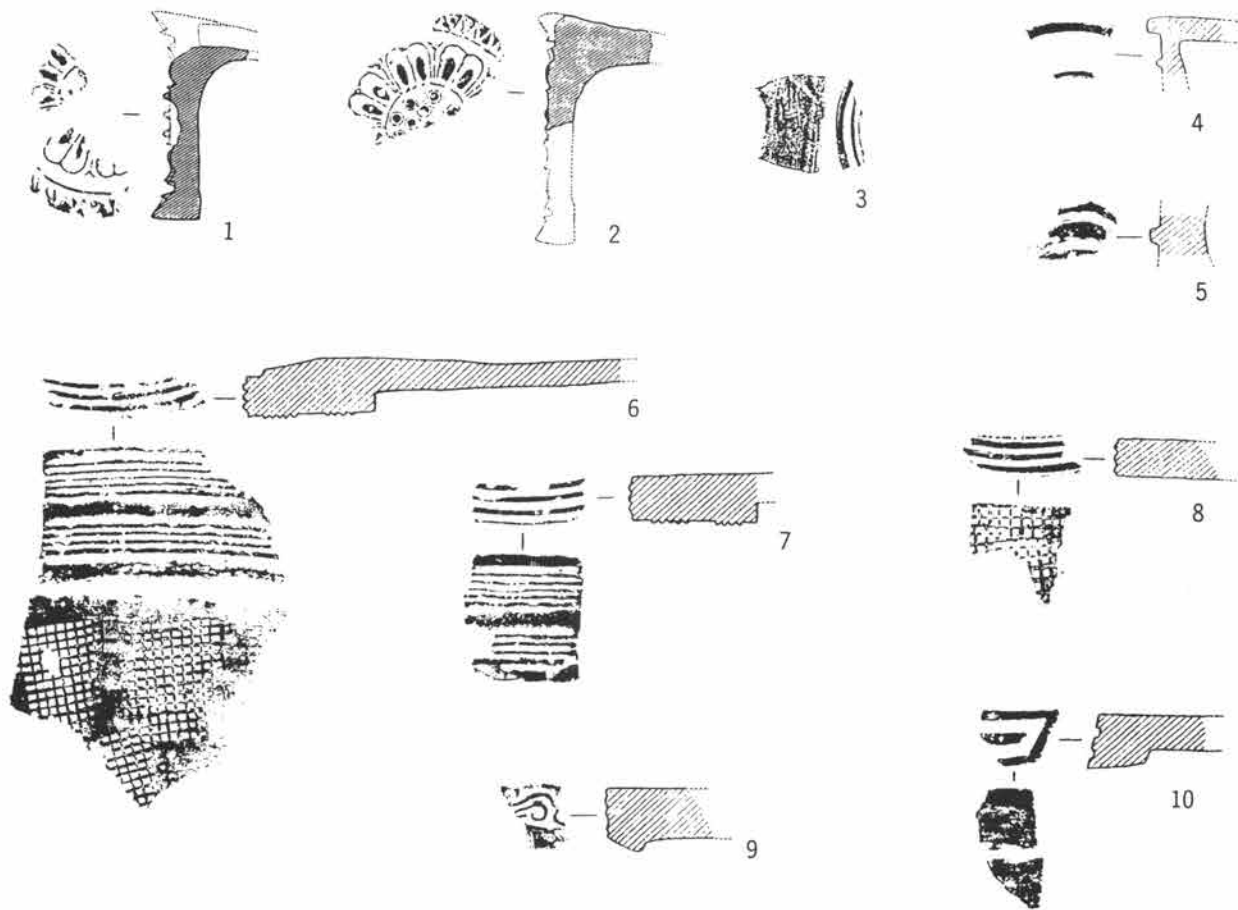


第14図 愛宕前遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

24 上総大寺廃寺跡

木更津市大寺字本郷

小櫃川右岸の標高約8mの微高地上に位置している。小櫃川が大きく北に蛇行する箇所接している。発掘調査は実施されていないが、凝灰質砂岩の石製露盤があり、塔を備えた寺院跡と推測される。石製露盤は1.3m×1.4mほどの方形で、中央に径約45cmの貫通孔が見られる。厚さは30cmほどである。石製露盤は元禄年間中に字「とうのこし」から掘り出されたもので、瓦の出土範囲も字「とうのこし」を中心に少なくとも100m四方に及んでいた記録が残されている。なお、廃寺跡が位置する現在の熊野神社境内地周辺には廃仏毀釈以前に「善徳寺（禅徳寺）」が所在しており、この寺院についても中世末まで遡ることが確認できる。軒丸瓦は、面違鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦3種(1、2)、重圈文縁単弁四葉蓮華文軒丸瓦(3)、重圈文軒丸瓦2種(4、5)がある。軒平瓦は三重弧文7種(6、8)、四重弧文(7)、重郭文(10)、均整唐草文(9)がある。三重弧文には長い段顎で顎面に5+4条の隆線が施されたもの2種(6)、同じく3+4条の隆線が施されたもの、顎面に3条の隆線が施され、凹面に爪形状に抉られた痕跡があるもの、無顎で広端部際まで凸面に正格子叩きが施されたもの(8)、薄い段顎で凸面に斜格子叩きが施されたもの、瓦当面の先端が山形状にシャープな九十九坊廃寺跡出土瓦と類似したものがある。凹面に爪形状に連続して抉りが入れられた平瓦は、九十九坊廃寺跡からも出土している。丸瓦は無段式と有段式の2種がある。平瓦は桶巻作りの格子叩きと縄叩き、凸型台一枚作りの縄叩きなどがある。格子叩き平瓦の中に、格子が丸味を帯びたものがあり、同様のものが九十九坊廃寺跡と大鷲瓦窯跡から出土している。また、この丸味を帯びた格子叩きの平瓦には、平瓦の隅部を大きく四角に落としたものがある。



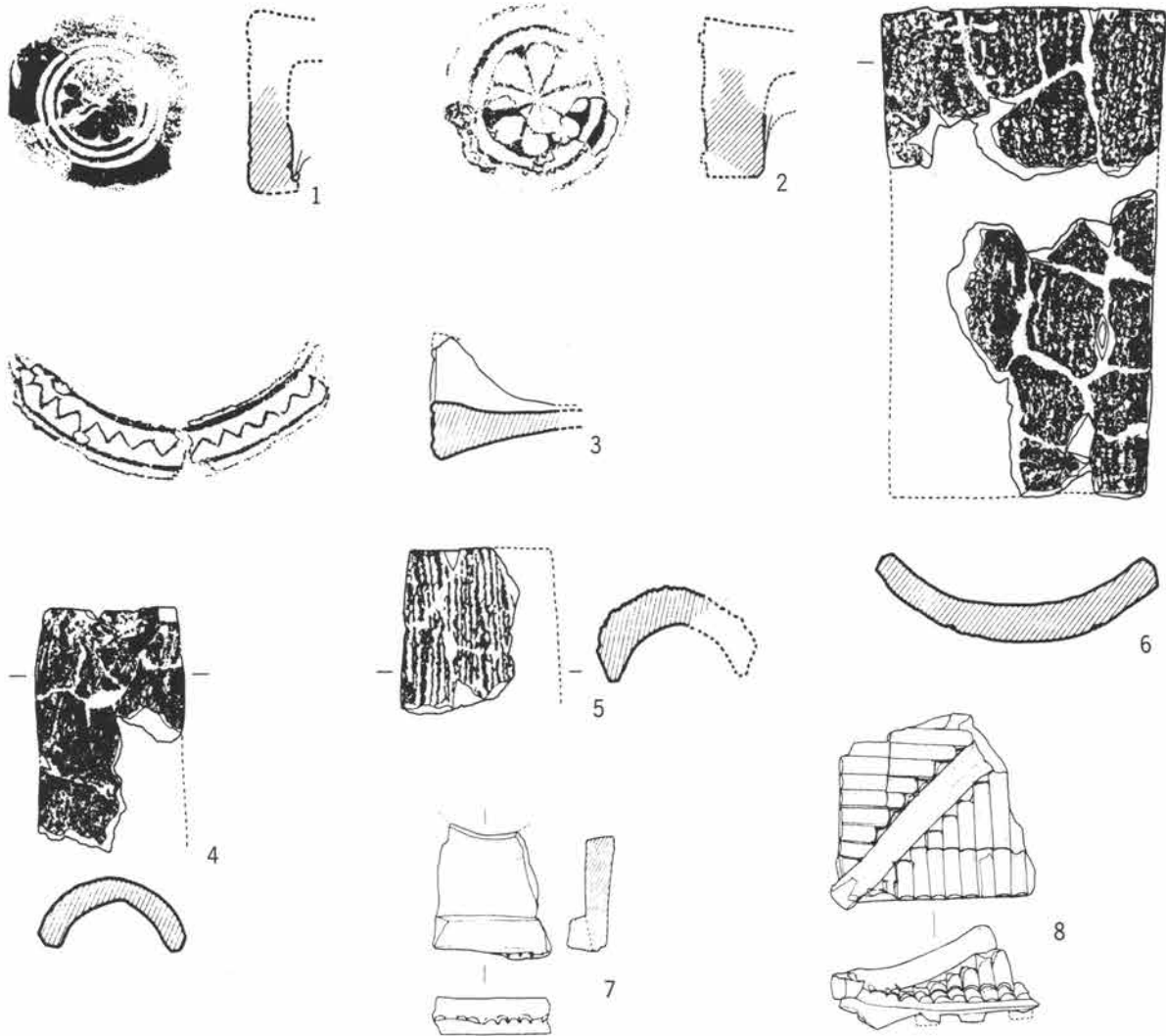
第15図 上総大寺廃寺跡出土瓦 (1/6)

25 小谷遺跡

木更津市請西1951-1 他

矢那川と烏田川に挟まれた台地上に位置している。北側からの谷津に向かって張り出した舌状台地の北端で基壇建物跡1基が多くの小型瓦とともに発見された。また、基壇建物跡から南東に70m~80m離れた谷頭付近から、瓦塔と瓦堂がまとまって発見された。この台地上からはほかに竪穴住居跡や掘立柱建物跡が発見されており、谷津を挟んだ隣接する台地上からも多くの火葬墓や方形墳墓（方墳）が発見されている。

基壇建物跡から発見された軒丸瓦は単弁四葉蓮華文が2種、軒平瓦は線彫りの山形の連続文様（鋸歯文）1種(3)がある。軒丸瓦は瓦当文様をレリーフで表現したもの(1)と、線的に表現した(2)2種である。なお、前者には瓦当裏面に布目圧痕を残すものがある。これら軒丸瓦の瓦当復元径は10cm前後、軒平瓦の復元弧は16cm前後で共に小型である。丸瓦は無段式で、凸面に縄叩きを残すもの(5)と、ナデ調整するもの(4)がある。平瓦は粘土板成形の凸型台1枚作りで、凸面に縄叩きを残すもの(6)と、調整を加えたものがある。瓦堂には軒先から垂木にかけて赤色塗彩の痕跡がある。また、香炉蓋も出土している。



第16図 小谷遺跡出土遺物 (1/4)



27 永吉台遺跡群遠寺原地区

袖ヶ浦市永吉西寺原ノ式169他

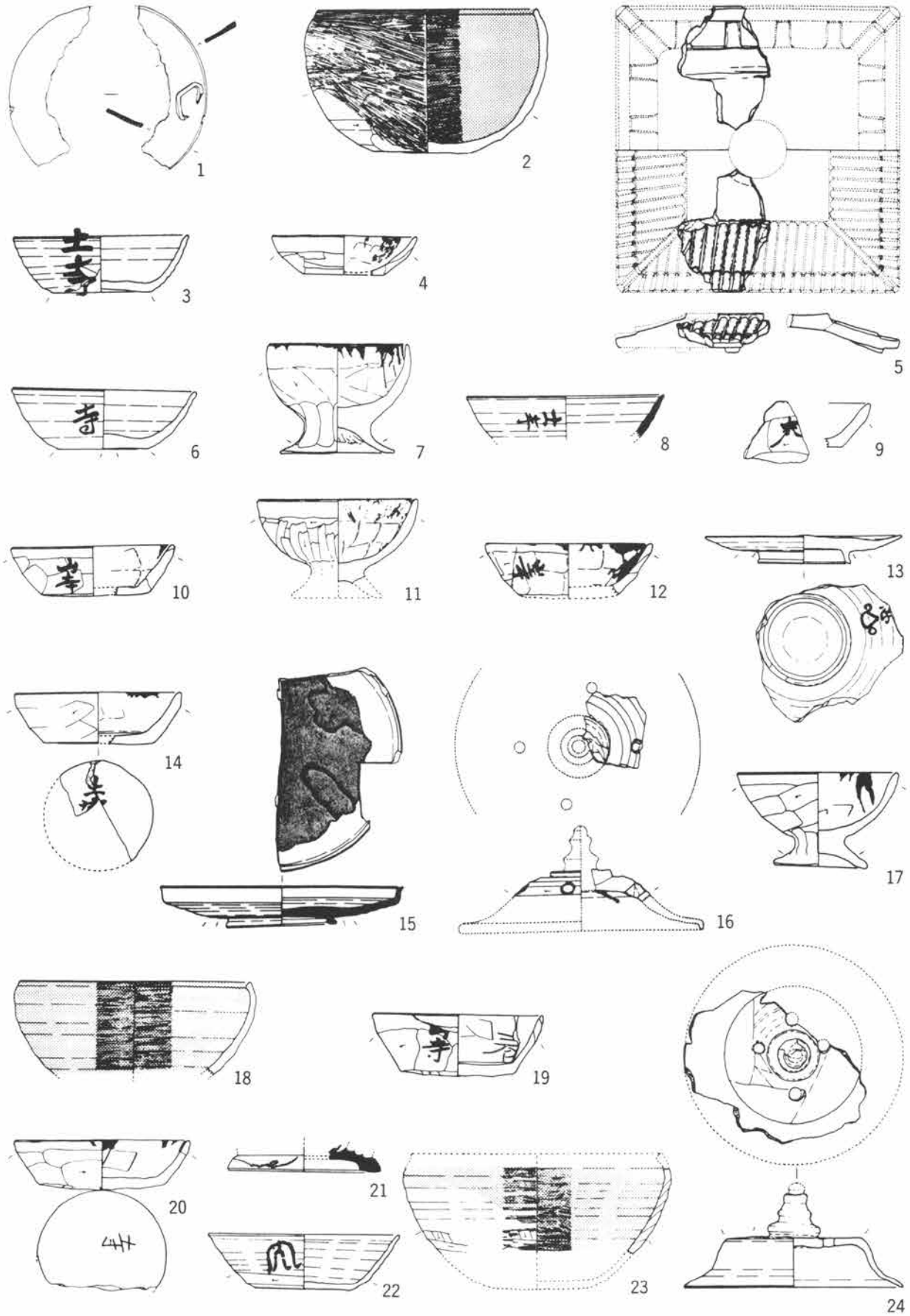
松川流域からやや奥まった小支谷沿いの台地南端に位置する。掘立柱建物跡群を中心とした東側と、竪穴住居跡群の西側の二つの遺構群に分けられる。東側の建物跡群の中心に位置するのが、三間四面の掘立柱建物跡2棟であり、中心的な仏堂として機能したと考えられる。これら掘立柱建物跡の南面は開放されており、前庭として機能した可能性がある。これら掘立柱建物跡群の東側等に位置する竪穴住居跡からは多くの仏教関連遺物が出土した。26号竪穴住居跡（6、7）から墨書土器「寺」「土」が、33号竪穴住居跡から墨書土器「土寺」（8）「田寺カ」「□宗□」が、34号竪穴住居跡（9～11）から墨書土器「□寺」「土家」「奉□」が、35号竪穴住居跡（12、13）から「山寺」「家」が、39号竪穴住居跡（14～17）から香炉蓋と墨書土器「土家」が、41号竪穴住居跡から土師器鉄鉢形土器（18）が、42号竪穴住居跡から墨書土器「西カ寺」（19）が、43号竪穴住居跡からはヘラ書き土器「寺」（20）が出土した。このほかに灯明皿や転用硯も各竪穴住居跡から多く出土した。このようにこれらの竪穴住居跡群からは仏教関連遺物が多く出土しており、寺院の雑舎の一部として機能していたと推測される。

また、西側の建物跡群からも4号竪穴住居跡から青銅鏡（1）が、18号竪穴住居跡から墨書土器「土寺」と瓦塔が出土した（3～5）。



第17図 永吉台遺跡群遠寺原地区遺構配置図

II 主要遺跡概要

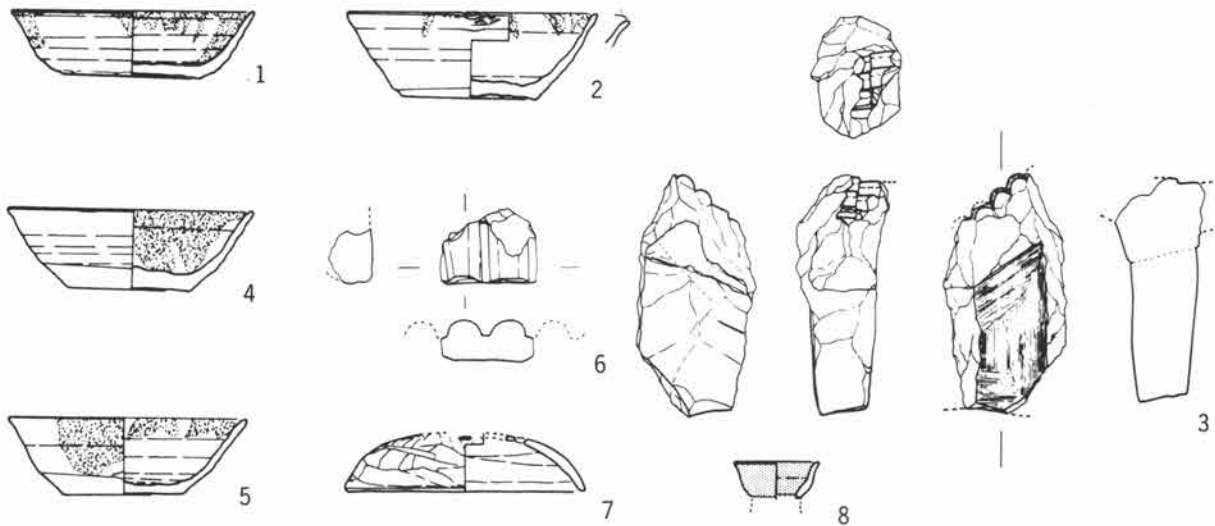
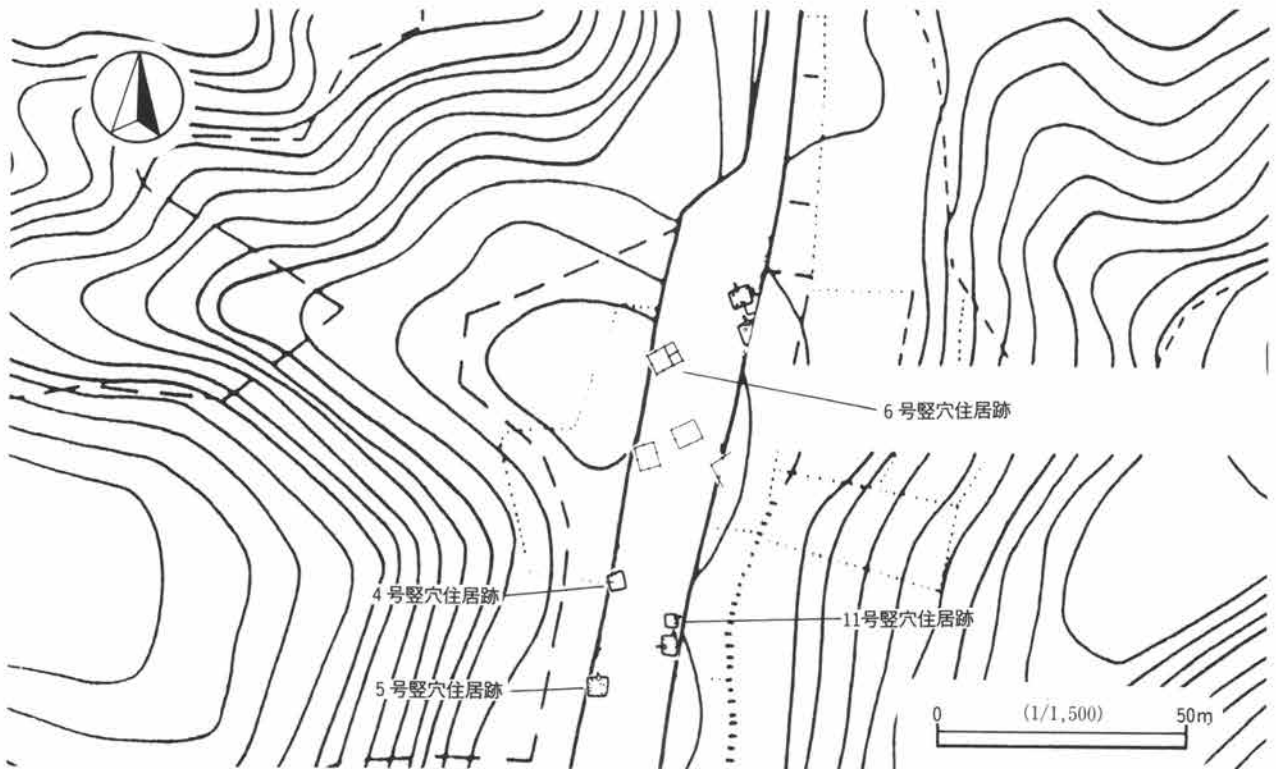


第18図 永吉台遺跡群遠寺原地区出土遺物 (1/4)

28 上大城遺跡

袖ヶ浦市代宿字上大城

浜宿川と久保田川に挟まれた細尾根状の台地上に位置している。やや広い台地頂部から掘立柱建物跡が4棟発見され、その周囲から6棟の竪穴住居跡が発見された。そして、掘立柱建物跡群の南に位置する4号(1~3)・5号(4~6)竪穴住居跡から多くの灯明皿とともに瓦堂(もしくは瓦塔)片が、11号竪穴住居跡から浄瓶が発見された(8)。またグリッドから香炉蓋(7)が発見された。部分的な発掘であるが、建物配置に規則性が窺え、仏教遺物もまとまって出土している。発見された掘立柱建物跡ないし、その西側に隣接する台地頂部に仏堂が存在した可能性がある。



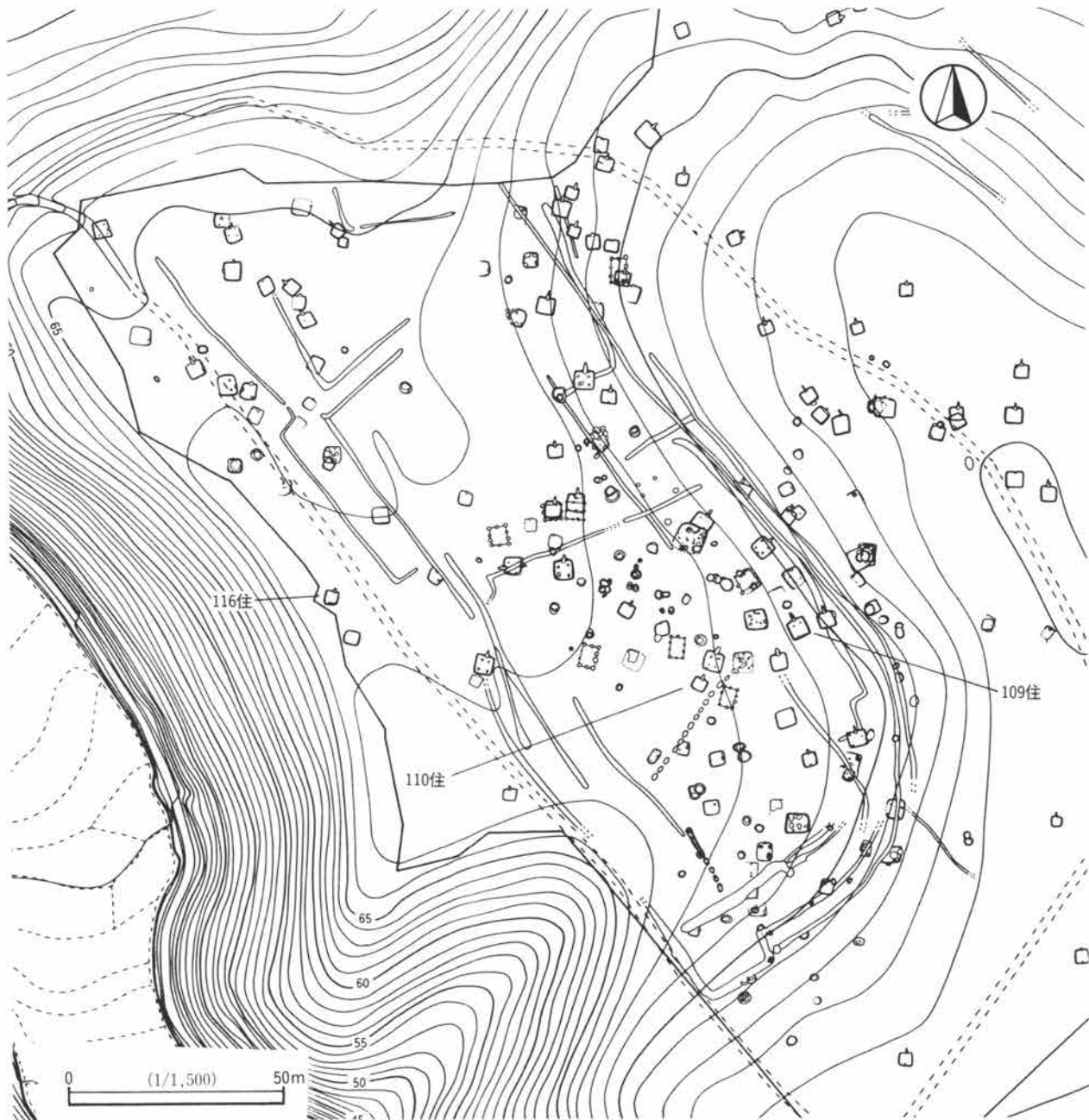
第19図 上大城遺跡遺構配置図・出土遺物 (1/4、ただし3と6は1/2)

## II 主要遺跡概要

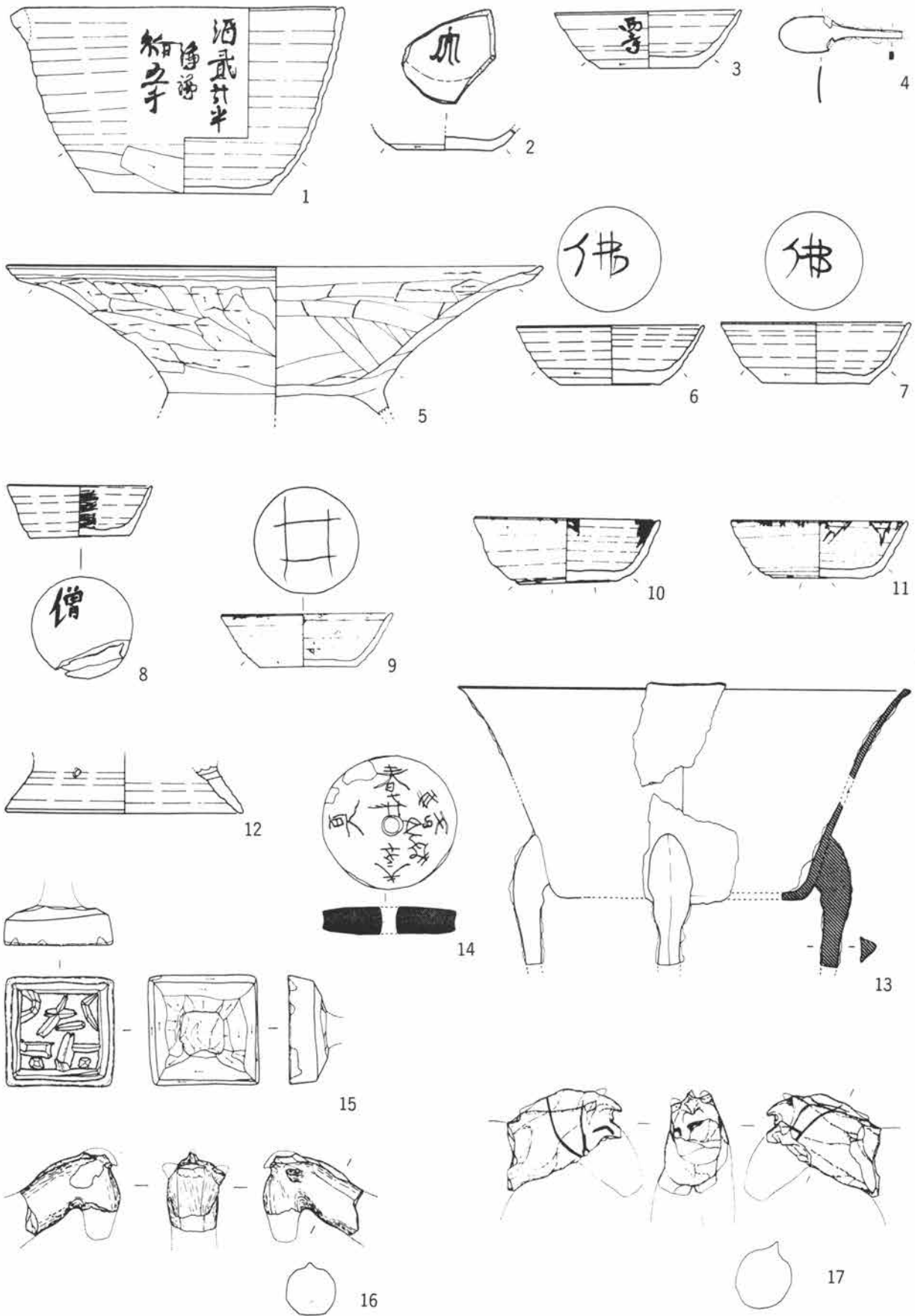
### 29 永吉台遺跡群西寺原地区

袖ヶ浦市永吉西寺原ノ式169他

松川に面した台地北西端に位置する。調査区中央で掘立柱建物跡がやや集中しているが、大規模な建物跡は発見されていない。仏教関連遺物は掘立柱建物跡群周辺の竪穴住居跡からやや散漫に発見されている。109号竪穴住居跡(2、3)から墨書土器「西寺」が、110号竪穴住居跡から墨書土器「佛」(6、7)が、116号竪穴住居跡(8~11)から墨書土器「僧」が出土した。また、116号竪穴住居跡からは灯明皿がややまとまって発見された。このほかに陶印や土馬、鉄製匙、鉄製三足鍋、土製紡錘車(へら書き「春・夏(秋)・冬」)、片口鉢(墨書「酒貳升半浄浄稻五千」)など特異な遺物が出土した。



第20図 永吉台遺跡群西寺原地区遺構配置図



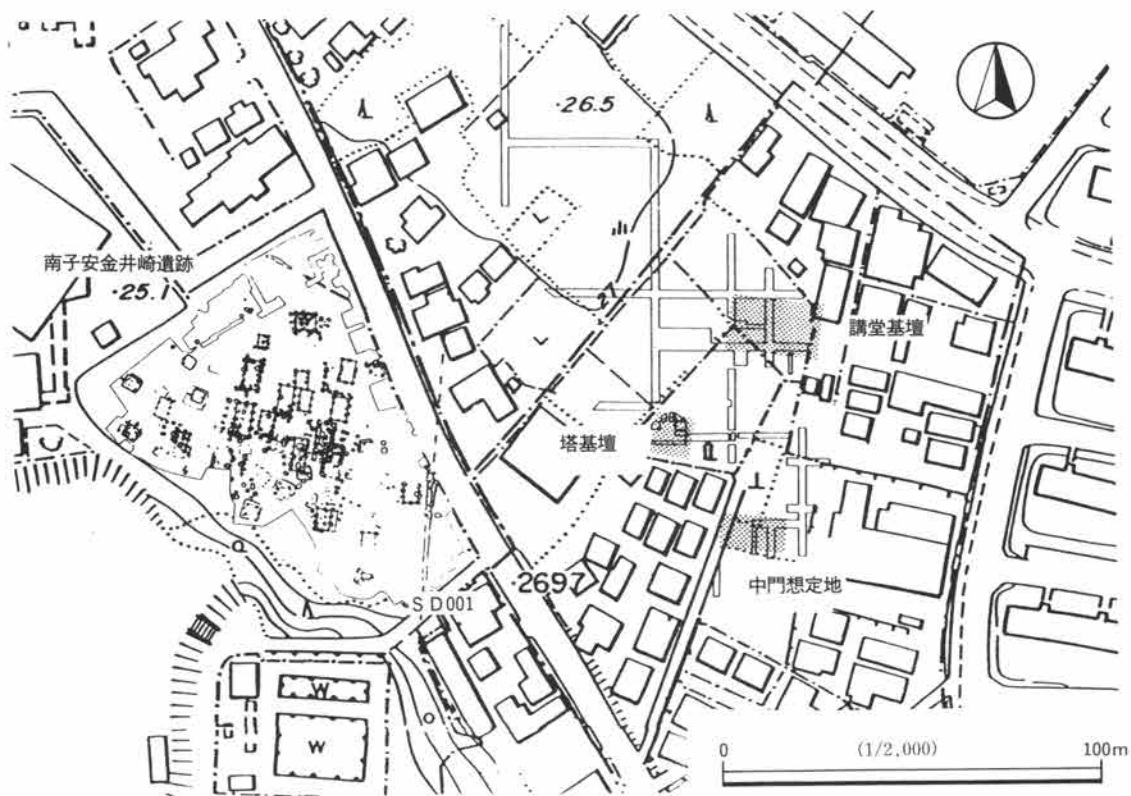
第21図 永吉台遺跡群西寺原地区出土遺物 (1~13・¼、14~17・½)

33 九十九坊廃寺跡

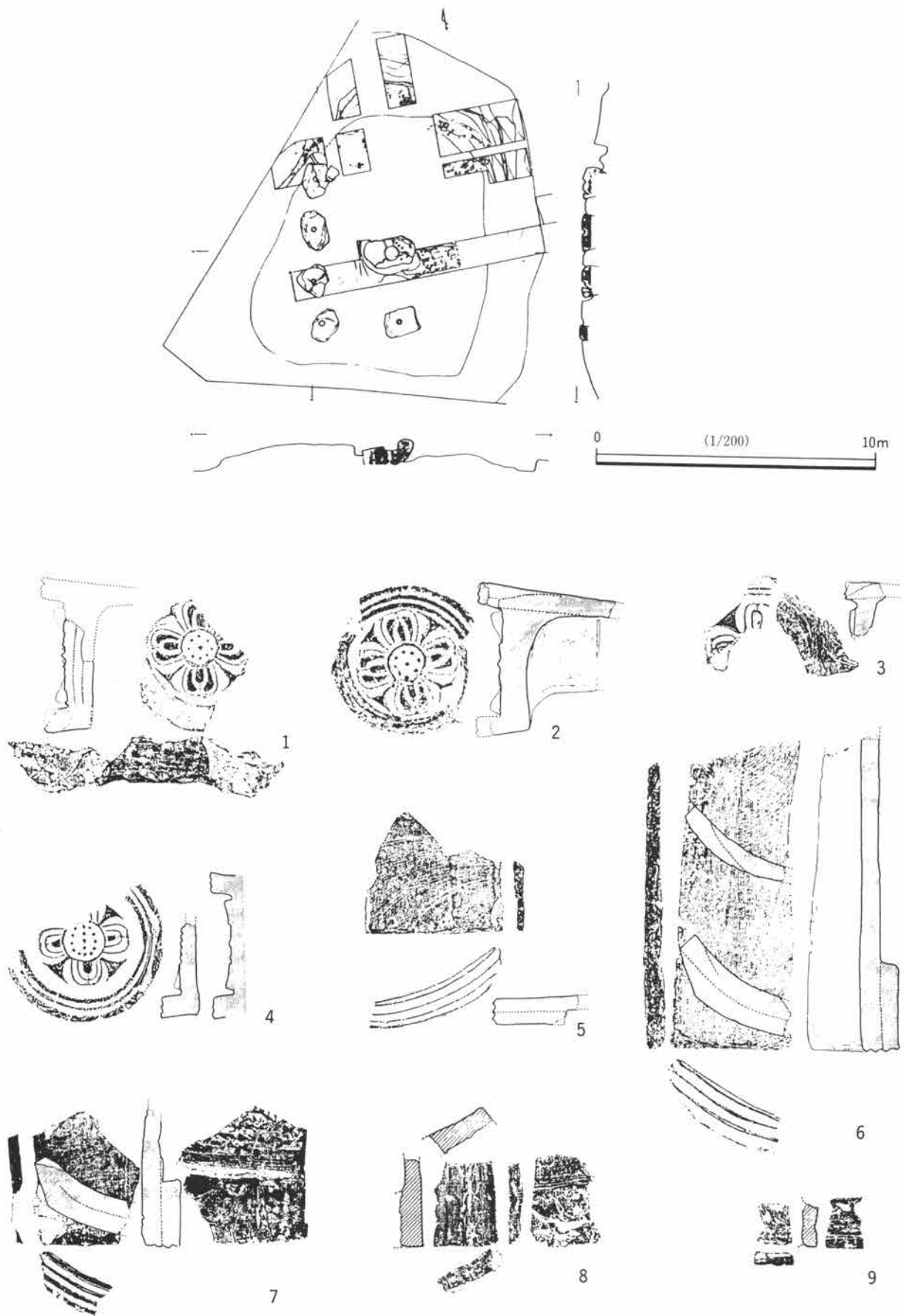
君津市内箕輪字九十九坊台、南子安字九十九坊

小糸川右岸の標高約27mの台地上に位置する。創建期瓦を焼成した牛ケ作瓦窯跡が北西約2kmに、補修瓦を焼成した大鷲瓦窯跡が東南東約3kmに位置している。発掘調査は昭和8年に塔跡を中心に実施され、法隆寺式伽藍が復原されている。昭和59年にも確認調査が行われ、講堂基壇などが発見された。塔基壇と講堂基壇は掘込み地業で、講堂基壇中には朱付き瓦を含む複数の瓦敷面が確認された。講堂基壇西側では複数の掘立柱建物跡が、講堂基壇西北西約70m付近でも掘立柱跡が発見された。昭和60年には中門などの確認調査が実施されたが、詳細不明である。平成7・8年には伽藍西側の南子安金井崎遺跡が発掘調査され、廃寺跡の軸線にほぼ沿った掘立柱建物跡群や溝状遺構、堅穴住居跡、鍛冶工房跡などが発見された。掘立柱建物跡は40棟以上で、その大半で複数の建替えが確認された。僧名を記した墨書土器「弘安」なども発見され、南北に走る溝状遺構SD001は寺院地内部の区画溝に想定され、8世紀後半から10世紀前半の寺院附属施設と考えられている。

軒丸瓦は三重圏文縁単弁四葉蓮華文軒丸瓦3種(1~4)が、軒平瓦は三重弧文(5~7)と二重弧文(8、9)がある。1と2は周縁が高く、中房蓮子が1+8の二重である。牛ケ作瓦窯跡から、範傷が進行した同範品が出土している。3は周縁が低く、子葉の周りの圏線が1本である。4は中房蓮子が1+2+12の三重で、子葉の周りの圏線が二重である。三重弧文軒平瓦はいずれも段顎であるが、弧線の先端が丸味を帯びたもの(7)、山形のもの(5)、シャープなもの(6)がある。二重弧文軒平瓦も段顎で、瓦当面に幅の狭いヘラで描かれた沈線が一条走る。丸瓦は無段式と有段式があり、凸面に縄叩きが残るものがある。平瓦は桶巻作りの格子叩きと縄叩き、凸型台一枚作りの縄叩きがある。なお、凹面に連続して爪形状に抉られた痕跡を有する平瓦もある。



第22図 九十九坊廃寺跡遺構配置図

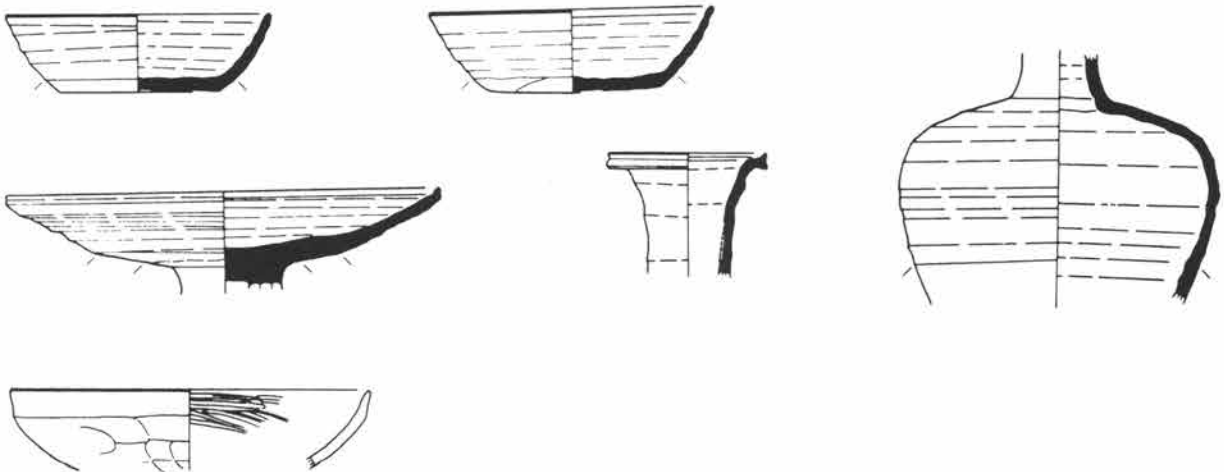
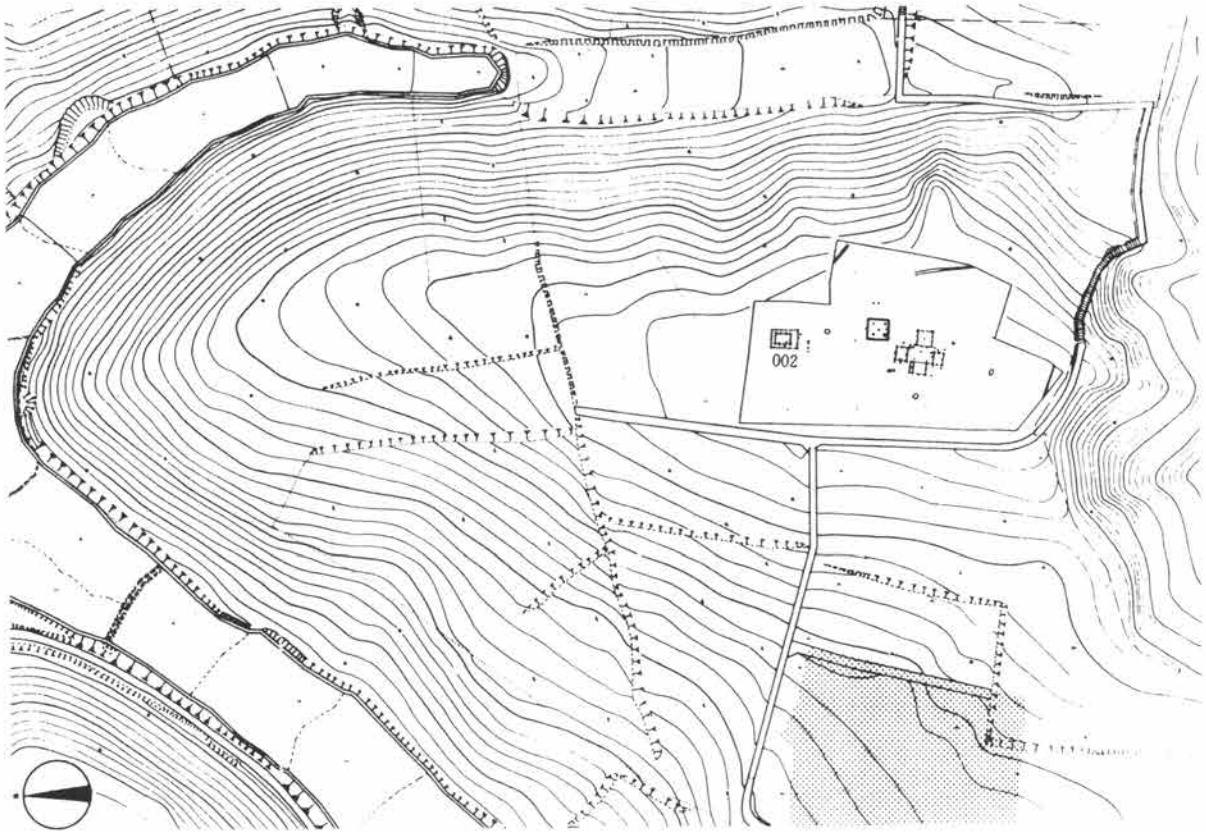


第23図 九十九坊廃寺跡塔平面図・出土瓦 (1/6)

37 針ヶ谷遺跡

長生郡長柄町針ヶ谷字中野

一宮川流域を眼下に望む標高133mの丘陵の南端に位置している。また、北からは一宮川支流の豊田川上流の谷津が開析している。やや平坦な丘陵頂部の北側から三間四面の掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟がほぼ南北に並立して発見された。遺物は水瓶の可能性がある須恵器瓶以外は仏教遺物の出土は明らかではない。建物群の南側は比高差約100mもある丘陵斜面で、四面庇建物の西面方向には周辺では最も高所の権現森のピークが眼前にある。特異な立地状況と建物群から8世紀中葉から後半の寺院跡の可能性が指摘されている。



第24図 針ヶ谷遺跡遺構配置図・出土遺物 (1/4)

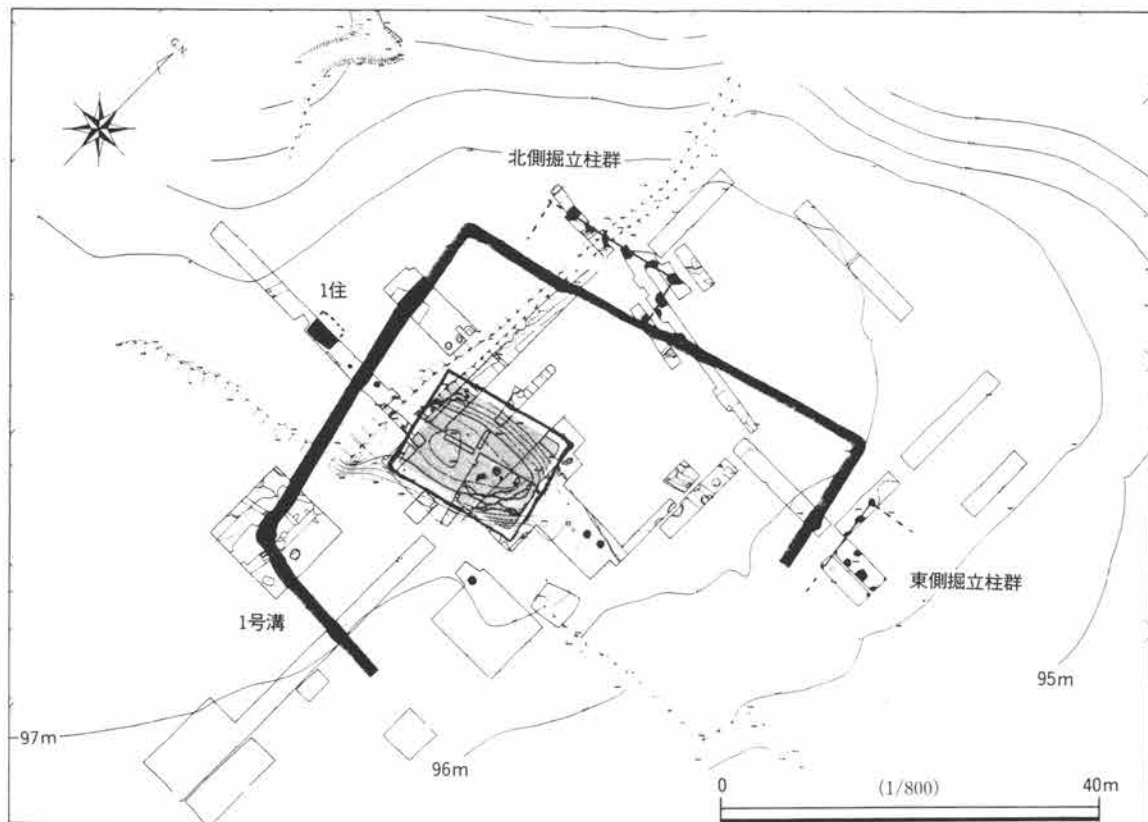


40 小食土廃寺跡

千葉市緑区小食土町698他

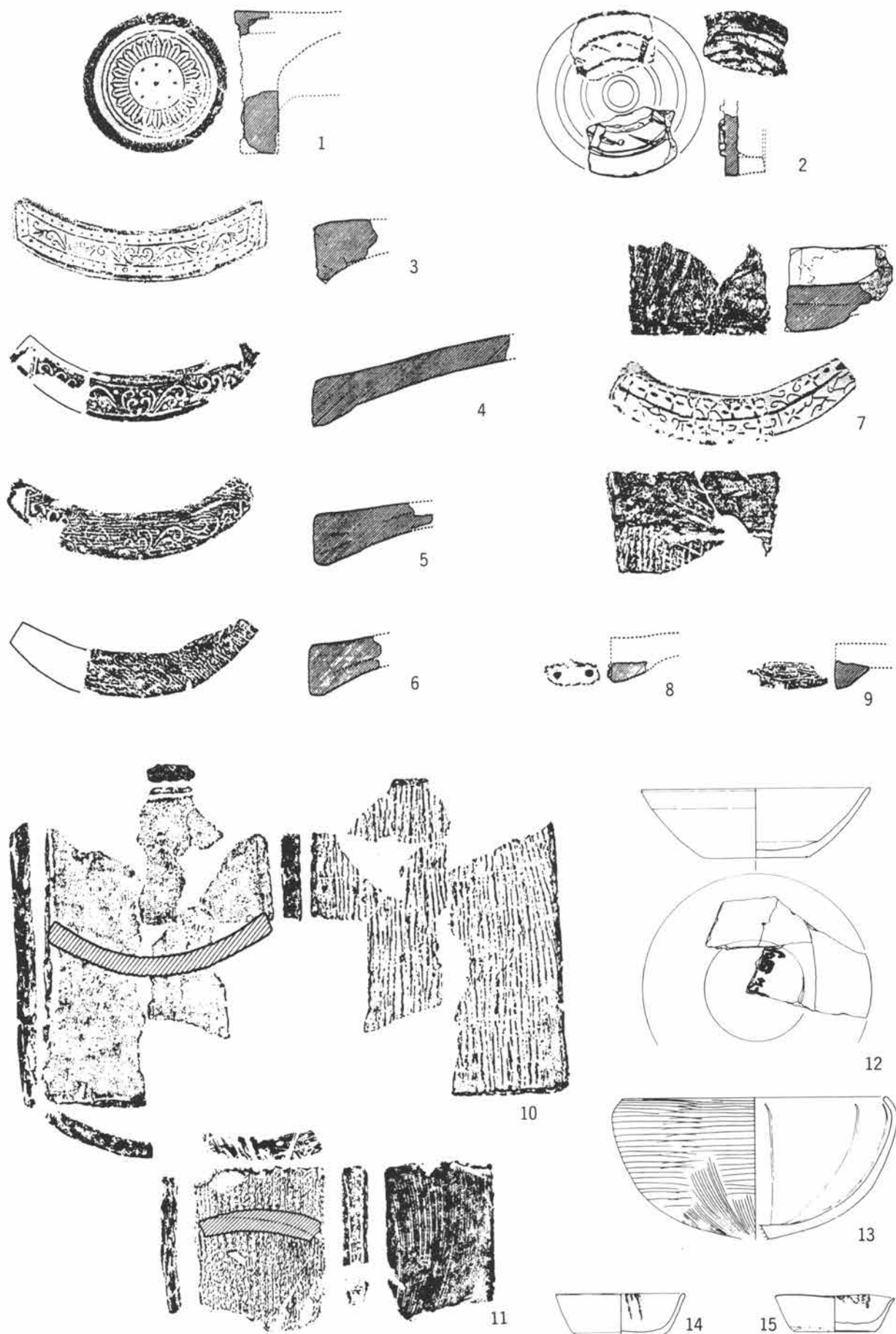
東京湾に注ぐ村田川と印旛沼に注ぐ鹿島川の最上流の台地上に位置している。また、東側は急峻な崖を介して九十九里平野と接している。廃寺跡の西500mには菰生道遺跡が位置し、同時期の集落跡などが発見されている。また、西1.1kmには上総国分寺創建期瓦等を焼成した南河原坂窯跡群がある。小食土廃寺跡からは基壇建物跡1基と掘立柱建物跡2棟以上、竪穴住居跡1軒、溝などが確認された。基壇は掘込み地業で東西14.8m、南北11.8mの規模で、厚板で基壇外装を化粧している。建物痕跡は確認されなかったが、基壇規模から四間×五間ほどの建物規模が想定されている。そして、この基壇建物跡を取り囲むように、上端1.3m、下端0.8mほどの断面逆台形の溝が確認された。この溝の内側からは基壇建物跡のほかに、その東6mほど離れて柱穴が2基発見された。溝外からは西側で竪穴住居跡が、北側と東側から掘立柱建物跡が発見された。竪穴住居跡の時期は9世紀前半で、墨書土器「冨□」(12)や鉄鉢形土器(13)などが出土した。また、北側の掘立柱建物跡付近からはスラグが集中して発見され、製鉄遺構の存在が推測されている。

出土軒丸瓦は2種で、単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦(1)と重圈文軒丸瓦(2)が出土した。前者は上総国分寺の創建瓦と同範である。後者は重圈文間に珠文と放射状の縦線が入る特異な文様であり、また瓦当裏面下半に丸瓦を一部残す特徴的な製作方法である。軒平瓦は6種で、均整唐草文軒平瓦3種(3~6)、上下2段に四葉文・唐草文が配されたもの(7)、重郭文の珠文が配されたもの(8)、ヘラ描き木葉文(9)がある。丸瓦は無段式である。平瓦は凸型台一枚作りで、凸面に縄叩きを残す。このほか熨斗瓦(11)が2点出土した。



第25図 小食土廃寺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要

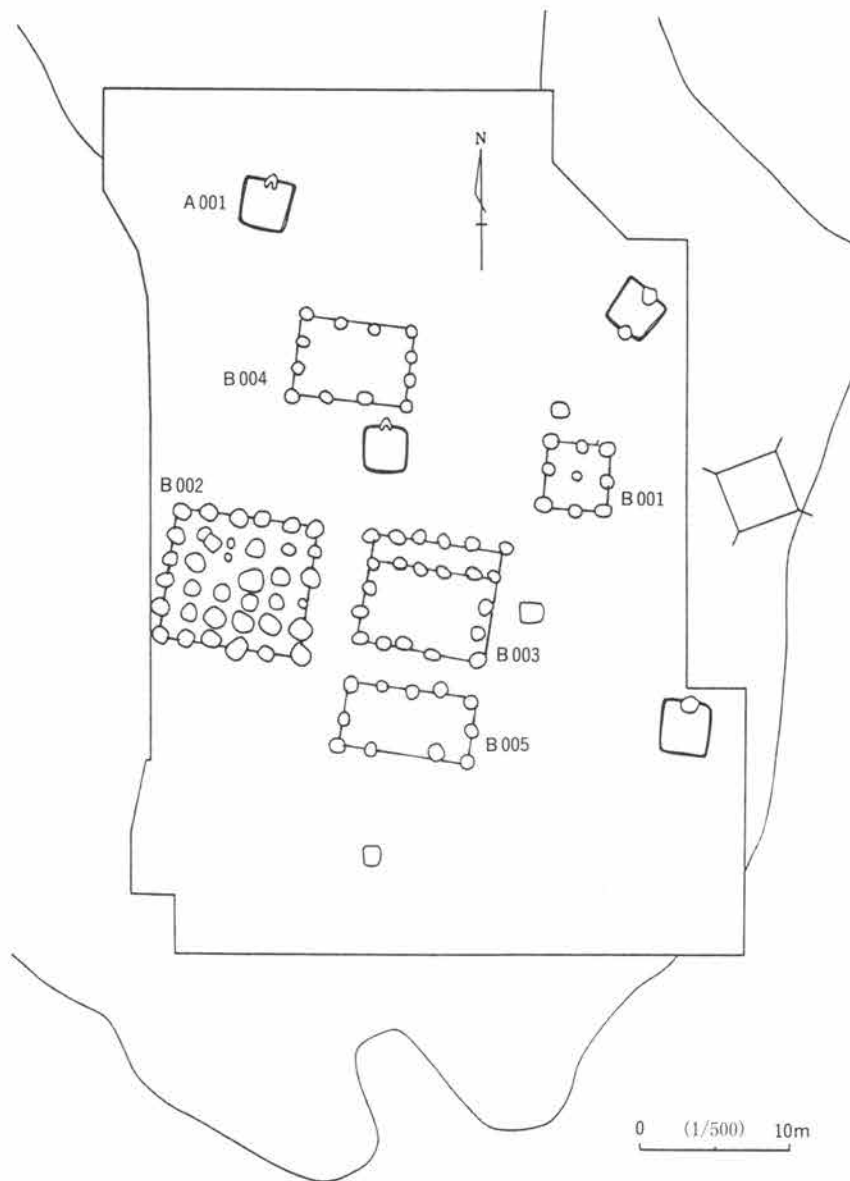


第26図 小食土廃寺跡出土遺物 (1~11・ $\frac{1}{6}$ 、12~15・ $\frac{1}{4}$ )

42 内野台遺跡

千葉市緑区小山町内野台

村田川上流の台地南端に位置している。掘立柱建物跡5棟と竪穴住居跡4軒が発見された。三間四面南孫庇付建物跡のB002と、双堂形式に復原されるB003・B005がほぼ柱筋を揃えて東西に並置されている。これらの北側のA001竪穴住居跡からは墨書土器「祥」「祥寺」が出土した。なお、墨書土器「祥寺」は北西約400m離れた文六第2遺跡からも出土している。

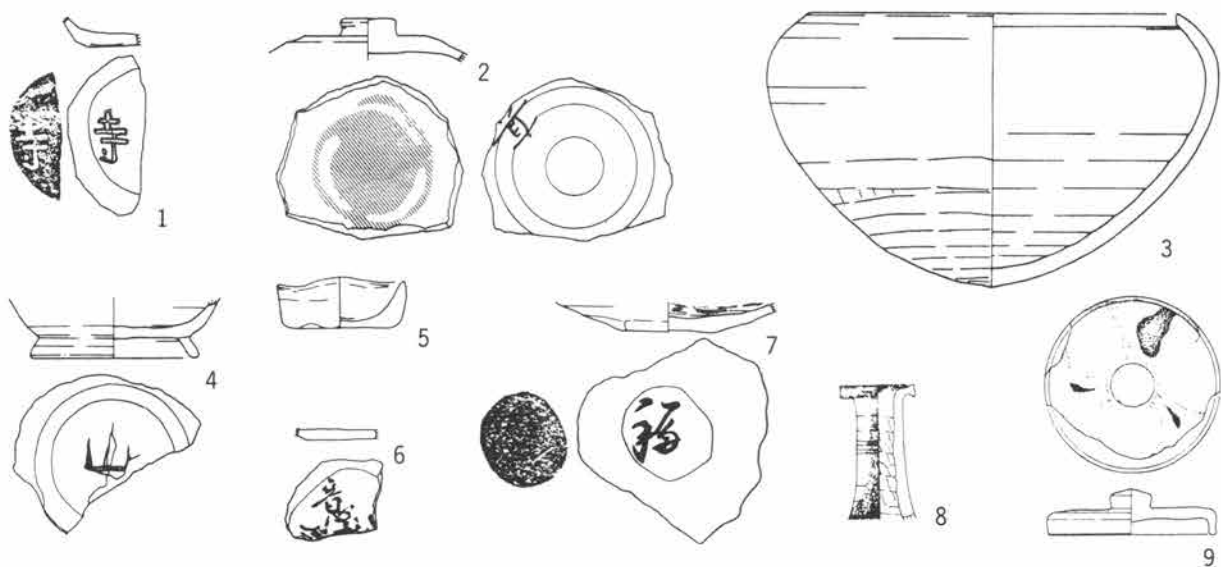


第27図 内野台遺跡遺構配置図

44 大椎第2遺跡

千葉市緑区小食土町1,163-13他

村田川に注ぐ小支谷に面した丘陵上に位置する。小支谷に突き出した丘陵南端から仏教遺物がまとまって出土した。南南東に底を出す方三間の片庇建物の2号掘立柱建物跡の南西に接する6号竪穴住居跡からヘラ書き土器「寺」「山」、土師器鉄鉢形土器、転用硯などが出土した(1~4)。「寺」はロクロ土師器坯の底部外面にヘラ書きされている。2は土師器蓋の内面を硯として転用しており、外面には「真」とヘラ書きされている。このほかグリッドから水瓶や三彩小壺蓋、墨書土器「福」「意□□□」、手捏等が発見された(5~9)。仏教遺物が集中して発見されており、立地の特異性からも第2号掘立柱建物跡は仏堂として機能した可能性がある。



第28図 大椎第2遺跡遺構配置図・出土遺物(1~7・¼、8・½、9・½)

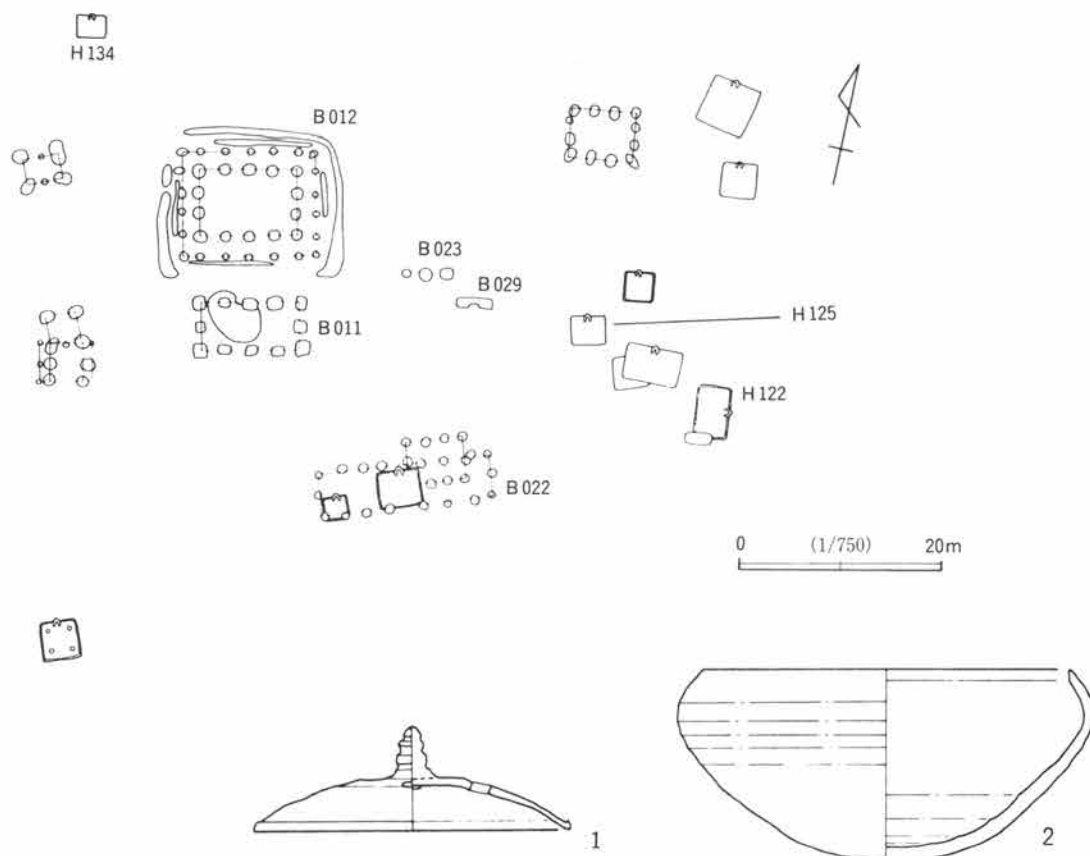
45 山田台廃寺跡

東金市山田字新林833他

太平洋に注ぐ南白亀川上流の標高75m～79mの台地上に位置している。山田台廃寺跡は大網山田台遺跡群No3地点として発掘調査された新林Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ遺跡の中から発見された。このNo3地点からは旧石器時代から平安時代の遺構・遺物が発見されたが、特に8世紀後半から9世紀前半を中心とした時期の集落跡が大規模に発見された。掘立柱建物跡は63棟発見され、8世紀後半から9世紀前半にかけての竪穴住居跡が71軒、9世紀後半以降の竪穴住居跡が11軒発見された。山田台廃寺跡はこの調査区の中央付近から発見された。

中心建物跡のB012は四間四面の掘立柱建物の後、坪地業の礎石建物跡に建替えられている。この前面のB011は二間×四間の掘立柱建物跡で1度の建替えが確認されている。この2棟の建物跡はほぼ柱筋を揃えており、正堂と礼堂として機能した双堂形式の仏堂である。この仏堂の東からは幢竿支柱跡と想定されるB023とB029が位置し、南には二間×七間の建物跡のB022が発見された。

寺院の東側のH117から須恵器の香炉蓋(1)が、H122から土師器の鉄鉢が、H125から須恵器の鉄鉢(2)や墨書土器「山口万」「立万」「万」等が、H134から土師器の鉄鉢が出土した。このほかB012付近から香炉蓋と唐草文軒平瓦や凸型台一枚作りの格子叩きの平瓦、丸瓦などの瓦も若干出土した。



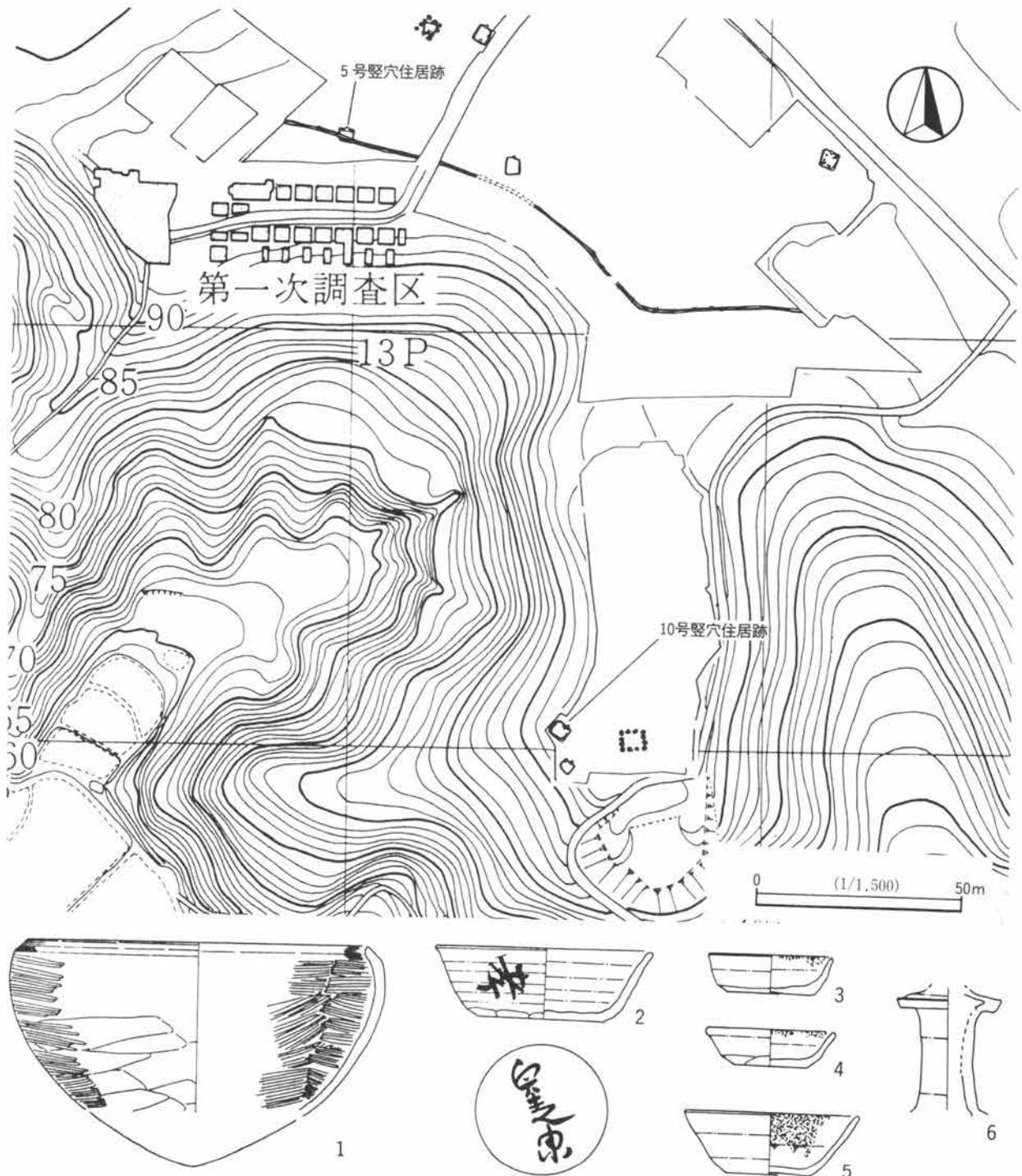
第29図 山田台廃寺跡遺構配置図・出土遺物 (1/4)

II 主要遺跡概要

49 南河原坂第2遺跡

千葉市緑区小食土町1, 178-34他

村田川上流の谷津に面した台地南端に位置する。舌状に伸びた台地先端の10号竪穴住居跡から浄瓶と墨書土器「孝/宍□□」、そして多くの灯明皿が出土した(2~6)。この他に周辺では竪穴住居跡1軒と方三間の掘立柱建物跡1棟が発見された。また、10号竪穴住居跡の北北東約150m離れた丘陵南端の5号竪穴住居跡からは土師器鉄鉢形土器(1)が発見された。

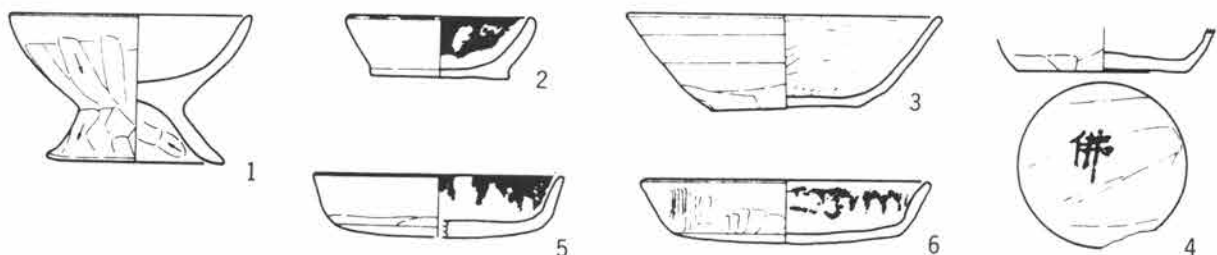
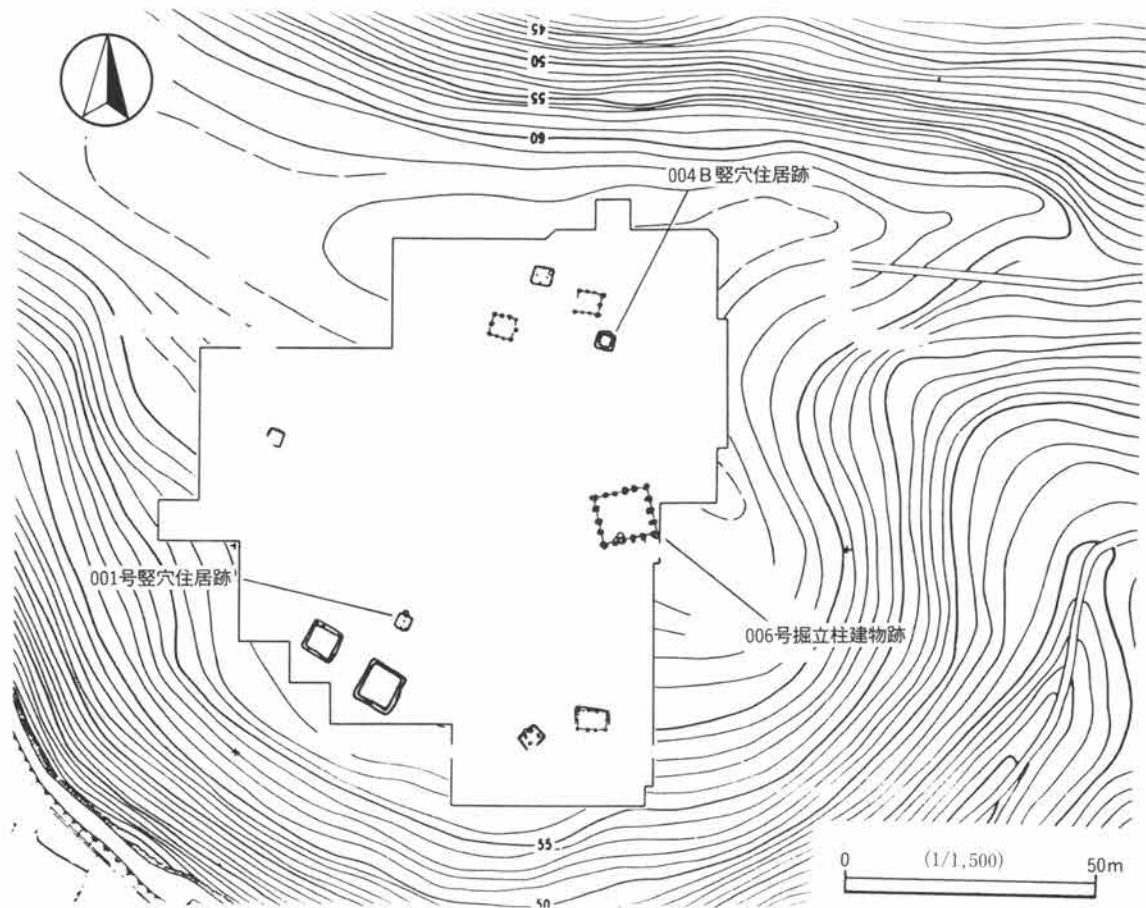


第30図 南河原坂第2遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

51 大野第7遺跡

千葉市緑区大木戸町1,209-22他

村田川上流の小支谷に南北が挟まれた丘陵頂部に位置する。8世紀中葉から9世紀前半の遺構群が発見された。丘陵南端に8世紀後半の方形墳墓2基が北辺を揃えて東西に並び、その北側に南北に並んで001号竪穴住居跡が発見された。001号竪穴住居跡(1、2)と、その隣接グリッド(5、6)から灯明皿がややまとまって発見された。そして、丘陵北部に9世紀前半の掘立柱建物跡と竪穴住居跡が発見された。004B竪穴住居跡(3、4)から墨書土器「佛」が出土した。また丘陵の中央部から、4間×5間の006号掘立柱建物跡が単独で1棟発見された。東西10.4m、南北9.6m前後を測る大型の施設である。

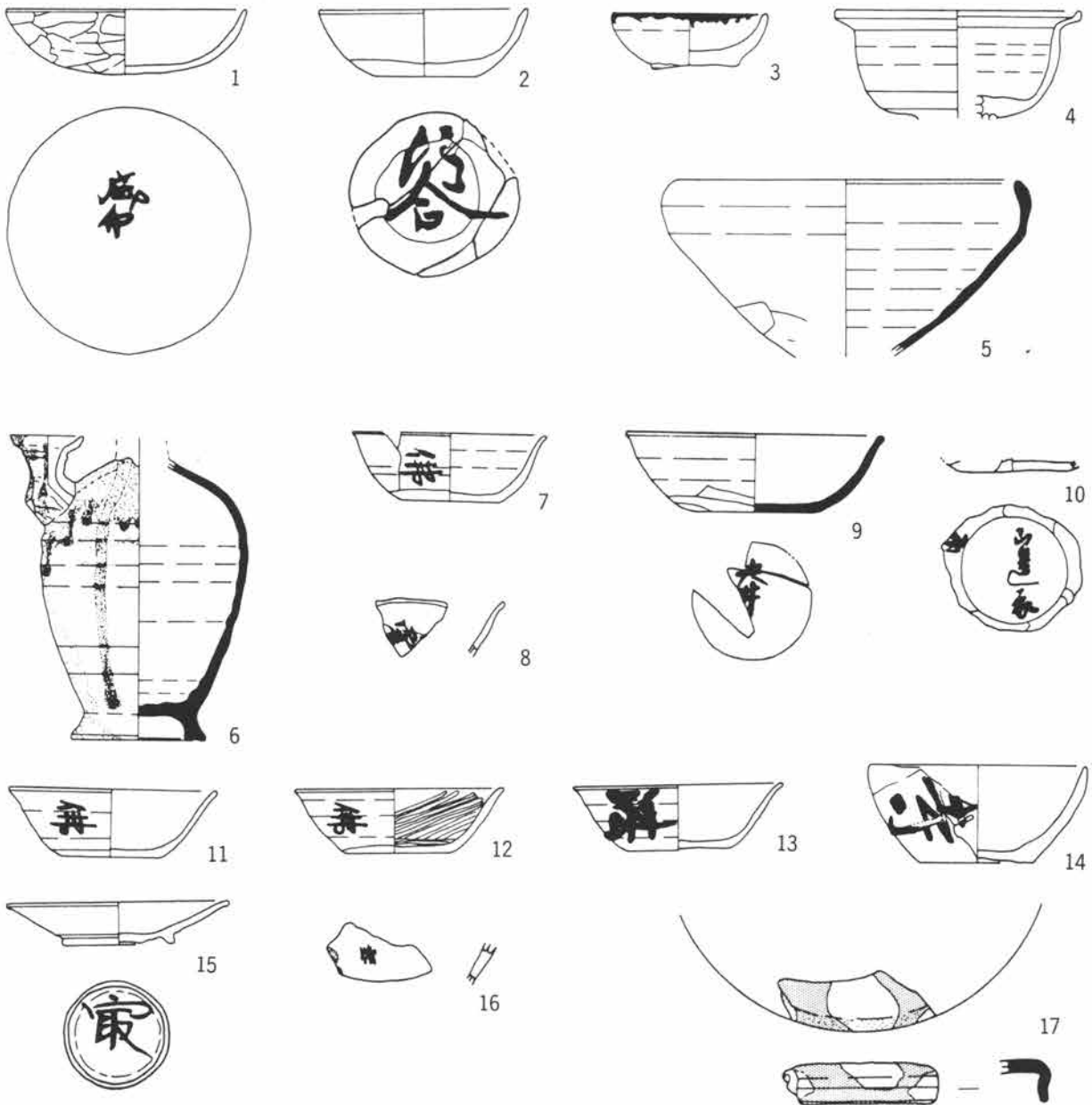


第31図 大野第7遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

64 砂田中台遺跡

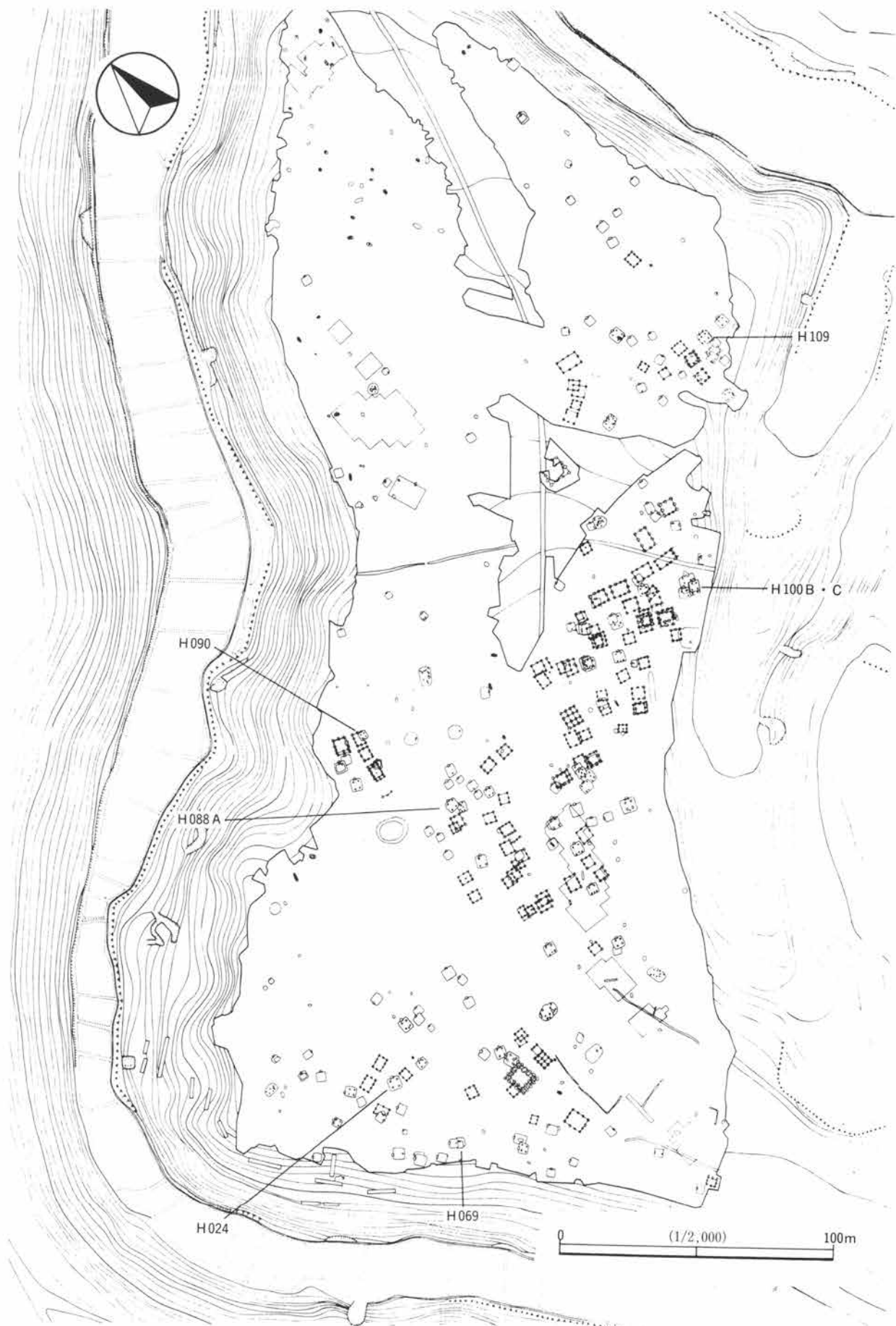
山武郡大網白里町砂田520他

村田川の最上流に面した台地上に位置する。台地北東端の竪穴住居跡H109 (15、16) から墨書土器「佛」が、竪穴住居跡H100B・C (11~14) から墨書土器「寺」「佛」「法」が出土した。台地中央西端付近の竪穴住居跡H088Aから浄瓶(6)が、竪穴住居跡H090 (7、8) からは墨書土器「佛」「□(家カ)」が出土した。なおこの付近のグリッドからは二彩陶器の破片(17)が出土した。さらに台地南端の竪穴住居跡H024 (1、2) から墨書土器「盛□(佛カ)」が、竪穴住居跡H069A (3~5) から須恵器鉄鉢形土器が出土した。このように台地の広い範囲から時間幅をもつ仏教遺物が出土している。なお、台地南端付近に位置する四面庇建物跡が仏堂と指摘されている。



第32図 砂田中台遺跡出土遺物 (1~16・¼、17・½)



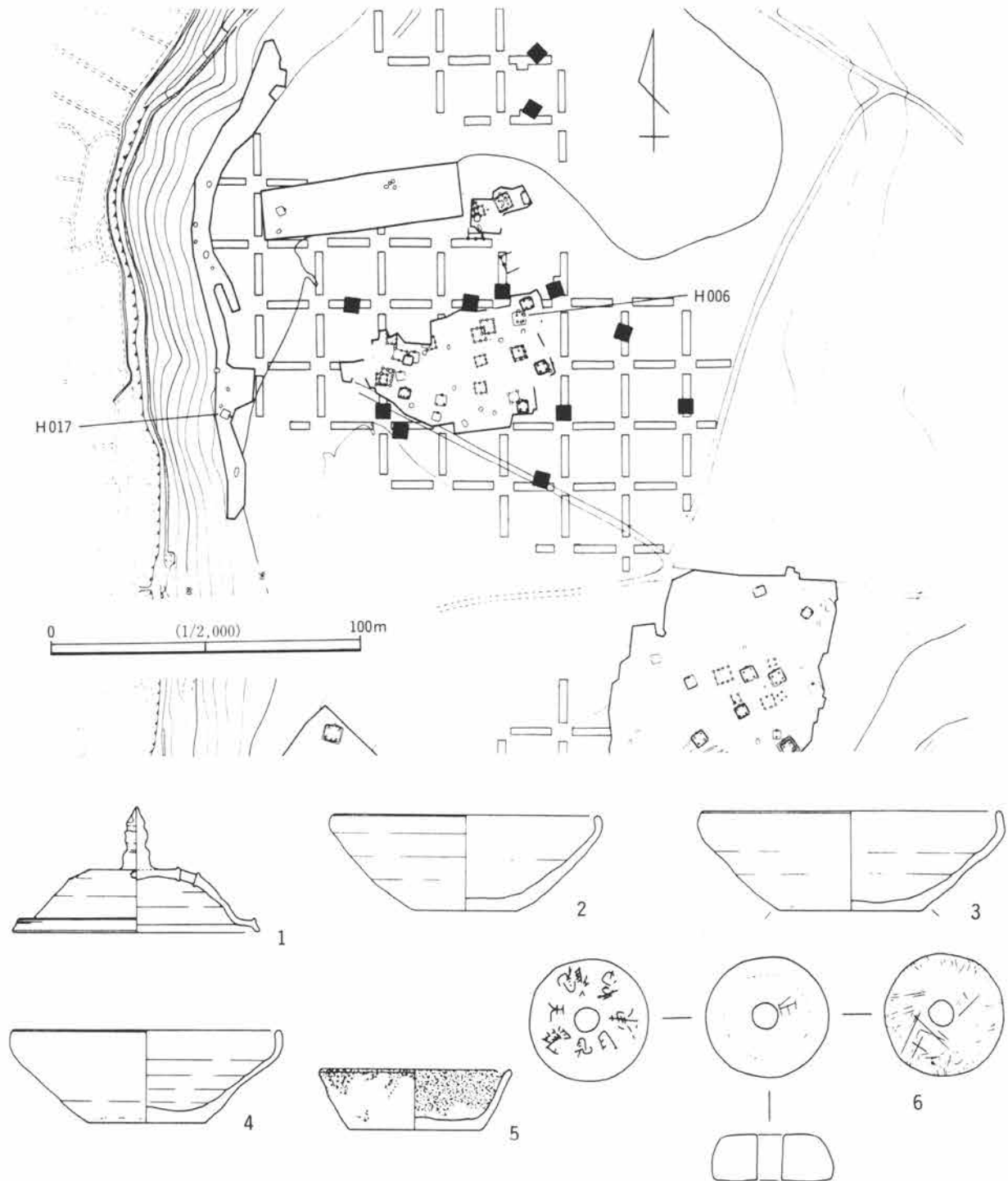


第33図 砂田中台遺跡遺構配置図

66 中林遺跡

山武郡大網白里町砂田字南中林439他

村田川の最上流に面した台地上に位置する。台地中央部で掘立柱建物跡がやや集中して発見された。仏教遺物は、台地西端から単独で発見された竪穴住居跡H017からまとまって出土した(1~5)。香炉蓋と土師器鉢形土器3点と、灯明皿、坏、甕、甑が発見された。なお、台地中央の掘立柱建物跡群に接した竪穴住居跡H006から「東・月・見・還・天・観・為」と刻書された石製紡錘車(6)が出土した。

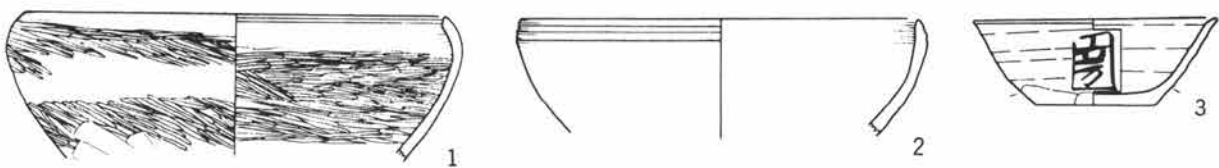
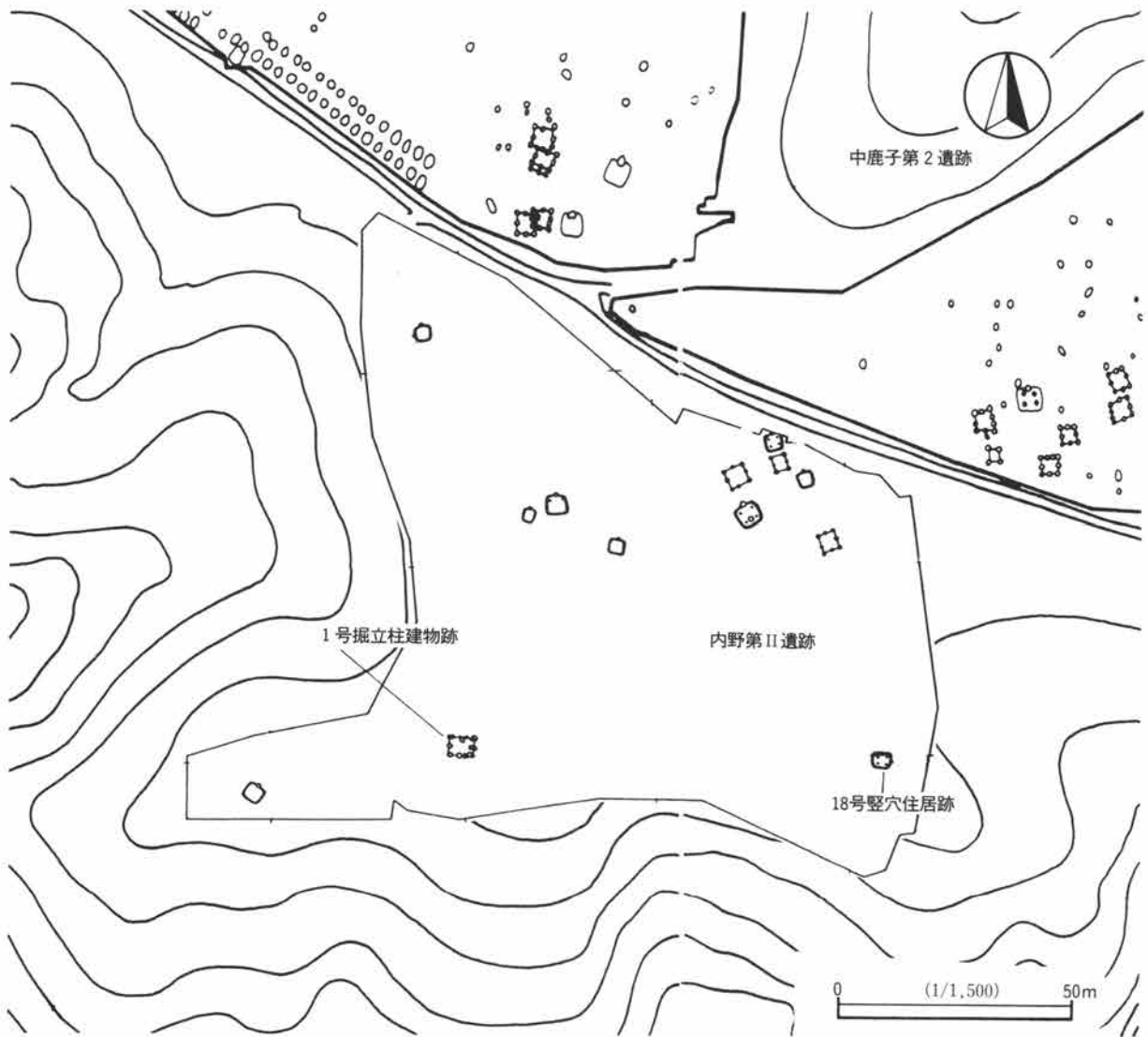


第34図 中林遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

67 内野第II遺跡

茂原市桂840他

村田川上流の谷津に面した台地端部に位置する。台地中央の中鹿子第2遺跡に隣接して掘立柱建物跡群等がまとまって発見された。そして、これら建物跡群から約40m離れた台地南東端の18号竪穴住居跡から土師器鉄鉢形土器2点と墨書土器「囿」が出土した(1~3)。また、台地南西端の1号掘立柱建物跡から富寿神寶が、H003土坑から神功開寶が出土した。富寿神寶は1号掘立柱建物跡の地鎮に使用されたと考えられている。なお、隣接する中鹿子第2遺跡からも墨書土器「寺」「佛カ」が出土している。



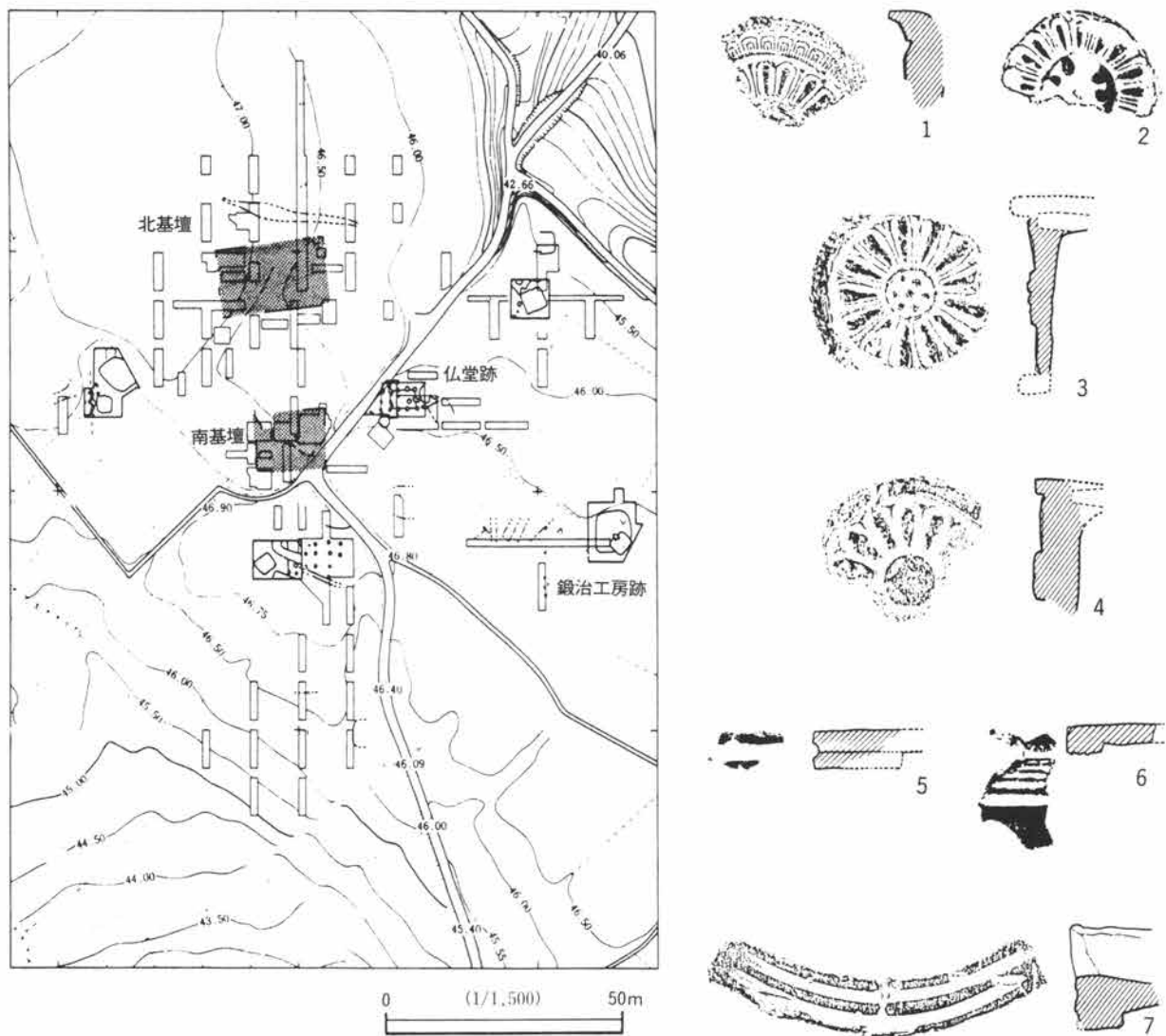
第35図 内野第II遺跡遺構配置図・出土遺物

69 真行寺廃寺跡

山武郡成東町真行寺565他

境川を望む標高約46mの台地端部に位置している。支谷を一つ隔てた北東の台地上に前方後円墳2基を含む真行寺古墳群が位置し、北西約400mの島戸東遺跡は武射郡家の可能性が指摘されている。

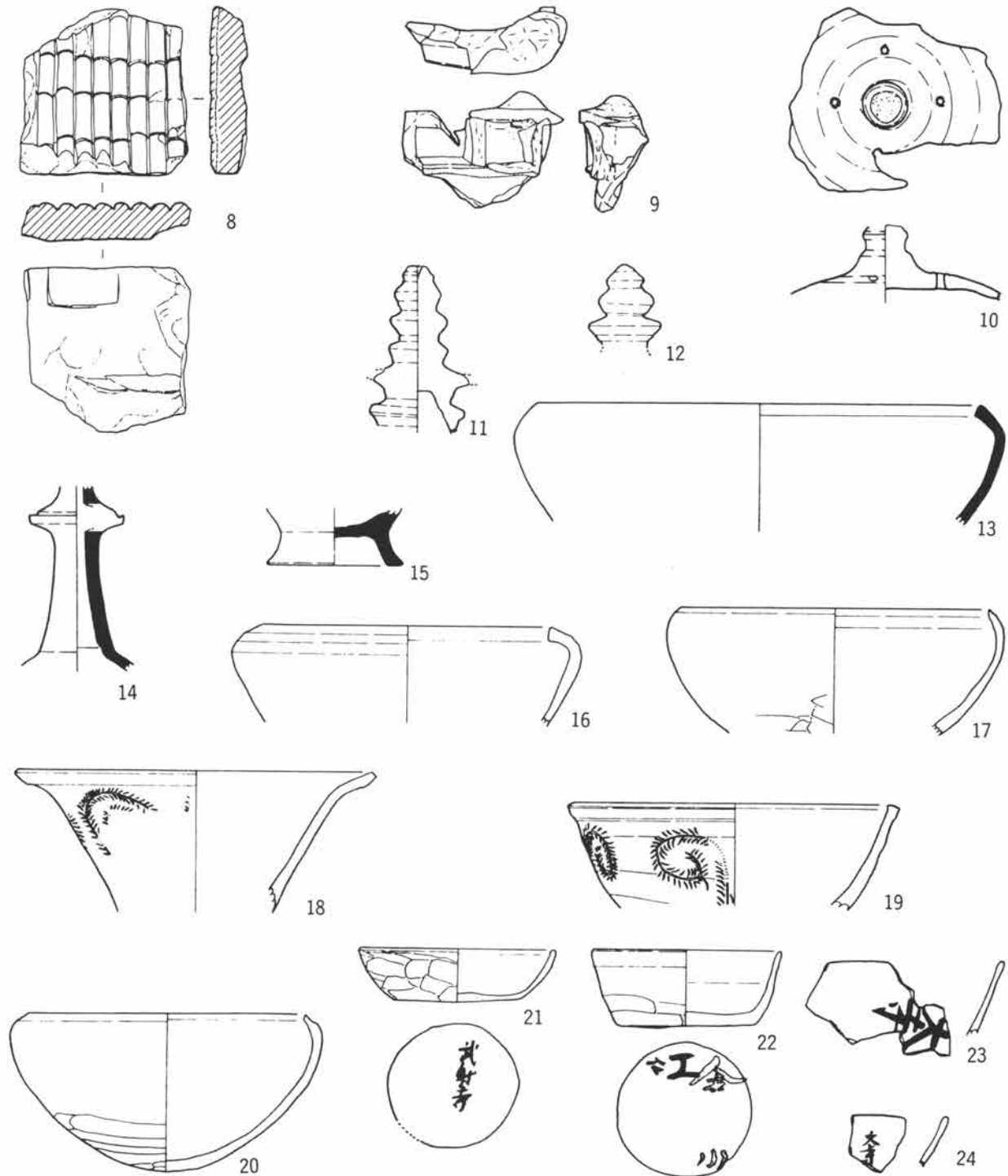
昭和56～58年度に(財)千葉県文化財センターが、昭和57・58年度には成東町教育委員会が発掘調査を実施した。基壇建物跡2基と掘立柱建物跡、鍛冶工房跡、古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡が確認された。南北に並ぶ基壇は主軸方向をやや異にしているが、南基壇が金堂跡、北基壇が講堂跡に比定されている。南基壇では掘込み地業が、北基壇では旧表土上の地業と瓦積み化粧の存在が確認された。塔は未確認で、存在する可能性は低い。このほか、南基壇の南で門跡、南基壇の東で仏堂と想定される三間四面の掘立柱建物跡が、そして北基壇の北や南基壇の南東からも掘立柱建物跡が確認され、寺院施設が基壇建物跡周辺に広く展開している。なお講堂は基壇築成土中から瓦片が出土し、金堂後の造営と想定されている。さらに講堂基壇は平面規模や瓦積み化粧、基壇回りの溝や基壇外周被覆土層の存在など、多くの点で上総国分尼寺跡講堂基壇との工法上の類似点が指摘されている。また、金堂基壇周辺で11世紀以降の土器が出土しており、この時期まで寺院跡が存続した可能性が指摘されている。このほか、瓦塔や鉄鉢、浄瓶、香



第36図 真行寺廃寺跡遺構配置図・出土瓦 (1/6)

炉蓋、墨書土器「武射寺」「大寺」「仏工舎/小」など多くの仏具等が出土した。

軒丸瓦は雷文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦(1、2)、素縁単弁十三葉蓮華文軒丸瓦2種(3、4)の3種がある。軒平瓦は素文(6)、二重弧文(5)、重郭文(7)の3種がある。6は段顎で顎面に3条の隆線をもつ。丸瓦は無段式と有段式の2種がある。前者には粘土板成形によるものと粘土紐成形によるものがある。平瓦は凸面ナデツケ成形、格子叩き、平行叩き、斜格子叩き、縄叩き、同心円叩き、特殊叩きがある。特殊叩きには蓮華文や鳥形、蕨手文、飛雲文、渦巻き文など多様な文様が確認されている。

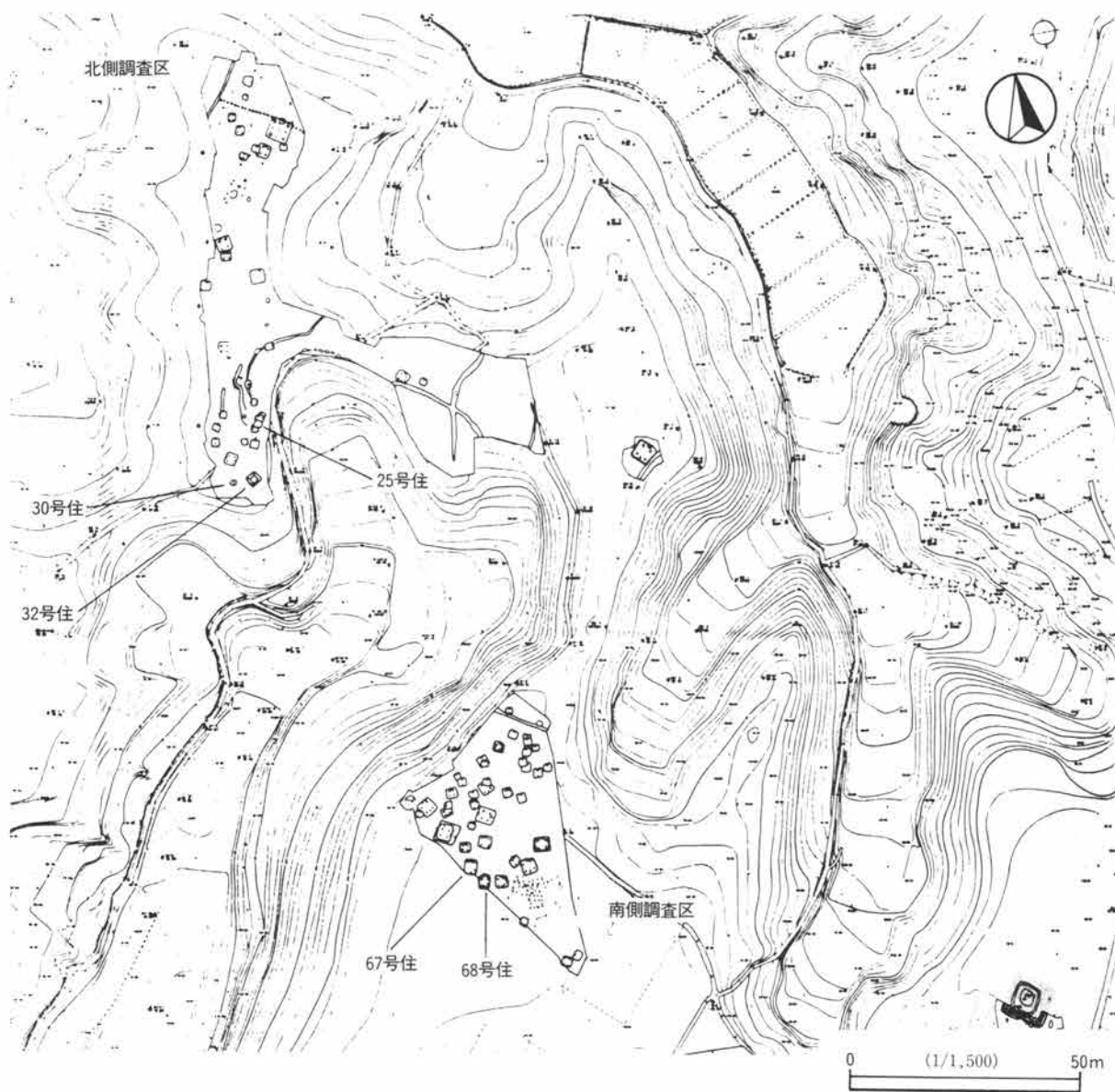


第37図 真行寺廃寺跡出土遺物 (1/4)

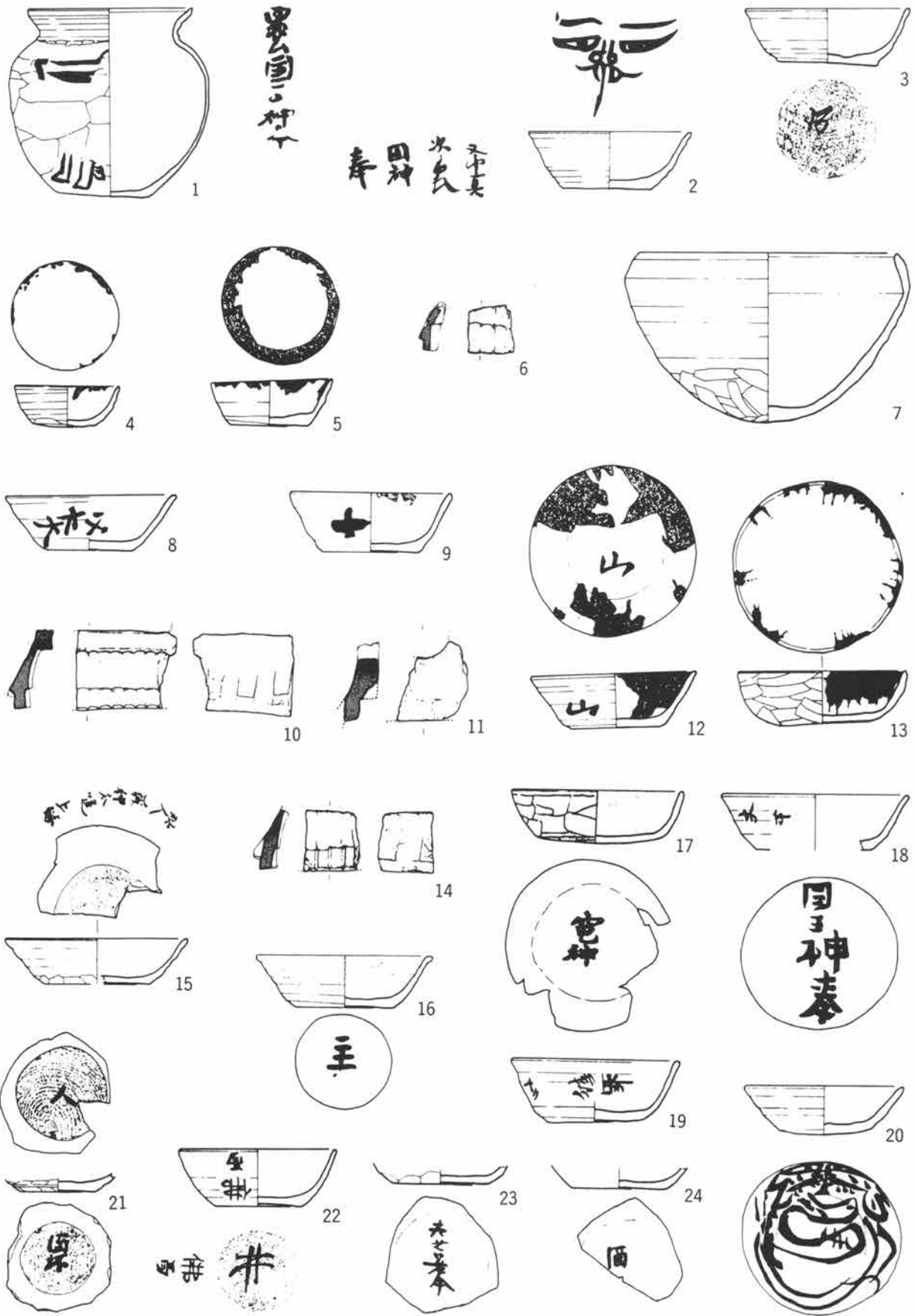
76 庄作遺跡

山武郡芝山町庄作634他

栗山川支流の高谷川に注ぐ支谷に挟まれた台地上に位置する。北側調査区からは、南からの支谷に突き出した台地南端に位置する30号竪穴住居跡（4～7）から瓦塔片と土師器鉄鉢形土器が、32号竪穴住居跡（8～14）から瓦塔片が、25号竪穴住居跡（1～3）から人面墨書土器「丈部真次□（召カ）代国神奉」「罪ム国玉神奉」が出土した。30号・32号竪穴住居跡からは灯明皿の出土量が特に多い。さらに南側調査区の台地中央部の68号竪穴住居跡（21～24）から墨書土器「佛酒／井」「酒坏」が、隣接する67号竪穴住居跡（18～20）から人面墨書土器「国玉神奉／手」などが出土した。北側調査区から仏教遺物等がまとめて出土しており、台地南端に瓦塔が設置されていた可能性がある。



第38図 庄作遺跡遺構配置図

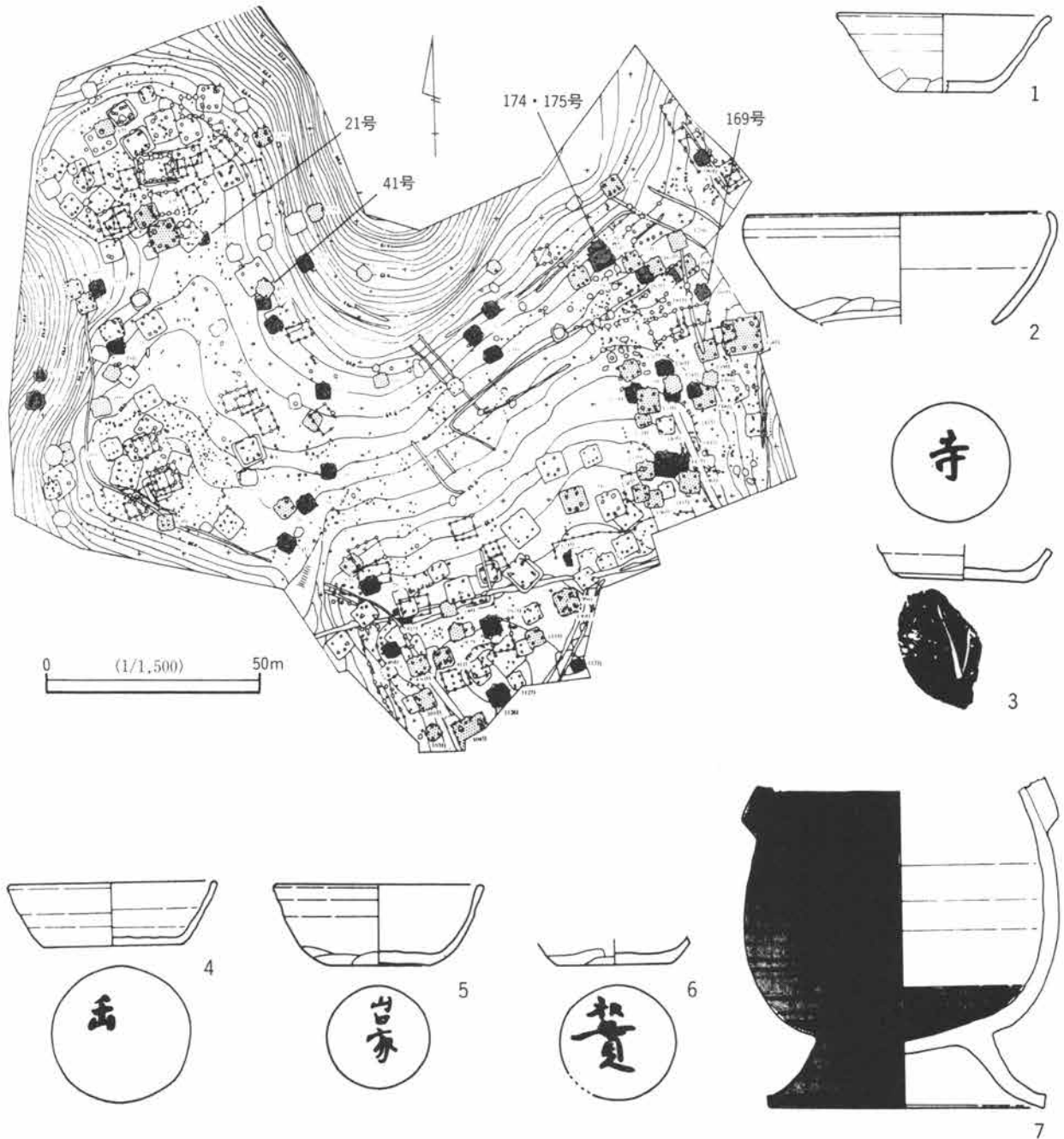


第39図 庄作遺跡出土遺物 (1/4)

81 作畑遺跡

東金市油井字作畑224他

真亀川に面した台地南端に位置する。散在した複数の竪穴住居跡から仏教遺物が出土した。調査区北西の21号竪穴住居跡（1、2）から土師器鉢形土器が、41号竪穴住居跡（3、4）から墨書土器「寺」「缶」が出土した。調査区北東の174号・175号竪穴住居跡から墨書土器「弘貫」（6）が、169号竪穴住居跡（5、7）から灰釉双耳壺と墨書土器「山口家」が出土した。なお墨書土器「弘貫」は久我台遺跡でも出土しており、同一の僧名と指摘されている。



第40図 作畑遺跡遺構配置図・出土遺物（1/4）

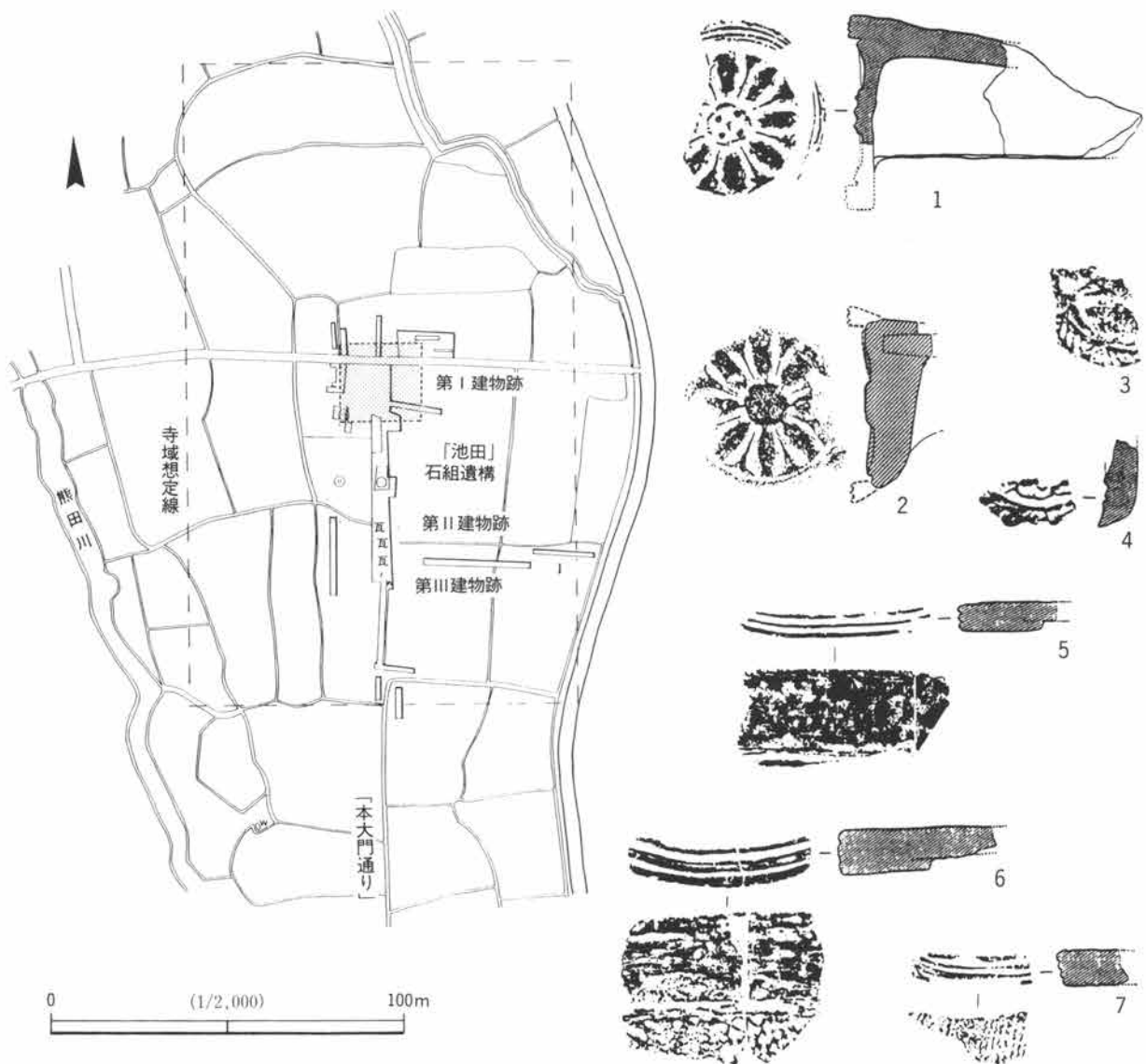


82 法興寺跡（岩熊廃寺跡）

夷隅郡岬町岩熊1555他

夷隅川支流の桑田川沿いの標高約15mの沖積地上に位置している。廃寺跡の東側丘陵上には、長祿5年(1461)銘の磬を所蔵した法興寺が位置している。廃寺跡の位置は法興寺住職の晋任式を執り行う場所で、「堂跡」「池田」「加持井戸」「御幣田」「本大門通り」などの地名が残されている。昭和48年度と昭和50年度に確認調査が行われ、南北に並ぶ3基の基壇建物跡と石組遺構など中世の寺院遺構が検出された。中世の基壇中とその下層から古代瓦が多く出土し、これらの下に古代の遺構が埋まっている可能性がある。

軒丸瓦は三重圏文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦(1、2)と鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦(3、4)がある。前者はいわゆる印籠つぎで、丸瓦との接合箇所に沈線を施したものがある。後者は傾斜縁である。軒平瓦は三重弧文2種(5、6)と四重弧文1種(7)の計3種がある。前者には段顎で朱痕が残るものがある。後者は無顎で、凸面の瓦当面際まで縄叩きが施されている。丸瓦は無段式のみで、平瓦は桶巻作りの格子叩きと、凸型台一枚作りの縄叩きと花文叩きがある。

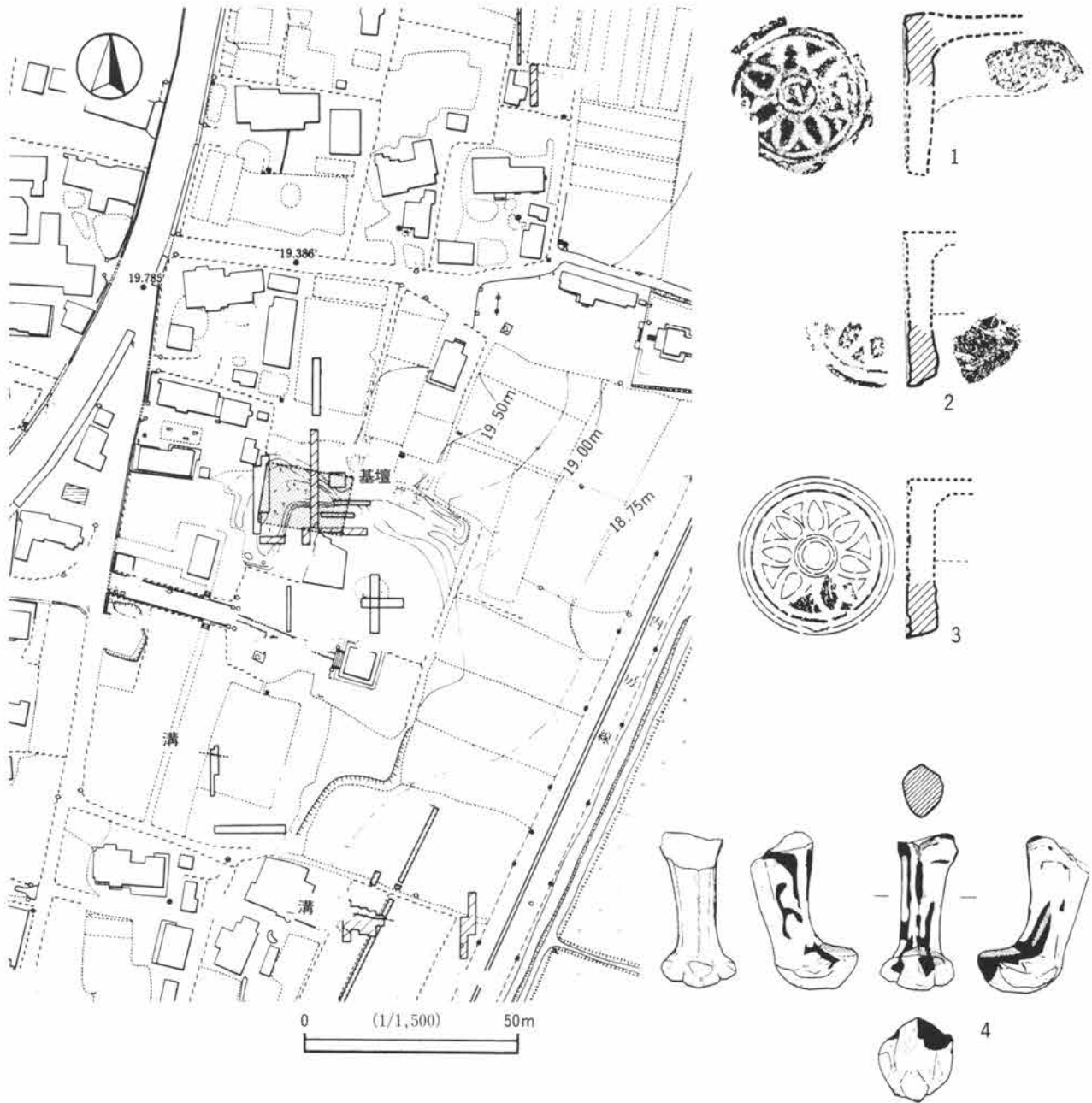


第41図 法興寺跡遺構配置図・出土瓦 (1/6)

84 安房国分寺

館山市国分959他

館山平野の南東部、標高19mの砂堤帯上に位置している。確認調査により基壇建物跡1基が発見された。東西約22m南北約15mの規模の掘込み地業が確認された。また、基壇建物跡から南約40mの位置で東西溝が1条確認され、寺院の区画に関わる可能性が指摘されている。瓦は基壇建物跡を中心に出土している。軒丸瓦は素縁素弁七葉蓮華文軒丸瓦1種で、瓦当面に布目痕があるものとなないもの(3)とがある。瓦当面に布目があるものには、さらに裏面にも布目があるもの(1)と布目をヘラケズリしたもの(2)がある。軒平瓦は出土していない。丸瓦は無段式で、凸面ナデ調整が施されている。平瓦は粘土板成形の凸型台1枚作りで、凸面縄叩きと格子叩きのものがある。また、基壇建物跡の西側から、廃棄された瓦片に混じって三彩の獣脚(4)が1点出土した。



第42図 安房国分寺遺構配置図・出土遺物 (1~3・1/6、4・1/2)

87 下総国分寺

市川市国分5丁目

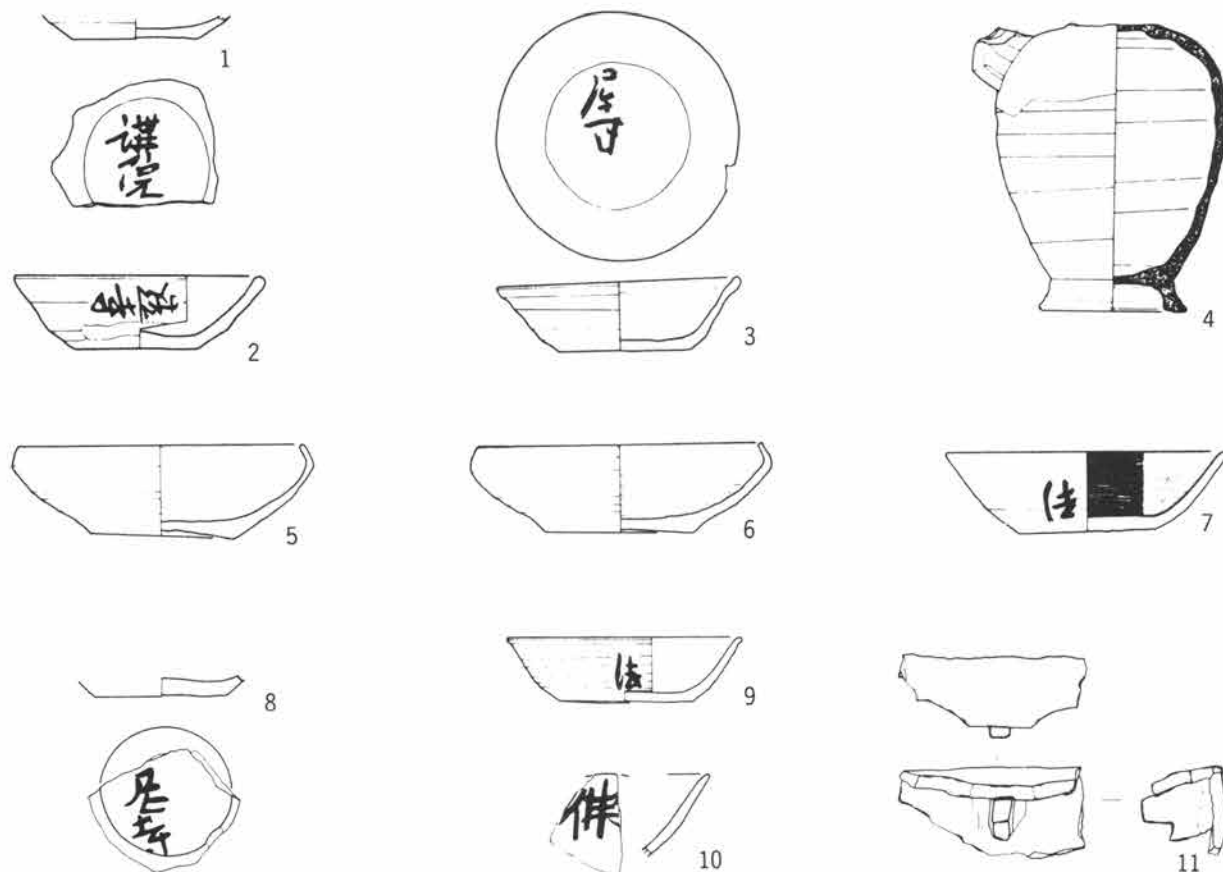
江戸川左岸の台地上に、東側に僧寺、西側に尼寺が並んで位置している。昭和41年と42年に市川市が伽藍中心を発掘調査し、金堂・講堂・塔の規模と配置が判明した。その後、市川市教育委員会による緊急調査や平成元年から5年にかけての範囲確認調査により、寺院地や付属施設の解明が進んでいる。

金堂が東に、塔が西に並び、その北に講堂が位置している。講堂の北からは掘立柱建物跡の僧坊が確認され、その北側と西側で溝の区画と、講堂との間の板塀跡が確認された。さらに寺院地の区画溝が、北・西辺と北西隅で確認された。北辺溝211m、西辺溝201mの範囲が確認されている。なお、寺院地の東と南は台地縁辺で、自然地形の区画と考えられている。寺院地内の伽藍北方からは営繕施設や下働きの人々が住んでいた区域などが発見されている。

88 下総国分尼寺跡

市川市国分3・4丁目

昭和42年と43年の市川市の中心伽藍の発掘調査で、金堂と講堂の規模が確認され、その後の市川市教育委員会による緊急調査や和洋学園国分分校地の発掘調査、さらに昭和57年から60年の範囲確認調査により、寺院地や付属施設の解明が進んでいる。中心伽藍は金堂と講堂が南北に並び、講堂の北側で掘立柱建物跡の尼坊が、そしてこれらを区画する溝と板塀、築地塀が確認された。さらに寺院地の区画溝が北・東・南辺と北東隅と南東隅で確認された。北辺溝324m、東辺溝303m、南辺溝53mの範囲が確認された。寺院地の西辺は台地縁辺に当たり、自然地形による区画と考えられている。

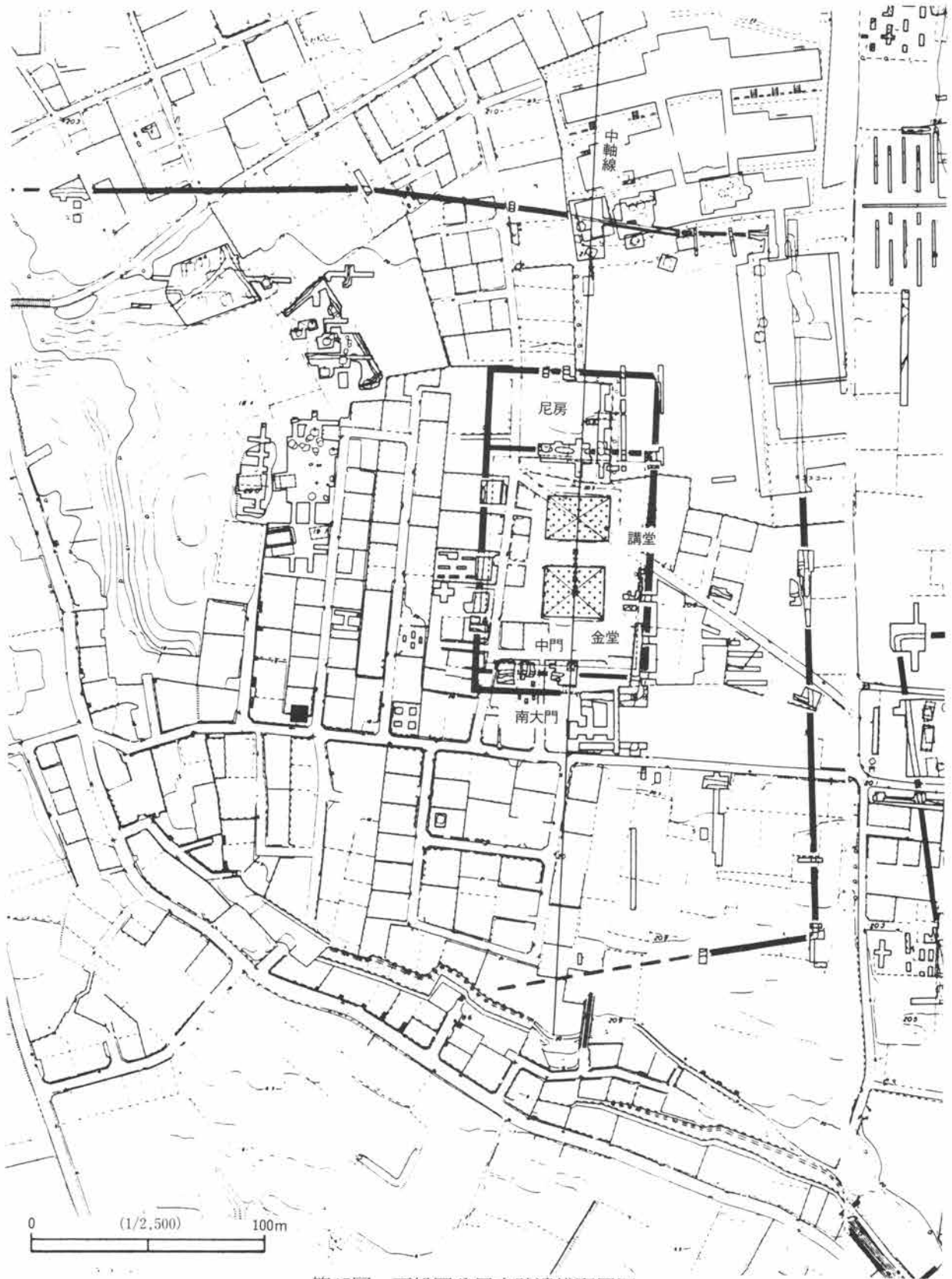


第43図 下総国分寺・尼寺跡出土遺物（1/4）

II 主要遺跡概要

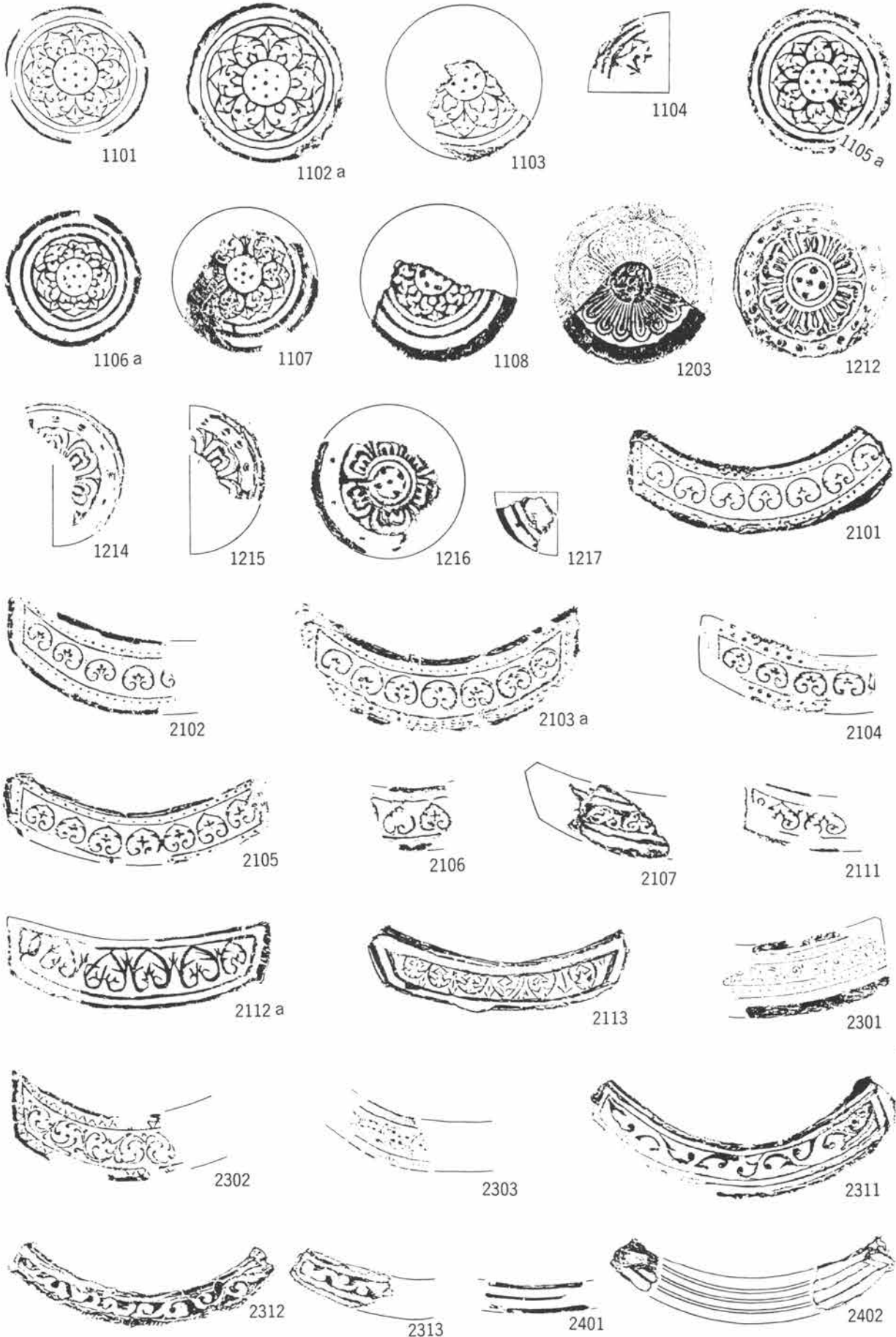


第44図 下総国分寺遺構配置図



第45図 下総国分尼寺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要

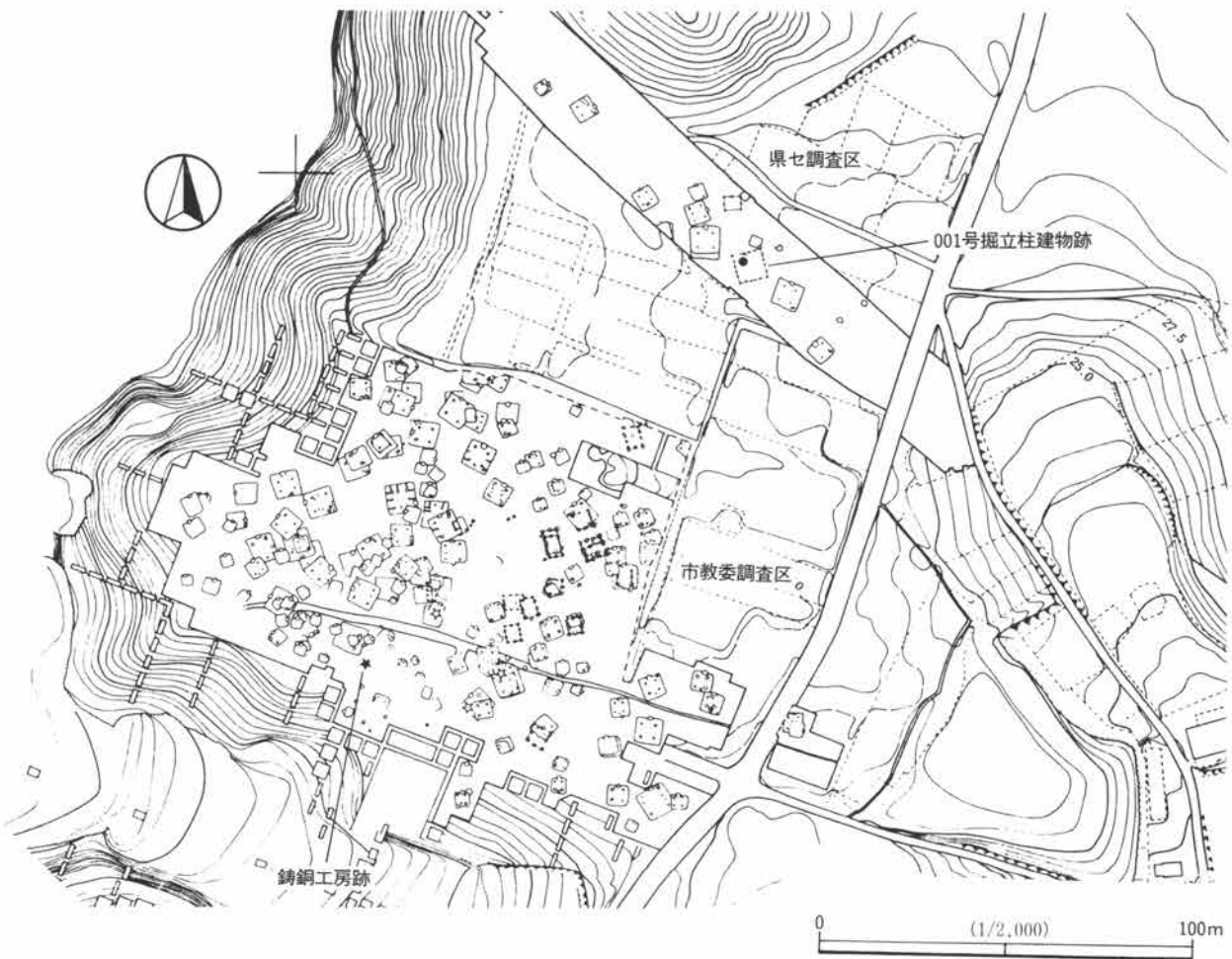


第46図 下総国分寺・尼寺跡出土瓦 (1/6)

102 谷津遺跡

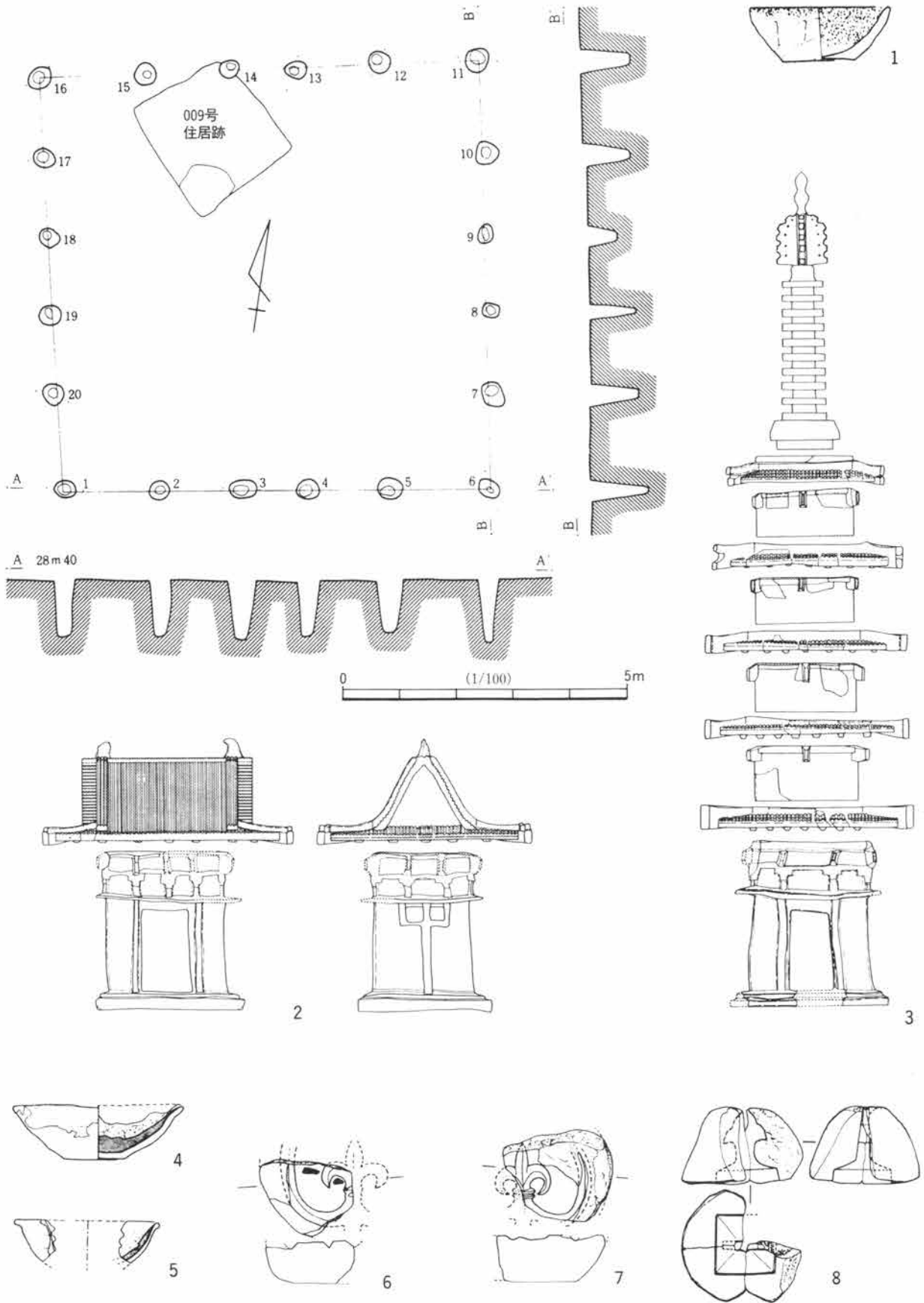
千葉市中央区花輪町340他

生実川に面した台地上に位置する。古墳時代後期から続く集落跡で、特に8世紀後半に竪穴住居跡が増加し、10世紀まで続いている。台地中央で発見された掘立柱建物跡群は同一軸方位のものが多く、すべて重複する竪穴住居跡を切って作られている。9世紀の竪穴住居跡はこれら掘立柱建物跡の周囲に分布するものが多い。県セ調査区の001号掘立柱建物跡は、これら台地中央の掘立柱建物跡群から離れているが、同様の軸方位である。この001号掘立柱建物跡周辺から、瓦塔と瓦堂（2、3）がまとまって出土した。瓦塔の基壇部分は、001号掘立柱建物跡の北東に接する001号竪穴住居跡の遺構検出面からまとまって出土した。001号竪穴住居跡は8世紀後半に想定される。その他の瓦塔片と瓦堂片は001号掘立柱建物跡の南側付近からまとまって出土した。瓦塔と瓦堂は001号掘立柱建物跡に伴う可能性が高い。先行する009号竪穴住居跡（1）の年代観から、001号掘立柱建物跡は9世紀以降の可能性が高い。また、台地中央の掘立柱建物跡の軸方位の傾向性からはさらに年代が降る可能性がある。なお、001号掘立柱建物跡は方五間の平面規模に対して柱穴が小規模である点から、簡単な構造の瓦塔と瓦堂の覆屋と想定される。また、台地南西端から印鋳型や錫杖鋳型と鋳銅工房跡などが発見された（4～8）。鋳銅時期は埴塙として使用された土器類から10世紀ころと推測される。



第47図 谷津遺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要



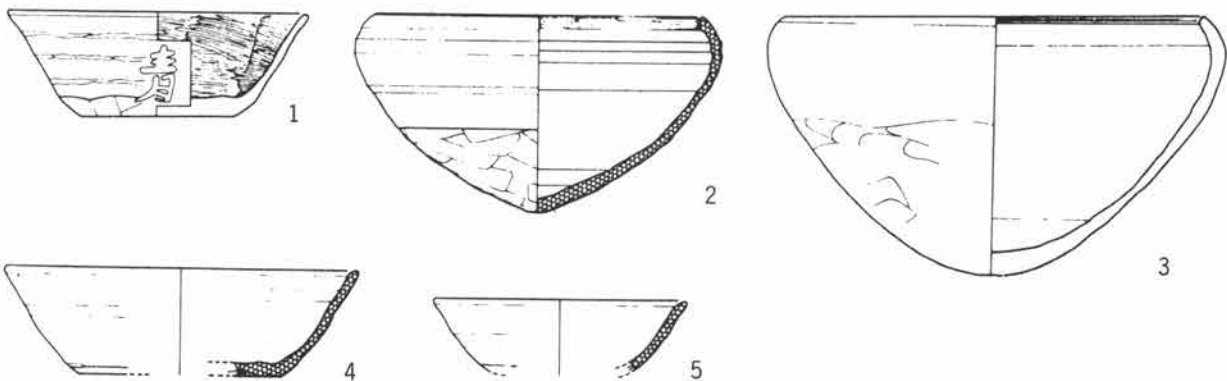
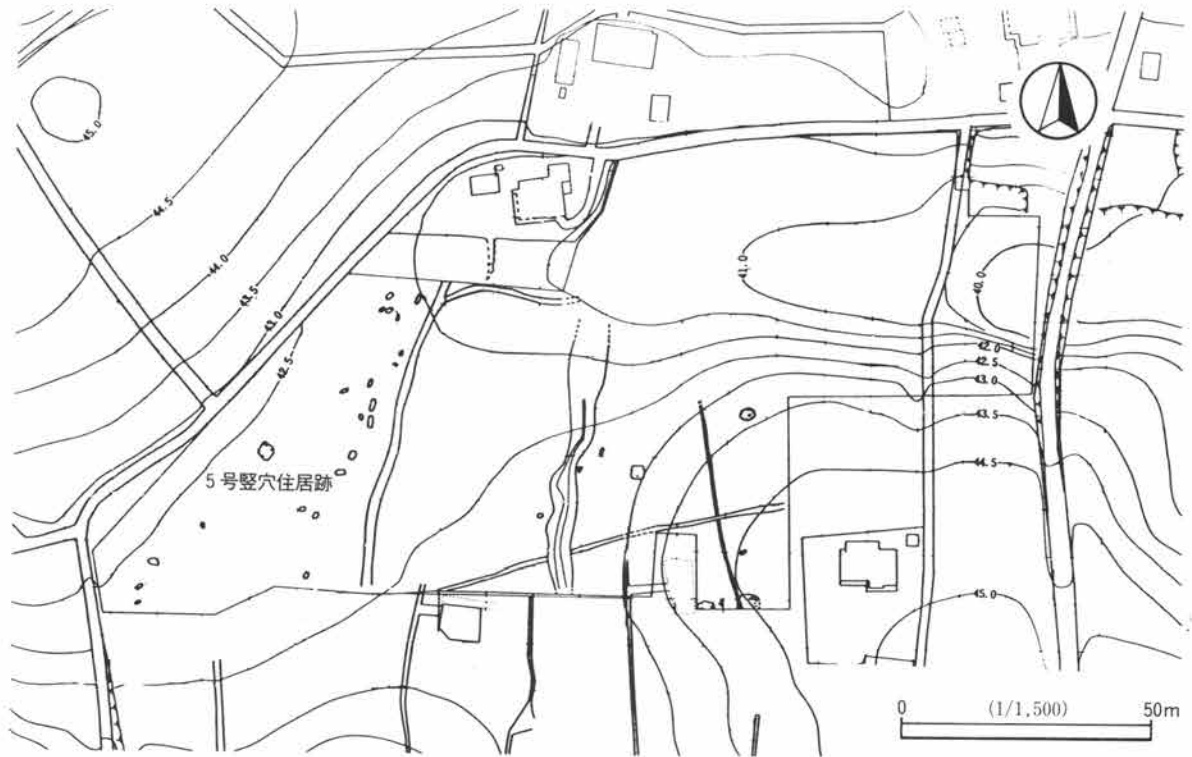
第48図 谷津遺跡001号掘立柱建物跡・出土遺物 (1/4、ただし2と3は1/6)



103 六通遺跡

千葉市緑区大金沢902-3 他

西と南は村田川に注ぐ支谷に、東は都川に注ぐ支谷に面する台地上に位置する。東から進入する谷津の谷頭部分の5号竪穴住居跡（1～5）から須恵器鉄鉢形土器と土師器鉄鉢形土器が出土した。土師器鉄鉢形土器は住居跡隅部の床面から発見された。なお、須恵器鉄鉢形土器の内面に赤色顔料の付着が残されている。このほか墨書土器「青」や、土師器杯・甕・須恵器杯・甕・甌・刀子・砥石等が発見された。ほかに調査区内からは2軒の竪穴住居跡が発見されている。



第49図 六通遺跡遺構配置図・出土遺物（1/4）

## II 主要遺跡概要

### 110 長熊廃寺跡

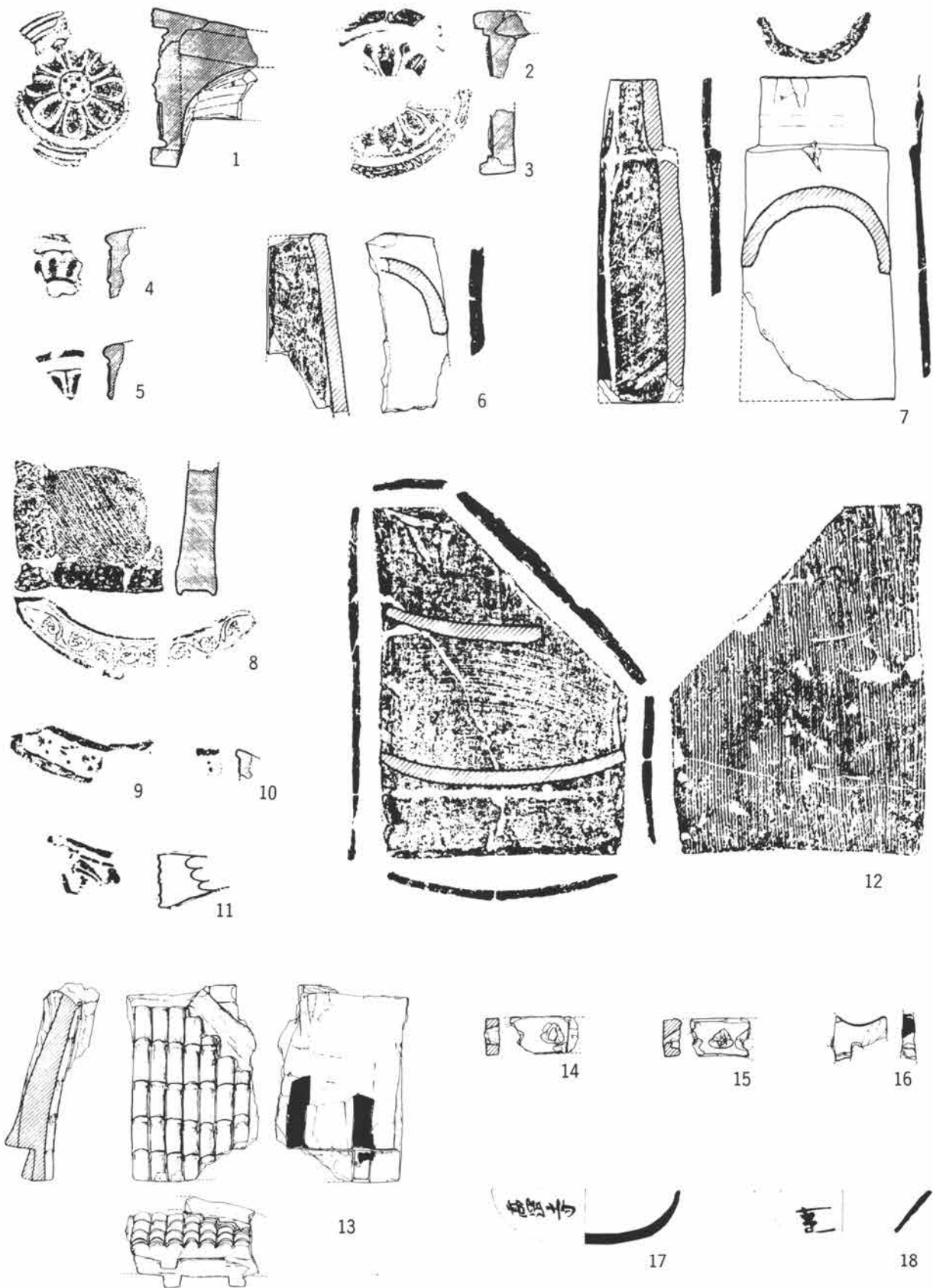
佐倉市長熊260他

鹿島川の支流高崎川の支谷に面した台地上に位置している。昭和20年代後半から30年代にかけて立正大学を中心に発掘調査が行われた。その後昭和60年に(財)千葉県文化財センターにより確認調査が実施され、基壇1基、土坑5基、溝5条などが確認された。基壇は掘込み地業で、南北9.4m、東西12.6mの規模が確認された。昭和20・30年代の調査では塔・講堂・中門・南大門・回廊等の存在も推定されたが、これらは基壇建物跡としては存在しない可能性が高い。このほか、周辺から瓦を出土する竪穴住居跡も確認された。

出土軒丸瓦は3種で、三重圈文縁単弁八葉蓮華文(1)と素縁単弁八葉蓮華文(2)、常陸国分寺系(4、5)がある。軒平瓦は均整唐草文(8)と並行連珠文(9、10)、唐草文(11)の3種がある。並行珠文軒平瓦は常陸国九重廃寺跡と下大島遺跡の出土瓦と同文で、唐草文軒平瓦は結城廃寺跡出土瓦と同系である。丸瓦は有段式(7)と無段式(6)の2種がある。平瓦は凸面に縄叩きを施すものと、ヘラ調整を施すものの2種であるが、いずれも凸型台1枚作りである。このほか隅切瓦(12)や墨書土器「高叢寺」(17)、瓦塔(13~16)が出土した。墨書土器「高叢寺」は8世紀第3四半期の杯で、このほか須恵器は8世紀第2四半期後半から8世紀第3四半期以降のものが出土した。



第50図 長熊廃寺跡遺構配置図



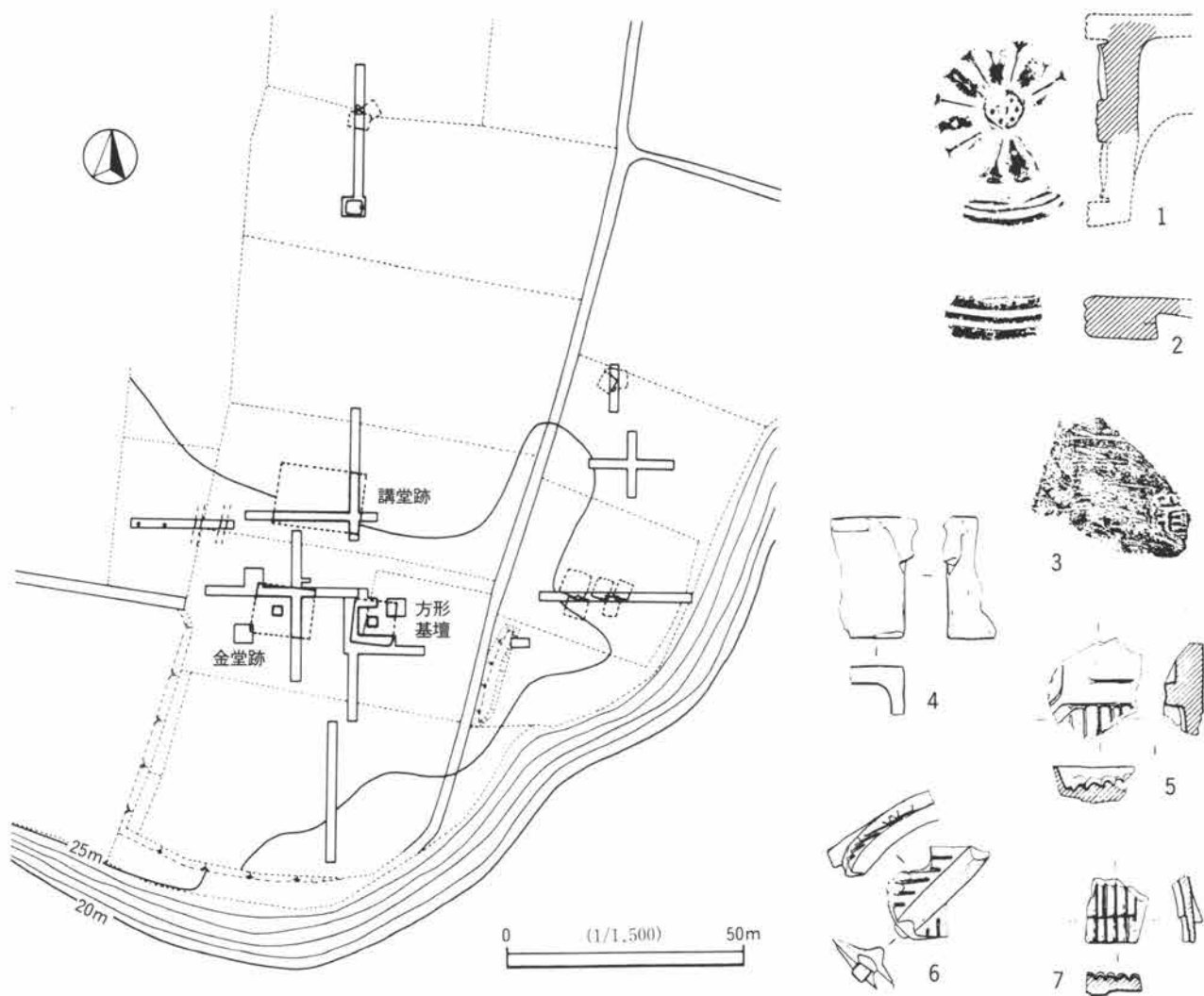
第51図 長熊廃寺跡出土遺物 (1~12・ $\frac{1}{6}$ 、13~18・ $\frac{1}{4}$ )

111 木下別所廃寺跡

印西市別所876-1他

手賀沼に注ぐ亀成川に面した台地上に位置している。約800m北西には創建期瓦を焼成した曾谷ノ窪瓦窯跡が所在している。廃寺跡は昭和52年と53年に早稲田大学考古学研究室によって発掘調査が実施され、基壇建物跡3基と竪穴住居跡9軒が確認された。金堂基壇は旧表土上に地業をし、東西約13m、南北約10mの規模が確認された。塔と想定される東側の方形基壇は掘込み地業で、一辺8.7mの規模が確認された。金堂の北約15mの講堂基壇は掘込み地業で東西18.6m、南北13.5mの規模が確認された。ただし、いずれも建物痕跡は発見されていない。なお、方形基壇の周囲約10m内から瓦塔片(4~7)が発見され、方形基壇に瓦塔が設置された可能性が指摘されている。このほか、伽藍の東側と北側で竪穴住居跡群が、西側で南北溝と掘立柱跡等が発見された。

出土軒瓦は三重圈文縁単弁八葉蓮華文(1)と三重弧文軒平瓦(2)がある。軒丸瓦の中房には1+6の蓮子が配置されているが、中央の蓮子が周辺の蓮子よりも大きい特徴を有している。また、接合する丸瓦の端部を凹凸両面から削って端部を尖らせ、接合部に刻みを入れたものがある。軒平瓦は段顎である。丸瓦は無段式と有段式の2種が、平瓦は桶巻作り平瓦と凸型台一枚作り平瓦、凸面布目平瓦がある。また、凸面に「道」のスタンプを押捺した文字瓦(3)がある。



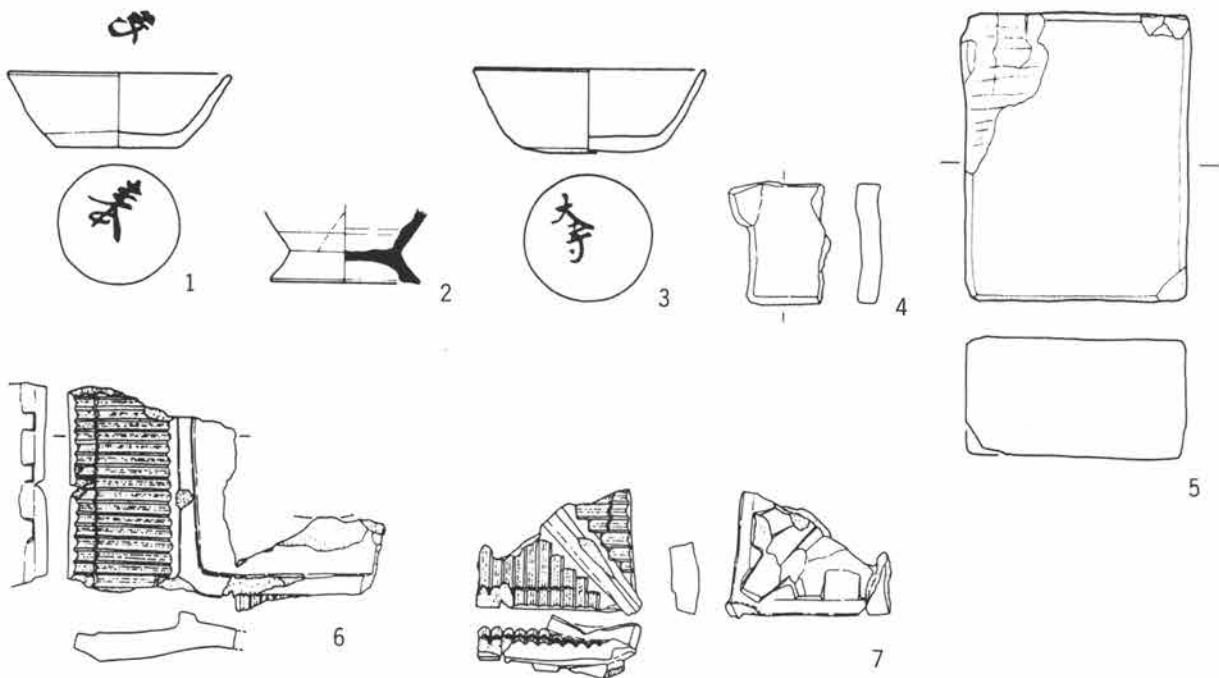
第52図 木下別所廃寺跡遺構配置図・出土遺物 (1~3・1/6、4~7・1/4)

112 白幡前遺跡

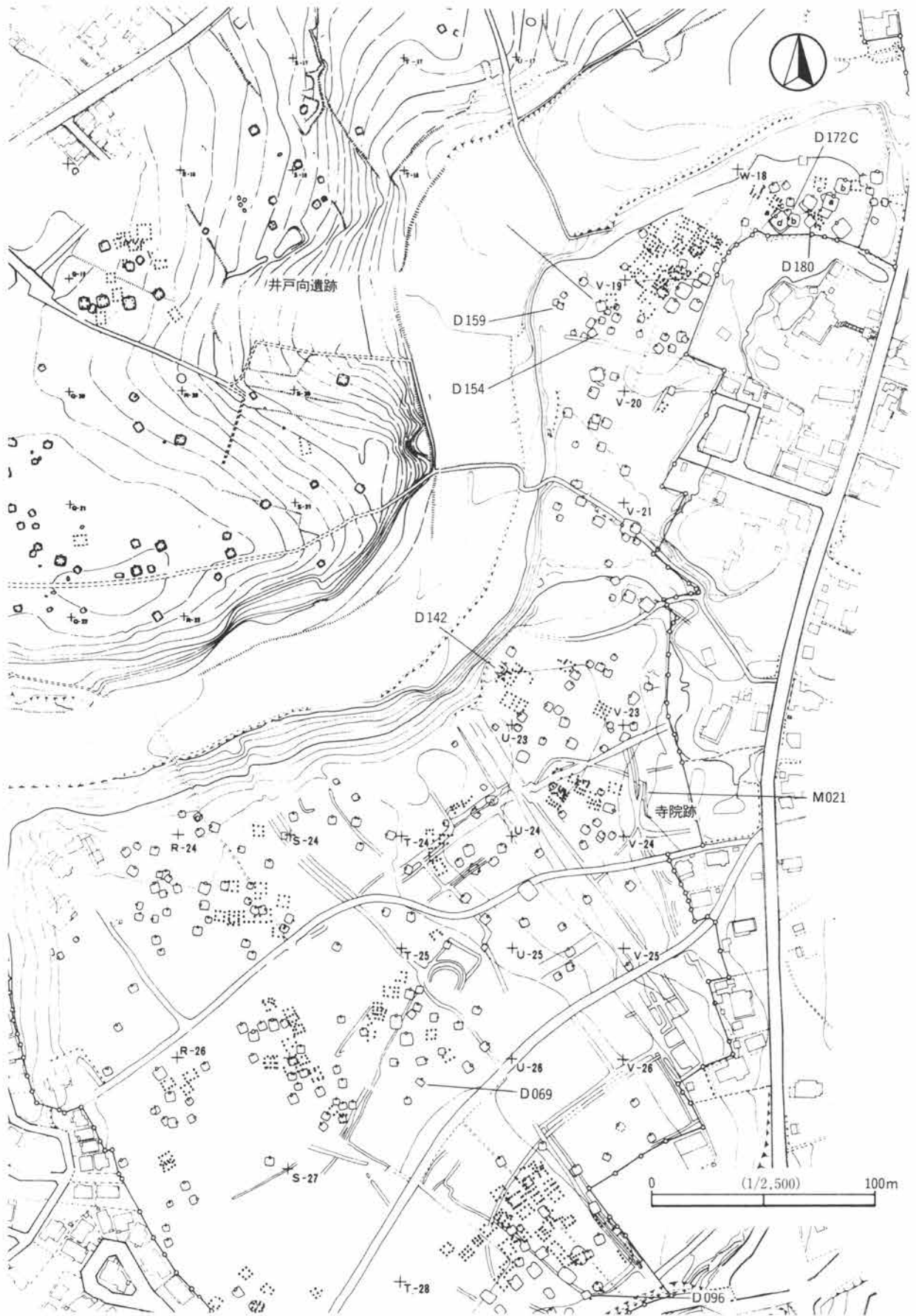
八千代市萱田字白幡前・庚塚・堂ノ後・池の台

新川に注ぐ小支谷に挟まれた台地上に位置する。溝で区画された寺院跡は、調査区のほぼ中央から発見された。区画内からは、西側に三間四面の掘立柱建物跡、北側に側柱建物跡群、南側等に竪穴住居跡群が発見された。溝M034等から瓦塔と瓦堂（8～10）が、そして竪穴住居跡D128・D126（11）・D124等からも漆喰と赤彩された瓦塔が発見された。竪穴住居跡D124からはほかに、体部外面に「佛」と墨書された土師器鉢形土器と須恵器蓋（14、15）が、竪穴住居跡D126からは浄瓶（17）と須恵器盤などが、竪穴住居跡D128からは硯に転用された土師器盤なども出土した。また、区画外北側の竪穴住居跡D142から土師器鉢形土器（18）が出土した。

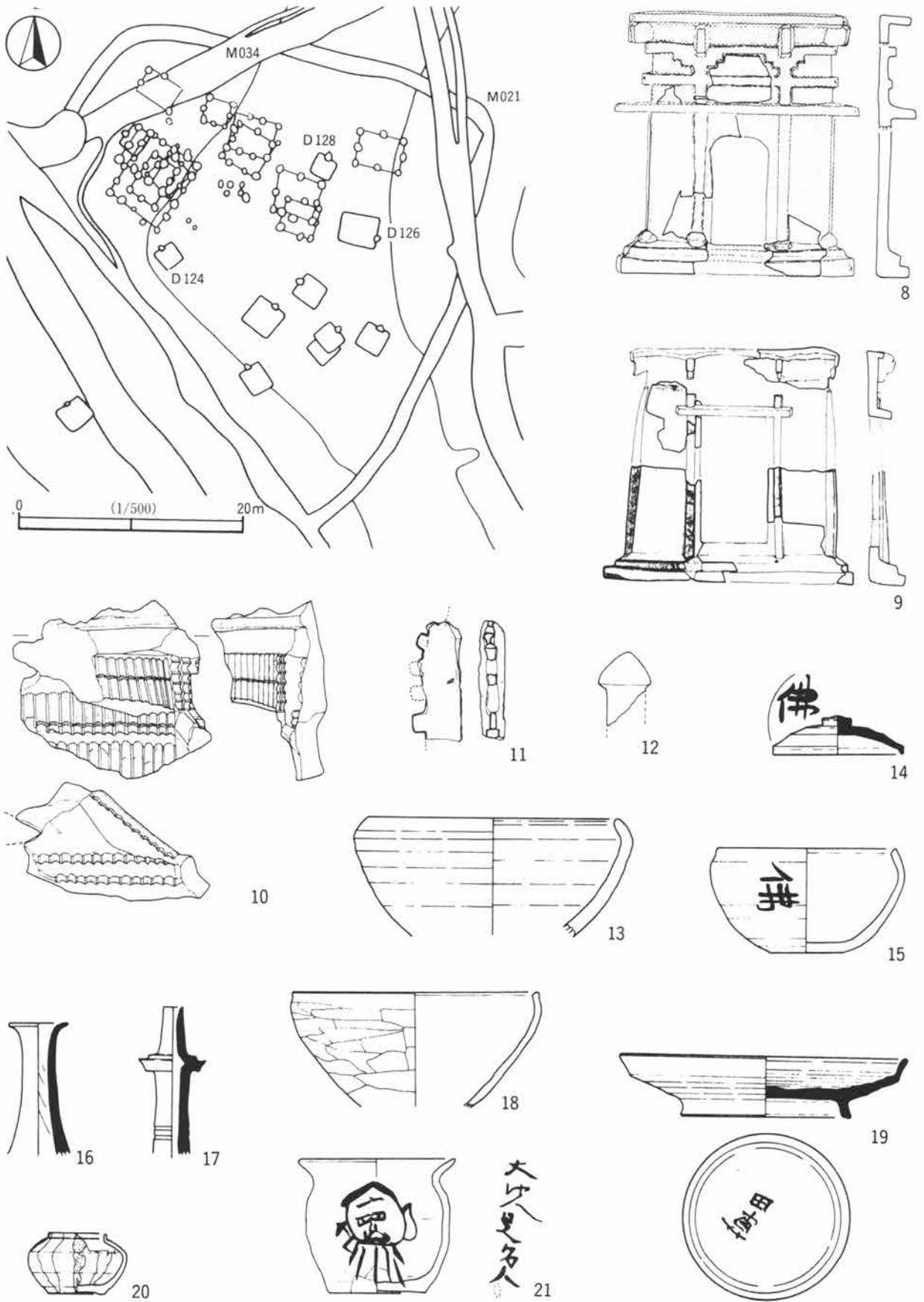
このほか、方形区画の約200m北側に位置する竪穴住居跡D154（6）・D159（4、7）などの覆土中からも瓦塔がまとめて出土した。方形区画内の寺院跡とは別に瓦塔を設置していたと考えられる。隣接する竪穴住居跡D183からは墨書土器「大寺」（3）が出土している。その瓦塔出土地の約100m東に位置する竪穴住居跡D180から墨書土器「寺／奉」（1）と水瓶の可能性がある須恵器（2）が、竪穴住居跡D172Cからは温石の可能性が指摘されている石製品（5）が出土した。さらに方形区画の南側の台地上からも竪穴住居跡D069から土師器鉢形土器（13）が、竪穴住居跡D096から水瓶（16）などが分散して発見された。このように白幡前遺跡では調査区の広い範囲から仏教遺物が発見され、特に方形区画の寺院跡内に集中が認められる。



第53図 白幡前遺跡出土遺物 1（1/4）



第54図 白幡前遺跡遺構配置図1



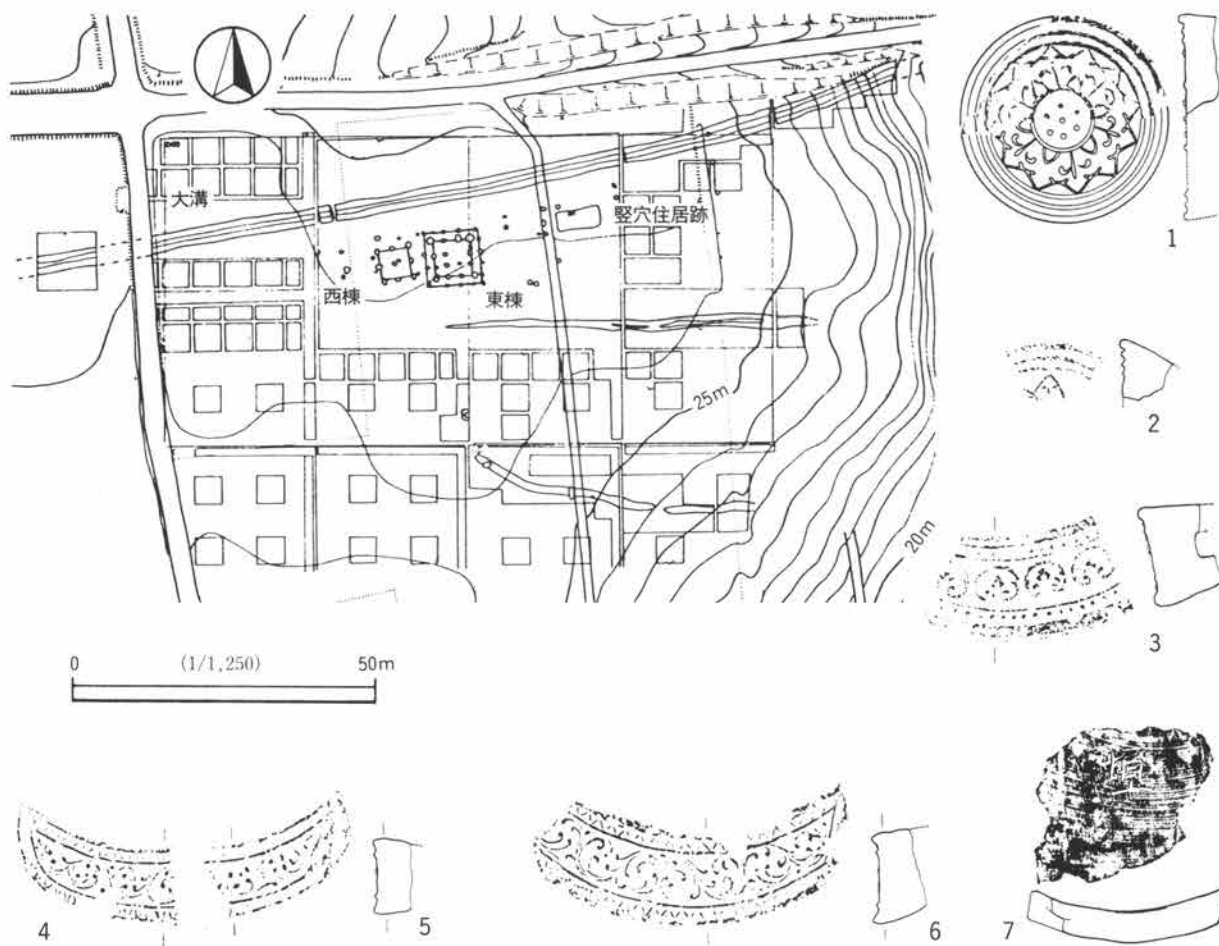
第55図 白幡前遺跡遺構配置図2・出土遺物2 (1/4)

113 大塚前遺跡

印西市小倉字小倉1丁目（浦幡新田大塚前592）

印旛沼に注ぐ神崎川の支流戸神川の上流域で、手賀沼に注ぐ亀成川支流の和泉川との分水界の標高約25mの台地上に位置している。昭和47年に（財）千葉県都市公社が発掘調査を実施し、掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1軒と溝状遺構が発見された。3棟の建物跡はほぼ東西に並立して発見され、中央から三間四面建物の東棟が、西から方二間の総柱建物跡の西棟が、東から東西に細長い竪穴住居跡が発見された。これら掘立柱建物跡の北側で並行して走る大溝の覆土上層を中心に多くの瓦が出土した。今泉潔氏により東棟が葺棟葺き建物跡に復原されている。

出土軒丸瓦は六弁宝相華文2種(1、2)で、1は下総国分寺出土瓦と同範である。軒平瓦は均整唐草文2種(4~6)と宝相華文1種(3)で、6は下総国分寺出土瓦と同範で、4・5は同文である。丸瓦は無段式のみで、平瓦は粘土板桶巻作りで縄叩きしたものである。このほか、多くの熨斗瓦と文字瓦「埴」(7)が出土した。



第56図 大塚前遺跡遺構配置図・出土瓦 (1/6)



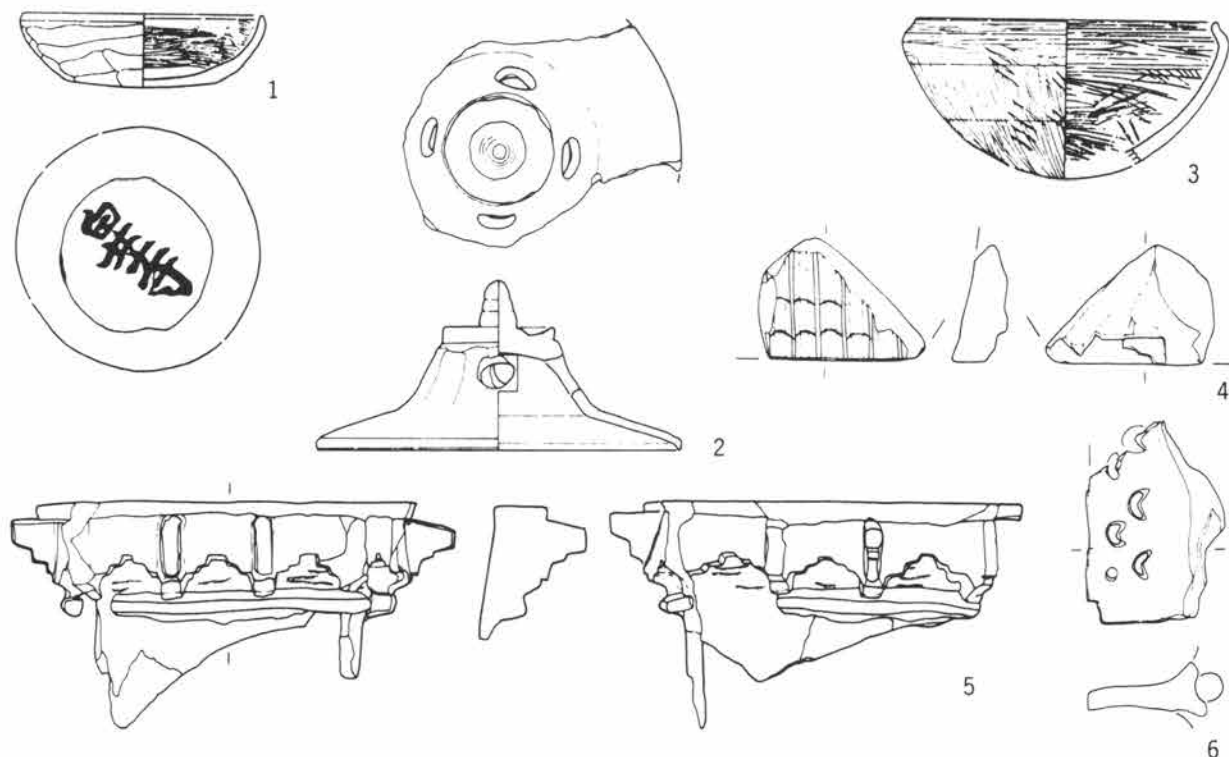
114 六拾部遺跡

佐倉市大作2丁目

高崎川の支流に面した台地端部に位置する。複数の瓦塔が出土し、8世紀後半から9世紀前半・9世紀中葉と継続的に、仏堂が移動して営まれた状況が想定されている。六拾部遺跡Ⅲ期（8世紀第3四半期後半～8世紀末）は斜面中腹の土坑067から瓦塔（5）が、台地端部の土坑074から墨書土器「白井寺」（1）が出土した。土坑067が瓦塔の覆屋に伴う遺構と考えられている。

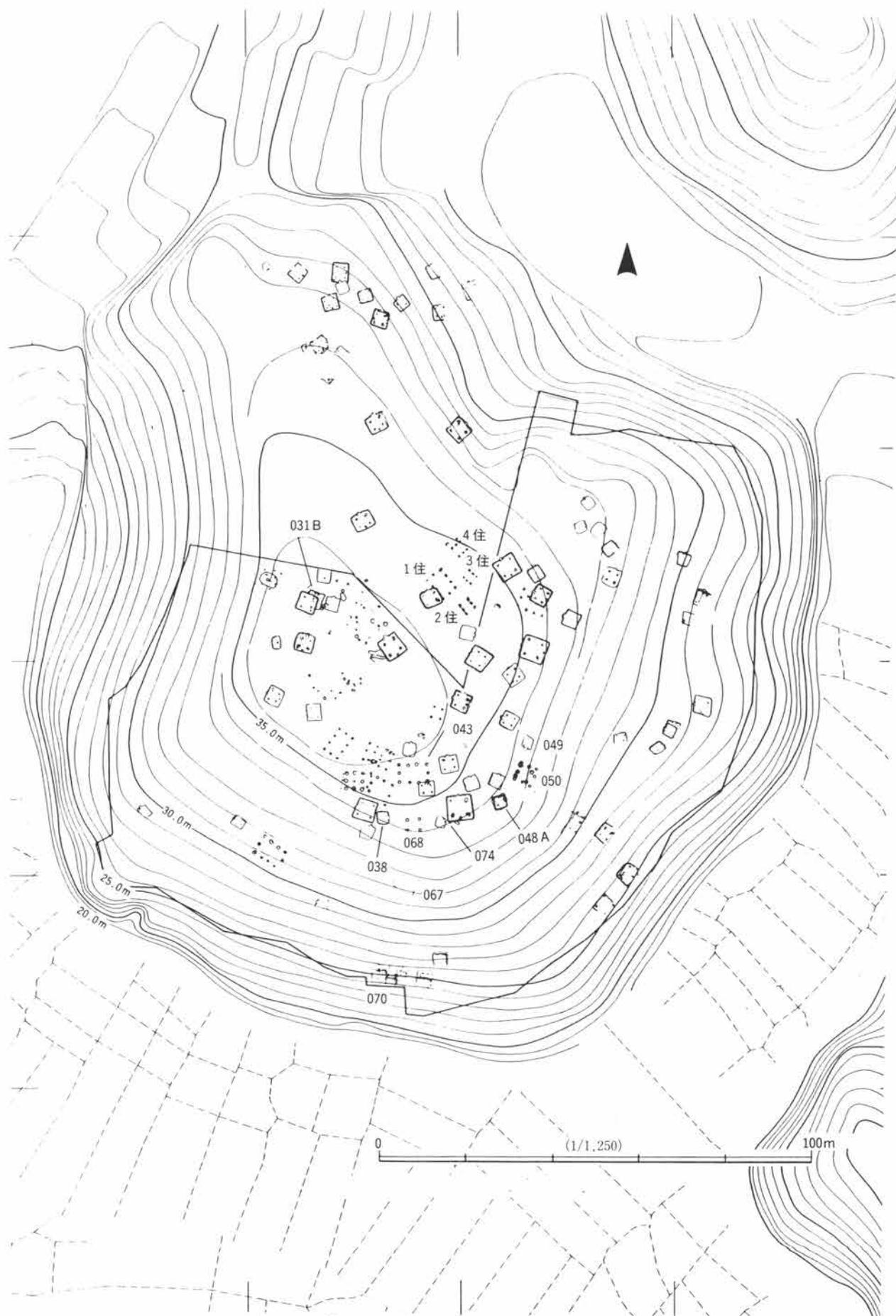
六拾部遺跡Ⅳ期（9世紀第1四半期～第2四半期の一部）は、Ⅲ期の土坑074に近接した掘立柱建物跡068とその北東25m離れた掘立柱建物跡050Bを中心に仏教関連遺物が出土する。両者とも方一間の小規模な建物跡で、仏堂としての機能が考えられている。掘立柱建物跡068の西側に接する竪穴住居跡038から香炉蓋（2）が、掘立柱建物跡068の斜面下の竪穴住居跡070から瓦塔片（4）が出土した。また、掘立柱建物跡050Bの北側に接する竪穴住居跡049からは土師器鉄鉢形土器（3）が発見された。

六拾部遺跡Ⅴ期（9世紀第2四半期後半～第3四半期）は掘立柱建物跡050Aと台地中央部の竪穴住居跡031Bを中心に仏教関連遺物が出土する。掘立柱建物跡050Aは、Ⅳ期の掘立柱建物跡050Bを一回り大きく方二間に建替えている。この掘立柱建物跡050Aの南西に隣接する竪穴住居跡048Aから脚付香炉（12）が出土した。また、竪穴住居跡031Bからは瓦塔、香炉蓋・脚付香炉・小壺などが出土した（7～11、13～15）。



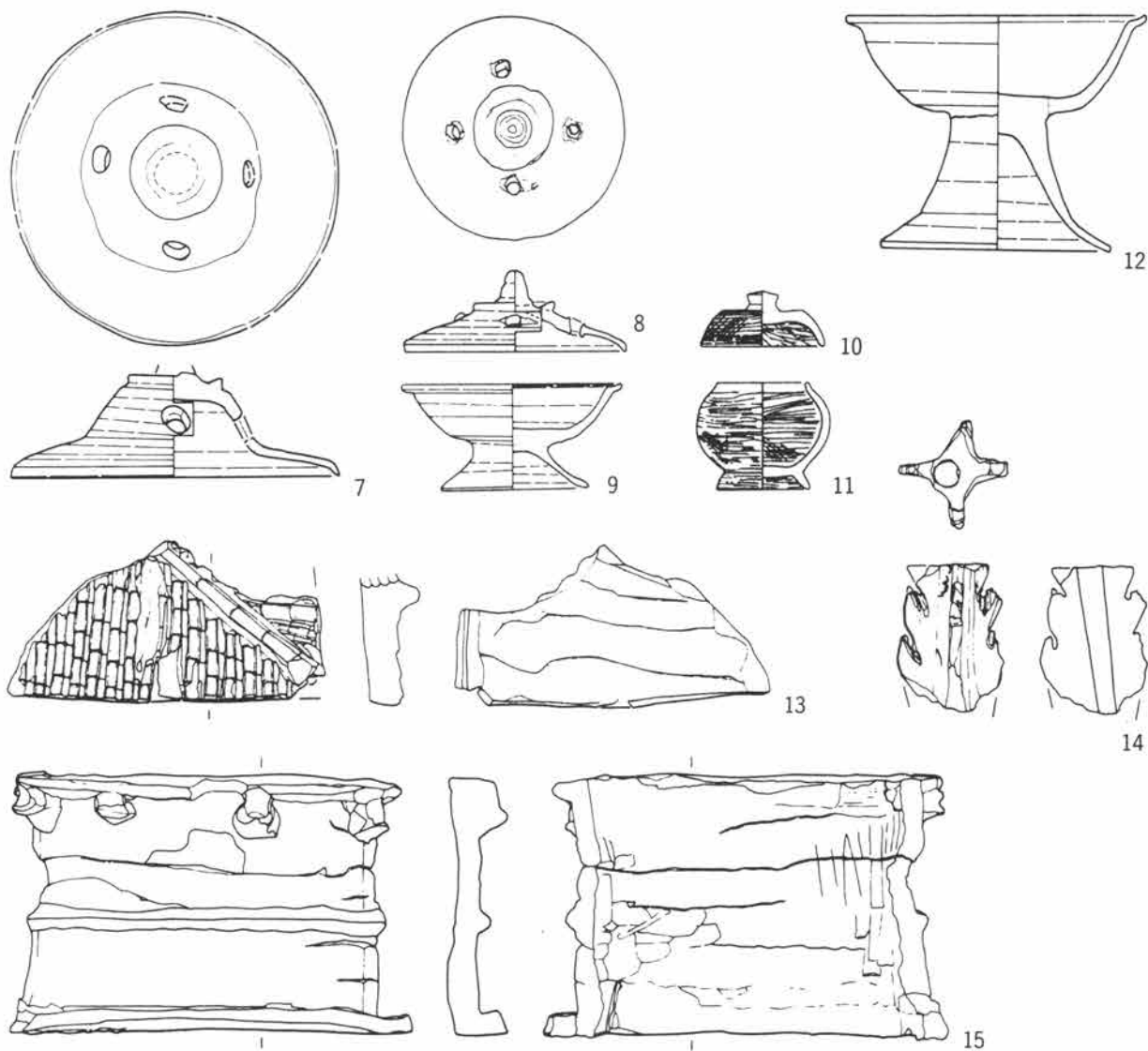
第57図 六拾部遺跡出土遺物 1（1/4）

II 主要遺跡概要



第58図 六拾部遺跡遺構配置図

このように複数の時期にわたって、仏堂と想定される遺構と仏教関連遺物がセットとして発見されている。瓦塔を中心とした堂が継続的に営まれたと考えられる。なお、六捨部遺跡の仏堂と関連施設は、南側と南東側の台地端部を中心に展開している。南や南東方向に展開する同時代の集落跡や墓域を意識した占地在り窺える。



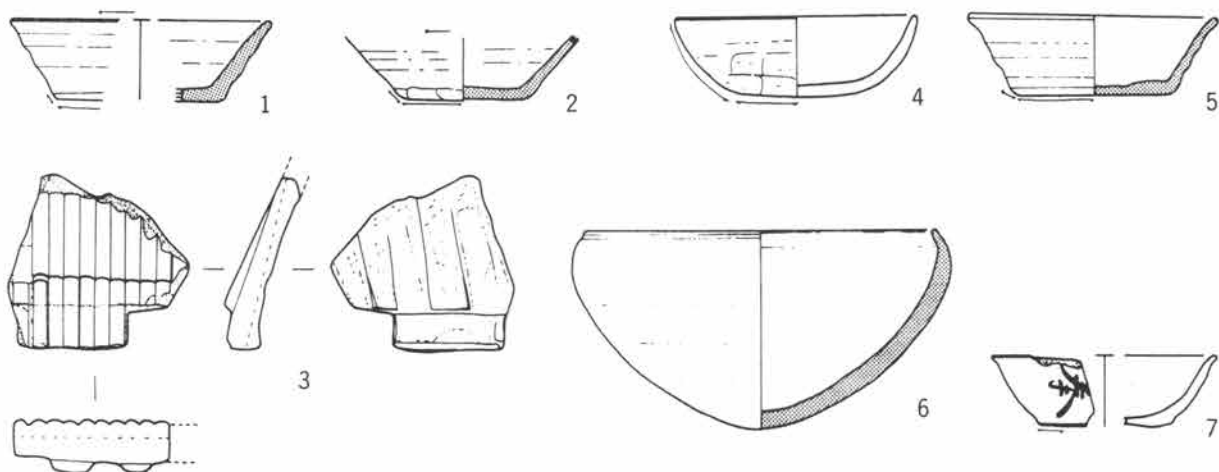
第59図 六捨部遺跡出土遺物2 (1/4)

II 主要遺跡概要

115 村上込の内遺跡

八千代市村上字込の内

新川に注ぐ谷津に面した台地上に位置する。調査区南端から掘立柱建物跡がやや多く発見され、また台地縁辺部を中心に多くの竪穴住居跡が発見された。これら建物跡群からやや離れた台地北東端の003土坑(1～3)から瓦塔片が1点発見された。003土坑は直径約3m、深さ0.26mで、底面は平坦である。また、瓦塔出土地からやや離れた033号竪穴住居跡(4～6)から須恵器鉄鉢形土器が、038号竪穴住居跡から墨書土器「奉」(7)が出土した。



第60図 村上込の内遺跡遺構配置図・出土遺物(4)

118 江原台遺跡

佐倉市白井田字江原台500他

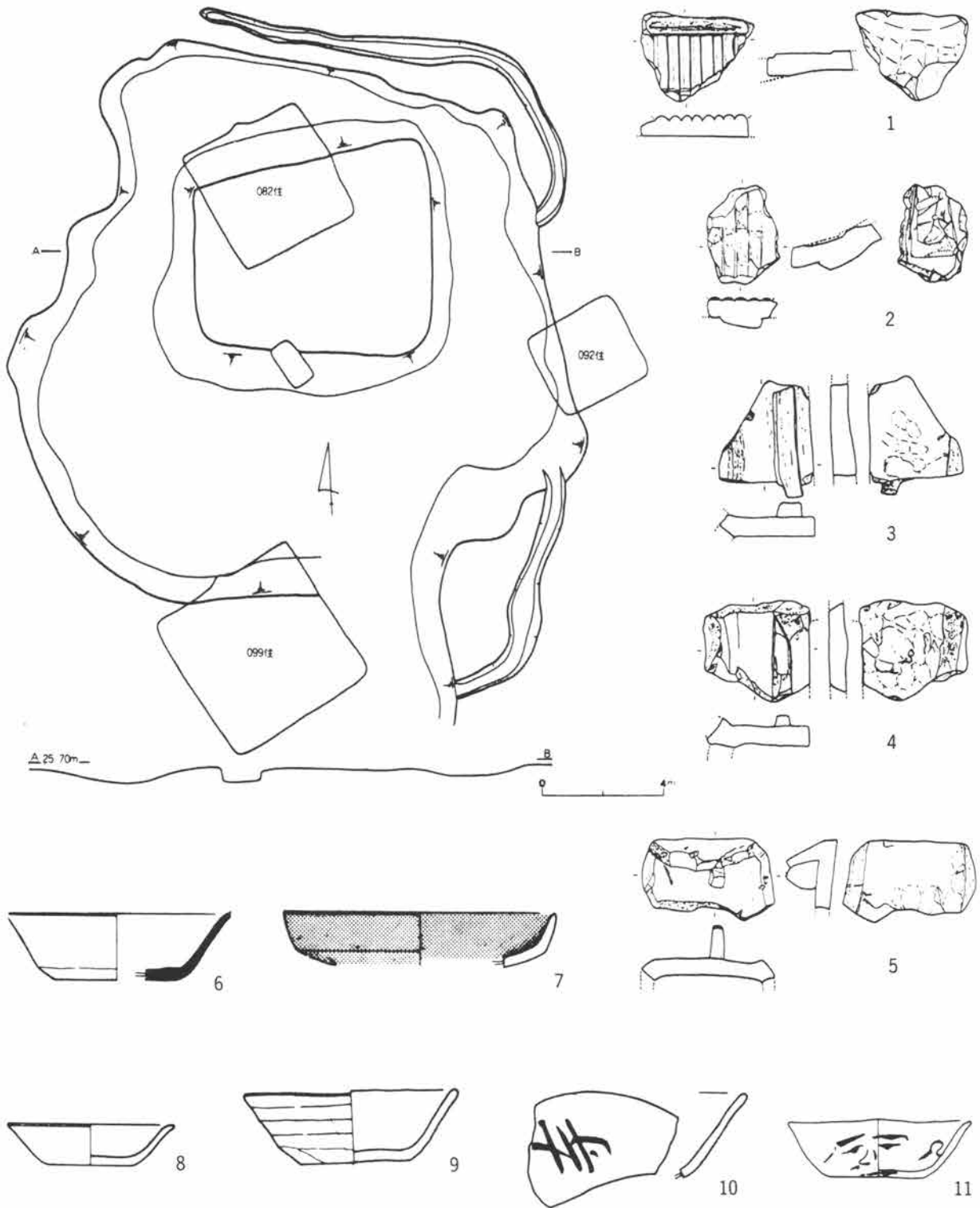
印旛沼に面した台地北端に位置する。調査区南側は掘立柱建物跡群がやや集中して発見されたが、北側の建物跡分布は散漫である。調査区北側の掘立柱建物跡は、周溝状遺構南西の1間×2間の22号掘立柱建物跡のみである。14点の瓦塔片は周溝状遺構の南側周溝付近から、まとめて発見された。周溝状遺構全体の形状は不整形形で、長軸約9.6m、短軸約9.0mを測る。南側周溝はやや幅広い。それに対して、中央の掘り残し部分は、比較的方形を呈している。出土土器類は時期幅をもっているが、瓦塔片がまとめて



第61図 江原台遺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要

出土している点から、周溝状遺構は瓦塔に伴う区画施設の可能性がある(1~8)。このほか、周溝状遺構北約45mの061号竪穴住居跡(9、10)から体部外面に横位に「寺」と墨書されたロクロ土師器杯が出土している。なお061号竪穴住居跡のカマド内等から土製白玉が34点出土している。また、144号竪穴住居跡からは人面墨書土器が出土した(11)。

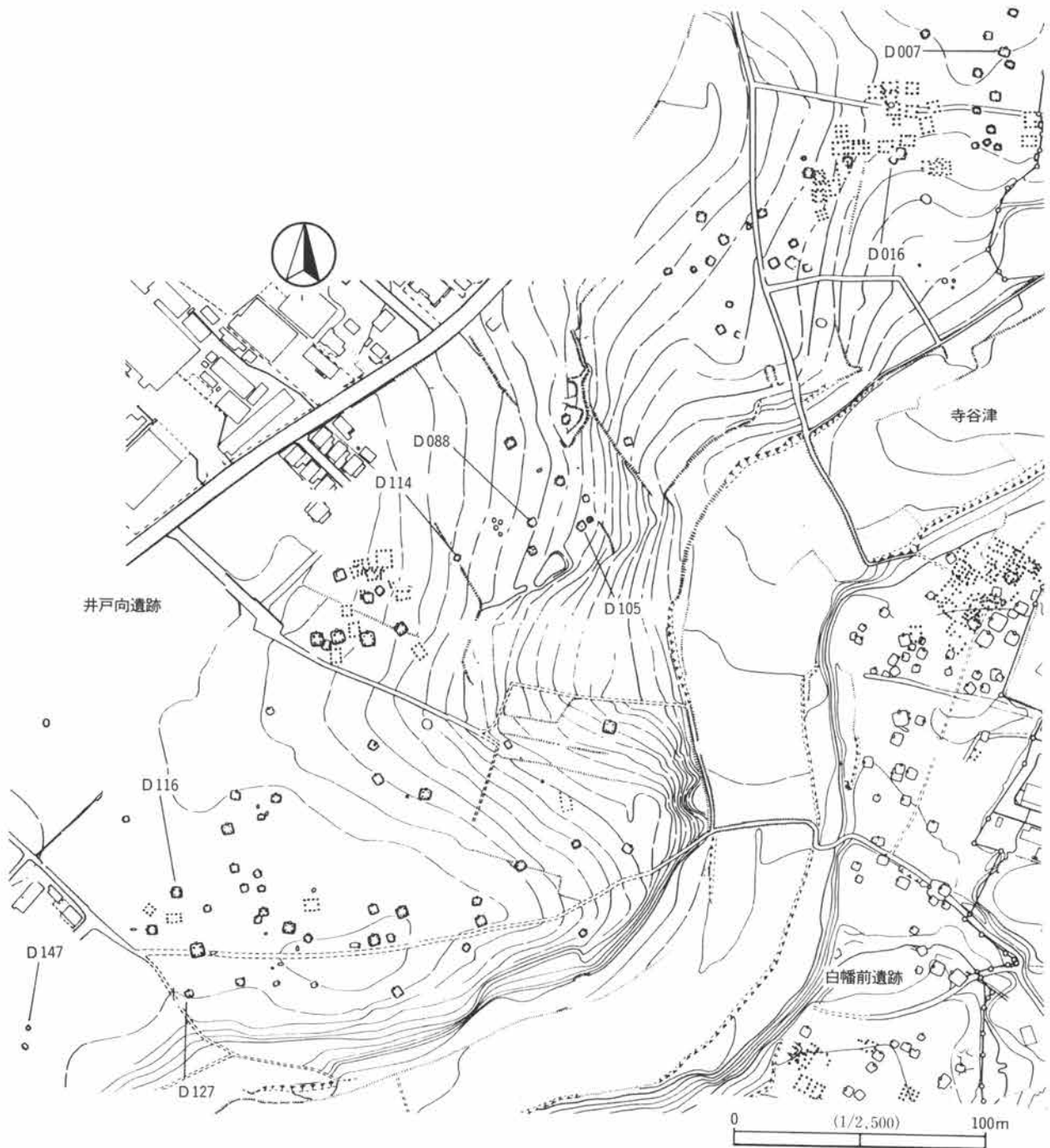


第62図 江原台遺跡周溝状遺構・出土遺物(1/4)

123 井戸向遺跡

八千代市萱田字井戸向1531他

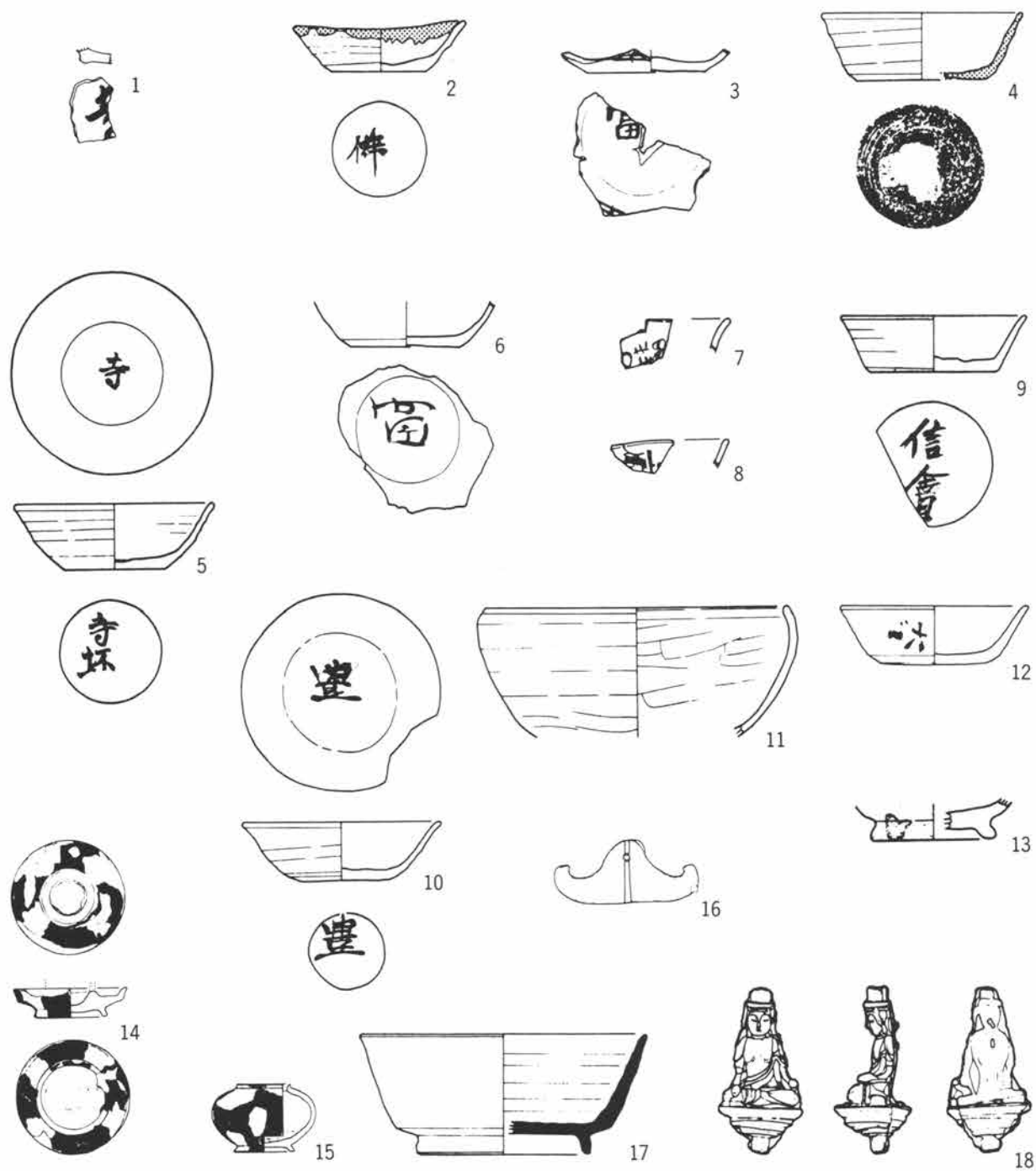
新川に注ぐ谷津に面した台地南端に位置する。墨書土器「勝光寺」が出土した北海道遺跡が北側に隣接し、寺院跡が発見された白幡前遺跡が南側の谷向かいに位置している。井戸向遺跡からも仏教関連遺物が広い範囲から発見された。調査区北東端の竪穴住居跡D007から青銅製小仏像（18）が、竪穴住居跡D016から墨書土器「寺カ」（1）が発見された。青銅製小仏像は背中に光背を付した痕跡が残っている。調査区中央斜面部の竪穴住居跡D088（2～4）のカマド脇の床面からは、墨書土器「佛」の灯明皿と底部穿孔の須恵器杯が出土した。また、隣接する竪穴住居跡D105（5～8）から墨書土器「寺／寺坏」「富」「□替」



第63図 井戸向遺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要

「厭カ」が、竪穴住居跡D114から墨書土器「信會」(9)が出土した。さらに調査区南西端の竪穴住居跡D116から三彩小壺(13)が、D127(10,11)からロクロ土師器鉢形土器が、D147(14~17)から三彩小壺と三彩托が出土した。三彩托は受部が欠損しており、灯明皿として使用されている。



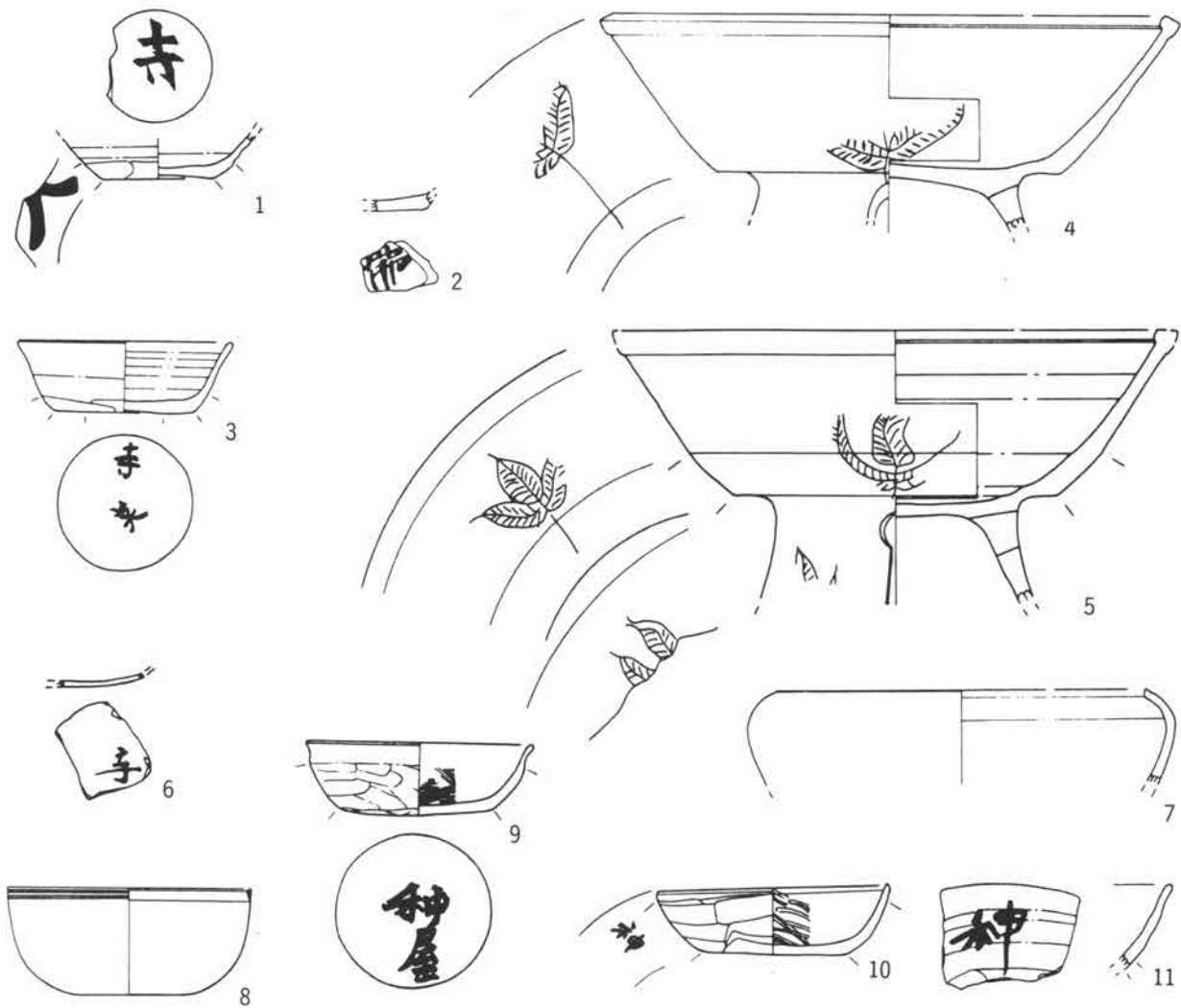
第64図 井戸向遺跡出土遺物 (1~17・ $\frac{1}{4}$ 、18・ $\frac{1}{2}$ )



131 高岡大山遺跡

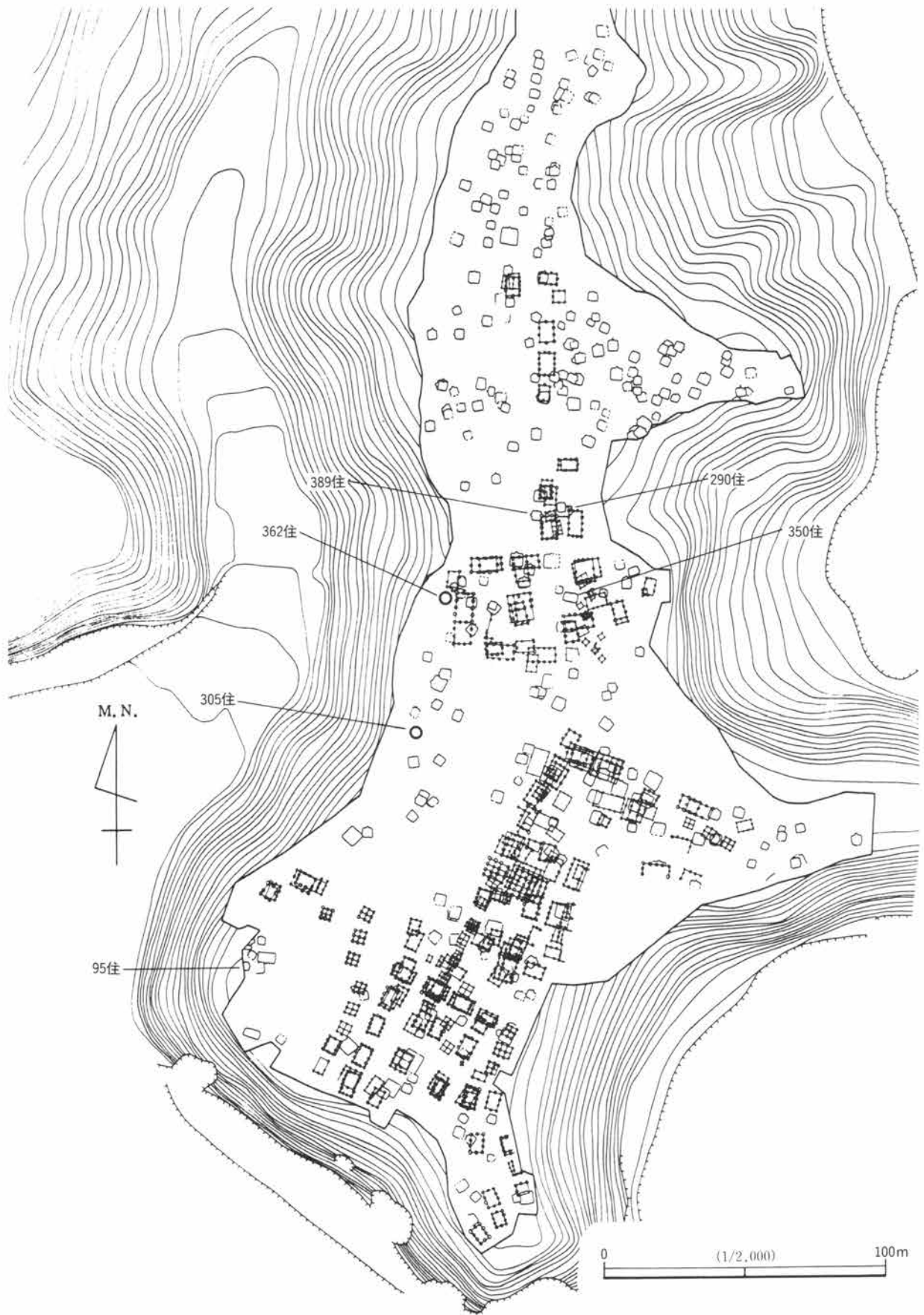
佐倉市白銀（上代字大山110他）

高崎川に面した南北に細長い台地上に位置する。台地南端から規則的に並ぶ掘立柱建物跡群が発見された。仏教遺物は、この建物跡群から外れた台地南西端の竪穴住居跡と、台地中央の掘立柱建物跡群周辺の竪穴住居跡等から発見された。台地南西端の95号竪穴住居跡から墨書土器「寺／大カ」「佛」（1、2）が、そして、その付近のグリッドから土師器鉄鉢形土器（7）が発見された。台地中央西端の305号竪穴住居跡からは墨書土器「寺／莫」（3）が、362号竪穴住居跡から銅鏡（8）が出土した。銅鏡は住居跡隅の床面に伏せた状態で出土した。さらに台地中央の350号竪穴住居跡から墨書土器「寺」（6）が、290号・389号竪穴住居跡から脚付香炉（4、5）が出土した。このように仏教関連遺物は中央の掘立柱建物跡群周辺からややまとまって出土した。また、台地中央部などから墨書土器「神」「神屋」（9～11）なども出土している。



第65図 高岡大山遺跡出土遺物（1/4）

II 主要遺跡概要

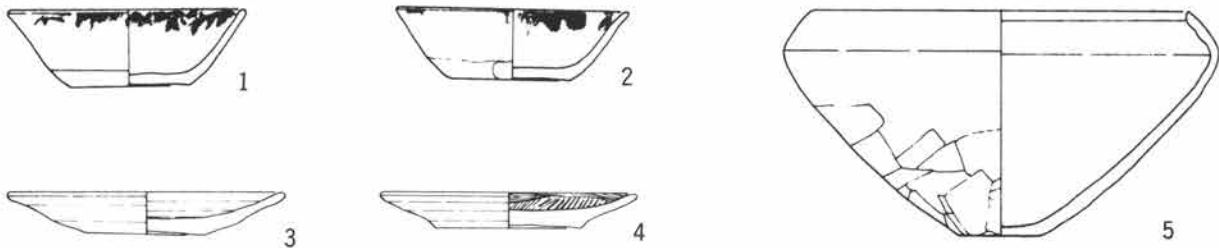


第66図 高岡大山遺跡遺構配置図

132 栗野 I 遺跡

佐倉市宮本字栗野477他

高崎川に注ぐ支谷に面した台地上に位置する。8世紀末から9世紀中葉にかけての竪穴住居跡が6軒、台地南端に散漫に発見された。そのうちの竪穴住居跡026のカマド火床部などから土師器鉄鉢形土器が、覆土上層から灯明皿が出土した(1~5)。なお、この台地南端からは6世紀末から7世紀の古墳と、6世紀末から8世紀の土壙墓も62基発見されている。

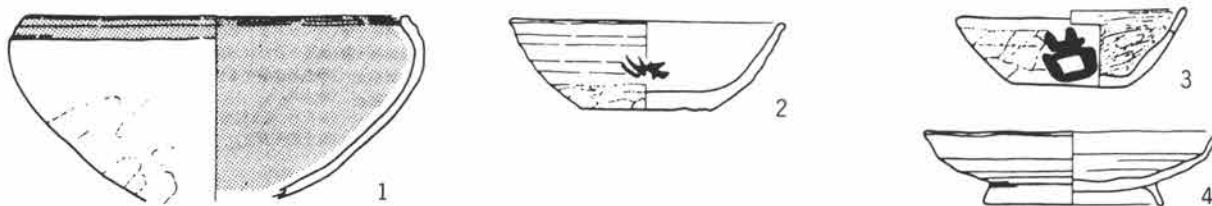
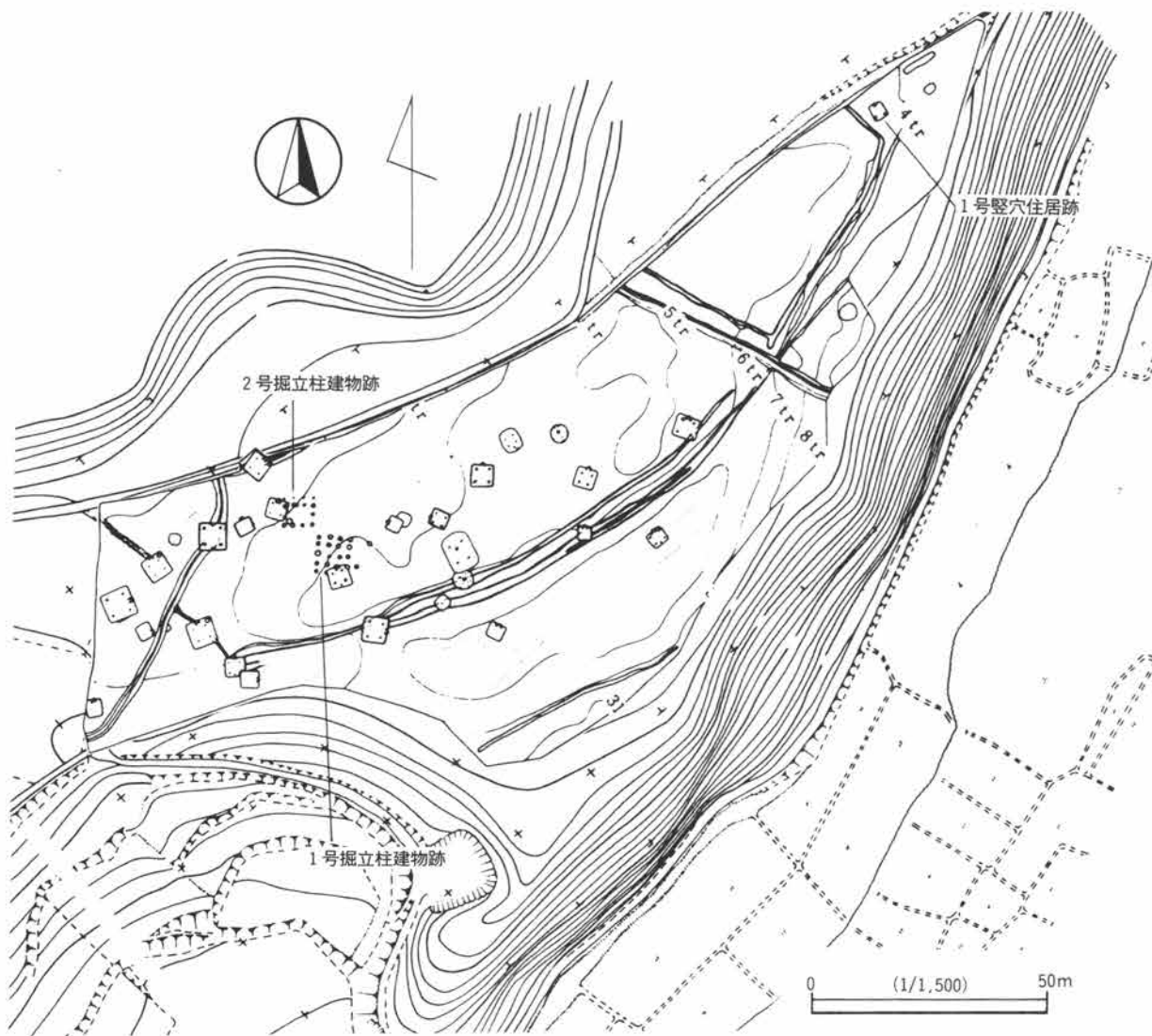


第67図 栗野 I 遺跡遺構配置図・出土遺物 (1/4)

133 太田宿遺跡

佐倉市寺崎字一本松・太田字宿地先

北東から南西に向かって開析された2つの小支谷に挟まれた痩せ尾根上に位置する。調査区北東端の1号竪穴住居跡(1、2)から赤彩土師器の鉄鉢形土器と墨書土器「芳」が出土した。このほか2棟の掘立柱建物跡も発見されている。1号掘立柱建物跡(3、4)は2間×3間の南北両庇建物跡で、2号掘立柱建物跡は2間×3間の片庇建物跡である。ただし、掘立柱建物跡周辺からは仏教遺物は出土していない。

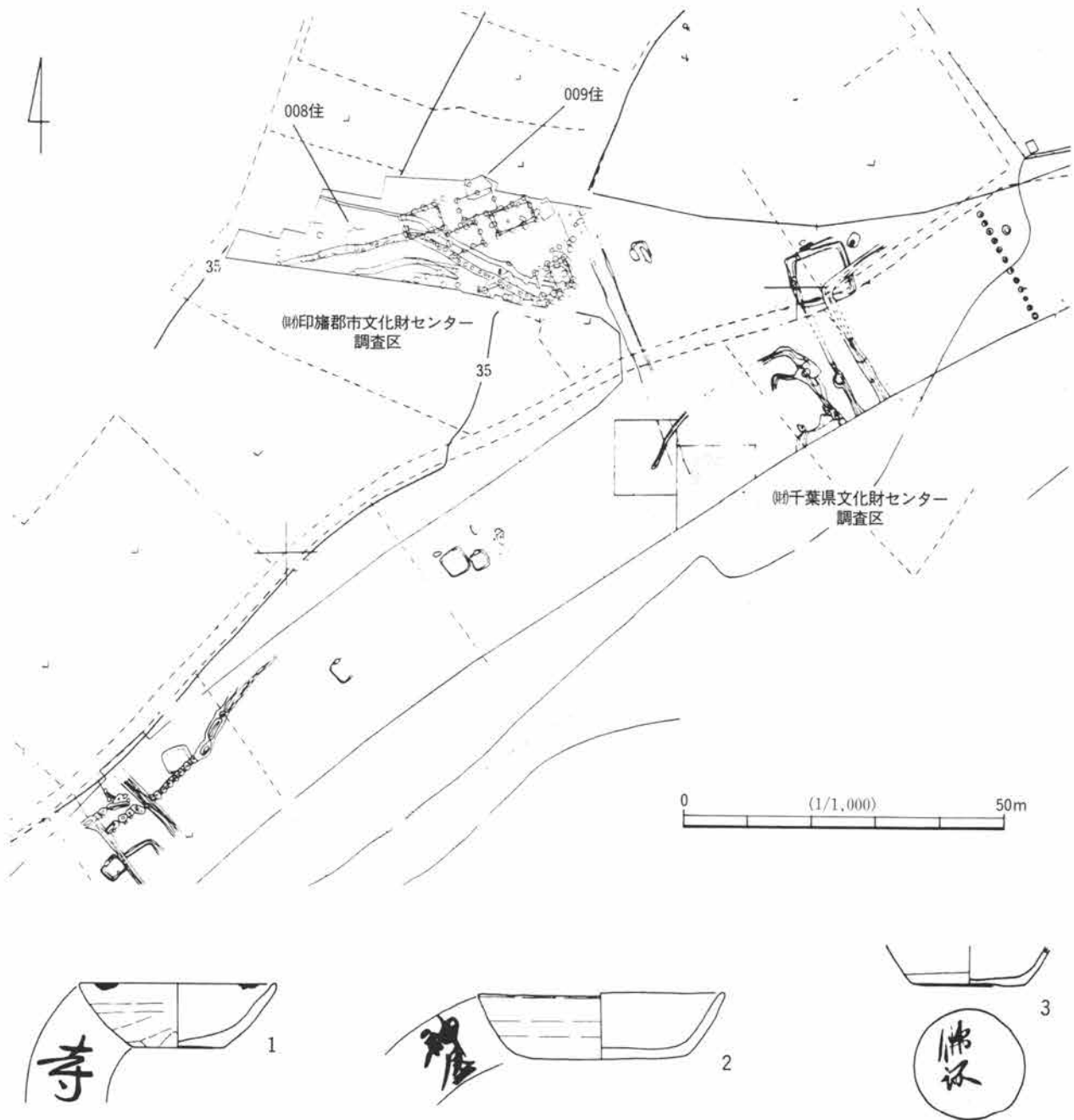


第68図 太田宿遺跡遺構配置図・出土遺物(4)

137 北大堀遺跡

印旛郡酒々井町本佐倉字北大堀495-1 他

印旛沼と高崎川から南北に入り込んだ谷津に囲まれた台地上に位置する。印旛郡市文化財センターの調査区から規則的に並ぶ掘立柱建物跡群が発見された。この建物跡群に接した008竪穴住居跡から墨書土器「寺」(1)が、009竪穴住居跡から墨書土器「神屋」(2)が出土した。墨書土器「寺」は灯明皿として使われている。また隣接する印旛県文化財センターの調査区のグリッドからは墨書土器「佛鉢」(3)が出土した。なお、長熊廃寺跡は同一台地上の南約0.6kmに位置している。

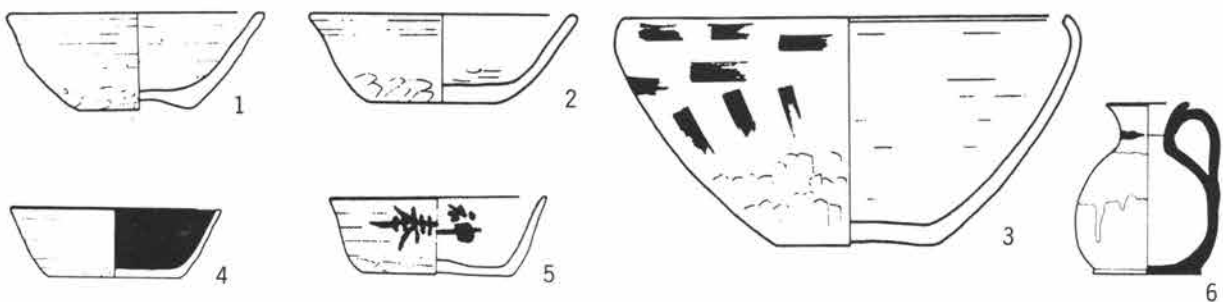
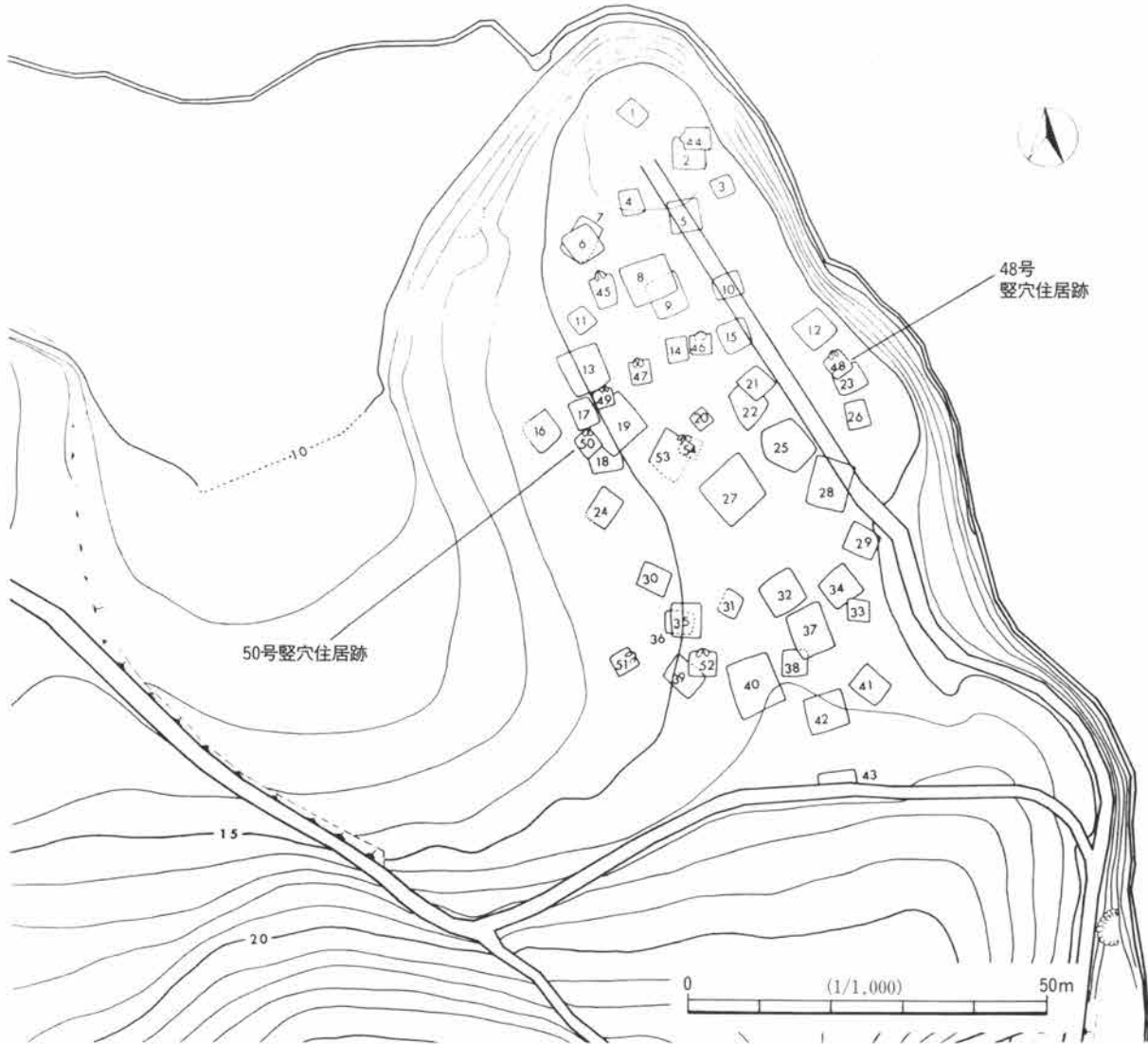


第69図 北大堀遺跡遺構配置図・出土遺物 (1/4)

139 馬橋鷺尾余遺跡

印旛郡酒々井町馬橋字鷺尾余地先

高崎川を望む台地北端に位置する。弥生時代から古墳時代前期の集落跡のほか、9世紀の集落跡が発見された。台地東端の48号竪穴住居跡(1~3)から土師器鉄鉢形土器が、台地西側の50号竪穴住居跡(4、5)から体部外面「神奉」と墨書された赤彩土器が発見された。このほか45号竪穴住居跡からは灰釉陶器手付小瓶(6)が出土した。

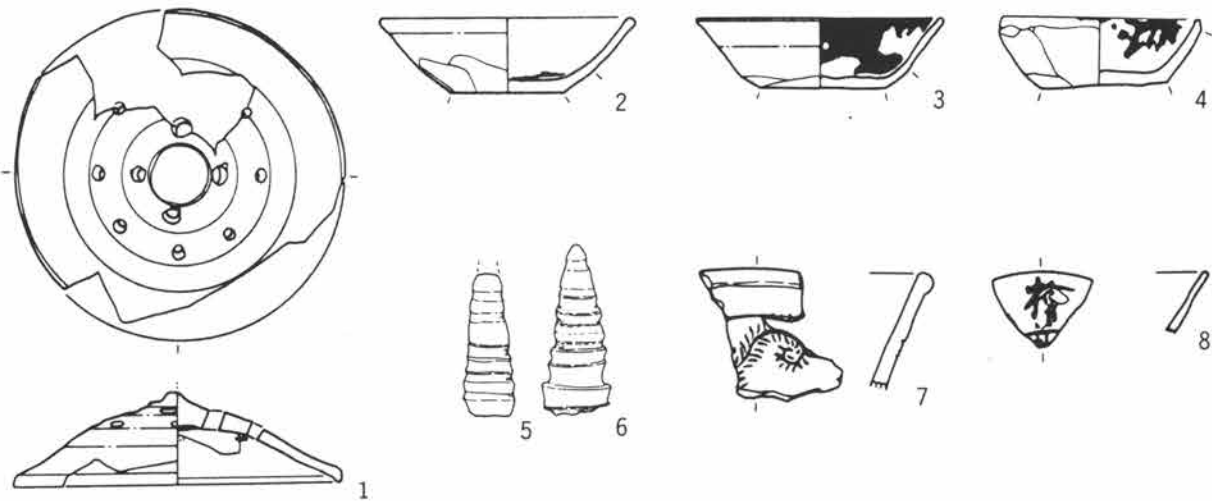
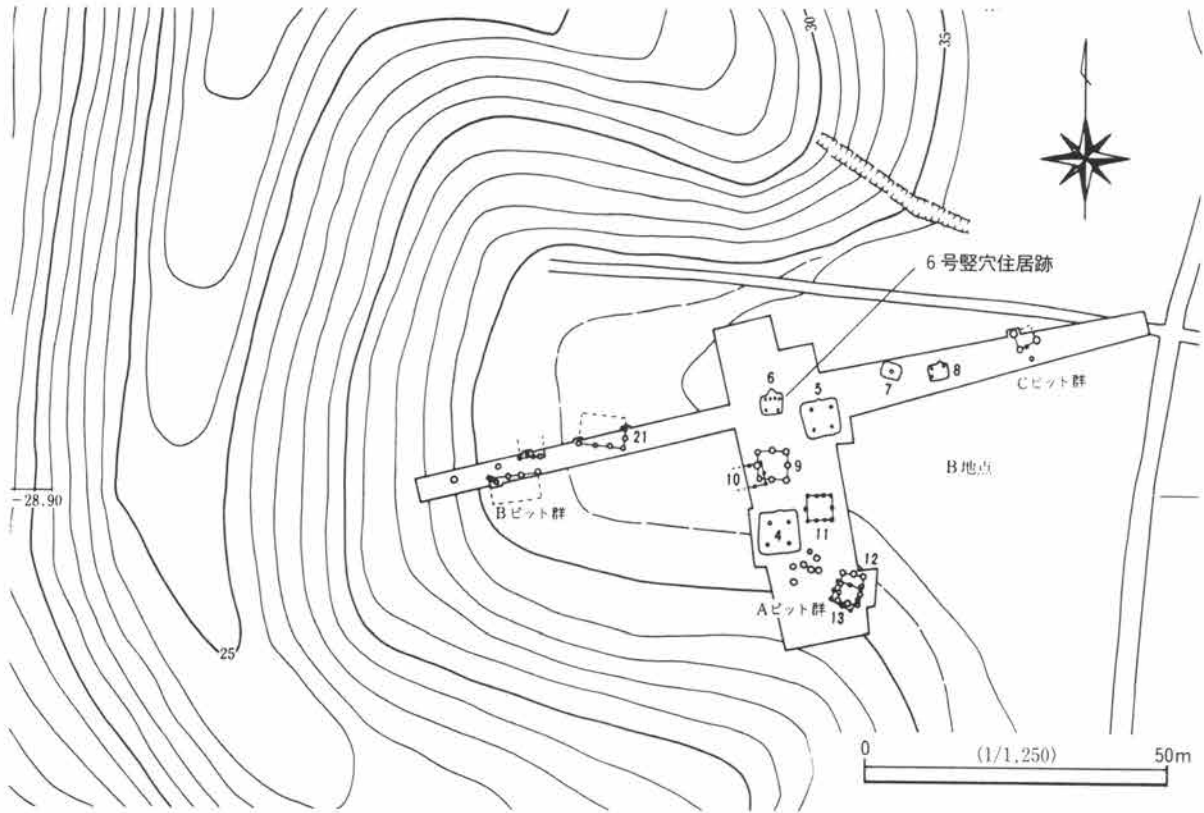


第70図 馬橋鷺尾余遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

140 伊篠白幡遺跡

印旛郡酒々井町伊篠字野田330-8 他

江川に流れる支谷に面した台地上に位置する。部分発掘のため全体像は不明であるが、谷津に張り出した台地先端部に掘立柱建物跡が集中する傾向がある。この掘立柱建物跡群に接した6号竪穴住居跡から香炉蓋(1)のほか、灯明皿と墨書土器の小片が多く出土した(2~4)。またグリッドから香炉蓋の宝珠の破片と脚付香炉の破片(5~7)、墨書土器「檜前」(8)「俣」、緑釉陶器が出土した。



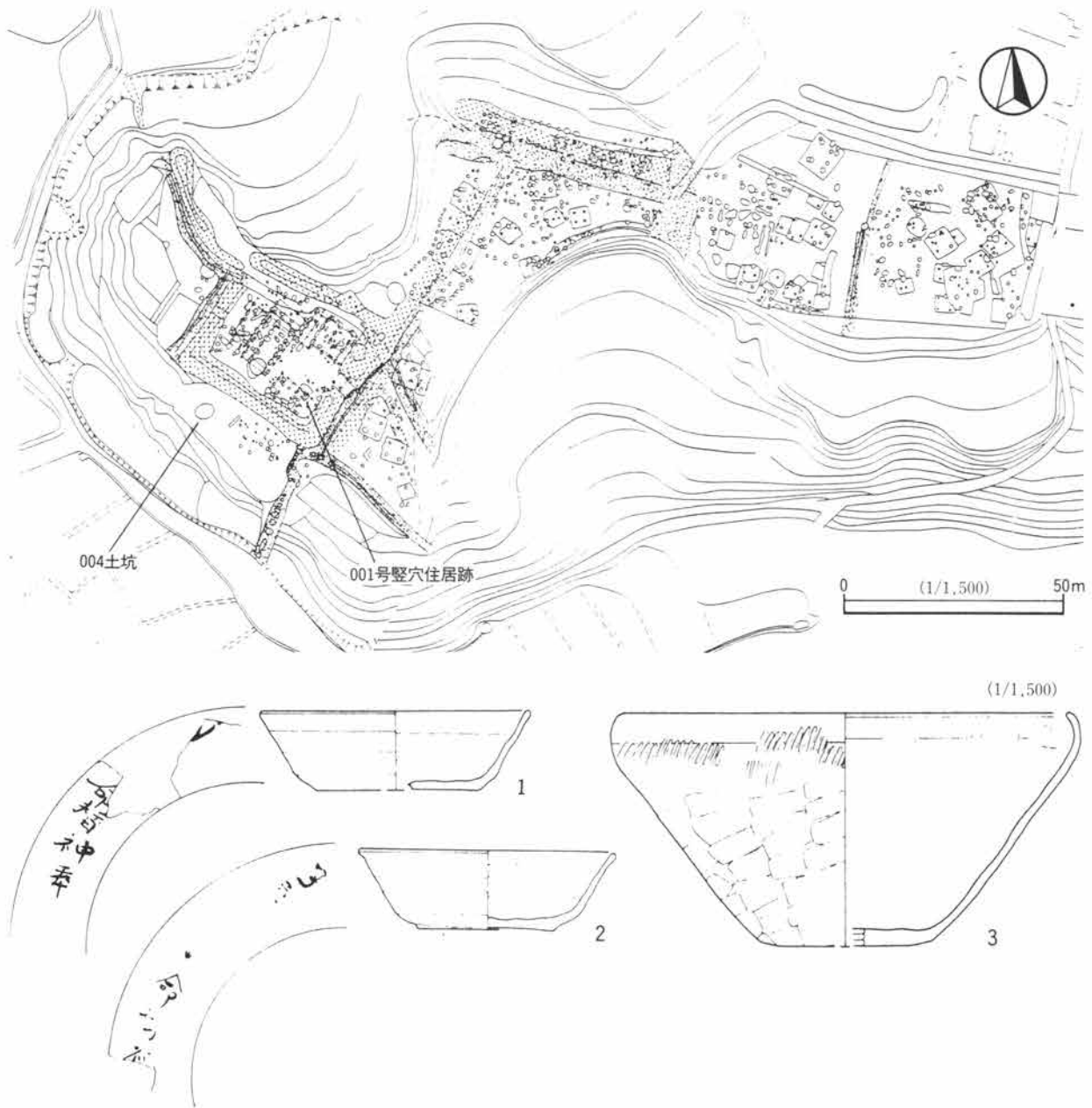
第71図 伊篠白幡遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

II 主要遺跡概要

141 長勝寺脇館跡

印旛郡酒々井町上本佐倉上宿175他

高崎川に注ぐ谷津に面した舌状台地の先端に位置する。谷津向かいの台地上には長熊廃寺跡が位置する。戦国期の館跡の造成により、古代の遺構の遺存状況は悪い。台地先端の南側に竪穴住居跡が、その西側に大型土坑が発見された。001号竪穴住居跡から土師器鉄鉢形土器(3)が出土した。直径3.6m~4.8m、深さ約3mの断面播鉢状を呈した土坑からは須恵器坏・盤などが多く出土した。これらは8世紀中葉に比定される。また、10世紀に比定される断面箱形の大型の004土坑からは墨書土器「□命替神奉」「□□□□□命替神」(1、2)などが発見された。小規模な台地先端の遺構群であるが、複数の時期の特徴的な遺構・遺物が発見されている。



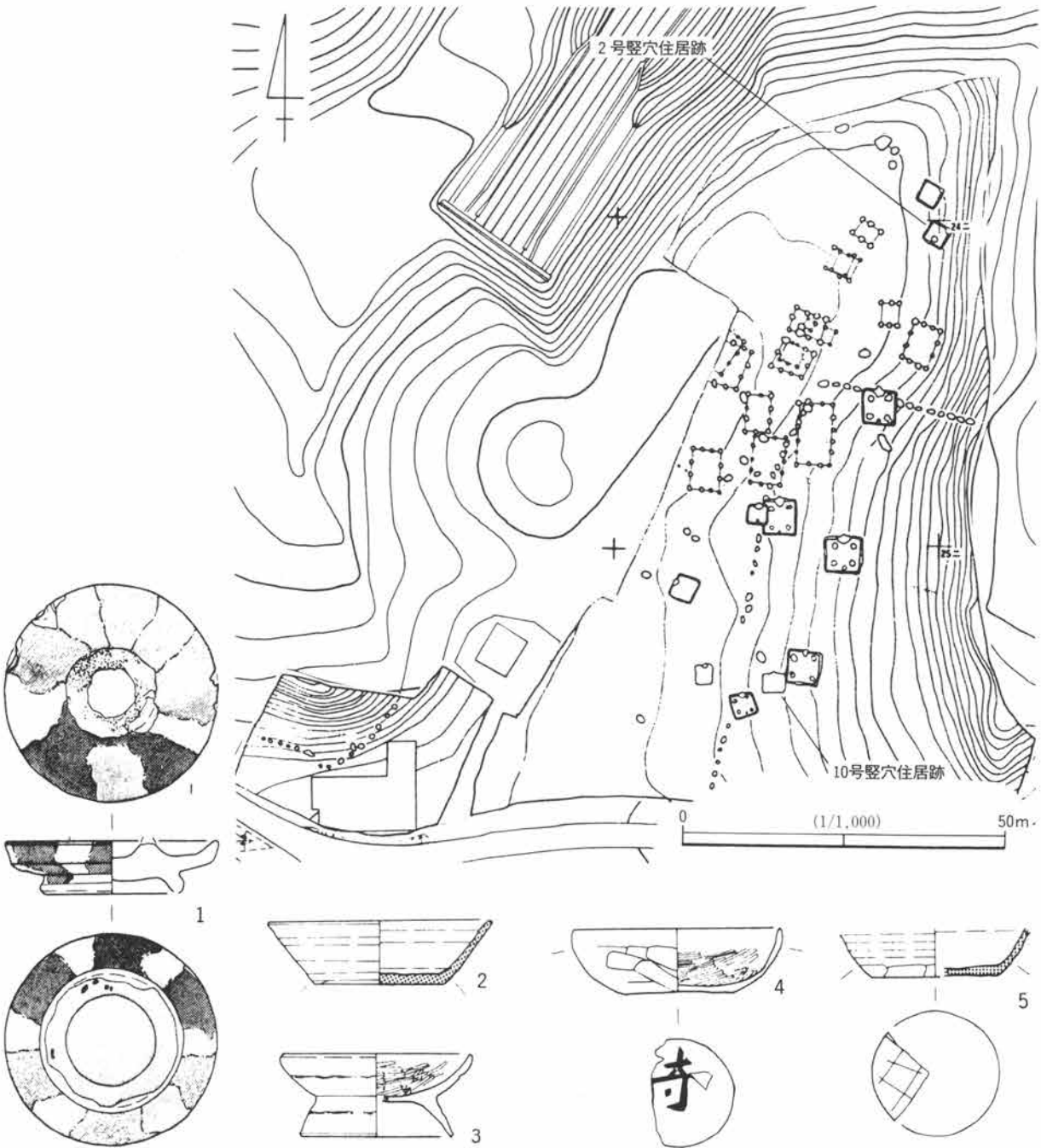
第72図 長勝寺脇館跡遺構配置図・出土遺物(1/4)



151 飯仲金堀遺跡

成田市飯仲字金堀1-2他

江川に流れ込む支谷最奥部に面した台地先端に位置する。幅狭い台地頂部に掘立柱建物跡群が、その東側斜面部に竪穴住居跡群が発見された。そのうち、2号竪穴住居跡から三彩托(1)が、10号竪穴住居跡(4、5)から墨書土器「寺」が発見された。2号竪穴住居跡からはそのほかに灯明皿として使用された須恵器杯、土師器杯、赤彩土師器等も出土した(2、3)。



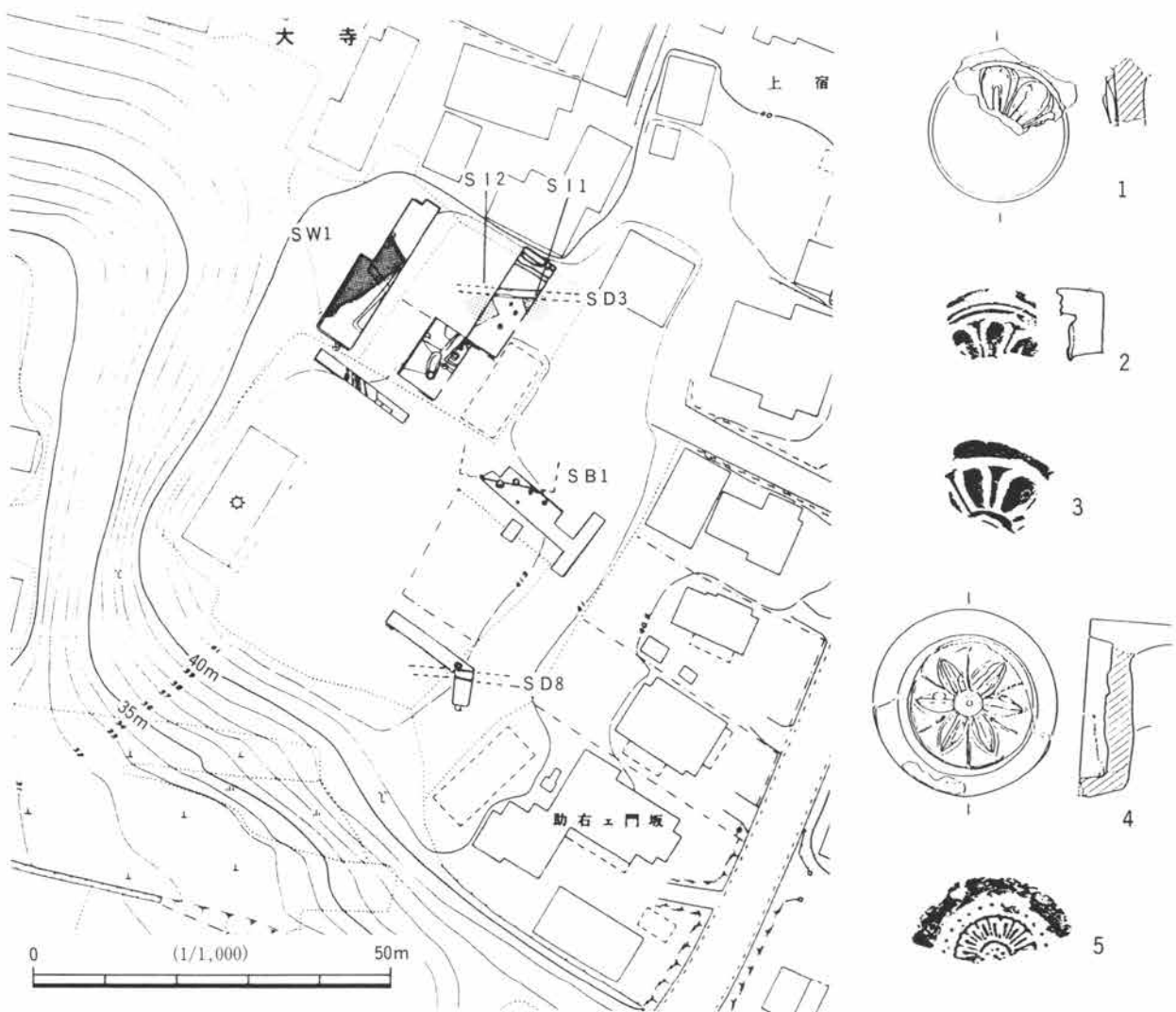
第73図 飯仲金堀遺跡遺構配置図・出土遺物(1・½、2~5・¼)

154 八日市場大寺廃寺跡

八日市場市大寺1861他

東は旧椿海の九十九里平野を望み、西は栗山川の支流借当川の支谷に面した台地上に位置している。平成元年に(財)千葉県文化財センターによって確認調査が実施され、掘立柱建物跡2棟、基壇1基、溝などが確認されたが、創建期の伽藍は詳細不明である。ただし、調査区域の中央から掘立柱建物跡SB1が、調査区域北端と南端からSD3とSD8の2条の東西溝が発見された。SD3とSD8は、幅約1.5mの断面箱形で、間隔54mで東西に平行に走っている。そのうちSD3は8世紀前半の竪穴住居跡S11を切っており、それ以降の区画溝の可能性はある。SB1の建物跡の軸線とも共通している。このほか、台地西端から基壇状に版築された硬化面(SW1)が発見された。

軒丸瓦は三重圏文縁単弁八葉蓮華文(1・2)、素縁単弁八葉蓮華文(3)、素縁単弁六葉蓮華文(4)、常陸国分寺系の蓮華文(5)がある。2は外区の外側圏線が内側の2本の圏線よりも一段高まる特徴を有し、龍正院出土瓦と類似している。4は多古台遺跡と木内廃寺跡出土瓦と同文である。丸瓦は無段式が、平瓦は桶巻作りによるものと、凸型台一枚作りのものがある。

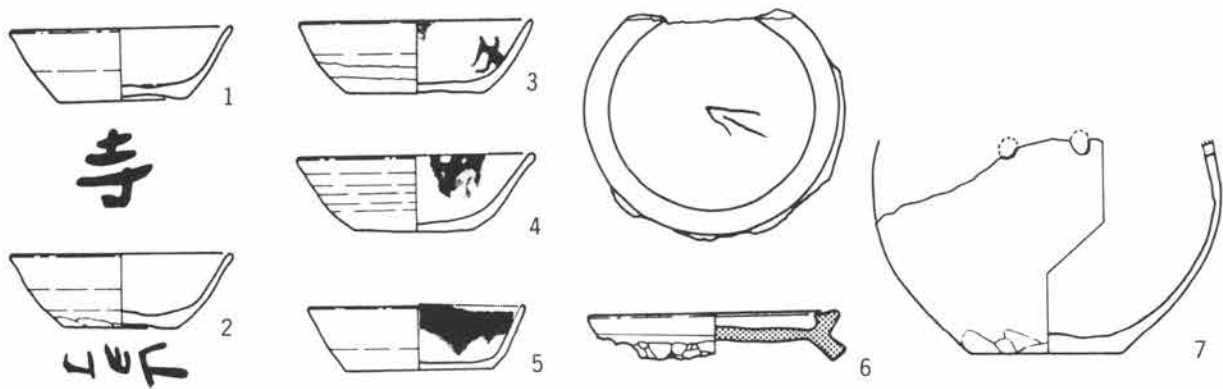
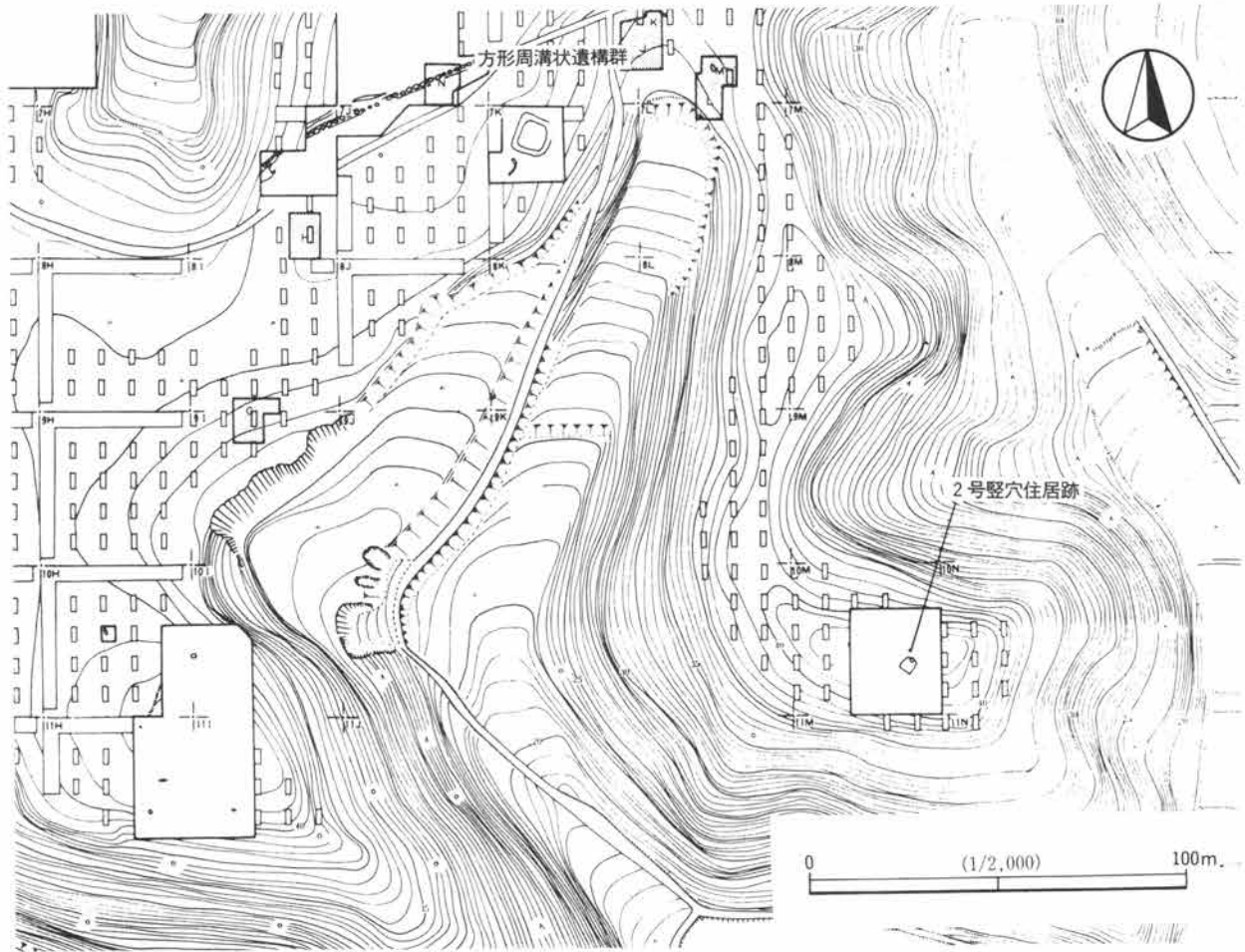


第74図 八日市場大寺廃寺跡遺構配置図・出土瓦 (1/6)

160 巢根遺跡

香取郡多古町水戸字巢根1,561他

多古橋川に注ぐ小支谷に面した台地上に位置し、同一支谷の下流に土持台遺跡が位置している。舌状台地の先端の2号竪穴住居跡(1~7)から灯明皿などともに墨書土器「寺」「山□丁」が発見された。6の須恵器は高台底部を硯として転用している。なお、2号竪穴住居跡周辺からは遺構は発見されていない。また、台地北側からは土持台遺跡同様、8世紀後半の方形周溝状遺構2基と骨蔵器1基が発見された。



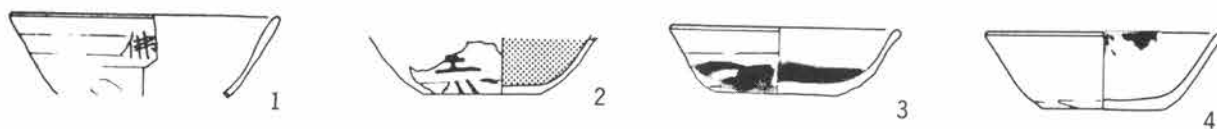
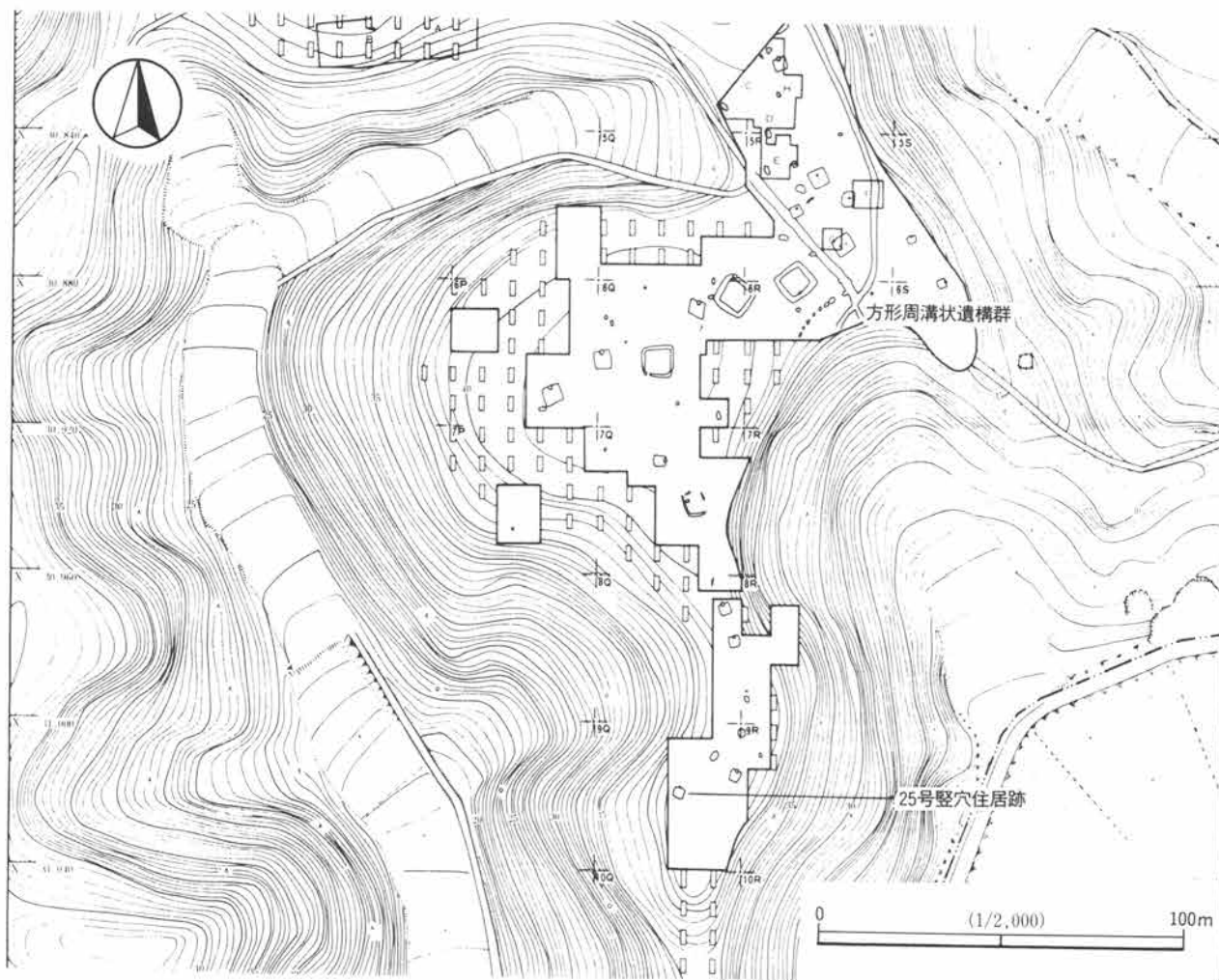
第75図 巢根遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

## II 主要遺跡概要

### 162 土持台遺跡

香取郡多古町水戸字土持台1,572他

多古橋川に注ぐ小支谷に面した台地上に位置する。その台地南端の25号竪穴住居跡から墨書土器「佛」「赤」や灯明皿などが出土した(1~4)。25号竪穴住居跡周辺の台地南端からは、9世紀第2四半期から10世紀前半にかけての5軒の竪穴住居跡が発見された。一方、台地北側からは8世紀中葉から9世紀前半にかけての方形周溝状遺構と骨蔵器が発見されている。

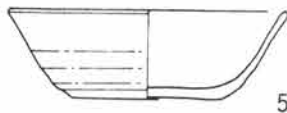
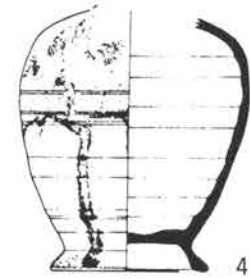
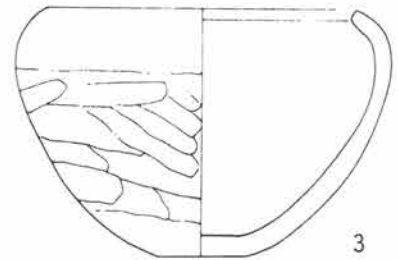
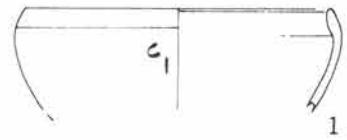


第76図 土持台遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

166 柳台遺跡

八日市場市飯塚字柳台

栗山川の支流借当川の支谷に面した台地南端に位置する。台地南端の337号竪穴住居跡(3~6)から土師器鉄鉢形土器と浄瓶(もしくは水瓶)が、121号竪穴住居跡(1、2)からは「千俣□(仏カ)」と墨書された土師器鉄鉢形土器が出土した。また台地中央からは銅印「王□私印」(7)が出土した。

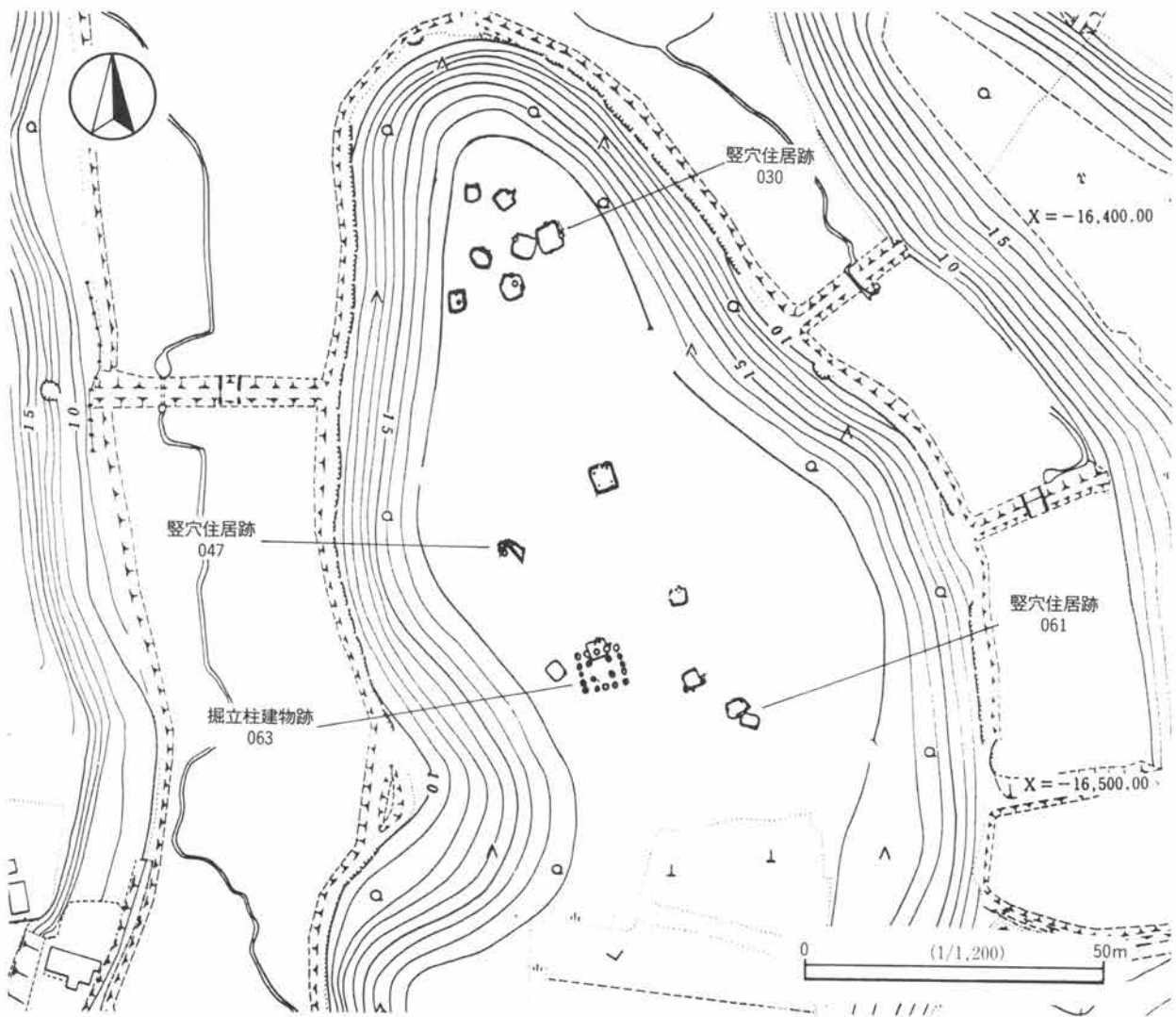


第77図 柳台遺跡遺構配置図・出土遺物(1~6・¼、7・½)

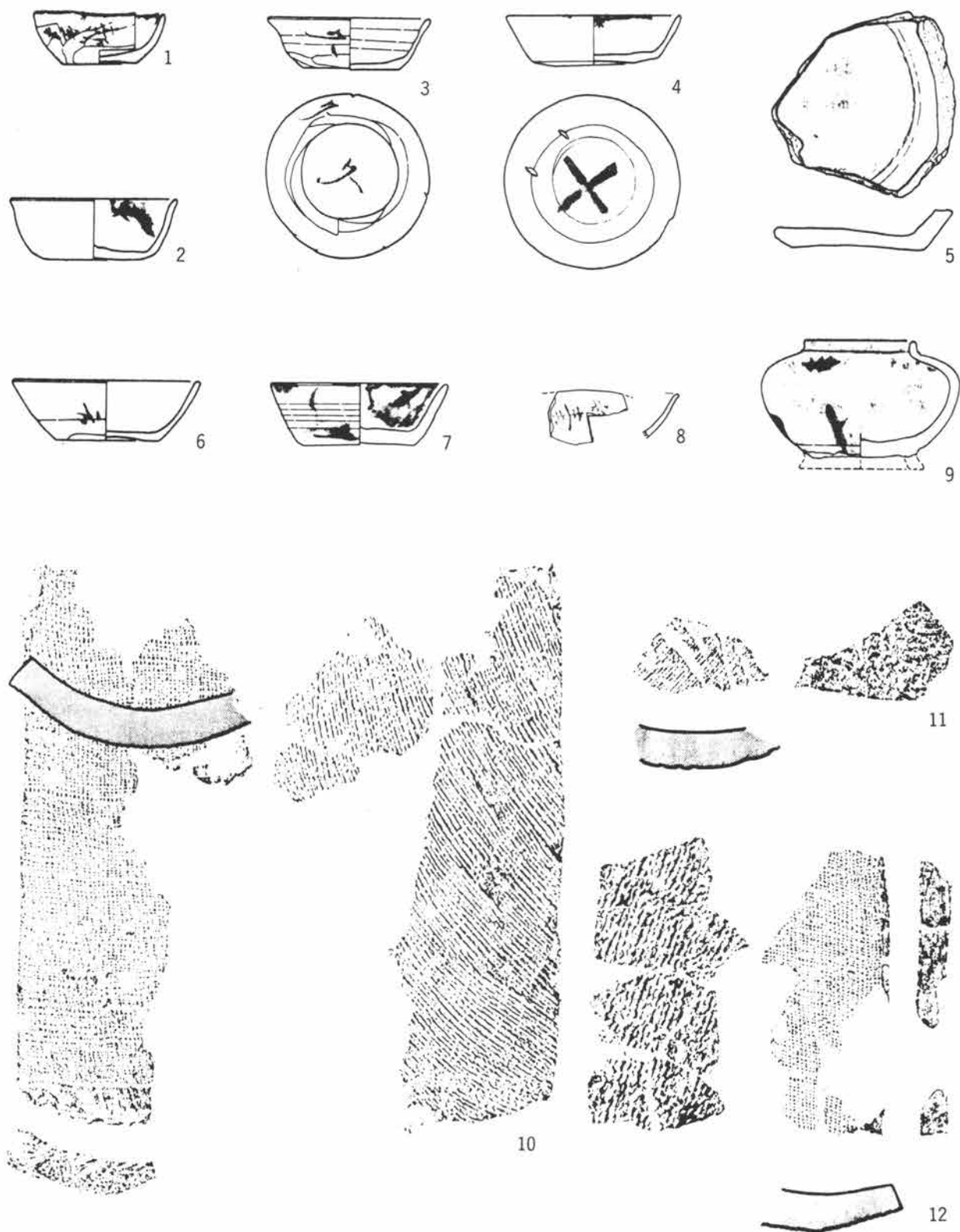
169 大井東山遺跡

東葛飾郡沼南町大井2044-1他

大津川が手賀沼に注ぐ河口付近の、支谷に面した台地北端に位置する。発掘調査は台地北側のみで、調査区域外の南側にさらに建物跡は展開すると推測される。その調査区南端から、竪穴住居跡050を切った、一間四面の掘立柱建物跡063が発見された。この北側に位置する竪穴住居跡047から墨書土器「新生寺」が出土した。灯明皿として使用された痕跡があり、墨書土器「久」「十」や甕などとともにかまど内からまともま出て出土した(1~4)。また、掘立柱建物跡063の南東の竪穴住居跡061から三彩小壺や灯明皿、転用硯などが出土した(5、6、9)。掘立柱建物跡063は特異な構造であり、墨書の「新生寺」に当たる建物跡の可能性が指摘されている。この建物跡は、遺構の重複関係と墨書土器の年代観から、8世紀末から9世紀前半に比定される。なお、台地北端の竪穴住居跡030の覆土中と台地の西端部から平瓦と熨斗瓦が出土した(10~12)。いずれも凸型台1枚作りで、丸瓦の出土は確認されていない。積極的な2次利用の痕跡がない点から、掘立柱建物跡063が簡単な葺葺きであった可能性も指摘されている。



第78図 大井東山遺跡遺構配置図



第79図 大井東山遺跡出土遺物 (¼、ただし9は½)

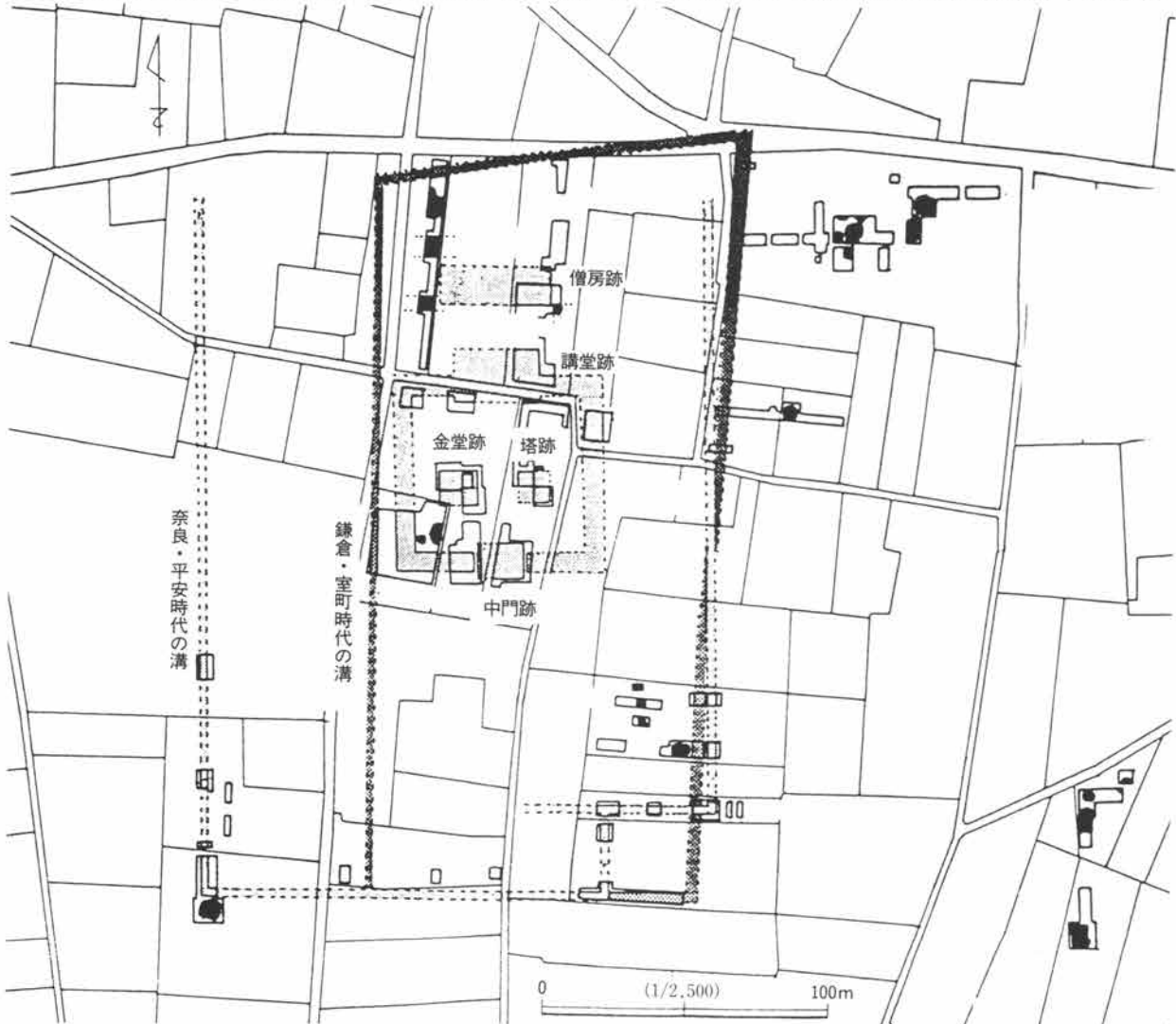
172 結城廃寺跡

茨城県結城市上山川結城寺

鬼怒川西岸の標高約30mの台地上に位置する。北東約500mの台地東斜面に創建期瓦を焼成した結城八幡瓦窯跡が位置している。昭和63年度から平成6年度にかけて、伽藍を中心に広範囲な確認調査が実施された。中心伽藍は回廊が講堂に取り付く法起寺式伽藍配置が確認された。回廊内の西から旧表土上に地業した金堂基壇が、東から掘込み地業の塔基壇が発見された。金堂基壇は東西13.7m、南北11.6mの規模で、塔基壇は一辺13mを測る。中門も掘込み地業で東西約16m、南北約12mを測り、講堂も掘込み地業で東西約30m、南北約17.3mを測る。講堂の北側には掘込み地業の僧坊基壇が東西約38m、南北約13mの規模で確認され、その西側に南北に並立する掘立柱建物跡が2棟確認された。

さらに伽藍を大きく区画する溝状遺構が東西と南で確認された。上幅1.6m、下幅0.6m、深さ0.8mの逆台形の溝で、10世紀には埋没している。このほか、この区画溝に一部重複して鎌倉期の遺物が出土する中世段階の断面V字状の区画溝も確認された。こうした区画溝の内外からは8世紀前半から平安時代後期にかけての竪穴住居跡が多く発見された。

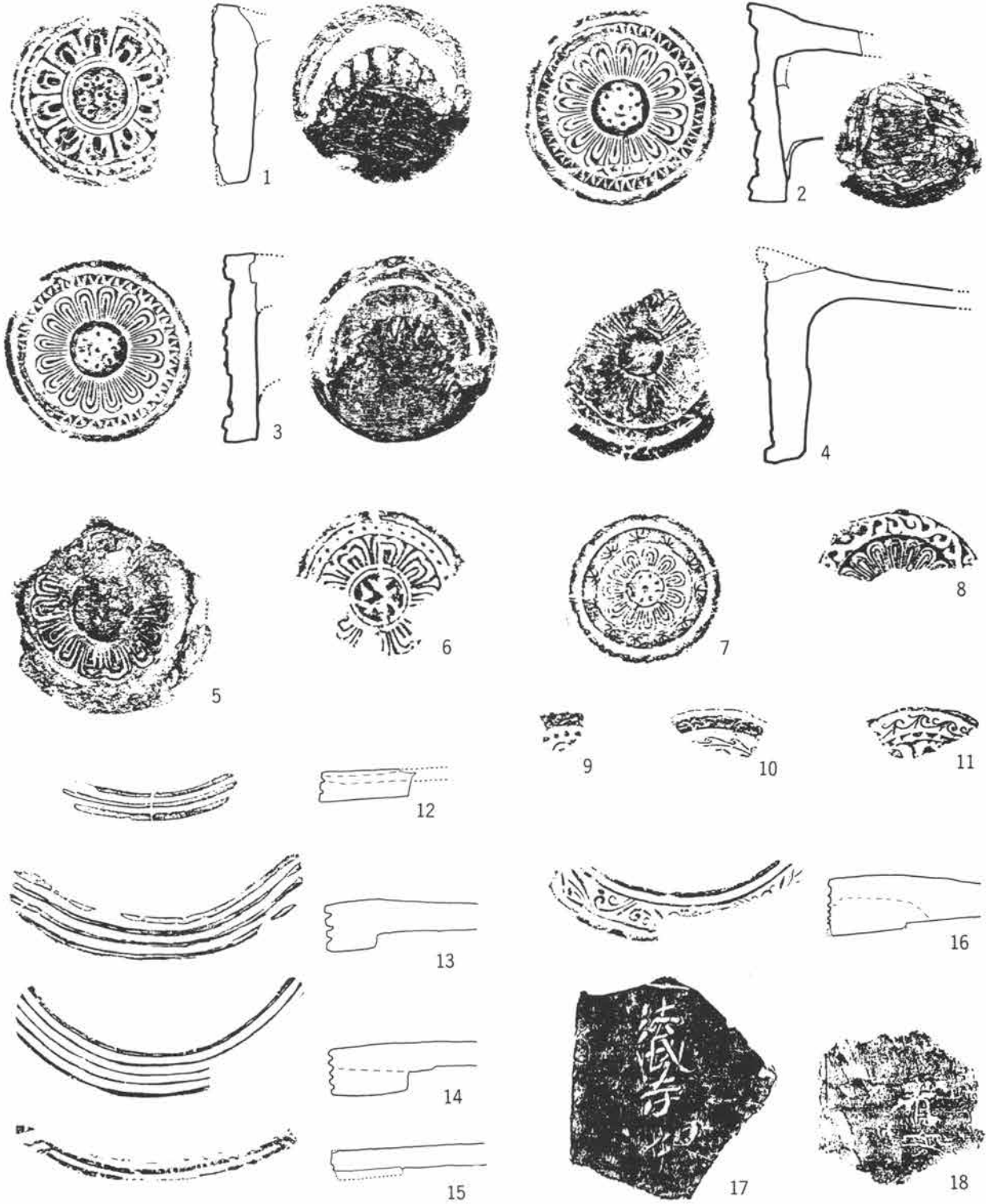
これまでに墨書土器「大寺」「東院」「茂」や、へら書き瓦「法成寺」(17)「新治」「有岐」(18)等が発見されたほか、回廊内の瓦溜りから多量の軛仏と塑像が発見された。出土軒丸瓦は鋸歯文縁単弁十葉蓮華文



第80図 結城廃寺跡遺構配置図



(1)と鋸歯文縁複弁八葉蓮華文(2)、鋸歯文縁単弁十六葉蓮華文2種(3、4)、鋸歯文縁変形八葉蓮華文(5)、下総国分寺出土瓦と同範の珠文が巡る複弁八葉蓮華文(6)、単弁十一葉蓮華文(7)、全体の文様が不明な外区に唐草文が巡る3種(8、10、11)、外区に珠文が巡る1種がある。軒平瓦は三重弧文(12)、四重弧文(13)、五重弧文(14)、重郭文(15)、均整唐草文(16)の5種がある。なお、創建期の単弁十葉と複弁八葉と単弁十六葉の軒丸瓦には瓦当裏面に布目を残すものと残さないものがある。



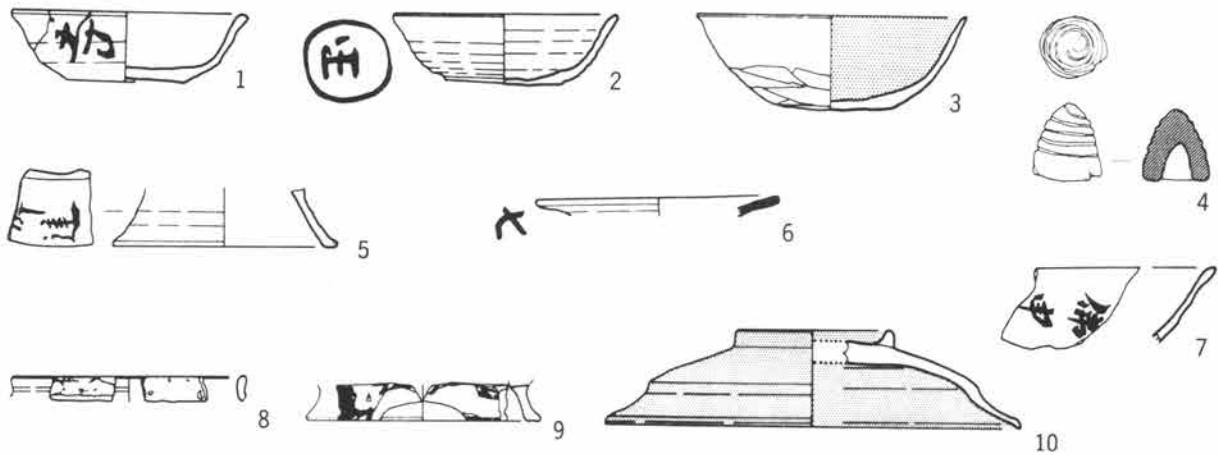
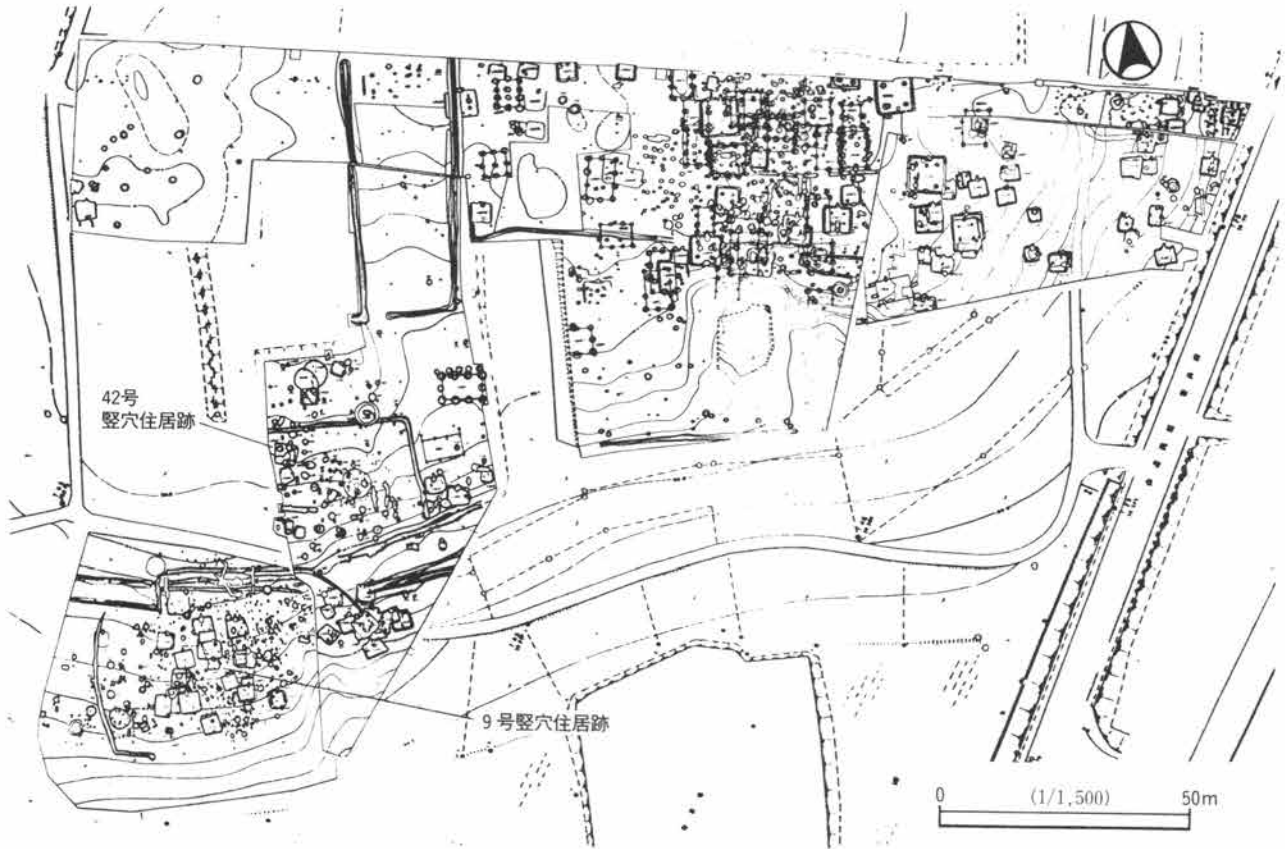
第81図 結城廃寺跡出土瓦 (1~16・ $\frac{1}{6}$ 、17~18・ $\frac{1}{4}$ )

II 主要遺跡概要

173 峯崎遺跡

茨城県結城市結城字峯崎6683他

鬼怒川に注ぐ小規模な谷津に面した台地南端に位置する。台地中央平坦部からは規則的に並ぶ掘立柱建物跡群が発見され、多くの三彩・緑釉陶器（8～10）が出土した。結城郡の郡家関連遺跡の可能性が指摘されている。この掘立柱建物跡群の南西の台地斜面部の9号竪穴住居跡（1、2）から墨書土器「寺」が、42号竪穴住居跡（3～6）から土製螺髪が発見された。土製螺髪は中空で、外部が螺旋状に線刻されている。また墨書土器「佛申」（7）が表採されている。



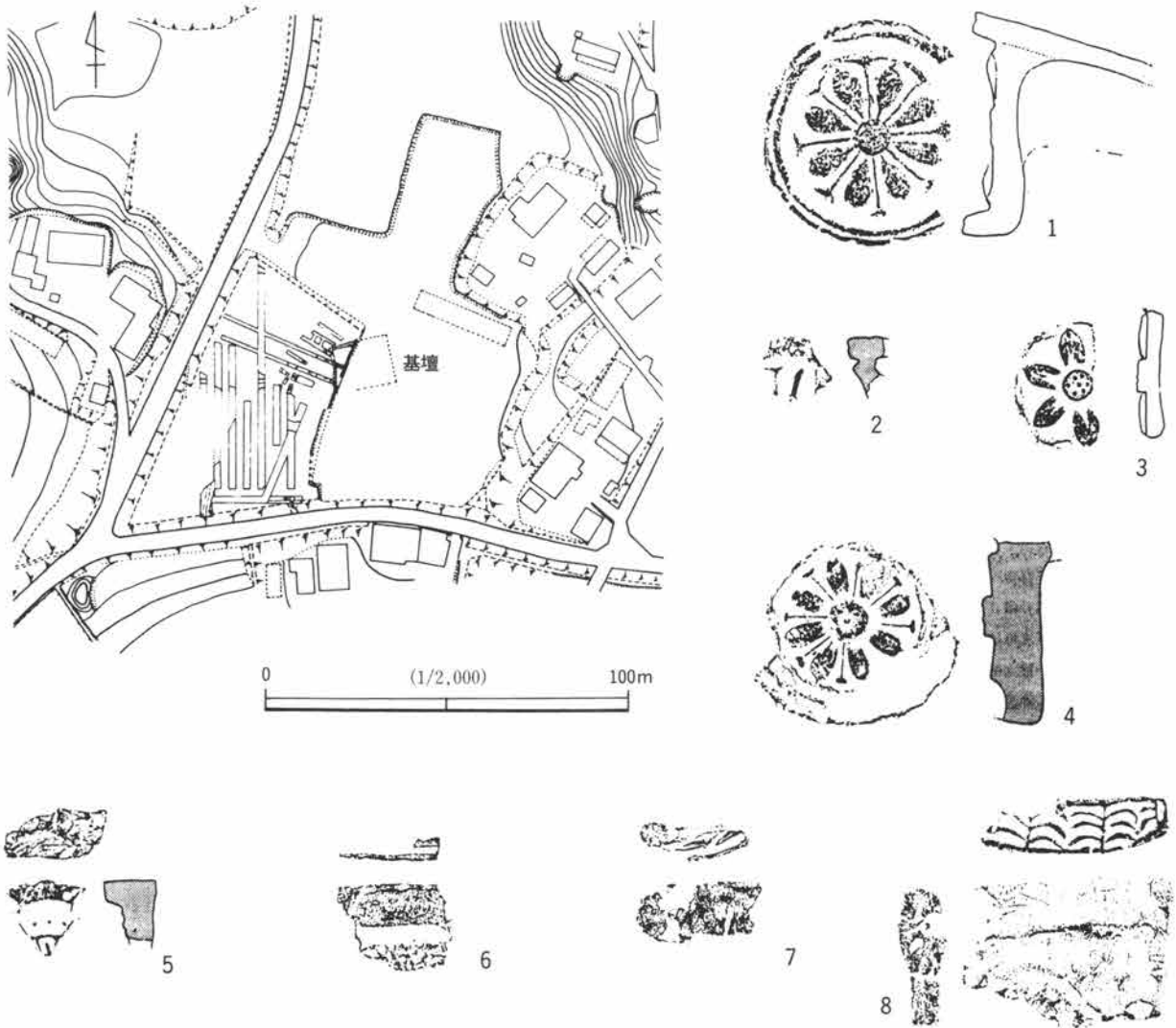
第82図 峯崎遺跡遺構配置図・出土遺物（ $\frac{1}{4}$ 、ただし4のみ $\frac{1}{2}$ ）

174 木内廃寺跡

香取郡小見川町木内字権現台

利根川に注ぐ黒部川に面した標高約42mの台地上に位置している。昭和56年に確認調査が実施されたが、調査以前に土採取等で広範囲に削平されており、基壇建物跡の一部と、その北約70mで竪穴住居跡が数軒確認されるにとどまった。基壇建物跡は掘込み地業で南北11.3m以上、東西6.3m以上の規模を確認したが、東側部分は大きく削平されていた。

出土軒丸瓦が二重圈文縁素弁八葉蓮華文(1)、二重圈文縁素弁蓮華文(2)、外区不明の素弁六葉蓮華文(3)、素弁八葉蓮華文(4)、そして常陸国分寺系(5)の5種がある。軒平瓦は二重弧文(6)と唐草文2種(7、8)の計3種がある。丸瓦は無段式が、平瓦は正格子叩きと斜格子叩き、縄叩き、凸面ヘラケズリのものが出土している。4は埴谷横宿遺跡出土瓦と同文で、3は八日市場大寺廃寺跡出土瓦と多古台遺跡出土瓦と同文、7は龍正院瓦窯跡出土瓦と同範である。



第83図 木内廃寺跡遺構配置図・出土瓦 (1/6)

## II 主要遺跡概要

### 175 織幡妙見堂遺跡

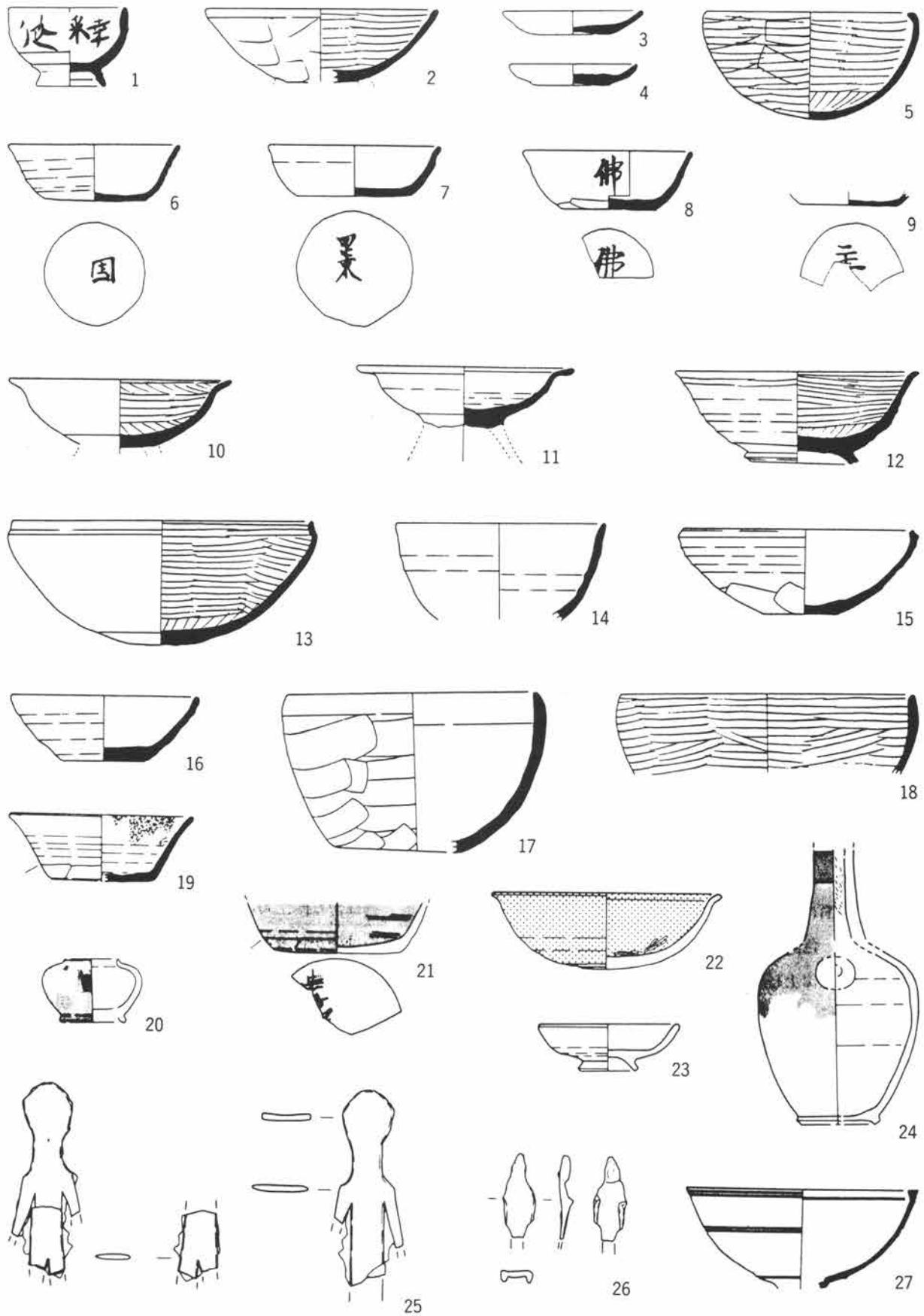
香取郡小見川町織幡字妙見堂853-2 他

小野川上流の谷津に面した台地南端に位置する。銚子香取郡市文化財センターによる2次調査で、台地中央から3棟の掘立柱建物跡が発見された。SB1は一間四面の掘立柱建物跡で、その南面からは遺構が発見されておらず、前庭として開放されていたと考えられる。

また、掘立柱建物跡SB1の南西に位置する竪穴住居跡SI16(5~9)から墨書土器「佛」と土師器鉄鉢形土器が、竪穴住居跡SI3(1~4)から墨書土器「釈迦」が出土した。掘立柱建物跡SB1の北側の竪穴住居跡SI20(10~12)から脚付香炉が、東側の竪穴住居跡SI35・36(13~15)から土師器鉄鉢形内黒土器が出土した。このほか、青銅製合子(27)が掘立柱建物跡SB1周辺の表土中から発見されており、掘立柱建物跡群周辺に仏教遺物がやや集中する傾向があり、特異な構造の掘立柱建物跡SB1は仏堂の可能性が高い。このほか、1次調査区の台地西側の竪穴住居跡からも浄瓶(24)、縣仏の可能性のある銅製品(26)等が出土している。



第84図 織幡妙見堂遺跡遺構配置図

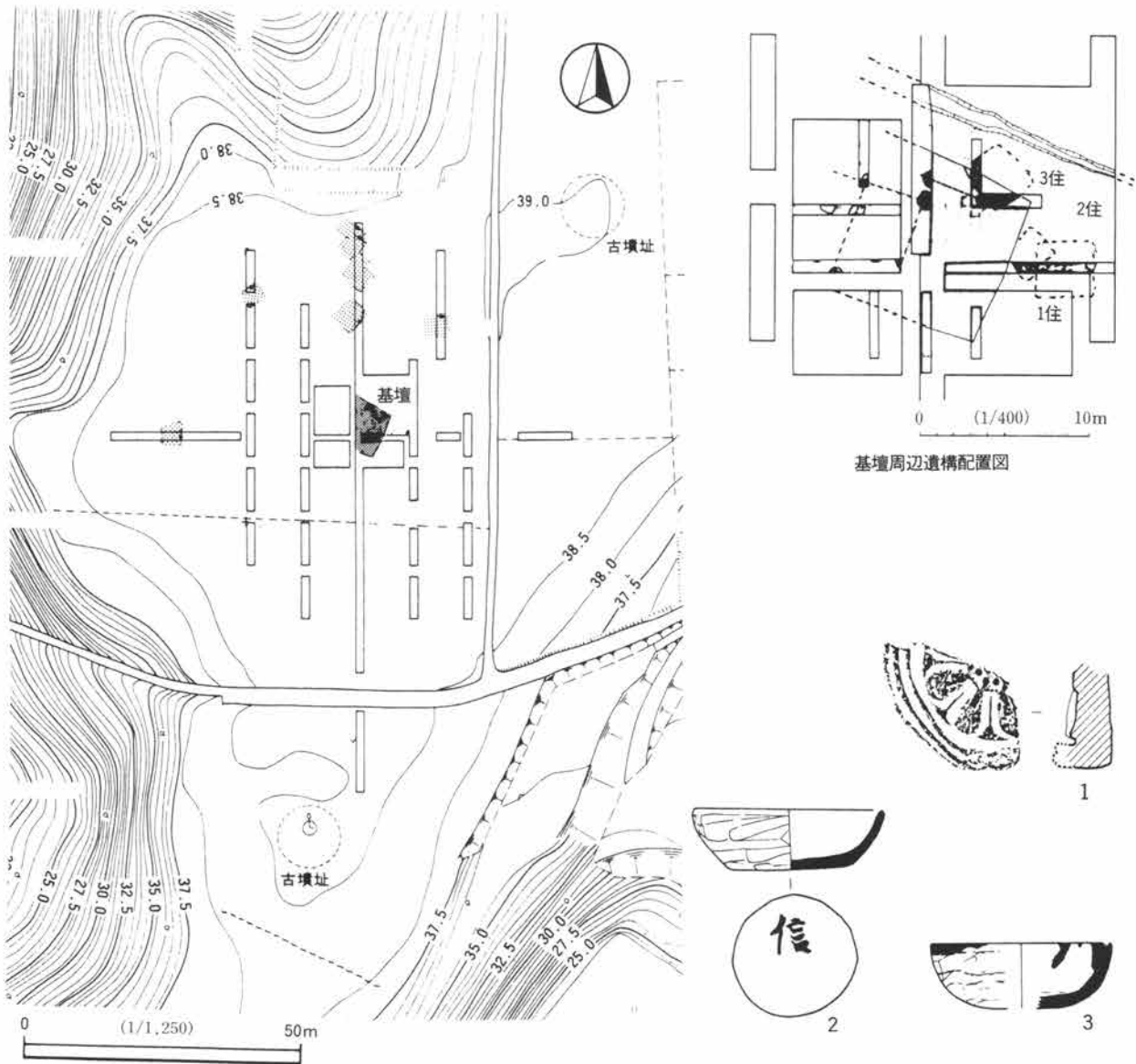


第85図 織幡妙見堂遺跡出土遺物 (1~24・ $\frac{1}{4}$ 、25~27・ $\frac{1}{2}$ )

176 名木廃寺跡

香取郡下総町名木字鎌部663他

利根川流域の平野部から3kmほど谷津を遡った標高約38mの台地上に位置している。南約75mの古墳付近から、銅造如来形坐像と菩薩形立像の2体の小仏像が発見されている。このほか墨書土器「度寺/度寺」「曹」「福カ」なども表面採集されている。確認調査は昭和58年に(財)千葉県文化財センターにより実施され、基壇建物跡1基と掘立柱建物跡、竪穴住居跡が発見された。基壇建物跡は掘込み地業で、一辺約9.5mの方形に近い規模が確認された。なお、この基壇に先行する2軒の竪穴住居跡が基壇東側から、また基壇西側から掘立柱跡が発見された。2号住居跡から墨書土器「信」が、3号住居跡からは灯明皿(3)が出土し、8世紀前半の遺構である。掘立柱跡は基壇の軸線とほぼ一致する掘立柱建物跡と捉えられる。このほか、基壇の北側から竪穴住居跡7軒と、8世紀後半から9世紀前半の土器が多く発見された。出土瓦は少なく、軒丸瓦は三重圈文縁単弁八葉蓮華文1種で、軒平瓦の出土は確認されていない。平瓦は桶巻作りの凸面正格子叩きとナデ調整、縄叩きの凸型台一枚作りがある。このほか、丸瓦は細片が出土している。

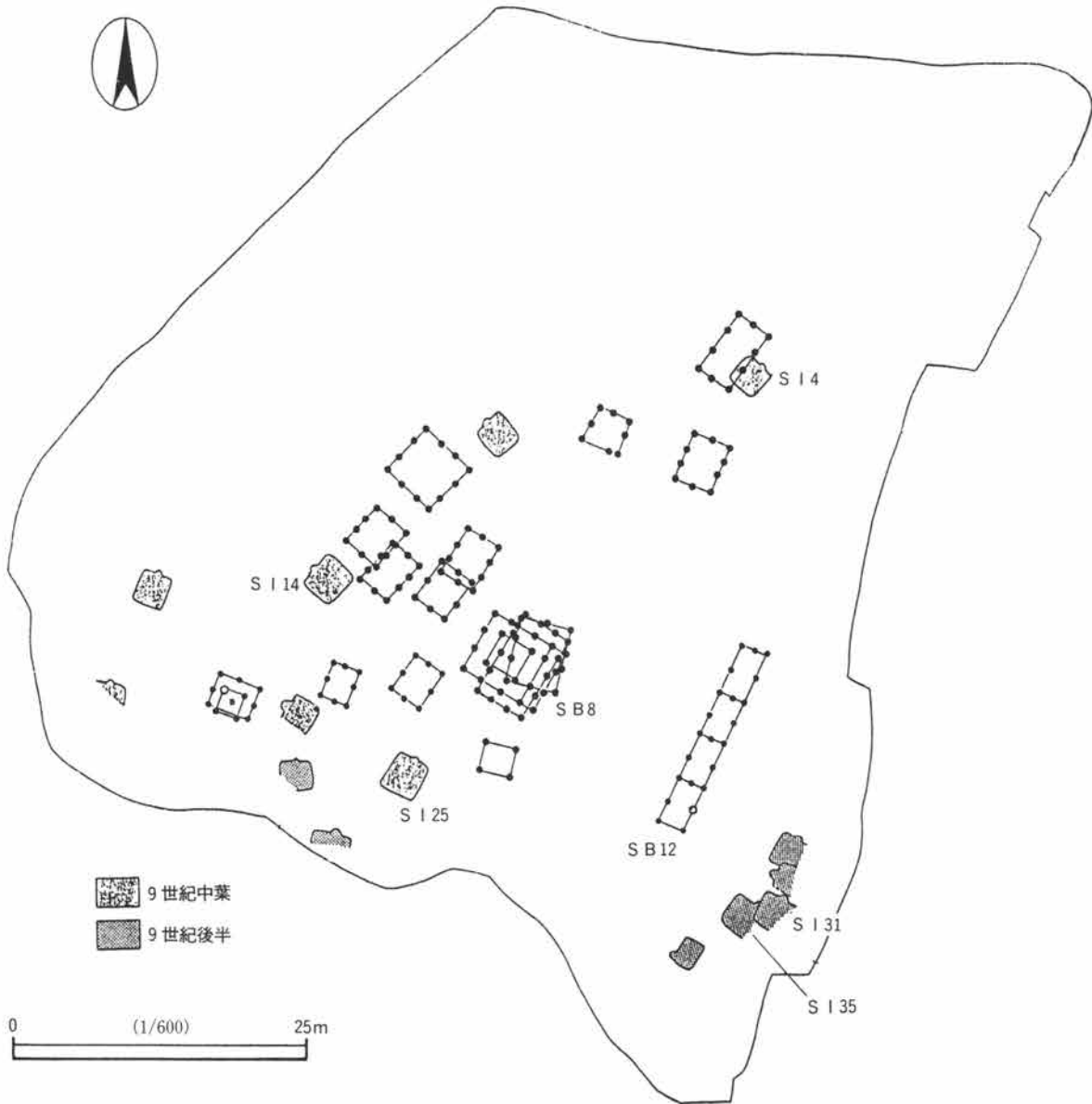


第86図 名木廃寺跡遺構配置図・出土遺物 (1・1/6、2~3・1/4)

178 多田日向遺跡

佐原市多田字日向2426他

利根川の支流小野川に面した台地上に位置する。平成元年から2年にかけて(財)香取郡市文化財センターによって調査され、奈良・平安時代の竪穴住居跡29軒と掘立柱建物跡17棟などが発見された。9世紀中葉以降の墨書土器に「三綱寺」「多理草寺」「観音寺」「寺」など寺院関連のものが多く発見されている。このほか、鉄鉢形の須恵器鉢が出土している。



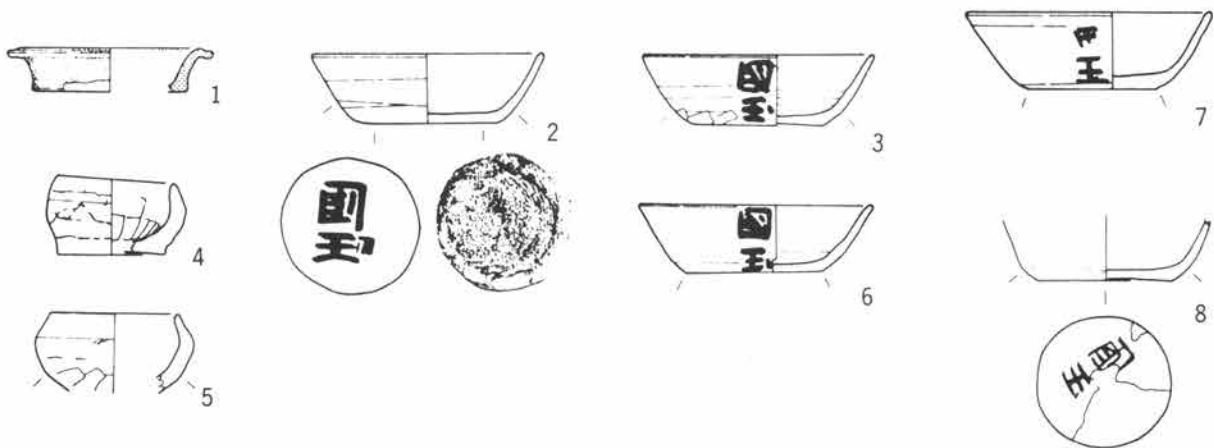
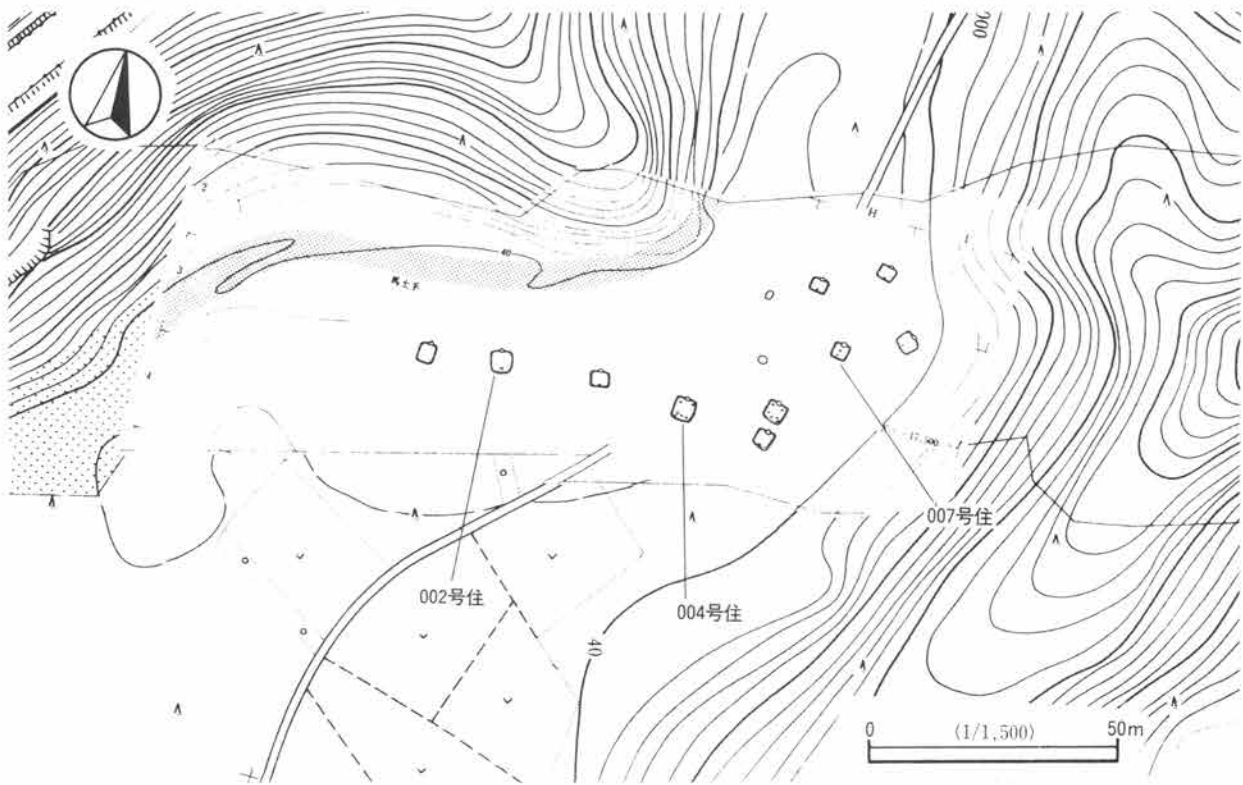
第87図 多田日向遺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要

185 東野遺跡

佐原市本矢作字東野40-2他

小野川支流の香西川上流の支谷に面した台地端部に位置している。8世紀第4四半期から9世紀前半の  
 竪穴住居跡が10軒発見された。調査区中央の004号竪穴住居跡(1~6)の南西隅覆土上層から二彩火舎が  
 出土した。住居跡廃絶後の廃棄に伴うものである。また同一住居跡の北東隅覆土上層からも一括して廃棄  
 された土師器坏などが出土した。この一括資料の中には墨書土器「国玉」が9点と手捏2点が含まれてい  
 る。このほか、002号竪穴住居跡(7)のカマド煙道部と、007号竪穴住居跡(8)の床面から墨書土器「国  
 玉」が出土した。二彩火舎のほかには仏教関連遺物は発見されていない。



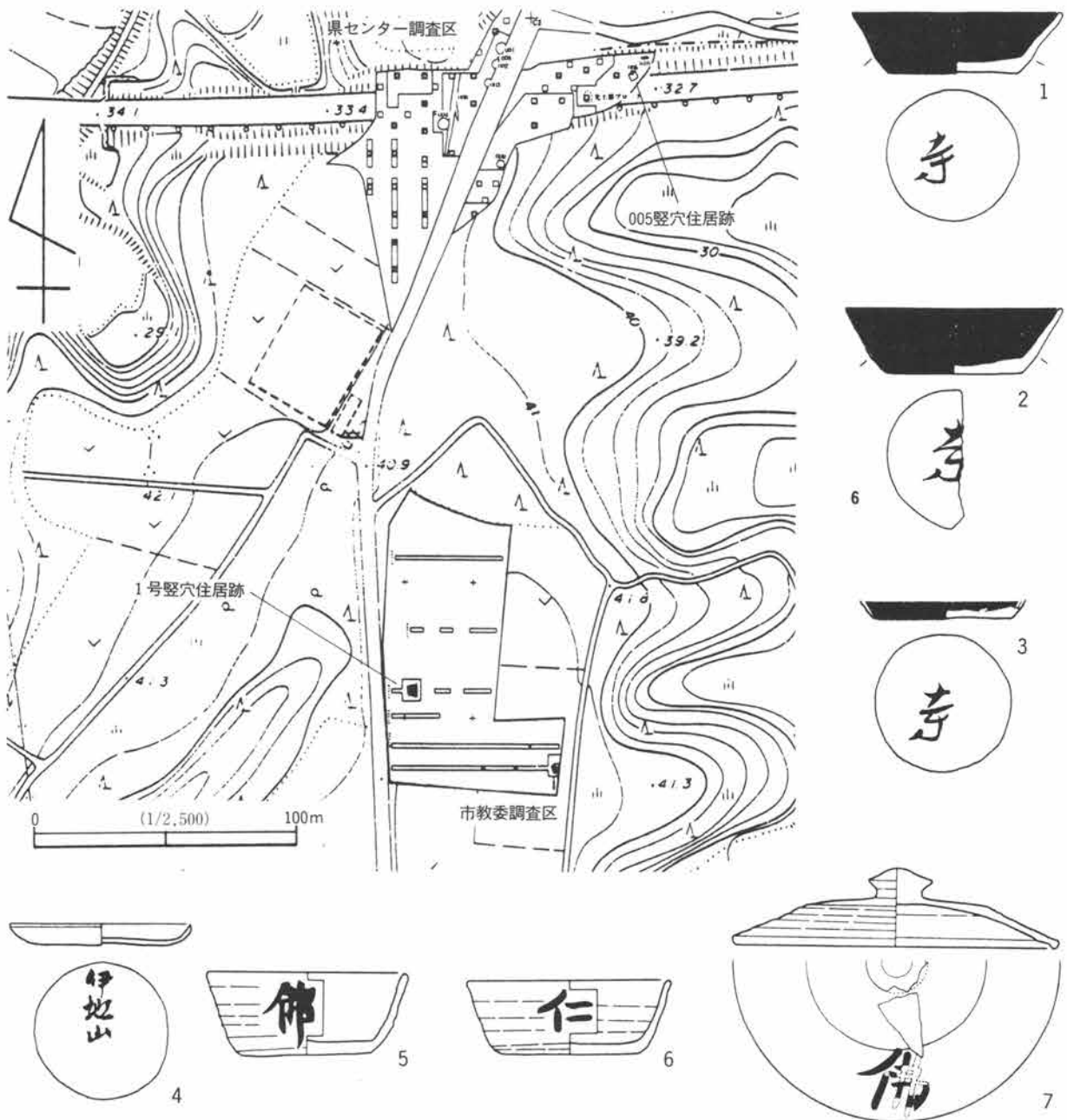
第88図 東野遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)



187 伊地山藤之台遺跡

佐原市伊地山409他

栗山川上流の小支谷に挟まれた尾根状の台地に位置している。北側の県センター調査区からは、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒と8世紀後半の竪穴住居跡1軒が発見された。台地東端の005竪穴住居跡(5~7)から墨書土器「佛」が2点出土した。「佛」は須恵器の坏と蓋に墨書されている。また、台地南側の市教委の調査では西側の谷津に面した1号竪穴住居跡(1、2)とグリッド(3)から、墨書土器「寺」が3点出土した。いずれも赤彩土師器杯の底面に「寺」と墨書されている。部分的な調査であるが、全体的に建物分布は希薄である。なお、調査区のさらに南側の台地上は遺物分布が濃く、集落跡の中心と推測されている。なお、市教委の調査区から現在の同地の地名である「伊地山」と墨書された中世土器が出土している

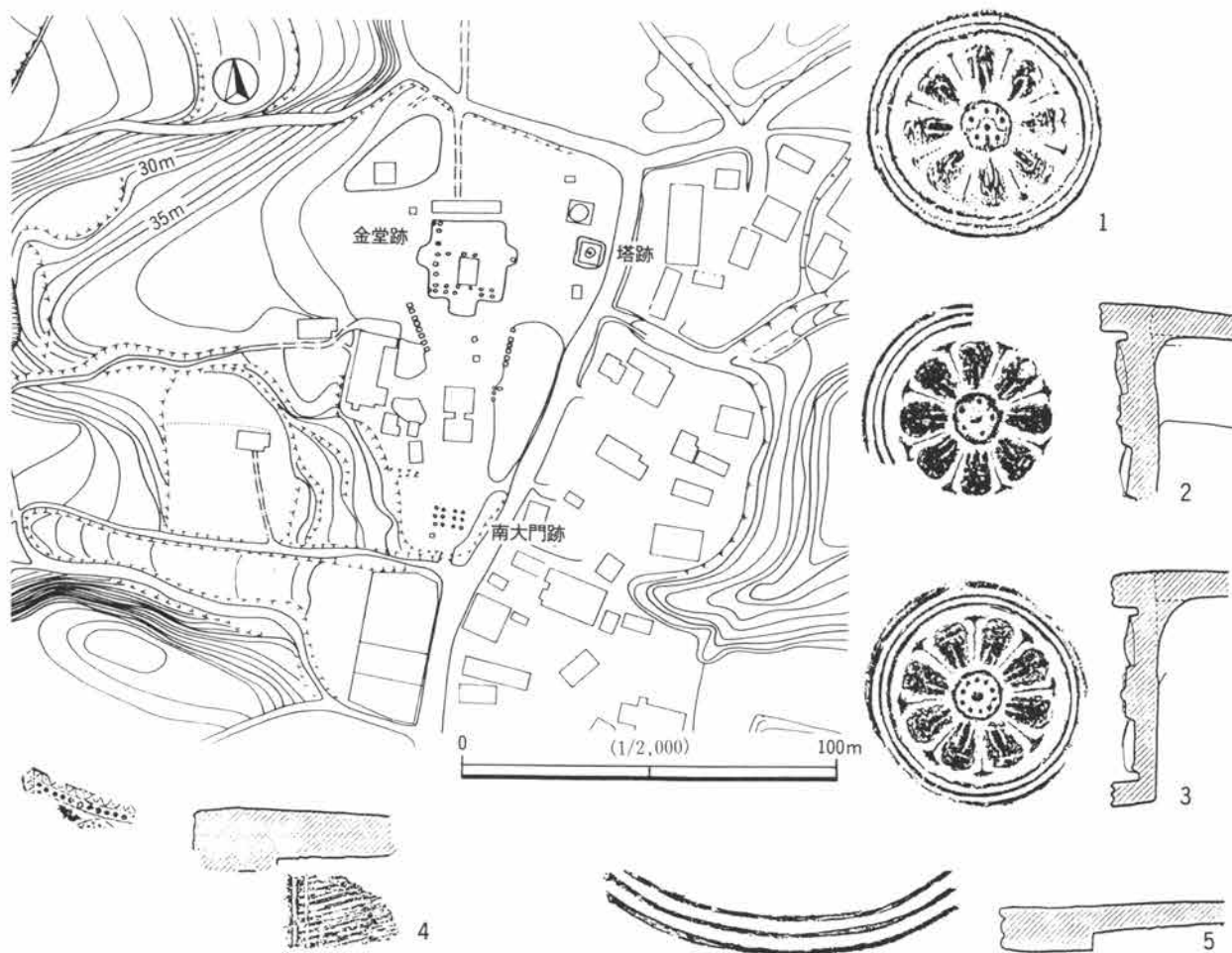


第89図 伊地山藤之台遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

188 龍角寺

印旛郡栄町竜角寺239

利根川流域の平野を望む標高約30mの台地上に位置している。現在の天竺山寂光院龍角寺の本尊金銅薬師如来坐像は奈良前期様式である。龍角寺の南には印旛沼に沿って岩屋古墳をはじめとする竜角寺古墳群と、埴生郡家推定遺跡の大畑遺跡群が所在する。また、龍角寺の北方には創建期瓦を焼成した龍角寺瓦窯跡群と五斗蒔瓦窯跡がある。発掘調査は昭和22年と23年、46年、51年に早稲田大学考古学研究室を中心に実施された。金堂基壇は旧表土上の地業で間口51尺奥行41尺の規模が、塔基壇は現存心礎を中心に一辺36尺の掘込み地業が確認された。このほか塔北側から掘立柱跡や瓦塔が発見された。また金堂の南約60mに門の礎石があり、南大門の可能性が指摘されている。昭和63年には(財)千葉県文化財センターにより周辺の確認調査が実施され、南側の台地上から古墳時代後期～平安時代の集落跡が、寺院の北側から東西溝などが発見された。出土軒丸瓦は三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦1種である。中房蓮子の彫り直しが認められ3段階の変遷がある。最初の蓮子配置は1+5(1)で、次に中心蓮子を周囲よりも一回り大きく彫り直し(2)、さらに周辺の蓮子を彫り加えて1+10の配置(3)に変更している。軒平瓦は桶巻作りの三重弧文(5)と葡萄唐草文(4)がある。丸瓦は無段式のみで、平瓦は桶巻作りの平行叩き、格子叩き、ナデ調整と凸型台一枚作りの縄叩き等がある。五斗蒔瓦窯跡からは隅切り瓦や面戸瓦も多く出土し、寺院や両窯跡群から多くの文字瓦「朝布」「神布」「赤加」「服止」「加刀利」「水津」「玉作」「皮尔□」なども出土している。

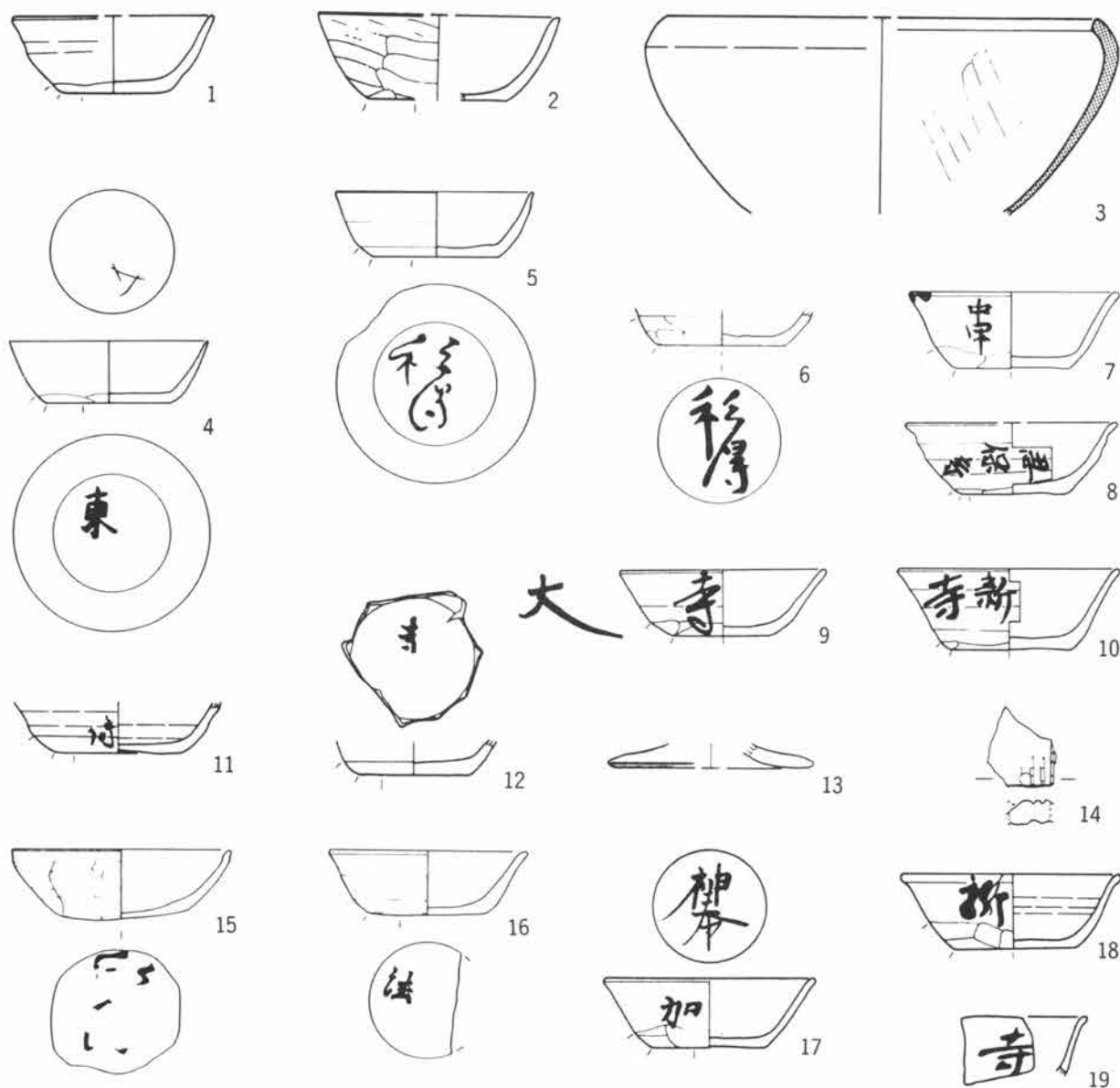


第90図 龍角寺遺構配置図・出土瓦 (1/6)

189 郷部・加良部遺跡 (LOC15)

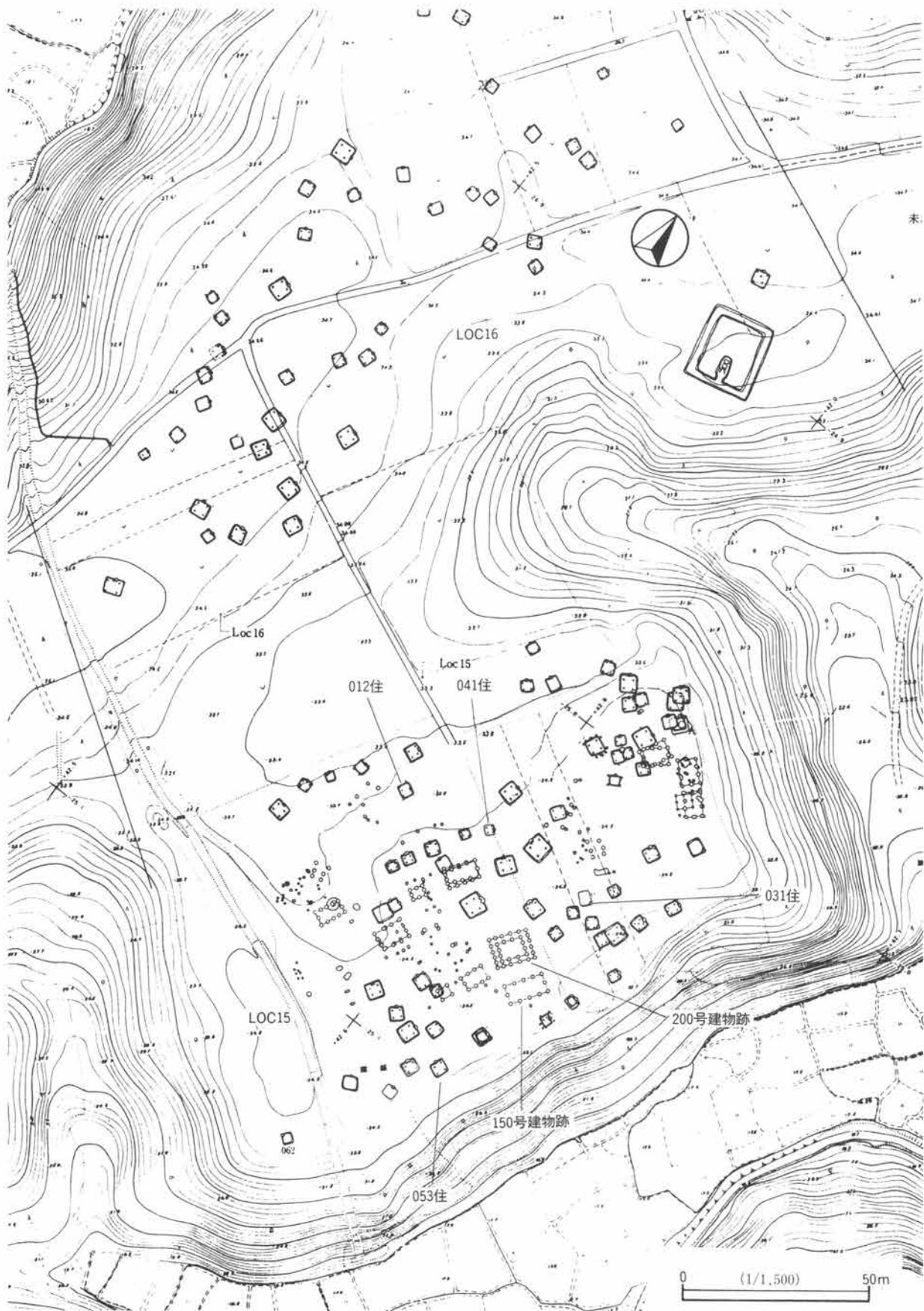
成田市加良部4丁目

根木名川支流の小橋川に注ぐ小支谷に面した台地の南東端に位置する。南北に並ぶ三間四面の200号掘立柱建物跡と4間×2間の150号掘立柱建物跡は、笹生衛氏によって双堂として機能したと指摘されている。そして、これらを取り囲むように位置する竪穴住居跡から仏教関連遺物が多く出土している。012号竪穴住居跡(1~3)から須恵器鉄鉢形土器が、041号竪穴住居跡(11,12)から墨書土器「寺」「得」が、031号竪穴住居跡(6~10)からは墨書土器「忍保寺」「大寺」「新寺」が出土した。また、053号竪穴住居跡(13,14)からは瓦塔の屋蓋部の破片が1点出土した。なお、同一台地の北側に隣接する郷部・堀尾遺跡(Loc16)(15~19)からも墨書土器「寺」「法」「私得」「神奉」などが竪穴住居跡から出土している。



第91図 郷部・加良部遺跡、堀尾遺跡出土遺物 (1/4)

II 主要遺跡概要



第92図 郷部・加良部遺跡、堀尾遺跡遺構配置図

190 山口 (LOC20) 遺跡

成田市山口字船塚台・石塚・池之台

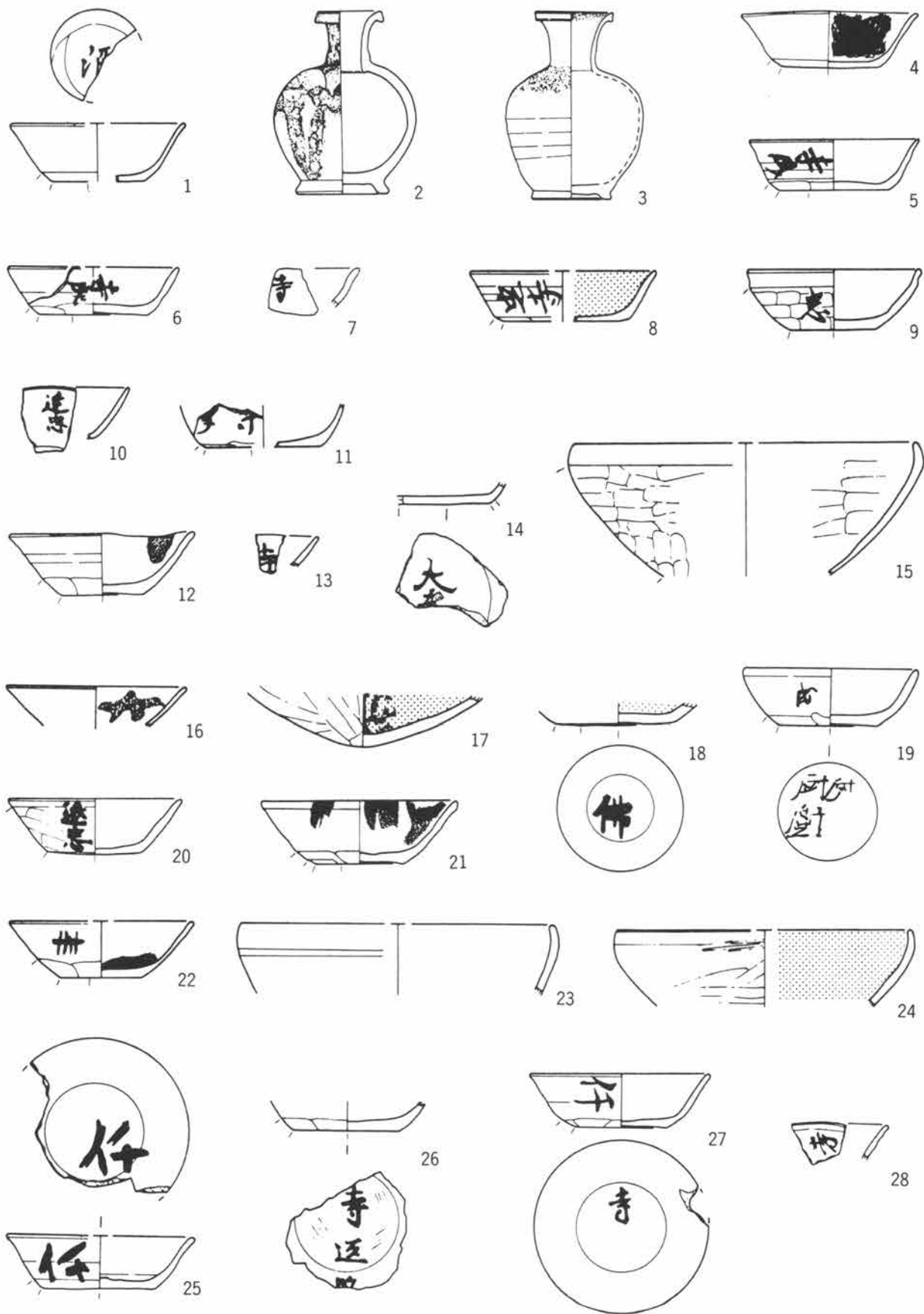
根木名川支流の小橋川に注ぐ小支谷に挟まれた台地上に位置する。三間四面の掘立柱建物跡が2棟発見され、このほかにも5間×2間の両庇建物跡と7間×2間の側柱建物跡など大規模な掘立柱建物跡が発見された。三間四面の250号建物跡とその南の100号建物跡は、笹生衛氏によって双堂として機能したと指摘されている。

仏教関連遺物は掘立柱建物跡の周囲の竪穴住居跡等から広範囲に出土した。双堂南東の009号竪穴住居跡(5~7)から墨書土器「寺」「寺成」「家」が、012号竪穴住居跡から土師器鉄鉢形土器(15)が出土した。また、双堂の西に位置する013号竪穴住居跡(8~11)から墨書土器「忠寺」「延忠」「忠」が、015号竪穴住居跡から墨書土器「寺」が、016号竪穴住居跡から墨書土器「寺」「成」「代/田」が、017号竪穴住居跡(12~14)から墨書土器「寺」「大□」が、084A号竪穴住居跡から墨書土器「寺返□」「仟/仟」(25,26)と二彩椀の破片が、084B号竪穴住居跡から墨書土器「寺/仟」(27)が、双堂の北側に位置する026号竪穴住居跡(16,17)から内黒土師器鉄鉢形土器が、030号竪穴住居跡(18,19)から墨書土器「佛」「成/厨厨厨」「成」、031号竪穴住居跡から墨書土器「忠」などが出土した。このほか、各竪穴住居跡の多くから灯明皿や転用硯等も多く出土した。また、双堂跡から離れた068(22,23)・074号(24)竪穴住居跡からも土師器鉄鉢形土器などが出土しており、ほぼ台地全面で仏教関連遺物が発見された。



第93図 山口遺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要

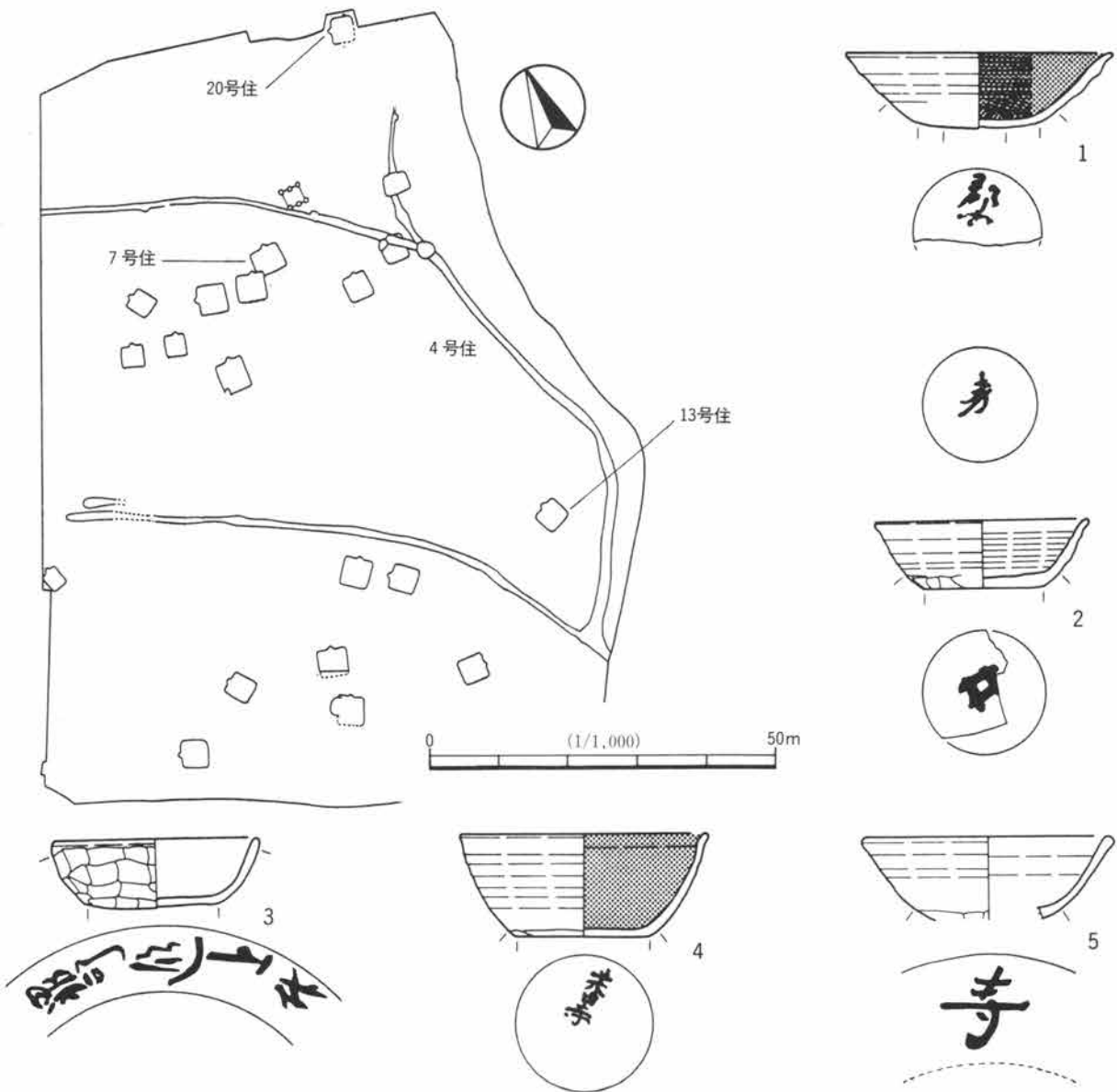


第94図 山口遺跡出土遺物 (1/4)

192 久能高野遺跡

印旛郡富里町久能字高野660-1 他

根木名川の小支谷に面した台地東端に位置する。台地北東端の20号竪穴住居跡から墨書土器「寺」(5)が、台地北側の7号竪穴住居跡(1、2)から墨書土器「□(寺カ)／井」「郡□」が、台地東端の13号竪穴住居跡(3、4)から墨書土器「桑田寺」「郡司進上代」が発見された。墨書土器「□(寺カ)／井」「郡□」はともに7号竪穴住居跡のカマド付近から発見された。墨書土器「桑田寺」は内面黒色処理された土師器杯の底部外面に墨書されている。なお、4号溝は竪穴住居跡群と同時期の道状遺構と報告されている。唯一発見された掘立柱建物跡の1号掘立は2間×1間の桁行2.56m、梁行2.56mの小規模な建物で、4号溝に接して発見されている。

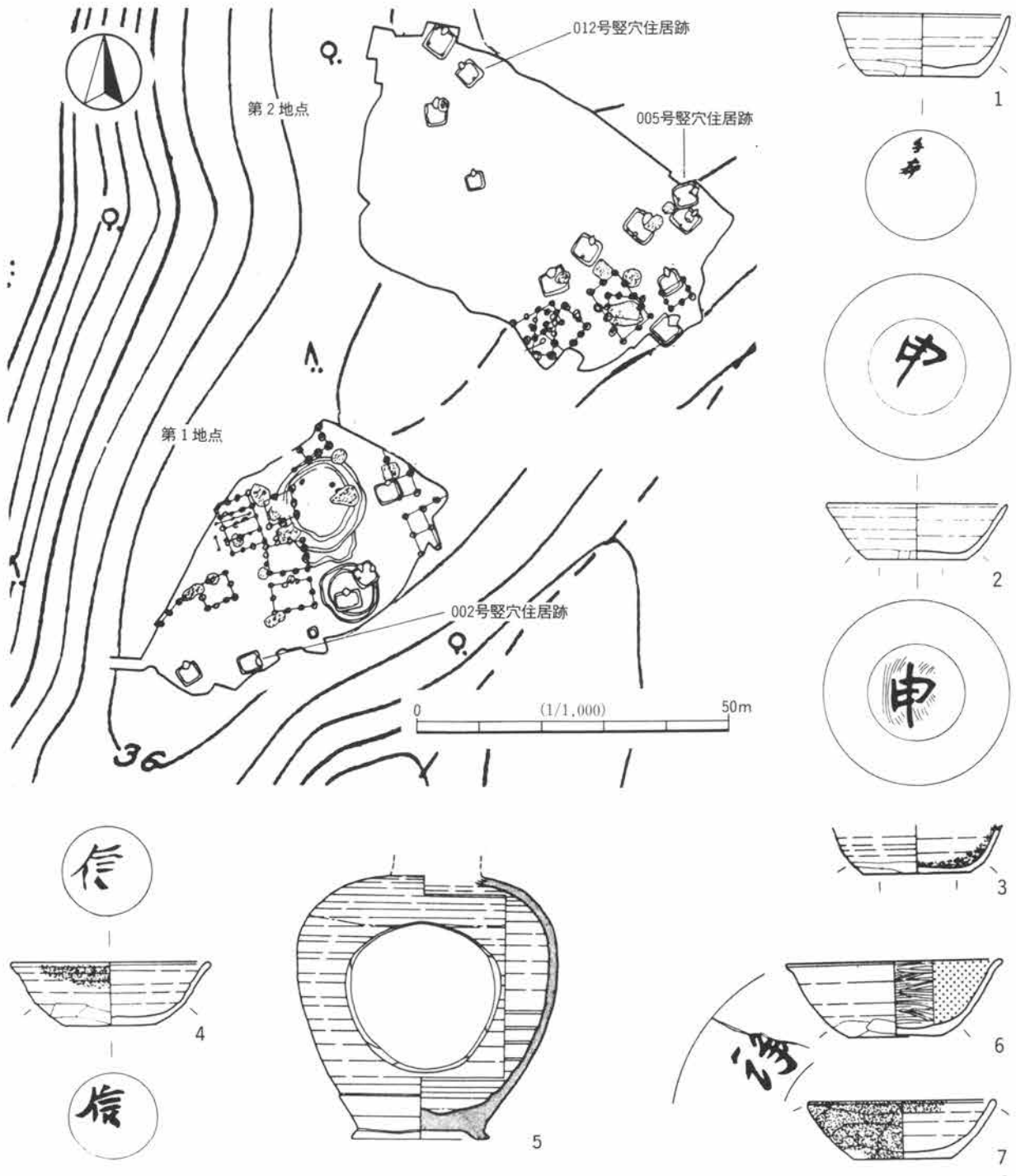


第95図 久能高野遺跡遺構配置図・出土遺物 (1/4)

197 野毛平植出遺跡

成田市野毛平字植出1088他

取香川を望む台地先端に位置する。台地先端から南東端を中心に掘立柱建物跡と竪穴住居跡が発見された。台地先端の第1地点002号竪穴住居跡（1～3）から墨書土器「手寺」「申／申」と多くの灯明皿が出土した。第2地点005号竪穴住居跡（4、5）からは胴部に丸く穿孔した灰釉陶器長頸瓶と墨書土器「信／信」が、第2地点012号竪穴住居跡（6、7）から墨書土器「浄」などが出土した。なお、谷津向かいの西150mに位置する野毛平木戸下遺跡の竪穴住居跡からは海獣葡萄鏡が出土している。



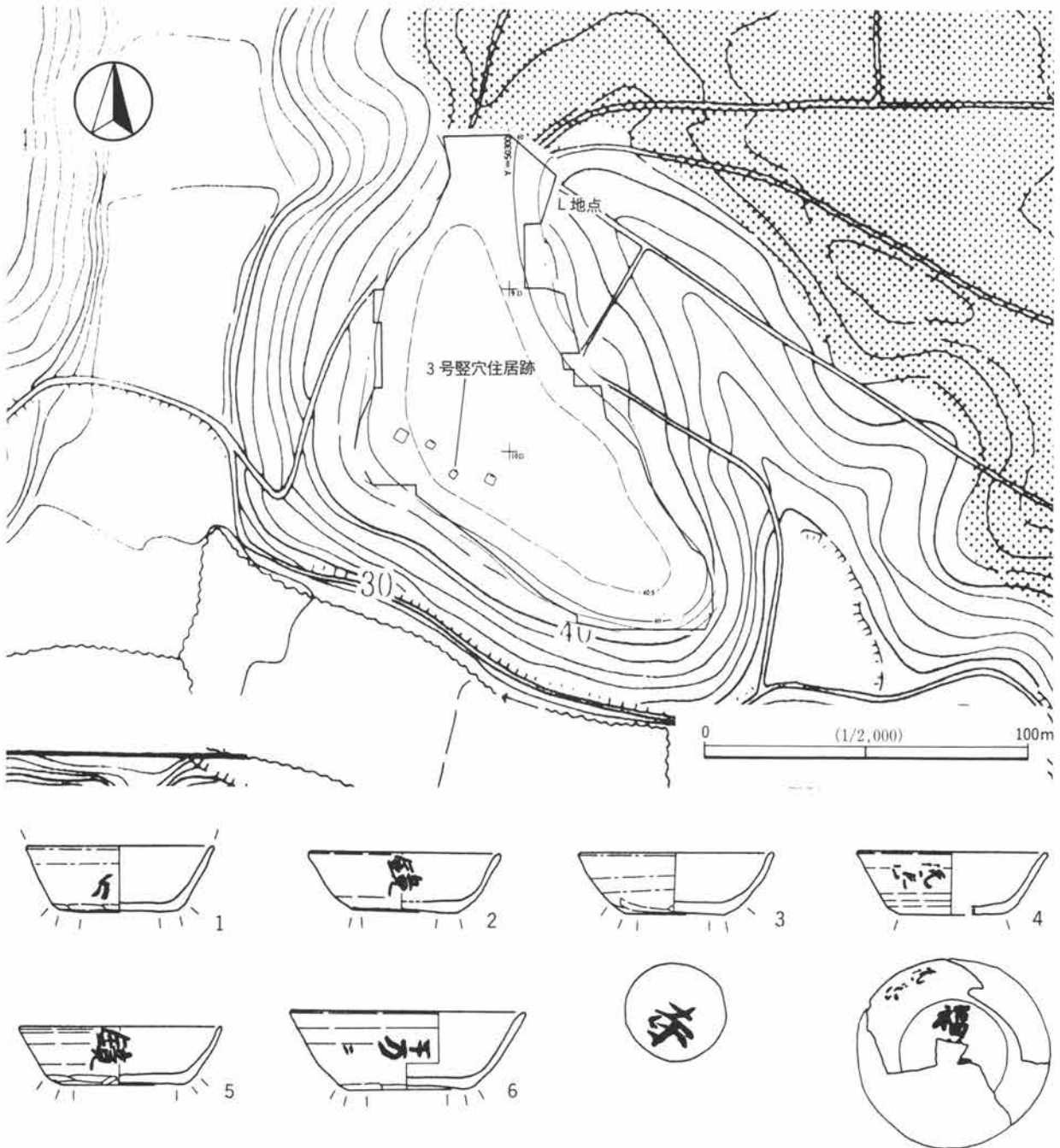
第96図 野毛平植出遺跡遺構配置図・出土遺物（1/4）



198 取香和田戸遺跡（空港No60遺跡）

成田市取香字和田戸711他

取香川に面した舌状台地のL地点の南端から9世紀第2四半期の竪穴住居跡が4軒発見された。3号竪穴住居跡(3)の床面から墨書土器「寺」が出土した。「寺」はロクロ土師器坏の底部外面に墨書され、灯明皿として使用された痕跡がある。このほかにも灯明皿として使用された墨書土器「鏡」が2号(1、2)・4号(4～6)竪穴住居跡から発見された。なお、多量の砂鉄が1号竪穴住居跡等から発見されている点から、400m離れたJ地点の同時期の精錬炉を伴う製鉄遺構群との関連が想定されている。



第97図 取香和田戸遺跡遺構配置図・出土遺物（1/4）

II 主要遺跡概要

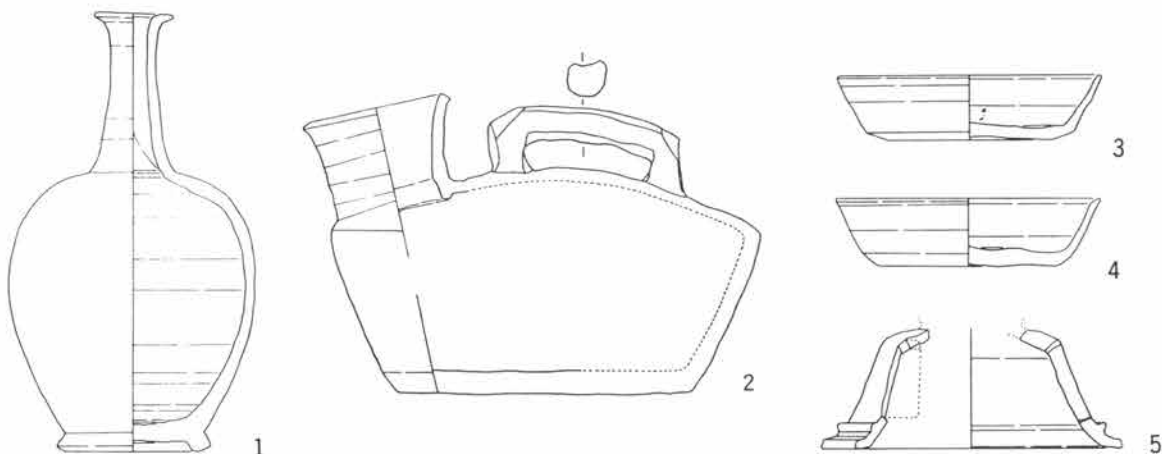
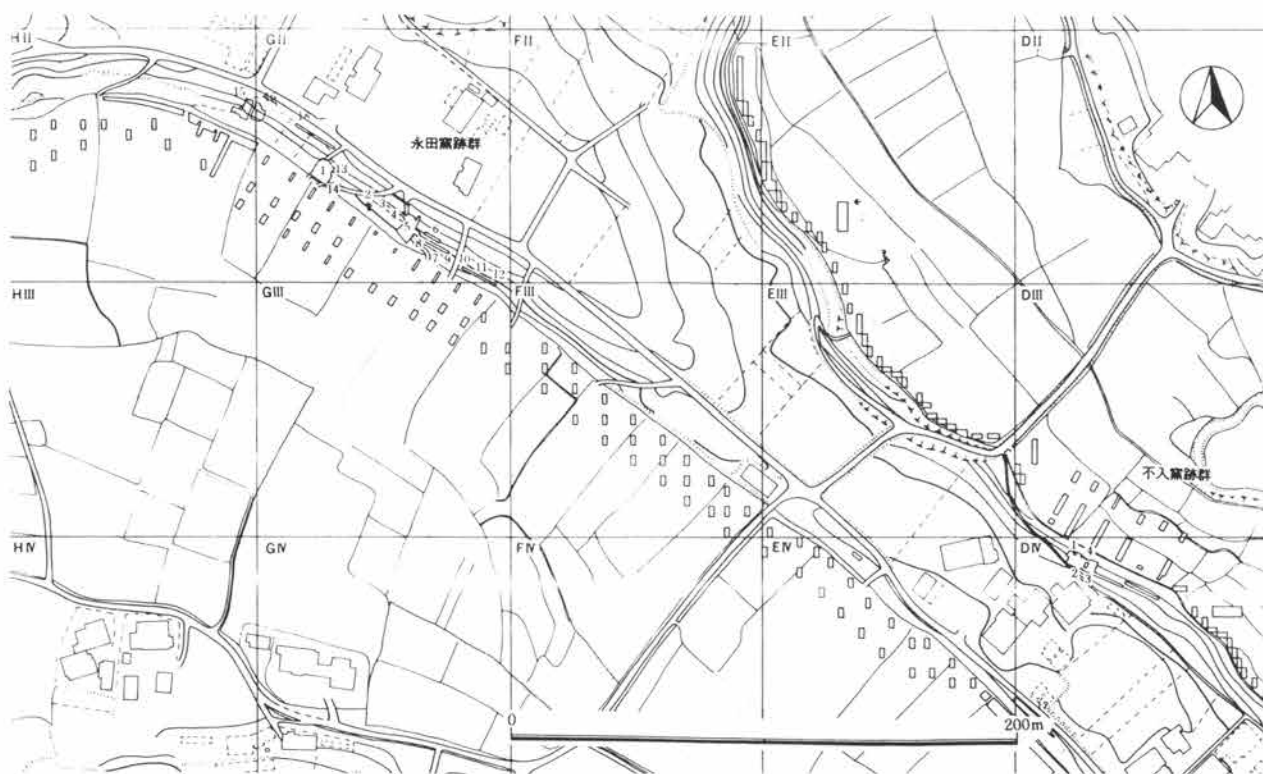
生1 永田・不入窯跡群

市原市久保697-13他

遺跡は養老川の中流域東岸の河岸段丘上に立地し、永田窯跡群は南斜面、不入窯跡群は北斜面に見られる。数次の確認調査が行われた結果、須恵器窖窯が23基することが判明しており、製品は蓋・杯・高台付杯・碗・高台付碗を中心として、盤・高盤・高台付盤・鉢・高台付鉢・長頸壺・水瓶・壺・短頸壺・多口壺・平瓶・甑・甕・円面硯が焼成されている。永田・不入窯跡群は南河原坂窯跡群と異なり、瓦の焼成がなされていないのが特徴的である。

仏教関連遺物は、不入2号・3号窯跡の灰原から水瓶が検出されている。この窯はほかにも円面硯や平瓶など特殊なものを焼成していることから、多分に国分寺等の寺院との関連が考えられている。

なお、不入2号・3号窯の製品は杯の形態・技法から、永田・不入編年のIII期に位置付けられ、8世紀第3四半世紀後半に比定されている。



第98図 永田・不入窯跡群・出土遺物

生9 南河原坂窯跡群

千葉市緑区小食土町1,175-20他

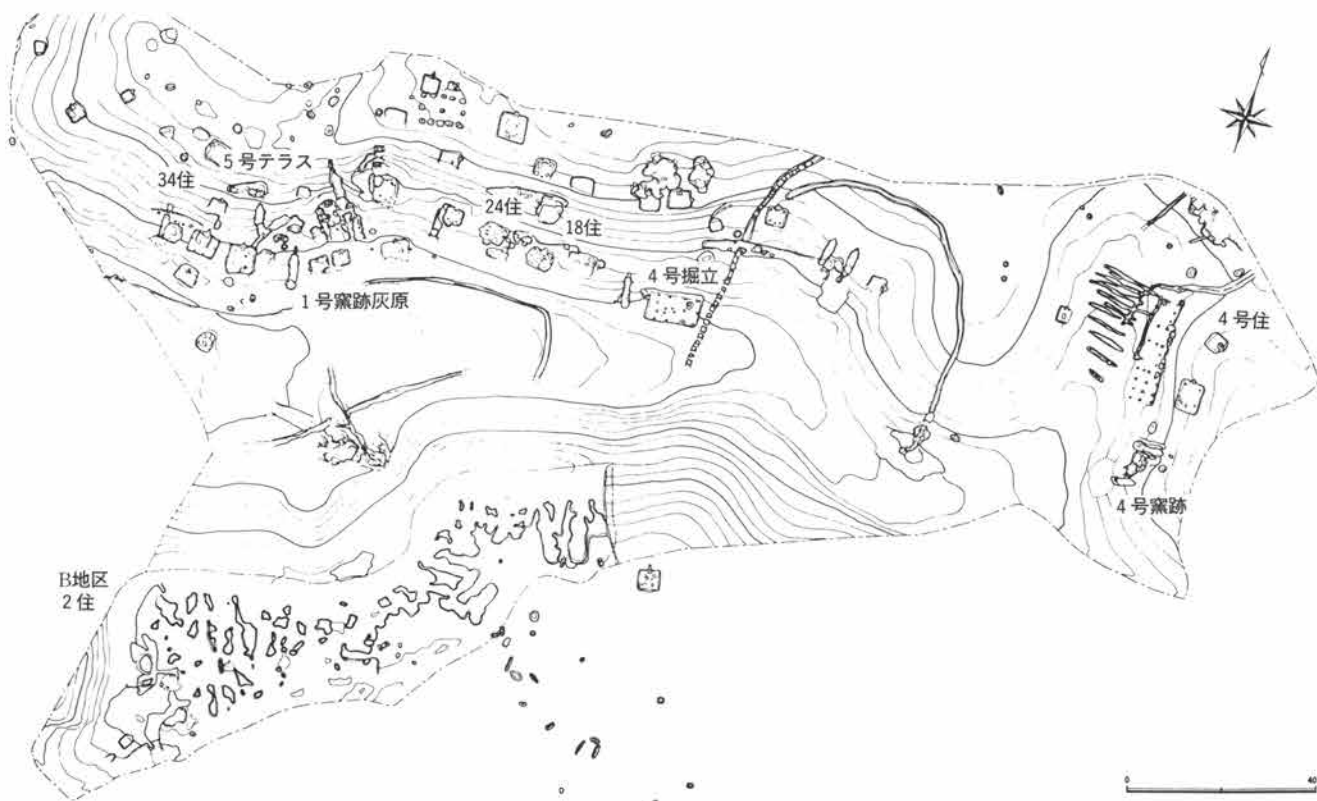
村田川によって開析された支谷の台地及び斜面に立地し、北西から入り込む谷を挟んで対峙する。

ロストル式平窯6基、窖窯13基、土師器の円形窯や土坑97基、竪穴住居跡43軒(工房跡6軒)、掘立柱建物跡5棟、粘土採掘坑4か所以上が検出された。

須恵器と瓦と土師器が、同一地域で併存して焼成されていたと考えられ、千葉県窯業生産を考える上でも重要な遺跡と言える。

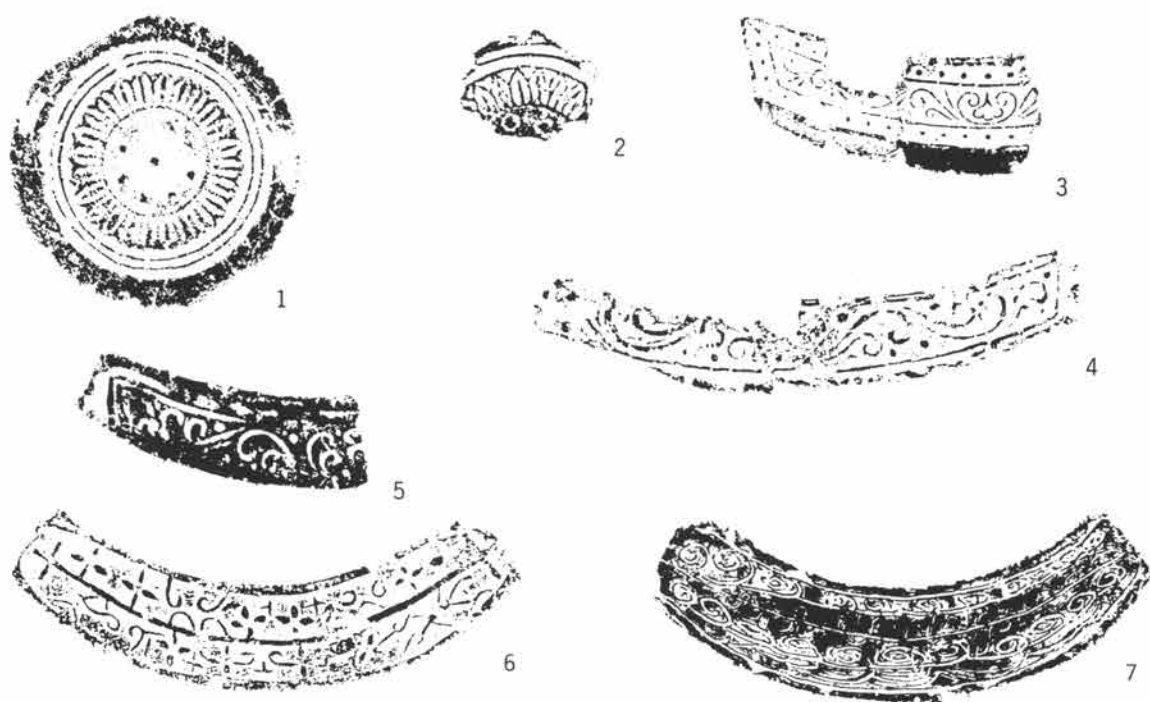
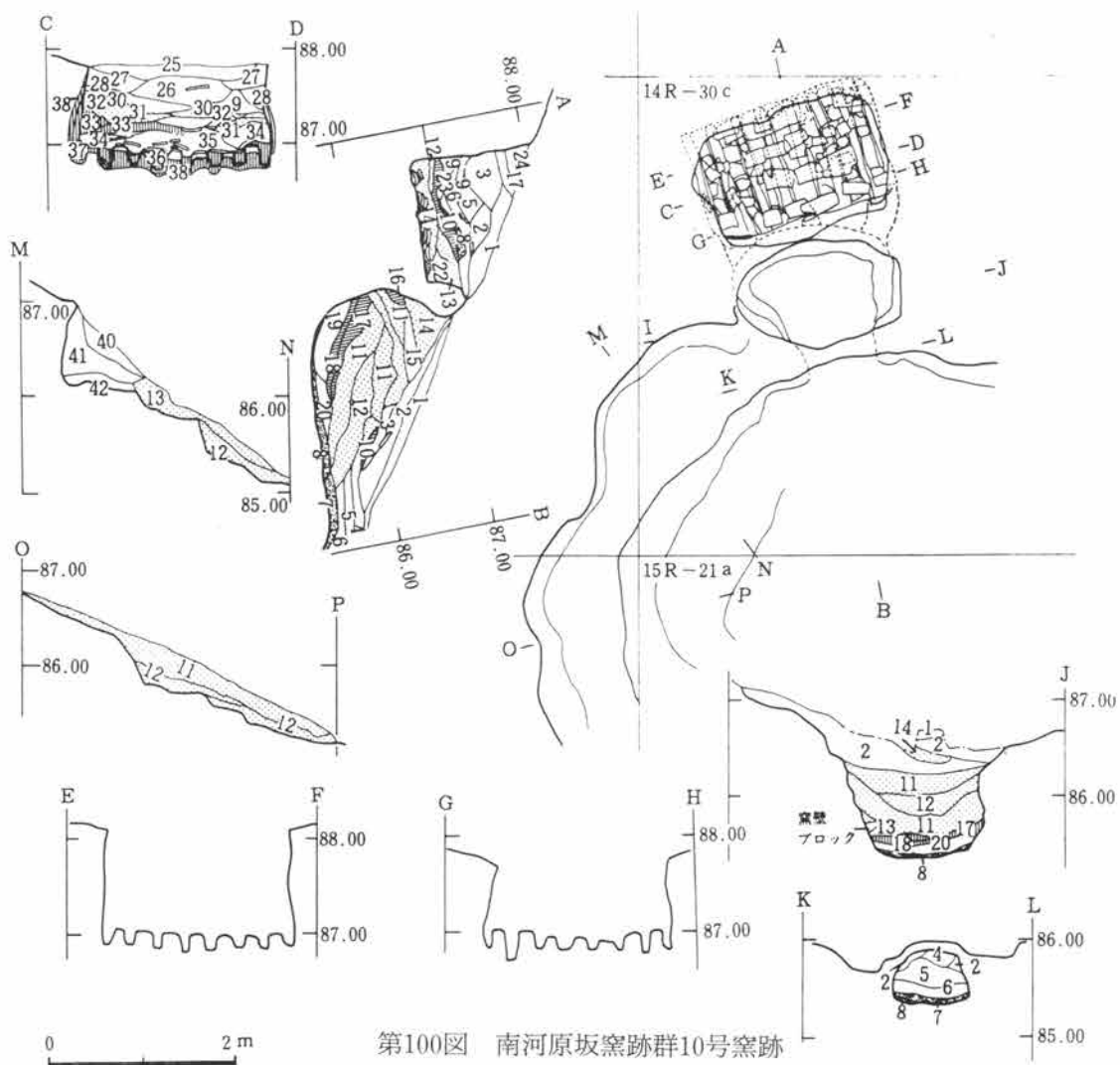
須恵器と瓦の焼成はどちらが先であるかは判然としないが、恐らく同時期の可能性が強く、土師器については両者よりも生産が遅れるものと考えられる。須恵器については、杯と甕を主体とし、蓋・高台付杯・高台付椀・双耳杯・皿・高台付皿・高台付盤・長頸壺・水瓶・風字硯・広口壺・甑が生産されている。竪穴住居跡からは鉄鉢形土器・香炉蓋・三足盤が出土しているが、これらについても本遺跡の製品である可能性が高い。仏教関連の遺物は、1号窯跡灰原から高台付香炉、4号窯跡から香炉蓋、4号竪穴住居跡から高台付香炉、18号・24号竪穴住居跡から香炉蓋、34号竪穴住居跡から高台付香炉、4号掘立柱建物跡から水瓶、5号テラスからは鉄鉢形土器、B地区2号竪穴住居跡から鉄鉢形土器及び「堺寺」の墨書土器が検出されているが、仏教関連の遺構については認められない。

瓦は多量に焼成されており、文様瓦も軒丸瓦2種、軒平瓦5種が出土している。軒丸瓦は素縁二十四弁蓮華文で、内外区を二重の界線で区画し、第101図1の花弁先端が内側の界線と離れているものと、2の接しているものが見られる。軒平瓦は、3・4の均整唐草文、5の均整唐草の陰影文、6の特殊な唐草文、7のへら書き文様のものがあるが、1の素縁二十四弁蓮華文軒丸瓦と3の均整唐草文軒平瓦とが上総国分僧寺・尼寺跡から出土している。

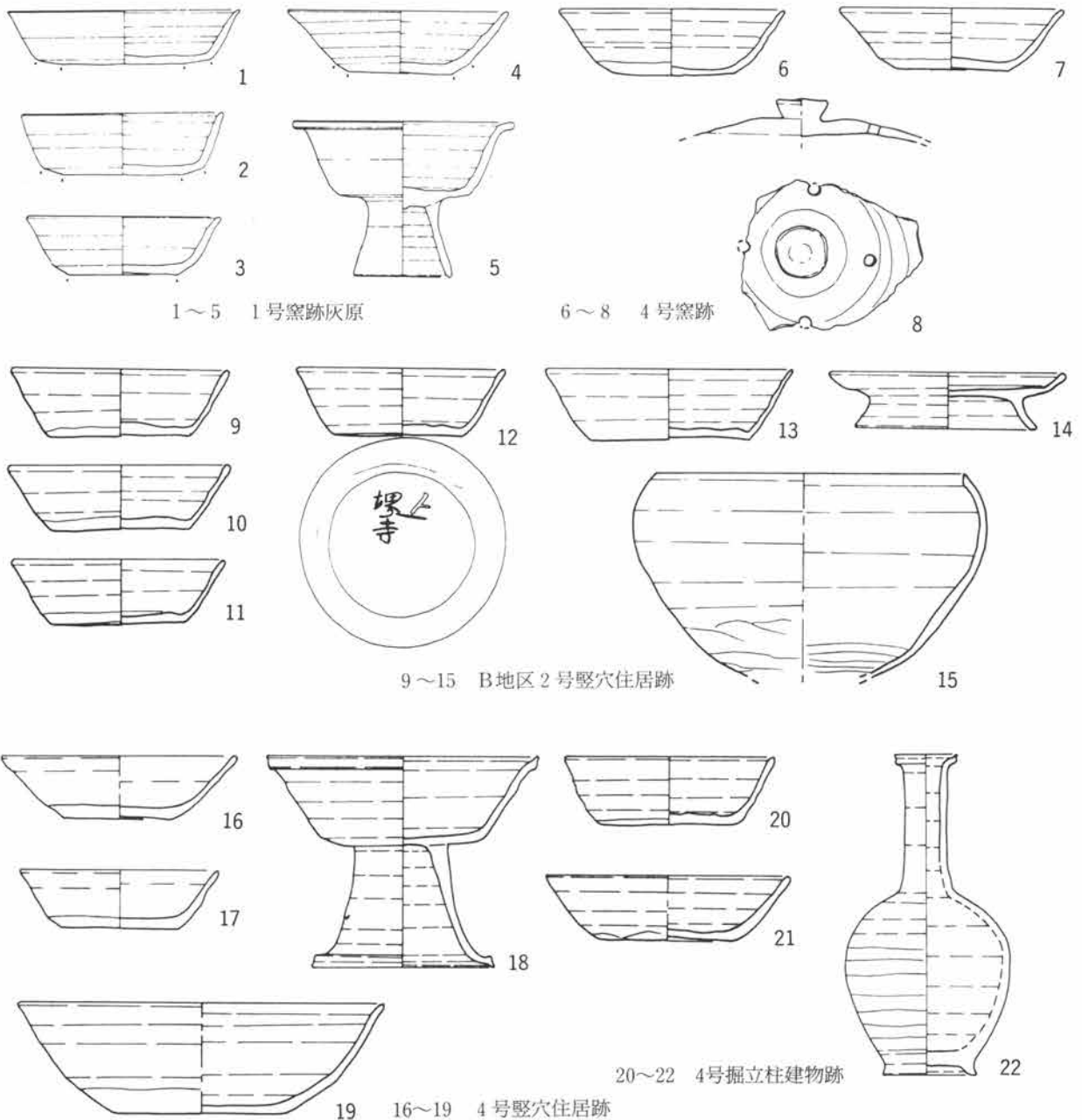


第99図 南河原坂窯跡群全体図

II 主要遺跡概要



第101図 南河原坂窯跡群軒丸瓦・軒平瓦



第102図 南河原坂窯跡出土土器

当時の最新技術であるロストル式の窯を導入していることから考えても、当初は国分寺所用瓦を焼成する窯であったと類推されるが、本遺跡から東に1.1kmの距離にある小食土廃寺跡でも南河原坂窯跡の文様瓦の種類ほとんどが検出されており、国分寺以外の寺院にも供給されていたことが知られる。

南河原坂窯の操業期間は須恵器の年代観から、8世紀第3四半世紀から9世紀前半代までと考えられる。上記の仏教関連遺物も8世紀後半代から出土が認められ、本遺跡の場合は恐らく操業当初から、なんらかの形で仏教集団が強く関与していたものと考えられる。

本遺跡の周辺には小食土廃寺跡や「寺東」「仏」「釈迦寺」「□祥寺」等の墨書土器と庇付建物跡が出土した鐘つき堂遺跡、8世紀前半の瓦が大量に検出された弥三郎第3遺跡等が点在しており、房総地域の中でも仏教関連の遺跡の稠密な地域である。このような地域的背景から当地に瓦窯が営まれた要因と、仏教関連遺物が多い理由をある程度類推することができる。

II 主要遺跡概要

生14 宇津志野窯跡

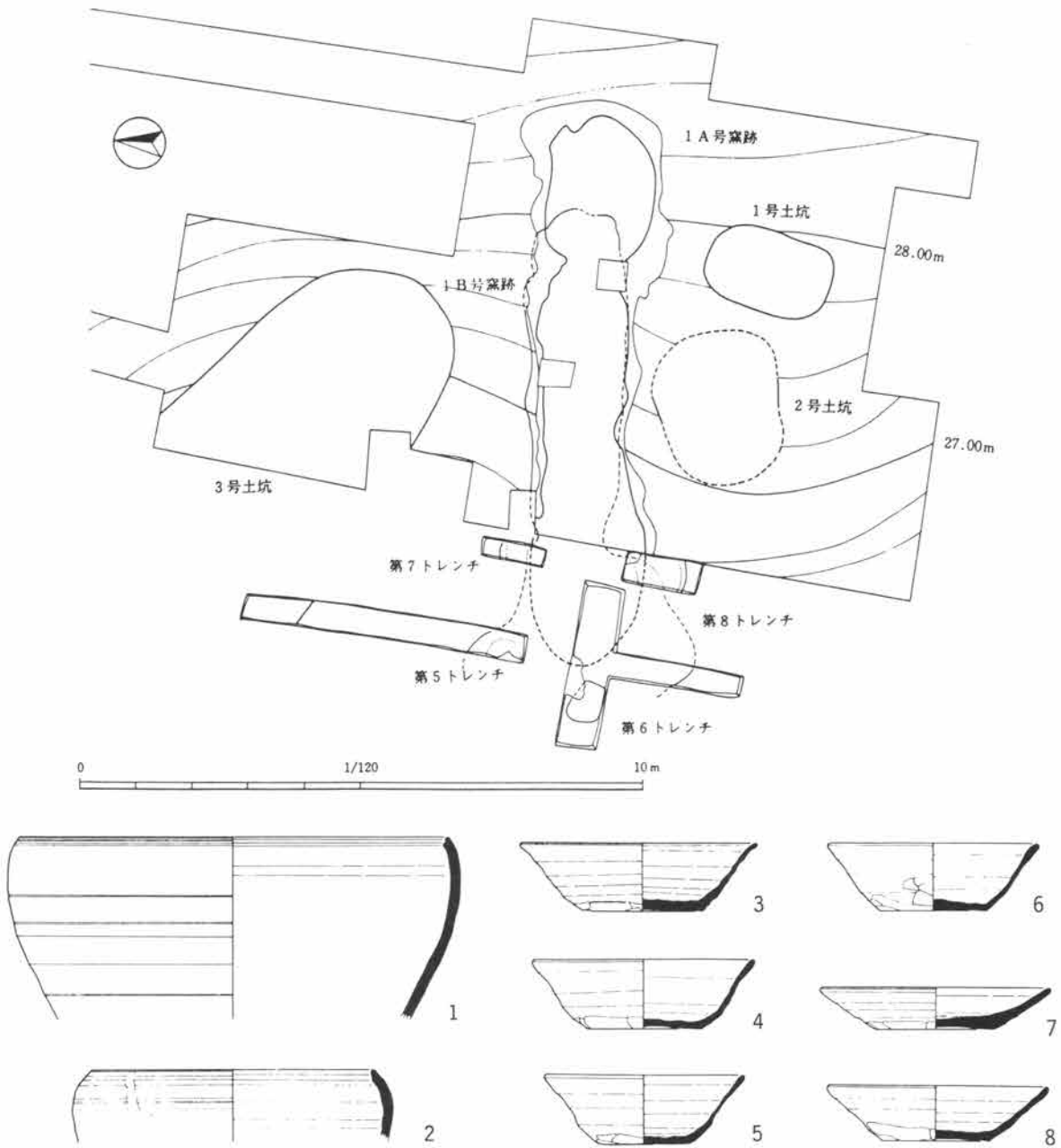
千葉県若葉区更科町10-2

印旛沼に流入する鹿島川の支流によって開析された谷津の東側斜面に位置する。2基の須恵器窯跡と3基の土坑が検出されている。

遺物は須恵器のみであり、甕を主体として、杯・皿・高台付皿・甗・鉢・鉄鉢形土器・短頸壺・羽釜・円面硯・脚部片が検出されている。

鉄鉢形土器は1A号窯跡掘形、1A号窯跡内から出土し、灰原からも小破片ではあるが出土が認められることから、鉄鉢形土器はある程度生産されていたと考えられる。大きさは最大径が26.6cmと18.9cmのものが見られる。

操業の時期については9世紀中葉と想定されている。



第103図 宇津志野窯跡遺構配置図・出土遺物

## III 各 論

### 1 仏器・瓦塔・墨書土器

#### 1 仏教関連遺物の選定について

仏教関連遺物を考える際に、一番悩んだことはどこまでを関連遺物に含めるかということであった。仏像等はまず間違いのないものであるが、その他のものは大いに選定に苦慮した。今回の関連遺物については、器物としては、浄瓶、香炉及びその蓋、鉄鉢、瓦塔（瓦金堂を含む）を主な遺物とした。ほかに奈良三彩も関連遺物に含める案もあったが、官衙跡からの出土も多く、祭祀遺構からの出土も目立つため、上記の4形態の遺物以外は基本的には含めないことにした（ただし、奈良三彩の托については仏教的な色彩が濃厚なため、例外的に取り扱うことにした）。

また、墨書土器等の出土文字資料にも着目し、「寺」・「佛」等の仏教関連の文字が出土している遺跡についてもこの中に含めることにした。

灯明皿や火打ち金を仏教関連遺物に含めている例も存在するが、灯明皿のみ単独出土の遺跡も多く、これのみを独立して項目として扱うことは不可能に近い上に、仏教関係以外の儀式にも同様に用いられている可能性は否定できず除外した。火打ち金についても「軍防令」<sup>9)</sup>の規定に、兵士のうち50人に1人は火打ち金を携行せよとの条文があるように、これも仏教関連遺物のみであるとは断定できないので、除外した。

なお、仏像、小金銅仏等については、発掘調査で出土した遺物が少なく、表採遺物が多い。今回の遺跡出土の仏教関連遺物と同列に扱うことは困難なので、主たる検討課題とは別に様相を見ていくことにしたい。

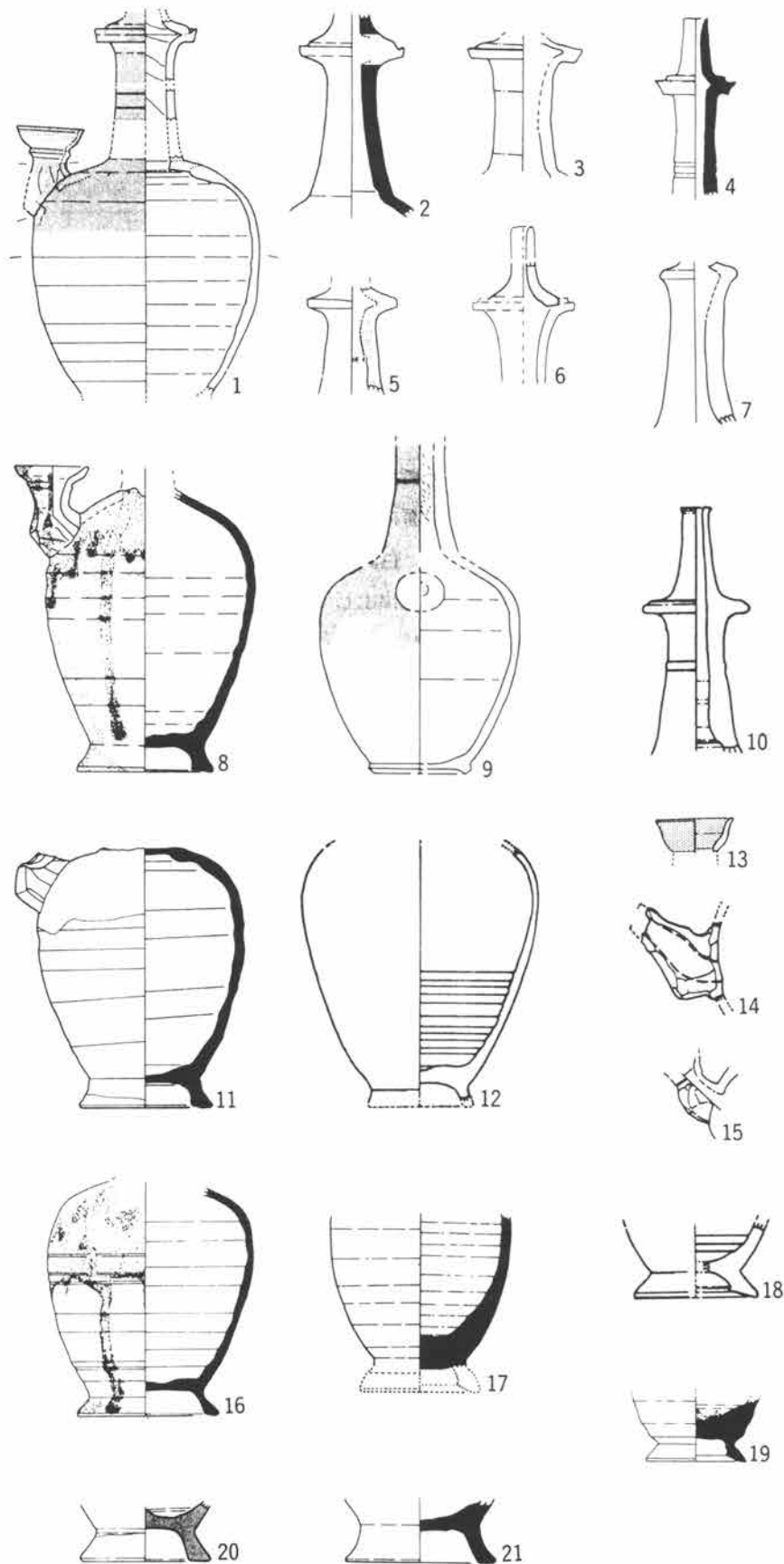
#### 2 遺物

##### 浄瓶・水瓶

浄瓶（仙蓋形水瓶）と水瓶は胴部形態等が類似しており、破片で出土した場合はどちらとも言えないものが多く見受けられることや、用具としては同様な意味をもっていると考えられるので、今回は両者を同一のものとして扱うことにした。両者の用途は、本来は僧具の一つで、飲水等の容器であったが、仏・菩薩に浄水を供える供養のための道具としても用いられるようになったものである。

浄瓶又は水瓶出土の遺跡は27遺跡を数える。27遺跡中、他の仏教遺物・遺構が遺跡内に認められる遺跡は、19遺跡である。そのうち、「寺」の墨書土器が出土している遺跡は11遺跡を数える。

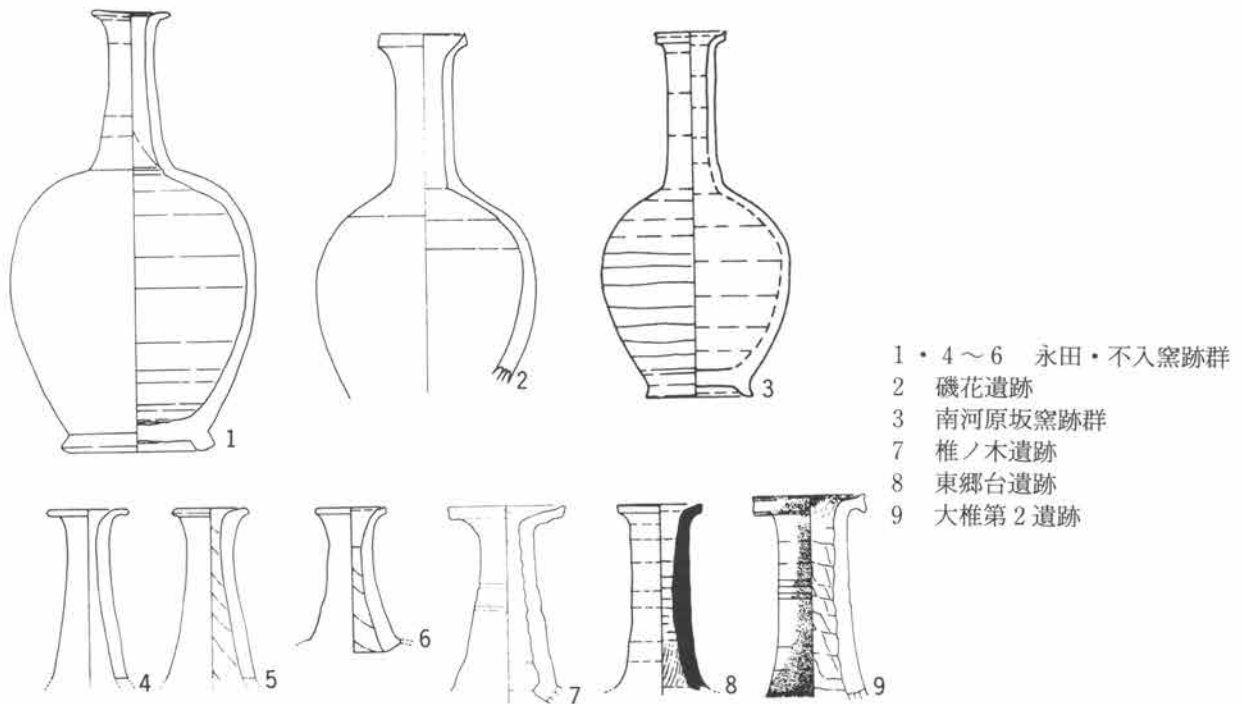
浄瓶については、本県出土の大部分のものが灰釉陶器と考えられ、それらは東海地方等からの搬入品と考えられる。水瓶については、須恵器が多く、永田・不入窯跡群と南河原坂窯跡群からの出土が知られ、本県でも製作されていたことが分かる。房総における浄瓶の出現時期は9世紀中葉である。水瓶についても8世紀第3四半期には存在する。



- 1 根戸城跡
- 2・21 真行寺廃寺跡
- 3 南河原坂第2遺跡
- 4 白幡前遺跡
- 5 郡遺跡No.12地点
- 6 バクチ穴遺跡
- 7 西深井一ノ割遺跡
- 8 砂田中台遺跡
- 9 織幡妙見堂遺跡
- 10・12・14・18 萩ノ原遺跡
- 11 下総国分寺
- 13 上大城遺跡
- 15 後沢第1遺跡
- 16 柳台遺跡
- 17 東郷台遺跡
- 19 永吉台遺跡群遠寺原地区
- 20 下総国分尼寺跡

第104図 浄瓶・水瓶 1





第105図 浄瓶・水瓶 2

## 香炉

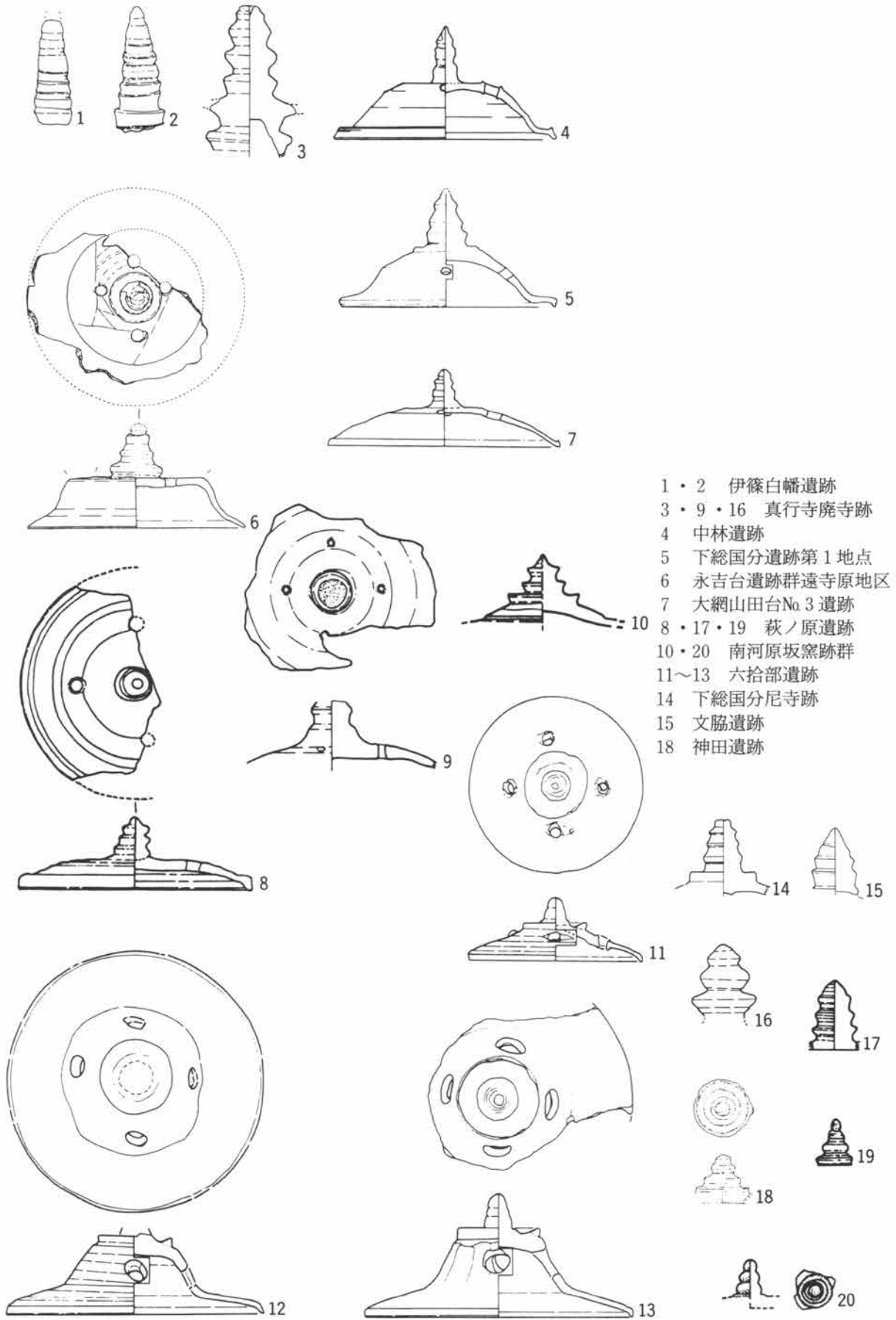
香炉についても、仏教においては重要な役割を担う器物である。すなわち、香を焚いて不浄を払うことはもちろん、仏、菩薩を供養するために用いられている。儀式の必需品とすることができよう。香炉の蓋と考えられる遺物は房総地域では18遺跡から出土している。蓋には4か所の円形の小さな穴が開くものが主流を占めるが、第107図2のように10か所程度の穴を有するものも出土している。

蓋の形態は鈕部が三重・五重・七重の塔を意識した形状（相輪状）のもの、通常の須恵器蓋と同様な円形の鈕を有するもの（第107図4）、方形（第107図1）や双鈕（第107図3）になるものが見られる。鈕が多重のものについては金属器の写しであると考えられ、天井部が須恵器蓋よりも隆起するものが多い。鈕については、三重の相輪状のものが主流を占める。

本体の香炉については、火舎形態になると考えられるものが二彩（第107図7）、奈良三彩（第107図8）で出土しているほかは、明確なものは認められない。しかしながら、杯又は碗形態で脚を有し、口縁端部が大きく外反又は端部が肥厚し平坦になるものが存在する（第107図9～19）。この中で六拾部遺跡出土の香炉蓋（第106図11）と脚付杯形土器（第107図15）は竪穴住居跡から共伴して出土しており、ほぼ同寸であり、合わせになるものと考えられることから、ここではこれらの脚付杯形土器を香炉（脚付香炉）として取り扱うことにしたい。

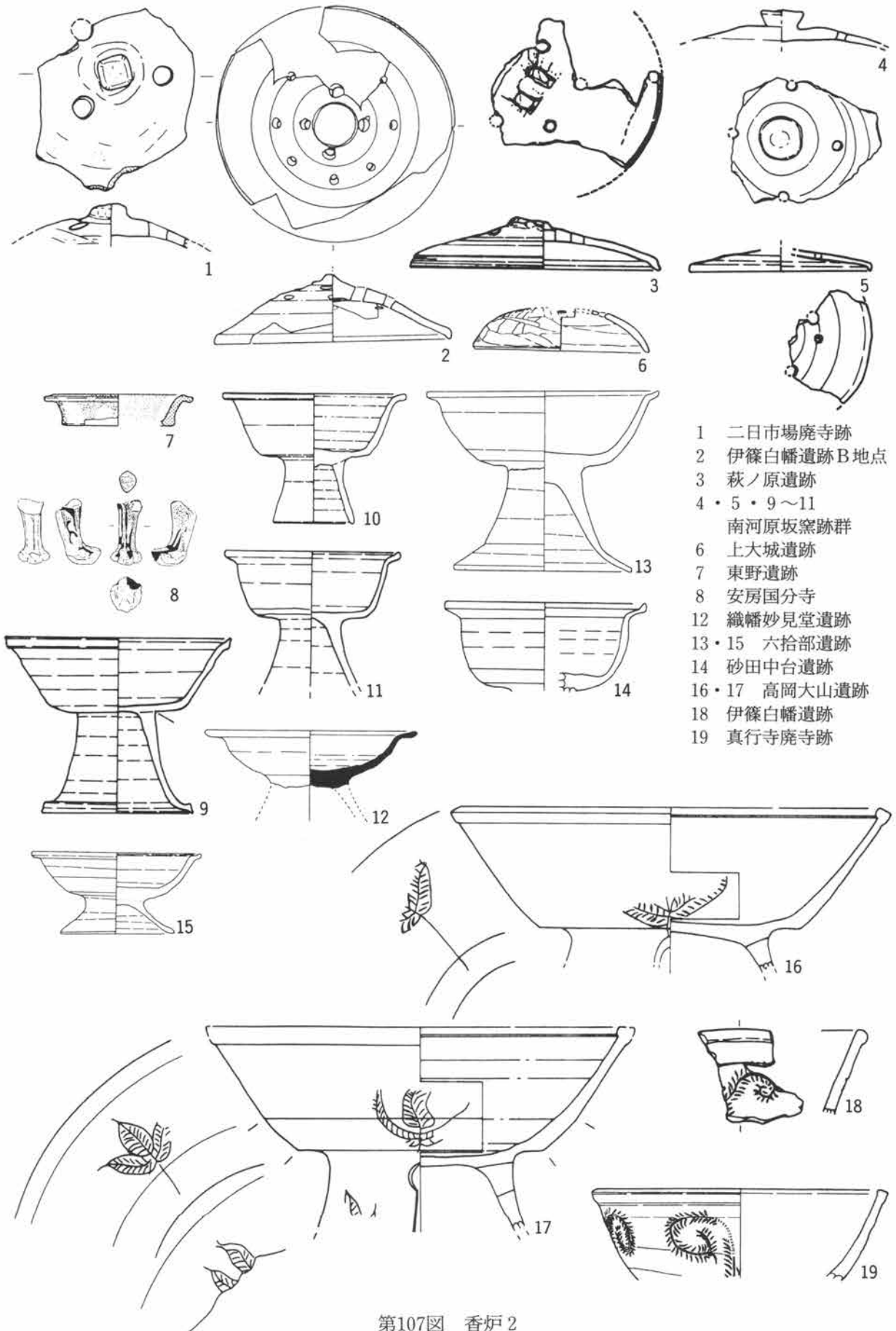
脚付香炉は、その形状から金属器を明確に意識しているものと考えられるが、金属器の香炉ではこれと同形となるものは見られない。しかしながら、前述のように塔形（相輪状）の香炉蓋が本品の上に合わせ

III 各 論



- 1・2 伊篠白幡遺跡
- 3・9・16 真行寺廃寺跡
- 4 中林遺跡
- 5 下総国分遺跡第1地点
- 6 永吉台遺跡群遠寺原地区
- 7 大網山田台No.3遺跡
- 8・17・19 萩ノ原遺跡
- 10・20 南河原坂窯跡群
- 11~13 六拾部遺跡
- 14 下総国分尼寺跡
- 15 文脇遺跡
- 18 神田遺跡

第106図 香炉 1



第107図 香炉 2

るとなると形態としては類似のものが見出せることになる。

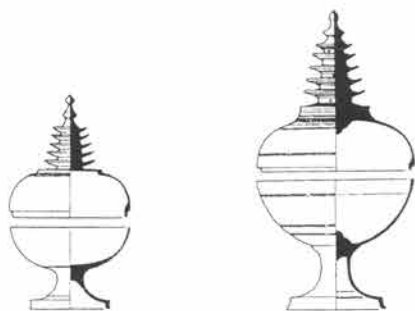
第108図は正倉院の佐波理塔鉢形合子と黄銅塔鉢形合子<sup>2)</sup>である。正倉院には、塔鉢形合子が10合存在するが、その形状は脚台を有し、脚台の上には丸底の鉢が付き、蓋の鈕は塔形（相輪形）を呈するもの（7合）、宝瓶形のもの（2合）、宝珠形を呈するもの（1合）がある。塔形の鈕には、三重・五重・七重の相輪形のものがある。最大径は6.5cm～18.1cmまでのものがあり、大型と小型品に分かれる。これらについては、香合であり、香を納める蓋付の容器であるとされる。実際に正倉院の赤銅塔鉢の内側からは香沫が検出されていることや国宝の刺繡釈迦如來說法図等<sup>3)</sup>には僧が右手に塔鉢を持ち、左手に柄香炉を持っている様子が表されていること等から、本品が香合であることが確かめられている。

房総地域で検出される上記の脚付香炉の形状は、丸底の椀ではなく、平底の杯もしくは椀の形状を呈するという違いはあるが、塔形の鈕を有する香炉蓋群と組み合わせた場合、この塔鉢形香合とかなりの類似点が認められる。あるいは、この金属器の塔鉢形香合が転じて、脚付香炉及び香炉蓋の祖型になったとは考えられないだろうか。香を入れるものから香を焚く容器へと変容したと考えるのである。また、形態を写すに当たっては、塔鉢のように蓋・身ともに合子形を取らずに通有の須恵器蓋や杯・椀に形状に近いものになったのであろうが、それでも蓋は、第106図4・5・12・13のように天井部が盛り上がる形状を示すものがある。脚付香炉にしても第107図13・14のように底部の立ち上がりに丸味を有するものが存在し、注目される。

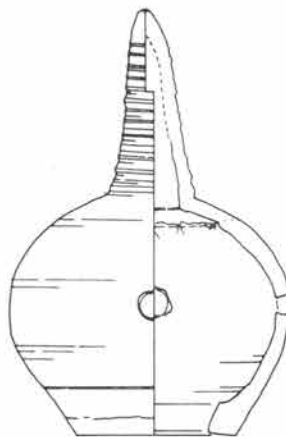
なお、埼玉県鳩山窯跡群柳原遺跡A地区出土の香炉蓋<sup>4)</sup>（第109図）は、塔鉢形香合の鉢形の蓋と非常に類似しており、このことから考えて、少なくとも塔形の鈕を有する香炉蓋に関しては、塔鉢形香合の写しである蓋然性が高いと考えておきたい。

また、この脚付香炉と類似した形態のものは房総地域以外でも出土が見られ、ある程度普及していた可能性も指摘できるのであり、今後とも注視していきたい。

香炉については、その出現時期は現在までのところ9世紀初頭前後であり、他の器物よりも出現時期が遅くなっている。



佐波理合子〔南倉三十一〕 黄銅合子〔南倉三十〕  
第108図 正倉院宝物塔鉢形合子



第109図 鳩山窯跡群柳原遺跡A地区出土遺物

## 鉄鉢形土器

鉄鉢はいわゆる比丘六物の一つで、もともとは仏及び僧・尼が護持する食器であった。そして、僧侶はこれを持して托鉢を行わなければならない必須の用具である。しかし、日本に伝わって来た時には、それだけではなく仏前に供物を盛る供養具としても用いられるようになった。

中国広律伝の四大律の一つである十誦律<sup>9)</sup>では、比丘は鉄鉢・瓦鉢以外は使用してはならないとされ、仏のみ石鉢を用いることができるとされている。また、鉄鉢は常に大切に護持されなければならないとされ、律蔵では厳しい規定が多く見られる。そして鉄鉢が破損した場合でも、5種の綴鉢法により修理して使うようになっていた。

房総地域においては金属器の鉄鉢は、現在までのところ検出されておらず、土器のみの出土である。

鉄鉢形土器（以下、「鉄鉢」と呼称する）の集成については、その形状が、通有の鉢と判別しづらいものも存在し、選別に苦慮した。中には疑わしいものも存在するが、除外する積極的根拠にも乏しいため、一応は集成の中に含めた（第112図9・10、第113図8・10）。

二彩・三彩陶器、須恵器・土師器を含めて、53遺跡から出土が見られる。昭和58年に雨宮龍太郎氏<sup>9)</sup>が鉄鉢を集成され、その時点で8遺跡の出土が確認されているが、わずか14年で6倍の遺跡数に増加したことになる。

鉄鉢の出土は、本格的な基壇を有する寺院の出土例は3遺跡、何らかの堂的な建物を有する遺跡からは11例、仏教遺物のみの遺跡からは39例であり、大部分が仏教関連遺物のみの遺跡であることが分かる。

基壇を有する寺院からの出土例が少ないのは、発掘調査された例が乏しいことや、発掘調査がなされても部分発掘のためであると考えられる。

53遺跡のうち、仏教関連の遺構・遺物が鉄鉢のみの遺跡は19遺跡であり、他の器物や仏教的色彩の強い遺構との共伴例が多いことが分かる。

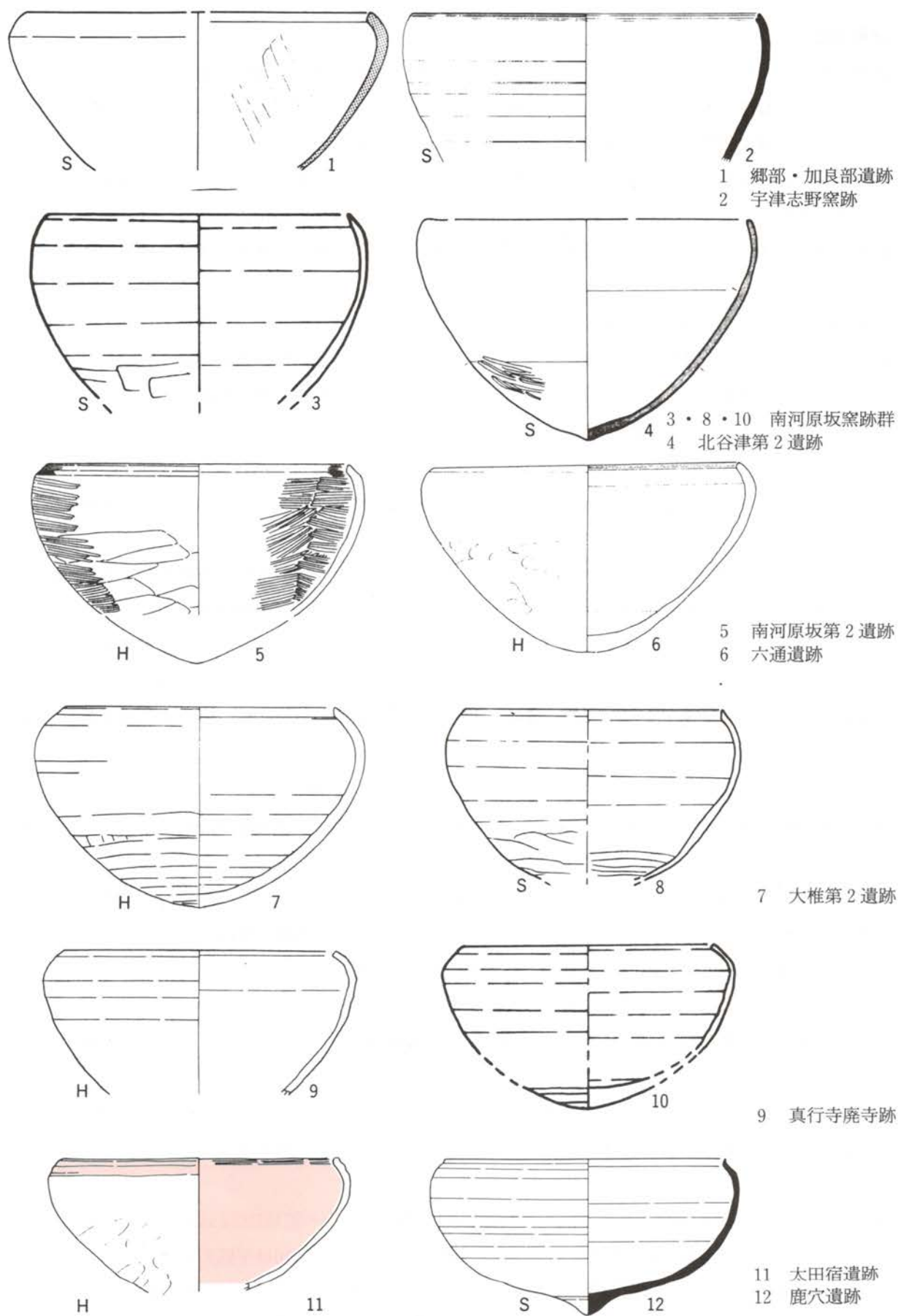
土器の鉄鉢の出現時期については、藤原京跡<sup>7)</sup>から出土したものが最も古いと考えられているが、大半の地域の出現時期は8世紀前半である。関東地域でも埼玉県鳩山窯跡群<sup>8)</sup>で8世紀第2四半期代のものが最古とされている。

千葉県内で時期が判明するもののうち、最も時期が遡ると考えられるものは、押沼第1遺跡K地点出土の須恵器の鉄鉢であり、8世紀第3四半期に比定される。これは常陸地域の製品と考えられる。房総地域の鉄鉢の出現時期は、各地の出現の時期よりも微妙に遅れる結果となった。

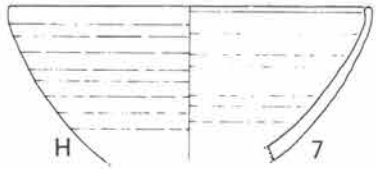
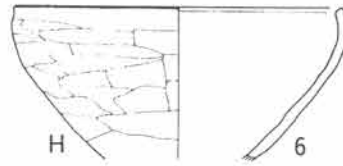
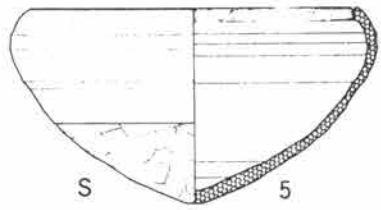
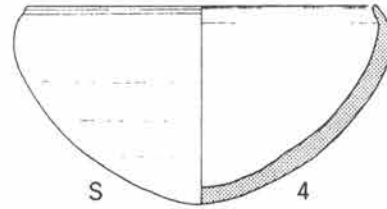
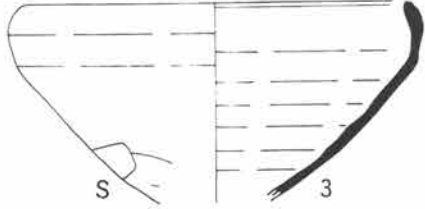
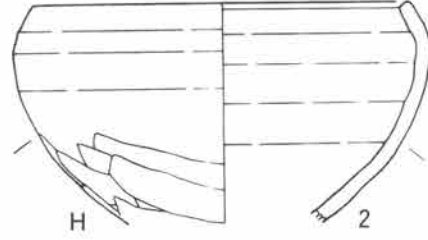
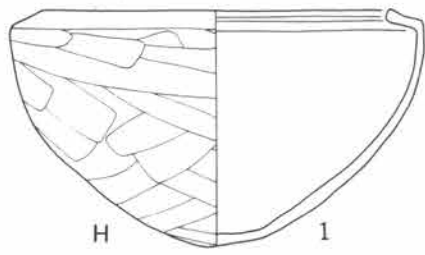
今回、掲載することのできた鉄鉢の実測図は68個体であるが、その中で、大形のものは最大径が32cm前後のものもあるが、多くは20cm前後である。小形のものは15cm前後であり、一見すると杯又は碗と考えられるものも存在する。

このような大きさの差異については用途の差を考えることができるのではないだろうか。律等によると、鉄鉢は容量により上鉢、中鉢、下鉢の3つの大きさに分けられるとされ、興味深いものがある。今後の検討課題であろう。

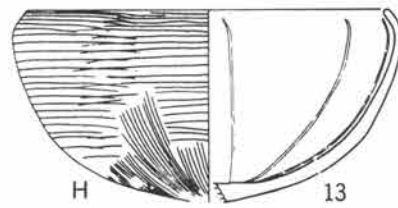
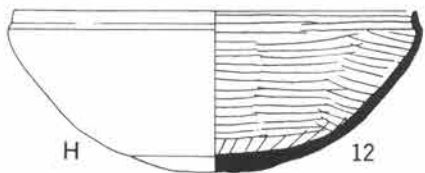
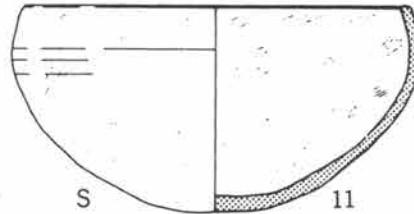
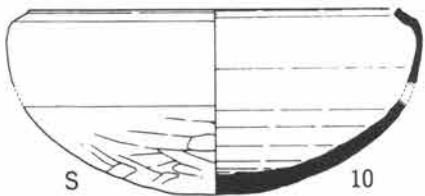
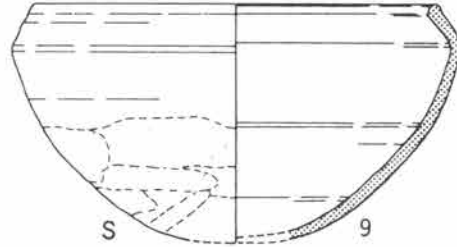
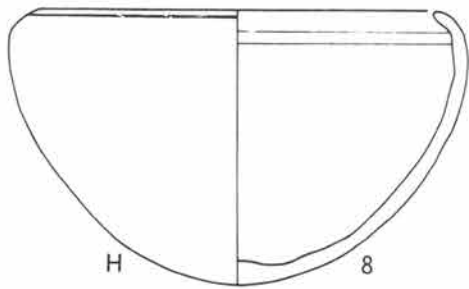
形態については、底部の形態から3形態に分類できる。第110図1～第111図7は底部が尖底のものであり、第111図8～第112図10は丸底形態になるもの、第112図11～第113図10は平底のものである。なお、第113図11～第114図15については底部形態が不明のものである。なお、挿図のそれぞれ遺物の下横に記したローマ字は、Sが須恵器、Hが土師器（ロクロ土師器を含む）を表している。



第110図 鉄鉢形土器 1

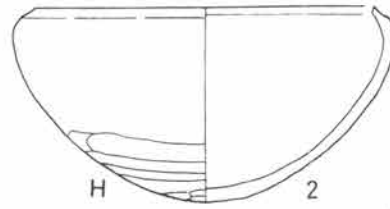
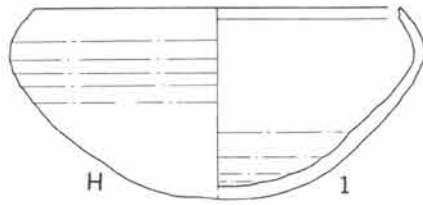


- 1 新堀遺跡
- 2 飯田町南向野遺跡
- 3 砂田中台遺跡
- 4 村上込の内遺跡
- 5 六通遺跡
- 6 白幡前遺跡
- 7 沢遺跡
- 8 南借当遺跡
- 9・11 八田太田台遺跡
- 10 押沼第1遺跡K地点
- 12 織幡妙見堂II遺跡
- 13 小食土廃寺跡

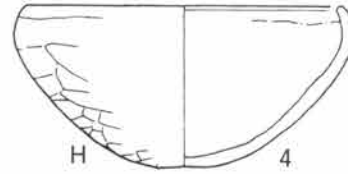
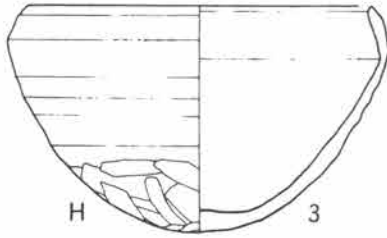


第111図 鉄鉢形土器 2

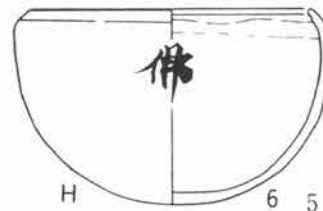
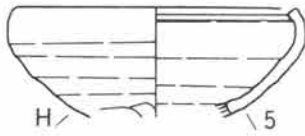
III 各 論



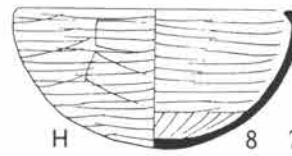
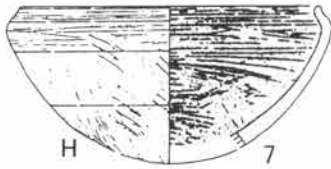
1 大網山田台No.3 遺跡  
2・4 真行寺廃寺跡



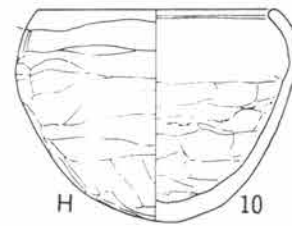
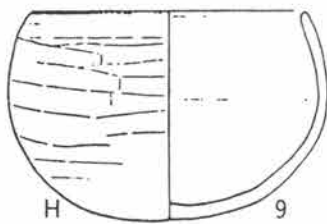
3 庄作遺跡



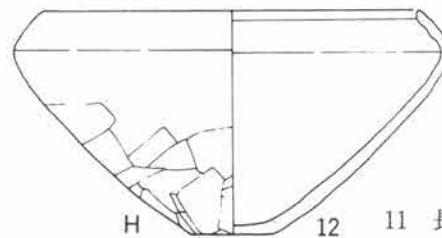
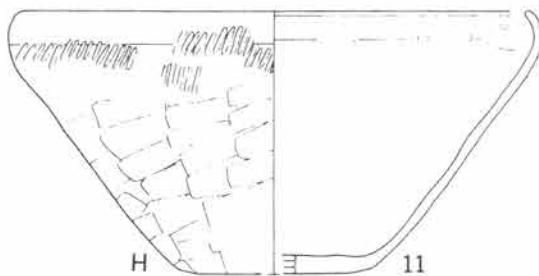
5 大袋山王第2 遺跡  
6 鳴神山遺跡



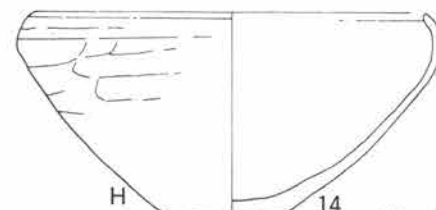
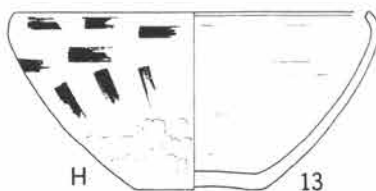
7 六拾部遺跡  
8 織幡妙見堂II 遺跡



9 有吉遺跡  
10 山田水呑遺跡



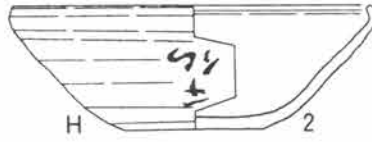
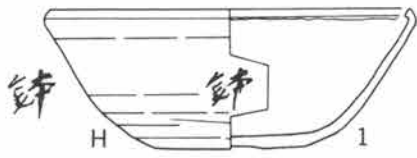
11 長勝寺脇館跡  
12 栗野I 遺跡  
13 馬橋鷺尾余遺跡



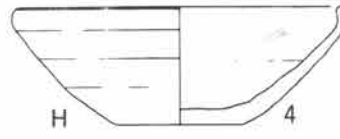
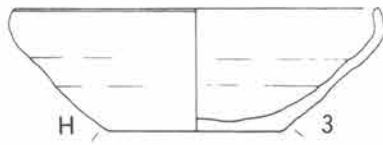
14 林遺跡

第112図 鉄鉢形土器 3





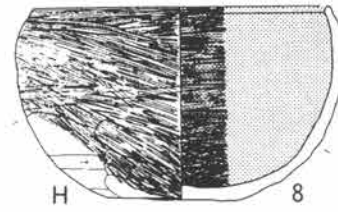
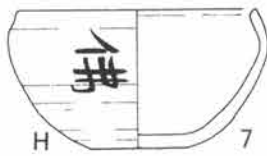
1・2 角田台遺跡  
3～5 中林遺跡



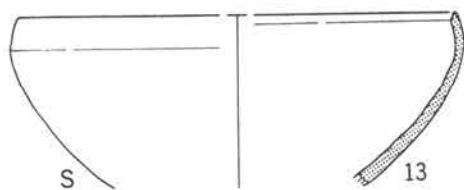
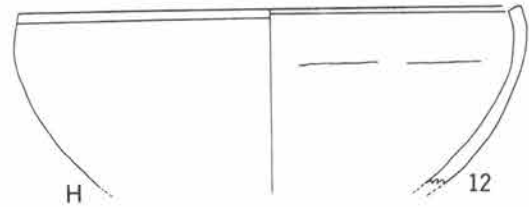
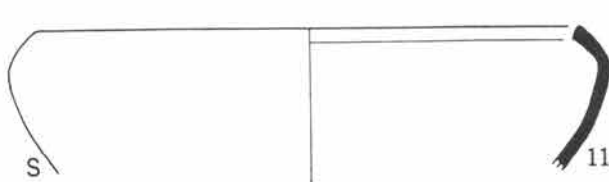
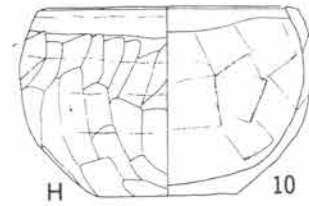
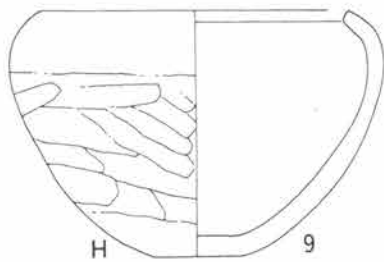
6 織幡妙見堂II遺跡  
7 白幡前遺跡



8・10 永吉台遺跡群遠寺原地区  
9 柳台遺跡

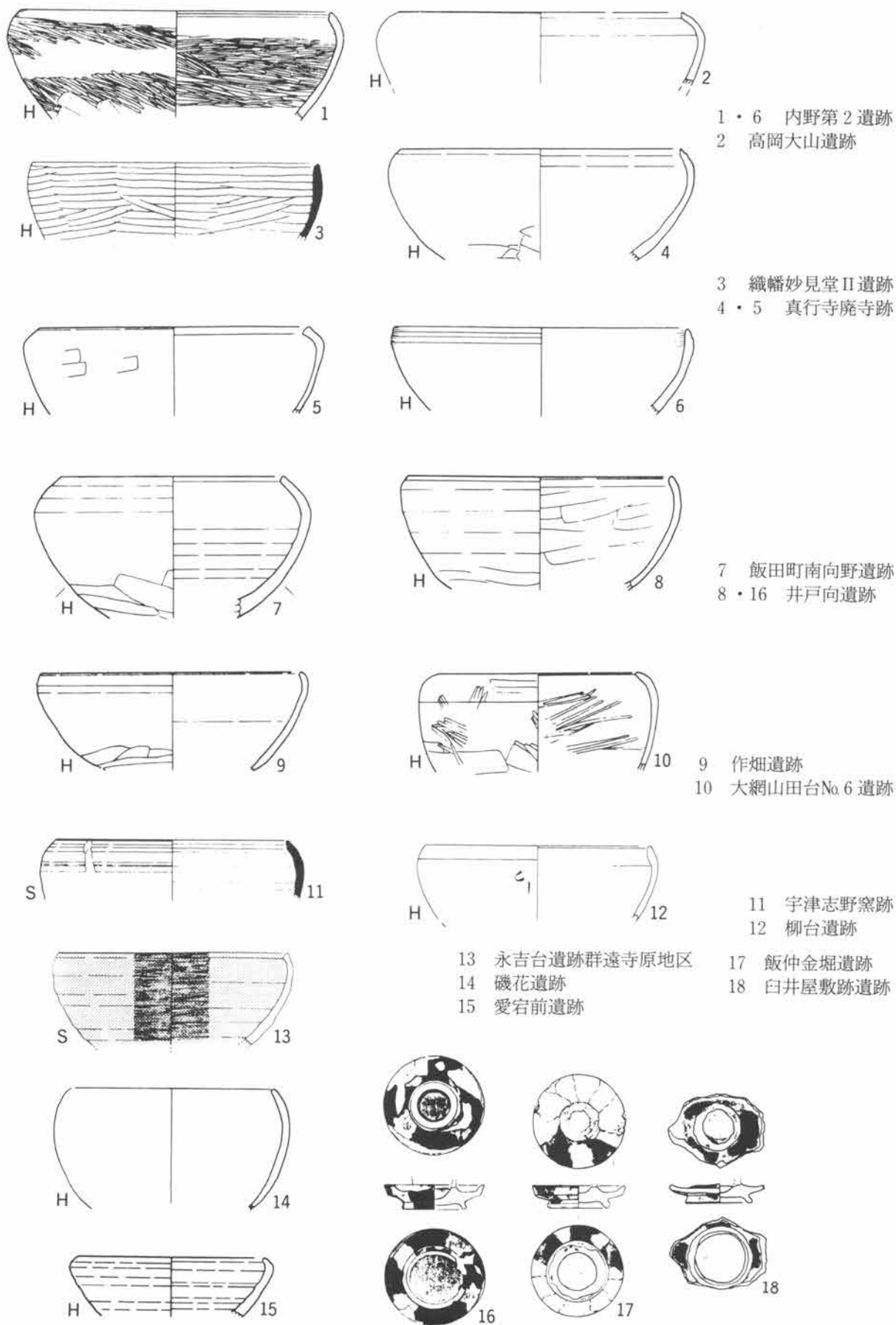


11 真行寺廃寺跡  
12 芳賀輪遺跡  
13 中台遺跡  
14 山口遺跡



第113図 鉄鉢形土器 4

III 各 論



第114図 鉄鉢形土器 5・托

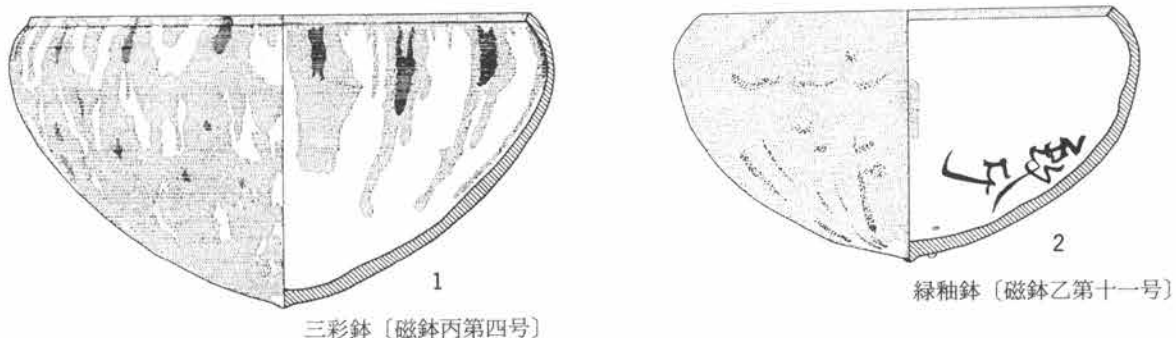
一般に、丸底のものから、8世紀前半に尖底に変化し、その後再度丸底形態になるとされる。正倉院等の寺院に見られる金銅・銀製・漆塗り製を主体とする鉄鉢形の形態のものについては、奈良時代のものは一般に口径1に対して高さは0.658ないし0.677であり、平安時代のもは0.644であるという結果が公表<sup>9)</sup>されている。奈良時代のものに比べると平安時代のもは高さが低く、肩部の張りが強いという。

房総地域については前述のように8世紀第3四半期から9世紀後半まで見られるが、尖底と丸底のものについてはいずれも8世紀第3四半期から認められる。平底の形態は9世紀初頭前後からであり、年代的に出現が遅れるようである。なお、須恵器の鉄鉢については、宇津志野窯跡から出土が見られ、房総地域でも9世紀中葉までは生産されていたことが判明している。

また、68個体の鉄鉢形土器のうち、須恵器が15個体、土師器が51個体、不明が2個体であり、土師器が圧倒的に多いことが房総地域の鉄鉢の特徴と言える。これを上記の形態別に見ていくと、尖底形態は須恵器が9個体、土師器が9個体、不明が1個体であり、丸底形態は須恵器が3個体、土師器が13個体である。一方、平底形態は、14個体すべてが土師器で占められている。これについては本来の鉄鉢は尖底・丸底のものが一般的であり、平底の鉄鉢は異形であるので、須恵器には存在しないのであろうとも受け取れそうである。平底の鉄鉢が果たしてすべて鉄鉢としての用途をもたされていたかは不明であり、中には鉄鉢の分類から外れるものが存在する可能性も残される。しかしながら、土師器の平底形態のものすべてが怪しいわけではなく、角田台遺跡出土(第113図2)のものには胴部外面に「千仏」の墨書がなされており、明らかに仏教に関連するものであることが分かる。

白幡前遺跡出土のもの(第113図7)には胴部外面に「佛」の墨書がなされており、しかも同一の竪穴住居跡内から須恵器蓋に「佛」と墨書がなされたものや瓦塔片が出土している。中林遺跡の鉄鉢については(第113図3・4・5)、竪穴住居跡出土のものであるが、香炉蓋が共伴し、柳台遺跡(第113図9)でも同一の竪穴住居跡から浄瓶又は水瓶と考えられる遺物(第104図16)が出土している。織幡妙見堂II遺跡(第113図6)からは竪穴住居跡から丸底の土師器の鉄鉢(第111図12)が共伴しており、これらから類推する限り仏具として機能していたことは確実であろう。

また、第110図12の鹿穴遺跡出土の須恵器の鉄鉢は、底部中央外面が涙滴状の尖底となっている。このような形態は房総地域でも1例のみであり、注目される。涙滴状の底部形状は金属製の鉄鉢でも管見では認められなかった。しかしながら、正倉院の奈良三彩・二彩・緑釉陶器の鉄鉢の中に類似<sup>10)</sup>するものが認められる。奈良三彩(第115図1)の鉄鉢の底部形態については、器形自体は通常尖底であるが、表面に彩色された釉薬が焼成により溶け、それが底部中央外面に溜まり、涙滴状に固まったものである。すなわち、



第115図 正倉院宝物磁鉢

自然の作用でできた産物と捉えられるものである。

鹿穴遺跡の遺物についても8世紀第3四半期の所産であり、奈良三彩とほぼ同時期のものと考えられ、この奈良三彩の出来上がりの形状を模倣した可能性も否定はできないであろう。従来から、鉄鉢形土器は金属器の鉄鉢の模倣であり、他の器物からの模倣の可能性は低いと考えられてきたが、三彩陶器等の写しも存在する可能性を考えた方が良いのかもしれない。

なお、鉄鉢とセットになる托(鉢支)については、大網山田台遺跡N0.3遺跡の銅製托が知られるほかに、3遺跡から奈良三彩の托が検出されている。奈良三彩の托(第114図16~18)は最大径が7cm前後のもので小形である。さらに托の類例としては、未発表資料ながら土師器のものが1点認められる。鉄鉢を供養具として使用する場合には、托(鉢支)を用いるのが通常であったとされるが、鉄鉢と比較してわずかな量である。これは、托の大半が木製であったからであろうか。

ちなみに、鉄鉢については正倉院には黒漆塗りの木製や乾漆製のものが残されており、古代においても木製の鉄鉢がある程度普及していた可能性は比定できない。しかしながら、『壺囊鈔』<sup>11)</sup>によれば「鉢は鉄鉢なるべし、木鉢は外道の鉢なり」とあり、本来は木製の鉄鉢を使用してはならないことになっており、その点から考えれば木製鉢の普及については一考を要するであろう。

### 墨書・線刻・ヘラ書き文字

今回の仏教関連の墨書土器等で最も出土遺跡数が多い文字は「寺」であり、83遺跡を数える。ほかに「仏」「佛」「釈迦」「僧」「尼」「ササ(菩薩)」「法印」「三寶」「大般若」等があり、上総国分僧寺等の国分寺関連遺跡からは「講院」「院」「四院」「金光」「法」「卍」等の仏教関連の施設や「経典」等の題と考えられるものが出土している。

「寺」の文字のほかに出土が多いのは「佛」であり、「仏」又は「佛」が出土した遺跡は38遺跡を数える。「寺」と「佛」又は「仏」が同一遺跡で重複して出土した例は22遺跡であり、「仏」・「佛」の文字と「寺」の両者及びどちらかが出土した遺跡を合計すると97遺跡に達する。

この「寺」の墨書についてはどのように評価すべきであろうか。「寺」の墨書が出土したからといってすべてが寺院と直結するものでないことはもちろんである。例えば人名等<sup>12)</sup>にも見られることからそれは明らかであろう。しかしながら、「寺」の墨書が出土した遺跡で、仏教関連の器物・墨書土器や遺構が出土している遺跡は、51遺跡を数える。この数値から考える限り、ある程度何らかの形で寺院と結びついた遺物であることを物語るものであろう。また、「寺」の墨書土器しか仏教関連のものが見られない残りの32遺跡の中でも、寺の名前が読みとれる遺跡は7遺跡に達する上に、「寺」の墨書が複数出土している遺跡も多い。このように見てくると、時代や共伴を度外視した遺跡毎という大きな観点からみた場合という但し書きは付くものの、「寺」の墨書土器出土遺跡は何らかの形で付近に寺又は僧侶が存在したと評価すべきものと考えた方が無難であろう。

「寺」銘墨書土器等で寺の名称と考えられるものは、六拾部遺跡「白井寺」、長熊廃寺跡「高叟寺」、将門鹿島台遺跡「福々寺」、野毛平植出遺跡「手寺」、大袋台畑遺跡「赤界(男)寺」・「赤寺・埼寺」、白幡前遺跡「大寺」、久野高野遺跡「桑田寺」、萩ノ原遺跡「塔寺」、南麦台遺跡「殿寺」、真行寺廃寺跡「武射寺」・「大寺」、西寺原遺跡「西寺」、遠寺原遺跡「土寺」・「山寺」、名木廃寺跡「度寺」、海神台西遺跡「岑寺」、山口(Loc20)遺跡「忠寺」、広遺跡「坂津々寺」、北海道遺跡「勝光寺」、平木遺跡「□弘寺」、下総国分尼

寺跡「尼寺」、下総国分僧寺「造寺」・「尼寺」・「東寺」、多田日向遺跡「三綱寺」・「多理草寺」・「多料草寺」・「観音寺」、南河原坂窯跡群「堺寺」、内野台遺跡「祥寺」、鐘つき堂遺跡「釈迦寺」・「□祥寺」、草刈遺跡「草苺於寺坏」、宮台遺跡「大福ヶ寺」、郷部・加良部遺跡 (Loc15) 「忍保寺」・「大寺」・「新寺」、大井東山遺跡「新生寺」、上総国分僧寺「金寺」・「光寺」「法花寺」、上総国分尼寺跡「法花寺」、結城廃寺跡「大寺」・「法成寺□」、鳴神山遺跡「波田寺」・「播寺」、久野遺跡「赤穂寺」、一夜山遺跡群「赤穂寺」・「阿光寺」、宮本台遺跡群「秋寺」、岡田山遺跡「前寺□」、山田・宝馬古墳群「小金山寺」・「小金寺」、文六第6遺跡「砂田東寺」・「祥寺」、滝東台遺跡「三井寺」であり、39遺跡を数える。

寺の名称は、吉祥句、郡名・地名、佛・菩薩の名称や經典由来と考えられるもの、僧侶の職名、東西南北の方位・大小等の大きさ、塔等の寺院建物・造営に関するもの、その他不明に分類できる。

#### 郡名・地名例

「白井寺」「高罌寺」「桑田寺」「武射寺」「坂津寺?」「堺寺」「草苺於寺坏」「波田寺」・「播寺」「小金山寺」・「小金寺」「砂田東寺」・「三井寺」・「多理草寺」・「多料草寺」・「赤界(男)寺」・「赤(埼)寺」「赤穂寺」・「阿光寺」

#### 吉祥句例

「祥寺」「□祥寺」「大福寺?」

#### 佛・菩薩の名称や經典由来例

「釈迦寺」「観音寺」「金寺」「光寺」「法花寺」「法成寺」

#### 塔等の寺院建物・造営に関する例

「塔寺」「造寺」

#### 東西南北の方位・大小等の大きさ例

「大寺」「西寺」「東寺」

#### 僧侶・僧侶の職名

「尼寺」「三綱寺」

#### その他の不明例

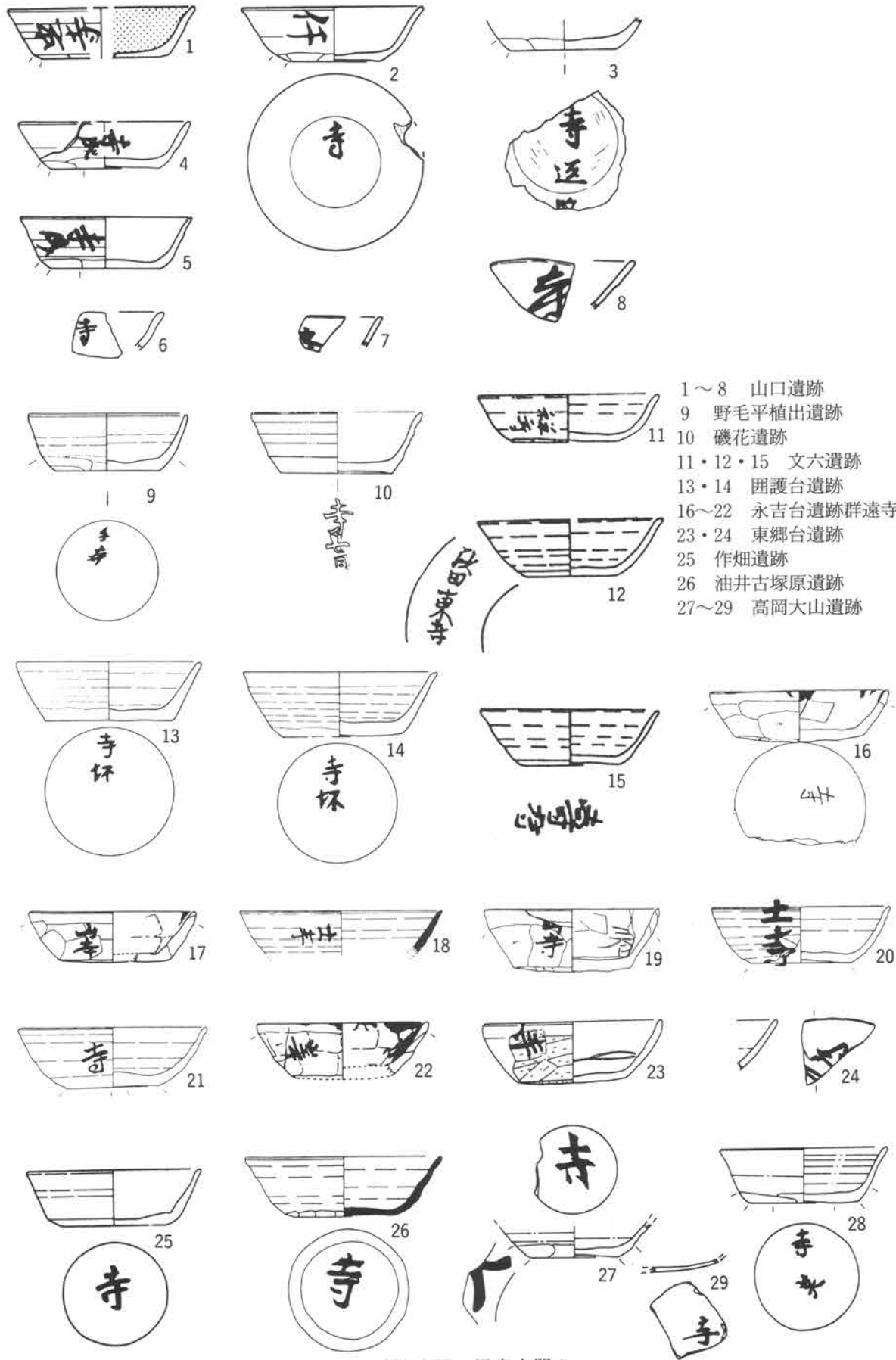
「殿寺」・「土寺」・「山寺」「度寺?」「岑寺」「忠寺」「勝光寺?」「□弘寺」「忍保寺」「新寺」「新生寺」「秋寺」「前寺□」「手寺」

地名と考えられるものの出土が最も多く、そのうち郡名と考えられるものは真行寺廃寺跡出土の「武射寺」の墨書土器1点のみである。地名の場合、同音を別な文字で表したと考えられる遺物も見られ、一夜山遺跡の「赤穂寺」と「阿光寺」、多田日向遺跡「多理草寺」と「多料草寺」、鳴神山遺跡「波田寺」と「播寺」がある。また、地名の中には「砂田東寺」のように方位を入れるものも存在する。このことから、方位と寺の組み合わせのものは、その前に本来の寺の名前が付く可能性もあることが窺える。これは、「山寺」についても「小金山寺」例から同様なことが言えるだろう。

同一の遺跡であるにもかかわらず、いくつかの異なった寺の名前を有する遺跡が見られる。多田日向遺跡は「三綱寺」・「多理草寺」・「多料草寺」・「観音寺」の寺名が見られる。これはどのように解釈すべきであろうか。多理草は地名、三綱は僧侶の役職名、そして観音と3つの異なった名称で呼称されており、これを同一の寺と考えるか、別々に分かれた堂毎の名称であるか判断がつかない。

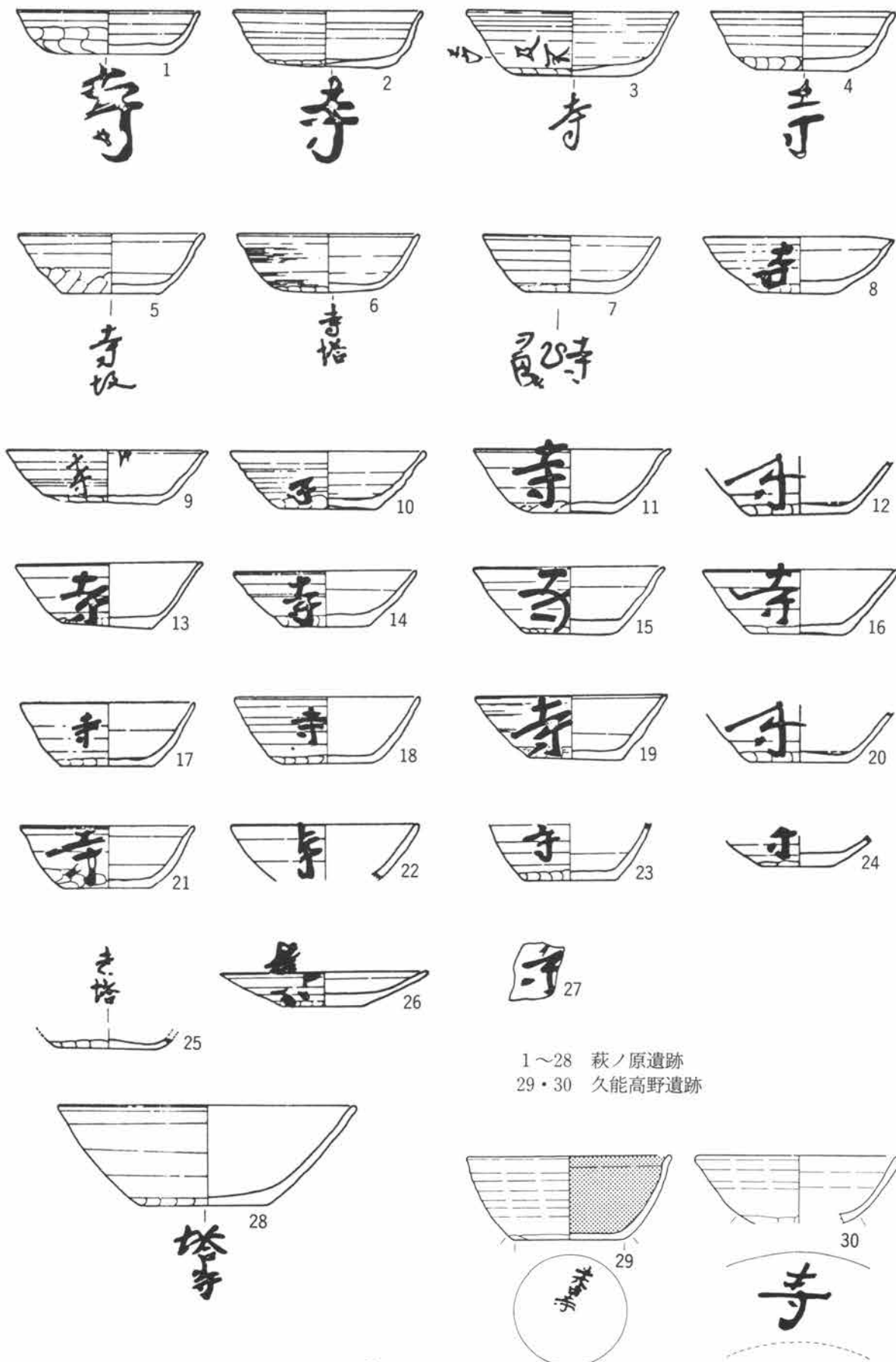
『日本霊異記』等では「山寺」と称された寺や「堂」の記載が見られるが、房総地域からも「山寺」の





- 1~8 山口遺跡
- 9 野毛平植出遺跡
- 10 磯花遺跡
- 11・12・15 文六遺跡
- 13・14 囲護台遺跡
- 16~22 永吉台遺跡群遠寺原地区
- 23・24 東郷台遺跡
- 25 作畑遺跡
- 26 油井古塚原遺跡
- 27~29 高岡大山遺跡

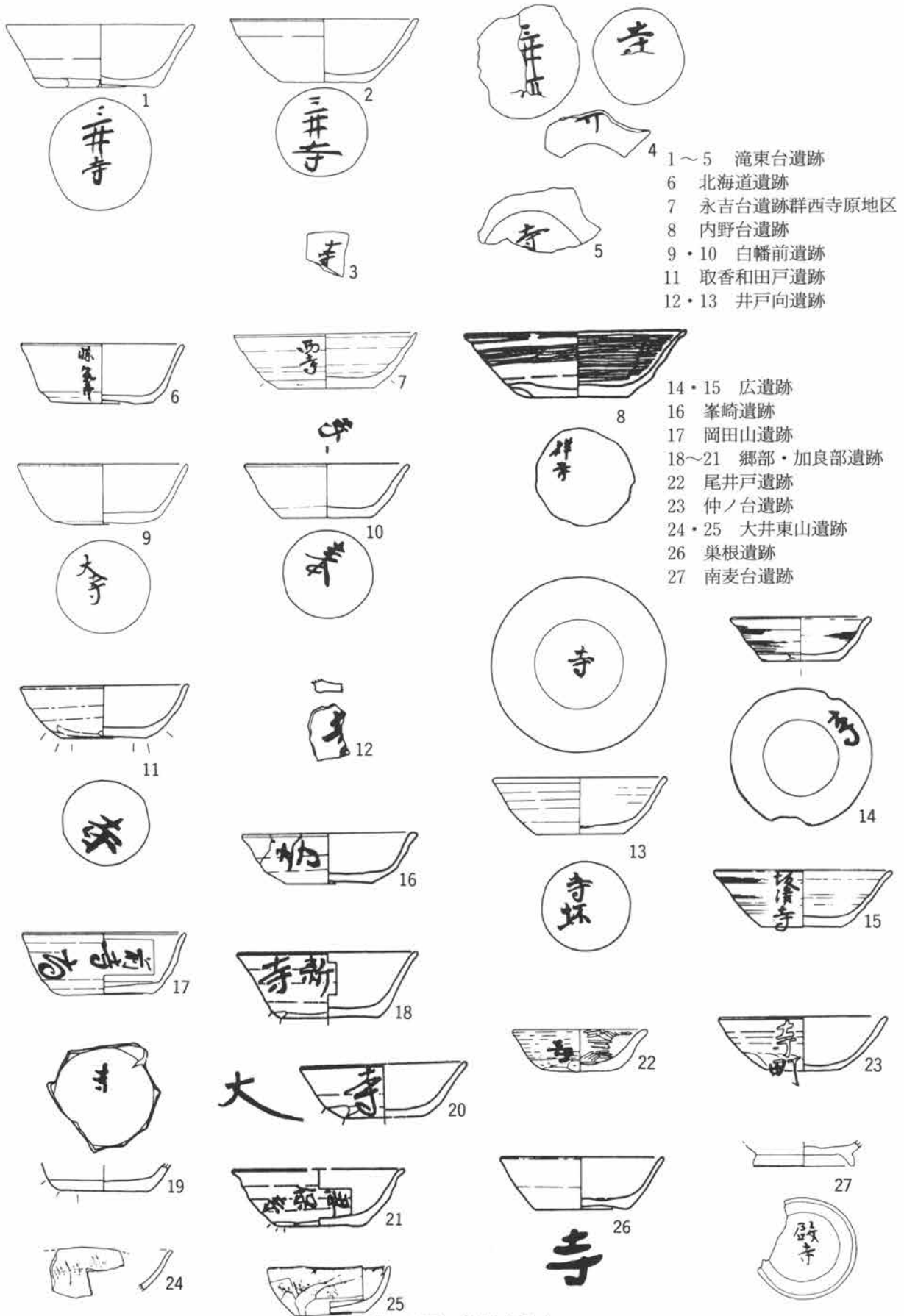
第117図 墨書土器 2



1~28 萩ノ原遺跡  
29・30 久能高野遺跡

第118図 墨書土器 3

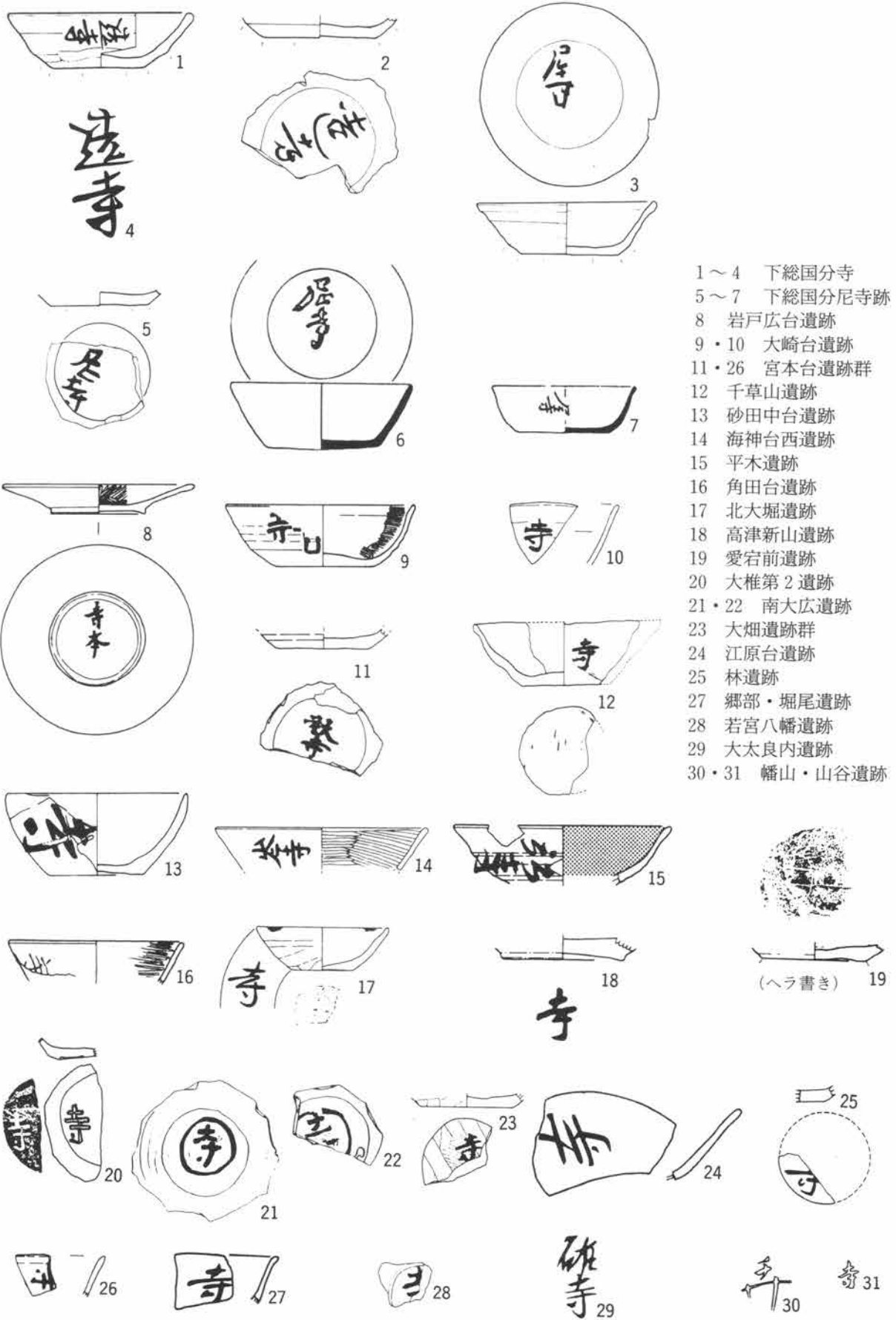




- 1~5 滝東台遺跡
- 6 北海道遺跡
- 7 永吉台遺跡群西寺原地区
- 8 内野台遺跡
- 9・10 白幡前遺跡
- 11 取香和田戸遺跡
- 12・13 井戸向遺跡

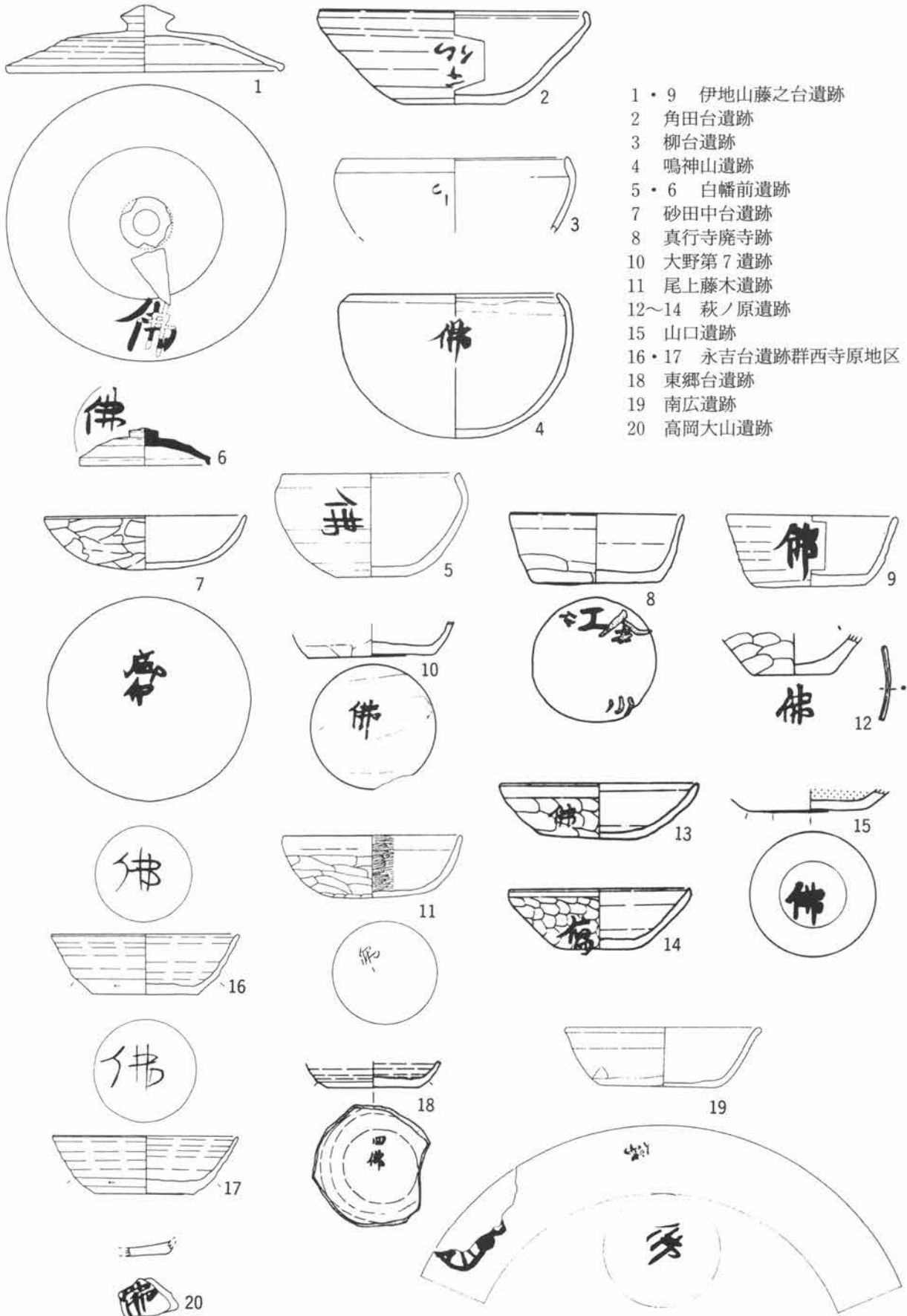
- 14・15 広遺跡
- 16 峯崎遺跡
- 17 岡田山遺跡
- 18~21 郷部・加良部遺跡
- 22 尾井戸遺跡
- 23 仲ノ台遺跡
- 24・25 大井東山遺跡
- 26 巢根遺跡
- 27 南麦台遺跡

第119図 墨書土器 4

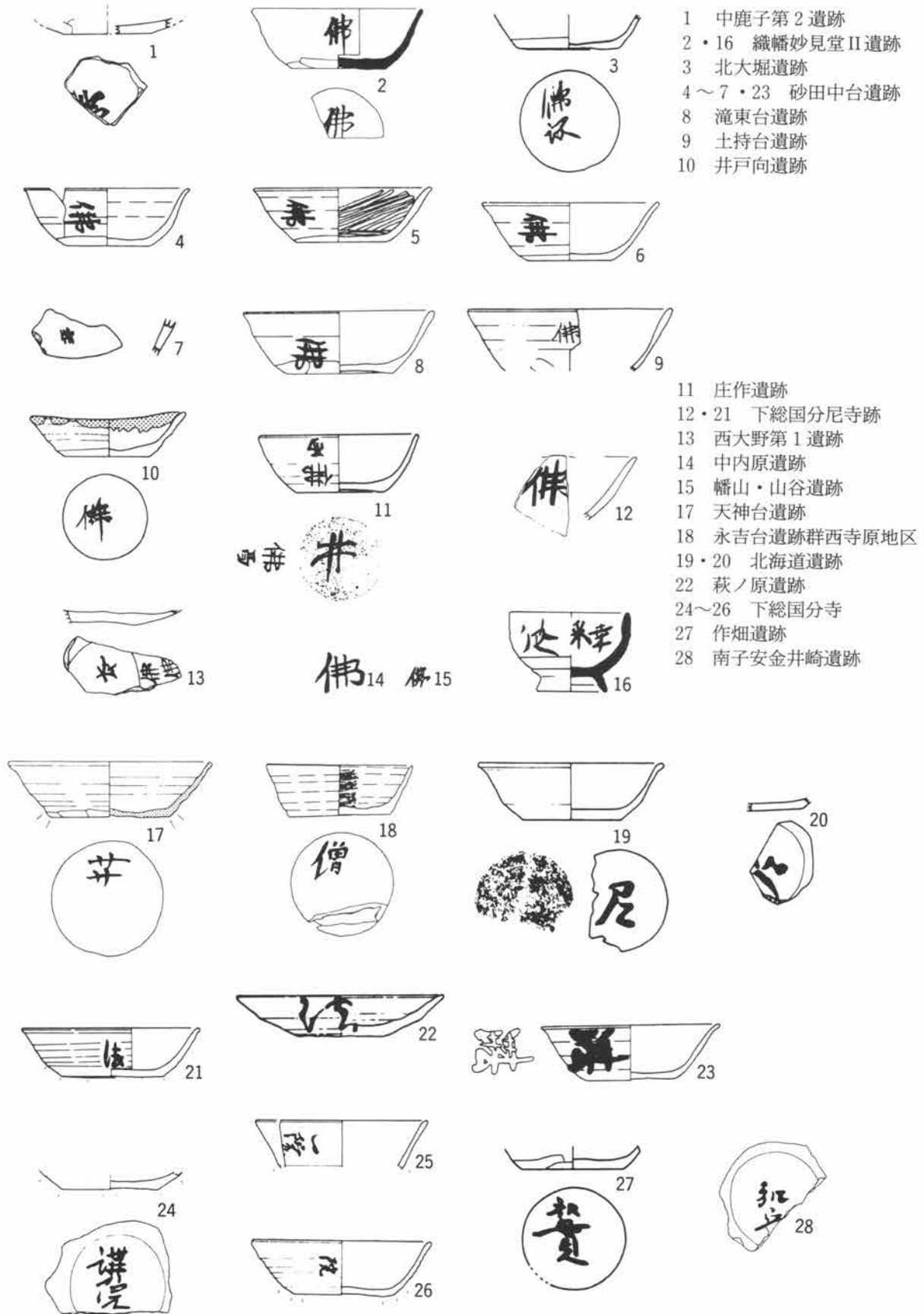


- 1~4 下総国分寺
- 5~7 下総国分尼寺跡
- 8 岩戸広台遺跡
- 9・10 大崎台遺跡
- 11・26 宮本台遺跡群
- 12 千草山遺跡
- 13 砂田中台遺跡
- 14 海神台西遺跡
- 15 平木遺跡
- 16 角田台遺跡
- 17 北大堀遺跡
- 18 高津新山遺跡
- 19 愛宕前遺跡
- 20 大椎第2遺跡
- 21・22 南大広遺跡
- 23 大畑遺跡群
- 24 江原台遺跡
- 25 林遺跡
- 27 郷部・堀尾遺跡
- 28 若宮八幡遺跡
- 29 大太良内遺跡
- 30・31 幡山・山谷遺跡

第120図 墨書土器 5



第121図 墨書土器 6



第122図 墨書土器 7

墨書土器が出土することは注目される。また、逆に「堂」の出土例は検出することができなかった。

この山寺については『日本霊異記』<sup>13)</sup>の例では僧侶の修行の場所として建立されたようであり、国家又は特定の貴族・豪族や村落との関係はほとんど見られない<sup>14)</sup>との指摘がある。堂については、村落との関係が深く、里名や村名を堂の名とするものが多く、在住の専門僧侶がいない可能性が強いという。

房総地域の「寺」の実態は後節でも触れているように大部分の遺構が小規模な建物であり、『日本霊異記』にいう堂程度のものである。しかしながら、本地域では、「堂」の文字資料は現在までのところ検出されず、「寺」の出土遺跡が83遺跡を数える。このような現象は「寺」と名付けることに執着させるなにかがあったことも連想させるが、『日本霊異記』に描かれた畿内地域の様相との対比だけでは語れないものがあるのであろうか。いずれにしても墨書土器がこれだけ出土している地域に「堂」の文字が見られないということにも驚かされるのである。

仏教関連の墨書土器で最も遡るものは、大袋台畑遺跡「赤界（男）寺」・「赤（埼）寺」と草刈遺跡「草刈於寺坏」である。両者とも8世紀前半代と考えられるが、周囲には仏教関連の遺構は存在せず、遺物のみの出土である。これらの墨書土器と遺構が共に出土するようになるのは8世紀第3四半期からであり、鉄鉢などが出土する時期とほぼ重なる。

なお、このような寺銘墨書土器等で文献に記載された寺と合致するものも存在し、注目される。結城廃寺跡から検出された丸瓦にヘラ書きで「法成寺口」と記載されたものがある。『将門記』<sup>15)</sup>に将門の部下が「結城郡法成寺」付近で、敵の攻撃を事前に察知したとの記事があるが、結城郡内で大規模な寺院は結城廃寺跡以外考えられず、ここから法成寺のヘラ書きの瓦が出土したことにより、本来の寺院の名称が明らかとなったのである。

## 瓦塔

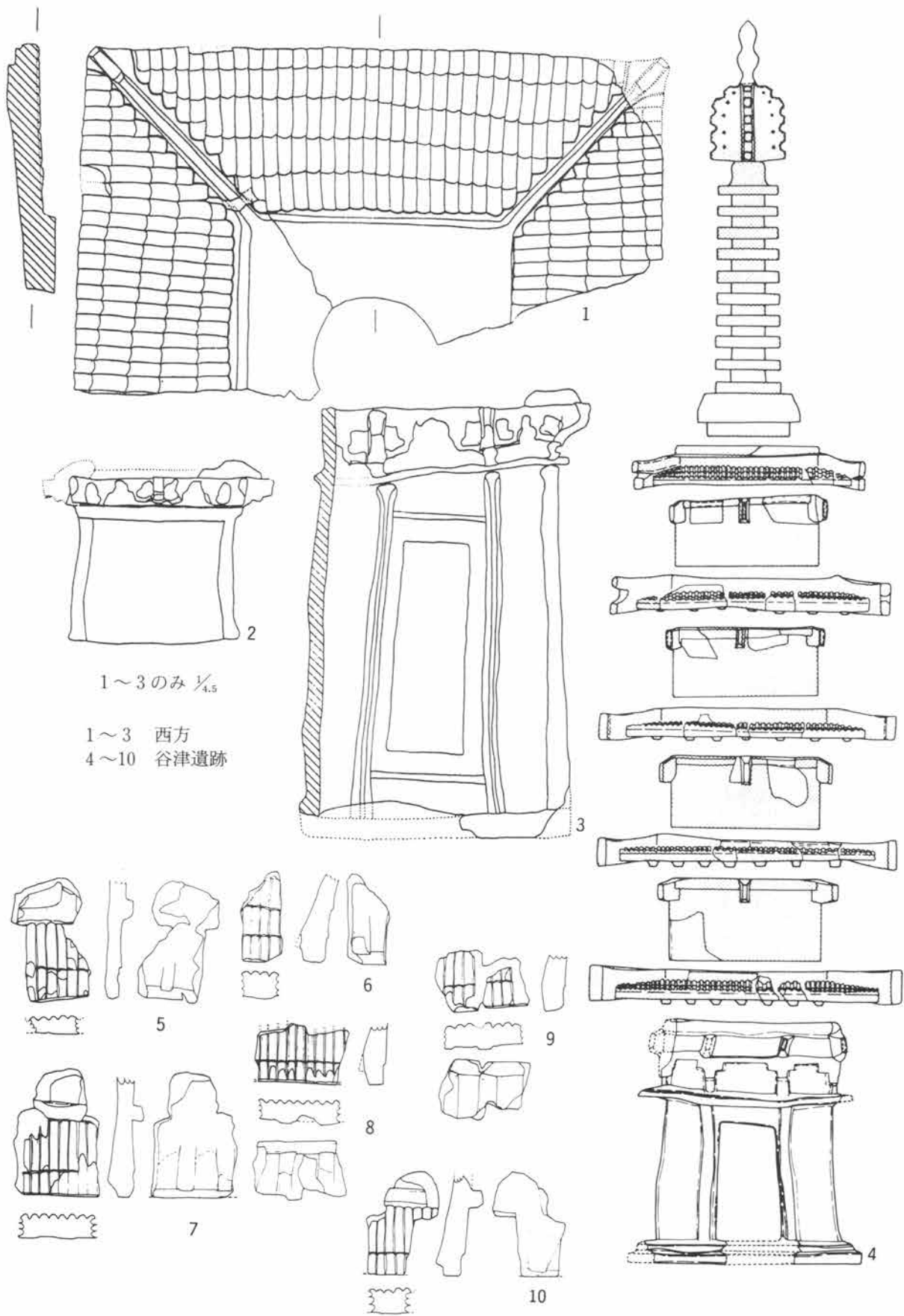
瓦塔の出土遺跡は40遺跡を数える。この数字は関東圏では、上野・北武蔵地域と比較すると少なく、他の諸地域と比較すると多い。ただし、北武蔵の例は須恵器生産の活発を物語り、52遺跡中10遺跡<sup>16)</sup>が須恵器窯跡からの出土である。房総では現在までのところ、窯業遺跡からの出土例は認められない。

本地域では、40遺跡中、25遺跡で仏教関連遺物・遺構が同一遺跡内から検出されている。瓦塔は、他の遺物と比較してその存在が目立つため、表採も多く見られる（4遺跡）ので、実際は大部分の遺跡で何らかの形で遺物が伴う可能性が考えられる。

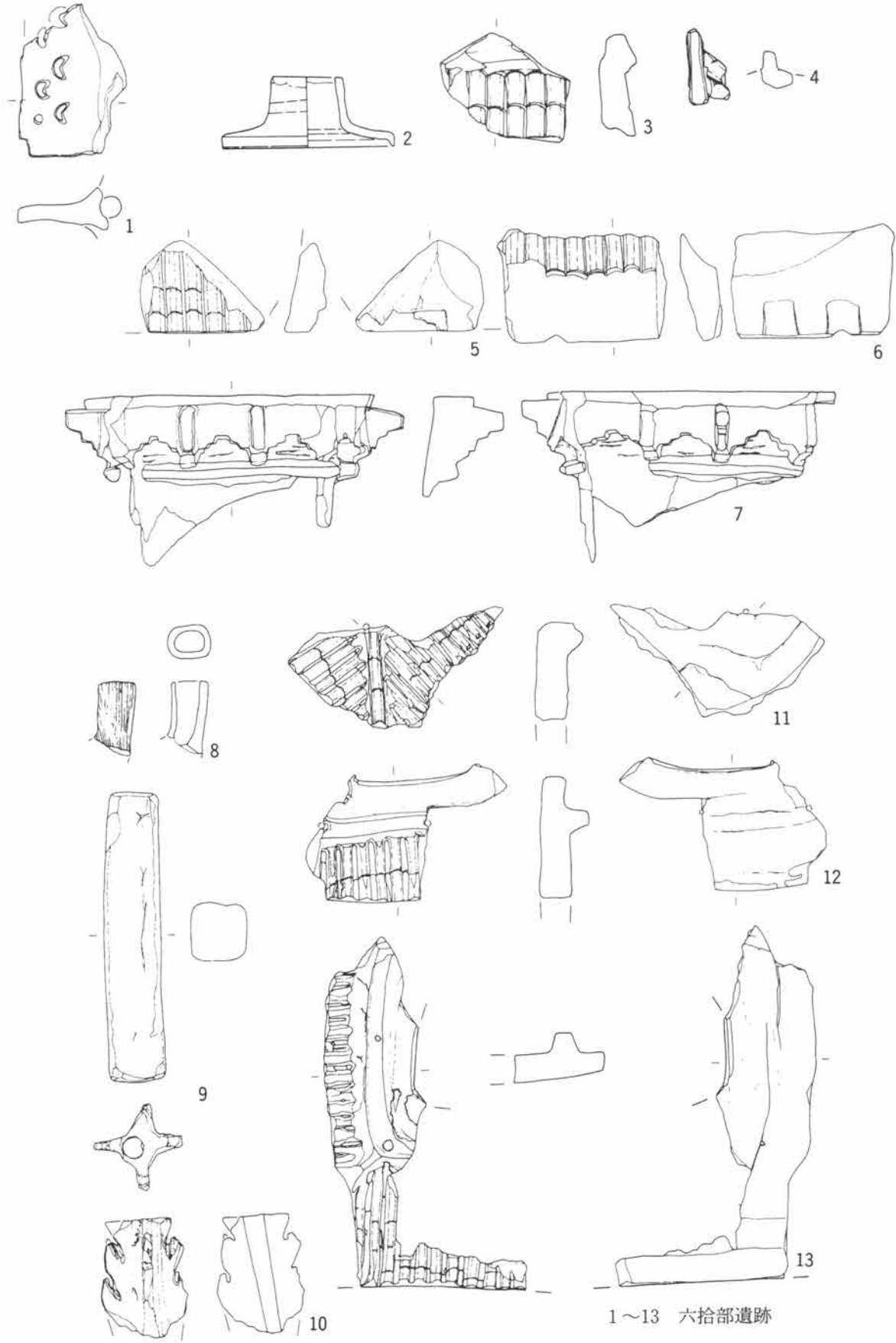
瓦塔については、還元炎と酸化炎のものが見られるが、還元炎のものについては、須恵器窯で焼成されていると考えられる。酸化炎のものについても須恵器窯で焼成された可能性が強いが、土師器の焼成土坑と同様な円形土坑<sup>17)</sup>で焼成された例も他地域では見られるので、どちらとも言えないのが実態である。瓦塔の中には赤色の彩色を施されたものや赤色と白色彩色を施したもの（第126図1・2・4・7）が見られる。瓦塔のみではなく瓦金堂も出土しており、両者の出現の時期は他の器物と同様に8世紀後半代であり、瓦塔の最盛期は9世紀代である。なお、関東地域における瓦塔の最古の出土時期は、8世紀前半代である。

## 仏像・小金銅仏等

仏像・小金銅仏については、本県ではあまり出土が見られない上に、大部分のものが表土からの出土であり、共伴遺物がなく、明確に時期決定ができるものに乏しい。

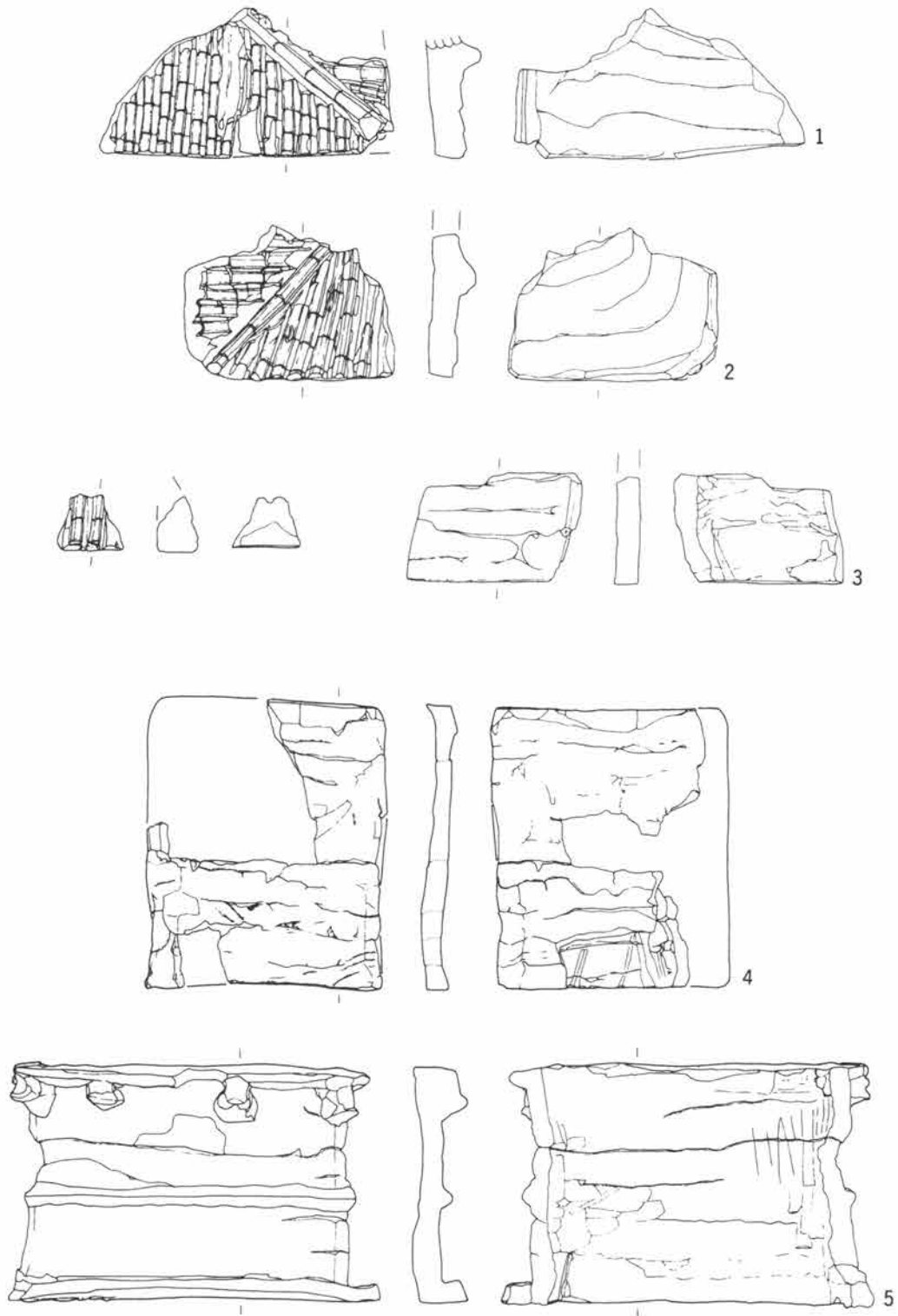


第123図 瓦塔 1



1~13 六拾部遺跡

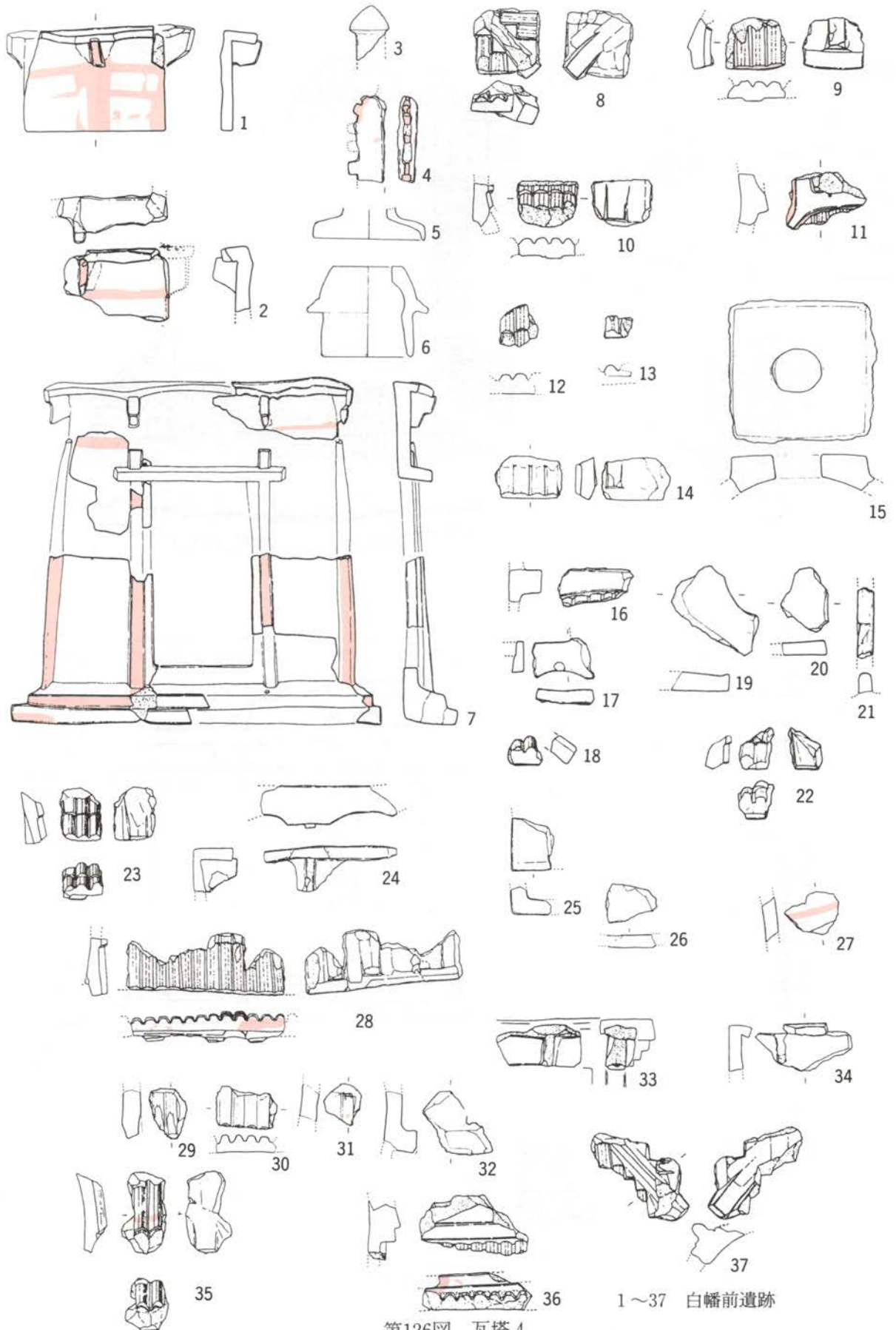
第124図 瓦塔2



1~5 六拾部遺跡

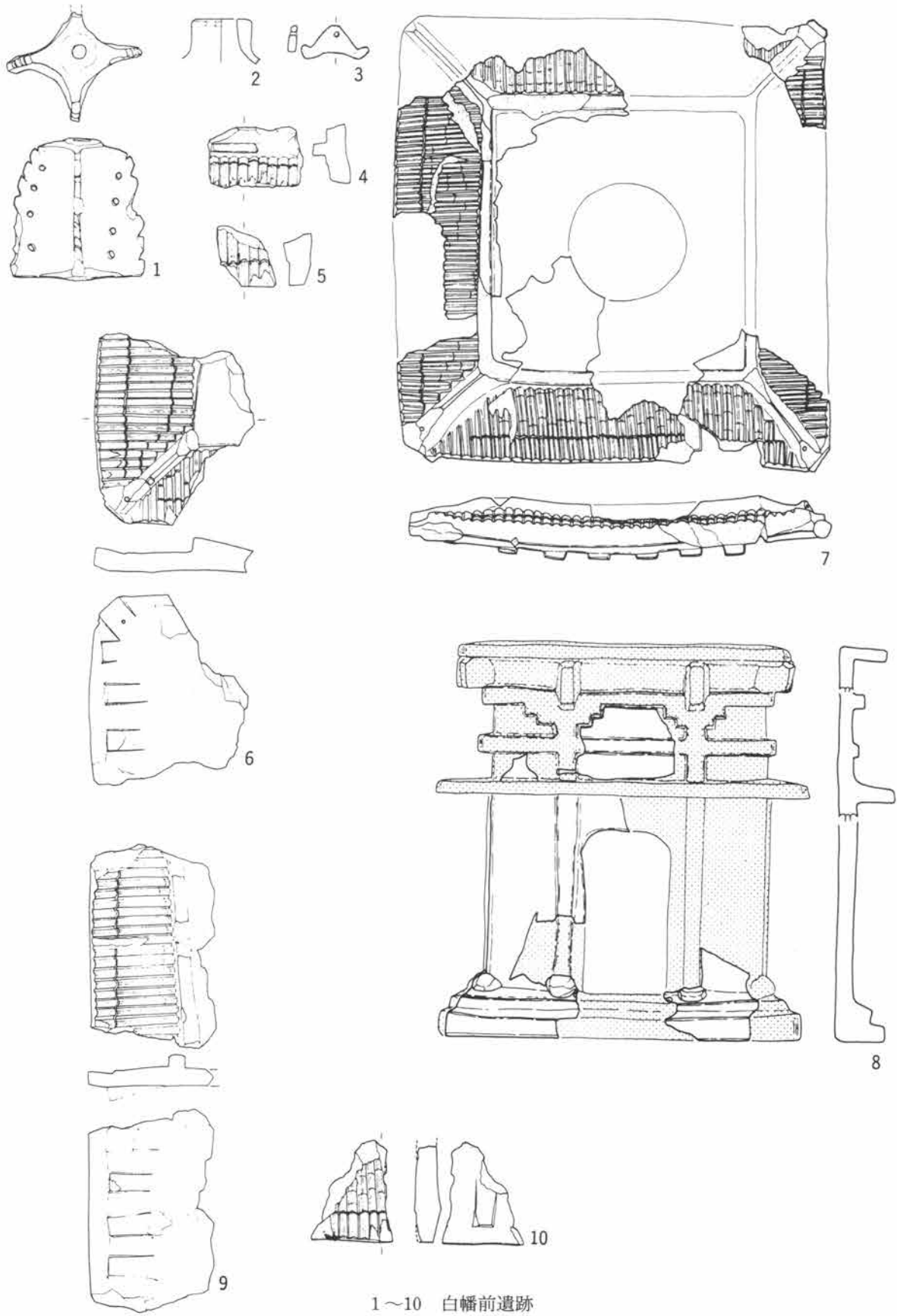
第125図 瓦塔 3



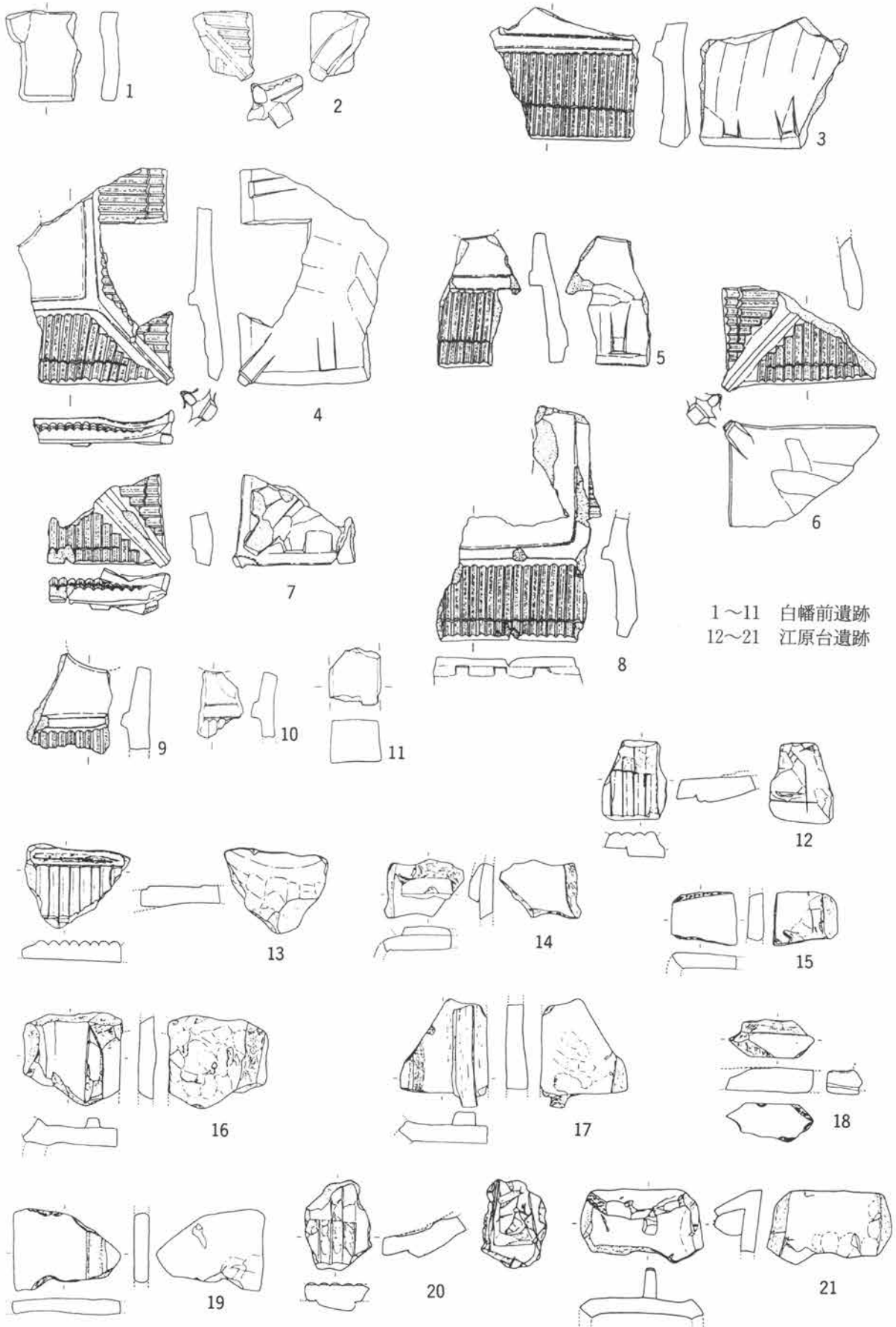


1~37 白幡前遺跡

第126図 瓦塔 4

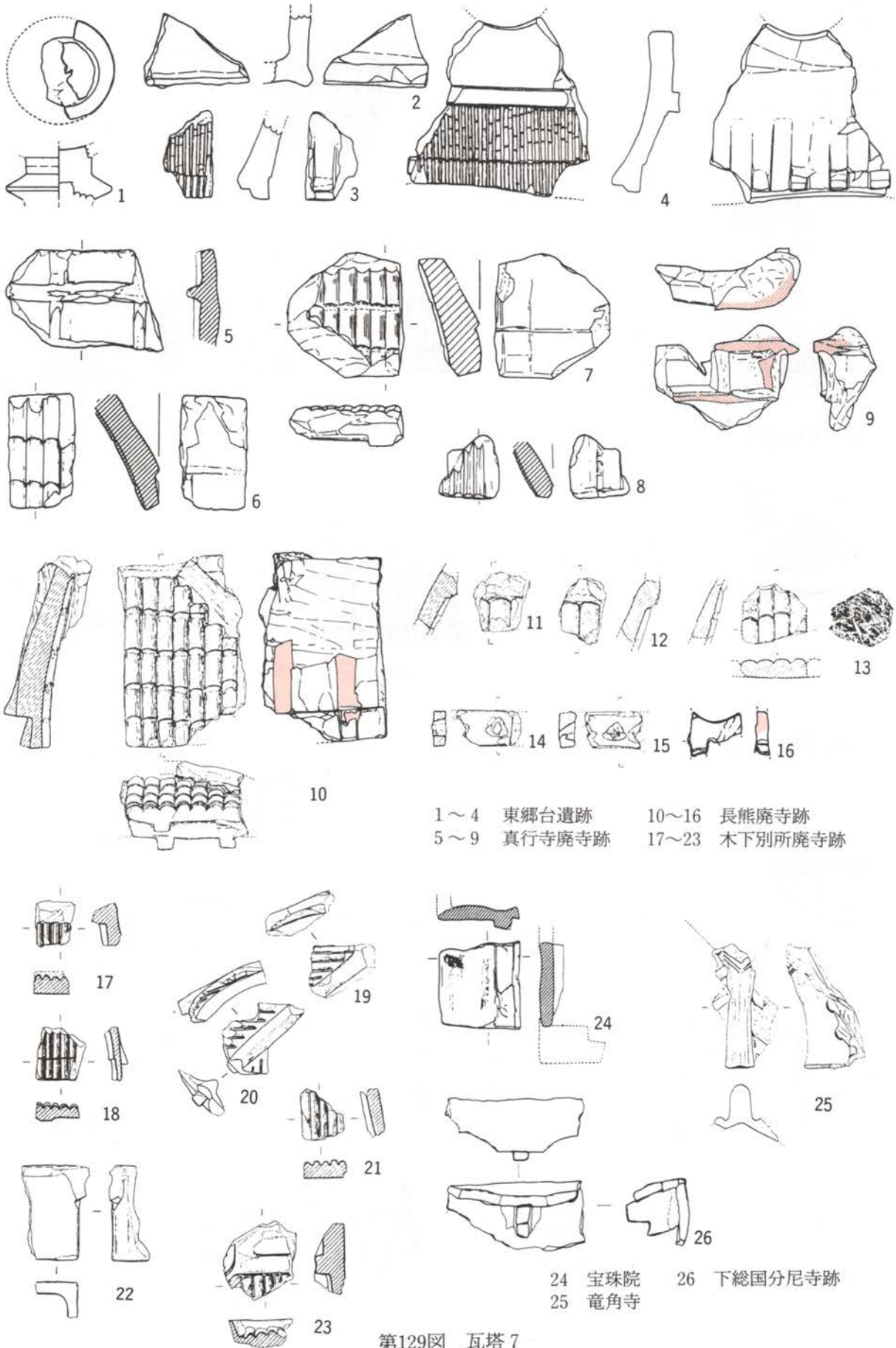


第127図 瓦塔 5



第128図 瓦塔 6

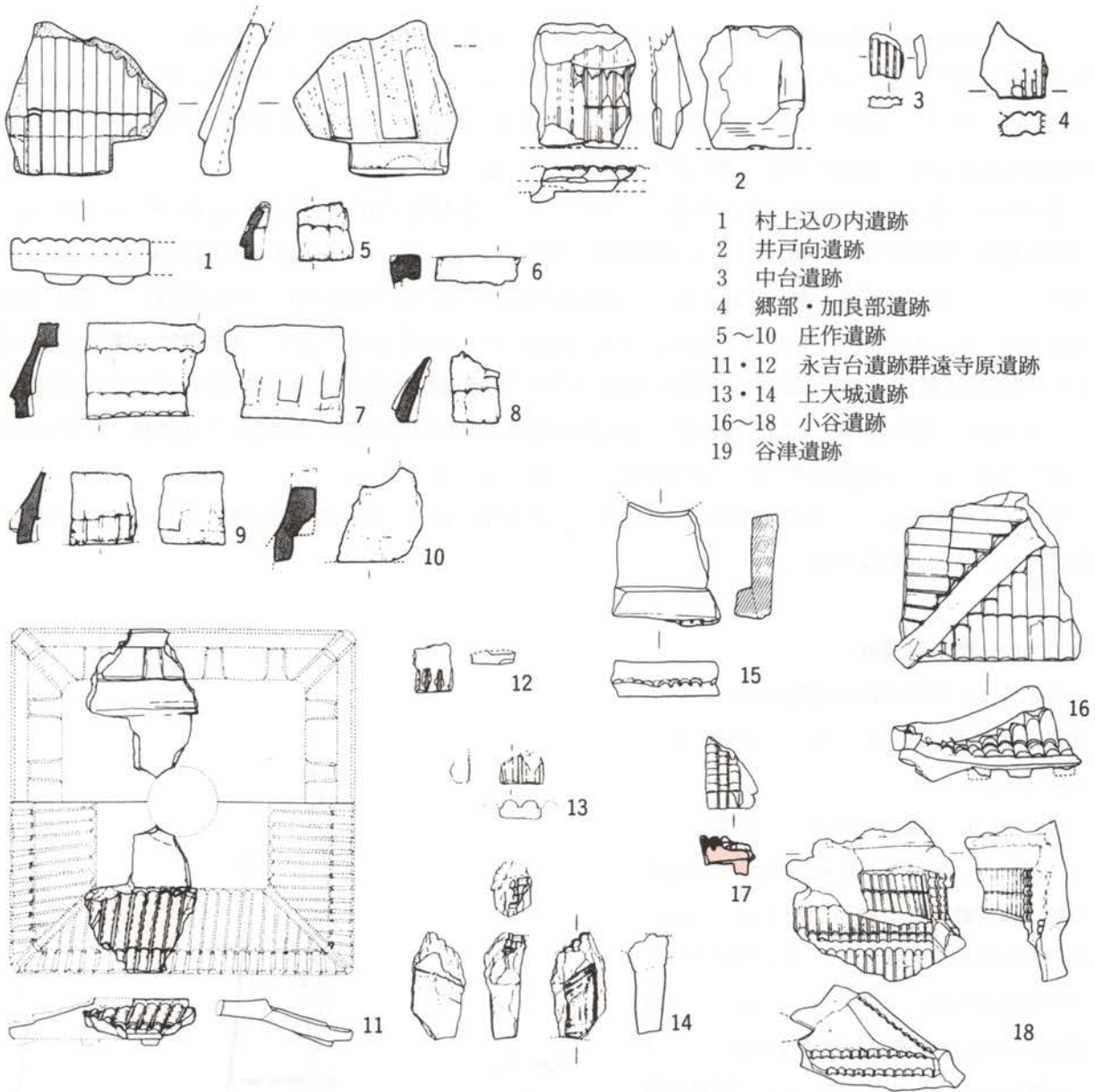
III 各 論



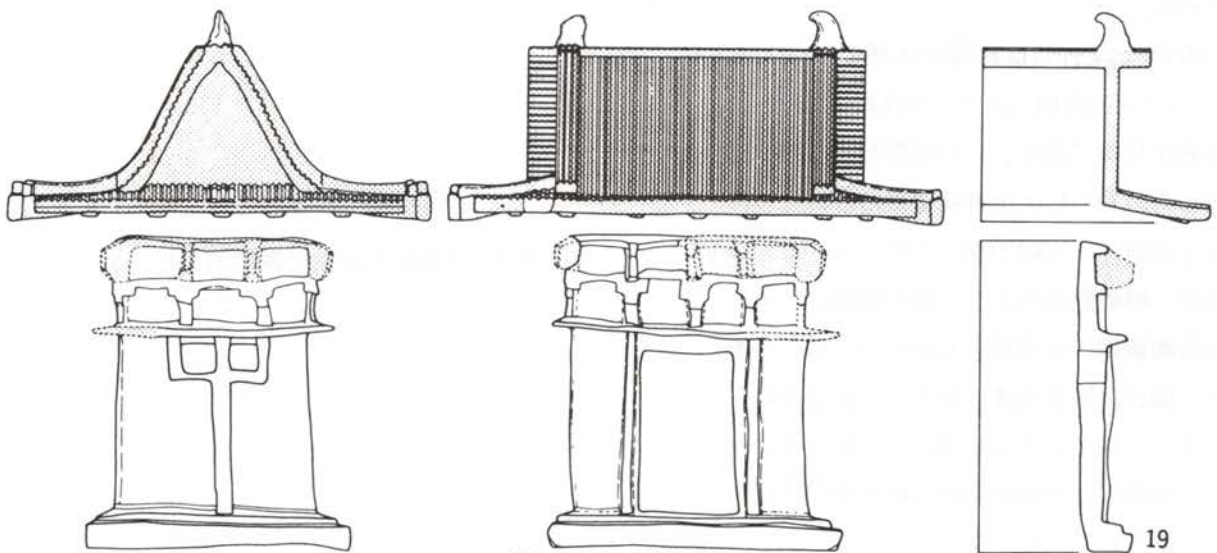
1~4 東郷台遺跡      10~16 長熊麿寺跡  
 5~9 真行寺麿寺跡      17~23 木下別所麿寺跡

24 宝珠院      26 下総国分尼寺跡  
 25 竜角寺

第129図 瓦塔 7



- 1 村上込の内遺跡
- 2 井戸向遺跡
- 3 中台遺跡
- 4 郷部・加良部遺跡
- 5~10 庄作遺跡
- 11・12 永吉台遺跡群遠寺原遺跡
- 13・14 上大城遺跡
- 16~18 小谷遺跡
- 19 谷津遺跡



第130図 瓦塔 8

最も古い例としては関峯崎横穴群の3号横穴棺床出土の押出一光三尊仏(第131図1)<sup>18)</sup>や成東町出土の観音菩薩立像<sup>19)</sup>が挙げられる。7世紀後半と考えられる。また、駄ノ塚西古墳石室西壁の線刻の如来座像(第131図5)<sup>20)</sup>も古い可能性が考えられる。奈良時代と考えられるものは、結城廃寺跡の埴仏・塑像<sup>21)</sup>、大栄町稻荷山出土の十一面観音菩薩立像2体<sup>22)</sup>とが挙げられる。

平安時代と考えられるものは比較的多く、列記すると、栄町北辺田の菩薩立像(表採)<sup>23)</sup>、高津新山遺跡の如来座像(表土出土)、栄町龍角寺の如来座像(地表下50cm)<sup>24)</sup>、井戸向遺跡の宝冠如来座像(竪穴住居跡出土)<sup>25)</sup>、木下別所廃寺跡の菩薩立像<sup>26)</sup>、名木廃寺跡の菩薩立像(表採)<sup>26)</sup>、坂志岡・尼ヶ谷遺跡の観音菩薩立像(表土出土)<sup>27)</sup>、市川市下総国分寺付近の塚出土の誕生釈迦仏立像<sup>28)</sup>、峯崎遺跡の螺髪(第131図4)(竪穴住居跡)<sup>29)</sup>、田向城跡の宝冠如来座像(土坑)<sup>23)</sup>、織幡妙見堂遺跡の仏像の後背部分(第131図3)<sup>30)</sup>がある。時期不明のものとしては、上総国分尼寺跡の螺髪や市原市国分僧寺北辺部の如来座像<sup>23)</sup>が見られる。

以上のように、小金銅仏等の出土は菩薩像と如来像の出土が多いことが分かる。

仏像と小金銅仏については、像高が10cm以下のもの9像、10cm～15cmのもの2像、20cm以上のものが2像であり、小型の仏像が多い。

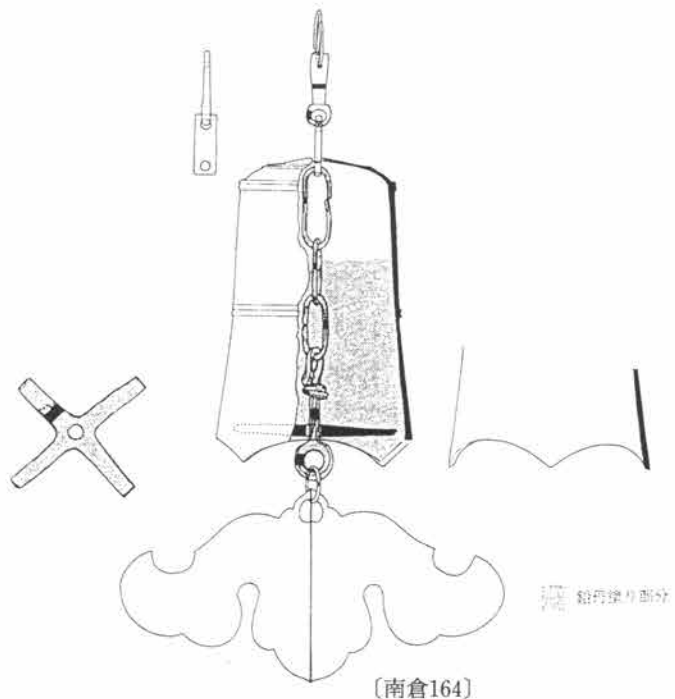
### その他の仏教関連遺物

上記の出土頻度が高い遺物のほかにも仏教遺物と考えられるものをここで触れることにする。

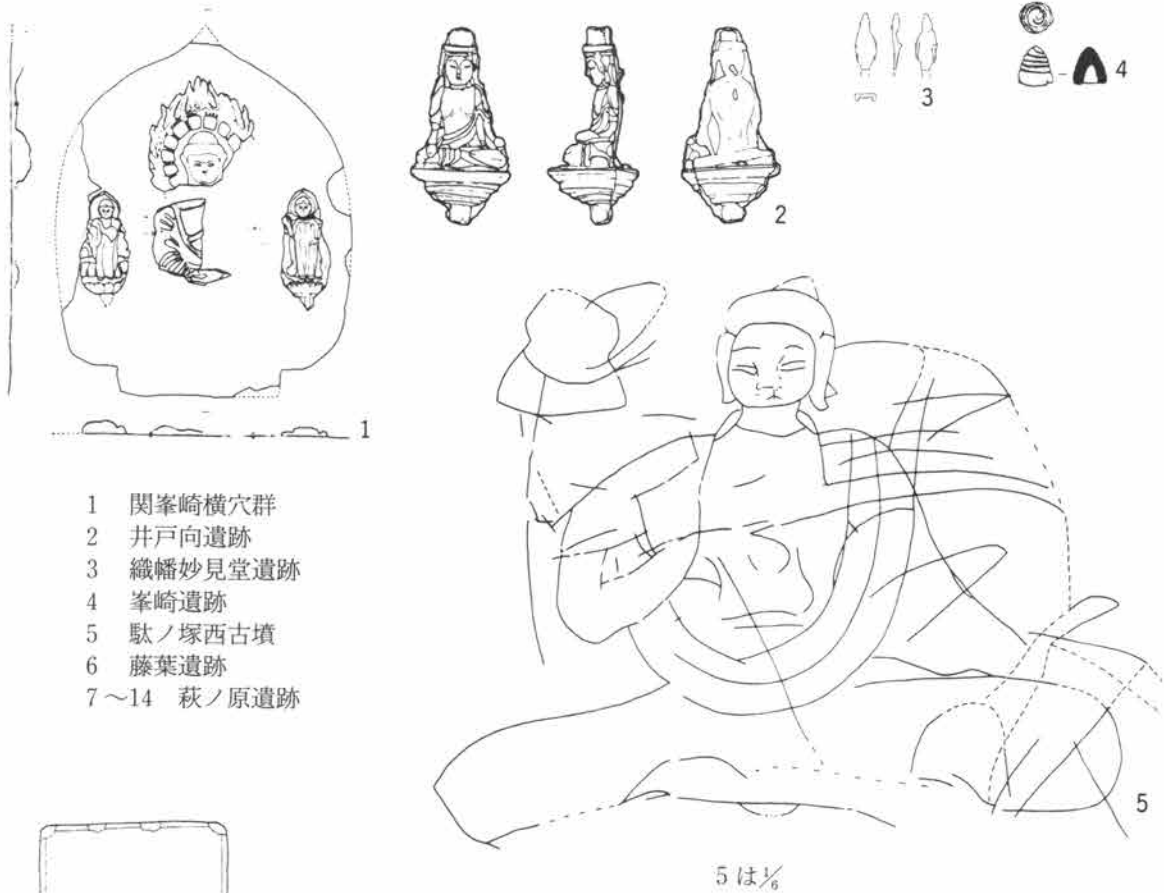
第132図6は、温石と考えられる遺物である。温石は、焼いた石を布に包んで病気等の際に体を暖める医療用具である。当時の医療の状況から判断して、僧侶が使用していた可能性が強いものである。ほかに白幡前遺跡<sup>31)</sup>・永吉台遺跡群西寺原地区・北アラク遺跡<sup>32)</sup>から出土しており、すべて蛇紋岩製である。

第132図7～14は鉄製の風鐸の部品であり、7・8は風招であり、9は鐸身、10～14は釣金具等である。この風鐸と同形態で同寸に近いものに、正倉院宝物の中に見られる金銅鎮鐸<sup>33)</sup>(第131図)が挙げられる。これは、幢幡鉸具であり、鐸身側面に「東大寺枚幡鎮鐸 天平勝宝九歳五月二日」とあり、幡に付属する鐸であることが分かる。

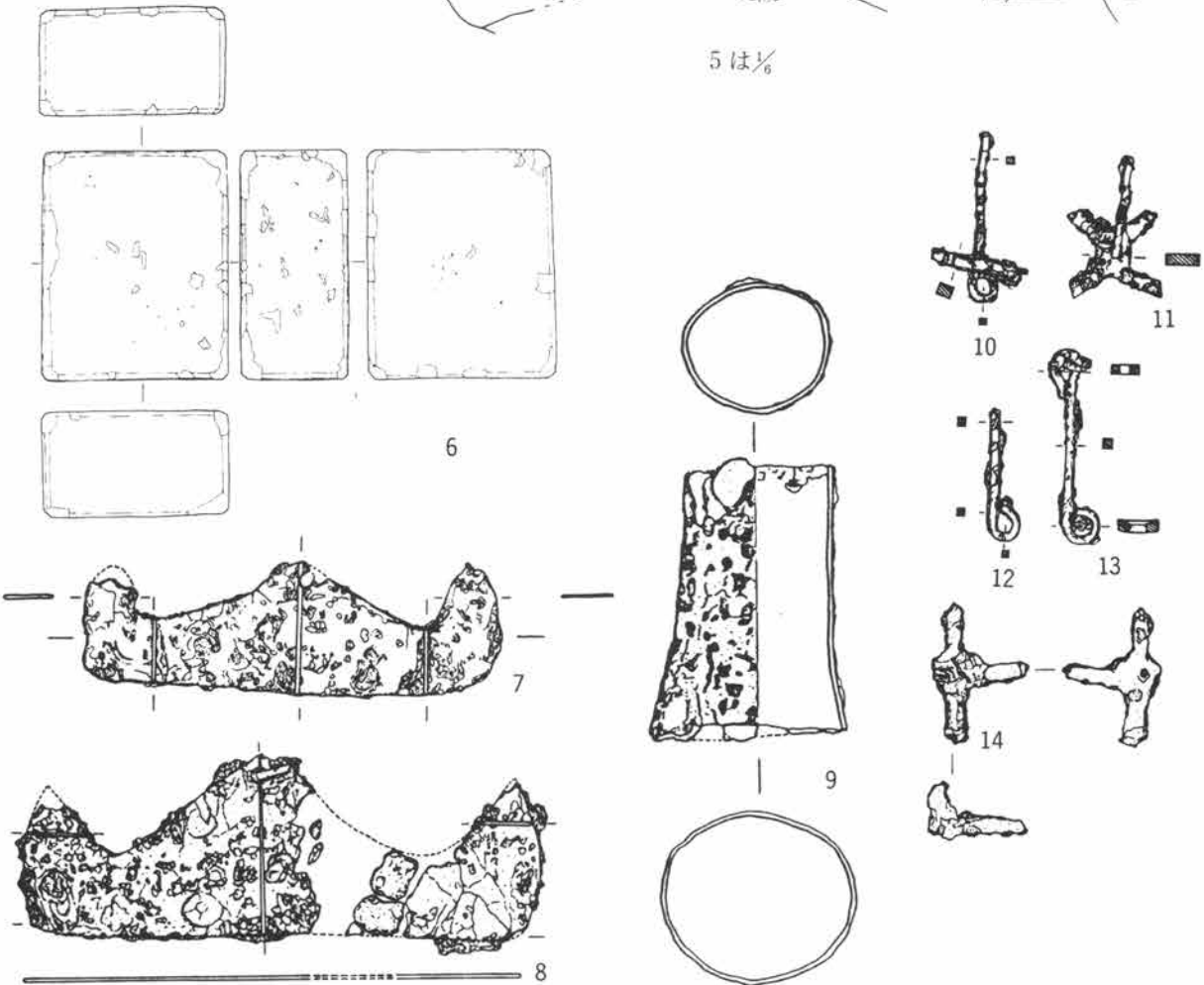
また、図示していないが、花瓶と考えられる遺物が、上総国分尼寺跡と中内原遺跡から出土している。



第131図 正倉院宝物金銅鎮鐸第1号



- 1 関峯崎横穴群
- 2 井戸向遺跡
- 3 織幡妙見堂遺跡
- 4 峯崎遺跡
- 5 駄ノ塚西古墳
- 6 藤葉遺跡
- 7~14 萩ノ原遺跡



第132図 その他の仏教関連遺物

### 3 墨書土器「神」との対比

古代の寺院を考えるには、その対局にあるもう一つの信仰である神道・神社についても考慮しなければならないであろう。今回は紙面の都合もあるので、特に「神」関連の墨書土器を出土した遺跡についてのみ触れ、それと仏教との繋がりを見ていくことにする。

「神」関連の墨書土器が出土した遺跡は、現在までに28遺跡を数える。出土遺跡は長勝寺脇館跡「□命替神奉」、馬橋鷺尾余遺跡「神奉」、北大堀遺跡「神屋」、庄作遺跡「丈部真次□（召カ）代国神奉」「罪ム国玉神奉」「上総□秋人歳神奉進」「竈神」、吉原三王遺跡「神□」、南借当遺跡「奉玉泉 神奉」、郷部・堀尾（Loc16）遺跡「神奉」、高岡大山遺跡「神」「神屋」、城次郎丸遺跡「神奉」、入谷遺跡「神」、権現後遺跡「神」、鳴神山遺跡「□神」「國玉神上奉丈部鳥万呂」「大國玉罪カ」、東野遺跡「國玉」、神田台遺跡「神宮」「毛神」、庚塚遺跡「神奉」、小座ふちき遺跡「石神」、白幡前遺跡「神万カ」、双賀辺田No.1遺跡「神主」、油作第2遺跡「大神」、多田日向遺跡「大神」「神部」、寺台遺跡「神宮」、池尻遺跡「神主」、谷窪・上楽遺跡「神奉」、須和田遺跡「神」、ムコアラク遺跡「□神申如林為南無界秋」、別当地遺跡「神山」、境堀遺跡「神」、新橋高松遺跡「神」が挙げられる。「神」の一文字が多いことは無論であるが、「神奉」も多く存在する。

8世紀後半には「神」の墨書土器が見られ、9世紀前半から中葉にかけて多く認められるようになる。現在までのところ、「神」の墨書土器は、下総地域のみ出土であり、上総・安房地域から出土しないことは注目される。

この28遺跡という「神」関連の墨書土器出土遺跡数は、「寺」「仏」の墨書土器が出土した99遺跡と比較すると3割弱の数値で、少ないものとなっている。また、注目されるのは、「神」等の墨書土器が出土する遺跡のうち12遺跡に何らかの仏教関連遺物が認められることである。このように多くの遺跡から神道関係と仏教関係の遺物が混在して見られるという点はどのように評価したら良いのであろうか。神仏混合の風習が広がったとする根拠となり得るかは評価の分かれるところであろう。

ただし、「神」の墨書土器と仏教関連遺物が同一の竪穴住居跡から出土した例は現在までのところ見られず、この点から考えると、峻別されていた可能性が強いのではなかろうか。

### 4 仏教関連遺物の出土遺跡の頻度について

今回、浄瓶・水瓶、香炉・香炉蓋、鉄鉢、瓦塔、墨書土器等の文字資料の中で「寺」「仏」・「佛」を主な仏教関連遺物として認定し、分析を行ってきたが、これらのすべての遺物と何らかの遺構を検出した遺跡は、真行寺廃寺跡のみである。このことは、前述したように本格寺院については上総国分寺尼寺を除き、部分発掘のみであることに起因するとも考えられる。なお、瓦窯跡を除いた仏教関連遺跡204遺跡（線刻画古墳2、仏教関連遺物を出土した窯跡3遺跡を含む。）のうち、遺跡の半数以上の114遺跡で1種類のみ遺物ではなく、仏教関連の遺構又は他の仏教関連遺物が出土している。

この204遺跡のほか、瓦窯跡を含めると223遺跡となる。この数値はどのように評価してよいのだろうか。今回、作成した地図には総計で730遺跡以上の点を落とした。これは、上記仏教関連遺跡・瓦窯跡・瓦出土



地と、発掘調査がなされた奈良・平安時代の集落跡の合計である。

発掘調査がなされた奈良・平安時代の集落跡に関しては、千葉県教育委員会の千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報や各郡市文化財センターの年報等から抜き出したものである。地図上に落とす際には遺跡が各地点に分かれているものに関しては、1遺跡とした。古い文献には遺跡の位置が記されていないものが若干存在し、点を落とせないものがあった。また、遺跡が稠密な区域に関しては見づらいためドットの数減らしたところも存在するので、実際の遺跡数はこれよりも増加する。ただし、いくら増加しても1,000遺跡を超えることはないと考えられる。この数字から仏教関連遺跡の割合を単純に割り出すと20%を超えることになる。

また試みに、奈良・平安時代の遺物が分布している遺跡数を千葉県分布地図上から拾うと、4,366遺跡となった。この数字からでも仏教関連遺跡は全体の4.7%前後になる。4,366遺跡という数字は発掘されていない遺跡を含んだものであり、これでも1/20程度の数値になるということは、かなりの頻度で仏教関連遺跡が見られるということになる。

そして、これらの仏教関連遺物の出土遺跡を概観すると、本格的寺院からの出土は少数であり、いわゆる村落内寺院及び明確な仏教遺構を伴わない遺跡が大半である。その意味ではある程度、房総地域においても官寺や郡寺級の寺院のみではなく、仏教が一般民衆にまで受容されていたことを物語る数値であろう。

以上、仏教関連遺物について検討を行ってきたが、その出現時期については8世紀後半代に集中することが分かった。また、8世紀第3四半期まで遡ると考えられる遺物も多く認められる。従来から考えられてきた8世紀末という時期よりも遡ることは確実となった。また、8世紀末に創建と考えられていた小食土廃寺跡をはじめとするいくつかの瓦葺寺院跡が8世紀第3四半期まで遡る可能性が明らかとなり、この時期に何らかの画期があったことが考えられる。

また、仏教関連遺物が最も多く出土する時期は、9世紀前半から中葉である。10世紀に至ると出土量は格段に落ちており、この時期にさらに変容するものと考えられる。

## 註

- 1) 「軍防令第一七」『令義解』巻第五 国史大系本 吉川弘文館
- 2) 宮内庁正倉院事務所 1986 『正倉院年報』第8号
- 3) 阪田宗彦 1992 「正倉院宝物の塔椀形合子」『仏教芸術』200号 毎日新聞社
- 4) 渡辺 一ほか 1992 「柳原遺跡A地区」塔椀形香炉蓋 『鳩山窯跡群発掘調査報告書第4冊 一人集落編(2)-』 鳩山町教育委員会
- 5) 弗若多羅、鳩摩羅什共訳 『十誦律』第五六 後秦時代 『大正新修大藏経』二三内
- 6) 雨宮龍太郎 1983 「古代村落と仏教—磁鉢をめぐる人々—」『研究連絡誌』第2号 (財)千葉県文化財センター
- 7) 奈良国立文化財研究所 1978 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II 藤原宮西方官衙地域の調査』
- 8) 渡辺 一ほか 1990 『鳩山窯跡群発掘調査報告書第2冊 一窯跡編一』 鳩山町教育委員会
- 9) 中野正樹 1976 「供養具」『新版仏教考古学講座 第5巻 仏具』 雄山閣出版株式会社
- 10) 吉田恵二氏の御教示による。  
正倉院事務所 1971 『正倉院の陶器』 日本経済新聞社

### III 各 論

- 11) 「二五 比丘ノ六物ト云ハ何ソ」 『塏囊鈔』卷第十一 文安3年 『日本古典全集 塏囊鈔』 1936  
日本古典全集刊行會
- 12) 大寶二年の御野(美濃)国戸籍に「寺」「寺賣」の名前が見える。  
竹内理三 1963 『寧楽遺文』上巻 東京堂出版
- 13) 1975 『日本靈異記』 (日本古典文学全集6) 小学館
- 14) 直木孝次郎 1960 「靈異記に見える「堂」について」『續日本紀研究』第7巻第12号 續日本紀研究会
- 15) 『将門記』『日本思想大系 古代政治社会思想』
- 16) 池田敏宏 1995 「瓦塔屋蓋部表現手法の検討-埼玉県児玉町堂平遺跡採集瓦塔をめぐって-」『土曜考古』第19号
- 17) 埼玉県鳩山町鳩山窯跡群柳原遺跡A地区から9世紀初頭から9世紀前半の瓦塔・瓦堂を焼成したと考えられる円形の焼成土坑が検出されている。  
渡辺 一他 1991 『鳩山窯跡群発掘調査報告書第3冊 -工人集落編-』 鳩山町教育委員会
- 18) 原田享二他 1988 「関峯崎横穴群3号横穴」『佐原市内遺跡群発掘調査概報II』 佐原市教育委員会
- 19) 麻生脩平 1987 「山形・円福寺の銅造観音菩薩立像とその兄弟仏」『仏教芸術』175号 毎日新聞社
- 20) 杉山晋作 1996 「駄ノ塚西古墳の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告第65集』 国立歴史民俗博物館
- 21) 斉藤伸明 1989 『結城廃寺第1次発掘調査概報』 結城市教育委員会  
斉藤伸明 1991 『結城廃寺第3次発掘調査概報』 結城市教育委員会
- 22) 平野元三郎 1972 「千葉県上代仏教文化史資料録」 『千葉県の歴史』第3号 千葉県
- 23) 埼玉県立博物館 1993 『特別展図録甦る光彩-関東の出土金銅仏』
- 24) 林 宏一 1982 「古代東国の小金銅仏-出土仏を中心に-」 『歴史手帳』10巻10号 名著出版
- 25) 藤岡孝司 1988 『八千代市井戸向遺跡-萱田地区埋蔵文化財調査報告書IV』 (財)千葉県文化財センター
- 26) 埼玉県立博物館 1982 『古代東国の甕-仏教文化の夜明けをさぐる』
- 27) 稲見英輔 1993 「坂志岡・尼ヶ谷遺跡」『平成4年度芝山町内遺跡発掘調査報告書 小池麻生遺跡・坂志岡・尼ヶ谷遺跡』 芝山町教育委員会
- 28) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1978 『古代の誕生仏』
- 29) 松田政基ほか 1996 『峯崎遺跡』 結城市
- 30) 小見川町埋蔵文化財調査会 1989 『織幡地区遺跡群発掘調査報告書』
- 31) 大野康男 1991 『八千代市白幡前遺跡』 (財)千葉県文化財センター
- 32) 阪田正一 1996 「古代房総の民衆と仏教文化」『坂詰秀一先生還暦記念 考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
- 33) 宮内庁正倉院事務所 1993 『正倉院年報』第15号

#### 追記

挿図中の土器で、大きさの記載のないものについては縮尺1/4である。

## 2 寺院と仏堂・付属施設

今回の紀要は重要遺跡確認調査と同種の遺跡の調査成果をあわせて検討し、これまで明らかになった古代仏教遺跡の実態を整理しようというものである。重要遺跡確認調査では、真行寺廃寺跡や九十九坊廃寺跡など複数の基壇建物跡で伽藍が構成された寺院跡ばかりでなく、長熊廃寺跡や小食土廃寺跡などいわゆる一堂伽藍の寺院や、名木廃寺跡のように仏堂と竪穴住居跡群が近接した寺院跡も対象とした。こうした多様な規模と内容の寺院跡の存在を明らかにするとともに、伽藍周辺の寺地の解明についても一定の成果を上げた。寺院は塔や金堂といった仏や法の空間（仏地）ばかりでなく、講堂や僧坊などの僧の空間（僧地）や、寺の日常生活を運営するための空間がある。さらにこれらを取りまくように寺領や、檀越の邸宅をはじめとする集落が寺辺の空間を形成している。

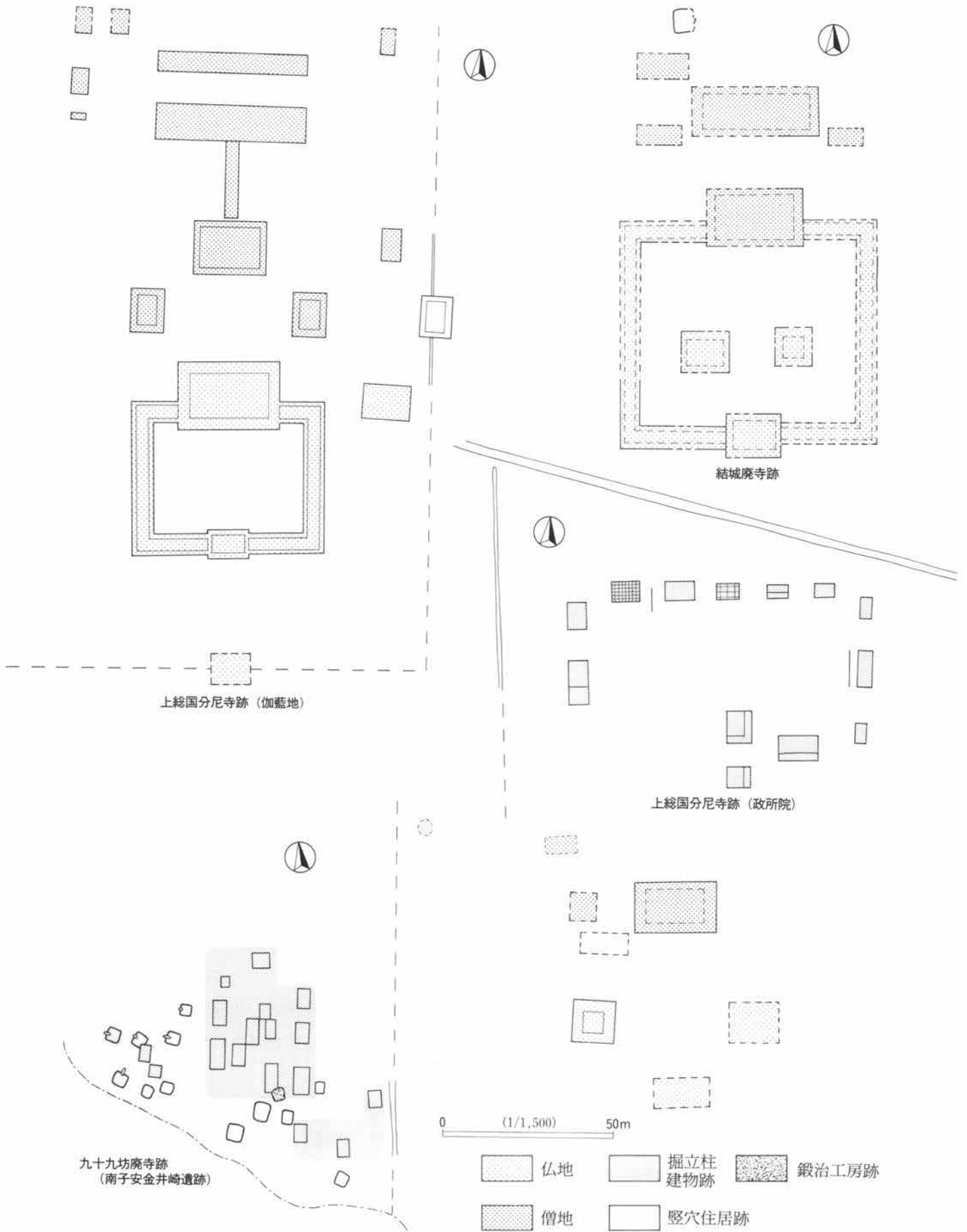
古代寺院の空間について、山路直充氏や須田勉氏をはじめとする関東の国分寺研究では、いわゆる七堂伽藍と呼ばれる南大門から区画された仏地と僧地を「伽藍地」、そして中心伽藍以外の寺の運営を支え日常業務に関わる場を「付属院地」に分け、両者を合わせた寺の敷地全体を「寺院地」、さらにそのまわりを取り囲む寺田や山川沼沢を「寺地」と捉えている<sup>1)</sup>。ただし、この際「付属院地」の性格づけが多少問題となる。坂詰秀一氏は講堂・僧坊などを「僧地」と捉え、大衆院以下の補助空間を「俗地」と捉えている<sup>2)</sup>。上原真人氏は、寺域外を「俗地」と捉え、大衆院以下の寺域内の施設を僧侶が共同生活し宗教活動を行うための補助空間として「僧地」に含めている<sup>3)</sup>。寺院地周辺を含めた空間で寺院を考えていく上では、上原氏のように寺域外を「俗地」として捉える必要がある。ただし、講堂や僧坊等と運営施設が配置上区分されている事例を扱う上で、両者を「僧地」として一括するのは実態を把握する上で問題が生じる。そこで、これらを区別する必要上、講堂や僧坊などの僧の空間を「僧地」、僧侶が宗教活動を行うための補助空間として付属院地を「属地」と便宜的に区別してみたい。こうした基本的な空間構成の中に多様な在地寺院の実態をあてはめてみたい。まず仏堂を中心とした仏地と伽藍地について触れた上で、その周辺遺構のあり方を整理してみたい。

### 1 国分寺・初期寺院の仏堂・仏地・伽藍地

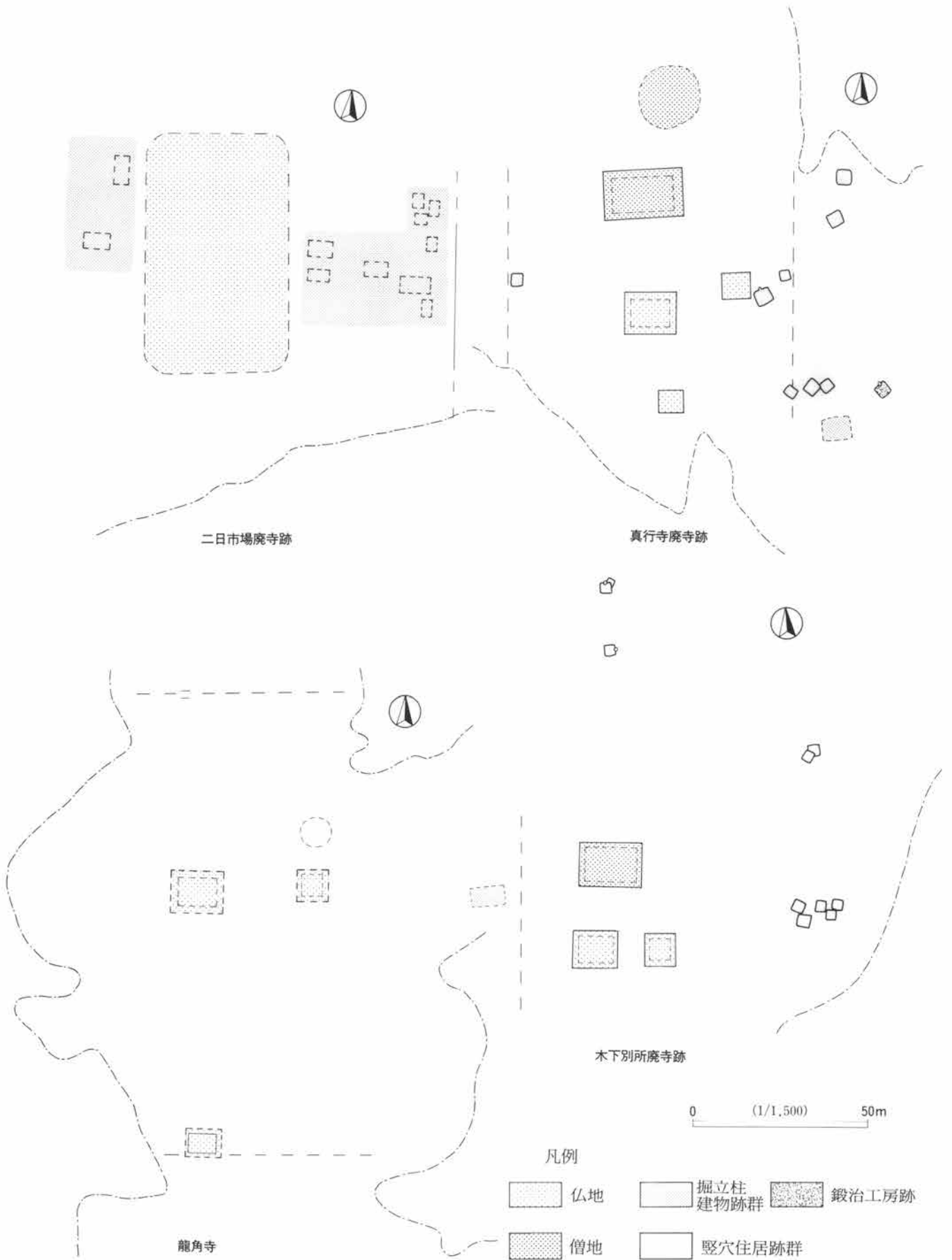
上総国分寺では塔を囲み、金堂・中門へと取り付く回廊からなる金堂院と、講堂などの僧地を合わせた伽藍地を区画する築地・塀と南大門・西門が確認されている。上総国分尼寺跡では金堂に取り付く回廊と中門からなる金堂院と、その北方の講堂・経楼・鐘楼・尼坊等を合わせた伽藍地を囲む築地と東門と西門が確認されている。このように上総国分寺と尼寺跡では基壇建物等によって整備された、自己完結した空間としての金堂院と伽藍地のあり方が窺える。

下総国分尼寺跡では溝と塀跡で区画された金堂と講堂と、掘立柱の中門と南大門が確認されている。そしてその北方でも溝で区画された掘立柱の尼坊が確認されている。区画された伽藍地のあり方が窺える。下総国分寺では金堂と塔、講堂と、その北方から掘立柱の僧坊が発見されている。僧坊を区画する溝と塀跡が確認され、尼寺跡同様区画された伽藍地と想定されている。このように発掘調査が進んでいる上総と下総の国分寺では基壇建物跡等で整備された仏堂と、自己完結した伽藍地のあり方が窺える。なお、安房

III 各 論



第133図 仏堂・付属施設模式図1



第134図 仏堂・付属施設模式図2

国分寺は基壇建物跡の金堂が確認されているが、他の建物跡や区画施設等は確認されていない。

下総国の初期寺院では、結城廃寺跡の発掘調査が進んでおり、伽藍地等の全体的な様子が窺える。結城廃寺跡では金堂と塔を囲んで、中門と講堂に取り付く回廊が確認されている。その北方では基壇建物跡の僧坊と掘立柱建物跡2棟と竪穴住居跡1軒が発見された。そしてこれらを大きく区画する大溝が確認された。この大溝は現段階では寺域区画溝と捉えられ、伽藍地の区画との関係は不明である。大溝周辺から大溝外にかけて竪穴住居跡が多く発見されたのに対して、伽藍近辺では僧坊北方の平安時代後期の1軒のほかは竪穴住居跡は発見されておらず、基壇建物跡等で整備された伽藍地は建物構成の上で周辺と区分されている。このほか、龍角寺で金堂と塔の基壇建物跡が、木下別所廃寺跡で金堂と塔と講堂に比定される基壇建物跡が確認された。木下別所廃寺跡では、伽藍から外れた北・東・西のトレンチで竪穴住居跡や掘立柱跡が確認された。また、龍角寺では金堂の南約65mに礎石建物跡の門跡があり、南大門の可能性が指摘されている。また、塔北方からは瓦塔や瓦とともに掘立柱建物跡が発見された。これら南大門から塔北方建物跡を含めた伽藍地からは竪穴住居跡等は発見されていない。

上総国の九十九坊廃寺跡では塔と講堂の基壇建物跡と、講堂の西側から複数の掘立柱建物跡がまとまって確認された。講堂や塔の軸線とほぼ同一で、位置関係から伽藍を構成する仏堂等の可能性が高い。真行寺廃寺跡では金堂と講堂の基壇建物跡と、金堂の南で掘立柱建物跡が発見されている。報告書では2棟の掘立柱建物跡に復原されているが、1棟の掘立柱建物跡への復原の可能性も指摘されている。金堂のほぼ南に位置し、1棟の掘立柱建物跡の復原では中央の柱間が東西の柱間よりも広い点から、中門に想定することも可能である。また、金堂の北東から三間四面の掘立柱建物跡が、講堂北側から掘立柱跡が確認された。このように、南北基壇周辺から掘立柱建物跡がやや集中して確認され、中門や僧坊等と想定される。それに対して、伽藍地から外れると奈良・平安時代の竪穴住居跡が多く確認された。

これまでに初期寺院では国分寺で見られた伽藍地の区画施設は明確に発見されていない。ただし、伽藍地内は基壇建物などによって構成され、広い空間に周辺と一線を画した占地が窺える。また、伽藍地の区画施設の可能性がある遺構も複数検出されている。龍角寺の伽藍北方から部分的に東西溝が確認された。この付近は台地のくびれ部分に当たっている。なお、南大門付近も東西から谷津が深く入りこむ台地のくびれ部分に当たっている。龍角寺では地形を生かした伽藍地の占地の可能性がある。木下別所廃寺跡では講堂の西約9mと15m付近で南北溝が2条発見された。時期を決定する遺物がなく、寺院跡に伴うか不明とされている。ただし、溝の西側から掘立柱跡が発見され、伽藍と掘立柱建物跡群を区分した施設の可能性も考えられる。真行寺廃寺跡では中門の東約32m地点で南北溝1条が、また金堂の西約33m地点では南北方向の掘立柱列が確認された。掘立柱列は複数の時期の重複が認められ、先行する柱列は座標北から3度西に偏し、時期が新しい柱列が同じく7度西に偏している。これらは金堂基壇が同じく2度ないし3度西に偏し、講堂基壇が6度西に傾く傾向とほぼ共通しており、寺院関連施設と捉えられている<sup>4)</sup>。これらは伽藍地の区画施設の可能性がある。断片的ではあるがこうした伽藍区画施設と周辺から区別された建物構成と区分された建物配置から、国分寺同様にこれら初期寺院の伽藍地も自己完結した空間として機能していた可能性が高い。

## 2 その他の寺院の仏堂・仏地

次に国分寺と初期寺院以外の寺院の仏堂・仏地について検討してみたい。上総国分寺創建期瓦等を出土する小食土廃寺跡では基壇建物跡の金堂の四囲から溝が発見された。この溝内からはこのほかに、東側から掘立柱跡が2基まとまって検出された。山田台廃寺跡の幢竿支柱跡のあり方と類似している。なお、溝の外側の東と北から溝に沿った掘立柱建物跡が、西から竪穴住居跡が発見された。この溝は仏堂を区画する施設であり、仏地は自己完結した空間と捉えられる。

大塚前遺跡では下総国分寺系瓦を葺棟に葺いたと想定される三間四面の掘立柱の仏堂が発見された。このほか、方二間の総柱構造の掘立柱建物跡1棟と竪穴住居跡1棟が並立して発見されたが、竈を備えた竪穴住居跡は仏堂から離れている。また、仏堂は掘立柱建物跡ながら、建物規模と構造から周辺建物と区別されている。

この大塚前遺跡と類似した遺跡に針ヶ谷遺跡がある。標高130mの丘陵頂部に南北に三間四面の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、側柱建物跡4棟がほぼ並立して発見された。明確な仏具の出土は不明ながら、一般集落と異なる立地や建物構成と配置、大塚前遺跡との類似性から寺院跡の可能性が高い。西に面した三間四面建物跡が仏堂で、その前面の空閑が前庭として機能したと考えられる。仏堂が他の建物跡から離れ、周辺と区分されている。

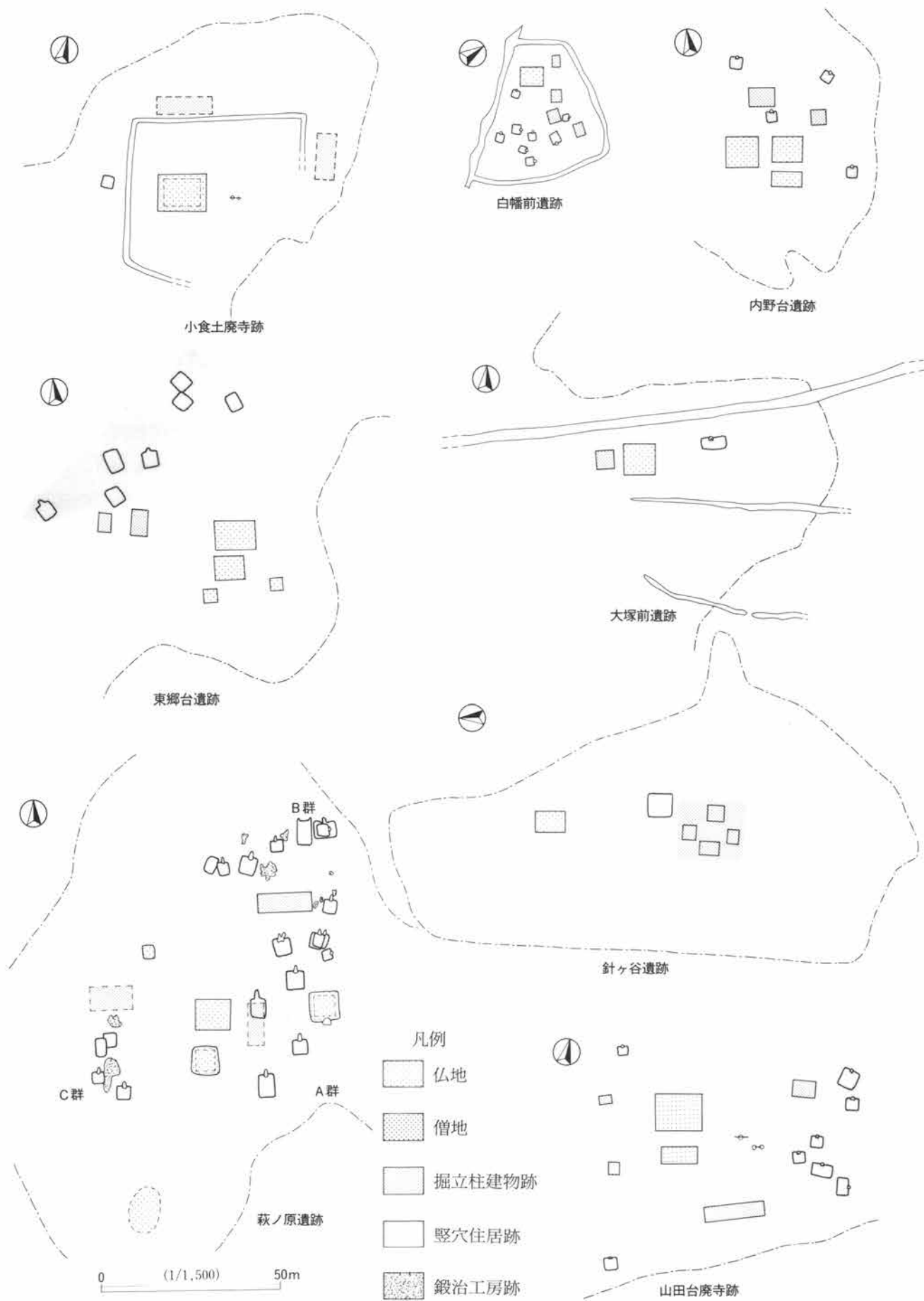
東郷台遺跡では台地南端から仏堂が発見された。仏堂は四間四面の掘立柱建物跡で、後で坪地業の礎石建物跡に、さらにその後四間片庇の坪地業の礎石建物跡に建て替えられている。なお、この南には方二間の掘立柱建物跡2棟が東西に並立している。仏堂を中心としたこれら建物群は、北方の竪穴住居跡群等から離れており、仏地が周辺と区分されている。

山田台廃寺では四間四面と四間×二間の掘立柱建物跡からなる双堂形式の仏堂が発見された。四間四面建物跡は後に身舎部分が坪地業の礎石建物跡に建て替えられている。この仏堂の東約10mと約15m離れて幢竿支柱跡と想定されるピット群が2箇所発見された。そして、これらを取りまくように掘立柱建物跡と竪穴住居跡が発見された。密集した建物跡群の中であって、仏堂から幢竿支柱跡にかけてやや広い空間が認められる。

萩ノ原遺跡では基壇建物跡2基と二間四面の掘立柱建物跡の仏堂、そして簡易な瓦塔基壇跡が遺跡の南側から3か所にまとまって発見された。基壇建物跡2基は同規模で一間四面の建物跡に復原されている。これら仏堂が併存したものか、時期変遷があるものか不明である。二間四面堂・2号基壇と1号基壇の間に、1軒の建替えと捉えられる竪穴住居跡が認められるものの、その他の竪穴住居跡は仏堂の北側と西側にまとまっており、仏堂と竪穴住居跡の配置に区分の傾向が認められる。

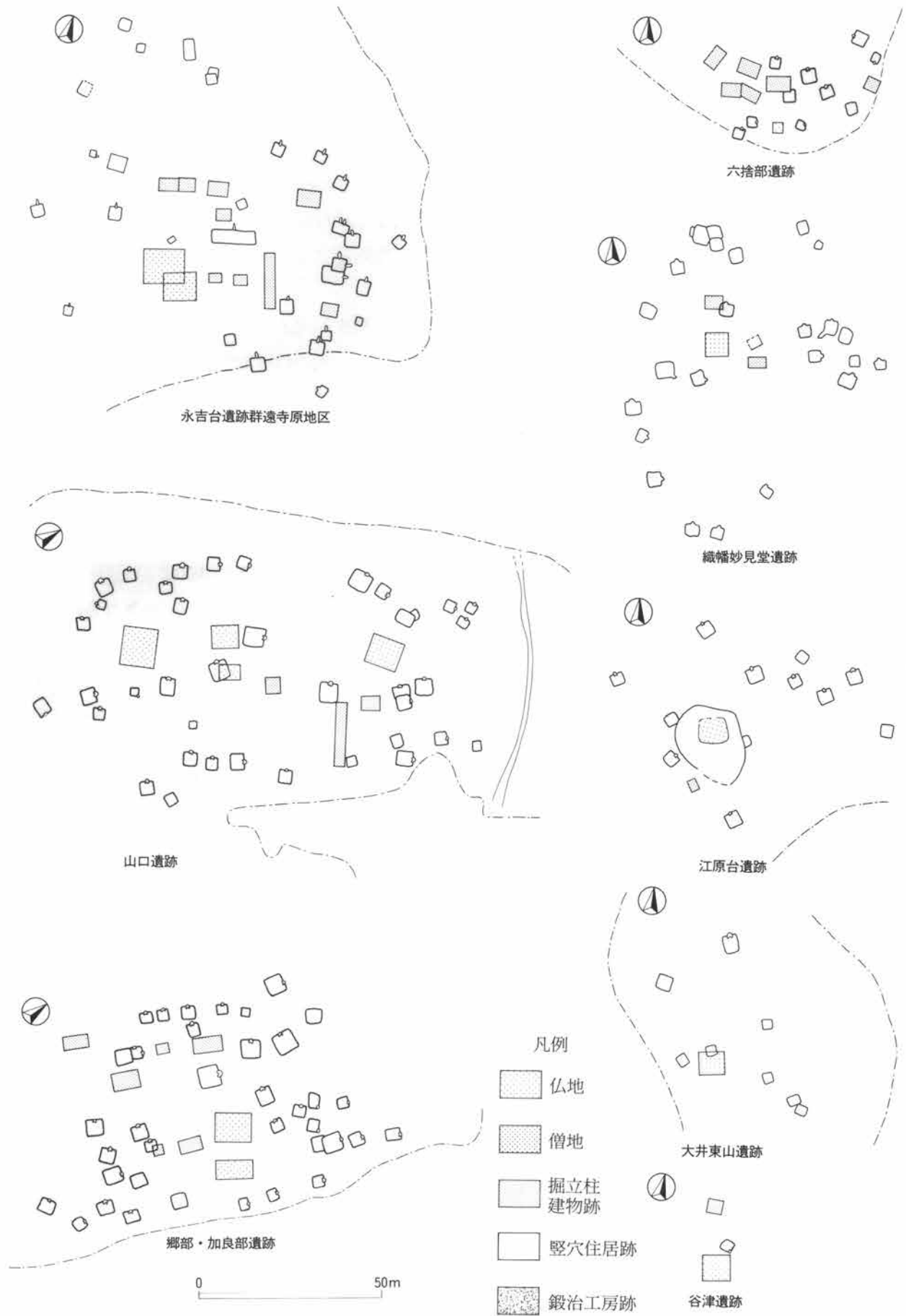
内野台遺跡では、仏堂と考えられる四間四面南孫庇の掘立柱建物跡と四間×三間北庇と四間×二間の掘立柱からなる双堂が発見された。両仏堂は北側の柱筋をほぼ揃え、軒先を接する建物跡と想定される。これらの東と北からやや散在ぎみに竪穴住居跡と掘立柱建物跡が発見されているが、これらと仏堂との間には配置上の区分が認められる。

永吉台遺跡群遠寺原地区では台地の東西に建物跡群が分布しているが、東側の建物群から仏堂が発見された。三間四面の掘立柱建物跡で、建替えが1度確認できる。密集した東側建物群の中であって、仏堂はやや広い空間に占地している。仏堂と重複ないし近接する32号・47号竪穴住居跡は9世紀末以降の寺院衰



第135図 仏堂・付属施設模式図3





第136図 仏堂・付属施設模式図4

退期以降のものである。

郷部遺跡では台地の北西と南東に建物跡群が分布するが、その南東建物群の中心から二つの掘立柱建物跡群が発見された。そのうちの南西の掘立柱群から双堂形式の仏堂が発見された。密集した掘立柱群の中であって、仏堂周辺はやや広い空間が認められる。

山口遺跡では集中する建物群の中心から掘立柱建物跡群が、周辺から竪穴住居跡群が発見された。なお、掘立柱群中の011号・024号竪穴住居跡は8世紀後半で、寺院整備期以前のもものと捉えられる。この掘立柱群から三間四面の仏堂と、双堂形式の仏堂と、五間二面の仏堂が並立して発見された。竪穴住居跡群と仏堂を中心とした掘立柱建物群には配置上の区分がある。

以上、小食土廃寺跡では仏堂周辺から区画施設が発見され、仏堂が周辺から区分され、仏地が自己完結した空間と認められた。また、仏堂周辺に区画施設が認められない多くの事例でも、建物構成の配置上、仏堂が周辺から区分され、また建物構造と規模の上で仏堂が周辺建物と区別されていた点が窺えた。

なお、国分寺と初期寺院以外のこれらの寺院では、桁行二間～四間の四面庇建物跡や一間四面建物跡、双堂など多様な構造の仏堂が認められた。最も多く認められる桁行三間～四間の四面庇建物跡は寺院建築として伝わったもので、この時期の寺院の金堂等の一般的な構造である<sup>5)</sup>。一間四面堂は奈良時代から平安時代初期のものは現存せず、文献上の存在もほとんど確認されていない。ただし、この時期の記録は官の大寺にほぼ限定する事情によるもので、平安中期以降になると文献上多くの存在が確認され、一般的な仏堂である。構造的にも母屋と庇の構成をとる仏堂建築の中で最も基本的な構造であり、小さな寺院で一早く取り入れられた仏堂と捉えられる<sup>6)</sup>。また、二つの建築を前後に並べる双堂は、小さな寺院や大寺院の付属建築では奈良時代前期からその存在が確認され、平安初期以降、大寺院の中心建築にも多く見られる建築形式である<sup>7)</sup>。ただし、建築上は正堂と礼堂が別棟のものと、正堂の屋根を前へ葺き下ろした前庇を礼堂とした一体のものがある<sup>8)</sup>。山田台廃寺跡については正堂の前面に雨落ち溝もしくは区画溝が認められない点から、笹生衛氏は正堂と礼堂が1棟の建物に近い構造と捉えている<sup>9)</sup>。ただし、山口遺跡の事例では正堂と礼堂の間隔がやや広く、間口が合わない点から、別棟の建物跡と想定すべきであろう。このように仏堂と捉えてきた遺構は、建築史上において同時期の仏堂の一般的な構造である。

### 3 国分寺・初期寺院の伽藍地周辺の規則的な建物群

次に伽藍地周辺の建物群と、寺院地の区画施設について検討してみたい。

上総国分寺では溝で区画された南北490m、東西約325m、変形した二つの長方形が重なった形をした寺院地が明らかになっている。寺院地内の伽藍北方は溝で3ブロックに分けられている。中央ブロックでは官衙的配置の掘立柱建物跡が発見された。ここからは墨書土器「東院」が多数出土し、官衙的配置から「政所院」と想定されている。西側ブロックからは墨書土器「厨」が出土し、その南の僧坊等との位置関係等から「厨院」と想定されている。東側ブロックからは大型の銅溶解炉が発見され、「修理院」と想定されている。

上総国分尼寺跡では溝で区画された南北約372m、東西約285mの長方形を呈した寺院地が明らかになっている。寺院地の北東部分からコの字形配置の掘立柱建物跡が発見され、僧寺の「東院」同様に「政所院」と想定されている。また、この建物群の東側からは鍛冶遺構や鋳銅遺構とともに竪穴住居跡が多く検出さ

れ、「修理院」と想定されている。このほか、寺院地の北西部分や南西部分からは建物跡が確認されず、「菌院」や「花苑院」として使われたと想定されている。

下総国分寺でも北辺211m以上、西辺201m以上の寺域溝が確認されている。寺院地内の北西部分で竪穴住居跡と鍛冶工房跡や墨書土器「造」などが発見され、営繕施設や下働きの人々が住んでいた区域と想定されている。また、伽藍地の北方では掘立柱建物跡が7棟集中して発見され、出土した「講院」の墨書土器から講院の可能性が指摘されている。

下総国分尼寺跡でも北辺324m以上、東辺303m、南辺53m以上の寺域溝が確認されている。寺院地内の北西で鍛冶遺物が竪穴住居跡から発見され、僧寺同様に営繕施設の存在が推測されている。また、その南から発見された掘立柱建物跡5棟は倉庫機能を有した屋と想定されている。

このように国分寺からは寺院地を区画する溝と、寺院地内から特徴のある建物跡群、特定の機能を示す墨書土器などが出土し、区画された寺院地内は機能ごとに付属施設が分立していたと想定されている。特に上総国分寺では建物群を区画する溝が発見され、それぞれが「院」等として独立していたと想定されている。なお、上総国分寺の東側では荒久遺跡が、上総国分尼寺跡の北側では坊作遺跡が、下総国分寺と尼寺跡の北側では国分遺跡が、寺院地にほぼ接して発見されている。これらの遺跡からは仏教遺物や国分寺の機構を示す墨書土器なども多く発見されており、国分寺の機能を支えた寺辺の集落と想定されている。

次に初期寺院の伽藍周辺について検討してみたい。結城廃寺跡では溝による区画が伽藍の東・南・西で発見され、東西170m、南北260m以上の古代の寺院区画が確認されている。この区画内からは伽藍地の建物跡群のほかに、南東部から竪穴住居跡群などが発見された。なお、区画外の北東からも竪穴住居跡とともに掘立柱建物跡が発見され、区画外に寺院地が広がる可能性もある。なお、「東院」の墨書土器も出土している。

九十九坊廃寺跡の伽藍北側では2か所で掘立柱跡が発見されたが、竪穴住居跡等は発見されていない。一方、伽藍の西側で南北溝が1条確認され、その西側から掘立柱群と竪穴住居跡群が発見された<sup>10)</sup>。北に掘立柱群が、南に鍛冶工房跡を含む竪穴住居跡群がまとまり、それぞれ複数の建替えが認められる。掘立柱建物跡群は中央に南北棟が東西約3列、南北約2列配置され、北側に総柱構造と方三間と東西棟の一群が認められる。さらに南西と南東にやや離れた小規模な南北棟群が認められる。このように掘立柱建物跡群も複数のブロックが認められ、異なる性格の建物跡で構成されている。僧名と考えられる「弘安」の墨書土器も出土しており、寺院地内の付属施設の可能性が高い。

二日市場廃寺跡では大量で多種の瓦や朱付き瓦や香炉蓋形土器が出土し、未発掘の瓦分布の中心部分が伽藍地と想定される。遺構としては瓦分布範囲のほぼ東限と西限でそれぞれ南北溝が発見された。東溝の西側では掘立柱群が発見されたのに対して、東溝の東側では建物跡等は発見されていない。この東溝が寺院地の東を区画する施設の可能性がある。掘立柱建物群は東西棟が南北に2列認められ、これらは想定伽藍地の東側に隣接し、東溝に規制されている。総柱構造の掘立柱建物跡が含まれ、さらに掘立柱群は北側に続く状況で、九十九坊廃寺跡伽藍西側の建物群と類似している。

真行寺廃寺跡では寺院地の区画は不明であるが、中門より南は緩斜面であり、北側には谷津が入り込み、地形上、寺域の限界が認められる。伽藍の東溝の東側では鍛冶工房跡を含む竪穴住居跡群と多くの仏具と掘立柱跡が見つかっており、九十九坊廃寺跡伽藍西側の建物群と類似している。

木下別所廃寺跡の伽藍西側でも掘立柱跡が、伽藍北側と東側からは竪穴住居跡群と転用硯や畿内産土師

器などが発見された。伽藍の南からは竪穴住居跡が発見されず、伽藍の他の三辺から建物構成が異なる建物跡が発見された。

龍角寺は南大門と伽藍北側の東西溝の位置関係から、台地のくびれ部分を利用した伽藍地の占拠が想像される。なお、南大門より南の台地では多くの竪穴住居跡が発見されているが、特徴的な建物跡などは未確認で、古墳時代後半から続く一般集落の様相が強い<sup>11)</sup>。伽藍の西側は緩斜面で、東側は狭い台地端部である。一方伽藍北側は、東西150m、南北200mほどのやや広い台地が広がっており、この西側斜面に龍角寺所用瓦を焼成した龍角寺瓦窯跡群と五斗蒔瓦窯跡が発見されている。また、この台地の北側には東から入り込む谷津を挟んで天福遺跡が位置している<sup>12)</sup>。天福遺跡も龍角寺との関連が窺えるものの一般集落の様相がある。伽藍北方の台地上は未調査ながら、瓦工房跡とともに寺院付属施設が存在した可能性が高い。

以上、初期寺院の伽藍地周辺でも、特徴的な建物群や遺構の内容を分ける区画溝などが複数認められた。断片的ではあるが、伽藍地周辺に溝などによる区画施設や地形的境界が存在し、寺院地ないし寺院地内の区画の存在が想定される。また、伽藍周辺に特徴的な建物群が存在し、寺院の付属施設としての機能が窺える。ただ、九十九坊廃寺跡の伽藍西側等では複数の建物群が集中した状況が窺え、国分寺で見られた機能分化した建物跡群が独立しているあり方とは様相を異にしている。

#### 4 その他の寺院の仏堂周辺の規則的な建物群

次に国分寺と初期寺院以外の寺院について仏堂周辺の規則的な建物群について検討してみたい。

小食土廃寺跡では仏堂を区画する溝の東側と北側から掘立柱建物跡が、西側からは竪穴住居跡が仏具とともに発見された。それぞれ溝に沿っており、建物構成による配置の規則性も認められる。このほか、北側の掘立柱建物跡付近からは、製鉄関連の遺構も発見されている。これらは三方を谷津に囲まれた60m～70m四方の狭い台地上にあり、広い台地との接続部分からは遺構が未発見で、寺院地として完結している。

白幡前遺跡からは四囲を溝で区画された遺構群が発見された。約35m四方の小規模な区画で、北西の三間四面の仏堂、北側の掘立柱建物跡群9棟及び南側の竪穴住居跡群9軒で区画内は構成されている。仏堂前面には空地があり、前庭として機能したことが窺える。区画内の建物跡には大きく3つの軸線があるが、これは三辺の溝に規制されたものである。建物構成による配置の規則性が窺え、掘立柱建物跡には仏堂と柱筋を揃えるものもある。複数発見された瓦塔は区画内の北側から発見され、掘立柱建物跡の中に瓦塔を納めた建物があったと想定される。また、鉄鉢形土器や浄瓶などの仏具も竪穴住居跡から発見されており、これらも仏堂に伴う施設と考えられる。なお、区画外からも広範囲に仏具は出土しているが、区画施設との間に規則性は認められず、遺跡全体でのあり方と差異はない。小規模ではあるが区画施設内が寺院地として機能し、周辺遺構は寺院と深く関わった寺辺の集落と位置づけられる。

このように寺院地が明確な事例において、仏堂が周辺から区分された小食土廃寺跡と、仏堂と付属施設が一つの区画に配置された白幡前遺跡の二つのあり方が認められた。後者も区画内の建物構成による配置の区分が認められる。これらは、寺院地内で仏堂、掘立柱建物跡及び竪穴住居跡がセットとして機能しており、こうしたあり方は周辺遺跡から独立した大塚前遺跡や針ヶ谷遺跡等でも認められる。大塚前遺跡では仏堂の東西から、並立する方二間の総柱構造の掘立柱建物跡1棟と竪穴住居跡1棟が発見された。掘立柱建物跡は僧坊ないし倉庫の機能が、東の竪穴住居跡は厨としての機能が想定される。針ヶ谷遺跡では西

面する仏堂の南側から竪穴住居跡1軒、側柱建物跡4棟がほぼ並立して発見された。また、内野台遺跡では仏堂群の東と北から竪穴住居跡4軒、側柱建物跡1棟、総柱建物跡1棟が発見された。東郷台遺跡では仏堂の北側から竪穴住居跡8棟と掘立柱建物跡2棟が発見された。掘立柱建物跡に接して集中して営まれた竪穴住居跡は8世紀第4四半期から9世紀後半に営まれ、仏教関係遺物が当初から認められる。掘立柱建物跡2棟も柱筋を揃え、仏堂の軸線と同一で、仏堂との規則的な配置が窺える。これらの事例は、仏堂とその周辺の規則的な配置の建物群が完結している遺構群であり、寺院地内の仏堂と付属施設のあり方が明確である。こうしたあり方は、周辺遺構に囲まれた他の事例でも認めることが可能である。

山田台廃寺跡では仏堂周辺から掘立柱建物跡6棟と竪穴住居跡11棟がまとまって発見された。仏堂の西側は小規模な掘立柱建物跡が、南は七間×二間の掘立柱建物跡が、東側は竪穴住居跡が特徴的に分布している。掘立柱建物跡などの軸線も仏堂や幢竿支柱跡とほぼ同一であり、柱筋も概ね揃えており、規則的な配置が窺える。

萩ノ原遺跡では仏堂群の北と西などから竪穴住居跡22棟と掘立柱跡群3か所が発見された。竪穴住居跡群は8世紀第4四半期から9世紀後半にかけて営まれ、各時期の各竪穴住居跡から多くの仏教関連遺物が出土した。掘立柱の建物復原が不十分なものの、竪穴住居跡を含めた大半の建物跡が仏堂と軸線をほぼ揃えている。竪穴住居跡群は笹生衛氏により仏堂と第1号柱穴に囲まれた南東のA群、第1号柱穴列の北側のB群、仏堂西側のC群に分けられている<sup>13)</sup>。A群が創建当初から連綿と続く一群であるのに対して、B群とC群は9世紀半ば以降に成立し、多くの鍛冶遺構を伴う。これら様相を異にする竪穴住居跡群が、仏堂や五間×三間に復原される第1号柱穴列を基準に配置されている。

こうした仏堂、掘立柱建物跡及び竪穴住居跡のあり方は、大きな集落遺跡内で発見された区画施設を有しない仏堂周辺の建物群にも認めることができる。永吉台遺跡群遠寺原地区は8世紀第3四半期に成立し、10世紀第4四半期まで続く。仏教関連遺物は8世紀第4四半期から9世紀第1四半期の間認められる。仏堂の北側には軸線を揃え、ほぼ並立する二間×三間の掘立柱建物跡が、仏堂の東側でも軸線や柱筋を揃えた規則的な配置の掘立柱建物跡群が発見された。この東側の掘立柱建物跡群には八間×一間の特徴的な建物跡が認められる。さらにその東側には、仏堂とは別の軸線に揃えた竪穴住居跡を中心とした建物跡群が認められる。この東側の竪穴住居跡群からは多くの仏教関連遺物が出土している。なお、仏堂からやや離れた台地西側の竪穴住居跡群からも多くの仏教関連遺物が出土しているが、建物配置の上で散在しており、仏堂東側の竪穴住居跡群のように規則的な配置が認められず、両者に大きな違いが認められる。仏堂東側の竪穴住居跡群は、台地東側の端部の地形的境界に軸線を揃え、仏堂の東側にまとまった規則的な配置が窺え、仏教関連遺物も多く出土しており、仏堂周辺の掘立柱建物跡群とともに寺院の付属施設の可能性が高い。

郷部遺跡では8世紀第2四半期に集落が成立し、9世紀第3四半期まで続く。仏教関連遺物は8世紀第4四半期から9世紀第2四半期にかけて認められる。仏堂の南西に掘立柱建物跡2軒が柱筋を揃えて配置され、西にやや離れて4棟の掘立柱建物跡が発見されている。後者の掘立柱建物跡群もほぼ軸線を揃えており、うち2棟は建替えが認められる。なお、これら掘立柱建物跡群中の044号竪穴住居跡は8世紀第2四半期で、寺院整備以前の遺構である。仏堂周辺にはこのような規則的な掘立柱建物跡群が存在し、竪穴住居跡はこれを縁取るように配置されている。竪穴住居跡からは仏教関連遺物も出土しており、これら台地南西側に集中する建物群が寺院として機能した可能性がある。なお台地北側の建物群からは仏教関係遺物

の出土は認められず、台地南西側の寺院と想定される建物群とは異なる建物構成である。

山口遺跡では8世紀第2四半期に集落が成立し、9世紀第4四半期まで続く。仏教関係の墨書土器は8世紀第4四半期から9世紀第2四半期にかけて認められる。仏堂は掘立柱建物跡群の西側に広く展開し、他の掘立柱建物跡がこれらに近接し、これらを縁取るように竪穴住居跡群が分布している。これら竪穴住居跡の多くから仏教関連遺物が出土している。仏堂周辺に建物構成による配置の区分が認められる。

このように仏堂周辺に区画施設が確認されていない事例も、周辺に規則的な掘立柱建物跡群と仏教関連遺物を出土する竪穴住居跡群のまとまりが確認できる。こうしたあり方は、国分寺や初期寺院で認められた仏地ないし伽藍地周辺の特徴的な建物群のあり方と類似している。また、仏堂周辺の規則的な建物群についても、建物構成を異にした複数のものが認められ、性格を異にした建物群の可能性が高く、これが僧地と属地の違いを示す可能性もある。白幡前遺跡では仏堂の北東に掘立柱を中心とした建物跡群が、南東に竪穴住居跡群が配置され、異なる機能が想定される。北東の掘立柱建物跡群に近接した竪穴住居跡の覆土中から瓦塔や鉄鉢形土器、浄瓶が出土している点から、北側の掘立柱を中心とした建物跡群が僧坊や仏具を管理し、僧地として機能し、南東の竪穴住居跡群が属地として機能したと推測される。永吉台遺跡群遠寺原地区では仏堂と軸線を揃えた仏堂北と東の掘立柱建物跡群が僧地として機能し、その掘立柱建物跡群の東に別の軸線で揃えた竪穴住居跡を中心とした建物跡群が属地として機能したと推測される。こうした掘立柱を中心とした建物跡群が僧坊ないし仏具の管理施設などの僧地として機能し、竪穴住居跡を中心とした建物跡群が属地として機能したと推測される遺跡としては、ほかに大塚前遺跡や内野台遺跡、山田台廃寺、郷部遺跡などを挙げることが可能である。ただし、内野台遺跡や東郷台遺跡などでは特に全体の中で両建物跡群が接しており、僧地と属地が一体として機能したと推測される。国分寺や初期寺院では伽藍地内もしくは仏地に隣接して僧地があり、周辺の属地とは区画施設ないし建物配置等の上で明確な区分が認められた。それに対して、その他の寺院の僧地と属地は、建物構成と配置上区別があるものと、ないものの2種がある。僧地と属地との関わりは寺院運営を考える上で注目される。こうしたあり方の違いは寺院の規模や性格に関わると考えられる。

## 5 寺院施設の成立過程と寺院組織

このように国分寺や初期寺院など区画施設が認められる事例だけでなく、これまで集落遺跡内の仏堂と捉えられていた事例も、小食土廃寺跡や白幡前遺跡など区画施設が認められる事例と共通性があり、仏堂とその周辺に集中する規則的な配置の建物群が寺院として機能したと捉えられた。そこで、次に初期寺院の付属施設についてその成立時期と運営部門に触れ、あわせて小規模な寺院の付属施設と比較検討してみたい。

九十九坊廃寺跡の伽藍の創建は、創建期の重圈文縁単弁四葉蓮華文軒丸瓦の年代観から7世紀第4四半期から8世紀第1四半期にかけての時期と考えられる。一方、伽藍西側の建物群は8世紀後半に成立し、10世紀前半まで続く。伽藍の西側では寺院創建段階の遺構は発見されていない。これは伽藍内の堂塔の整備との関連で考えると興味深い。講堂基壇の版築中から複数の瓦敷面が確認され、講堂基壇に先行する瓦葺き建物跡の存在が想定され、金堂ないし塔の成立後に講堂が整備されたと考えられる。出土瓦も創建期から8世紀中葉にかけての4段階の瓦群の存在が明らかにされている<sup>14)</sup>。創建期の瓦が全体の6割を越え、

それ以降の瓦群は補修瓦と位置づけられている。ただし各堂塔の瓦の使用状況が不明な現段階では、後続の堂塔の整備に伴う瓦の追加生産の可能性もある。こうした瓦生産の時期と、瓦葺建物跡が見られない伽藍西側の建物群の成立時期に連続性がやや認められる点が注目される。伽藍北方と推測される僧坊等の施設が不明であるが、伽藍の整備から運営部門を含めた付属施設の整備へという寺院全体の成立過程を示す可能性がある。

こうした伽藍と周辺建物群の成立時期との差異は、断片的ではあるが他の事例でも認められる。二日市場廃寺跡の伽藍の創建は、遺構は未発見ながら、創建瓦の雷文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦等の年代観から7世紀第4四半期と考えられる。一方、想定伽藍東側の掘立柱建物跡の多くの柱穴からは根固めとしての瓦が多く出土し、これらの大半が創建段階から遅れる可能性が指摘され、さらに根固め瓦の中に8世紀中葉の補修瓦も認められる点から、この建物群は9世紀から10世紀後半を中心とした時期と想定されている<sup>15)</sup>。

また、真行寺廃寺跡の伽藍の創建は、創建瓦の雷文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦の年代観から7世紀第4四半期から8世紀第1四半期にかけての時期で、これは金堂に伴うものと考えられる。なお、講堂は基壇構築方法が特徴的で、上総国分寺跡との共通性が認められることから、国分寺創建段階まで降ると考えられている<sup>16)</sup>。これは国分寺系瓦が多く出土している点からも容易に推測される。そして、伽藍西側の掘立柱列が金堂と軸線を揃えるものから、講堂に軸線を揃えるものへ建替えが認められ、伽藍区画施設が創建段階と講堂成立段階の2段階の整備が認められる。一方、伽藍東側の建物群については、そのうちの鍛冶工房は8世紀後半ないし末から9世紀初頭にかけての操業と位置づけられている<sup>17)</sup>。また、8世紀後半から10世紀初頭にかけての仏具が多く認められ、東側建物群も8世紀後半以降に整備が進んだ可能性がある。

このように伽藍の整備に遅れて、付属施設が整備されたと考えられる事例がある。この点について山背の初期寺院の北野廃寺跡や北白川廃寺跡などで、寺院地の成立や付属施設の整備が伽藍地の造営に対して遅れる点を網伸也氏が指摘されており<sup>18)</sup>、初期寺院の成立過程の一つのあり方と考えられる。また、初期寺院ばかりでなく、国分寺創建期瓦を出土する千草山遺跡でも伽藍と付属施設の成立時期に差が存在した可能性がある。基壇建物跡の北方で確認された区画溝や掘立柱建物跡、竪穴住居跡は9世紀以降の遺構群と捉えられ、国分寺創建期よりも降る時期の遺構である。区画施設や北方建物跡を「岡館」との関連で捉える指摘もあり<sup>19)</sup>、寺院としての全体像も不明であるが、現段階では伽藍に対して付属施設の整備が遅れた事例の可能性もある。

こうした付属施設の中で特に政所院や政所屋の成立は寺院の組織に関わる問題である。寺院組織を窺わせる資料として、国分寺レベルの「講院」等を除くと、上総国分寺に隣接する下アラク遺跡出土の墨書土器「綱所」や多田日向遺跡出土の墨書土器「三綱寺」がある。多田日向遺跡は一間四面の仏堂を中心に、規則的に配置された掘立柱建物跡群と竪穴住居跡群が発見され、これらが寺院として機能したと考えられる遺跡である。この遺跡からはほかに墨書土器「観音寺」など複数の寺名の墨書土器が出土している。これらがすべて多田日向遺跡の寺院の名前を指すものか、関係がある別の寺院の名前を含むものかは不明である。ただし、多田日向遺跡からは僧坊もしくは礼堂として機能したと考えられる八間×二間の掘立柱建物跡のほかに、仏堂の西と北に2つの掘立柱建物跡群が認められ、僧地とは別に運営施設の存在を想定することが可能な遺跡である。こうした三綱に関わる墨書土器が出土した点は注目される。三綱制は中国に淵源があり、当時の東アジアにおける仏教教団固有の寺職である。奈良時代から平安時代にかけて三綱による寺院運営がなされたと捉えられているが<sup>20)</sup>、地方寺院での具体的な実態は不明に近い。すべての寺院で

上座と寺主、都維那からなる三綱が寺院運営に当たったかは疑問であるが、上総国分寺の政所院に見られる官衙的な配置の建物群の存在は、こうした三綱をはじめとした寺院組織の存在を窺わせるものである。日本の三綱などの寺院組織については、官司的性格が指摘されており、こうした組織の性格が建物配置の上でも示されていると考えられる。初期寺院の九十九坊廃寺跡の伽藍西側の建物群でも、北から中央にかけてL字形や縦列形の官衙的な配置を読みとることが可能である。これらは、寺院運営施設を含む可能性も高い。その他の寺院でも、仏堂周辺に規則的な配置の複数の並立する掘立柱建物跡群が認められる小食土廃寺跡や、永吉台遺跡群遠寺原地区、山口遺跡、郷部・加良部遺跡では、僧坊とは別に寺院運営施設を備えた付属施設を有した可能性が考えられる。一方で、仏堂周辺に複数の規則的な配置の建物群が認められる事例であっても、厨や下働きの人々が暮らした竪穴住居跡で属地が主に構成された多くの事例では、宗教施設としての寺院機能の完結性は窺えるものの、自立的な組織としての寺院運営は不完全なものと推測される。初期寺院における伽藍に対する運営施設を含めた付属施設の整備が遅れたあり方を参考にするならば、これは寺院の整備過程を示すものかもしれないが、この時期における多くの小規模な寺院のあり方と考えられる。

では、こうした自立的な運営施設が整備される以前の寺院や、自立的な運営施設を有しない寺院の運営・経営はどのようになされたのであろうか。大寺院との関係や、有力な檀越との関係が想像される。初期寺院については、隣接する大規模な古墳群の造営者や国造・郡司層との関係がこれまで多く指摘されている。また、国分寺造営期以降の寺院跡については中小の有力豪族層や国分寺・初期寺院等との関係が指摘されている。こうした点をふまれば、初期寺院にみられる寺院運営施設の成立過程は、有力な檀越である郡司層等の家政機関から徐々に自立していく過程と考えられる。また、自立的な運営施設が認められない小規模の寺院については、寺院の運営や経営を有力な檀越や大寺院が握っていたと考えられる。寺院と檀越との関連が窺える資料として、永吉台遺跡群遠寺原地区出土の墨書土器の中に、8世紀後半の「家カ」「士家」、9世紀前半の「士寺」「田寺」、9世紀中葉の「士寺」「西カ寺」「家」の資料がある。これらは比較的まとまった資料で、遠寺原地区の寺院と関連するものと考えられるが、その中で「士家」と「士寺」の存在が目される。「士家」がある有力な富家の存在を示すものと考えれば、「士寺」はその有力な富家と寺院との深い関係を示している。そして、「士家」から「士寺」への変遷傾向は、有力な檀越の家政機関から自立的な寺院運営組織へと整備されていく過程を示す可能性がある。一方、大寺院と小規模寺院との運営面における関係については、小規模寺院で出土する国分寺や初期寺院の瓦の存在から既に多く指摘されている<sup>21)</sup>。

## 6 仏堂と周辺建物群との関係にみられる寺院と堂

国分寺や初期寺院とそれ以外の寺院について、伽藍地ないし仏堂周辺に規則的な複数の建物跡群のまとまりが認められるものをこれまで取り上げてきた。ただし、このほかにも多くの仏堂が発見されている。この中には、仏堂と周辺の付属施設のまとまりが不明確なものや、仏堂周辺の規則的な建物跡群が小規模なものや認められないものがある。最後に、こうした事例に触れ、もう一つの仏教施設のあり方を検討してみたい。

大井東山遺跡では一間四面の掘立柱建物跡と熨斗瓦などの瓦が発見され、一間四面建物跡が簡単な葺棟



葺の仏堂と考えられている。やや散在ぎみに分布する周辺の竪穴住居跡から墨書土器「新生寺」や灯明皿、転用硯等が出土したが、仏堂との間の規則的な配置はほとんど窺えない。

江原台遺跡では集落の北側の周溝状遺構から瓦塔片がまとまって発見された。覆屋は確認されなかったが、この周溝状遺構と瓦塔が仏堂として機能したと考えられる。これに接して、竪穴住居跡3軒と掘立柱建物跡1棟が発見された。この掘立柱建物跡は集落北側では唯一発見された掘立柱建物跡であるが、これらと竪穴住居跡との配置の規則性は弱い。

谷津遺跡では集落の北側から、瓦塔と瓦堂が柵列状遺構に伴って発見された。この遺構と瓦塔・瓦堂が仏堂として機能したと考えられる。ただし、この周辺からは仏堂と同時期の竪穴住居跡の分布は散漫で、掘立柱建物跡も北側に1棟のみである。

これらの事例は仏堂が明確ながら、周辺の建物群の配置上の規則性が弱く、仏堂と付属施設のまとまりが周辺遺構群中であって不明確なものである。これらは母屋と庇を有した定型的な建物構造である点や、瓦塔を伴うという点で仏堂と捉えられるものである。このほかに村上込の内遺跡や白幡前遺跡I群Bグループ、庄作遺跡も瓦塔をまつた施設が不明確ながら、小規模な仏堂の存在を窺わせる事例である。また、定型的な仏堂や瓦塔が出土していない遺跡でも仏教関連遺物がまとまって継続的に出土する状況から仏堂の存在が窺われる事例もある。ただし、こうした事例は先の大井東山遺跡や江原台遺跡、谷津遺跡同様に、仏堂周辺に規則的な複数の建物群の存在が認められず、前節までに取り上げてきた寺院跡とは空間構成の上で大きく異なっている。自立的な運営施設ばかりでなく、専住する宗教者の居住施設や、日々の法会や勤行に必要な諸施設の存在という点からも、寺院機能の上で大きな違いがある。運営・維持する上でも周辺に拡く展開する集落遺跡の遺構群の存在がより重要な寺院と考えられる。なお、大井東山遺跡からは墨書土器「新生寺」が、江原台遺跡からも墨書土器「寺」が出土しており、これらが当時寺と呼ばれていた可能性がある。同時期の記録である『日本霊異記』では仏教施設が「寺」、「山寺」、「堂」と使い分けられている。「寺」は官・国又は有力な貴族・豪族によって建てられ、官僧が常住し設備内容が整って寺院としての体面を備えているもの、「山寺」は僧侶の修行の場所として建立され、国家あるいは特定の貴族・豪族や村落との関係がほとんど見られないもの、そして「堂」は①村人らの建立②優婆塞が居住(専門僧侶はいない)③檀越が寺の管理・造仏を造る④本尊は木造⑤里名を寺名とする特徴が指摘されている<sup>22)</sup>。また、村落の信仰の基本が「堂」の基本的なもので、仏道を修行する場所という性格が加わると、道場と呼ばれ、さらに設備や規模が充実すると「寺」と呼ばれるとも指摘されている。ただし、県内からは多数の寺名墨書土器や墨書土器「寺」が出土しているのに対して、「堂」と記された墨書土器はこれまでに発見されておらず、県内での寺と堂との具体的な使い分けは確認できない。ただし、『日本霊異記』での使いわけも、奈良時代から平安時代初頭の畿内を中心とした使いわけのひとつであるが、僧侶の居住や管理、設備、規模等が「寺」と「堂」の区別の要素である点は注目される。仏堂周辺の規則的な複数の建物群の存在の有無にみられる寺院の機能や様相の違いは、『日本霊異記』にみられる「寺」と「堂」の区別と類似するものと考えられる。なお、「山寺」や道場については、扱う余裕がないので、第IV章で若干触れたい。

以上、伽藍や仏堂周辺の規則的な建物群に注目して、国分寺や初期寺院、その他の寺院について、空間的分析を試みてきた。また、国分寺の実態や、初期寺院と檀越層との関係、小規模寺院と大寺院・有力豪族層・周辺集落遺跡との関係、集落遺跡内の仏堂の性格など、多種多様な寺院の性格や機能を考える上で、付属施設の検討が重要と考え、推測を重ねた。県内の多種多様な寺院について笹生衛氏によって、これま

### III 各 論

でに国分寺・郡寺・定額寺・山林寺院（山寺）・別院・修行場・村寺・村堂に類型化され、これらのネットワークの存在が指摘されている<sup>23)</sup>。こうした類型化を寺院の空間構成から導くことが今後の課題である。

#### 註

- 1) 宮本敬一 1981 「上総国分寺の伽藍と付属諸院」『月刊歴史教育』30～33  
山路直充 1994 「寺院地という用語」『下総国分寺跡 平成元～5年度発掘調査報告書』市立市川考古学博物館  
須田勉 1994 「国分寺創建の諸問題」『シンポジウム 関東の国分寺 在地からみた国分寺の造営 資料編』関東古瓦研究会  
大脇潔 1997 「古代寺院と寺辺の景観を復原するーその研究史と問題の所在」『摂河泉の古代寺院とその周辺』第1回摂河泉古代寺院フォーラム
- 2) 坂詰秀一 1982 「初期伽藍の類型認識と僧地の問題」『歴史考古学研究』II ニューサイエンス社
- 3) 上原真人 1986 「仏教」『岩波講座 日本考古学4』岩波書店
- 4) 今泉潔他 1984 『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』(財)千葉県文化財センター
- 5) 井上充夫 1969 『日本建築の空間』鹿島出版会
- 6) 清水擴 1992 『平安時代仏教建築史の研究』中央公論美術出版
- 7) 藤井恵介 1990 「平安初期礼堂試論」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1990年度大会(中国)
- 8) 5と同じ
- 9) 笹生衛 1993 「「村落内寺院」における堂宇建物と仏教信仰」『野中徹先生還暦記念論集』野中徹先生還暦記念祝賀会
- 10) 稲葉昭智 1996 『南子安金井崎遺跡』(財)君津郡市文化財センター
- 11) 大原正義 1989 『栄町龍角寺確認調査報告書』千葉県教育委員会
- 12) (財)印旛郡市文化財センター 1988 『財団法人印旛郡市文化財センター年報4』
- 13) 笹生衛 1990 「袖ヶ浦町遠寺原遺跡・東郷台遺跡・市原市萩ノ原遺跡」シンポジウム『平安前期の村落とその仏教』千葉県立房総風土記の丘  
1991 「シンポジウム 平安前期の村落とその仏教〈記録集〉」『千葉県立房総風土記の丘年報』14
- 14) 永沼律朗 1990 「上総における瓦生産の一例」『千葉県文化財センター研究紀要』12
- 15) 郷堀英司他 1984 『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』千葉県教育委員会
- 16) 今泉潔他 1984 『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』(財)千葉県文化財センター
- 17) 滝口宏他 1985 『成東町真行寺廃寺跡発掘調査報告 鍛冶工房址の調査』成東町教育委員会
- 18) 網伸也 1997 「北山背における7世紀の寺院造営」『古代寺院の出現とその背景』第42回 埋蔵文化財研究集会
- 19) 田中清美 1995 「謎の千草山廃寺跡(予察)」『市原市文化財センター研究紀要』III
- 20) 牛山佳幸 1986 「諸寺別当制をめぐる諸問題」『古代史研究の最前線』第二巻
- 21) 須田勉 1985 「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢』II  
笹生衛 1994 「古代仏教信仰の一側面」『古代文化』46-12
- 22) 直木孝次郎 1960 「日本霊異記にみえる「堂」について」『続日本紀研究』7-12

23) 笹生衛 1994 「古代仏教信仰の一側面」『古代文化』46-12



## Ⅳ 房総における古代寺院の成立過程

### —— 印幡郡・埴生郡を例として ——

はじめに

今回の資料調査と収集の中でいくつかの成果と多くの問題点が明らかとなった。そこで、今後につなげるため、古代寺院の成立過程を素描してみたい。ただし、房総三国を扱うには力量不足であり、下総国印幡郡と埴生郡の地域に限定する。龍角寺等の成立が評や印幡国造とも関わる年代で、郡・評成立以前はこの2郡は一つの地域と捉えられる可能性がある。

#### 1 小地域の設定

『和名類聚抄』によると印幡郡は八代、印幡、言美、三宅、長隈、鳥矢、吉高、船穂、日理、村神、余戸の11郷、埴生郡は玉作、山方、麻在、酢取の4郷の記録が残されている<sup>1)</sup>。このうち遺称地名が認められるものに、印幡郡の八代、長隈、吉高、船穂、村神、埴生郡の麻在、酢取がある。遺称地の分布傾向から印幡郡が現在の印旛沼周辺に、埴生郡が印旛沼北方から根木名川周辺に拡がっていたと捉えられる。そこで、最初にこれら郷の分布をふまえた小地域の設定を行いたい。

埴生郡には埴生郡三社といわれる一宮神社が現在栄町安食字矢口に、二宮神社が成田市松崎字遠原に、三宮埴生神社が成田市郷部字三宮に所在している<sup>2)</sup>。遺称地名が確認できない玉作郷は二宮神社が位置する松崎・上福田周辺に、山方郷は三宮埴生神社が位置する郷部周辺と推測される<sup>3)</sup>。なお、鎌倉時代前期に遡る遠山方郷は、遺称地として成田市遠山があり、郷部の根木名川対岸に当たる。この遠山方郷と山方郷については、印旛沼や長沼方面から見てやや内陸の山口、郷部、囲護台など根木名川支流の小橋川上流域を山方と呼び、さらに内陸部の根木名川の対岸地域を遠山方と称した地名と木村修氏により指摘されている<sup>4)</sup>。前代の古墳時代後期の古墳分布からも根木名川西岸周辺には北から南羽鳥古墳群、竜角寺古墳群、大竹・上福田古墳群、公津原古墳群という大規模古墳群がづらなっており、各古墳群の分布が郷を比定する上で参考になる。なお、根木名川上流の中世の遠山方郷周辺には野毛平古墳群が、中世の河栗郷周辺には川栗・久米野古墳群が重なるが、両古墳群とも比較的小規模である。古墳群や古代の郷、古代後半から中世の荘園への地域単位の流れで捉えると根木名川西岸周辺地域を、竜台川西岸周辺(想定麻在郷、A)、竜台川東岸周辺(想定羽鳥郷、B)、根木名川支流の松崎川周辺(想定玉作郷、C)、根木名川と支流小橋川・取香川周辺(想定山方郷、D)の4つの小地域に分けられる。

次に印幡郡についても、遺跡分布と郷の存在をふまえて小地域分けしてみると、江川周辺(想定八代郷、E)、酒々井中川周辺(想定印幡郷、F)、亀成川中・上流周辺から利根川右岸(想定言美郷、G)、亀成川下流と支流浦部川周辺(想定三宅郷、H)、高崎川周辺(想定長隈郷、I)、鹿島川周辺(想定鳥矢郷、J)、印旛沼西岸周辺(想定吉高郷、K)、神崎川下流から支流戸神川周辺(想定船穂郷、L)、手操川周辺(想

定日理郷、M)、新川周辺(想定村神郷、N)、高崎川支流の南部川周辺(想定余戸郷、O)の11地域に分けられる。ただし、印幡郡の郷の想定には問題の余地もあり、遺跡分布の詳細な検討が今後必要である。

## 2 7世紀後半の初期寺院の成立

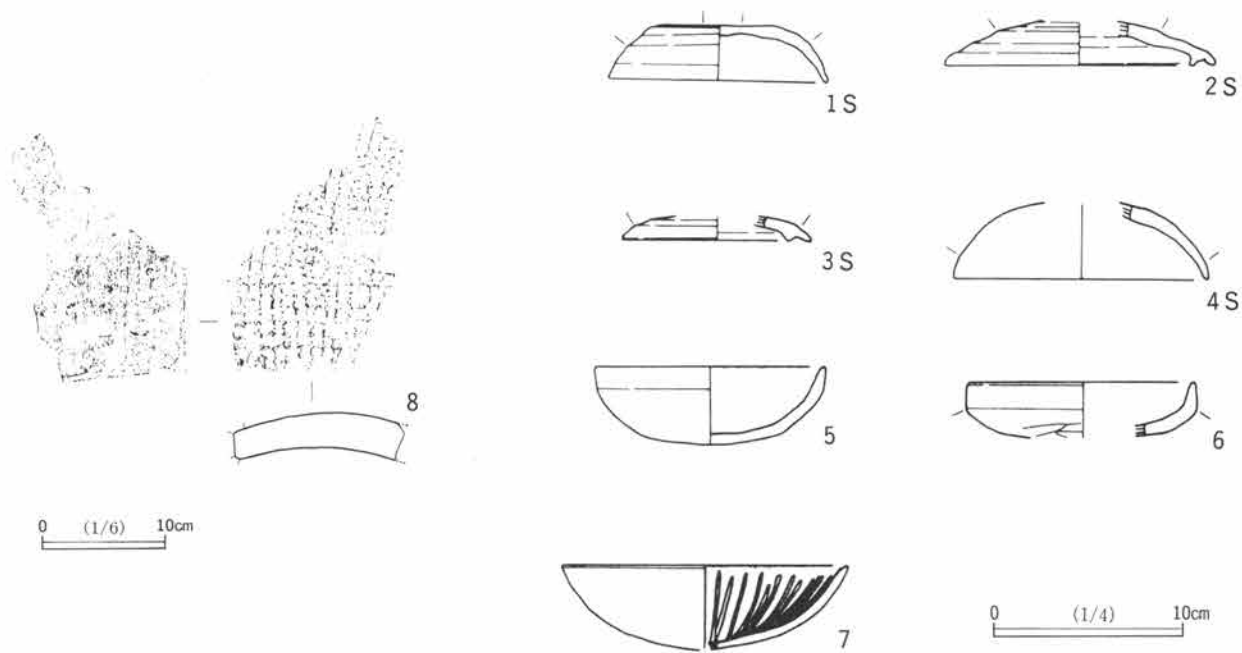
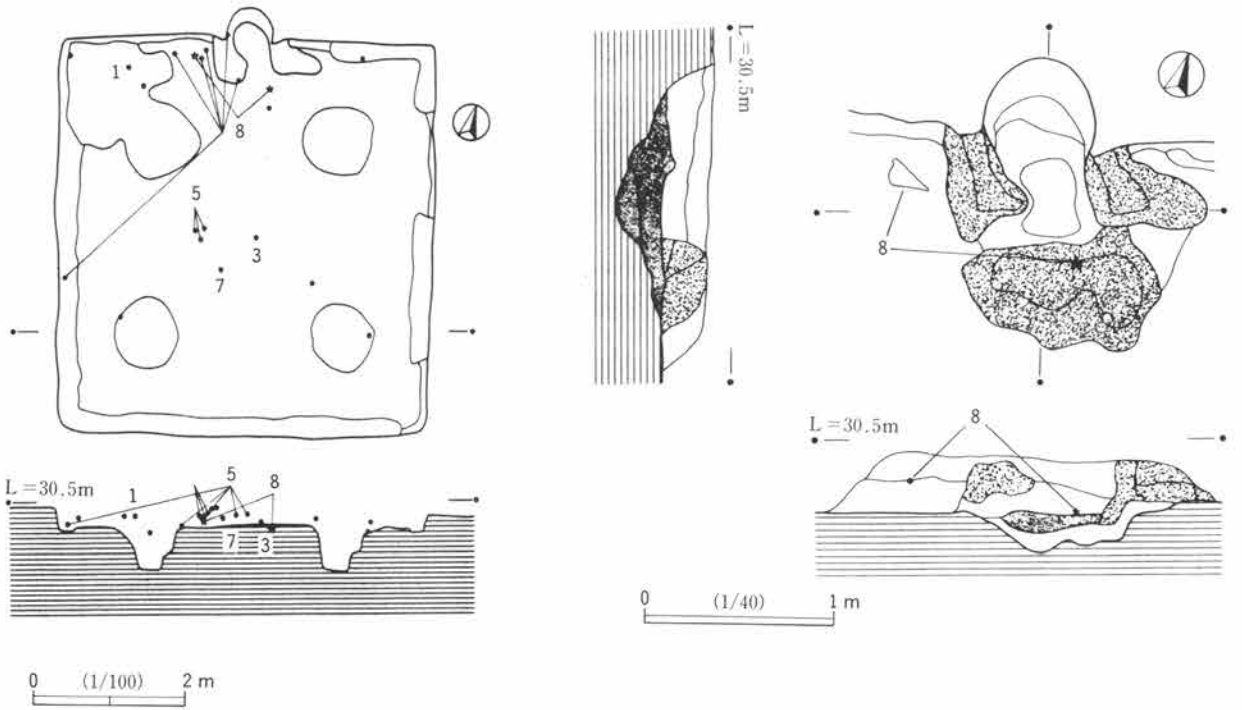
下総国で最初の寺院の龍角寺は金堂と塔を備え、埴生郡の北西の旧香取海に面した竜台川西岸地域に位置している。創建期軒瓦は三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦の組み合わせである。この軒丸瓦の範型は一つであるが、中房蓮子の2度の彫り直しが確認され、3度の変遷が認められる。第1段階は1+5の蓮子配置で、中心と周辺蓮子が同じ大きさである。第2段階は中心蓮子を周辺よりも一まわり大きく彫り直し、第3段階は周辺蓮子を増やして1+10に彫り直している。この第1段階の瓦が生産遺跡の五斗蒔瓦窯跡の窯前ピットから7世紀第3四半期の鉢と共伴し<sup>5)</sup>、第3段階と想定される平瓦が周辺の向台遺跡のS I 3住居跡の崩落カマド内から7世紀第3四半期から第4四半期前半の土器と共伴し<sup>6)</sup>、第2段階の軒丸瓦が周辺の天福遺跡で五斗蒔瓦窯跡の窯前ピット出土と同一の鉢と共伴している<sup>7)</sup>。こうした土器との共伴関係から、7世紀第3四半期には龍角寺の造営が始まっていたと石戸啓夫氏により指摘されている。

なお、第2段階と第3段階の軒丸瓦には接合する丸瓦先端を片柄形に加工した製品が多い。これは瓦当文様上の祖形である大和・山田寺跡出土瓦の創建段階から塔再開期に認められる特徴的な技法である<sup>8)</sup>。7世紀前半の飛鳥寺跡<sup>9)</sup>や坂田寺跡<sup>10)</sup>等の出土瓦で認められ、7世紀後半では山田寺跡や田中廃寺跡<sup>11)</sup>、石川廃寺跡<sup>12)</sup>など一部の寺院で認められる。片柄形加工は浅い切り方から深い切り方へと変化し、技法の拡がりに限られてくる。龍角寺の片柄形加工は山田寺よりも深い切り方である。こうした7世紀後半の中央で限定的な技法が、文様上の型式化にある龍角寺で確認された点は注目される。細かい造営過程と瓦の変遷が認められる山田寺跡との関係から、龍角寺もより細かな年代が問題となる。さらに山田寺式軒瓦には氏寺から準官寺扱いに性格が変化する<sup>13)</sup>山田寺跡の出土瓦と、百濟大寺の可能性が高い吉備池廃寺跡の出土瓦<sup>14)</sup>等があり、龍角寺に伝わった山田寺式軒瓦の直接の祖形を明らかにすることは龍角寺成立における歴史的背景の問題と深く関わってくる。畿内を中心として全国的に分布する山田寺式軒瓦の中で、中房蓮子1+5などの特徴的な文様と丸瓦先端片柄形加工などの特徴的な技法から、龍角寺創建期瓦の直接の祖形を絞りこむことは可能であろう。全国的な問題であり、今後の大きな課題である。

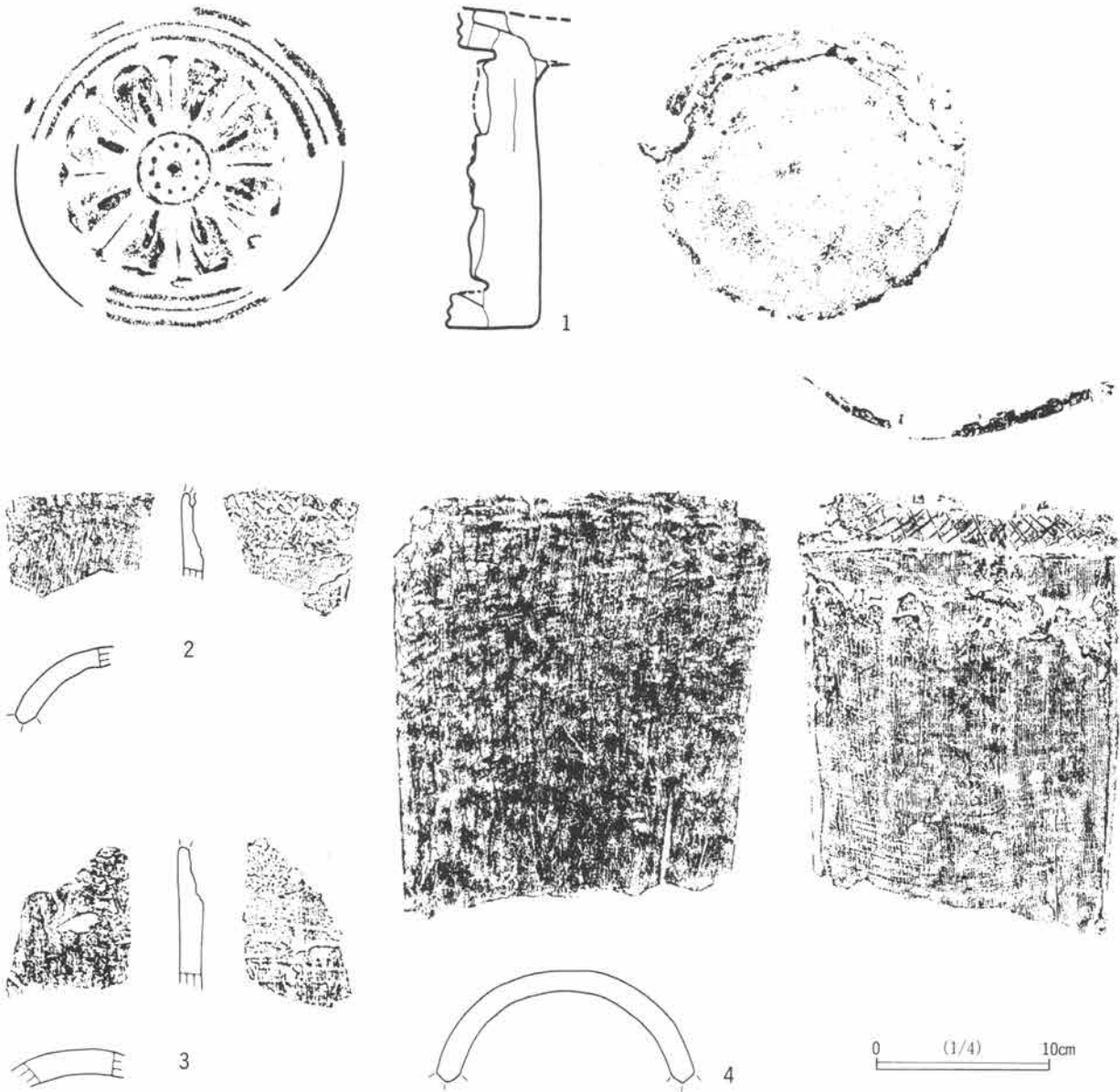
一方印幡郡域では最初に木下別所廃寺跡が造営された。印幡郡域の最も北側で、旧香取海に面した亀成川中・上流周辺地域に位置している。創建期軒瓦は三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦の組み合わせである。軒丸瓦の中房の中心蓮子が周辺蓮子よりもやや大きく、龍角寺創建期軒丸瓦の第2段階以降の影響が認められる。軒丸瓦に接合する丸瓦先端は凹凸面を削って先を尖らせたものと、未加工のものがある<sup>15)</sup>。年代的には岡本東三氏により7世紀第3四半期と位置づけられている<sup>16)</sup>。龍角寺出土軒瓦が型式化したものは下総国のほかに上総国や武蔵国、常陸国まで分布しているが、下総国では旧香取海から旧樺海に面した場所に特に集中している。旧鬼怒川の川尻から外洋に向かって木下別所廃寺跡、龍角寺、龍正院、名木廃寺跡、木内廃寺跡、そして樺海沿岸の八日市場大寺廃寺跡である。名木廃寺跡を除くと、これらは郡・評単位の地域を代表する寺院跡である。龍正院は実態不明ながら、近接して3基の瓦窯跡が発見され、大量の瓦を葺いた本格的な寺院跡と推測される。一方、名木廃寺跡は出土瓦が少なく、龍正院



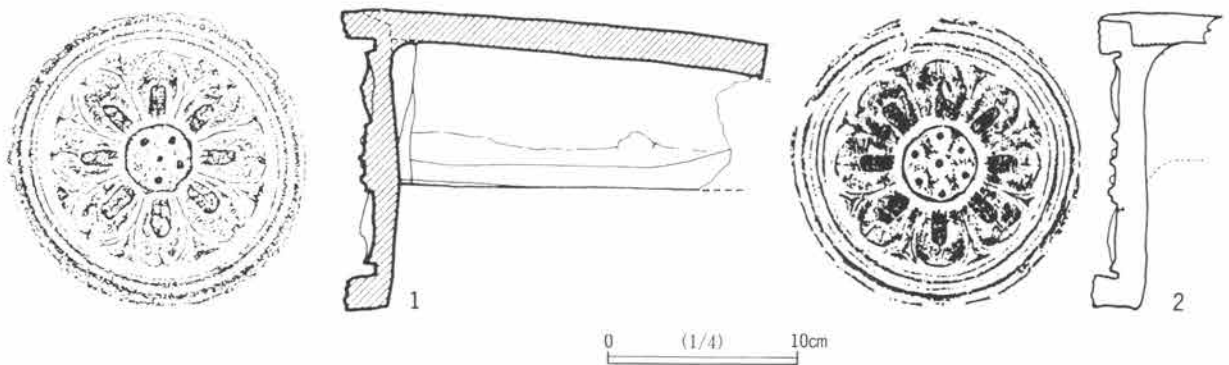
第137図 五斗時瓦窯跡 1 G-17グリッド一括資料



第138図 向台遺跡 S I-3遺物出土状況図・出土遺物



第139図 県内丸瓦先端部片柄形加工資料  
 (1. 五斗蒔瓦窯跡 2~4. 大畑 I 遺跡 S I 36)



第140図 大和丸瓦先端部片柄形加工資料  
 (1. 山田寺 2~4. 田中麿寺跡)



との関係で成立した小規模寺院と捉えられる。こうした郡・評単位の地域を代表する初期寺院の中には郡家推定地と近接しているものが認められる。ただし、印幡郡の郡家推定地は酒々井中川周辺の酒々井町本佐倉など印旛沼南岸と捉えられ<sup>17)</sup>、木下別所廃寺跡が位置する地域とは明らかに異なる。評家や郡家の成立にみられる地方の律令体制の整備と深く関わって成立した初期寺院とは様相をやや異にする。木下別所廃寺跡の成立背景を考える上で、前代の古墳群分布に見られる有力な檀越との関係が前提や背景とはなるが、常陸国や外洋とつながる旧香取海と旧椿海周辺に集中する龍角寺軒瓦によっていち早く成立した下総国の初期寺院の立地の共通点が注目される。下総国は畿内と蝦夷地域とを結ぶ東海道のルート上で、当時の重要政策の一つである対蝦夷関係で、旧香取海や旧椿海の津が政治経済上重要な場となっていた点が推測される。こうした東国交通の要衝という政治経済上の重要性の高まりを背景として、下総国では龍角寺や木下別所廃寺跡などの多くの初期寺院が次々と成立したと捉えられる。

### 3 8世紀前半の初期寺院の整備

龍角寺出土瓦には創建期瓦のほかに、葡萄唐草文軒平瓦が出土している。また、伽藍について、南大門・金堂の軸線から東側にずれて塔が配置されている点から、最初は金堂のみの一堂式で、後に塔を建て、伽藍を整備した可能性が指摘されている<sup>18)</sup>。わずかに出土した葡萄唐草文軒平瓦はいずれも塔北方から出土しており、創建段階以後に塔が追加変更された可能性がある。葡萄唐草文軒平瓦の年代観は、8世紀初頭から8世紀中葉と捉えられている<sup>19)</sup>。下総国に広く分布する下総国分寺系の軒瓦は龍角寺では未確認であり、国分寺成立以前の8世紀前半に塔建立を含めた伽藍の整備が行われたと推測される。

また、印幡郡では長熊廃寺跡が8世紀第2四半期に成立する。三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦と素文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文様軒平瓦の組み合わせである。軒丸瓦は龍角寺出土瓦の型式化と捉えられるが、子葉が消滅し、型式化が著しい。また、平瓦は凸型台一枚造りのみで、旧香取海と旧椿海周辺に分布する龍角寺式軒瓦のあり方とは一線を画している。また、軒丸瓦全体の2%ほどの常陸国分寺系の軒丸瓦が出土している。これを補修瓦と捉えれば、国分寺成立以前に長熊廃寺跡が成立していたと考えられる。なお、8世紀第3四半期の墨書土器「高罌寺」が出土し、「高罌寺」が長熊廃寺跡の寺名の一つである可能性が高い。高岡は現在の隣接する字名と一致しており、郷よりも小地域の地名に由来する寺名と推測される。ただし、長熊廃寺跡は隅切り瓦を含む多量の出土瓦から金堂は本瓦葺きの屋根構造と想定され<sup>20)</sup>、郷よりも小さな地域を背景として成立した寺院跡とは考えがたい。寺名は通称も含め、使用方法により複数認められることが多く、「高罌寺」も地域の中で使われた長熊廃寺跡の寺名の一つと捉えられる。むしろ長熊廃寺跡は印幡郡家推定地周辺に位置し印幡郡の郡司層を有力な檀越とした寺院跡と想定される。印幡郡の郡家として、長熊廃寺跡の北約600mに位置する酒々井町の猿楽場遺跡、本佐倉大堀遺跡周辺が有力な候補地である。長熊廃寺跡の谷津向かいの高岡大山遺跡からは大規模な倉庫群やコの字形配置の掘立柱建物跡群が発見されており、長熊廃寺跡周辺が印幡郡の政治経済上の中心地であったと考えられる<sup>21)</sup>。

このように埴生郡では龍角寺の伽藍の整備が、印幡郡では長熊廃寺跡の造営が8世紀前半に認められる。埴生郡家推定遺跡の大畑遺跡からは軒丸瓦を含めた龍角寺出土と同一の瓦が多く出土し、墨書土器「寺」も出土し、寺院と郡家との深い関係が想定される。前段階が旧香取海や旧椿海に面した東国交通の要衝に初期寺院の造営が認められるのに対して、8世紀前半には郡家周辺に位置する寺院の整備と造営が特徴的

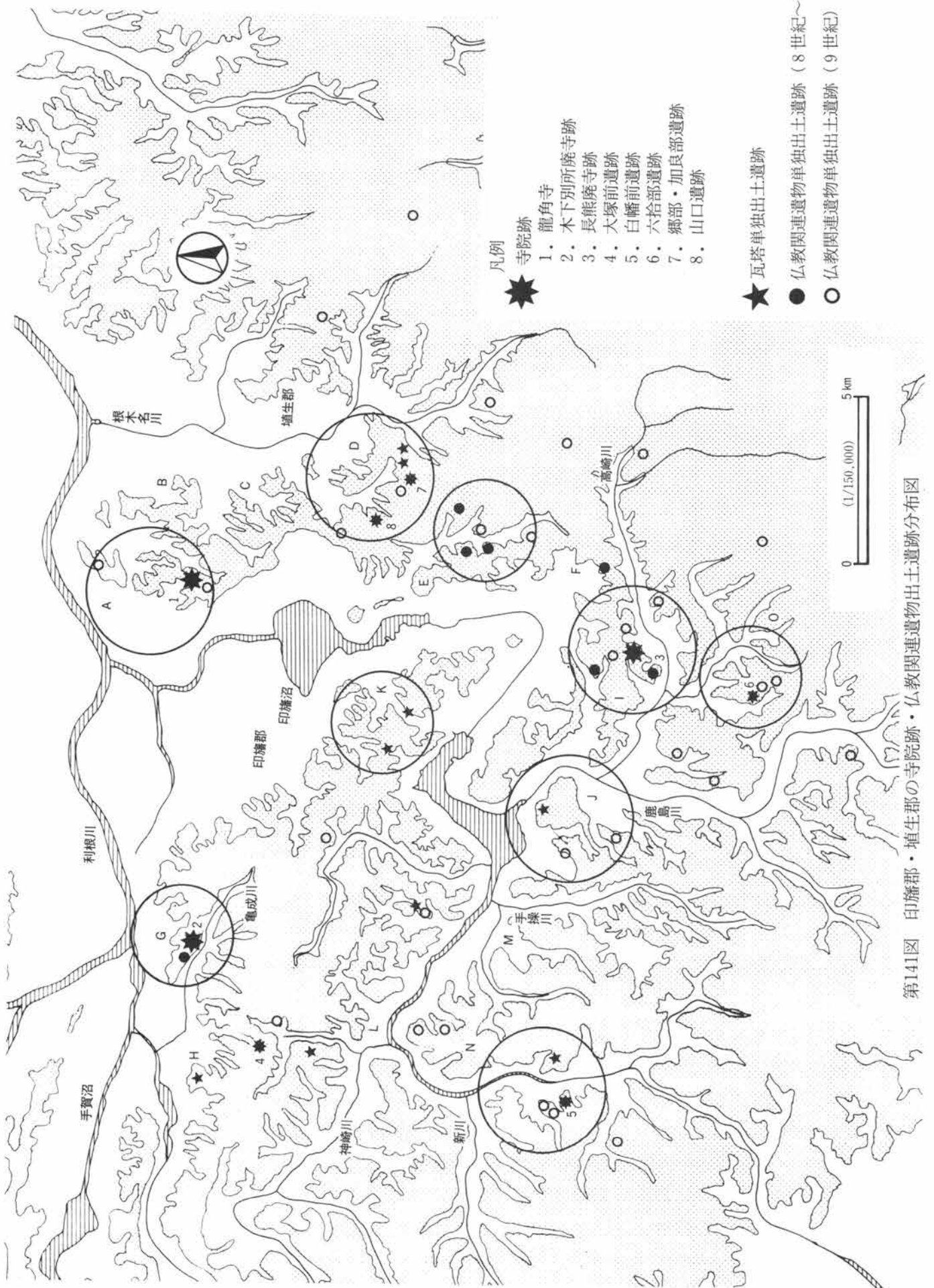
である。なお、下総国ではこのほか、結城郡で結城廃寺跡が、千葉郡では千葉寺が各郡の中心地付近に成立する。また各郡の中心地付近に位置する海上郡の木内廃寺跡や匝瑳郡の八日市場大寺廃寺跡等でも国分寺前段階の補修瓦の存在を多く確認することができる。次の8世紀後半の段階には、小規模な寺院跡の成立が多く認められるのに対して、この8世紀前半段階は各郡の拠点的な寺院の伽藍整備が顕著に認められる。

#### 4 8世紀後半の各小地域への寺院造営の拡がり

8世紀後半になると長熊廃寺跡が位置する高崎川周辺地域の遺跡から多くの仏教関連遺物が発見される。廃寺跡の谷津向かいの高岡大山遺跡から鉄鉢形土器や墨書土器「寺」などが、廃寺跡の北1.2km離れた将門鹿島台遺跡から墨書土器「福カ寺」が、同じく北東約2.5km離れた尾上藤木遺跡からは墨書土器「佛」が出土する。こうした長熊廃寺跡周辺の仏教関連遺物の出土は9世紀になっても続き、隣接する長勝寺脇館跡から鉄鉢形土器が、北大堀遺跡から墨書土器「寺」「佛坏」が出土し、さらに高崎川の対岸の馬橋鷲尾余遺跡からも鉄鉢形土器が出土する。こうした高崎川周辺地域の仏教関連遺物の出土分布は長熊廃寺跡を中心に捉えることが可能で、周辺地域へ与えたこの寺の影響が推測される。具体的には、尾上藤木遺跡や長勝寺脇館跡、馬橋鷲尾余遺跡など、一般的な集落遺跡の竪穴住居跡からの鉄鉢形土器や墨書土器「佛」などの出土から、僧侶や優婆塞などの集落内での宗教活動の拡がりが見える。また、将門鹿島台遺跡や北大堀遺跡などの墨書土器「福カ寺」「寺」の出土から寺院や仏堂と周辺の集落遺跡との直接的な関わりが生じたことが窺える。また、高岡大山遺跡では、「郡衙の出先機関ないし、郡家の運営に関わる階層の氏族の居住地、あるいは郡家造営からその運営に至るまでに中心的に関わった氏族の本拠地」と捉えられている。建物群のうち、中央に位置する「コ」の字形ないし方形に巡る掘立柱建物跡群周辺から仏教関連遺物が神道関連遺物とともに、やや集中して発見されている点が注目される。この掘立柱建物跡群は3期にわたり建て替えられているが、その官衙的建物配置から、官衙関連施設ないし、在地有力者の居館の中心的施設と捉えられる。こうした施設周辺からの脚付香炉や墨書土器「寺/莫」の出土は、「神屋」とともに施設内ないし周辺の持仏堂の成立を窺わせる。

このような小規模な仏堂や寺院の成立は、複数の遺跡からの墨書土器「福カ寺」「寺」からも窺える。同様に他の初期寺院でも、龍角寺に近接する大畑遺跡の墨書土器「寺」の出土や、木下別所廃寺跡に隣接する天神台遺跡の墨書土器「ササ」の出土からも8世紀後半以降の周辺への仏教信仰の拡がりが見られる。

また、初期寺院が成立した地域以外でも、小規模な寺院や仏堂が成立する。埴生郡では根木名川の支流小橋川周辺地域で山口遺跡と郷部遺跡に寺院が建てられる。周辺には古墳時代後期から続く中台遺跡などが位置し、集落が多く分布する地域である。印幡郡では江川中流域で8世紀第2四半期から9世紀の仏教関連遺物がまとまって発見されている。大袋台畑遺跡から墨書土器「赤寺・崎寺」「赤男(界)寺」が大袋台畑遺跡の南800mの飯仲金堀遺跡から墨書土器「寺」と托が、同じく東1.2kmの飯田町向野遺跡から鉄鉢形土器が、同じく東約500mの大袋山王第2遺跡から鉄鉢形土器が出土した。このように時期と分布にまとまりがあり、この地域に「赤寺・崎寺」「赤男(界)寺」が8世紀第2四半期には成立していた可能性が高い。このほか、新川周辺地域の白幡前遺跡で溝が区画された寺院が、南部川周辺地域の六拾部遺跡でも「白井寺」と呼ばれる仏堂が造られる。白幡前遺跡はこの時期以降、大きな集落に発展し、周辺にも多くの集



第141図 白幡郡・植生郡の寺院跡・仏教関連遺物出土遺跡分布図

落が成立する<sup>22)</sup>。一方、六拾部遺跡はその上流域に古墳時代後期から歴史時代に続く大規模な墓域があり、六拾部遺跡もこうした墓域を形成した大集落の一画と考えられるが、8世紀後半から9世紀中葉にかけての長い期間仏堂が営まれる。このように8世紀後半には各地で寺院や仏堂の成立が認められる。これらは大規模に展開する集落域付近から発見されている。いずれも近接する複数の遺跡を大規模に発掘調査して明らかとなったものであり、印幡郡や埴生郡の他の地域でもこうした小規模寺院が存在した可能性がある。こうした8世紀後半の各地の小規模寺院の成立については、同時期の初期寺院周辺で確認された僧侶や優婆塞の活発な活動や寺院と周辺集落とのつながりの発生、造寺造堂の高まりの地域的拡大として捉えられよう。

また、その時期は国分寺成立期であり、国分寺との直接的・間接的な関係も想定され、国分寺成立を契機とした地方仏教の整備と拡張がこうした地域的拡大の大きな背景となったことは容易に想像ができよう。

神崎川支流の戸神川周辺地域と亀成川支流の浦部川周辺地域の間に位置する大塚前遺跡からは、下総国分寺と同範の瓦等が多く出土した。葺棟葺きの三間四面の掘立柱構造の仏堂と方二間の総柱建物跡1棟と竪穴住居跡1棟が発見された。この周辺からは建物跡などは発見されず、周辺遺跡から独立した特異な立地にある。また仏堂などは北側の溝に沿って発見された。この大溝については、遺物出土状況から瓦葺建物跡と同時期に機能した古代の道路跡とみる所説<sup>23)</sup>が発表されているが、調査所見からは道路跡としての痕跡は全く認められない。ただし、この大溝は少なくとも近世まで遡る木下街道に沿って発見されており、この大溝に平行して古代の道路跡が存在している可能性までも否定することはできない。木下街道の経路は、古代においても、下総国府が位置した旧江戸湾沿いの地域と、木下別所寺院跡が位置する旧香取海沿いの地域をつないだ主要な経路と想定される。7世紀後半以降の東海道の官道は相模の走水から旧江戸湾を横断し、上総を旧江戸湾沿いに北上し、下総に入ると印旛沼東岸を北上し、旧香取海を渡り、常陸に入る経路である。下総国の旧江戸湾沿いの河曲駅—浮島駅—井上駅、そして武蔵国の—豊島駅—乗渚駅—武蔵国府のルートは当初東山・東海の連絡道という性格と規模であったが、神護景雲2年(768)に交通量の増大から本道扱いの馬十疋の常置する記録が残され、さらに宝亀2年(771)には武蔵国が東山道から東海道に所管替えされ、こうした交通情勢に大きな変化が生じる。旧江戸湾横断の交通量が減少し、下総国府から印旛沼東岸地域を通して常陸国に抜ける官道ルートの需要が増大したと想定される。ただし、この経路は距離的に大きく迂回した経路で、新たに手賀沼西岸を通る官道の経路が敷設され、その結果、延暦25年(805)に印旛沼東岸の4駅が廃止となる。このように、8世紀後半に下総国府方面から常陸国に向かう交通量が増大し、迂回路となる印旛沼東岸から手賀沼西岸への官道の付替えが行われた<sup>24)</sup>。大塚前遺跡付近で想定される下総国府と木下別所廃寺跡を結ぶ経路は、こうした交通量の増大を背景とした、迂回解消の主要経路の一つと推測される。また下総国府と旧香取海とを結ぶ最短経路であり、この経路は重要であったと想定される。そして大塚前遺跡からの下総国分寺との同範瓦などの出土は、こうした主要道路に接した寺院跡の成立に下総国分寺が関わっている可能性が高い。また、集落域から離れた手賀沼水系の分水界付近であり、道路の維持管理や交通の安全確保の面で、寺院の存在は一定の役割を果たしたと考えられる。また、主要交通路に接している点から仏教の普及にも一定の役割を果たしたと考えられるが、檀越の本拠地や集落域と近接した寺院跡と比較するならば別の観点から捉える必要がある。比蘇山寺と吉野宮への道や崇福山寺と山中越などこの時期の山寺の多くが峠道など主要街道に接し、交通の要衝に位置している事例が多い<sup>25)</sup>。そして、これらの山寺は道場としての修行の側面が認められる。下総国には地形的に「……山」

と呼ばれるものはないが、大塚前遺跡の周辺遺跡から独立し、交通の要衝に位置したあり方に山寺との類似点が認められる。また、大塚前遺跡は仏堂のほか、総柱建物跡と竪穴住居跡1棟のみから構成され、付属施設が最低限のものであり、法会などを営む上で設備が簡素である。こうした点から道場としての側面を想定することも可能である。房総の古代寺院の中であって、集落域や竪穴住居跡群に接する多くの寺院と対比して、大塚前遺跡の立地と構成は特異である。

このように8世紀後半には、各郡の拠点に立地した初期寺院の周辺では活発な僧侶や優婆塞等の活動や信仰の拡がりが見られる。また、郡内各地の大規模な集落域付近でも小規模な寺院や堂が成立し、周辺への僧侶や優婆塞等の活動や、信仰や寺院とのつながりの拡がりが見られる。このほか、持仏堂的機能を有した仏堂や、分水界に位置する道場としての機能が想定される寺院跡など多様な仏教施設の成立が認められる。こうした小規模寺院や仏堂の成立や寺院周辺への仏教の拡がりの動きは、9世紀以降さらに顕著になる。

## 5 9世紀における仏教信仰の拡がり

8世紀末から9世紀になると寺院周辺への仏教遺物の拡散と瓦塔などを奉った仏堂の成立が顕著となる。埴生郡では8世紀後半に成立した郷部遺跡と山口遺跡の寺院跡周辺の小橋川周辺地域で、郷部遺跡の東約400mの中台遺跡と、同じく約900m離れた困護台遺跡から瓦塔が発見されている。郷部遺跡と隣接する郷部、堀尾遺跡から墨書土器「寺」が、郷部遺跡の北約500mの石橋台遺跡から墨書土器「佛」が、山口遺跡の北約1.2kmの外小代遺跡から墨書土器「寺カ」が出土している。こうした僧侶や堂、そして信仰の拡がりや寺院とのつながりはさらに地域の上流域へと拡がる。根本名川の上流域の久能高野遺跡からは墨書土器「桑田寺」が、支流香取川上流の野毛平植出遺跡から墨書土器「手寺」が、取香和田戸遺跡から墨書土器「寺」が出土している。

印幡郡域でも、こうした埴生郡の根本名川周辺地域と同様の状況が窺える。六拾部遺跡の東南約200mの南広遺跡から墨書土器「佛」が、同じく東南約500mの栗野I遺跡から鉄鉢形土器が出土している。また、白幡前遺跡からは、寺院跡の北約200mから瓦塔と墨書土器「大寺」などが、白幡前遺跡北約200mの井戸向遺跡から仏像や鉄鉢形土器が、同じく北約800mの北海道遺跡から墨書土器「尼」「勝光寺」が出土している。こうした小規模寺院周辺での僧侶や信仰の拡がりばかりでなく、各小地域の集落域付近から瓦塔などが多く出土している。鹿島川周辺の江原台遺跡からは周溝状遺構に伴って瓦塔が発見され、印旛沼西岸では浅間山遺跡、井戸向遺跡、西方遺跡からそれぞれ瓦塔が単独で発見されている。それぞれ周辺に奈良・平安時代の集落が広がっている。神崎川の支流戸神川周辺の鳴神山遺跡からは瓦塔のほか、墨書土器「波田寺」「播寺」や鉄鉢形土器が出土した。鳴神山遺跡は周辺地域の中で拠点的な集落である。このように印幡郡では各地に瓦塔を奉った仏堂が成立している。この中には仏堂周辺に規則的な配置の建物跡群を伴い、寺院としての機能を備えたものも含む可能性があるが、一方で江原台遺跡や村上込ノ内遺跡のように瓦塔や瓦塔を奉った施設が単独で機能したものが多いと考えられる。なお、こうした寺院や仏堂が現在確認できない地域でも仏教関連遺物の出土が認められ、寺院や仏堂が今後さらに各地で発見される可能性が高い。さらにこの時期、各地の上流域や集落遺跡の分布が希薄な地域でも仏教関連遺物の出土が認められる。江川上流域の七栄から墨書土器「寺」が、高崎川上流の一之綱III遺跡から墨書土器「寺・佛」が出土してい

る。印旛沼西岸周辺地域と亀成川中・上流周辺地域神崎川と支流戸神川周辺地域の三地域にはさまれ、密集する集落域から離れた角田台遺跡の388号竪穴住居跡から「千仏」「鉢」と墨書された鉄鉢形土器2点がまとまって出土した。角田台遺跡は小さな舌状台地ごとに少数の竪穴住居跡群が発見され、そのうちの一つの竪穴住居跡からまとまって仏具が発見された。なお、近接して香炉形土器や墨書土器「寺」も発見されている。印旛沼の南沼に注ぐ師戸川の谷津と旧香取海に面した印旛沼の北沼に注ぐ谷津との分水界に位置し、自然発生的な交通の要衝の地である。こうした集落域から離れた奥まった場が、修行の場として適していたと考えられる。このように8世紀末から9世紀になると、寺院・仏堂や僧侶・優婆塞等や信仰の拡がり、寺院とのつながりがより密に、より広い地域に認められ、集落域やさらに奥まった場所で、多様な仏教信仰者のあり方が窺える。

以上、印旛郡と埴生郡の地域でこれまで発見された寺院や仏堂、仏教関連遺物が出土した遺跡について、郡内や小地域内の分布の拡がりに注目して、その変遷を追ってみた。その結果、寺院や仏堂の成立を契機として、周辺遺跡から多くの仏教関連遺物が出土する傾向や、上流域へと仏教関連遺物が出土する遺跡が拡がる傾向が認められた。また、初期寺院の成立や整備、小規模な寺院や仏堂の成立についても画期や段階的な変遷といった地方への仏教浸透の大きな流れの存在が窺われた。

## 註

- 1) (財)千葉県史料研究財団 1996 『千葉県の歴史 資料編古代』 千葉県
- 2) 武田宗久 1986 「第二章 第二節 鎌倉前期の成田市周辺」『成田市史 中世・近世編』 成田市史編さん委員会
- 3) 千葉県郷土資料刊行会 1972 『千葉県地名変遷総覧』
- 4) 木村 修 1986 「第二章 第四節 鎌倉中期以後の庄園の動き」『成田市史 中世・近世編』 成田市史編さん委員会
- 5) 石戸啓夫・小牧美知子 1997 『千葉県印旛郡栄町 龍角寺五斗葺瓦窯跡』 (財)印旛郡市文化財センター
- 6) 石田広美他 1985 『主要地方成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 (財)千葉県文化財センター
- 7) 5と同じ
- 8) 飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1994 「山田寺跡出土瓦の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1994』 奈良国立文化財研究所  
佐川正敏 1997 「山田寺跡の発掘調査」『仏教芸術』235号
- 9) 菱田哲郎 1986 「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』67-3
- 10) 奈良国立文化財研究所 1992 「坂田寺 第7次調査」『飛鳥藤原宮発掘調査概報』16
- 11) 竹田政敬 1995 「平松廃寺 -前身寺院は飛鳥に-」『シンポジウム 古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所
- 12) 京都国立博物館 1974 『京都国立博物館蔵 瓦と埴図録』
- 13) 大橋 章 1979 「山田寺造営考」『美術史研究』16

- 14) 小澤 毅・佐川正敏 1997 「吉備池廃寺の調査—第81—14・16次」『奈良国立文化財研究所年報 1997—II』奈良国立文化財研究所
- 15) 安藤鴻基他 1978 『木下別所廃寺跡 第1次発掘調査概報』木下別所廃寺跡調査会
- 16) 岡本東三 1993 「下総龍角寺の山田寺式軒瓦について」『千葉史学』22
- 17) 阿部寿彦他 1994 『高叢遺跡群』Ⅳ (財)印旛都市文化財センター
- 18) 16と同じ
- 19) 近江俊秀 1996 「岡寺式軒瓦出土寺院をめぐる二、三の問題」『考古学雑誌』81—3  
播摩尚子 1996 「下野薬師寺跡出土の葡萄唐草文字瓦」『史館』28
- 20) 今泉 潔 1995 「瓦と建物、そのイメージと原風景に関する覚書」『千葉県史研究』3
- 21) 17と同じ
- 22) 藤岡孝司 1996 「古代東国村落の構造」『古代』101
- 23) 今泉 潔 1990 「「瓦と建物の相剋」試論—大塚前遺跡出土瓦の分析」『千葉県文化財センター研究紀要』12  
糸原 清 1997 「房総の古代寺院と交通路」『人間・遺跡・遺物』3
- 24) 今泉 潔 1997 『平成9年度企画展 古代の道と旅』千葉県立房総風土記の丘
- 25) 松浦俊和 1979 「古道と遺跡」『史想』18  
近江俊秀 1996 「岡寺式軒瓦出土寺院をめぐる二、三の問題」『考古学雑誌』81—3





## V ま と め

今回集成できた仏教関連遺跡（古代寺院跡と仏教関連遺物を出土した遺跡）は199か所になる。それに線刻画古墳2か所、小金銅仏出土地（単独）6か所、生産遺跡（寺院へ供給する瓦窯跡と仏器を生産している須恵器窯跡）22か所を加え、房総における仏教関係遺跡は229か所になることが明らかになった。また、仏教と対比する意味で神道関係遺跡19か所（単独）、今後の寺院跡と瓦窯跡の新発見にそなえて他の瓦出土地（単独）90か所も併せて集成した。当初の見込みを大幅に上回る遺跡数になった。この仏教関係遺跡の多さは関東地方のみならず全国的にも特異な存在であることが明らかになったが、この数字が奈良平安時代の実体を示すものか、単に調査数に比例するものかは即断できないが、墨書土器の多量さを考慮してみると房総の特異性を示すものとしてよさそうである。

今回の集成作業の成果は一覧表と分布地図に示されている。そして、主要な遺跡についてはその概要を記し、さらに、遺構については新しい視点で分類し、その性格を明確にし、仏教受容の過程を後付けた。ここで付属施設を備えた伽藍寺院（特に初期寺院・国分寺）、単独の仏堂で主に構成された仏教施設、竪穴住居跡等から仏教関連遺物を出土する一般的な集落遺跡という3類型に分類した。この重層性の存在こそが最大の問題点になる。仏教関連遺物については公表されているものについてはすべて図示し、その概要を記した。また、問題点についても若干の考察を加えた。最後に試論として1地方の仏教受容の展開を素描した。本来なら房総全域にわたって行わなくてはならないが時間的問題と筆者たちの力量に限界があり、印旛郡・埴生郡にのみとどまってしまった。ただ今後の方向性を示し得たと思われる。

本巻の構成は要約すると以上のようなものになる。そこで最後に今回の研究により到達し得た点と今後の方向性について簡単に概略を記し、まとめとしたい。

### 1 瓦と柱穴だけから 一判ったこと一

歴史考古学において古代寺院を考える手段としてはまず出土した古瓦を中心に考えるのが伝統的な手法である。対象が明確であるためこの研究法は精緻なものとして完成されている。瓦当面の精密な分類に始まり、技法を通じて工人集団の特定、供給関係のあり方までを解明している。それにより各寺院の関係までを究明することが可能になっている。これらは畿内の文献の残っている大寺院を中心に行われた研究であるが、地方においてもその有効性は糸口を見つければ全く同じに操作できるものであることがようやく確立されてきた。房総においては龍角寺式の三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦と山田寺式の三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦の関係を考察することにより同時代性を明確にすることが可能になり、龍角寺式の三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦の型式変化も房総地域においてほぼ確立された。同様な例は上総国分寺の重圏文軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦、下総国分寺の宝相華文軒丸瓦においても確認されている。

遺構については上総・下総国分寺以外の初期寺院では、旧下総の結城市結城廃寺しか全体が判明している遺跡はない。地方の初期寺院を考える上で極めて重要な遺跡である。多量な軀仏と塑像の出土は今後の初期寺院を考える上で参考にすべきものである。

ここでは基壇と瓦をもつ本格的な寺院構成を有していると思われるもので、かつ各地域での拠点寺院として機能したものを初期寺院として考え、これらの成立時期について判明したことを列挙する。

- 1) 初期寺院は7世紀第3四半紀に出現。  
上総大寺廃寺跡、下総龍角寺
- 2) 初期寺院は7世紀第4四半紀に地域的に偏在傾向を有して増加。  
上総 光善寺廃寺跡、武士廃寺跡、二日市場廃寺跡、今富廃寺跡、九十九坊廃寺跡、真行寺廃寺跡  
下総 木下別所廃寺跡、八日市場大寺廃寺跡、龍正院
- 3) 初期寺院は8世紀前半（国分寺造営以前）から伽藍整備の時期を迎える。そして各地域に拡散。  
上総 菊間廃寺跡、法興寺跡  
下総 長熊廃寺跡、手賀廃寺跡、結城廃寺跡、木内廃寺跡、名木廃寺跡、千葉寺
- 4) 国分寺の成立。  
初期寺院と周辺地域に仏教が浸透する。
- 5) 国分寺成立期ないし直後に整備される初期寺院  
上総 真行寺廃寺跡（北基壇の瓦積み化粧は上総国分尼寺の影響と思われる）

## 2 墨書土器と仏教関連遺物から 一判ったこと2一

仏教関連遺物としては仏教関係が記載された墨書土器、浄瓶・水瓶、香炉、鉄鉢形土器、瓦塔、小金銅仏等を今回取り上げた。そして集成し、各々の変遷を明らかにし、分布論から仏教受容の側面を補強することにした。

仏教関連の墨書土器（ヘラ書、刻書を含む）を出土した遺跡数は102遺跡である。「寺」と書かれたものが最も多く83遺跡を数える。この中には寺名が判明したものが39遺跡を数える。寺名には郡名を表した上総真行寺廃寺跡の「武射寺」があり、郡名寺院の代表例である。地名を表したものとしては六拾部遺跡の「白井寺」、長熊廃寺跡の「高置寺」、久野高野遺跡の「桑田寺」、広遺跡の「坂津寺?」、一夜山遺跡の「赤穂寺」「阿光寺」、山田・宝馬古墳群の「小金山寺」「小金寺」、文六第6遺跡の「砂田東寺」、滝台東遺跡の「三井寺」等がある。ほかに吉祥句、仏・菩薩の名称や経典由来例、造営に関する例、方位、大小に関する例、僧侶の職名の例、その他がある。また、上総国分寺では寺名「金寺」「光寺」「金明光寺料」、付属諸院名「講院」「東院」「油菜所」「厨」等が出土しており、国分寺の全体を復元するのに欠かせない資料となっている。寺名墨書の初現は大袋台畑遺跡の「赤男（界）寺」「赤寺」、草刈遺跡の「草刈於寺坏」で8世紀第2四半世紀のものである。ただこの2遺跡にはほかに仏教関係を示すものがない。他の仏教関連墨書土器も本格的に増えるのは8世紀第3四半世紀からであり、9世紀前半にピークを迎える。

浄瓶・水瓶は27遺跡から30個体出土している。浄瓶は灰釉陶器が大部分を占め、東海地方の搬入品と考えられる。水瓶は須恵器が多く、永田・不入窯跡群、南河原坂窯跡群でも焼成されている。浄瓶は9世紀中葉には出現する。水瓶は8世紀第3四半紀に出現し、9世紀代に増加する。

香炉は20遺跡から39個体出土している。蓋の紐は塔を模したものが多く、身の部分は脚付きが多い。大部分は土師器であるが、安房国分寺では奈良三彩、東野遺跡では二彩が出土している。土師器の香炉は9

世紀初頭に出現する。

鉄鉢形土器は53遺跡から68個体出土している。内訳は須恵器15個体、土師器51個体、不明が2個体である。また、鉄鉢とセットとなるべき托は大綱山田台NO3遺跡の銅製托と3遺跡から出土した奈良三彩の托があるのみである。8世紀第3四半期に出現し、9世紀代に隆盛を見る。墨書土器と並んで集落における仏教受容の過程を最も反映しているものである。

瓦塔は37遺跡で出土している。破片のみの出土が多く、谷津遺跡、白幡前遺跡出土品は半完形品の少ない例である。白幡前遺跡出土品は赤色の彩色を施している。孟地遺跡、谷津遺跡では瓦金堂も一緒に出土している。鉄鉢形土器の出現時期は8世紀後半代であり、9世紀代に最盛期を迎える。

仏像は龍角寺の薬師如来座像が唯一の白鳳仏として現存している。ほかに成東町出土の観音菩薩立像が白鳳仏の可能性がただけである。関峯崎横穴群の3号横穴棺床出土の押出仏は7世紀後半と考えられている。また、駄ノ塚西古墳石室西壁の線刻の如来座像も7世紀後半ごろのものと思われる。奈良時代になると結城廃寺跡の甕仏と塑像、大栄町稻荷山出土の十一面観音菩薩立像2体がある。小金銅仏は平安時代のもので11か所から出土している。ほかに螺髪が2か所から単独で出土している。

ほかに仏教関連遺物として温石と考えられるものが白幡前遺跡、永吉台遺跡群西寺原地区、北アラク遺跡から出土している。いずれも蛇紋岩製である。また、萩ノ原廃寺跡からは鉄製の風鐸が出土している。

以上の仏教関連遺物の分布状況を見ると初期寺院、国分寺周辺と全く関係ない地域に8世紀第3四半期から増大することが明らかになった。この傾向は9世紀の中葉を最盛期として9世紀末まで継続する。

### 3 「村落内寺院」は存在しない 一判ったこと3一

最初に寺院が建立される。初期寺院は当然としても所謂「村落内寺院」においてもこれはあてはまる。従来「村落内寺院」と言われてきたものには一般の村落ではなく、寺院を支える機能を有する「村落」も含まれている。言い換えれば寺院の付属施設である。初期寺院、国分寺と違い明確な伽藍区画をもたないために、また近接して竪穴住居、掘立柱建物が営まれたための誤解なのである。萩ノ原遺跡(「寺」「寺塔」、東郷台遺跡(「寺」、永吉台遺跡群遠寺原地区(「土寺」「山寺」、山田台廃寺跡、白幡前遺跡(「大寺」、郷部・加良部遺跡(「忍保寺」「大寺」「新寺」、山口遺跡(「忠寺」)などは独立した寺院として存在していたのである。ただし、須田勉が提唱した「村落内寺院」は以上のような遺跡ではなく一般村落において堂のみが存在する「寺院」や仏教関連遺物出土する村落において使用できる用語ではある。しかしながらその定義付けは根本的な変更が必要になる。

上記の遺跡以外に瓦をもつ一堂の寺院としての小食土廃寺跡、葦棟の仏堂をもつ大塚前遺跡、基壇に小型瓦を使用した建物をもつ小谷遺跡、瓦をもたない双堂の内野台遺跡(「祥寺」、仏堂をもつ多田日向遺跡(「観音寺」「三綱寺」「多里草寺」)等も同様な寺院である。これらは8世紀第3四半期以降に成立し、10世紀前半までは機能している。また、六拾部遺跡(「白井寺」、久野高野遺跡(「桑田寺」、広遺跡(「坂津寺?」、北海道遺跡(「勝光寺?」、一夜山遺跡(「赤穂寺」「阿光寺」、山田・宝馬古墳群(「小金山寺」「小金寺」、文六第6遺跡(「砂田東寺」、滝台東遺跡(「三井寺」)等の施設を持たない寺の存在も無視することのできないものである。これらの墨書土器の年代は8世紀第3四半期から9世紀代にかけてのものである。

初期寺院以外のこれらの仏教施設は8世紀第3四半期から成立し、9世紀代にわたって存続している。中には10世紀代まで存続する遺跡もある。これは仏教関連遺物と全く同じ傾向を示す。

#### 4 古代寺院研究から仏教関連遺跡研究へ — 今後の課題 —

古代寺院研究の難しさはその総合性にある。古代仏教の難解性はその具現体である荘厳な建築、仏像、仏画等の仏教美術、文献史料等を総合して初めて理解されるものである。ただし、房総地域においては古代寺院の雰囲気をとどめるものは龍角寺の白鳳仏しか残されていない。あとは出土する瓦と遺構のみになる。結城廃寺跡の軀仏と塑像群は、古代寺院の思想と空間を考察するのに大きな手がかりになるものである。畿内に遺存する古代寺院の比較検討は当然であるが、瓦だけに頼るのはもはや限界である。むしろ建物の本格的な比較検討に入る時期に来ている。

瓦は使用目的がはっきりしている建築部材であるため土器の編年観とは違う「所用」という概念が先行するため、どうしても在地の土器編年との摺合せの厳密さに欠けているきらいがあり、古代寺院の年代観にも齟齬をきたしている部分が見られる。幸いなことに国分寺造営の詔という全国的に通用する文献史料が存在し、また国分寺の調査は全国的に実施され、国分寺造営過程が明らかになりつつあるこの時期に取り組むべき大きな問題である。考古学上全国的に同時代の認定をできる事象はほかには存在しないのであるから。房総においても国分寺の造営過程を土器編年に当てはめることが容易になれば、一般村落における仏教関連遺物の時期決定に大きな意義をもつようになってくる。

今回の一番の大きな成果は仏教の影響と思われるものをとにかく集成したことであった。その結果は想像を越える遺跡、遺物の多さであった。そして、従来古代寺院研究は古瓦出土地を中心に考えていたが、それでは全体像を明らかにすることが困難になっている状況であることがはっきりした。瓦をもつ寺院、瓦をもつ一堂の寺院、瓦をもたない寺院、一堂の村落内の仏教施設、仏教関連遺物だけが出土する竪穴住居等の差異は時間的、空間的に重層的に存在している。この意義を最終的に解明しなければ古代社会の民衆の実像に迫れない。今後はこの集成作業の成果を生かして仏教関連遺跡研究を進めたい。

なお、ここで瓦について敢えて触れなかったのは以上のような主旨であったことによる。今後も並行して進めなければならない道である。

# 遺 跡 一 覧 表

## 凡 例

1 仏教関係遺構・遺物の出土した遺跡は『仏教関係遺跡』に掲載し、須恵器・瓦窯跡、製鉄遺跡から仏教関係遺物が検出された遺跡については『生産遺跡』の中で、仏教関係の線刻が見られる古墳については『線刻画古墳』、小金銅仏は『小金銅仏出土遺跡』の中で取り扱った。

瓦のみが検出された遺跡は、瓦については仏教関係遺跡以外からも出土することから、混乱を避けるために『瓦出土地』として一括して取り扱った。また、神道関係の遺物が出土した遺跡についても、仏教関連との比較という観点から『神道関係遺跡』としてまとめた。ただし、仏教関連の遺物・遺構が検出された遺跡から複合的に神道関係の遺物が出土した場合は、仏教関係遺跡の中の特殊遺物の項目で触れ、神道関係遺物の集成表からは除いている。

2 表の各項目については以下のとおりである。

- (1) Naについては、各表の種別ごとの番号を記した。
- (2) 地図については、国土地理院発行25,000分の1の地図名を表している。
- (3) 国郡の記載・所在については、千葉県立中央図書館が1970年に刊行した『千葉県地名変遷総覧』に主に依拠している。
- (4) 時期については、遺跡内の古墳時代から平安時代までの存在する遺構・遺物の時期を表している。
- (5) 当該時期については、仏教関係遺構・遺物等の存続時期を表している。
- (6) 竪穴については、主に奈良・平安時代の竪穴住居跡の軒数を表している。
- (7) 掘立については、掘立柱建物跡の棟数を表している。
- (8) 遺構1・遺構2については、竪穴住居跡・掘立柱建物跡以外の遺構を表している。
- (9) 仏教遺物については、墨書・線刻を含めた仏教関係遺物について表している。
- (10) 墨書土器については、遺跡内から出土した墨書・線刻の判読可能なものを示したが、「寺」・「仏」等仏教関係の遺物は仏教遺物の中で扱っているので、除外した。
- (11) 特殊遺物については、灯明皿、奈良三彩等の特殊な遺物について記載した。
- (12) 概要欄の数字は文献目録の番号と一致する。

# 仏教関係遺跡

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
1	姉崎	上総国市原郡	上総国分僧寺	市原市惣社字太子堂812他	台地上	25	養老川	8世紀中葉～	8世紀中葉～			基壇建物跡 (金堂・塔・中門・回廊・講堂・南大門・西門)		井戸	
2	姉崎	上総国市原郡	上総国分尼寺跡	市原市根田字祇園原	台地上	25	養老川	8世紀中葉～不明	8世紀中葉～不明			基壇建物跡 (金堂・中門・回廊・講堂・経楼・鐘楼・東門)		銅遺構	
3	蘇我	上総国市原郡	光善寺廃寺跡	市原市市原	台地上	23		7世紀第4四半期～不明	7世紀第4四半期～不明						
4	鶴舞	上総国市原郡	奉免上原台遺跡	市原市奉免字上原台	台地上	80	養老川	8世紀第1四半期・9世紀中葉	8世紀第1四半期	4	1	方形墳墓	55	火葬墓	10
5	蘇我	上総国市原郡	菊間廃寺跡	市原市菊間	台地上	20	村田川	8世紀前半～不明	8世紀前半～不明						
6	海土有木	上総国市原郡	武士廃寺跡	市原市福増字大明神	台地上	75	養老川	7世紀第4四半期～不明	7世紀第4四半期～不明						
7	海土有木	上総国市原郡	武士遺跡	市原市福増字向田・勝間字土器石	台地上	75	村田川	7世紀後半～9世紀前半	8世紀後半	1		方形墳墓	37		
8	蘇我	上総国市原郡	千草山遺跡	市原市能満字西千草山1450他	台地上	30		7世紀～10世紀	8世紀後半～10世紀前半	72	9	基壇建物跡	1	鍛冶遺構	
9	蘇我	上総国市原郡	南大広遺跡	市原市能満字東四辻1871-6他	台地上	40		8世紀後半～9世紀	8世紀後半～9世紀	5	2	基壇建物跡	1	鍛冶遺構	1
10	海土有木	上総国市原郡	孟地遺跡	市原市山倉字孟地	台地斜面	44		8世紀第3四半期	8世紀第3四半期						
11	鶴舞	上総国市原郡	沢遺跡	市原市奉免字沢165他	河岸段丘上	27	養老川	古墳時代後期～平安時代		2	4	工房跡	1		

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
二十四葉蓮華文・有心二重 圈文・有心三重圈文軒丸瓦 均整唐草文・重郭文・素 文・連珠文軒平瓦 丸瓦(無 段・有段) 平瓦(縄叩き・ 格子叩き)	墨書土器「金寺」「講院」 「光寺」「法花寺」「金 明光寺料」如来立像 銅製風鐸	「講院」「東院」「油菜所」 「厨」「充 広椅備所坏」 「器」「末」「畔」「安カ蒜」 「長カ柄刑田」「新田」「罫 山」「老 蘆道」「金安」 「金明光寺料」「法花寺」 「金寺」「光寺」	銅鏡 帶金具 和同開 珎2	大官大寺式の伽藍地と、南 北約490m、東西325mの寺 域が明らかになっている。 2・3・6・8・9・10・14・15・ 16・39・52・67・88・109・ 113・118・127・133・135・ 142・195・273・412・423・ 468・469・471・472・473・ 525
二十四葉蓮華文・有心三重 圈文軒丸瓦 均整唐草文・ 重郭文軒平瓦 丸瓦(無 段・有段) 平瓦(縄叩き・ 格子叩き)	墨書土器「法花寺」 花瓶 螺髪	「盛」「大屋」「甘木」「法 証」「佛勝」「川成」へ ラ書き瓦「人 倉椅郷長 谷部稲□」	埴塙 帶金具(鉸具・ 巡方) 仏像鑄型	南北371m、東西285～350m に及ぶ寺域が明らかになっ ている。53・57・116・142・ 166・229・408・412・465・ 466・467・482
単弁四葉蓮華文・鋸齒文縁 複弁八葉蓮華文・素文縁複 弁八葉蓮華文・複々弁四葉 蓮華文・単弁二十四葉蓮華 文・重圈文軒丸瓦 三重弧 文・均整唐草文・重郭文軒 平瓦 丸瓦(無段・有段) 平瓦(格子叩き・縄叩き・ 凸面布目) 甗				遺構については未確認であ るが、多種多量の瓦と甗が 出土している。 78・479
三重圈文縁単弁四葉蓮華文 軒丸瓦 三重弧文軒平瓦 丸瓦(無段・有段) 平瓦 (格子叩き・凸面布目)				8世紀第1四半期の遺構群 周辺から、まとまった瓦が 出土している。 362
細弁蓮華文軒丸瓦 均整唐 草文軒平瓦 丸瓦 平瓦 (格子叩き・縄叩き)				瓦は表面採集資料。以前は 土壇状の高まりがあったと されるが、現在は確認でき ない。71
鋸齒文縁複弁八葉蓮華文・ 鋸齒文縁複々弁四葉蓮華 文・重圈文軒丸瓦 三重弧 文・重郭文軒平瓦 丸瓦(無 段) 平瓦(縄叩き)				複数の瓦散布地が知られ、 道路工事に伴い一部発掘調 査されているが、詳細不明 である。瓦窯跡の可能性も 指摘されている。 47・481
三重圈文縁単弁八葉蓮華 文・有心三重圈文軒平瓦 唐草文・重郭文軒平瓦 丸 瓦(無段) 平瓦(格子叩き・ 縄叩き)			帶金具(丸柄)	遺構は確認されなかったが、 瓦葺建物跡が存在した可能 性が高い。 431
単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦 均整唐草文軒平瓦 丸瓦 平瓦(縄叩き・格子叩き)	墨書土器「寺」	線刻「得方」	神功開寶 飾金具	昭和38年調査で礎石を伴う 基壇が確認され、大量の瓦 が出土した。93・208・294・ 317・422
丸瓦(無段) 平瓦(格子 叩き)	墨書土器「寺」		蔵手刀 鉄滓	104・354
	瓦塔 瓦堂		灯明皿	瓦塔・瓦堂は多くの灯明皿 を含む一括表面採集資料で ある。374
	土師器鉄鉢形土器			300

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
12	姉崎	上総国 市原郡	荒久遺跡	市原市惣社 字荒久1006 他	台地 上		養老 川	8世紀 後半～ 12・13 世紀	8世紀 後半～ 12・13 世紀	280	4				
13	姉崎	上総国 市原郡	坊作遺跡	市原市根田 540他	台地 上			8世紀 中葉～ 10世紀 初頭		114	21				
14	蘇我	上総国 市原郡	市原条里制遺 跡	市原市市原 ・八幡・菊 間・藤井・ 郡本	低地	5		奈良・ 平安時 代							
15	蘇我	上総国 市原郡	草刈遺跡	市原市草刈 字下切付他	台地 上	30	村田 川	8世紀 前半～ 9世紀	8世紀 前半						
16	蘇我	上総国 市原郡	押沼第1遺跡	市原市押沼 字金糞896 他	台地 斜面	45～ 51	村田 川	8世紀 第3四 半期	8世紀 第3四 半期			製練炉	7	作業場	8
17	姉崎	上総国 海上郡	二日市場廃寺跡	市原市二日 市場機織面 572-1他	河岸 段丘 上	15	養老 川	7世紀 第4四 半期～ 10世紀 後半…	7世紀 第4四 半期～ 不明		3	溝	9	土坑	
18	姉崎	上総国 海上郡	今富廃寺跡	市原市今富 字坊ヶ谷	河岸 段丘 上	7	養老 川	7世紀 第4四 半期～ 不明	7世紀 第4四 半期～ 不明						
19	姉崎	上総国 海上郡	釜神遺跡	市原市浅井 小向499-1 他	台地 上	33	養老 川	古墳時 代後期 ～11世 紀		234	5	古墳	9		
20	姉崎	上総国 畦蒜郡	萩ノ原遺跡	市原市上高 根字萩の原	台地 上	86	小櫃 川	8世紀 後半～ 10世紀	8世紀 後半～ 10世紀	22	4	基壇建物 跡	2	鍛冶遺構	5
21	上総横 田	上総国 畦蒜郡	真里谷廃寺跡	木更津市真 里谷字横峯	台地 上	55	小櫃 川	8世紀 後半～ 不明	8世紀 後半～ 不明						
22	姉崎	上総国 畦蒜郡	東郷台遺跡 (川原井廃寺跡)	袖ヶ浦市川 原井字東郷 台1403-16 他	台地 上	84	小櫃 川	8世紀 第4四 半期～ 9世紀 後半	8世紀 第4四 半期～ 9世紀 後半	8	6	溝	7	土坑	16
23	久留里	上総国 畦蒜郡	愛宕前遺跡	君津市向郷 字愛宕前 1540-1他	台地 上	78	小櫃 川	8世紀 末～9 世紀	8世紀 末			土坑	1	石組カマ ド	1



出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
軒丸瓦 均整唐草文軒平瓦 丸瓦	浄瓶 水瓶 三彩鉄鉢 形土器 三彩鉄鉢形土 器 墨書土器「講院」 「金光」「□院」「畦□ 院」「四院」「卍」	「南」「盈」「蘭」「益」「信」 「財」「莊」「吉祥」「大井」 「厨」「田主」「東」「司」 「吉」「和世」「小川」「正」 「上」「望負」「湿津寺カ 田」「□長カ谷部郷西里」	飾金具	上総国分僧寺の東に隣接す る。国分僧寺の機構を示し た墨書土器が多数出土し た。国分寺の機能を支える 上で重要な役割を果たした 遺跡である。166
丸瓦(無段) 平瓦(縄叩 き)	墨書土器「法花寺」「法 花」「佛騰」「造寺」	「佛騰」「勝」「最」「興」 「海上厨」「市原□」		上総国分尼寺跡の北側に接 する。国分尼寺と関連する 墨書土器等が多く出土し ており、国分尼寺と深く関わ った遺跡である。166
単弁四葉蓮華文・単弁二十 四葉蓮華文・重圈文・複弁 八葉蓮華文・複々弁四葉蓮 華文軒丸瓦 三重弧文・均 整唐草文軒平瓦 丸瓦(無 段・有段) 平瓦(格子叩 き・平行叩き・縄叩き・凸 面布目) 輓	浄瓶			上総国分寺、光善寺廃寺跡、 菊間廃寺跡が立地する台地 の下に拡がる条里制遺跡。 343・400・415・443
	墨書土器「草苺於寺坏」 浄瓶	「草苺於寺坏」「西万」	青銅製箸 帶金具(丸 柄・鉈尾)	401
	須恵器鉄鉢形土器			製鉄遺跡のK地点から鉄鉢 が出土した。斜面上方の台 地上で発見された方形周溝 状遺構等と関連する可能性 がある。373
雷文縁複弁八葉蓮華文・三 重圈文縁単弁八葉蓮華文・ 素文縁単弁十二葉蓮華文軒 丸瓦 二重弧文・三重弧 文・唐草文軒平瓦 丸瓦(無 段・有段) 平瓦(格子叩 き・縄叩き・凸面布目)	香炉蓋		小鍛冶遺物	仏堂の存在は未確認である が、東西約150mの瓦散布範 囲の両端付近から南北方向 の溝が発見されている。多 種多量の瓦が発見されてい る。 249・485・487
三重圈文縁単弁八葉蓮華文 軒丸瓦 二重圈文縁単弁八 葉蓮華文軒丸瓦 重圈文軒 丸瓦 均整唐草文軒平瓦 丸瓦(無段・有段) 平瓦 (格子叩き・平行叩き・縄 叩き)				遺構は未確認であるが、瓦 と「坊ヶ谷」「唐(塔)ヶ崎」 等の地名と、塔跡などの伝 承が残されている。 233・488
	墨書土器「□寺」			田所真氏より墨書土器「□ 寺」の出土をご教示いただ いた。 432・451
平瓦(格子叩き・縄叩き)、 丸瓦(無段)	墨書土器「寺」「寺塔」 「塔寺」「佛」鉄製風 鐸 太刀 浄瓶 水瓶 青銅製匙 瓦塔 土 師器香炉蓋	「大」「合」「入」「方」「法 カ」「原」「寺・及不寺」 「□□寺」「土カ」	手捏ね 帶金具(巡方) 土器	基壇建物跡と大型の掘立柱 建物跡を中心とした寺院跡。 189
有心二重圈文・有心三重圈 文軒丸瓦 唐草文軒平瓦 平瓦(縄叩き・格子叩き) 輓				瓦は表面採集資料。明治初 期に廃寺となった西光寺が 位置していたと伝えられて いる。33
唐草文軒平瓦 平瓦(格子 叩き・ヘラケズリ・縄叩き) 丸瓦(無段・有段) 熨 斗瓦	瓦塔 水瓶 墨書土器 「四佛」「寺」「□寺」		鉄滓 羽口 灯明皿	掘立柱建物跡から礎石建物 跡へ建替えられた仏堂を中 心とした寺院跡。212・274
	線刻杯「寺」 ロクロ 土師器鉄鉢形土器	線刻「東」	転用硯 灯明皿	仏教遺物と灯明皿等が石組 カマド周辺からまとまって 出土した。279

No.	地区	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
24	木更津	上総国望陀郡	上総大寺廃寺跡	木更津市大寺字本郷	河岸段丘上	8	小櫃川	7世紀第3四半期～不明	7世紀第3四半期～不明						
25	木更津	上総国望陀郡	小谷遺跡	木更津市請西1951-1他	台地上	65	矢那川	8世紀後半～9世紀初頭	8世紀後半			基壇建物跡	1	方形墳墓	2
26	上総横田	上総国望陀郡	久野遺跡	木更津市下郡錯綜地字西久野ヶ原2502他	丘陵上	98～105	矢那川	8世紀第3四半期～10世紀	8世紀第3四半期～10世紀	33	2	基壇建物跡	6	鍛冶遺構	6
27	上総横田	上総国望陀郡	永吉台遺跡群遠寺原地区	袖ヶ浦市永吉字西寺原ノ式169他	台地上	63～75	小櫃川	8世紀後半～10世紀	8世紀第4四半期～9世紀前半	51	17	土坑	10		
28	姉ヶ崎	上総国望陀郡	上大城遺跡	袖ヶ浦市代宿字上大城	台地上	45	浜宿川	8世紀後半～10世紀前半	8世紀末～9世紀中葉	14	6	土坑	2	方形墳墓	1
29	上総横田	上総国望陀郡	永吉台遺跡群西寺原地区	袖ヶ浦市永吉字西寺原ノ式169他	台地上	63～75	小櫃川	9世紀第1四半期～10世紀	9世紀第1四半期～中葉	133	8	火葬墓	1	土器焼成遺構	60
30	姉崎	上総国望陀郡	神田遺跡	袖ヶ浦市蔵波字西久保上616他	台地上	35～37	蔵波川	8世紀後半～9世紀	8世紀後半～9世紀	7	1				
31	上総横田	上総国望陀郡	文脇遺跡	袖ヶ浦市野里字西十二天1589他	台地上	38～40	小櫃川	9世紀～10世紀		50					
32	木更津	上総国望陀郡	上ノ山A遺跡	木更津市矢那字上ノ山1962-1他	丘陵上	83	矢那川	8世紀後半～10世紀前半	8世紀後半		2		4	鍛冶遺構	
33	鹿野山	上総国周准郡	九十九坊廃寺跡	君津市内箕輪字九十九坊台他	台地上	27	小糸川	7世紀第4四半期～不明	7世紀第4四半期～不明			基壇建物跡(塔・講堂)	2	掘立柱	
34	鹿野山	上総国周准郡	郡遺跡	君津市郡字下赤磯・小山野字福造	河岸段丘上	13～23	小糸川	9世紀	9世紀		14	土器焼成土坑	1	鍛冶遺構	3
35	鹿野山	上総国周准郡	南子安金井崎遺跡	君津市南子安	台地上	27	小糸川	8世紀後半～10世紀前半	8世紀後半～10世紀前半	23	40	鍛冶工房跡	1	溝	1
36	富津	上総国周准郡	川島遺跡	富津市大和田847他	河岸段丘上	8～10	岩瀬川	奈良・平安時代		12	1	井戸	2		

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
面違鋸齒文縁複弁八葉蓮華文・重圈文縁単弁四葉蓮華文・重圈文軒丸瓦 三重弧文・四重弧文・重郭文・均整唐草文軒平瓦 丸瓦 平瓦 (格子叩き・縄叩き)	石製露盤			未発掘であるが、多くの瓦と共に、凝灰質砂岩の石製露盤が字「とうのこし」から発見されている。 106・508・509
単弁4弁軒丸瓦 山形文軒平瓦 平瓦 (縄叩き) 丸瓦 (無段) 隅切丸瓦 隅切平瓦	瓦塔 瓦堂			基壇跡1基と共に多量の小型瓦が発見された。瓦塔と瓦堂は基壇跡からやや離れた地点からまとまって出土した。388
丸瓦 (無段) 平瓦 (平行叩き) 熨斗瓦	墨書土器「赤徳寺」「大般若」土師器香炉蓋 土師器鉄鉢形土器		灯明皿 転用硯	東西に細長い丘陵上の3箇所から仏堂跡が発見された。丘陵の西側からは多くの瓦と共に基壇建物跡4基が確認された。415・443
丸瓦 (無段) 平瓦 (格子叩き・縄叩き)	墨書土器「土寺」「田寺カ」「西カ寺」「山寺」「寺」ヘラ書き土器「寺」瓦塔 香炉蓋 ロクロ土師器鉄鉢形土器	「田」「酒井」「内」「主」「山」「信」「得」「井」 「□宋□」「家」「土家」 「十」「井/土」「土家」 「万得」「家土」「天」「大」 「四□」ヘラ「十」「万得」	風字硯 灯明皿 青銅鏡	三間四面の掘立柱建物跡を中心とした寺院跡。267
平瓦 (縄叩き)	浄瓶 瓦堂 (塔) 香炉蓋	「平」「立/立」	灯明皿	4、5号竪穴住居跡から瓦堂片が出土した。391
丸瓦 (無段) 平瓦 (格子叩き・縄叩き) 輓	墨書土器「僧」「佛」「西寺」温石 脚付香炉	「万」「主」「酒式升半/浄浄/稲五千」「内」「天」 「得」「野/野/野」「仁」 線刻「十」「土」「二」 「×」「月」「有」ヘラ 「八」「加」「人」「上」	灯明皿 羽口 鉄滓 鉄製三足鍋 鉄製匙 土馬 硯 陶印 帯金具 (巡方)	竪穴住居跡等から多くの仏教関連の墨書土器等が出土した。267
	土師器香炉蓋	「為カ」		古墳周溝から香炉蓋が出土した。418
	土師器香炉蓋	「春」「今」「東□」「本カ」 「得/得」「得」「大」「○カ」 「今継」「中」「信」 ヘラ「□和」		グリッドから香炉蓋の宝珠紐が出土。363・420
				丘陵頂部から一間四面の掘立柱建物跡が発見された。435
三重圈文縁単弁四葉蓮華文軒丸瓦 三重弧文・二重弧文軒平瓦 丸瓦 (無段・有段) 平瓦 (格子叩き・縄叩き)	浄瓶			塔基壇と講堂基壇が発見されているが、金堂は未確認である。法隆寺式の伽藍に復原されている。23・426・462・500
単弁四葉蓮華文軒丸瓦 丸瓦 平瓦 (格子叩き)	墨書土器「加安」	「加」「加安」「副カ内」 「内」「十万」「集」		九十九坊廃寺跡に隣接する。寺院関連施設の可能性がある。426
	香炉蓋 水瓶	「南家」「宝カ」		364・421

No	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
37	海土有木	上総国長柄郡	針ヶ谷遺跡	長生郡長柄町針ヶ谷字中野	丘陵上	133	一宮川	8世紀第3四半期	8世紀第3四半期	1	5				
38	東金	上総国山辺郡	大椎第1遺跡	千葉市緑区大椎町656他	台地上	88	村田川	7世紀第4四半期～不明	7世紀第4四半期～不明	1					
39	東金	上総国山辺郡	弥三郎第3遺跡	千葉市緑区大椎町581他	台地上	82	村田川	7世紀第4四半期～不明	7世紀第4四半期～不明	1					
40	東金	上総国山辺郡	小食土廃寺跡	千葉市緑区小食土町698他	丘陵上	97	村田川	8世紀第3四半期～不明	8世紀第3四半期～不明	12	2	基壇建物跡(金堂)	1	溝	
41	東金	上総国山辺郡	鐘つき堂遺跡	千葉市緑区小食土町1178-79他	台地上	80～89	村田川	奈良・平安時代		30	23	土壇墓	52	鍛冶遺構	
42	東金	上総国山辺郡	内野台遺跡	千葉市緑区小山町内野台	台地上	90	村田川	9世紀前半	9世紀前半	4	5				
43	東金	上総国山辺郡	尾亭遺跡	東金市小野字尾亭1270-1他	台地上		真亀川	奈良・平安時代		109	31				
44	東金	上総国山辺郡	大椎第2遺跡	千葉市緑区小食土町1163-13他	台地上	87～92	村田川	8世紀後半～9世紀	8世紀後半～9世紀	9	3				
45	東金	上総国山辺郡	山田台廃寺跡(大網山田台No.3遺跡)	山武郡大網白里町	台地上	80	南白亀川								
46	東金	上総国山辺郡	荻生道遺跡	千葉市緑区小食土町	台地上	97	村田川	古墳時代後期～平安時代	不明	75	14				
47	東金	上総国山辺郡	山荒久遺跡	山武郡大網白里町金谷郷	台地上	85	鹿島川	7世紀中葉～9世紀末		143	3				
48	八街	上総国山辺郡	滝台遺跡	八街市滝台松入	台地上	60	真亀川	奈良・平安時代	不明			基壇建物跡		鍛冶遺構	
49	東金	上総国山辺郡	南河原坂第2遺跡	千葉市緑区小食土町1178-34他	台地上	93	村田川	9世紀	9世紀	7	2	溝	1		
50	東金	上総国山辺郡	後沢第1遺跡	千葉市緑区大椎町936他	台地上	93	村田川	8世紀中葉～9世紀後半			7				
51	蘇我	上総国山辺郡	大野第7遺跡	千葉市緑区大木戸町1209-22他	台地上	60～80	村田川	8世紀中葉～9世紀前半	9世紀前半	4	4	方形墳墓	2		

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
			和同開珎	三間四面の掘立柱建物跡を中心とした遺跡。出土須恵器の中に水瓶の可能性もある瓶下半資料がある。440
平瓦(凸面布目)				大量の瓦が発見されたが、瓦を伴う遺構は発見されていない。瓦窯跡の可能性も指摘されている。35・381
重圈文縁単弁四葉蓮華文軒丸瓦 平瓦(凸面布目)				大量の瓦が発見されたが、瓦を伴う遺構は発見されていない。瓦窯跡の可能性も指摘されている。35・381
単弁二十四葉蓮華文・重圈文軒丸瓦 均整唐草文・四葉唐草文・重廊文・木葉文軒平瓦 丸瓦(無段)平瓦(縄叩き) 熨斗瓦	土師器鉄鉢形土器	「富□」 「干」	ヘラ書き瓦 小鍛冶遺物	溝に区画された基壇建物跡を中心とした寺院跡。280
均整唐草文・唐草文・ヘラ書き波状文軒平瓦	墨書土器「寺東」「佛」「釈迦寺」「□祥寺」	「山万」ヘラ書き「万万」「井天」	三彩破片	437
	墨書土器「祥寺」		奈良三彩	大型の掘立柱建物跡を中心とした寺院跡。266・381
	瓦塔			二間四面の掘立柱建物跡付近で瓦塔片が出土し、仏堂の可能性が指摘されている。442
平瓦(縄叩き)	ヘラ書き「寺」土師器鉄鉢形土器 灰釉陶器水瓶	「長」「七」「田」「福」「意□□□」ヘラ「真」「山」「十」「大 □」	三彩小壺蓋 転用硯灯明皿	6号竪穴住居跡からヘラ書き土器「寺」と鉄鉢形土器が出土。358
均整唐草文軒平瓦	銅椀 銅托 香炉蓋 土師器鉄鉢形土器	「丁」「刑部酒主女」「□(万カ)丁」「井」「万」「生万」「山口万」「立万」「山本」		掘立柱建物から礎石建物に建替えられた四間四面建物跡を中心とした寺院跡。
瓦	瓦塔			小食土廃寺跡に隣接する。神社遺構と指摘されている区画を伴う遺構群が発見されている。201
	瓦塔 土師器鉄鉢形土器		麟鳳八花鏡 鐘鈴 転用硯	竪穴住居跡から仏教遺物が出土。392
瓦	墨書土器「佛」「寺」		印章「山邊郡印」 鉄滓	山邊郡家推定地の一つ。108
平瓦(縄叩き)	浄瓶 土師器鉄鉢形土器	「□(仲カ)子/中村」「子□村」「子中村」「突□」「孝/突□□」	灯明皿	5号竪穴住居跡から多くの灯明皿と共に鉄鉢形土器が出土。357
	浄瓶	「井□(直カ)」「山田大□(向カ)」	銅製皿 青銅製男神立像	357
	墨書土器「佛」		灯明皿 羽口	竪穴住居跡から墨書土器「佛」が出土。385

No	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
52	茂原	上総国 山辺郡	中鹿子第2遺跡	千葉市緑区 小山町中鹿子	台地上	95～99	村田川	8世紀 中葉～ 10世紀 前半	9世紀	68	117				
53	蘇我	上総国 山辺郡	西大野第1遺跡	千葉市緑区 大木戸町 1206-28他	台地上	60～80	村田川	9世紀	9世紀 前半	9		土坑	2		
54	東金	上総国 山辺郡	文六第6遺跡	千葉市緑区 小食土町 1159-14他	台地上		村田川	9世紀 初頭	9世紀 初頭	1					
55	東金	上総国 山辺郡	文六第2遺跡	千葉市緑区 小食土町 1164他	台地上	88～91	村田川	9世紀 中葉～ 後半	9世紀 中葉	7		土器窯跡	1		
56	八街	上総国 山辺郡	鹿穴遺跡	山武郡山武 町森字鹿穴 1811他	台地上	54	作田川	8世紀 第3四 半期	8世紀 第3四 半期	3					
57	八街	上総国 山辺郡	岡田山遺跡	東金市酒蔵 字岡田山 147-1他	台地上	55	作田川	8世紀 第4四 半期～ 9世紀 初頭	9世紀 初頭	6					
58	東金	上総国 山辺郡	滝東台遺跡	東金市油井 字丑子台 1164-2他	台地上	57	真亀川	6世紀 後半～ 9世紀 後半	9世紀 前半～ 中葉	218	159				
59	東金	上総国 山辺郡	山田水呑遺跡	東金市山田 字水呑台	台地上	65～70	鹿島川	8世紀 前半～ 9世紀	9世紀 前半	143	52				
60	東金	上総国 山辺郡	油井古塚原遺跡	東金市油井 字丑子台 1178-8他	台地上	57	真亀川	6世紀 後半～ 9世紀 中葉	8世紀 第4四 半期～ 9世紀 初頭	79	22				
61	八街	上総国 山辺郡	新堀遺跡	東金市滝沢 字新堀546- 1他	台地上	56	真亀川	8世紀 中葉～ 9世紀 後半	9世紀 中葉	4					
62	東金	上総国 山辺郡	宮台遺跡	山武郡大網 白里町萱野 762他	台地上	90～96	村田川	8世紀 後半～ 9世紀	8世紀 第4四 半期	23	2				
63	東金	上総国 山辺郡	南麦台遺跡	山武郡大網 白里町萱野 字南麦台 778他	台地上	90～96	村田川	7世紀 ～10世 紀	9世紀 前半～ 中葉	146	149	方形周溝 状遺構	2		

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	墨書土器「寺」「佛カ」	「穴」「行」「来」「大□」 「太」「於夫井」「大畠」 「太仁田」「王立賀」「立 加」「王内」「刑部」「勝」 「刀」「國厨」「草」「草工」 「上万」「造能」「太継」 「細尾」「□岑」「山田」 「丈□」「福」「酒坏」「長 本」「櫻」「傍」	帶金具（鉈尾） 通寶	萬年 豎穴住居跡から仏教遺物が 出土。356
	墨書土器「本／佛佛」		灯明皿	386
	墨書土器「砂田東寺」 「祥寺」			381
平瓦（縄叩き）	墨書土器「祥寺」	「一万」	八花鏡	2号豎穴住居跡から墨書土 器「祥寺」が出土。2・372
	須恵器鉄鉢形土器		灯明皿 転用碗	豎穴住居跡から鉄鉢形土器 が出土。415
丸瓦	墨書土器「前寺□」		灯明皿	415
丸瓦 平瓦（格子叩き）	墨書土器「三井寺」「佛」	「中人」「坂本」「穴井十」 「布」「子梨原カ」「廣人」 「弓」「山川」「政」「山」 「田」「福□」「穴井若」 「具」「方」「高山」「酒□」 「道」「布万」「三井」「大 仁井カ」「万得」「高」「得 家」「若女坏」「井」「太竹」 「吉」「園」		豎穴住居跡H-119から墨書 土器「三井寺」「佛」「寺」 「酒□」などがまとまって 出土した。417・406
	土師器鉄鉢形土器	「佐」「小付」「井」「山口 館」「上川」「散□□」「上/ 上」「上田」「□（銜カ）」 「山邊」「山邊大」「家正 ×」「山佐」「山辺大」 「佐倉」「佐倉・十」「舎」 「中野」「□□（馬雁カ）」 「加／加」「真」	灯明皿 帶金具（鉈尾）	豎穴住居跡から鉄鉢形土器 が出土。190
	墨書土器「寺」	「廣得」「加万カ」「万」 「万一カ」「門」「大生」 「福」「万福」「半」「上井」 「大井」「山□万」「山邊」 「芳」「丁」「大」「酒カ」 「佐カ」 線刻「十」「上」 「中」		豎穴住居跡H-155から墨書 土器「寺」が出土。417
	土師器鉄鉢形土器		灯明皿	豎穴住居跡から鉄鉢形土器 が出土。415
	墨書土器「大福□（寺 カ）」	「新カ」「倉」「元カ」「庁 原」「利」「酒／□」「中」 ヘラ「未」		豎穴住居跡から墨書土器 「大福□（寺カ）」が出土。 318
	墨書土器「殿寺」	「西」「葛」「中上」「長本」 「草新」「草」「太」「草野」 「物真」「豊」「□子良」 「酒／草」「加本」「□□ （所万カ）」「山 中上」 ヘラ「金」 線刻「大」	墨書土器 帶金具（鉈 具・巡方） 石製紡錘 車線刻「下総国千葉郡 千葉郷」	D地区78号豎穴住居跡から 墨書土器「殿寺」が出土。 393

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
64	茂原	上総国 山辺郡	いさごだ なかだい いせき 砂田中台遺跡	山武郡大網 白里町砂田 520他	台地 上	95	村田 川	8世紀 中葉～ 10世紀 前半	8世紀 後半～ 9世紀 中葉	135	104	鍛冶遺構			
65	東金	上総国 山辺郡	いっぽんまつ いせき おお 一本松遺跡(大 網山田台遺跡No. 6遺跡)	山武郡大網 白里町小西 字一本松 800他	台地 上	80	南白 亀川	7世紀 ～10世 紀	9世紀 中葉～ 10世紀 前半	274	88	粘土採掘 坑		土坑	
66	茂原	上総国 山辺郡	なかばやし いせき 中林遺跡	山武郡大網 白里町砂田 字南中林 439他	台地 上	90～ 100	村田 川	8世紀 後半～ 9世紀	9世紀 前半	40	28				
67	茂原	上総国 山辺郡	うちのだい Ⅱ いせき 内野第Ⅱ遺跡	茂原市桂 840他	台地 上	95	村田 川	9世紀 中葉	9世紀 中葉	9	5	土坑		5	
68	東金	上総国 山辺郡	たつがだい いせき 辰ヶ台遺跡	千葉市緑区 小食土町辰 ヶ台	台地 上	90	村田 川	古墳時 代後期 ～平安 時代		4		古墳	1	鍛冶遺構	1
69	成東	上総国 武射郡	しんぎょうじ はいじ あり 真行寺廃寺跡	山武郡成東 町真行寺 565他	台地 上	46	作田 川	古墳時 代後期 ～11世 紀	7世紀 第4四 半期～ 11世紀			基壇建物 跡(金 堂・講堂)	2	鍛冶遺構	1
70	多古	上総国 武射郡	こがねだいはいじ あり 小金台廃寺跡	山武郡芝山 町山田字小 金	台地 上	44	栗山 川	8世紀 ～不明	8世紀 ～不明						
71	多古	上総国 武射郡	やまだはいじ あり 山田廃寺跡	山武郡芝山 町山田	台地 上	44	栗山 川	8世紀 ～不明	8世紀 ～不明			基壇建物 跡	2		
72	成東	上総国 武射郡	おがわはいじ あり 小川廃寺跡	山武郡松尾 町小川205 他	台地 上	30	木戸 川	8世紀 後半～ 不明	8世紀 後半～ 不明						
73	成東	上総国 武射郡	ゆがかいせき 湯坂遺跡	山武郡成東 町湯坂	河岸 段丘 上	9	作田 川	8世紀 前半～ 不明	8世紀 前半～ 不明			基壇建物 跡	1		
74	成東	上総国 武射郡	ほにやまこじやくいせき 埴谷横宿遺跡	山武郡山武 町横宿	台地 上	45	作田 川	8世紀 ～不明	8世紀 ～不明						
75	八街	上総国 武射郡	きざやまいり いせき 鷺山入遺跡	山武郡山武 町木原字鷺 山入	台地 上	50	作田 川			21	8	古墳		9	
76	多古	上総国 武射郡	しやうさく いせき 庄作遺跡	山武郡芝山 町庄作634 他	台地 上	42	栗山 川	7世紀 後半～ 10世紀	8世紀 後半・ 9世紀 前半	71	11				



出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	墨書土器「佛」「法 サ」「盛□(佛カ)」「寺」 須恵器鉄鉢形鉢 瓶 脚付香炉	「甲」「山邊家」「西」「草 □」「柄本」「得万」「吉田」 「山」「米」「里成」「□□ (智門カ)」「□」「得合」 「大尾」「於夫井」「甲得」 「□屋」「福得」「千」「黒」 「大方」「寅」「吉」線刻 「長里」「長田」	二彩 銅鏡 帶金具 (丸柄) 万年通寶 長年大寶	台地全体に拡がる竪穴住居 跡等から多くの仏教遺物が 出土。403
	土師器鉄鉢形土器 青 銅製托	「□本」「山崎南/山崎南 山崎南/肘」「万□」	銅鏡 帶金具 (丸柄・ 巡方・鉈尾) 万年通 寶	竪穴住居跡H-222から鉄鉢 形土器が出土。416
	土師器香炉蓋 ロクロ 土師器鉄鉢形土器	「草」「立城」ヘラ「×」	灯明皿 石製紡錘車線 刻「東・月・見・還・ 天・観・為」	竪穴住居跡H-017から香炉 蓋と鉄鉢形土器、灯明皿が まとめて出土。346
	土師器鉄鉢形土器	「山」「囿」「仲」	富寿神寶 神功開寶	18号竪穴住居跡から鉄鉢形 土器2点がまとめて出土。 337
	瓦塔			302
雷文縁復弁八葉蓮華文・素 縁単弁十三葉蓮華文軒丸瓦 素文・二重弧文・重郭文 軒平瓦 丸瓦(無段・有段) 平瓦(ナデ・格子叩き・ 平行叩き・縄叩き・同心円 叩き・花文叩き)	墨書土器「武射寺」「大 寺」「仏工舎・小」瓦 塔 香炉蓋 鉄鉢形土 師器鉢 浄瓶	「三川南」「丸(天)」「仏 工舎・小」「三川東」「小」 「寒川坏」「古」「定」「二 □田」「万」「井千」ヘラ 書き瓦「月□」「寺/寺□ (天カ)」「三田」「弁」「□ 大」	隆平永寶	南北に並ぶ基壇2基が発見 された。南基壇が金堂跡、 北基壇が講堂跡と推定され ている。 234・238・247・269・424・ 491
丸瓦 平瓦(格子叩き・縄 叩き・花文叩き)		ヘラ書き瓦「□総」「□作 部知最」		未調査であるが、瓦の出土 と、「金光寺」「大門」「坊作」 等の地名、平安初期の金光 寺創建伝承等が残されてい る。140
丸瓦 平瓦(格子叩き・縄 叩き)	(瓦塔)			緊急調査が実施され、基壇 建物跡の存在が確認された。 140
有心三重圏文軒丸瓦 重郭 文軒平瓦 平瓦(縄叩き)				瓦は表面採集資料。239
素文縁素弁八葉蓮華文軒丸 瓦 平瓦(ナデ・格子叩き) 丸瓦(無段)				古墳時代の集落跡から基壇 1基が発見された。126・163
素文縁素弁八葉蓮華文軒丸 瓦 二重弧文軒平瓦 丸瓦 平瓦(無文・斜格子叩き)				隅切り瓦が多く出土した点 から八角円堂の存在が推定 されたが、詳細は不明であ る。83
	墨書土器「仏」 線刻 土器「寺」	「徳」 朱書「奉」		458
墨書土器「井/佛酒」 瓦塔 ロクロ土師器 鉄鉢形土器	「六」「十」「上」「□(西 カ)」「子家」「里井」「父 大大」「十千」「土」「山」 「本」「矢□」「申万呂」 「五万収」「主」「伊」「人」 「子後」「手」「丈部」「酒 坏」「□□女奉」「□(廣 カ)」「□田□」	人面墨書土器「丈部真 次□(召カ)代国神奉」 「罪△国玉神奉」「国玉 神奉手」墨書土器「竈 神」「上総□秋人歳神奉 進」		30号竪穴住居跡等から瓦塔 と鉄鉢形土器と灯明皿がま まとめて出土した。333

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
77	多古	上総国 武射郡	なかのだいせいせき 仲ノ台遺跡	山武郡芝山 町大台字仲 ノ台611-4 他	台地 上	34~ 42	栗山 川	9世紀 後半	9世紀 後半	71					
78	多古	上総国 武射郡	とのべたいせいせき 殿辺田遺跡	山武郡芝山 町殿辺田	台地 上		栗山 川	奈良・ 平安時 代	不明						
79	多古	上総国 武射郡	やまがた・ほうまこまん 山田・宝馬古墳 群	山武郡芝山 町山田字大 門1020他	台地 上	40~ 47	栗山 川	8世紀 第3四 半期	8世紀 第3四 半期	3		古墳	2		
80	成東	上総国 武射郡	はったおおなだいせいせき 八田太田台遺跡	山武郡松尾 町太田台	台地 上	42~ 43	栗山 川	6世紀 ~10世 紀	8世紀	33	2				
81	東金	上総国 武射郡	まくほたいせいせき 作畑遺跡	東金市油井 字作畑224 他	台地 上	62~ 66	真亀 川	7世紀 後半~ 9世紀 後半	8世紀 後半~ 9世紀	181	47				
82	国吉	上総国 夷隅郡	ほつこうじあと 法興寺跡 (岩熊廃寺跡)	夷隅郡岬町 岩熊1555他	低地	15	夷隅 川	8世紀 第1四 半期~ 中世	8世紀 第1四 半期~ 中世	1	1				
83	安房古 川	安房国 平群郡	ますまほいじあと 増間廃寺跡	安房郡三芳 村増間	丘陵 上	230	平久 里川	不明	不明						
84	千倉	安房国 安房郡	あわこくぶんじ 安房国分寺	館山市国分 959他	砂堤 帯上	19	汐入 川	8世紀 後半~	8世紀 後半~			基壇建物 跡(金堂)	1		
85	安房古 川	安房国 安房郡	ほうじゅいんせいせき 宝珠院遺跡	安房郡三芳 村府中254- 1他	河岸 段丘 上	13~ 16	平久 里川						円墳	3	
86	千倉	安房国 朝夷郡	ほりのうちせいせき 堀ノ内遺跡	安房郡千倉 町瀬戸字堀 ノ内278他	海成 段丘 上	23~ 30	瀬戸 川	奈良・ 平安時 代	不明						
87	船橋	下総国 葛飾郡	しもふきこくぶんじ 下総国分寺	市川市国分 5丁目	台地 上	25	真間 川	8世紀 中葉~	8世紀 中葉~			基壇建物 跡(金堂 ・塔・講 堂)	3		
88	船橋	下総国 葛飾郡	しもふきこくぶんじ 下総国分尼寺跡	市川市国分 3・4丁目	台地 上	25	真間 川	8世紀 中葉~ 11世紀 ?	8世紀 中葉~ 11世紀 ?			基壇建物 跡(金堂 ・講堂)	2		

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	墨書土器「寺町」			345
	墨書土器「寺」			211
平瓦（縄叩き）	墨書土器「小金山寺」 「小金寺」			小金台廃寺跡と山田廃寺跡に隣接する竪穴住居跡から寺銘墨書土器が出土した。453
	須恵器鉄鉢形土器	「侶」「大□」「中」「矢中」 「山矢」「千」「山矢大荷」 「人」		竪穴住居跡とグリッドから鉄鉢形土器が出土。298
平瓦	墨書土器「寺」「弘貫」 土師器鉄鉢形土器	「千」「井」「価 栗戸川」 「缶(正)」「子羊」「山上」 「田上」「真カ」「山口家」 「吉」「主」「姫カ」「大門」 「加生」「市之カ」「立生」 「達」「興」「友」「食」「山」 口万」	灰釉陶器双耳壺	広い範囲の竪穴住居跡からやや分散して仏教遺物が出土した。278
三重圏文縁単弁八葉蓮華文・鋸歯文縁複弁蓮華文軒丸瓦 三重弧文・四重弧文軒平瓦 丸瓦（無段）平瓦（格子叩き・縄叩き・花文叩き）				南北に並ぶ3基の基壇建物跡など中世寺院の遺構は確認されているが、古代の遺構は不明である。191・237
平瓦（縄叩き） 丸瓦				大日山中腹の平坦部に位置する山岳寺院跡。253
素縁単弁七葉蓮華文軒丸瓦 丸瓦 平瓦（縄叩き）	三彩獸脚	「松カ」	ヘラ「吉」	金堂跡と推定される基壇1基が発見された。29・38・221
	瓦塔			308
	瓦塔			瓦塔は表面採集資料。167
宝相華文・複弁六葉蓮華文・複弁八葉蓮華文軒丸瓦 宝相華文・偏行唐草文・重郭文・均整唐草文軒平瓦 丸瓦（無段・有段）平瓦（縄叩き）	墨書土器「造寺」「佛」「尼寺」「東寺」「九千／佛」「講院」「西□（寺カ）」浄瓶	「国厨」「院」「院／庚」 「馬・牛・荷酒・判・□」 人足馬荷杼・遊女杼／ 荷酒 井上「西」「□（右カ）京」「国」「一院」「大安」「金」「酒」「海上□」 「戎□」「埴」「匠」「福」 「丁」「玉／人」「本」「丈」 丈「吉」「由万」「春貞七」 「須賀□」「□瓦／西」 「仁」「井」「門」「忠」「佃」	銅鏡 貞観永寶	金堂基壇と塔基壇が東西に並び、北側に講堂基壇が位置する。伽藍城の区画施設は溝と板塀跡が確認されている。寺院地の範囲は北・西辺溝が確認されている。1・4・5・7・17・37・46・64・98・100・101・107・111・117・122・123・124・129・130・135・136・149・158・159・170・176・177・183・256・272・291・340・378・394・411
宝相華文・複弁六葉蓮華文・複弁八葉蓮華文・細弁蓮華文軒丸瓦 宝相華文・偏行唐草文・重郭文・均整唐草文 丸瓦（無段・有段）平瓦（縄叩き）	墨書土器「尼寺」「佛」 ロクロ土師器香炉蓋 浄瓶 瓦塔	「法」「苗」「鑑／正麻呂」 「窪苑」「庄」「花」「客」 西「廳」「新院」「安／安」 「佐比佐」「大」「豊」「野」 「幸」「□太」「加」「千」 「下」「生」「得」「足」「浄」 「小里」「荒人」「長」	二彩小壺 緑釉唾壺 人面墨書土器 隆平永寶	金堂基壇と講堂基壇が南北に並ぶ。講堂基壇の北側で掘立柱建物跡の尼坊跡も確認されている。溝と塀で伽藍城を区画している。寺院地についても、北・東・南辺溝が確認されている。64・268・224・256・257・272・277・411

No	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
89	流山	下総国 葛飾郡	流山廃寺跡	流山市平和台4丁目(西平井字庚塚)	台地上	20	江戸川	8世紀後半～不明	8世紀後半～不明						
90	取手	下総国 相馬郡	船戸遺跡	我孫子市船戸1丁目	台地上	19	手賀沼	8世紀後半～不明	8世紀後半～不明						
91	船橋	下総国 葛飾郡	若宮八幡遺跡	市川市若宮2丁目123他	台地上	20	真間川	古墳時代後期～平安時代	9世紀	1					
92	船橋	下総国 葛飾郡	国分遺跡	市川市中国分2-70他	台地上	20	真間川	古墳時代～平安時代	8世紀末～9世紀初頭	5					
93	船橋	下総国 葛飾郡	海神台西遺跡	船橋市西船2丁目525他・海神5丁目198他	台地上	16	葛飾川	9世紀前半	9世紀前半	1					
94	船橋	下総国 葛飾郡	印内台遺跡	船橋市印内2丁目	台地上										
95	習志野	下総国 葛飾郡	宮本台遺跡群	船橋市東船橋4-3037-1	台地上	19～21	海老川	8世紀末～9世紀初頭	8世紀末～9世紀初頭	1		竪穴状遺構	1		
96	船橋	下総国 葛飾郡	本郷台遺跡	船橋市西船6丁目16他	台地上	19	海老川	奈良～平安時代	不明	20	4	井戸	1	鍛冶遺構	1
97	流山	下総国 葛飾郡	北谷津第2遺跡	流山市加字北谷津983-1他	台地上	18～20	江戸川	9世紀初頭	9世紀初頭	4		土壇墓	18		
98	流山	下総国 葛飾郡	西深井一の割遺跡	流山市西深井67-1他	台地上	16～18	江戸川	8世紀前半～9世紀前半	9世紀前半	4					
99	流山	下総国 葛飾郡	尾井戸遺跡	柏市花野井字尾井戸1852他	台地上	18	利根川	6世紀～8世紀後半	8世紀後半～9世紀	11					
100	千葉東部	下総国 千葉郡	千葉寺	千葉市中央区千葉寺町161他	台地上	20		8世紀中葉～	8世紀中葉～			溝	1	経塚	1
101	蘇我	下総国 千葉郡	生実城跡	千葉市中央区生実町1211-4他	台地上	20	生実川	奈良・平安時代	不明						
102	蘇我	下総国 千葉郡	谷津遺跡	千葉市中央区花輪町340他	台地上	29	生実川	古墳時代～10世紀	9世紀後半～10世紀初頭	180	16	土壇墓	2	鋳銅工房跡	1

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
宝相華文軒丸瓦 四重弧文軒平瓦 丸瓦 平瓦 (縄叩き)				土壇状高まりが確認され、付近から多くの瓦が採集されていたが、消滅した。65
珠文縁複弁六葉蓮華文軒丸瓦 唐草文軒平瓦 平瓦 (縄叩き)				瓦出土集中地点が発見されたが、瓦に伴う遺構は発見されなかった。112
	墨書土器「寺カ」 鉄鉢形土器			墨書土器は表面採集資料。215
丸瓦	ロクロ土師器香炉蓋 瓦塔 鉄鉢形土器 墨書土器「法印」	「重福」「徳」「月」「井」「宗」「丈」「苗」「東」「風」「永」「在」「郷長」「戸主」「生万」「万得東」「千俣」「郷長」「戸主」線刻「不ヘラ」「千」「岑」	人面墨書土器 富寿神寶	国分寺と国分尼寺の北側の集落遺跡。多くの仏教関連遺物が発見されており、国分寺と深く関わった集落跡と指摘されている。150・232
	墨書土器「岑寺」	「平」「正」		331
	墨書土器「寺」	「方」「□万」「信」「大」「乙」「□(界カ)」「万仟」「□□(入力カ)」「□上」「七」「忍穗」「千万」「□/大門」「太」「世」	帯金具(丸柄・巡方) 富寿神寶	仏教遺跡は第12次調査出土。427
	墨書土器「秋寺」「寺」		灯明皿?	427
		「永」「福」「倍」「用」「浜/永」「倍/倍」「分」「宗」「工」「子仲」「人」「井」「官」「内」「□(岩カ)」「大」「十万」	小鍛冶遺物	三間四面の掘立柱建物跡が発見され、「御堂」の可能性が指摘されている。ただし、仏教遺物の出土は不明。399
	須恵器鉄鉢形土器			竪穴住居跡から鉄鉢形土器が出土。320
	浄瓶	「川/邊」「万」「川」「邊カ」		222
	墨書土器「寺」	「◎」		217
鋸齒文縁複々弁四葉蓮華文軒丸瓦 三重弧文・四重弧・五重弧文軒平瓦 丸瓦 (無段) 平瓦(格子叩き・縄叩き)	瓦塔	文字瓦「崑カ」「乙(記号カ)」	経筒 檜扇	戦後の観音堂下に遺存していた基壇跡は古代まで遡る可能性が高かった。観音堂の西側からは藤原時代の経塚が1基発見されている。32・51・62・68・77・153
	瓦塔			404
瓦	瓦塔 瓦堂 錫杖鑄型	「上益」「□(ニカ)井」「皿」「至」「□(古カ)」「□(至カ)」「大晶」「安」「□(権カ)」「□□(新益カ)」「上」朱書「大□」「上」	印鑄型 線刻紡錘車「乎伎志」	001号掘立柱建物跡から瓦塔・瓦堂がまともって出土した。254・275

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
103	蘇我	下総国 千葉郡	六通遺跡	千葉市緑区 大金沢902- 3他	台地上	41	村田 川	9世紀 前半	9世紀 前半	3					
104	千葉西 部	下総国 千葉郡	居寒台遺跡	千葉市花見 川区浪花町	台地上	20	花見 川			30	20				
105	蘇我	下総国 千葉郡	バクチ穴遺跡	千葉市緑区 大金沢町左 作	台地上	50	村田 川	8世紀 中葉～ 10世紀	9世紀 中葉～ 後半	8					
106	蘇我	下総国 千葉郡	有吉遺跡	千葉市緑区 有吉町	台地上	30	浜野 川								
107	蘇我	下総国 千葉郡	高沢遺跡	千葉市緑区 生実町2871 -1他	台地上	32～ 34	浜野 川	5世紀 末～10 世紀前 半	9世紀 第2四 半期	350	15	鍛冶遺構	2	周溝状遺 構	2
108	千葉東 部	下総国 千葉郡	芳賀輪遺跡	千葉市若葉 区古泉町字 ハガワ・野 呂町タカバ ンナ	台地上 及河 岸段 丘上	47～ 48	鹿島 川	古墳時 代～平 安時代	8世紀 後半	124	152				
109	蘇我	下総国 千葉郡	藤葉遺跡	千葉市中央 区花輪町字 谷津346他	台地上	28～ 30	生実 川	7世紀 ～9世 紀	8世紀 後半	10					
110	酒々井	下総国 印幡郡	長熊廃寺跡	佐倉市長熊 260他	台地上	35	鹿島 川	8世紀 中葉～ 不明	8世紀 中葉～ 不明	2		基壇建物 跡(金堂)	1	溝	5
111	小林	下総国 印幡郡	木下別所廃寺 跡	印西市別所 876-1他	台地上	25	亀成 川	7世紀 第4四 半期～ 不明	7世紀 第4四 半期～ 不明	13		基壇建物 跡(金堂 ・塔・講 堂)	3		
112	習志野	下総国 印幡郡	白幡前遺跡	八千代市萱 田字白幡 前・庚塚・ 堂ノ後・池 の台	台地上	15～ 25	新川	8世紀 前半～ 10世紀 初頭	8世紀 後半～ 9世紀	279	150				
113	白井	下総国 印幡郡	大塚前遺跡	印西市小倉 字小倉1丁 目(浦幡新 田大塚前 592)	台地上	25	亀成 川	8世紀 第3四 半期～ 不明	8世紀 第3四 半期～ 不明	1	2	溝	3		
114	佐倉	下総国 印幡郡	六拾部遺跡	佐倉市大作 2丁目	台地上	35	鹿島 川	8世紀 初頭～ 9世紀 後半	8世紀 第3四 半期～ 9世紀 後半	73	15	土坑	3	土器集中 地点	

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	土師器鉄鉢形土器 須恵器鉄鉢形土器	「青」		5号竪穴住居跡から鉄鉢形土器2個がまとめて出土。 214
	墨書土器「ナナ [梵字カ]」			360
	浄瓶			241
丸瓦	土師器鉄鉢形土器	「矢」「方/方」「万」「井」 「矢古」「万加」「平」「□」 (奉カ)「仁/仁」「千□」 (衛カ)「仔/仔」「田」 「仁」線刻「夫」「☆/☆」 へラ「大天」「元」		162
		「法/法」「大新家坏 矢」「厨」「方」「万加」「矢 古」「門」「无」線刻「由 本」	帯金具(丸柄・巡方・ 鉈尾)銅匙	334
瓦	土師器鉄鉢形土器 墨 書土器「寺(異体寺)」	「申」「大万」「町」「白・ □□」「田」「□(幡カ)」 朱書「申」	帯金具(丸柄・巡方・ 鉈尾)	252・450
	温石			B地区1号竪穴住居跡から 温石が出土。254
重圏文縁単弁八葉蓮華文・ 素文縁単弁八葉蓮華文軒丸 瓦 均整唐草文・連珠文・ 唐草文軒平瓦 丸瓦(有 段・無段) 平瓦(縄叩き・ へら削り)	墨書土器「高叢寺」 瓦塔		鉄滓	基壇建物跡は1基のみ、確 認されている。 59・69・76・80・90・187・ 293
重弧文縁単弁八葉蓮華文軒 丸瓦 三重弧文軒平瓦 丸 瓦(有段式・無段式) 平 瓦(格子・平行・縄叩き・ 凸面布目)	瓦塔 菩薩立像	「日」「可」 文字瓦「道」 (刻印)	畿内産土師器(平城Ⅲ)	3基の基壇跡が確認された。 伽藍区画施設は未発見。平 安期の菩薩立像と室町期の 地藏菩薩立像が表面採集さ れている。 151・203・206・377
	水瓶 浄瓶 土師器鉄 鉢形土器 瓦塔 瓦堂 墨書土器「佛」「大寺」 「奉/寺」「寺坏カ」「寺 カ」 温石	「生」「堤生」「神万カ」 「饒」「富」「廓」「繼」「大 田」「山」「土境」「枚万」 「善」「器」「山」「□信」 「堤家」「草田」「財カ」 「大井」「ト」「益」「庄/ 庄」「子爰嶋」「至」「上挾 力」「提赤山」「田生」「大 家」「村」へラ「大生人」	人面墨書土器「丈部人 足召代」和同開珎 三彩小壺 帯金具(鉈 具・丸柄・巡方)	三間四面の掘立柱建物跡を 中心に溝で区画された寺院 跡が発見された。 347
宝相華文軒丸瓦 均正唐草 文・宝相華文軒平瓦 丸瓦 (有段) 平瓦(縄叩き) 熨斗瓦 隅切瓦		文字瓦「埴」(へら)		三間四面の掘立柱建物跡周 辺からは熨斗瓦などの瓦が 多く出土し、葺棟葺の上屋 が想定されている。 152・499
	墨書土器「白井寺」 土師器香炉蓋 須恵質 瓦塔 土師質瓦塔 土 師器鉄鉢型土器 土師 器脚付香炉	「石田」「富」「石井」「新 万」「山」「大」「上」「椅 カ」「万呂カ」「中/中」 へラ「十一」「十」「下カ」 線刻「由」	灯明皿 帯金具(鉈尾)	竪穴住居跡と土坑から複数 の瓦塔が出土。290・382

No.	地区	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
115	習志野	下総国 印旛郡	村上込の内遺跡	八千代市村上字込の内	台地上	26	新川	8世紀 中葉～ 9世紀 後半	8世紀 後半	168	24				
116	佐倉	下総国 千葉郡	小屋ノ内遺跡	四街道市物井字小屋ノ内1360-3他	台地上	28～ 31	鹿島川	古墳時 代後期 ～平安 時代							
117	佐倉	下総国 印旛郡	六崎遺跡	佐倉市六崎			鹿島川	奈良・ 平安時 代	不明						
118	佐倉	下総国 印旛郡	江原台遺跡	佐倉市白井田字江原台500他	台地上	25～ 26	鹿島川	古墳時 代～平 安時代	9世紀 中葉	73	23	周溝状遺 構	1		
119	小林	下総国 印旛郡	浅間山遺跡	印旛郡印旛村山田字浅間山	台地上	33	印旛沼	奈良・ 平安時 代	不明						
120	小林	下総国 印旛郡	西方遺跡	印旛郡印旛村岩戸字西方	台地上	25	印旛沼	奈良・ 平安時 代	不明						
121	白井	下総国 印旛郡	浦部遺跡	印西市浦部			手賀沼	奈良・ 平安時 代	不明						
122	白井	下総国 印旛郡	鳴神山遺跡	印西市戸神字大野610他	台地上	24	戸神川	奈良・ 平安時 代	8世紀 第3四 半期～ 9世紀	230	40				
123	習志野	下総国 印旛郡	井戸向遺跡	八千代市萱田字井戸向1531他	台地上	12～ 24	新川	8世紀 ～9世 紀	9世紀 第2四 半期	95	44	井戸跡	10	墓墳	
124	小林	下総国 印旛郡	向境遺跡	八千代市神野字向境1149他	台地上	25	印旛沼	奈良・ 平安時 代							
125	小林	下総国 印旛郡	上谷遺跡	八千代市保品字上谷1800他	台地上	25	印旛沼	奈良・ 平安時 代							
126	習志野	下総国 印旛郡	北海道遺跡	八千代市ゆりのき台5・6丁目(萱田字北海道699他)	台地上	10～ 20	新川	8世紀 中葉～ 10世紀	9世紀 中葉	114	10				



出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	須恵器鉄鉢形土器 瓦塔	「林」「林上カ」「来」「毛」 「利多」「奉」「朝日」「千」 「平」「家」「丈」「山」「利」 「兀(天)」「門」「聖」「来」 借「子春」「古」 線刻「六万」「本」「山」 「田」「手」「木」 朱書「中カ」「毛」 ヘラ「申」「人」	灯明皿 帶金具(鉸具・巡方)	集落域から離れて、瓦塔片が出土。154
	瓦塔 香炉蓋 鉄鉢形土器	「与」「中」「才」 「人」	線刻 灯明皿	326・343・400・415・443
	瓦塔			表面採集資料。佐倉東高校蔵。128
平瓦(縄叩き)	瓦塔 墨書土器「寺」「佛」	「丈」「由」「田」「仲」「八」 「仁」「右丈」「子仲」「酒」 坏「由」「加」「酒」「万」 「善□」「成カ」「中村」 「下」「中村家」「九万」 「子中」「中人」「井カ上」 カ「本」「太」「有」「入」 「尔麻」「圓」朱書「十」 ヘラ「大」	人面墨書土器 神功開寶 富寿神寶2	周溝状遺構付近から瓦塔片がまとまって出土した。また、周溝状遺構から45m離れた竪穴住居跡から墨書土器「寺」が出土した。192・210・220
	瓦塔2			表面採集資料。五代吉彦氏蔵。128
	瓦塔			岩戸支谷に面する台地端部からの表面採集資料。大原誠良氏蔵。82
	瓦塔			表面採集資料。251
	瓦塔 墨書土器「波田寺」「播寺」「佛」 土師器鉄鉢形土器	「千俣」「久弥良」「□(弘カ)仁九年一」「大加」「酒」 万「万」「入」「富」「高」 線刻「大加」「久弥良」 ヘラ「日下部吉人」	墨書土器「同□□刀自女召代進上」「國玉神上奉丈部鳥万呂」「大國玉□(罪カ)」「丈尼/丈部山城方代奉」「□神」「方代□」 帶金具(丸軔・巡方・鉸尾)	326・343・400・415・443
平瓦(縄叩き)	宝冠如来坐像 墨書土器「寺」「寺坏/寺」「佛」「信會」 ロクロ土師器鉄鉢形土器 三彩托	「継」「生堤」「生」「丁」 「大」「富」「万」「朝日」 「加/加□/家此盛」 「厭」「男」「大田」「中」 「入」「新」「文」「又」「仁」 「豊」「大家」「□替」「鬼」 「盛」「痘カ/痘カ」「□」 部吉道□「厭カ」「部」 「禾/禾原/土」	灯明皿 三彩小壺2 転用硯 須恵器小壺 帶金具(鉸具・丸軔・巡方・鉸尾) 富寿神寶	広範囲に拡がる竪穴住居跡等からやや分散して仏教遺物が出土した。299
	墨書土器「三寶」			457
	墨書土器「寺」	「寺」「幡郡村」「西」「丈部申万」「丈部角万呂」		457
	墨書土器「尼」「勝光寺/大田」	「富」「万」「井」「善/善」 「朝日」「村神丈□」「仁」 「大井」「経」「盛」「天」 「井大」「凡山カ」「大」 「継/継」「富/磯」「豊/廓」「新/隆」「丁」「生」 「器カ」	人面墨書土器「承和五年二月十□□」 帶金具(丸軔・巡方・鉸尾) 墨書土器「丈部乙刀自女形代」	261

No	地区	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
127	習志野	下総国 印幡郡	高津新山遺跡	八千代市高津 字堀込 1738他	台地上	25	新川		9世紀 後半	2					
128	佐倉	下総国 印幡郡	白井屋敷跡遺跡	佐倉市吉見 字白井屋敷 248-2他	台地上	29	鹿島川	8世紀 中葉～ 9世紀 中葉	9世紀 初頭	19	4				
129	千葉東 部	下総国 印幡郡	広遺跡	佐倉市坂戸 字広	台地上	15～ 17	鹿島川	8世紀 後半～ 9世紀	9世紀 中葉	13					
130	佐倉	下総国 印幡郡	南広遺跡	佐倉市宮本 字南広	台地上	34	鹿島川	8世紀 第2四 半期～ 9世紀 後半	9世紀 中葉	45	6	柵列状遺 構	2		
131	酒々井	下総国 印幡郡	高岡大山遺跡	佐倉市白銀 (上代字大 山110他)	台地上	30	鹿島川	6世紀 初頭～ 11世紀	8世紀 第4四 半期～ 9世紀 前半	416	223				
132	酒々井	下総国 印幡郡	栗野I遺跡	佐倉市宮本 字栗野477 他	台地上	34	鹿島川	9世紀 前半	9世紀 前半	8		土墳墓	62	古墳	5
133	佐倉	下総国 印幡郡	太田宿遺跡	佐倉市寺崎 字一本松・ 太田字宿地 先	台地上	31	鹿島川	8世紀 中葉～ 9世紀	9世紀 中葉	17	2				
134	佐倉	下総国 印幡郡	白井南神明社 遺跡	佐倉市白井	台地上	15	手繰川	不明	不明	1		土器集積 遺構			
135	酒々井	下総国 印幡郡	将門鹿島台遺跡	佐倉市将門 字鹿島台	台地上	32	印幡沼	8世紀 中葉～ 9世紀 中葉	8世紀 第3四 半期	13		土坑	3	土器集積 遺構	3
136	佐倉	下総国 印幡郡	大崎台遺跡	佐倉市六崎 字大崎台	台地上	30	鹿島川		9世紀 ?						
137	酒々井	下総国 印幡郡	北大堀遺跡	印幡郡酒々 井町本佐倉 字北大堀 495-1他	台地上	34	鹿島川	8世紀 後半～ 9世紀 後半	9世紀 第2四 半期～ 9世紀 後半	15	9	方形周溝 遺構	1		
138	酒々井	下総国 印幡郡	尾上藤木遺跡	印幡郡酒々 井町尾上字 藤木66-1他	台地上	36	鹿島川	7世紀 ～9世 紀前半	8世紀 後半	34	4				
139	酒々井	下総国 印幡郡	馬橋鷺尾余遺跡	印幡郡酒々 井町馬橋字 鷺尾余地先	台地上	17	鹿島川	8世紀 後半～ 9世紀	9世紀	13					
140	酒々井	下総国 印幡郡	伊篠白幡遺跡	印幡郡酒々 井町伊篠字 野田330-8 他	台地上	35	江川	8世紀 初頭～ 9世紀 前半	9世紀 前半	5	6				

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	菩薩形立像 墨書土器 「寺」	「井」「丁」「物部」「生」 「山」「毛」「丈」「堤」	鉄滓	250
	三彩托	「の」朱書「の」「++」 刻書「上」「丁」ヘラ 「大」「千」	胸部穿孔須恵器甕	446
	墨書土器「坂津カ寺」 「寺カ」	「中」「信」「正」「加カ」		284
	墨書土器「□〔人面カ〕/佛/佛」	「奉」「方/方」「子カ」 「大/大」「周/周」「飯」 「富」「由」「子井/子井」 「丑」「椅カ」「八」「前/前」 線刻「大王」ヘラ「カ」		076号竪穴住居跡から墨書土器「佛」が出土した。369
	土師器鉄鉢形土器 墨書土器「寺」「佛」「寺/莫」「大カ/寺」高台付火舎	「得」「生」「奥」「莫」「山」 「彩カ」「加万」「木下」 「厨」「午酒杯」「井」「新居」 「小野」「宙カ」「菜」 「松カ」「山六」「窪」「力」 「幡」「山口」「関カ」「智」 「有山」「山」「田」「吉」 「曹カ」「主カ」	銅鏡 墨書土器「神」「神屋」帯金具（丸鞆・巡方・鉈尾）萬年通寶 隆平永寶2 石製紡錘車「天 天田」	台地中央と南西端から仏教遺物がややまとまって出土した。371
	土師器鉄鉢形土器		灯明皿	26号竪穴住居跡から鉄鉢形土器と灯明皿がまとまって出土した。344
	土師器鉄鉢形土器	「大千」「古」「芳」		1号竪穴住居跡から土師器鉄鉢形土器が出土した。244
	墨書土器「□寺□」	「上加」「嘉」「大大」		169
	墨書土器「福カ寺」	「福」「四」「生」「成」		10号竪穴住居跡から墨書土器「福カ寺」が出土した。168
	墨書土器「寺」	「寶カ」「□万」「□/刀千□」「長」「大」「本/本カ」「主」「土」「善」「前カ」「十」「市」「田」「甲カ」「家カ大人/家カ□」「得上」「年」「禾」ヘラ「吉」「下」「×」	灯明皿 帯金具（丸鞆・鉈尾・巡方）	260
	墨書土器「寺」「佛坏」	「神屋」「八」「千」「貞」 「田」「仟」「□□（真人カ）」「□（原カ）」	墨書土器「神屋」帯金具（巡方）	270・430
	墨書土器「佛」	「人依」「依」ヘラ「×」 「一」線刻「川〔記号カ〕」		313
	土師器鉄鉢形土器	「神奉」「井」線刻「栗」 「西」	手付瓶（灰釉陶器） 墨書土器「神奉」	48号竪穴住居跡から土師器鉄鉢形土器が出土した。216
	土師器香炉蓋 高台付火舎	「俣」「檜前」「中」	緑釉陶器 灯明皿	B地点6号竪穴住居跡から香炉蓋が出土した。281

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	堅穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
141	酒々井	下総国 印幡郡	長勝寺脇館跡	印幡郡酒々井町上本佐倉字上宿175他	台地上	35	鹿島川	8世紀初頭～8世紀第3四半期		7	1	大型縦穴状遺構	3	大型土坑	1
142	酒々井	下総国 印幡郡	一之綱川遺跡	八街市文違野301-59他	台地上	40	鹿島川	9世紀	9世紀	1					
143	酒々井	下総国 印幡郡	七栄遺跡	印幡郡富里町七栄	台地上	40	鹿島川	不明	不明						
144	小林	下総国 印幡郡	井戸向遺跡	印幡郡印幡村瀬戸	台地上	30	印幡沼	9世紀前半	9世紀前半			溝状遺構	1		
145	小林	下総国 印幡郡	岩戸広台遺跡	印幡郡印幡村岩戸2812-1他	台地上	27	印幡沼	6世紀前半～9世紀後半	9世紀前半	11					
146	小林	下総国 印幡郡	角田台遺跡	印幡郡本埜村角田	台地上	26～29	師戸川	奈良・平安時代	9世紀第1四半期	40	5				
147	小林	下総国 印幡郡	南西ケ作遺跡	印西市多々羅田字南西ケ作144他	台地上	22～26	戸神川	奈良・平安時代		22					
148	小林	下総国 印幡郡	天神台遺跡	印西市竹袋字吞内34-5他	台地上	24	亀成川	8世紀第3四半期～9世紀	8世紀後半	2					
149	成田	下総国 印幡郡	大袋山王第2遺跡	成田市大袋字山王124-1他	台地上	38	江川	6世紀～9世紀	9世紀	68	37	鍛冶遺構	1	土坑	10
150	成田	下総国 印幡郡	大袋台畑遺跡	成田市大袋字台畑	台地上	34	江川	8世紀第2四半期	8世紀第2四半期	5					
151	成田	下総国 印幡郡	飯仲金堀遺跡	成田市飯仲字金堀1-2他	台地上	27～35	江川	8世紀第3四半期～第4四半期	8世紀第3四半期	12	16	土坑	12		
152	成田	下総国 印幡郡	飯田町南向野遺跡	成田市飯田町字南向野39-2他	台地上	34～38	江川	8世紀中葉～9世紀中葉	8世紀末～9世紀初頭	12		土坑	12		
153	酒々井	下総国 印幡郡	塚越遺跡	印幡郡富里町新中沢字出戸117-1他	台地上	30	鹿島川	奈良・平安時代		6	1				
154	八日市場	下総国 匝瑳郡	八日市場大寺廃寺跡	八日市場市大寺1861他	台地上	41	栗山川	7世紀第4四半期～不明	7世紀第4四半期～不明		2	基壇建物跡	1	溝	
155	岩部	下総国 匝瑳郡	岩部城跡(岩部遺跡)	香取郡栗源町岩部字台の内5076他	台地上	35	栗山川	不明	不明						

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
平瓦(縄叩き)	土師器鉄鉢形土器	「□命替神奉」「□奉」	帯金具(巡方) 墨書土器「□命替神奉」 「□奉」	1号竪穴住居跡から土師器鉄鉢形土器が出土。338
	墨書土器「寺」「佛」			389
	墨書土器「寺」			表面採集資料。成田山資料館蔵。211
	瓦塔			瓦塔はグリッド出土。428
	墨書土器「寺本」	「太」「万田」「大」 ラ「太」「米」	へ 帯金具(丸柄)	314
	墨書土器「千仏」「寺」 香炉蓋 ロクロ土師器鉄鉢形土器	「林」「卒」「馬」「任」		竪穴住居跡から鉄鉢形土器と墨書土器「千仏」「寺」がまとめて出土した。439
平瓦(縄叩き)	墨書土器「千仏カ」 蓮華文様の墨書			400・415
	墨書土器「ササ」	「十」	灯明皿	348
	土師器鉄鉢形土器	「仁」		29号竪穴住居跡から鉄鉢形土器が出土。413
	墨書土器「赤男(界)寺」「赤寺・崎寺」「□寺」	線刻「++」		4号竪穴住居跡から寺銘墨書土器がまとめて出土。265
	墨書土器「寺カ」 良三彩托	奈 線刻「×」「井」	灯明皿	396
	ロクロ土師器鉄鉢形土器	「㊦(記号カ)」		1号竪穴住居跡から鉄鉢形土器が2点まとめて出土。397
			和同開珎	三間四面の掘立柱建物跡が検出された。361
三重圏文縁単弁八葉蓮華文・素文縁単弁八葉蓮華文・素文縁単弁六葉蓮華文・常陸国分寺系軒丸瓦丸瓦(無段) 平瓦(格子叩き・縄叩き)		「長」		9世紀末以降の基壇跡1基と多種多量の瓦が発見されたが、創建期の伽藍は、不明である。336
軒丸瓦 丸瓦(有段) 平瓦		「尫」「其カ」		寛政年間に花型丸瓦が多量に出土した記録が残されている。204・205

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
156	多古	下総国 匝瑳郡	多古台遺跡	香取郡多古町多古台	台地上	40	栗山川	8世紀中葉～不明	8世紀中葉～不明						
157	八日市場	下総国 匝瑳郡	御堂廃寺跡	八日市場市大寺字荒場565他	台地上	41	栗山川	8世紀前半～9世紀中葉	8世紀前半～9世紀中葉	2	1	溝	1		
158	八日市場	下総国 匝瑳郡	大竹台遺跡	八日市場市久方字大竹台	台地上	40	栗山川	不明	不明						
159	八日市場	下総国 匝瑳郡	南借当遺跡	香取郡多古町南借当451他	川	5	栗山川	9世紀	9世紀						
160	多古	下総国 匝瑳郡	巢根遺跡	香取郡多古町水戸字巢根1561他	台地上	40	栗山川	9世紀前半	9世紀前半	2		鍛冶遺構	1	方形墳墓	2
161	多古	下総国 匝瑳郡	太良内遺跡	香取郡多古町梁井字太良内688他	台地上	36	栗山川	6世紀～10世紀		32	18	竪穴状遺構	1		
162	多古	下総国 匝瑳郡	土持台遺跡	香取郡多古町水戸字土持台1572他	台地上	38	栗山川	古墳前半～9世紀	9世紀中葉	10	1	方形墳墓	4	骨蔵器	3
163	多古	下総国 匝瑳郡	林遺跡	香取郡多古町林	台地上	40	栗山川	古墳時代～10世紀	9世紀	89	23	円形周溝	1	方形周溝	1
164	多古	下総国 匝瑳郡	中内原遺跡	香取郡多古町南中字中内原249-1	台地上	36	栗山川	8世紀後半～9世紀		39	18	土坑	6	溝状遺構	11
165	八日市場	下総国 匝瑳郡	平木遺跡	八日市場市平木字大六天965-1他	砂堤带上	6	木戸川	8世紀第3四半期～9世紀後半	9世紀後半	6	7	井戸	4		
166	八日市場	下総国 匝瑳郡	柳台遺跡	八日市場市飯塚字柳台	台地上	41	栗山川	4世紀～10世紀	9世紀前半～中葉	345					
167	岩部	下総国 匝瑳郡	後田遺跡	香取郡千潟町籙木字後田3229他	台地上	40	新川	奈良・平安時代				土壇墓	7	古墳	5
168	取手	下総国 相馬郡	手賀廃寺跡	東葛飾郡沼南町手賀字寺台304他	台地上	20	手賀沼	8世紀中葉～不明	8世紀中葉～不明						

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
素文縁単弁六葉蓮華文軒丸瓦				179
丸瓦 平瓦 (縄叩き)				3間×2間以上の掘立柱建物跡が1棟発見された。瓦葺の仏堂の可能性が指摘されている。336
	瓦塔			宮内勝巳氏にご教示を受けた。
	土師器鉄鉢形土器	「金」「大」「三」「□万」「由」「上□(家カ)」「六」「大万」「真□(奉カ)」「万得」「木」「八万」「南」「正」「力」「秋」「中」「□□(宮大カ)」	墨書土器「奉玉泉 神奉」 帶金具 (鉈尾)	沓瀬原もしくは流路からの出土。341
	墨書土器「寺」	「山□丁」	灯明皿 転用硯	2号竪穴住居跡から多くの灯明皿や転用硯と共に墨書土器「寺」が出土。282
	墨書土器「□寺」	「院」「亦」「井」		309
	墨書土器「佛」	「赤」「俣カ」「仲」「市」「日・炎・曳□/規」「木」「子越方」「正」線刻「田」	灯明皿	25号竪穴住居跡から多くの灯明皿と共に墨書土器「佛」が出土。283
	墨書土器「□(寺カ)」「土師器鉄鉢形土器」	「本」「十」「木カ」「内カ」「吉」「入野家」「几」		262
	墨書土器「佛」 花瓶	「由」「万由」「甘方」「牛」「子南」「真」「市」「百」「ケ」	須恵器小壺	310
	墨書土器「□弘寺」	「郡厨」「万福」「正カ」「十」「廳」「天」「玉長」「大道上」「海カ」「當」「子備」「万立」「万加」「遠田敷」「本」「平」「厨カ」 線刻「山」「大」	墨書土器「郡厨」	郡家関連遺跡か。311
丸瓦 平瓦 (縄叩き・格子叩き)	墨書土器「千俣□(仏カ)」「土師器鉄鉢形土器 浄瓶(水瓶?)」	「太」「守カ」「山カ」「氏カ」「酒坏カ」「林」「千カ」「視カ」「本」「久」「板カ」「夜□」「法□」「□原」「浄」「庁原」「牛成」「王/皆」「南」「豊」「後」「大家カ」「井/大家カ」「富」「朱」「美」「諸」「塙」「千校尉」「吉田」「丁」「井」	銅印「王□私印」 和同開珎	337号竪穴住居跡から鉄鉢形土器と浄瓶(水瓶)が出土。288
瓦	瓦塔			454
素文縁単弁八葉蓮華文・素文縁単弁六葉蓮華文軒丸瓦 唐草文・素文軒平瓦				寺院跡は砂取りのため消滅。82・185

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
169	取手	下総国 相馬郡	大井東山遺跡 <small>おおいがしやまじいせき</small>	東葛飾郡沼南町大井 2044-1他	台地上	18	大津川	6～7世紀 8世紀 第3四半期～ 10世紀	8世紀 末～9世紀	16	1				
170	取手	下総国 相馬郡	新木東台遺跡 <small>あらまひがしやまじいせき</small>	我孫子市新木字羽黒	台地上	20	利根川								
171	流山	下総国 相馬郡	根戸城跡 <small>ねどじょうあと</small>	我孫子市根戸字荒追 1274他	台地上	16～ 18	手賀沼	8世紀 前半・ 9世紀	9世紀 前半	2					
172	下館	下総国 結城郡	結城廃寺跡 <small>ゆづきはいじあと</small>	茨城県結城市上山川結城寺	台地上	33	鬼怒川	8世紀 前半～ 中世	8世紀 前半～ 中世	15	4	基壇建物跡(金堂・塔・中門・回廊・講堂・僧房)	6	区画溝	
173	下館	下総国 結城郡	峯崎遺跡 <small>みねさきいせき</small>	結城市結城字峯崎6683 他	台地上	36～ 38	鬼怒川	8世紀 前半～ 10世紀 後半	9世紀	126	34				
174	佐原東部	下総国 海上郡	木内廃寺跡 <small>きのうちはいじあと</small>	香取郡小見川町木内字権現台	台地上	43	黒部川	8世紀 前半～ 不明	8世紀 前半～ 不明			基壇建物跡	1		
175	佐原東部	下総国 海上郡	織幡妙見堂遺跡 <small>おりはたみょうけんどういせき</small>	香取郡小見川町織幡字妙見堂853- 2他	台地上	40	小野川	7世紀 中葉・ 8世紀 中葉～ 10世紀 前半	9世紀 ～10世紀	107	4	鍛冶遺構	1	土師器焼成土坑	
176	佐原西部	下総国 香取郡	名木廃寺跡 <small>なぎはいじあと</small>	香取郡下総町名木字鎌部663他	台地上	38	大須賀川	8世紀 前半～ 不明	8世紀 前半～ 不明	7	6	基壇建物跡(金堂)	1		
177	下総滑川	下総国 香取郡	龍正院 <small>りゅうしょういん</small>	香取郡下総町滑川1093- 1他	河岸段丘上	5	根木名川	7世紀 第4四半期～	7世紀 第4四半期～						
178	佐原東部	下総国 香取郡	多田日向遺跡 <small>ただひなたいせき</small>	佐原市多田字日向2426 他	台地上	40	小野川	8世紀 中葉～ 9世紀 後半	8世紀 末～9世紀 後半	29	17				
179		下総国 香取郡	寺台遺跡 <small>てらだいいせき</small>	佐原市				不明	不明						
180	佐原西部	下総国 香取郡	椎ノ木遺跡 <small>しいのきいせき</small>	成田市芝字椎ノ木2058- 1他	台地上	40	大須賀川	9世紀	9世紀 後半	7		墓壇	1		



出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要	
平瓦(縄叩き・格子叩き) 髪斗瓦	墨書土器「新生寺」	「十」「十十」「久/久」 線刻「丸/丸」「十十」	奈良三彩小壺 転用硯	灯明皿 調査区南端で発見された一 間四面の掘立柱建物跡は、 葺棟葺の仏堂の可能性が指 摘されている。 296	
	墨書土器「泉久須波良 部尼刀女」	「大□」「大上」「大」「千 万」	万年通寶		
	浄瓶			285	
単弁十葉蓮華文・鋸齒文縁 複弁八葉蓮華文・鋸齒文縁 単弁十六葉蓮華文・珠文縁 複弁八葉蓮華文・唐草文縁 軒丸瓦 三重弧文・四重弧 文・五重弧文・均整唐草文・ 重郭文軒平瓦 丸瓦(無 段) 平瓦(格子叩き・縄 叩き)	塑像 軛仏 墨書土器 「大寺」へラ書き瓦 「法成寺」	「東院」「茂」へラ書き瓦 「新治」「有支」		法起寺式伽藍。回廊内の瓦 溜から多量の軛仏と塑像が 発見された。186・321・349・ 501	
丸瓦 平瓦(縄叩き)	墨書土器「□寺□」「□ 佛申□」 土製螺髪	「中」「中西」「中後」「中 毛」「公人」「中公人」「卒」 「□奉」「玉」「後七」「万 福」「福万」「万成」「□達 □」「夫」「□車」「□床」 線刻「井」「定・宝」「又」 「乙」「×」「大」「才」「水 山」	奈良三彩 那窯産白磁 碗 緑釉陶器 羽口 灯明皿	434	
二重圏文縁素弁八葉蓮華 文・素弁八葉蓮華文・素弁 六葉蓮華文・常陸国分寺系 軒丸瓦 重弧文・唐草文軒 平瓦 丸瓦(無段) 平瓦 (格子叩き・縄叩き・ヘラ ケズリ)				基壇1基が発見され、多種 多量の瓦が採集されている。 231	
	墨書土器「釋迦」「佛」 ロクロ土師器鉄鉢形 内黒土器 土師器鉄鉢 形土器 浄瓶 銅製品 (縣仏カ) 青銅製合 子 脚付香炉	「臣」玖成「大家」「聖 東」「大井成」「惠恵」「家」 「万」「□□主」「主」 刻書「扶」	奈良三彩小壺 製品 灯明皿 寶2	人形鉄 長年大	一間四面の掘立柱建物跡等 が発見された。 319・379
三重圏文縁単弁八葉蓮華文 軒丸瓦 丸瓦 平瓦(格子 叩き・ナデ・縄叩き)	墨書土器「度寺/度寺」 菩薩立像	「万/万」「中」「信」「福 カ」「曹」「豆カ」「反」	転用硯 神坐像	基壇建物跡と先行する掘立 柱建物跡などが発見された。 242	
三重圏文縁単弁八葉蓮華文 軒丸瓦 宝相華文軒丸瓦 三重弧文軒平瓦				承和7年(840)開基と伝え られる龍正院の本堂裏から 瓦が採集されている。255	
	墨書土器「寺」「三綱寺」 「多理草寺」「観音寺」 「多料草寺」「三綱」 須恵器鉄鉢形土器	「芳仙」「神部」「大神」	墨書土器「神部」「大神」	一間四面の掘立柱建物跡を 中心とした建物跡群が発見 された。 330	
	瓦塔	「神宮」「中臣」	墨書土器「神宮」		
	水瓶	「大島」		301	

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
181	成田	下総国 香取郡	山谷遺跡 さんや いせき	成田市幡谷 字桜谷津 941-3他	台地上	38	根木 名川	国分期	国分期	7					
182	佐原西 部	下総国 香取郡	月輪神社遺跡 げつりんじんじや いせき	香取郡下総 町高681他	台地上	36	浄向 川	8世紀 中葉～ 9世紀 初頭	8世紀 末～9 世紀初 頭	2		土坑	2		
183	佐原東 部	下総国 香取郡	磯花遺跡 いそばな いせき	佐原市大根 字磯花1754 -3	台地上	36～ 38	小野 川	9世紀	9世紀 前半	4					
184	佐原東 部	下総国 香取郡	一夜山遺跡群 いちや やま いせきぐん	佐原市多田	台地上	30		奈良・ 平安時 代	9世紀 中葉						
185	佐原西 部	下総国 香取郡	東野遺跡 とうの いせき	佐原市本矢 作字東野40 -2他	台地上	40	小野 川	8世紀 第4四 半期～ 9世紀 前半	9世紀 前半	10					
186	佐原東 部	下総国 香取郡	吉原遺跡 よしわら いせき	佐原市多田 字飛行内 784-1他	台地上	38	根本 川	7世紀 後半～ 10世紀 後半		12	12	柵列状遺 構	2	土坑	346
187	新東京 国際空 港	下総国 香取郡	伊地山藤之台遺 跡 いぢやまふじの だい い せき	佐原市伊地 山409他	台地上	41	栗山 川	8世紀 後半	8世紀 後半	4					
188	成田	下総国 埴生郡	龍角寺 りゅうかくじ	印幡郡栄町 竜角寺	台地上	40	竜台 川	7世紀 第3四 半期～	7世紀 第3四 半期～		1	基壇建物 跡 (金 堂・塔)	2		
189	成田	下総国 埴生郡	郷部・加良部 遺跡 ごうぶ・かろうべ (LOC15) 遺跡	成田市加良 部4丁目	台地上	35	根木 名川	8世紀 第2四 半期～ 9世紀 第3四 半期	8世紀 後半～ 9世紀	66	16				
190	成田	下総国 埴生郡	山口 遺跡 やまぐち (LOC20) 遺跡	成田市山口 字船塚台・ 石塚・池之 台	台地上	33	根木 名川	8世紀 後半～ 9世紀	8世紀 後半～ 9世紀	54	9	鍛冶遺構	10		
191	成田	下総国 埴生郡	中台 遺跡 なかだい (LOC14) 遺跡	成田市 中台・南囲護 台	台地上	35	根木 名川	6世紀 第3四 半期～ 9世紀 後半	9世紀 第2四 半期	143	6				

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	墨書土器「佛」「寺」	「牛」「成」「仙」「豊」「得」 「一」「甲」「牛」「海上カ」 線刻「×」		4号竪穴住居跡から墨書土器「佛」「寺」が出土。200
	墨書土器「門佛」	「足人」		444
	墨書土器「寺七□(日カ)」水瓶 鉄鉢形土器	「本」		12号竪穴住居跡から仏教遺物がまとめて出土。248
	墨書土器「赤穂寺」「阿光寺」			330
	二彩火舎	「大」「申」「國玉」「□」 「田」「野□」「玉」「丈部」 「山加」「殖生」「□女カ」 「國」	灯明皿 墨書土器「國玉」手捏	4号竪穴住居跡から二彩火舎と墨書土器「國玉」が出土。306
	墨書土器「寺」	「石井」「野邊」 「吉」	へら書 転用硯	「飛行寺」伝承地。370
	墨書土器「寺」「佛」	「伊地山」「仁」		335・355
三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦 三重弧文・葡萄唐草文軒平瓦 丸瓦(無段) 平瓦(ケズリ・格子叩き・平行叩き・縄叩き)	瓦塔 如来立像	へら書き瓦「朝布」「加刀入」「赤加」「服止」「神カ」「赤丸」「森加」「阿加」「服止部」「水□」「加止木」「加止」		金堂基壇の東に塔基壇が位置する。塔基壇北側の掘立柱建物跡付近から瓦塔片が出土している。現龍角寺本尊の薬師如来座像は白鳳仏。11・12・13・18・19・21・22・25・30・31・41・43・44・45・48・54・55・66・73・74・94・99・125・131・137・138・228・271・323・376・503
	須恵器鉄鉢形土器 墨書土器「忍保寺」「大寺」「新寺」「寺」 瓦塔	「私得」「法」「辛甲」「寺」「福」「真」「井」「中甲」「目万」「□土」「東」「□鬼カ」「秦」「新井」「中」「□上」	灯明皿 帶金具(鉈尾)	三間四面の掘立柱建物跡を中心とした寺院跡である。230
	土師器鉄鉢形土器 墨書土器「寺成」「寺」「忠寺」「□/寺返カ」「佛」「任/寺」	「任」「酒」「羊」「延忠」「成」「万□」「家」「東」「文カ」「稷」「代/田」「大」「在」「足カ」「成/厨厨厨」「猪・仕」「富」「山カ」「仲」「宗」「大□」 線刻「合」	灯明皿 帶金具(丸鉈・鉈尾) 隆平永寶	三間四面等の大規模な掘立柱建物跡を中心とした寺院跡である。230
平瓦(縄叩き)	須恵器鉄鉢形土器 瓦塔	「福カ□」「鬼足」「檜前/檜前」「千」「太□□」「基」「田」「九」「只」「東」「吉」「景/井」「私得」「中甲」「仲甲」「辛甲カ」「玉カ」「牛」「住」 線刻「馬井」「玉」 へら「下総国□」	灯明皿 帶金具(鉈尾)	瓦塔はグリッド出土。230

No	地区	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
192	成田	下総国 埴生郡	久能高野遺跡	印幡郡富里町久能字高野660-1他	台地上	38	根木名川	8世紀後半～9世紀後半	9世紀第2四半期～後半	20	1	土坑	16		
193	成田	下総国 埴生郡	開護台遺跡	成田市開護台1280他	台地上	30～36	根木名川	6世紀前半～10世紀	8世紀第4四半期～9世紀初頭	344	37				
194	成田	下総国 埴生郡	郷部・堀尾(LOC16)遺跡	成田市加良部1丁目	台地上	34	根木名川	8世紀前半～9世紀	9世紀前半	54					
195	成田	下総国 埴生郡	外小代(LOC40)遺跡	成田市八代字外小代	台地上	34	根木名川			84	6	古墳	3		
196	成田	下総国 埴生郡	石橋台(LOC19)遺跡	成田市中台6丁目	台地上	35	根木名川			4					
197	成田	下総国 埴生郡	野毛平植出遺跡	成田市野毛平字植出1088他	台地上	40～41	根木名川	8世紀中葉～10世紀後半	9世紀前半	16	17				
198	新東京国際空港	下総国 埴生郡	取香和田戸遺跡(空港No.60遺跡)	成田市取香字和田戸711他	台地上及台地斜面	40～41	根木名川	9世紀前半	9世紀前半	4					
199	成田	下総国 埴生郡	大畑遺跡群	印幡郡栄町竜角寺字台内71他	台地上	30	印幡沼	7世紀～8世紀		12	8	土坑	1		

## 生産遺跡

No	地区	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
1	鶴舞	上総国 市原郡	永田・不入窯跡	市原市久保697-13他	台地斜面	48～50	養老川	8世紀第2四半期～9世紀初頭	8世紀後半			須恵器窯	22		
2	蘇我	上総国 市原郡	川焼瓦窯跡	市原市草刈字川焼1649-1他	台地裾部	20	村田川	8世紀中葉～後半	8世紀中葉～後半			瓦窯跡(平窯)	5	作業場	2
3	姉崎	上総国 市原郡	神門瓦窯跡	市原市惣社1119	台地斜面		村田川	8世紀中葉	8世紀中葉			瓦窯跡(登窯)	5		
4	姉崎	上総国 市原郡	南田瓦窯跡	市原市惣社1098	台地斜面		村田川	9世紀	9世紀			瓦窯跡(平窯)	4		

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	墨書土器「桑田寺」「寺」 「□(寺カ)」「井」	「罪司進上代」「香」「長」 「井」「田カ」「又」「郡□」 「万田」「千カ」	灯明皿	13号竪穴住居跡から墨書土器「桑田寺」「罪司進上代」が出土。305
	墨書土器「寺坏」(瓦塔)	「人」「千人」「千足」「大杯」 「大坏酒」「大畠」「吉」「天」 「井」「水」「中坏」「里木」 「倍」「升」「佐子」「新カ」 「成」「富丁」「更」「貞」「長」 「黒カ」「家」「家継井」 「集」「堀邊」「浄」「吉麻」 「死カ」「厨」「富」「俵カ」 「壬」「山□」	帯金具(鉸具・丸柄・巡方・鉈尾)	623号竪穴住居跡から墨書土器「寺坏」が2点出土した。なお、囲護台からは瓦塔の出土も知られている。327
	墨書土器「寺」	「加」「和 幡」「□幡」 「私得」「法」「沛」「中申」 「得」「木」「仲」「新」「里子」 線刻「×」	灯明皿 墨書土器 「加」神奉	郷部・加良部遺跡に隣接する集落遺跡。230
	墨書土器「寺カ」	「本」「日下」「佐」「□水カ」 「帳□」「界」「知カ」 「石井」「石井カ」「塚カ」 「幡カ」「生カ」 線刻 「大」		161
	墨書土器「佛」			161
	墨書土器「手寺」	「申／申」「山仲」「儀」 「里」「信／信」「田 田」 「上カ」「大万」「成」「人／人」 「浄」「中カ」「仲カ」 「福吉」		第1地点002号竪穴住居跡から墨書土器「手寺」が出土した。328
	墨書土器「寺」	「鏡」「万」「仲井」「千万□」 「□□」「福□」		製鉄関連遺跡か。398
重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦 丸瓦 三重弧文軒平瓦 丸瓦 平瓦	墨書土器「寺」	「厨」「福仁」「甲」「中」 「東」「見」「□(夫カ)」 「依」「□(井カ)」「□九十」 「土」「□(生カ)」 文字瓦「玉作」「朝布」	唐三彩陶枕 須恵器泥塔? 畿内産土師器 東北産土師器	埴生那家関連遺跡。トレンチから墨書土器「寺」が出土。263・264・276
出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	須恵器水瓶	ヘラ「高□」	多口壺	不入2号・3号竪穴跡のステ場より水瓶が出土。202
単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦 均整唐草文・重郭文軒平瓦 丸瓦(有段・無段) 平瓦(縄叩き・斜格子叩き) 熨斗瓦				上総国分寺創建期瓦の瓦窯跡。また、菊間廃寺の均整唐草文軒平瓦の供給瓦窯跡の可能性も指摘されている。390
丸瓦 平瓦				上総国分僧寺と尼寺跡の創建期の瓦を焼成。166
軒丸瓦 軒平瓦 丸瓦 平瓦				上総国分僧寺の補修瓦を焼成。166・235

No	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
5	姉崎	上総国 市原郡	祇園原瓦窯跡 きおんぼらがよろし	市原市根田	台地 斜面	25		9世紀	9世紀			瓦窯跡 (登窯)	1		
6	木更津	上総国 望陀郡	矢那窯跡群 やなようせきぐん	木更津市矢 那字名主ケ 谷1000他	台地 斜面	55~ 62	矢那 川	8世紀 後半	8世紀 後半			瓦窯跡	3 (4)	須恵器窯	3 (4)
7	鹿野山	上総国 周准郡	大鷲瓦窯跡 おおわしがよろし	君津市大鷲 字前谷	丘陵 裾部	50	小糸 川	8世紀 前半	8世紀 前半			瓦窯跡			
8	木更津	上総国 周准郡	大久保牛ケ作瓦 窯跡 おおくほうしがきくが よろし	木更津市大 久保字象ケ 谷	丘陵 裾部	35	畑沢 川	7世紀 第4四 半期	7世紀 第4四 半期			瓦窯跡			
9	東金	上総国 山辺郡	南河原坂窯跡 群 みなみかわらざかようせき ぐん	千葉市緑区 小食土町 1175-20他	台地 斜面	80~ 90	村田 川	8世紀 第3四 半期~ 9世紀 前半	8世紀 第3四 半期~ 9世紀 前半	45	6	登窯	14	平窯	6
10	国吉	上総国 夷隅郡	星の谷瓦窯跡 ほしのやがよろし	夷隅郡岬町 岩熊	台地 斜面		夷隅 川	8世紀 前半	8世紀 前半			瓦窯跡	1		
11	船橋	下総国 葛飾郡	下総国分寺西瓦 窯跡 しもとうきこくぶんじにしが よろし	市川市国分 4丁目1913 付近	台地 斜面		真間 川								
12	船橋	下総国 葛飾郡	下総国分寺東瓦 窯跡 しもとうきこくぶんじにしが よろし	市川市国分 5丁目1723 -2他	台地 斜面		真間 川	8世紀 中葉~ 8世紀 末	8世紀 中葉~ 8世紀 末			瓦窯跡	2		
13	蘇我	下総国 千葉郡	大金沢油戸瓦 窯跡 おおかなざわあぶらどが よろし	千葉市緑区 大金沢町油 戸	台地 斜面	50	村田 川					瓦窯跡			
14	千葉東 部	下総国 千葉郡	宇津志野窯跡 うつししのようせき	千葉市若葉 区更科町10 -2他	台地 斜面	28	鹿島 川	9世紀	9世紀 中葉			須恵器窯	3	土坑	3
15	蘇我	下総国 千葉郡	大金沢左作瓦 窯跡 おおかなざわひだりざくが よろし	千葉市緑区 大金沢町左 作263-1他	台地 裾部	20	村田 川	8世紀	8世紀			瓦窯跡 (平窯)	2		
16	小林	下総国 印旛郡	曾谷窪瓦窯跡 そやのくぼがよろし	印西市大森 2428-5他	台地 斜面	15~ 20	利根 川	7世紀 第4四 半期	7世紀 第4四 半期			瓦窯跡 (登窯)	2	炭窯跡	3
17	岩部	下総国 匝瑳郡	コジヤ遺跡 こじやいせき	香取郡栗源 町岩部コジ ヤ875-45	台地 上	23	栗山 川	奈良・ 平安時 代	不明						
18	下館	下総国 結城郡	結城八幡瓦窯跡 ゆうきはちまんがよろし	茨城県結城 市上山川			鬼怒 川	8世紀 前半	8世紀 前半			瓦窯跡	1		

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
丸瓦 平瓦				上総国分尼寺跡の補修瓦を焼成。213
丸瓦 平瓦(縄叩き) 熨斗瓦				須恵器窯から瓦陶兼業を経て、瓦専用窯に転換されている。瓦の供給先不明。102・322
平瓦(格子叩き)				上総大寺廃寺跡と九十九坊廃寺跡で本瓦窯跡生産瓦が発見されている。23
三重圏文縁複弁四葉蓮華文平瓦				九十九坊廃寺創建期瓦を焼成。23
単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦 均整唐草文平瓦 丸瓦 平瓦 熨斗瓦	墨書土器「堺寺」 須恵器水瓶 香炉蓋 鉢形鉢形土器	須鉄 「福」	「是大」「野井カ」「根□」	上総国分寺創建期瓦を焼成。小食土廃寺跡にも供給。土師器窯19基。438
平瓦(正格子叩き) 熨斗瓦				法興寺跡創建期瓦の瓦窯跡。243
瓦				瓦出土の伝承があり、窯跡と推定されている。消滅。
宝相華文軒丸瓦 平瓦				国分寺の創建期・補修期瓦の瓦窯跡。 148
瓦				79
平瓦	須恵器鉄鉢形土器	ヘラ「万」	円面硯	瓦を生産していたかは不明。 366
二重弧文軒平瓦 丸瓦(無段) 平瓦(縄叩き・斜格子叩き) 熨斗瓦				瓦の供給先不明。 81
三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦 三重弧文軒平瓦 丸瓦(無段) 平瓦(正格子叩き・斜格子叩き・平行叩き・ナデ・凸面布目) 熨斗瓦 隅切瓦		文字瓦「道」(刻印)		瓦窯跡2基と瓦窯跡の可能性のある灰原1箇所が確認された。1号瓦窯は半地下式有階有段式登窯である。木下別所廃寺跡創建期瓦の瓦窯跡。 219
丸瓦(縄叩き) 平瓦(縄叩き)			瓦当笠(珠文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦)	台地端部から瓦当笠と平瓦2点が採集された。生産遺跡かは不明。297
鋸歯文縁単弁十葉蓮華文・鋸歯文縁複弁八葉蓮華文・鋸歯文縁単弁十六葉蓮華文軒丸瓦 三・四・五重弧文・唐草文・素文軒平瓦 丸瓦(無段) 平瓦(縄叩き・斜格子叩き) 熨斗瓦 鴟尾 甍				半地下式の窖窯跡が1基発見された。周辺でも複数基の存在が推定されている。また、南方の山川新宿の「万松寺」「ごじんや」等から瓦塔片・軒丸瓦・窯壁片等が採集され、瓦窯跡の存在も指摘されている。91

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
19	下総滑川	下総国香取郡	龍正院瓦窯跡	香取郡下総町滑川1142他	台地斜面	10	根木名川	8世紀前半	8世紀前半			瓦窯跡(登窯)	3		
20	成田	下総国埴生郡	龍角寺瓦窯跡	印幡郡栄町竜角寺	台地斜面		竜台川	7世紀第3四半期	7世紀第3四半期			瓦窯跡(登窯)	2		
21	下総滑川	下総国埴生郡	五斗時瓦窯跡	印幡郡栄町竜角寺字五斗時	台地斜面		竜台川	7世紀第3四半期	7世紀第3四半期			瓦窯跡(登窯)	1		
22	千葉東部	下総国千葉郡	中原窯跡	千葉市若葉区金親町字中原754他	台地斜面		鹿島川	9世紀初頭～第2四半期				須惠器窯	5～8		

## 線刻画古墳

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
1	海土有木	上総国長柄郡	長柄町横穴群徳増支群第13号横穴墓	長生郡長柄町徳増840他	丘陵斜面	33	一宮川	7世紀前半～9世紀	7世紀中葉						
2	成東	上総国武射郡	駄ノ塚西古墳	山武郡成東町板附字駄ノ塚	台地上	44	作田川	7世紀後半	7世紀後半						

## 小金銅仏出土遺跡

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
1	多古	上総国武射郡	坂志岡・尼ヶ谷遺跡	山武郡芝山町大里字坂志岡・尼ヶ谷161他	台地上	40～48	栗山川	古墳時代後期～平安時代	平安時代	11	1	土坑	15		
2	船橋	下総国葛飾郡	富基塚	市川市国分	低地		真間川								
3	佐原西部	下総国香取郡	関峯崎横穴群3号横穴	佐原市関字峯崎・香取郡大栄町堀籠字峯崎	台地斜面	20	大須賀川	7世紀後半	7世紀後半						
4	佐原西部	下総国香取郡	稲荷山	大栄町稲荷山	台地上	30～40	大須賀川								
5	下総滑川	下総国埴生郡	北辺田	栄町北辺田	台地上	20	竜台川								
6	多古	上総国武射郡	田向城跡	芝山町大台城台	台地上	40	栗山川								



出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
三重圏文縁単弁八葉蓮華文・宝相華文軒丸瓦 均整唐草文・宝相華文軒平瓦丸瓦(無段) 平瓦(正格子叩き・斜格子叩き・平行叩き・縄叩き)				地下式有階有段式登窯2基、地下式有階無段登窯1基が発見された。龍正院創建期補修期瓦と名木廃寺跡所回瓦を焼成か。 255
三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦 三重弧文軒平瓦丸瓦(無段) 平瓦(正格子叩き・斜格子叩き・平行叩き)		文字瓦「加刀利」「加刀入」		1号窯は地下式有階有段式登窯を地下式無階無段登窯跡に改造している。2号窯は有階有段登窯である。龍角寺の創建期瓦窯跡である。 131・132
三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦 三重弧文軒平瓦丸瓦(無段) 平瓦(斜格子叩き・平行叩き・正格子叩き・ナデ) 面戸瓦 隅切瓦		文字瓦「朝布」「神布」「赤加」「赤加真」「阿」「服止」「加々皮麻」「水津」「小加」「玉」「野」「皮尔□」「麻布」「神真」「赤久在」「阿加」「阿加皮」「皮止部」「玉作」「生」「土」「人」		地下式有階登窯を地下式無階無段登窯に改造している。 461
丸瓦(無段) 平瓦(縄叩き)				瓦は焼き台として使用されたものが出土。 505

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	線刻五重塔		線刻鳥・舟・人物・重層建物・竪穴住居	463
	線刻仏像			石室西壁に線刻仏像(如来坐像)が発見された。 436

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
	観音菩薩立像			トレンチから小仏像が出土。胸部と腹部に渡金が認められる。頭部は鬘を結い上げて三山冠を頂く。368
	誕生釈迦仏立像			昭和5年、下総国分寺付近の水田の中の塚(富貴塚)から誕生釈迦仏立像が発見された。
	金銅製押出一光三尊像			横穴内から金銅製押出仏が出土。 307
	十一面観音菩薩立像2			2体の十一面観音菩薩立像がまとめて表面採集された。大栄町指定文化財。個人蔵。
	菩薩立像			北辺田の大六天神社境内から菩薩立像(断片)が表面採集された。栄町町史編さん室保管。
	宝冠如来坐像	「井 [記号カ]」		田向城跡の土壌から宝冠如来坐像が出土。

## 神道関係遺跡

No	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
1	上総横田	上総国望陀郡	境遺跡	袖ヶ浦市新田1270他	台地上	30	小櫃川	9世紀前半	9世紀前半	12					
2	東金	上総国山辺郡	小山遺跡	千葉市緑区小山町166他	台地上	94	村田川								
3	八街	上総国武射郡	野出山遺跡	山武郡山武町椎崎字荒追514他	台地上	46～48	作田川	9世紀中葉～10世紀後半	9世紀後半～10世紀前半	93		鍛冶遺構	1		
4	八街	上総国武射郡	入谷遺跡	山武郡山武町椎崎字荒追	台地上	48～49	作田川	8世紀中葉～10世紀前半	9世紀中葉	26					
5	多古	上総国武射郡	谷窪・上楽遺跡	山武郡芝山町大里字上楽・上ノ山	台地上	32	栗山川	古墳時代後期～10世紀	8世紀前半	153					
6	船橋	下総国葛飾郡	須和田遺跡	市川市須和田2丁目418他			真間川								
7	松戸	下総国葛飾郡	双賀辺田No.1遺跡	鎌ヶ谷市中沢1027他	台地上	26	真間川	8世紀後半～9世紀中葉	9世紀中葉	21	14				
8	蘇我	下総国千葉郡	ムコアラク遺跡	千葉市緑区大金沢町	台地上	30	村田川		9世紀前半	44					
9	佐倉	下総国印旛郡	城次郎丸遺跡	佐倉市城字次郎丸	台地上	32～34	高崎川	8世紀第3四半期	8世紀第3四半期	12	5				
10	習志野	下総国印旛郡	権現後遺跡	八千代市萱田字権現後	台地上	20	新川	9世紀初頭～9世紀中葉	9世紀前半～中葉	66	23				
11	小林	下総国印旛郡	境堀遺跡	八千代市神野字境堀1069他	台地上	25	印幡沼								
12	酒々井	下総国印旛郡	油作第2遺跡	印旛郡印幡村	台地上	25	印幡沼		9世紀前半	50	30				
13	酒々井	下総国印旛郡	新橋高松遺跡	印旛郡富里町新橋字高松740-1他	台地上	36	高崎川	8世紀末～9世紀中葉	9世紀前半	9	2				

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
		「吝」「万>」「井/井」 「十」「万」「東」	人面墨書土器 帶金具 (鉈尾)	259
			青銅製男神立像	357
丸瓦		「山」「□(頁カ)□」「□ (井千カ)」	鐘鈴 唐花文鏡 緑釉手 陶器 (段皿・碗)	3号竪穴住居跡から鐘鈴が炭化材が詰められた逆位の状態で出土した。287
丸瓦 (無段)		「神」「大□(得カ)」「山」	墨書土器「神」 鉄製 蓮華鉢	6号竪穴住居跡から墨書土器「神」が出土。また、25号竪穴住居跡から鉄製蓮華鉢が出土。289
		「梨本」「□□(神奉カ)」「 酒」「中」「主」「厨」「仲」 「丁」「子夜」「失家」「亦/ 亦」「□(平カ)」「吉」「内」	墨書土器「□□(神奉カ)」「 灯明皿 帶金具 (巡方・鉈尾)	44号竪穴住居跡から墨書土器「神奉カ」が出土。333
複弁十六葉蓮華文軒丸瓦		「院」「大□(玉カ)」「魚」 「福毛」「□□(白土カ)」「 千」「大富」「東」「神」 「博士館」「油坏」「西」 「私」「本是」「大□」「上」 「貞」「ナ」	墨書土器「神」	148
		「神主/□(神カ)□」 「吉原」「子」「子中□」 「本」「子中尾」「□下」 「大」「七」「□(麻カ)」 呂「方」	墨書土器「神主」 転 用硯 帶金具	10号竪穴住居跡から墨書土器「神主」が出土。312
		「夕日」「上□」 朱書 「万/万」 「ヘラ」「万」 「乙」「王」「下」	線刻石製紡錘車「□神 申如林為南無界秋」	207
		「井」「神奉」	墨書土器「神奉」	竪穴住居跡から墨書土器「神奉」が出土。429
		「南」「豊」「饒」「生」「時」 「匡」「大伴部カ」「奉」 「器」「生堤カ」「家」「福」 「罪」「天人」「宜」	人面墨書土器「村神郷 丈部国依甘魚」 墨書 土器「神/神」 帶金 具 (丸軛・巡方・鉈尾)	407・464
			墨書土器「神」	457
		「大神」「□元□(家カ)」 「厨」「家」「五十」「万」 「□(智カ)」「酒」「工」 「羽元家」「秋山」「文智」 「曹司」「須」「十」「本」 「子」「又」「千」「得」「只」 「伸伸伸伸伸伸伸□日□」 □□山伸鳥鳥般般伸□ (伸カ)」「□(主カ)」	墨書土器「大神」	286
		「神/神/神/神/神」 「奈野」「工」	墨書土器「神/神/ 神/神/神」	1号竪穴住居跡から墨書土器「神/神/神/神/神」が出土。506

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
14	小南	下総国 匝瑳郡	池尻遺跡	香取郡干潟 町清和甲	台地上	50	新川	8世紀 中葉～ 10世紀 前半	9世紀 前半	34	12				
15	取手	下総国 相馬郡	別当地遺跡	我孫子市中 里字別当地	台地上	15	手賀 沼		8世紀 後半		3				
16	佐原西 部	下総国 香取郡	神田台遺跡	佐原市神田 台ホ374他	台地上	38	大須 賀川	7世紀 ～9世 紀初頭	9世紀 初頭		11				
17	佐原東 部	下総国 香取郡	吉原三王遺跡	佐原市丁子 字天ノ宮	台地上	40	小野 川		9世紀 中葉		92				
18	佐原西 部	下総国 香取郡	庚塚遺跡	香取郡大栄 町南敷字庚 塚	台地上	30	大須 賀川		不明		3				
19	小南	下総国 海上郡	小座ふちき遺跡	東庄町小座 ふちき	台地上	50	新川		9世紀 前半		8				

## 瓦出土遺跡

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
1	海士有 木	上総国 市原郡	土宇遺跡	市原市土宇 字大城台	台地上	40	養老 川	奈良・ 平安時 代							
2	蘇我	上総国 市原郡	郡本遺跡	市原市郡本 4丁目166 他	台地上	22		奈良・ 平安時 代		3		井戸	1	溝	2
3	海士有 木	上総国 市原郡	門脇遺跡	市原市磯ヶ 谷字門脇	台地上	70～ 72	養老 川	7世紀 末～8 世紀第 3四半 期		16	1	方形周溝 状遺構	7		
4	姉崎	上総国 市原郡	村上遺跡	市原市村上 字後口1168 他	微高地	7	養老 川	奈良・ 平安時 代							
5	蘇我	上総国 市原郡	川焼台遺跡	市原市草刈 字大谷1820 他	台地上	30	村田 川	奈良・ 平安時 代							
6	蘇我	上総国 市原郡	菊間遺跡	市原市菊間 字北野2086 -1他	台地上	20	村田 川	奈良・ 平安時 代							
7	姉崎	上総国 海上郡	今富遺跡	市原市今富 字文蔵733 他	台地上	15	養老 川	古墳時 代後期 ～平安 時代		20	21				
8	姉崎	上総国 海上郡	神代遺跡	市原市神代 字一本榎他	微高地	10	養老 川	奈良・ 平安時 代							
9	大多喜	上総国 海上郡	寺ノ台遺跡	市原市月崎 字寺ノ台・ 百目木	台地上	90	養老 川	奈良・ 平安時 代							
10	姉崎	上総国 海上郡	西野遺跡	市原市西野 字南口192- 1他	微高地	8	養老 川	奈良・ 平安時 代			7	井戸	3	溝	1

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
		「神主」「国」「王/道カ」 「吉」	墨書土器「神主」	081竪穴住居跡から墨書土器「神主」「国」が出土。 445
		「神山」	墨書土器「神山」 金具（丸柄）	帯 507
		「毛神」「十」「神宮」「石 □」	墨書土器「毛神」「神宮」	008竪穴住居跡から墨書土器「毛神」「神宮」が出土。 199
		「香取郡大坏郷中臣人成 女之替承」「香取郡大坏郷 中臣人成女替承 [ ] 年 四月十日」「大門」「大家」 「真鼓」「吉原大島」「吉 原仲家」「神□」「主」「古 部」	墨書土器「神□」 碗	銅 329
		「福カ」「神奉」	墨書土器「神奉」	295
		「石神」「大倉□家カ」	墨書土器「石神」	245
出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
瓦				二日市場廃寺に近接する。 198
瓦		線刻「吉」「吉・□/□丈」		市原郡家推定地。郡本廃寺。 400
丸瓦 平瓦（ナデ）		「海里長」		方形周溝状遺構の溝覆土中 から瓦が出土。同一遺構中 からは墨書土器「□里長」 の破片も出土。
丸瓦 平瓦（縄叩き・格子 叩き）				上総国分寺と同一の瓦が少 数出土。 486
鬼瓦				川焼台瓦窯跡の台地上に位 置する集落遺跡。 198
丸瓦 平瓦（縄叩き）				第44号竪穴住居跡のカマド 構築材として瓦が出土。 198
平瓦（格子叩き）				今富廃寺出土瓦と近似する 瓦が出土。 343
瓦				国史見在社に比定される神 代神社周辺の遺跡。 303
蓮華文軒丸瓦				永昌寺遺跡。 198
丸瓦 平瓦（縄叩き 格子 叩き）		へラ「+」「□大」		海上郡家関連遺跡。 489

No.	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
11	鶴舞	上総国海上郡	久保雷神社遺跡	市原市久保	台地上	60	養老川	奈良・平安時代							
12	姉崎	上総国睦蒜郡	榎沢遺跡	袖ヶ浦市川原井字榎沢	台地上	80	小櫃川	奈良・平安時代							
13	上総横田	上総国睦蒜郡	樋爪遺跡	袖ヶ浦市川原井字入込谷	台地上	80	小櫃川	平安時代		10					
14	姉崎	上総国睦蒜郡	仲ノ台遺跡	袖ヶ浦市川原井字仲ノ台	台地上	80	小櫃川	奈良・平安時代							
15	上総横田	上総国睦蒜郡	末崎遺跡	木更津市真里谷字末崎	台地上	30	小櫃川	奈良・平安時代							
16	木更津	上総国望陀郡	菅生遺跡	木更津市菅生字長町659他	低地	5	小櫃川	奈良・平安時代							
17	上総横田	上総国望陀郡	新開遺跡	木更津市伊豆島新開	台地上	80	小櫃川	奈良・平安時代							
18	上総横田	上総国望陀郡	ヒキリダイ遺跡	袖ヶ浦市下宮田字ヒキリダイ	台地上	94	小櫃川	奈良・平安時代							
19	奈良輪	上総国望陀郡	神納遺跡	袖ヶ浦市神納字妻ヶ崎	台地上	30	小櫃川	奈良・平安時代							
20	鹿野山	上総国周准郡	常代遺跡	君津市常代字五反歩209他	微高地	10	小糸川	古墳時代後期～平安時代		79	118	円形周溝	9	古墳	1
21	茂原	上総国長柄郡	富士見遺跡	茂原市東郷字富士見	微高地	10	一宮川								
22	成東	上総国山辺郡	道庭遺跡	東金市家之子字東大宮台1017-1他	台地上	50	作田川	奈良・平安時代							
23	東金	上総国山辺郡	田向遺跡	千葉市緑区土気町田向	台地上	90	鹿島川	奈良・平安時代		8	3	方形周溝状遺構	3		
24	東金	上総国山辺郡	鉢ヶ谷遺跡	東金市鉢ヶ谷1077他	台地上	68～78	真亀川	古墳時代後期～平安時代							
25	東金	上総国山辺郡	小西平台遺跡	山武郡大網白里町小西字平台904他	台地上	78～80	真亀川	奈良・平安時代		44	48				
26	東金	上総国山辺郡	井戸ヶ谷遺跡	東金市油井字長者屋敷538他	台地上	40～50	作田川	古墳時代後期～平安時代		11	2				
27	東金	上総国山辺郡	宮山遺跡	山武郡大網白里町小西字宮山	台地上	80	南白亀川	奈良・平安時代							
28	東金	上総国山辺郡	昇形遺跡	山武郡大網白里町小西字昇形837他	台地上	75～83	真亀川	7世紀後半～9世紀以降		97	25	井戸	1		

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
平瓦（縄叩き）				198
瓦				303
丸瓦、平瓦（縄叩き、平行叩き、ヘラ）		「丈」	帯金具（巡方）	竪穴住居跡覆土中などから若干の瓦が出土。
瓦				303
瓦				303
丸瓦 平瓦（格子叩き、縄叩き）				上総大寺廃寺の小櫃川対岸の集落・水田遺跡。 512
平瓦				303
重弧文軒平瓦、平瓦（格子叩き）				239
平瓦（格子叩き）				上総大寺廃寺出土瓦と近似する瓦が出土。 198
三重弧文軒平瓦、平瓦（格子叩き）		線刻「井」「×」		九十九坊廃寺出土瓦と同一の瓦が大溝から出土。 510
瓦				303
平瓦（格子叩き）				竪穴住居跡の覆土中から若干の瓦が出土。
平瓦（縄叩き）				511
瓦				
丸瓦			帯金具（巡方）	大網山田台No.10遺跡。カマドの支脚に転用された丸瓦が出土。 332
平瓦（格子叩き）		「山万□（所カ）」		土坑と溝などから瓦が出土。 365
				大網山田遺跡群第11地点
丸瓦（無段） 平瓦（縄叩き） 鬘斗瓦（格子叩き）		「万」「王万」「立万」「田本」「甲」「方」「可」「井上」 ヘラ「丈」「大田」	帯金具（丸柄）	大網山田台No.8遺跡。カマドの支脚に転用された丸瓦などが出土。 416

No	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
29	東金	上総国 山辺郡	海老ヶ谷遺跡	東金市松之 郷海老ヶ谷 2081他	台地 上	50	真亀 川	古墳時 代後期 ～平安 時代		62					
30	成東	上総国 武射郡	八坂台遺跡	山武郡成東 町寺崎字八 坂台	台地 上	46	作田 川	奈良・ 平安時 代							
31	成東	上総国 武射郡	嶋戸東遺跡	山武郡成東 町嶋戸字後 の月405他	台地 上	48	作田 川	奈良・ 平安時 代			2				
32	成東	上総国 武射郡	井之上A遺跡	山武郡山武 町塩谷1271 他	台地 上	44	作田 川	古墳時 代後期 ～平安 時代		9	1				
33	八街	上総国 武射郡	上布田遺跡	東金市上布 田後・堂山 他	台地 上	50	作田 川	奈良・ 平安時 代							
34	成東	上総国 武射郡	比良台遺跡	山武郡成東 町寺崎字比 良台3他	台地 上	46	作田 川	古墳時 代後期 ～平安 時代		7	17				
35	成東	上総国 武射郡	新坂遺跡	山武郡山武 町矢部字松 葉台1148-1 他	台地 上	51	作田 川	9世紀 中葉～ 後半		13		方形周溝 状遺構	1		
36	成東	上総国 武射郡	和田遺跡	山武郡成東 町和田	台地 上	45	作田 川	奈良・ 平安時 代							
37	八街	上総国 武射郡	下布田遺跡	山武郡山武 町下布田	台地 上	40	作田 川	奈良・ 平安時 代							
38	成東	上総国 武射郡	湯坂古墳群	山武郡成東 町湯坂	台地 上	50	作田 川	古墳時 代							
39	成東	上総国 武射郡	栗焼棒遺跡	山武郡山武 町矢部字日 向497-1他	台地 上	50	作田 川	古墳時 代後期 ～平安 時代		65	3	溝	11		
40	成東	上総国 武射郡	妙見崎台遺跡	山武郡山武 町戸田字妙 見崎台558- 1他	台地 上	40～ 50	作田 川	古墳時 代後期 ～平安 時代		24					
41	国吉	上総国 夷隅郡	中宿遺跡	夷隅郡岬町 椎木字中宿 1862他	微高 地	5	夷隅 川								
42	安房古 川	安房国 朝夷郡	永野台遺跡	安房郡丸山 町石堂字永 野台	台地 上		丸山 川								
43	船橋	下総国 葛飾郡	江戸川右岸河川 敷遺跡	東京都江戸 川区小岩地 先	河川		江戸 川	奈良・ 平安時 代							
44	流山	下総国 葛飾郡	平和台遺跡	流山市平和 台4丁目 1593他	台地 上	20	江戸 川	奈良・ 平安時 代							
45	流山	下総国 葛飾郡	加町畑遺跡	流山市加字 町畑776他	台地 上	22	江戸 川	奈良・ 平安時 代		128	19				
46	船橋	下総国 葛飾郡	国府台遺跡	市川市国府 台1丁目2- 47他	台地 上	23	真間 川	奈良・ 平安時 代							



出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
平瓦 (平行叩き、縄叩き)		「大成」「継家」「成」		竪穴住居跡から平瓦片が出土。
平瓦		「□□」		竪穴住居跡から平瓦片が出土。 342
瓦				武射郡家推定地。 383
平瓦 (格子叩き)			羽口 鉄滓	
瓦				302
瓦		「山」「吉」「万」 「臣□(管カ)」「□(東カ)」「□(栗カ)」		真行寺廃寺に近接する集落遺跡。
丸瓦 平瓦				359
瓦				198
平瓦				198
平瓦 (格子叩き)				163
瓦				7世紀末・8世紀初頭～9世紀前半の大型掘立柱建物跡が発見された。 402
瓦				竪穴住居跡のカマド内から瓦が出土した。
平瓦				304
瓦				198
宝相華文軒平瓦 平瓦 (縄叩き)				513
丸瓦 平瓦 (縄叩き)				流山廃寺跡と隣接する瓦出土地。 375
瓦		「田」「玉」「工」「大」「生」 「井/井道」「若」「賀由比」		
瓦		「衣」	和同開珎 帶金具	下総国府推定地。 市営総合運動場内遺跡ほか。

No	地図	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
47	船橋	下総国 葛飾郡	下総総社跡遺跡	市川市国府 台1丁目2- 26他	台地 上	23	真間 川	奈良・ 平安時 代							
48	船橋	下総国 葛飾郡	柏井歩橋遺跡	市川市柏井 歩橋	台地 上	20	真間 川	奈良・ 平安時 代							
49	松戸	下総国 葛飾郡	林台遺跡	柏市逆井字 林台799他	台地 上		大津 川	奈良・ 平安時 代							
50	流山	下総国 葛飾郡	高野台遺跡	柏市根戸高 野台430	台地 上	15	大堀 川	奈良・ 平安時 代		10	1	溝	1		
51	宝珠花	下総国 葛飾郡	貝の内遺跡	埼玉県北葛 飾郡庄和町 西宝珠花 441-1他			江戸 川	平安時 代		1		井戸	1		
52	流山	下総国 葛飾郡	三輪野山宮前遺 跡	流山市三輪 野山字宮前	台地 上	20	江戸 川	奈良・ 平安時 代							
53	千葉東 部	下総国 千葉郡	駒形遺跡	千葉市中央 区作草部	台地 上	20	都川	平安時 代							
54	千葉東 部	下総国 千葉郡	観音塚遺跡	千葉市中央 区千葉寺町 717-1他	台地 上	22	都川	古墳時 代～平 安時代		167	14	井戸	1		
55	千葉東 部	下総国 千葉郡	鷺谷津遺跡	千葉市中央 区千葉寺町 554他	台地 上	25	都川	奈良・ 平安時 代				鍛冶遺構			
56	蘇我	下総国 千葉郡	大膳野南貝塚	千葉市緑区 大金沢町 138他	台地 上	49	村田 川	平安時 代		1					
57	蘇我	下総国 千葉郡	新山遺跡	千葉市若葉 区平山町新 山	台地 上	40	都川	平安時 代							
58	千葉東 部	下総国 千葉郡	多部田	千葉市若葉 区多部田	台地 上	30	都川	奈良・ 平安時 代							
59	蘇我	下総国 千葉郡	築地台貝塚	千葉市若葉 区平山町	台地 上	40	都川	8世紀 前半	8世紀 前半						
60	千葉東 部	下総国 千葉郡	出口遺跡	千葉市若葉 区上泉町・ 出口・亀井 谷	台地 上	40	鹿島 川	奈良・ 平安時 代							
61	千葉東 部	下総国 千葉郡	中原東遺跡	千葉市若葉 区金親町中 原	台地 上	30	鹿島 川	奈良・ 平安時 代							
62	蘇我	下総国 千葉郡	広徳院遺跡	千葉市若葉 区谷津	台地 上	40	都川	奈良・ 平安時 代							
63	蘇我	下総国 千葉郡	稻荷脇西遺跡	千葉市若葉 区東山科町	台地 上	40	都川	奈良・ 平安時 代							
64	酒々井	下総国 印旛郡	南大堀遺跡	印旛郡酒々 井町本佐倉 字南大堀	台地 上	30	鹿島 川	奈良・ 平安時 代							

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
瓦				455
瓦				198
瓦				
均整唐草文軒平瓦		「吉」「生」		第2号竪穴住居跡の覆土中から唐草文軒平瓦が出土。 209
唐草文軒平瓦				514
瓦				
熨斗瓦（縄叩き）		「今」線刻「×」「木」		竪穴住居跡のカマド中から熨斗瓦が1点出土。198
瓦		「山」「千」「井」「大」「土」	和同開珎 線刻管玉 「状カ庄世」 帯金具 (巡方) 羽口	千葉寺の旧地伝承が残されている。 443
瓦				326
瓦				400
平瓦（格子叩き・縄叩き）				198
平瓦（縄叩き）				198
三重弧文軒平瓦 丸瓦 平瓦 瓦（斜格子叩き・縄叩き）				本貝塚第1地点から瓦がま とまって出土したが、関連 遺構は不明。194
瓦				302
平瓦				金光院の旧地伝承が残され ている。 302
平瓦				谷津台遺跡。東光院の旧地 伝承が残されている。 198
瓦				302
素縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦 忍冬唐草文軒平瓦 平瓦		「□（中カ）」「人」 「千」		長熊廃寺に隣接する集落遺 跡。

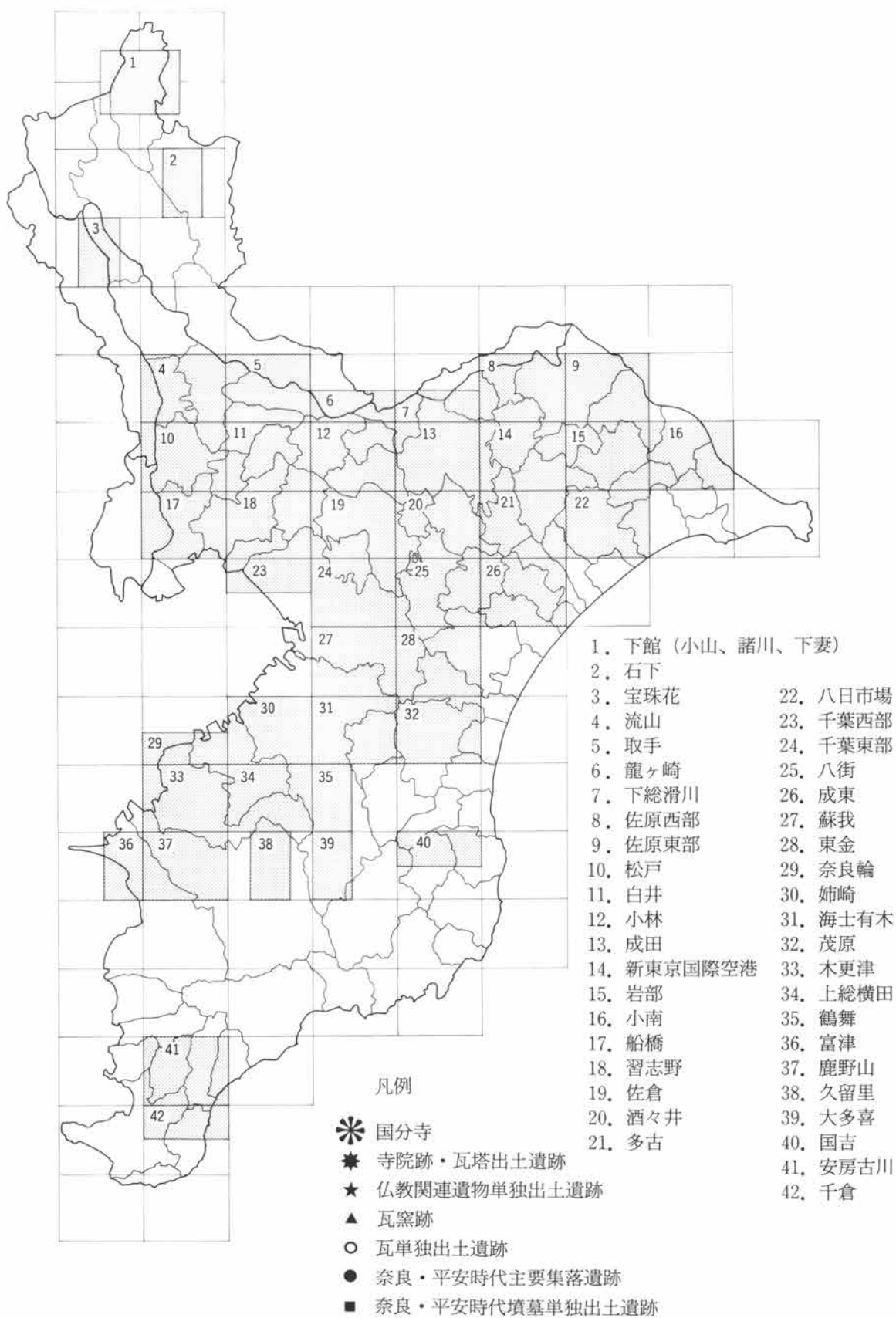
No.	地区	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
65	岩部	下総国 匝瑳郡	たいのうちいせき 台ノ内遺跡	香取郡栗源 町岩部5025 他	台地 上	36	栗山 川	平安時 代		2					
66	八日市 場市	下総国 匝瑳郡	まるやまいせき 丸山遺跡	八日市場市 大寺字丸山 331他	台地 上	40	新川	平安時 代		6	横穴墓	11	有段式地 下式土坑	17	
67	岩部	下総国 匝瑳郡	いかわおおいせき 岩部大関遺跡	香取郡栗源 町岩部字大 関1800-1他	台地 上	40	栗山 川	奈良・ 平安時 代		10					
68	岩部	下総国 匝瑳郡	なれやまいせき 離山遺跡	香取郡干潟 町籙木字離 山3277他	台地 斜面	30	栗山 川	奈良・ 平安時 代							
69	岩部	下総国 匝瑳郡	ながつだいごういせき 長津台2号遺跡	香取郡干潟 町籙木字長 津台3731-1 他	台地 上	45	栗山 川	奈良・ 平安時 代							
70	岩部	下総国 匝瑳郡	ゆのたにいせき 湯の谷遺跡	香取郡干潟 町籙木字湯 之谷3360他	台地 上	45	栗山 川	奈良・ 平安時 代							
71	岩部	下総国 匝瑳郡	おおいせき 大寺遺跡	八日市場市 大寺字広ノ 台835地先	台地 上	40	栗山 川	奈良・ 平安時 代							
72	新東京 国際空 港	下総国 匝瑳郡	ねがきいせき 根崎遺跡	香取郡栗源 町荒北字根 崎630他	台地 上	30	栗山 川	奈良・ 平安時 代		32	21				
73	八日市 場	下総国 匝瑳郡	でわいせき 出羽遺跡	八日市場市 大寺字出羽 1918地先	台地 上	40	栗山 川	奈良・ 平安時 代							
74	白井	下総国 相馬郡	ばばいせき 馬場遺跡	東葛飾郡沼 南町藤ヶ谷 字馬場810 他	台地 上	20	金山 落	奈良・ 平安時 代							
75	取手	下総国 相馬郡	まさかどじんじやいせき 将門神社遺跡	我孫子市日 秀字宮前 124他	台地 上	20	手賀 沼	奈良・ 平安時 代							
76	取手	下総国 相馬郡	ひげりにしいせき 日秀西遺跡	我孫子市日 秀字西70他	台地 上	20	手賀 沼	奈良・ 平安時 代		48	基壇建物 跡	6	溝	3	
77	流山	下総国 相馬郡	ねきりいせき 根切遺跡	柏市根戸字 根切・我孫 子市根戸字 根切	台地 上	18	大堀 川	古墳時 代～平 安時代		1					
78	取手	下総国 相馬郡	やもりいせき 野守遺跡	我孫子市古 戸字野守 525他	台地 上	20	利根 川	古墳時 代後期 ～平 安時代							
79	取手	下総国 相馬郡	たかほたいせき 高畑遺跡	東葛飾郡沼 南町高畑 750他	台地 上		手賀 沼	奈良・ 平安時 代							
80	取手	下総国 相馬郡	しまじいせき 四間戸遺跡	我孫子市日 秀字四間戸 311他	台地 上	20	手賀 沼	奈良・ 平安時 代							
81	石下	下総国 猿嶋郡	ごうのうえいせき 郷ノ上遺跡	茨城県岩井 市鴻野山	台地 上	20	鬼怒 川	奈良・ 平安時 代							

出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
平瓦				竪穴住居跡SI-1のカマド支脚材として完形平瓦が二次利用されていた。370
平瓦				456
瓦				
瓦			鉄滓	地形的に瓦窯跡の可能性が指摘されている。198
瓦				瓦は表面採集資料。454
平瓦（縄叩き）				198
瓦		「小□」「磨」「天」「竹カ 生」「日」「大竹」「成」「祥」 「石」「夏」		
軒丸瓦				瓦は表面採集資料。204
瓦		「大」「伸□」		
瓦				455
瓦		「□（七カ）」「大」「太」		日秀遺跡。223
珠文軒丸瓦 丸瓦（有段） 平瓦（調整・縄叩き）			和同開珎 帶金具	相馬郡家正倉跡。218
瓦				高野台遺跡と隣接する瓦出土地。441・452
瓦				455
平瓦（縄叩き）				198
瓦				
唐草文軒平瓦				384

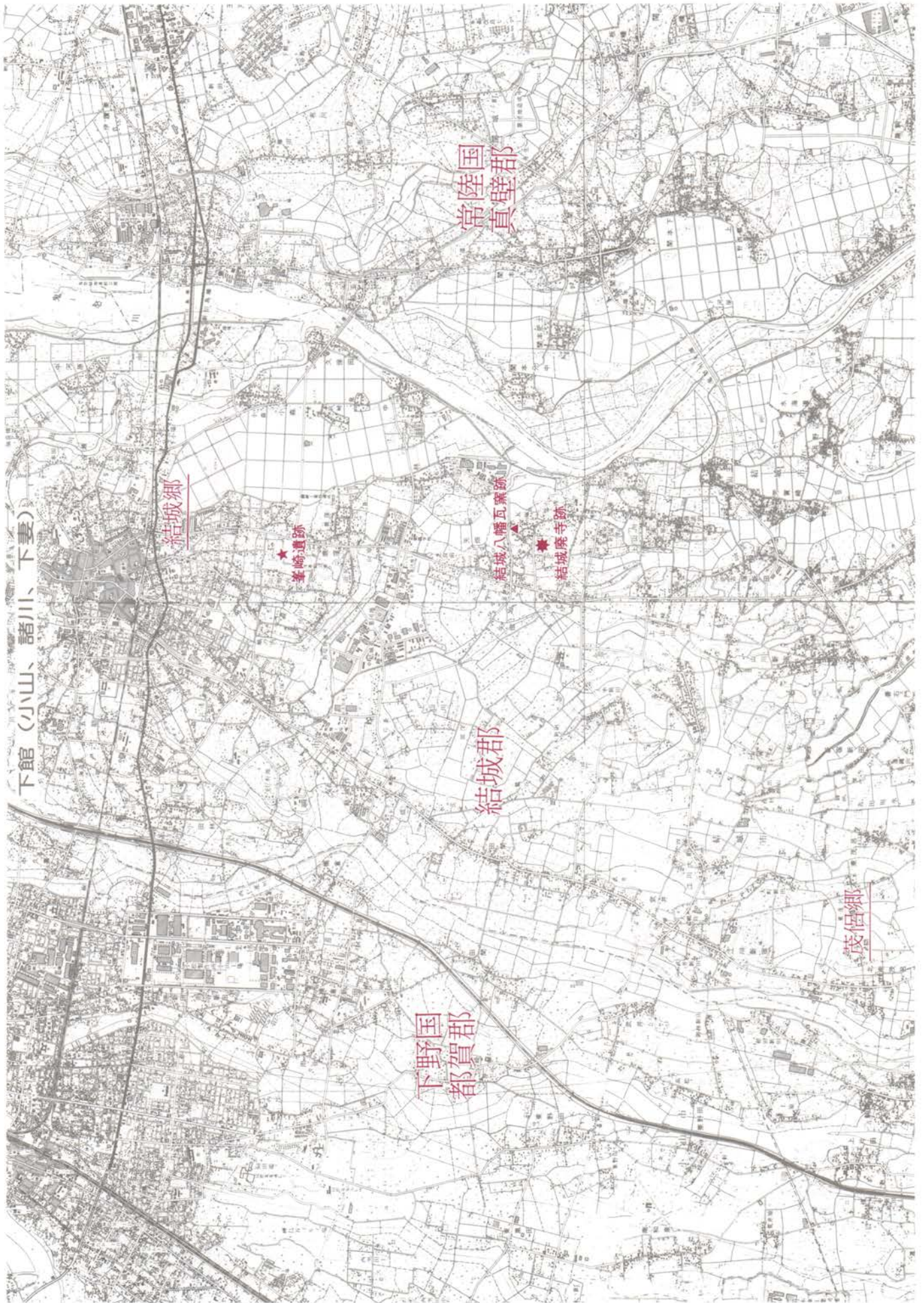
No.	地区	国郡	遺跡名	所在地	立地	標高	水系	時期	当該時期	竪穴	掘立	遺構1	基数1	遺構2	基数2
82	佐原東部	下総国海上郡	石仏遺跡	香取郡小見川町内野字石仏	台地上	41	黒部川	平安時代							
83	佐原東部	下総国海上郡	清水堆遺跡	香取郡小見川町虫幡字清水堆	台地上	40	黒部川	平安時代							
84	下総滑川	下総国香取郡	猿山散布地	香取郡下総町猿山791他	台地上	10	利根川	奈良・平安時代							
85	佐原西部	下総国香取郡	天神台遺跡	香取郡下総町木字向山752-6他	台地上	39	浄向川	古墳時代後期～平安時代			39				
86	佐原西部	下総国香取郡	青山中峰遺跡	香取郡下総町青山字岩谷383-2他	台地上	35～37	尾羽根川	8世紀半ば～10世紀			18	1			
87	成田	下総国埴生郡	竜角寺ニュータウンNo.6遺跡	印幡郡栄町字前原	台地斜面	30	十日川	古墳時代							
88	成田	下総国埴生郡	上福田和田谷津遺跡	成田市上福田字和田谷津98-1他	台地上	30	十日川	奈良・平安時代							
89	成田	下総国埴生郡	新山II (LOC 7) 遺跡	成田市加良部3丁目	台地上	36	根木名川	奈良・平安時代							
90	成田	下総国埴生郡	龍角寺東遺跡	印幡郡栄町竜角寺字東665他	台地上	40	竜台川	古墳時代後期～平安時代							

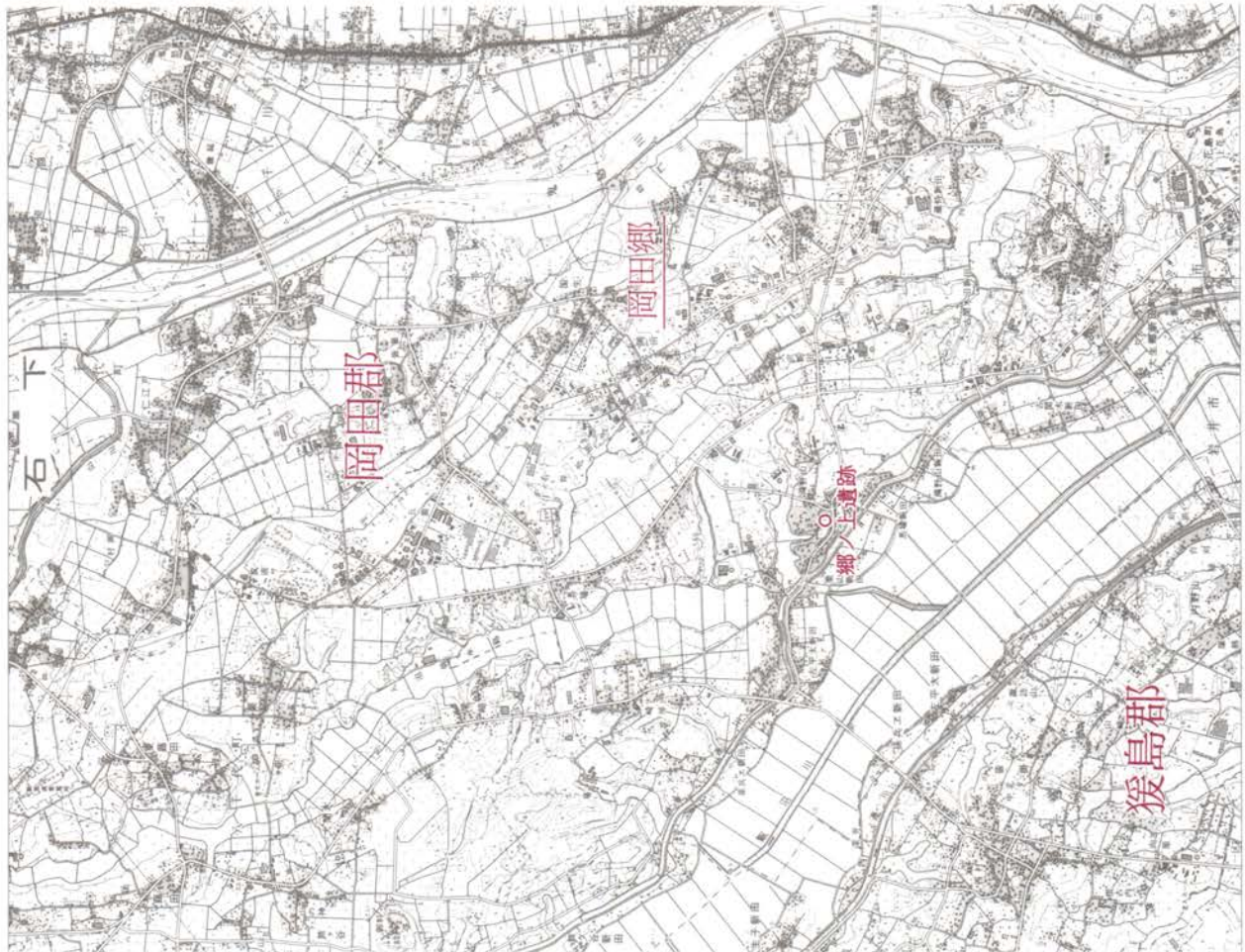
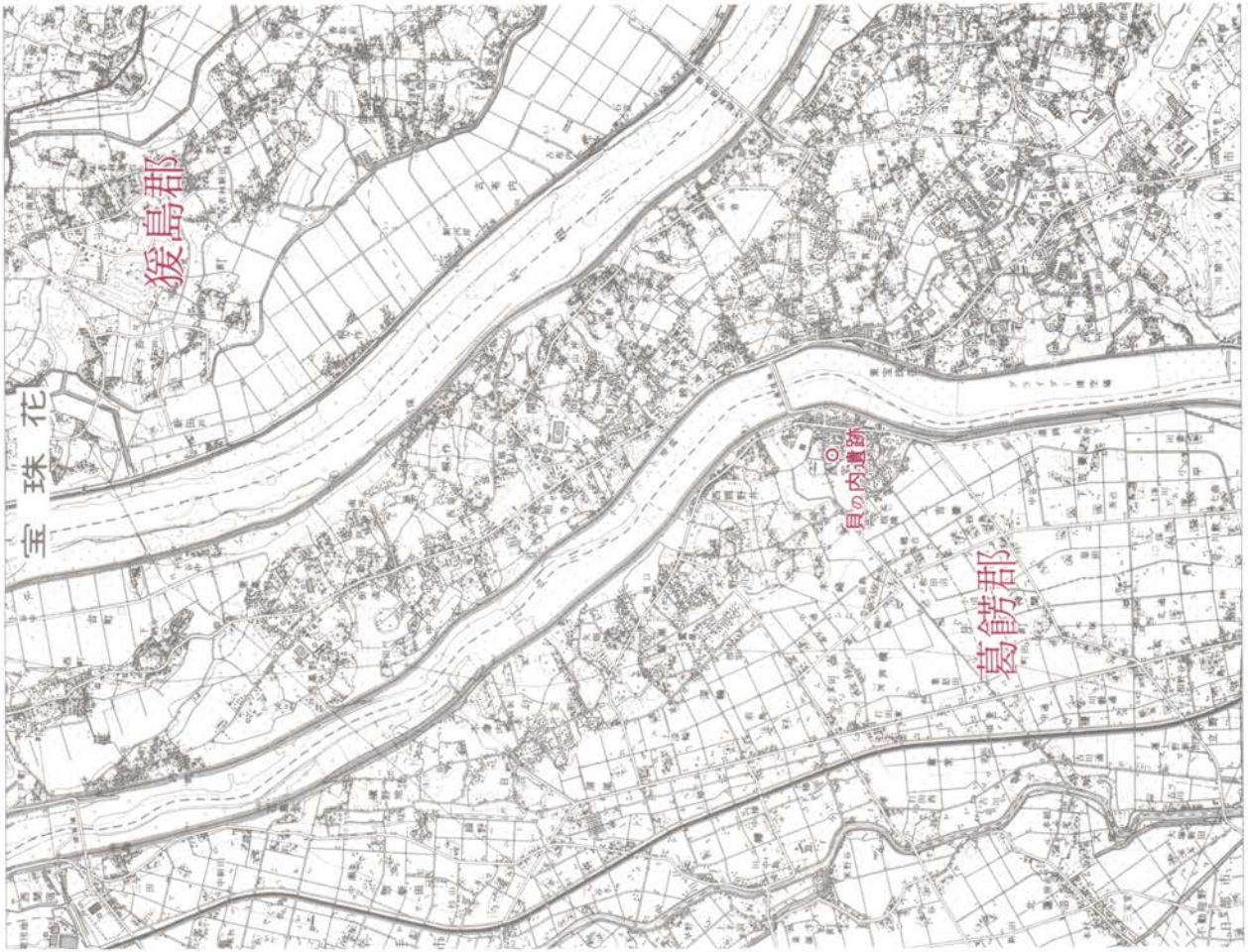
出土瓦	仏教遺物	墨書土器	特殊遺物	概要
平瓦				海上郡家推定地。 395
瓦		「山口」		395
瓦				302
瓦				326
丸瓦		「女丸」「中」「會善」「隆」 「子郷」「弥」「財万」		竪穴住居跡SI-9から丸瓦の 小片が出土。 419
瓦				横穴群。 515
瓦				516
丸瓦（有段） 叩き・縄叩き	平瓦（格子）	線刻「×」		カマド材として出土。 198
瓦		「田」「真宜」「宜」「乙」 「永」		323

# 遺跡分布地図

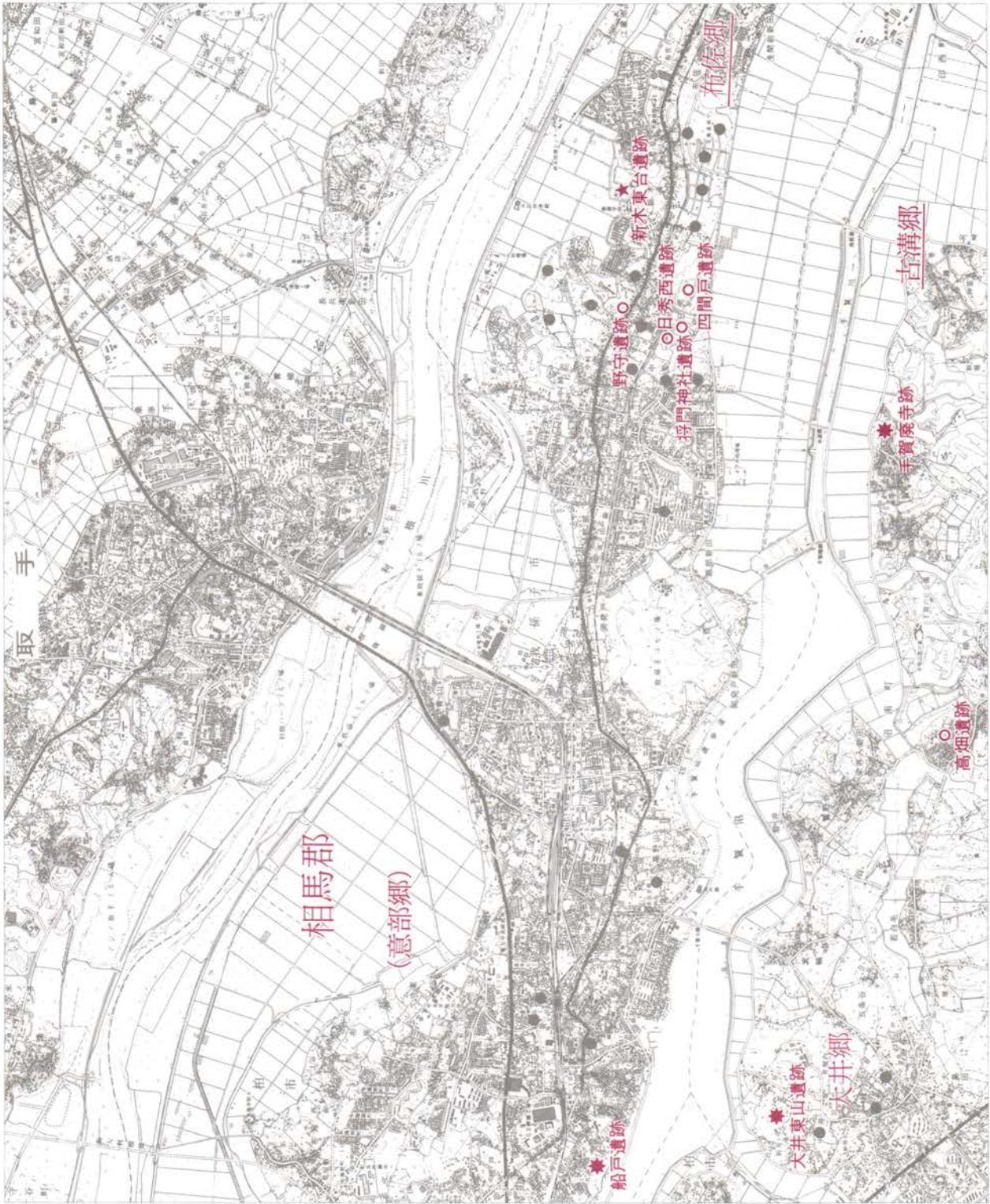


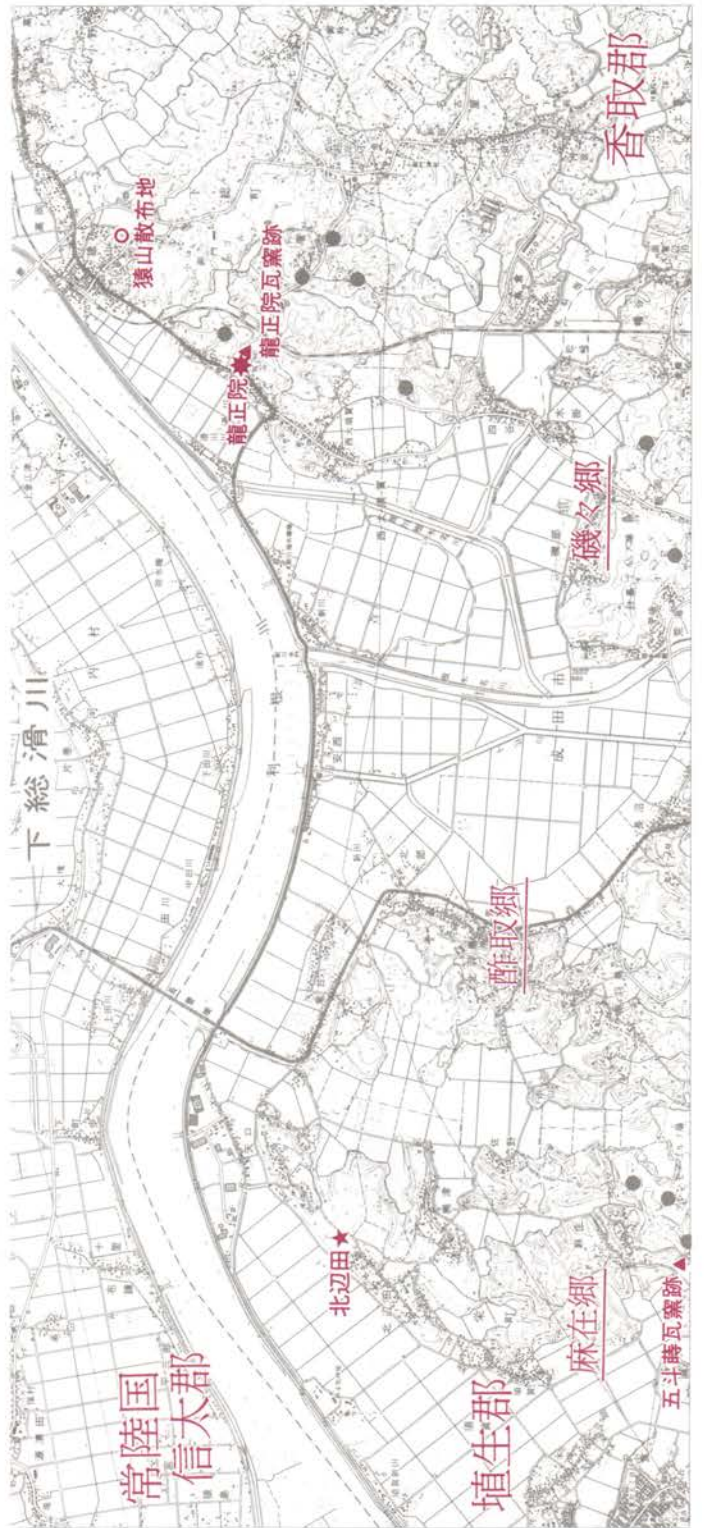




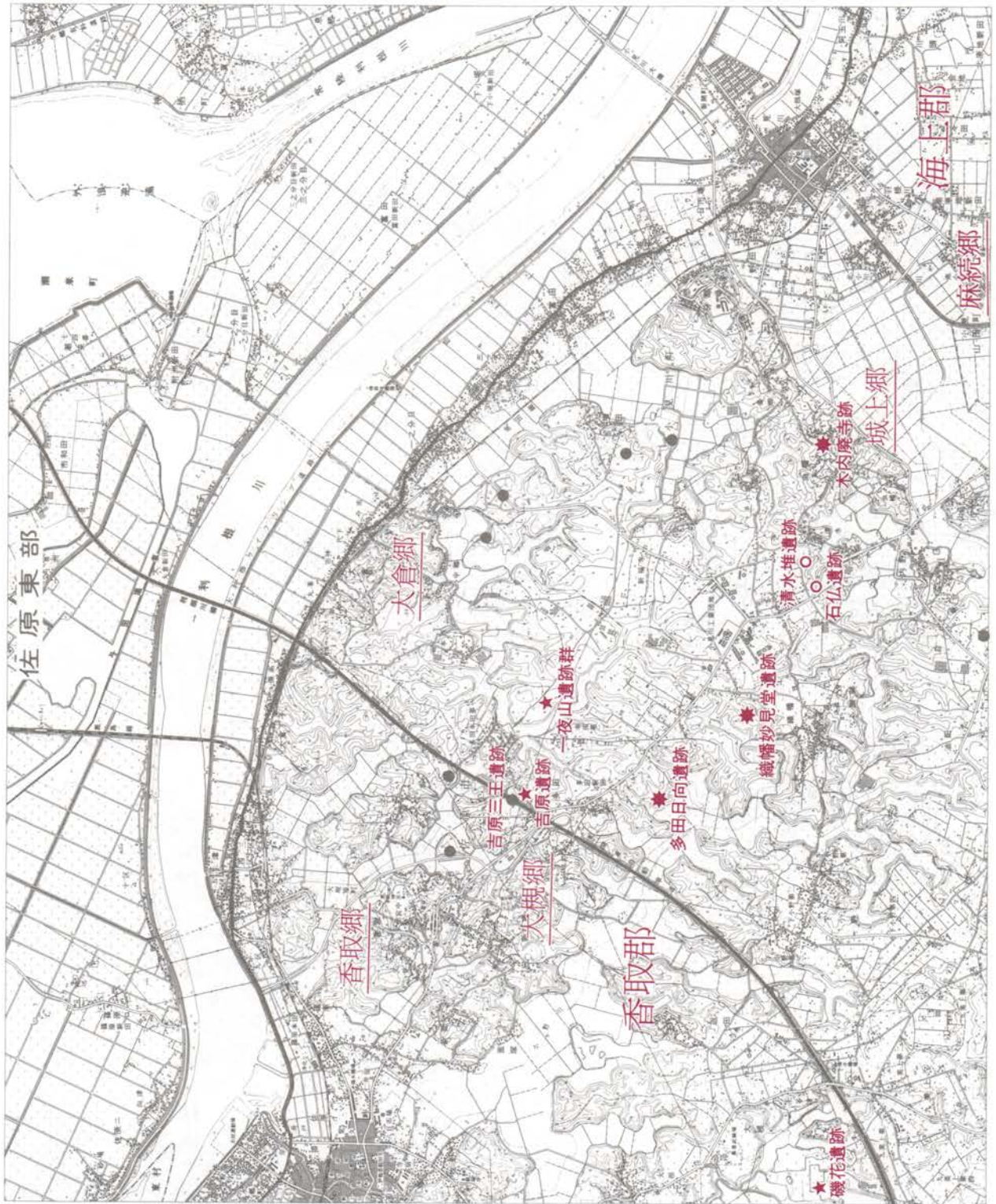






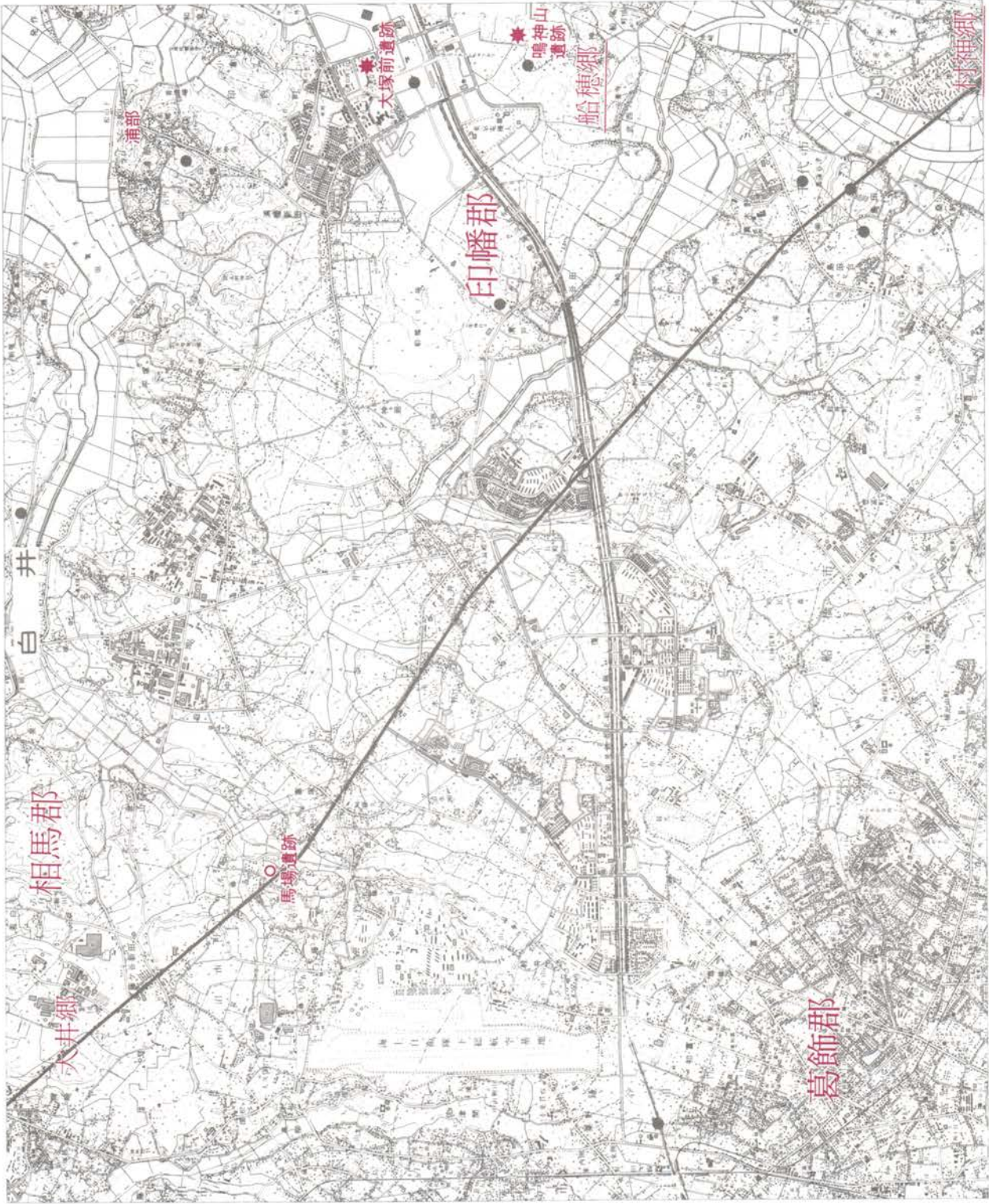










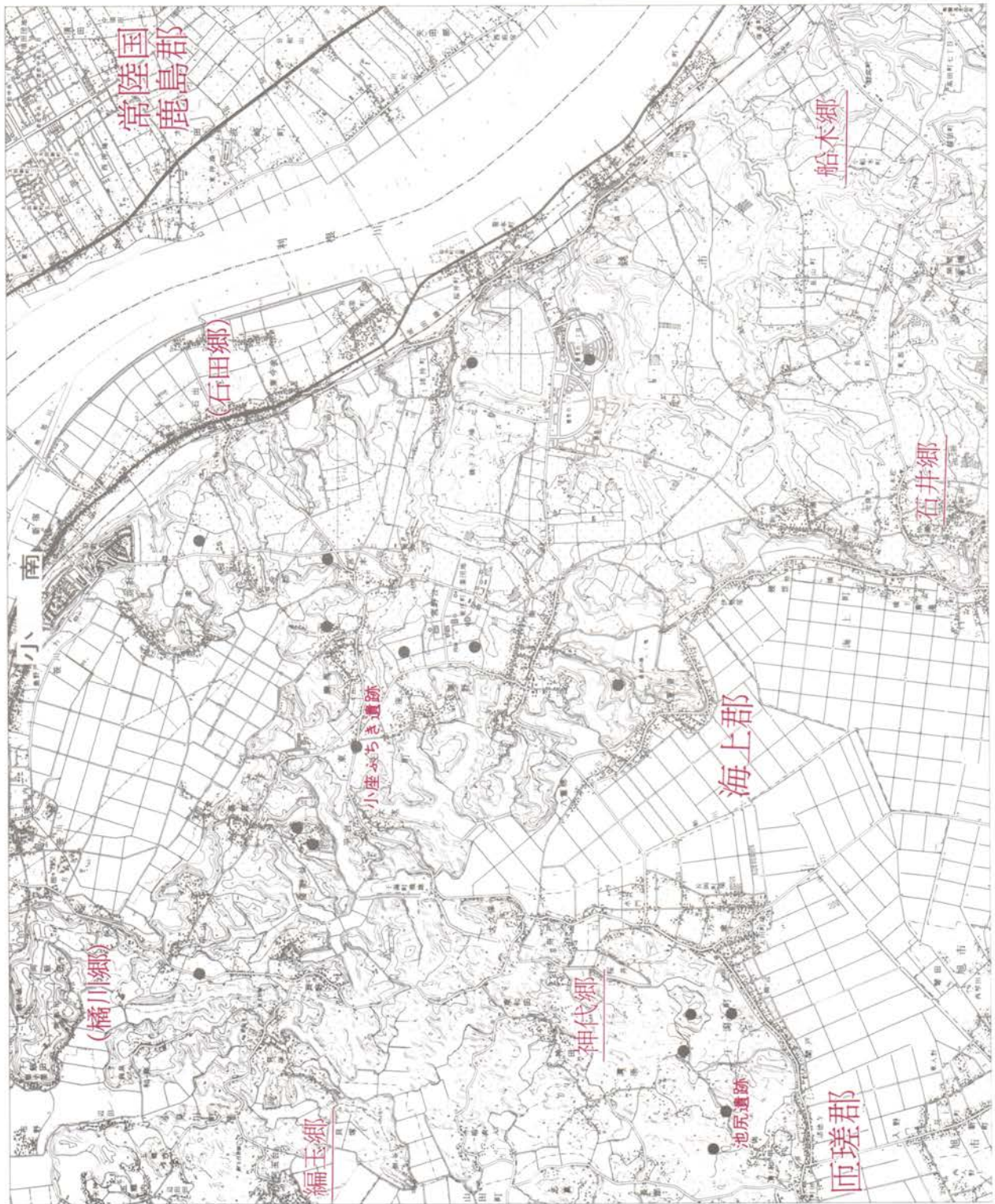


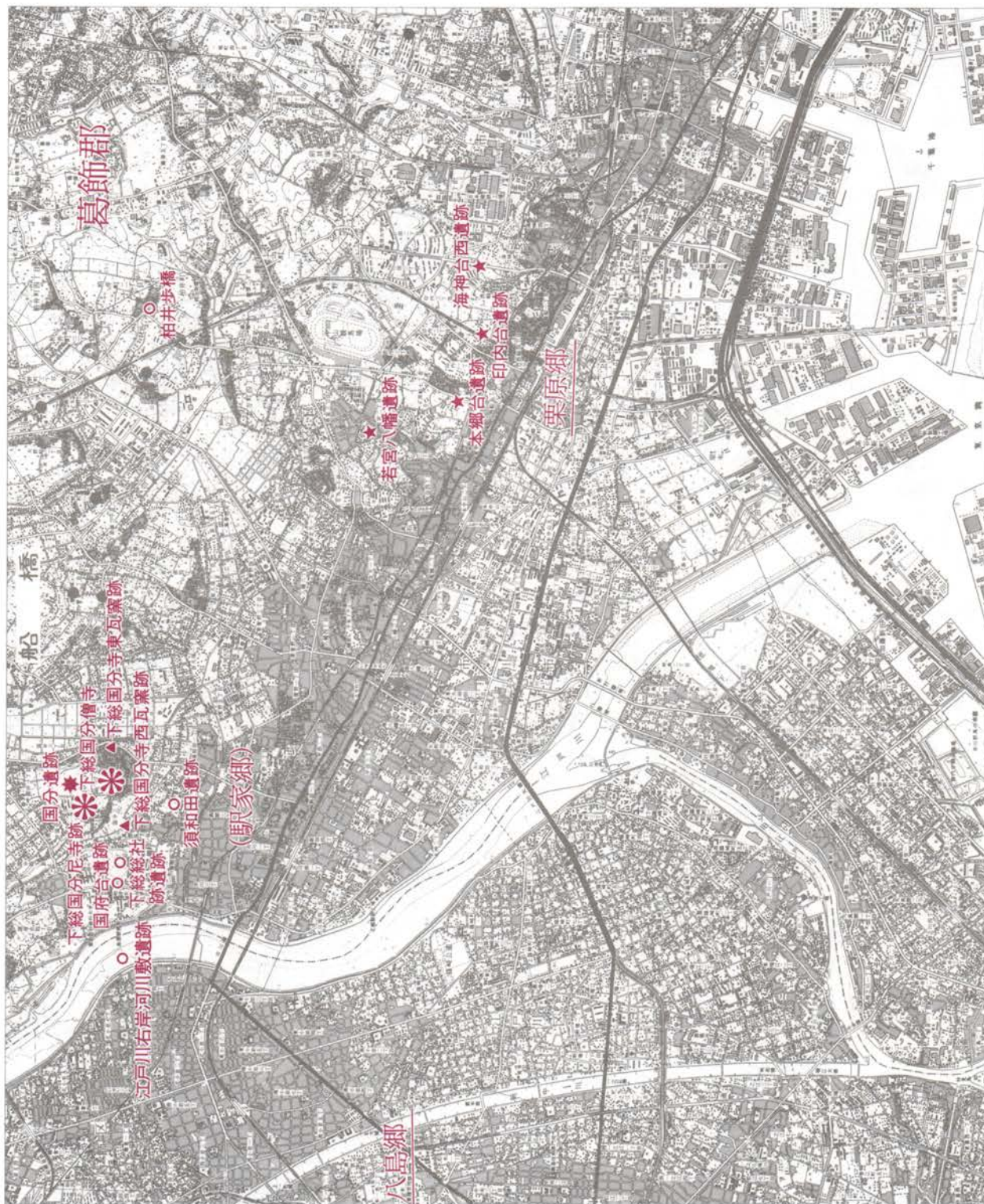










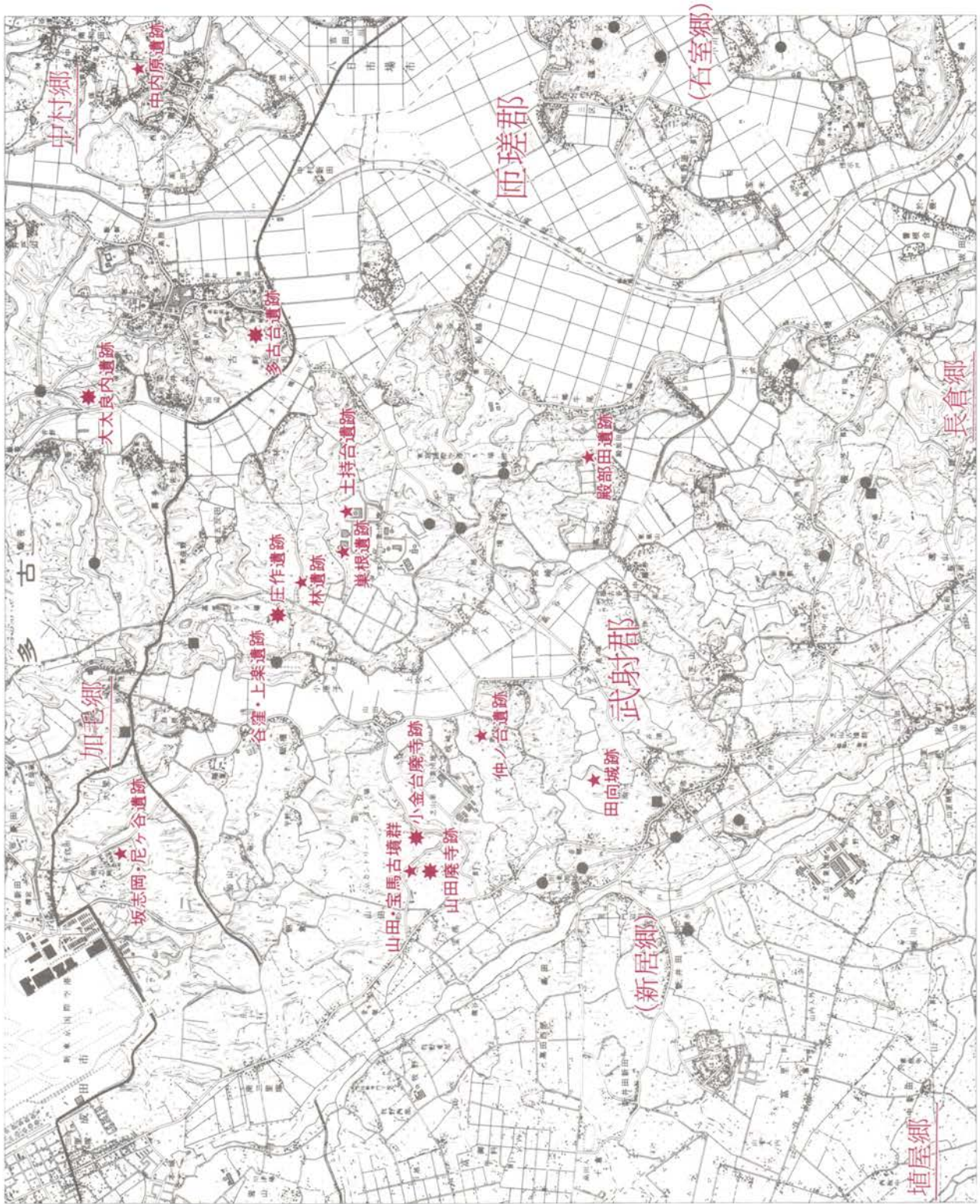




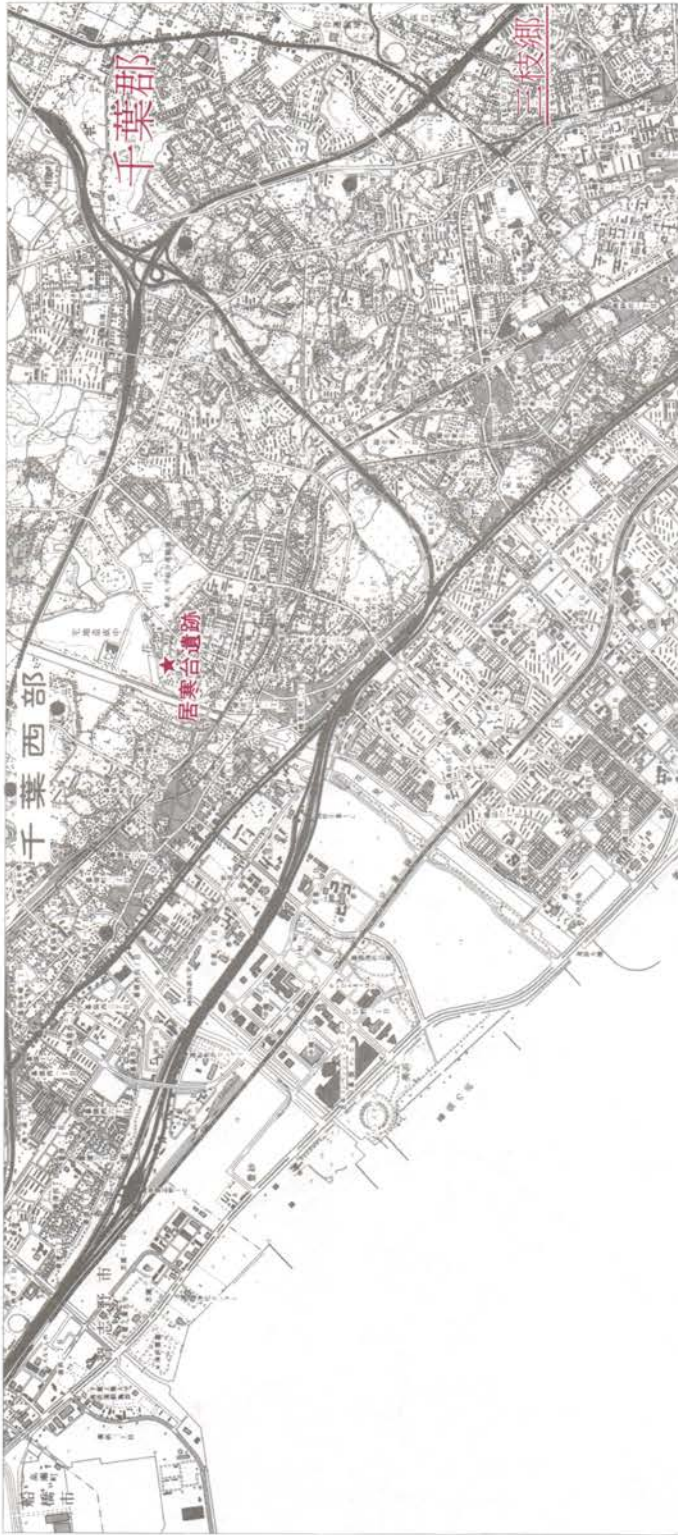




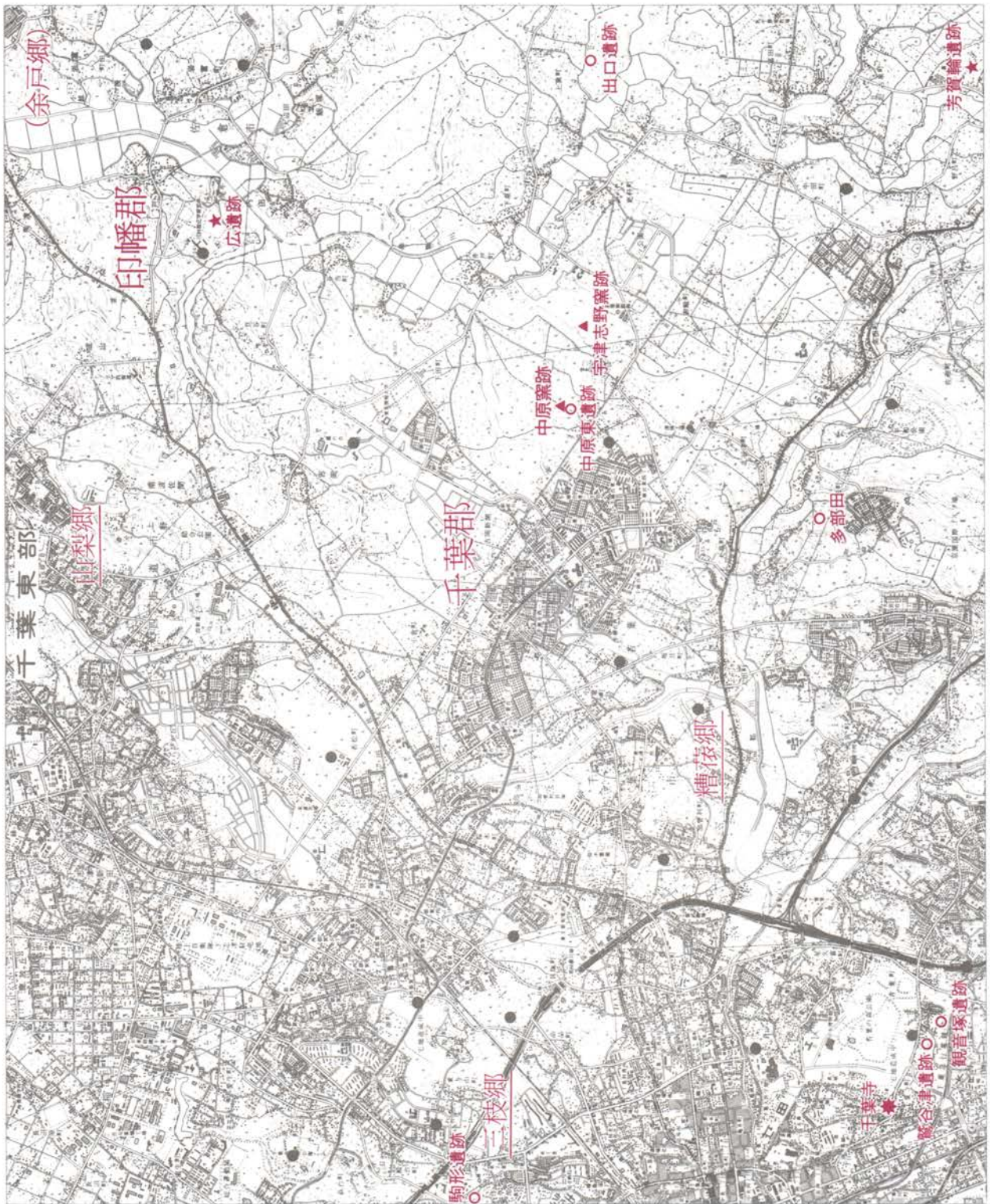




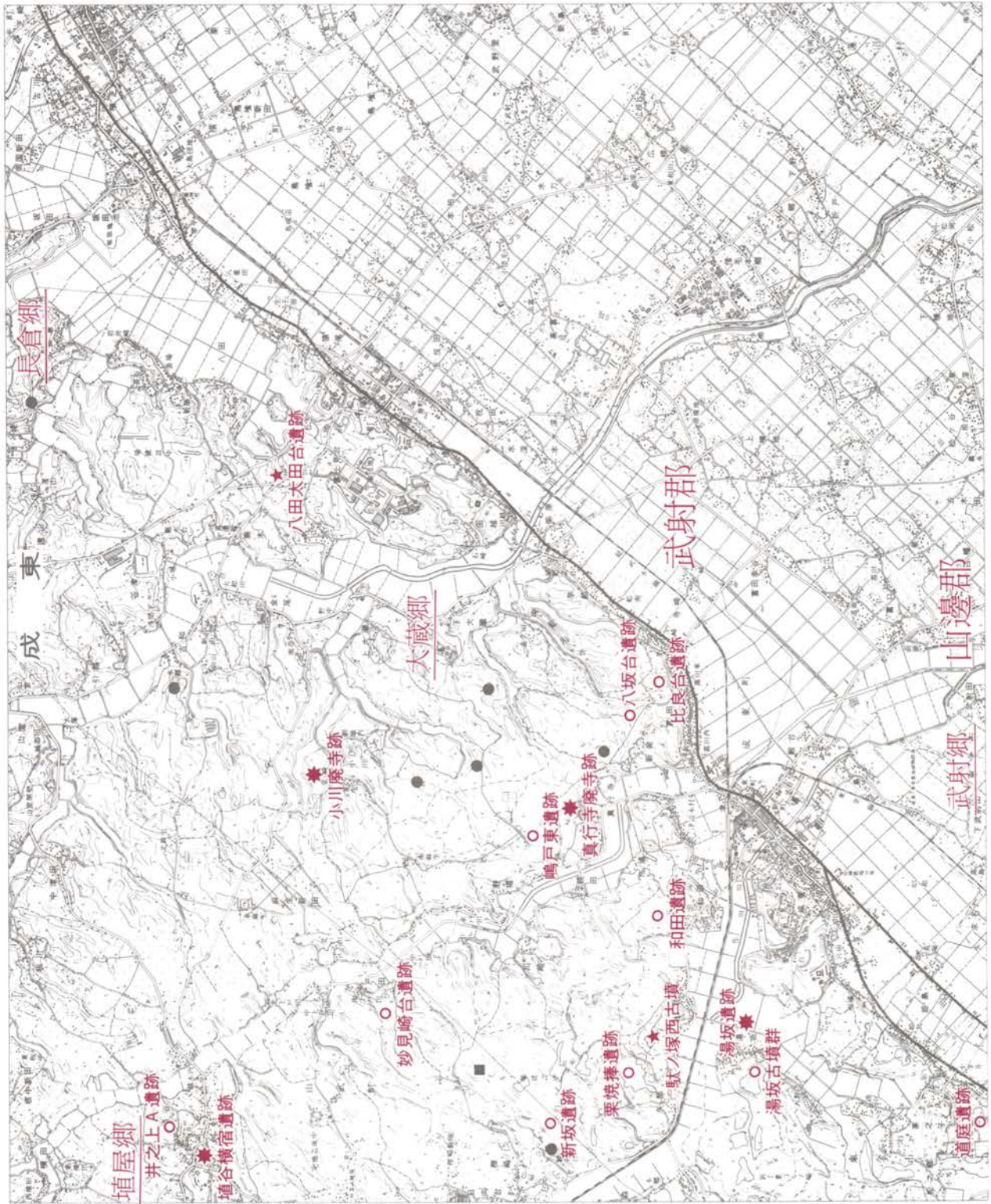




奈良輪

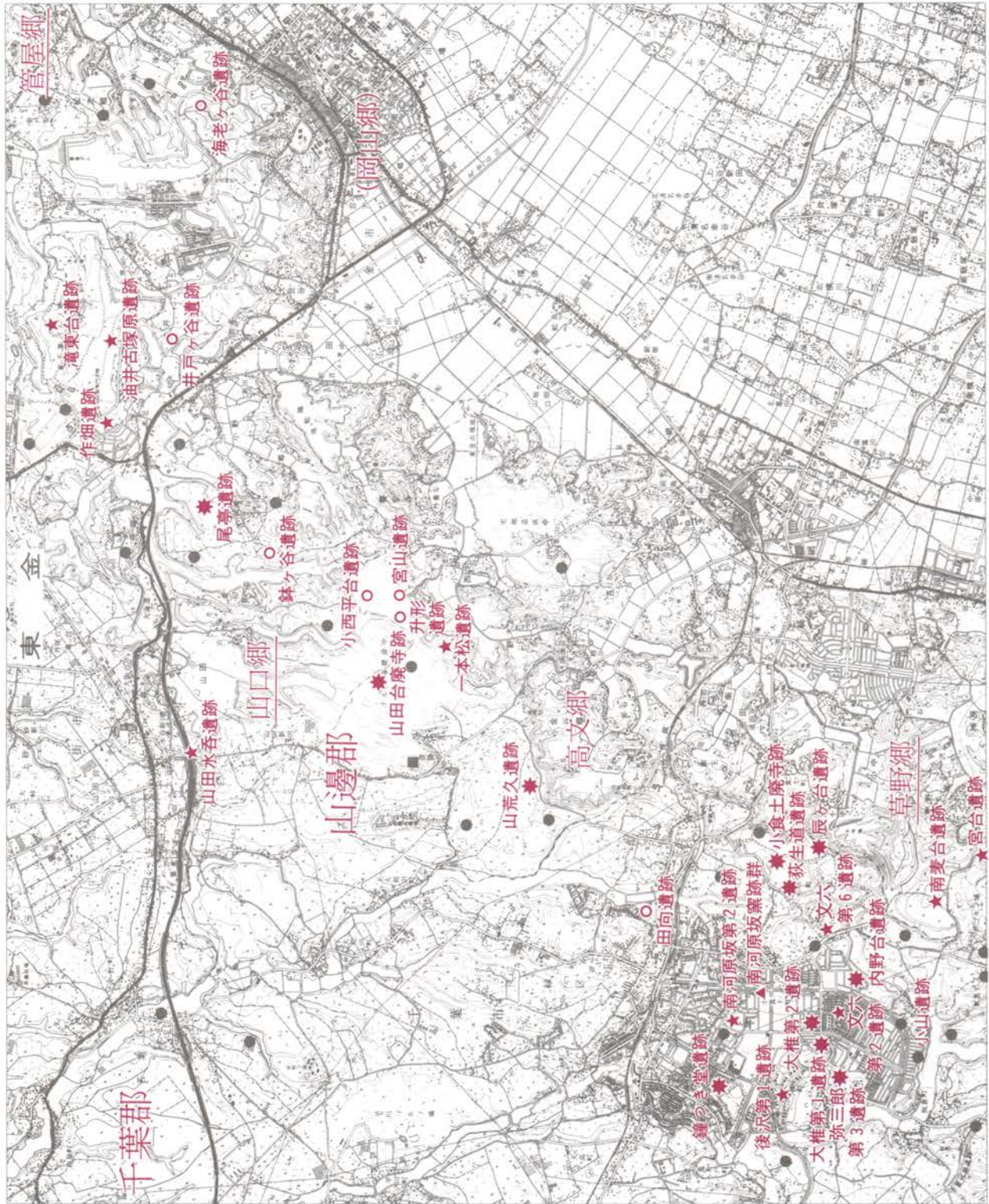


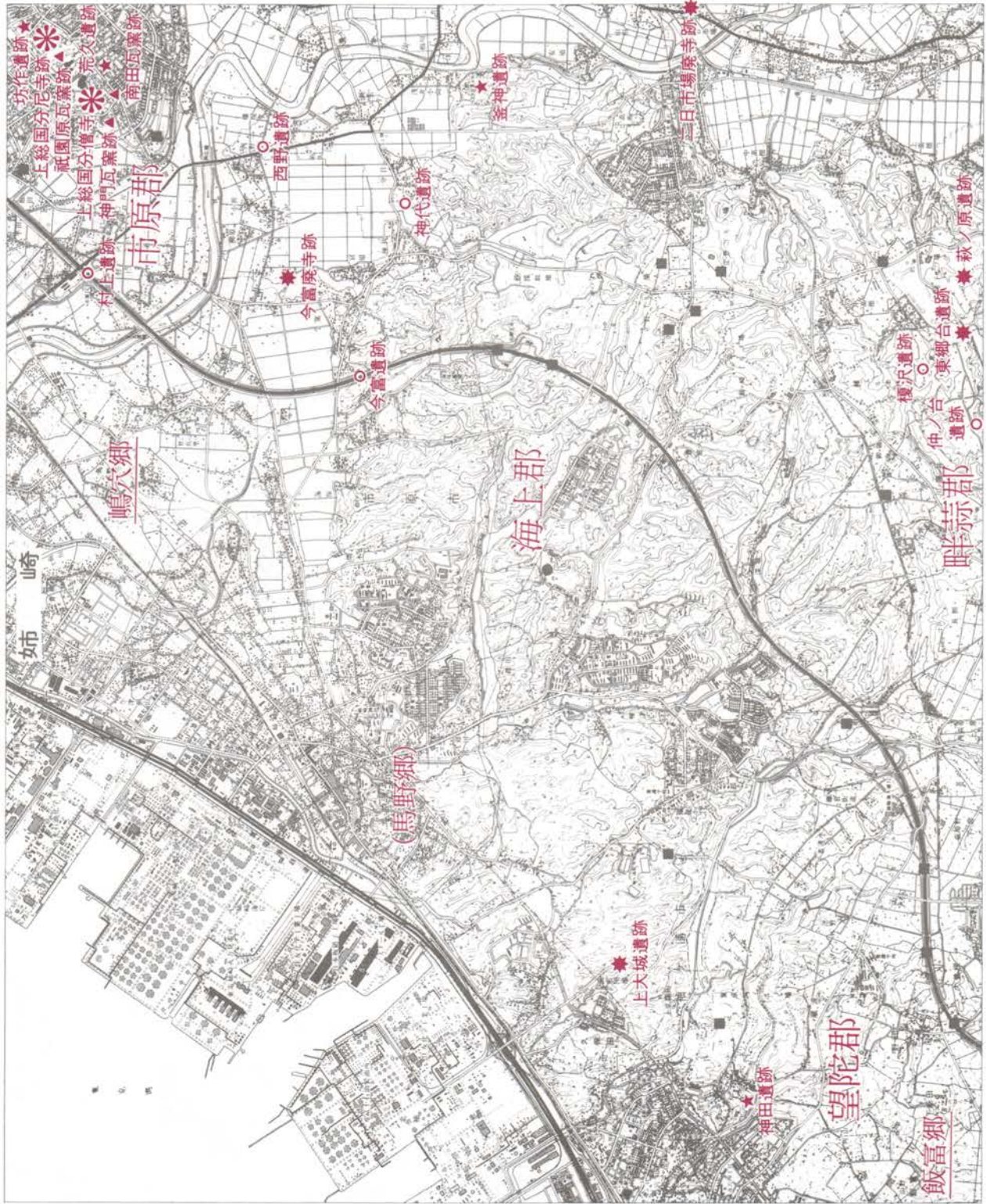


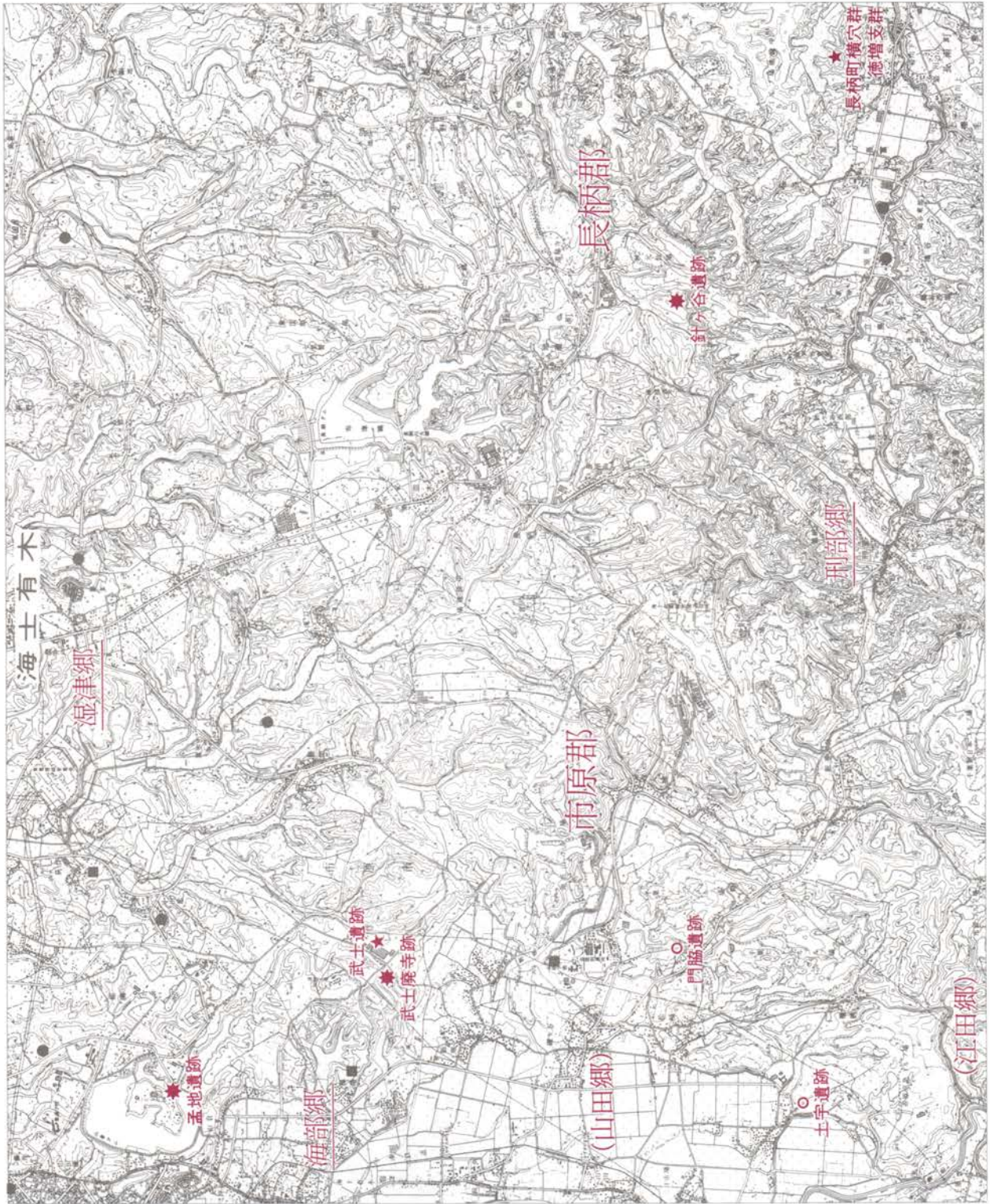




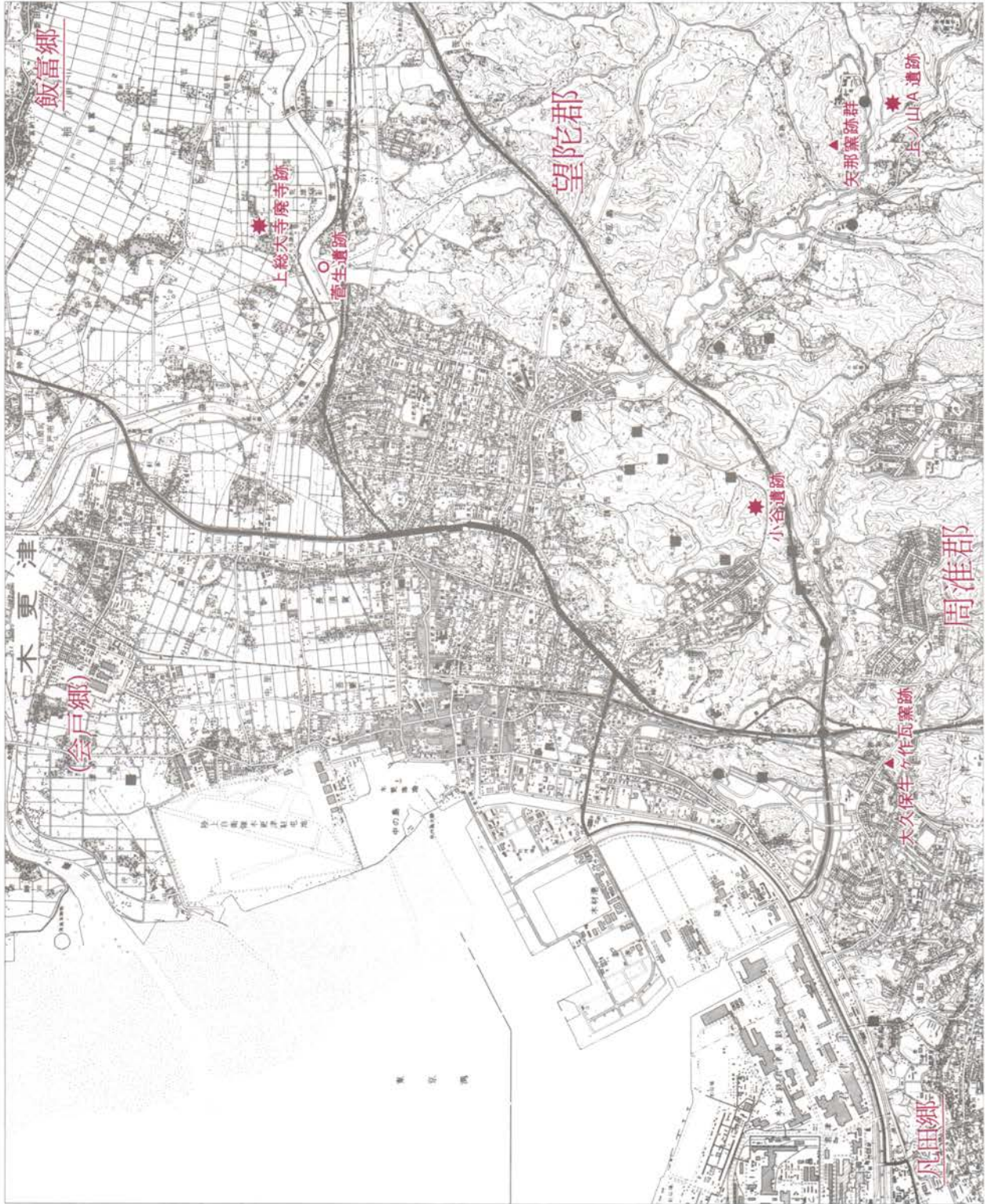


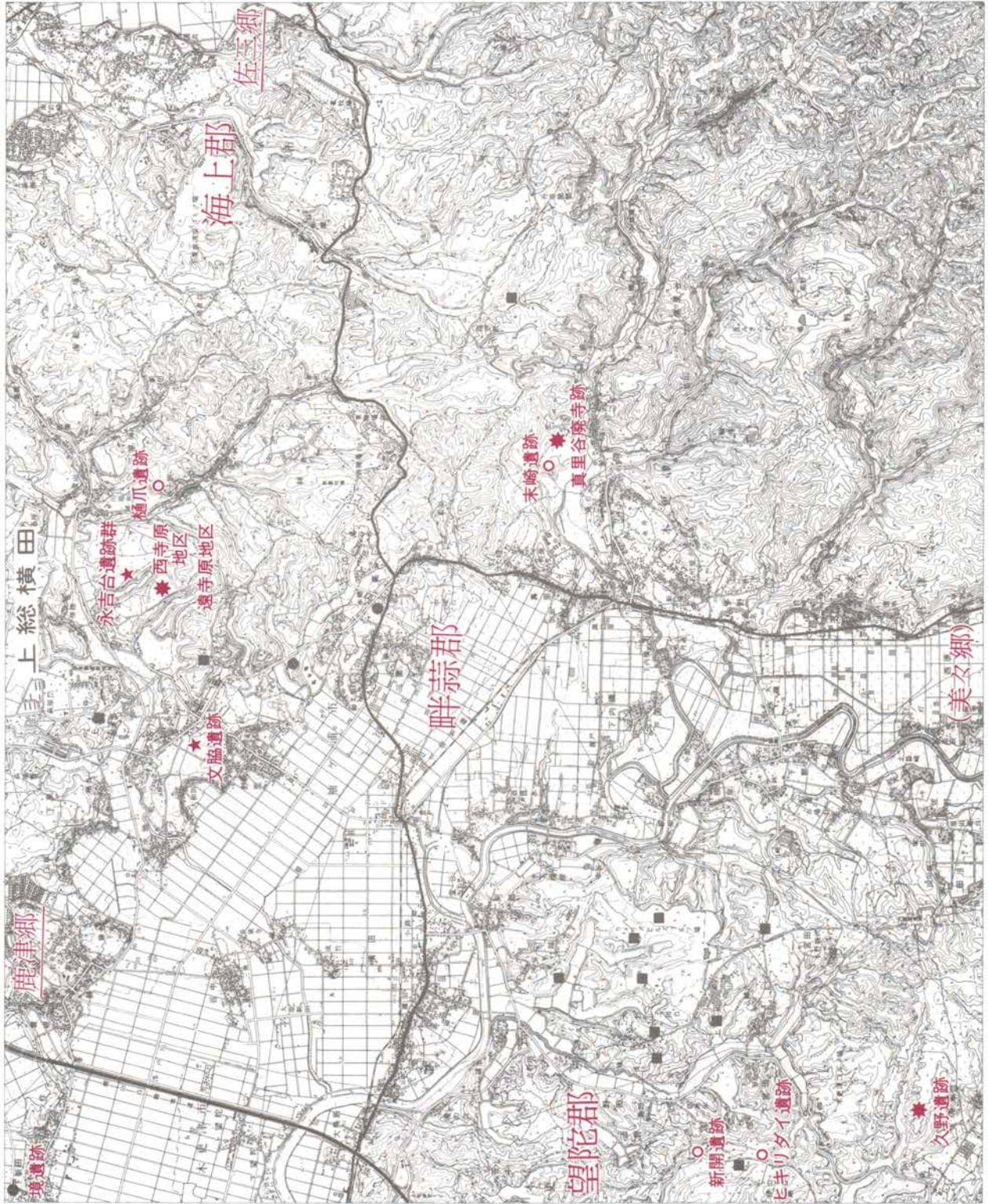








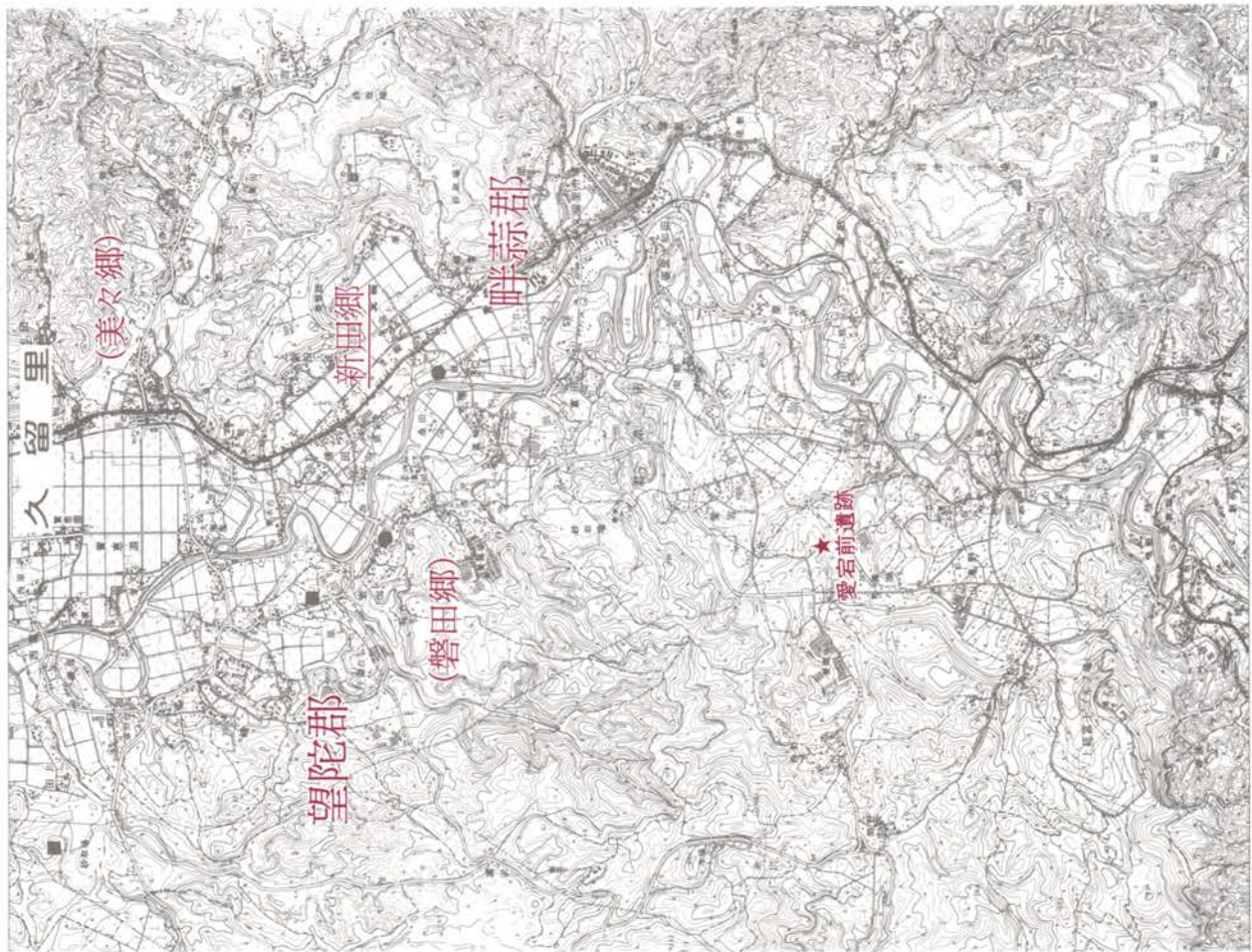




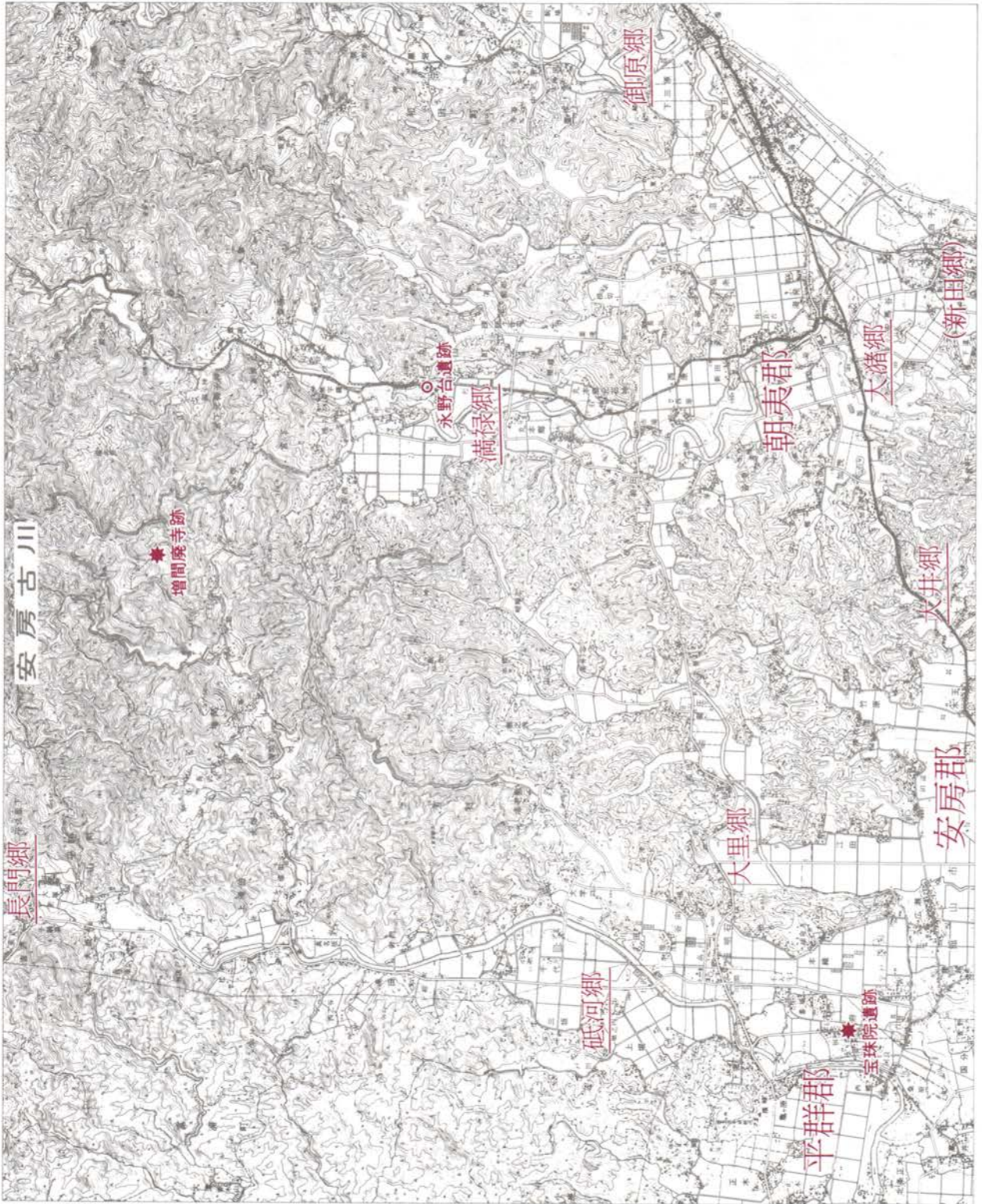












# 写真図版



1. 君津市  
九十九坊廃寺跡  
塔址全景



2. 成東町  
真行寺廃寺跡  
北基壇北西隅



文字瓦「朝布」



文字瓦「神真」



文字瓦「赤久在」



文字瓦「水津」



文字瓦「赤加」



文字瓦「皮止B」



木下別所廃寺跡



木下別所廃寺跡



木内廃寺跡



長熊廃寺跡



名木廃寺跡



長熊廃寺跡



八日市場大寺廃寺跡



龍正院



法興寺跡





下総国分寺



下総国分寺



下総国分寺



下総国分寺



下総国分寺



下総国分寺



大塚前遺跡



龍正院



千葉寺



千葉寺



船戸遺跡



結城廃寺跡



結城廃寺跡



木内廃寺跡



八日市場大寺廃寺跡



八日市場大寺廃寺跡



手賀廃寺跡



多古台遺跡



手賀廃寺跡



手賀廃寺跡



武士廃寺跡



上総国分寺



上総国分寺



上総国分寺



光善寺廃寺跡



小川廃寺跡



光善寺廃寺跡



武士廃寺跡



真里谷廃寺跡



二日市場廃寺跡



二日市場廃寺跡



二日市場廃寺跡



九十九坊廃寺跡



九十九坊廃寺跡



結城廃寺跡



結城廃寺跡



上総国分寺



下総国分寺



上総国分寺



下総国分寺



上総国分寺



長熊廃寺跡



光善寺廃寺跡



大塚前遺跡



小川廃寺跡



大塚前遺跡



手賀廃寺跡



大椎廃寺跡



長熊廃寺跡



龍角寺



香炉蓋，六拾部遺跡



鉄鉢形土器，六拾部遺跡



香炉蓋，六拾部遺跡



鉄鉢形土器，鳴神山遺跡



「佛」と底部に蓮華文，南西ヶ作遺跡



「鉄鉢形土器」，久野遺跡



瓦塔，白幡前遺跡



浄瓶，草刈遺跡



1. 下総国分寺  
「造寺」



3. 上総国分寺  
「講院」



4. 上総国分寺  
「東院」



5. 上総国分寺  
「油菜所」



6. 北海道遺跡  
「勝光寺」



7. 草刈遺跡  
「草刈於寺坏」



8・9. 名木廃寺跡  
「度寺」



10. 長熊廃寺跡  
「高置寺」



11. 大袋台畑遺跡  
「赤男(界)寺」



12. 大袋台畑遺跡  
「赤寺・崎寺」



2. 下総国分寺  
「講院」



13. 真行寺廃寺跡  
「武射寺」



14. 六拾部遺跡  
「白井寺」



15. 久能高野遺跡  
「桑田寺」



16. 山口遺跡  
「忠寺」



17. 郷部・加良部遺跡  
「忍保寺」



18. 久野遺跡「赤穂寺」



19. 鳴神山遺跡  
「波田寺」



20. 多田日向遺跡「三綱寺」



21. 多田日向遺跡「多理草寺」

千葉県文化財センター研究紀要18

---

平成9年9月30日 発行

発行者 財団法人 千葉県文化財センター  
千葉県四街道市鹿渡809-2  
電話 043 (422) 8811

印刷所 株式会社 弘文社  
市川市市川南2-7-2

---